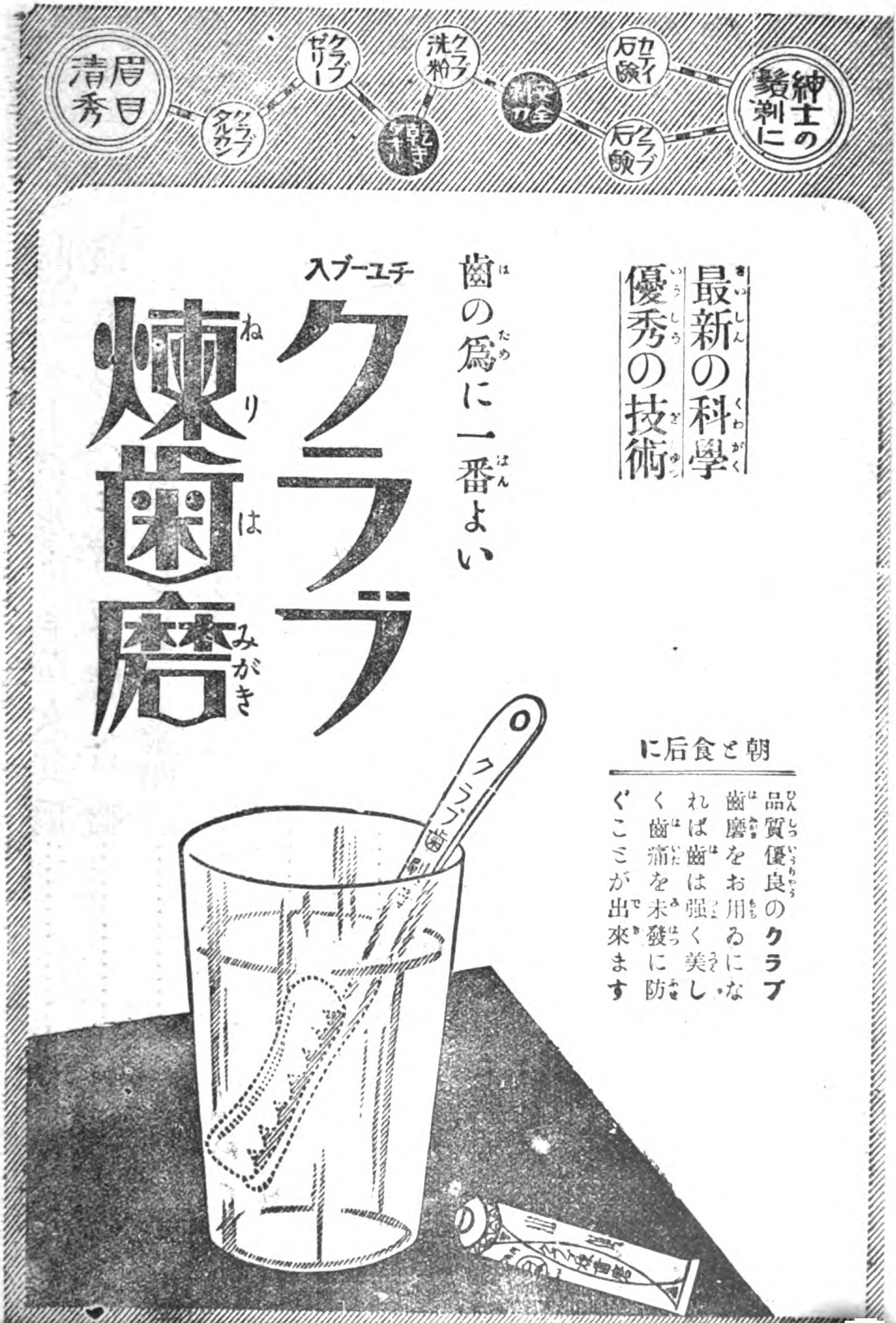
THE CENTRAL REVIEW

中央公論

六月號

大正十三年六月一日發行（毎月一回一日發行）

第三十九年 第六號


紳士の鬚剃に
カテイ石鹸
クラブ石鹸
クラブ洗粉
クラブゼリー
クラブタルカン
眉目清秀
最新の科學
優秀の技術
齒の爲に一番よい
チューブ入
クラブ煉齒磨
朝と食后に
品質優良のクラブ齒磨をお用ゐになれば齒は強く美しく齒痛を未發に防ぐことが出來ます
クラブ齒磨



海の人

小川芋錢筆

十年間貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同しだと云ふ

煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け……

實業之日本代理部と榮川主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日は私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主事は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を訪問しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて與れました其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですね―、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロット」を取上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね―」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞贊下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて兩び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御獎勵の言葉を述べて下さいました。何うか誰方も御使用の上**ニコチン**の中毒の害からのがれて下さいまし。

震災前は東京日比谷でしたが一時表記の處に假營業始め候間御用命の程願上候

特徵

外見少も普煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人參の精氣を含有するを以て朝鮮人參が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に温雅なる香氣と忘れ難き清涼たる甘快味とは輕き刺戟と快感とを與へ口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて「ねばり」を生ずる時其他散步等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし

カロット金貳圓 百日分

パイプ(水牛製銀 模樣入) 金五十錢
同(ベークライト) 金七十錢
同(象牙サック入) 金壹圓五十錢

送料(內地十八錢 臺朝樺四十五錢)
代金引替(內地卅錢 臺朝樺五十五錢)

○パイプは右三種の內御希望の品御書添願候○

東京府下大森不入斗四五一

榮川堂

東京振替五二二九一二

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候(滿州支那は代金引替御斷り)

大正十三年

中央公論

六月一日發行

六月號

第卅九年第六號

第四百三十五號

總選擧後に於ける理想選擧運動

本當の理想選擧は、候補者側より唱へらるゝのであつては駄目だ、選擧民自身より力說さるゝのでなくてはならぬ。而して選擧が候補者の爲のものに過ぎぬのなら、選擧が濟んで後まで之を話頭に上す必要はないが、選擧民自身の爲のものだとすると、寧ろ一時の昂奮より醒めた後冷靜に省量を重ね平素常に豫め急に應ずるの準備を爲して置くことが肝要である。本當の理想選擧を實現させる爲の運動は、總選擧の濟んだ今日、新に陣容を整へてまた始めるの必要があると考へる。

今度の選擧に於ても、かねて期待して居つた通り、其の結果の上には何等より良き進展を見得る望みはない。政界の空氣は依然として停滯昏迷だ。併し若し其間に何等か將來の發展に囑望すべきものありとせば、そは極めて少數なる一部靑年の間に於てゞはあるが、本當の理想選擧に目覺めたもの丶渺らず在ることとである。彼等の或者はいふ選擧は我々の仕事だ、候補者から賴まれて始めてやるべき性質のものではない、誰を出すか、其の爲には如何なる運動をするか、之等の計劃は一切選擧民たる我々の手に夾選せなければたらぬと。或者はいふ。誰に一票を投ずべきかは我々の良心の問題だ、從來種々の情實に惑はされ特殊の候補者と因緣で繋かつて居たのは間違ひであつた、之からは一切そんな約束はせまい、又した約束は破らう、候補者にも運動員にも、どうすると訊かれたら、何方でも良い方へ入れるとのみ答へやう、若し夫れ強て哀訴哎願し來る者あらば、私情を以て公人を誘惑するものとして斷然之を斥けやうと。又或者はいふ。我々の選擧をするのに候補者が巨額の金を使ふといふは冠履顚倒である、金の掛る例になつて居ればこそ本當の適才は得られない、費用は一切選擧民が負擔する一文も損は掛けぬからと賴んでこそ、始めて立派な人材を自由に迎へることが出來るのだ、併し斯の如きの一朝一夕に實現し難きは已むを得ない、が、せめて我々の村だけは、之ぞと思ふ候補者を定めて、其人の爲に要せし費

用は、銘々の分に應じて負擔しやうではないかと。以上は予輩の耳目に觸れた二三の實例を摘記したに過ぎぬが、想ふに精細に探したら外にももッとあるに違ない。熟れにしても斯かる運動の微少ながら芽萌え始めたことは、決して輕々看過するに忍びない好音である。

理想選擧といふ聲は近年選擧毎に高くなりつゝある。併し候補者が如何に腐敗醜陋の手段を避くると聲明しても、選擧民が依然舊套に馴染んで居ては、如何して政界革正の實の擧る見込はあらう。選擧民が本當に目覺めずしては、所謂理想選擧は決して選擧戰に勝利を占むる所以ではない。故に苟くも勝たんと冀ふ限り、理想選擧の標榜は世間を欺く一片の看板に過ぎぬのが多い。甚しきは資金に乏しきものゝ虚飾的悲鳴に外ならぬと疑はるるものさへある。果して然らば理想選擧の叫びが如何に高くなつても、そが候補者側から擧げられてゐる間は決して政界を革正する效能はないと謂はなければならぬ。

併し選擧民は何時までも斯の忌むべき情況に沈淪して安ずるものではない。早晩本當の正しき途に目を開かずには居れぬ筈だ。果せる哉今度の選擧に始めて選擧民自身よりする理想選擧運動が起つた。是れ決して輕々に看過し得べき事柄ではない。其の勢力の現に甚だ微弱なるを笑ふ勿れ。心ある者は容易にこの裡に潜む道徳的生命力の偉大を看得することが出來やう。

之等の事は猶追て再說するの機があらう。玆に特に一言したいのは、以上の如き喜ぶべき現象を見たのも、畢竟平時に於ける先覺識者の啓蒙運動の結果に外ならぬことである。從て此勢を更に助長し以て革正の完成を期する爲には、今後益々この教育的運動を續くる必要あることである。候補者の運動は勝ても負けても選擧を以て終るを常とする。之に反して選擧民自身に芽ざした運動は、選擧の結果に現れた多少の成功に促されて、更に引續き其後に繼續せらるるであらうか、孰れにしても此種の運動は選擧を以て終らしめてはいけぬ。此意味に於て吾人は世上の識者に對ひ、更に選擧後に於ける一層の努力奮闘を希望して熄まない。

中央公論



第卅九年第六號
六月號
第四百三十五號

帝都復興と土地區劃整理

法學博士　渡邊鐵藏

(一) 呪はれたる復興計畫

現代の日本に生きてをる者ほど、個人としても、國民としても、數多い重大な事件に出逢つた者はあるまい。我國は明治維新の變革によつて政治的に社會的に新生命を注入され、日清日露の兩戰役の試錬によつて東洋に於ける國際的地位を確保し、歐洲大戰爭の渦中に投じて政治上經濟上世界的に重要な位置を占むるやうになつた。僅々五六十年の間に

文明國强國として先進國と或程度まで肩を並べることが出來るようになつたことは確に國家としては幸運であり國民としては欣りを感じたことである。しかし好事魔多し、旣に歐洲大戰爭後の經濟界の不況に惱んでをつた我國民は突如として昨年九月一日の怖るべき大地震の見舞を受けた。明治維新、日清、日露の役の回顧は國民にとつて、まことに明るい愉快な感想を思ひ浮ばしめ、歐洲大戰爭も亦戰後の困難はあつても壯快の念を懷かしめるものであるが、今回の大震災はいつまでも拭ふことの出來ぬ暗い悲慘な追想を生ぜしめる。歐洲大戰爭は侵略と破壞を蒙つた直接被害國にとつては壯快どころか悲慘の極であるが今回の大震災は我國民にとつては正に歐洲大戰爭によつて破壞を蒙つた地方の人々と同じような失望と苦惱を與へたものである。

國の重大な出來事と、自己の經驗した深甚な影響を受けた事柄とは幸不幸悲喜何れの種類のものであらうとも、國民として又個人として其の經過と內容とを精確に腦裡に刻してをる必要がある。過去と現在の大きな出來事の記錄は、それが文字に現はされたものであつても亦腦裡に印象したものであつても將來の行爲と生活の材料となるものである。大震災に基く失望と苦惱の內容と由來は何時迄も忘れてはならぬ。難行だけして大悟、成佛せねば極樂淨土は得られぬ。

難事に當つて勇往邁進することが出來ることは個人としても國民としても其の生存活力を示すものであるが、今回の大震災に當つて罹災者罹災地民並びに一般國民の採つた態度處置及び今後爲すべき處置の當否は正に我國民及び個人の能力の試金石となる。

震災地の復興は鍛錬された能力と犯し難い眞面目さと、勇猛心を備へ異常の努力を以つて事に當るにあらざれば到底成効し難いものである。罹災當時の應急手段については當時の政府の措置は多少の欠點は免れなかつたとしても先づ成効したものと見ねばならぬ。殊に災後一週間の最も急迫危險な時期に於いて交通通信機關が破壞されたに拘らず秩序の

維持、食糧の供給に成功したことは殆んど奇蹟的と言へる。突如として大都會に於いて二百萬の家無き者を生じたに拘らず重大な社會的動亂を惹起せず饑餓及び階級的反感に基く掠奪殘虐行爲を殆んど見無かつたことは明に今なほ我國民の思想の一般に堅實であつて社會的秩序の鞏固なことを示したものと云へる。然しながら他方罹災地の建設及び經濟復興に關して取られたる手段は甚だ緩慢であつて殊に復興都市計畫に至つては立案より豫算の成立に至るまでに四ヶ月を費し、事業計畫の大體の決定までには七ヶ月餘を費してをる　其のために市民の蒙つた迷惑は甚だ重大である。

復興事業の遲延は固より政府の責任のみでは無い。むしろ政治上の複雜な事情に累せられた點が多い。然しながら當時の政府の措置に於いても亦違算が無かつたとは言へぬ。

抑今回の大震災は戰爭以上の大國難であることは屢論じた如くであるが、何れの國と雖も戰爭に必要な豫算を請求するに當つて何所〳〵で何回會戰して砲彈其他軍需品を幾何必要とするからと豫算を立てゝから軍事費を請求するものはない、戰費豫算は概算額を計上して一瀉千里の勢で議決されるのが常である。歐洲大戰爭開始の際獨逸帝國議會は既に宣戰第一日千九百十四年七月三十一日に輸出及通過禁止法を發布し、英國に對する宣戰布告の日八月四日の夜に於いて五十億馬克第一次軍事費を可決すると共に聯邦參議院に經濟上の應急手段を取るの權限を與ふることに關する法律、手形の支拂期間延長に關する法律、最高價格決定に關する法律、輸入稅の臨時減免に關する法律等を即日制定してをる。今回の我國の大震災に際して政府は種々の應急救護策經濟及財政上の緊急手段を取り大體に於いて成功したものと言ひ得るが、復興都市計畫事業豫算及び計畫案の決定に至つては甚しき阻斷、遲延を來した。復興都市計畫は燒跡の灰燼の未だ冷却せざるに先立つて直ちに其の根本方針を定め基幹事業に必要なる第一次的豫算は概算を以つて大凡そ幾億圓として速に之を議決すべきであつた。殊に道路系統及土地區劃整理に要する費用の如きは詳細の計畫は後として震災後直ち

に臨時議會を招集して其の議決を經るか、或ひは一應責任支出を以て之を行ふか何れにしても是等の災後即時に着手することを要する事業費の如きはせめて一部分なりとも概算によつて支出を決定し置くべきである。之によつて彼の土地區劃整理事業の如き重大事業を即時に斷行することが出來た筈である。而して都市計畫事業の大體の設計案の如きも震災後二三ケ月にして即ち大正十二年内に決定し得たに相違無い。復興都市計畫の基幹事業に必要なる第一次豫算を、軍事費豫算を決定する如き緊急的取扱をなして疾風迅雷的に定めなかつたことは返す／＼も遺憾千萬の事である。

勿論當時の政府部内に於いても復興都市計畫事業費として必要なる經費の應急支出を主張した人もあつたのであらうが結局兎に角臨時議會も招集されず、責任支出の英斷にも出でず、復興審議會、復興院、復興院參與會、同評議會等の機關がゆる／＼と設置され、復興都市計畫案は始めて十一月一日復興院參與會議に附議され、評議會に附議されたのは十一月十五日である。其後十一月二十四日に政府は右の諸機關を通過した復興都市計畫案を審議會に提出し其の大修正削減に逢つた後、十二月十三日に至つて始めて臨時議會に復興都市計畫事業豫算案及び復興事業に關係ある法律案を附議し再び衆議院の大修正、削減に逢つた後、十二月二十六日に至つて漸く可決確定を見た。

復興都市計畫事業案の如き主として專門技術的の問題を議するに當り政治的勢力の按排結合より成る機關を作り、更に此種の機關を重複して設けたことは失敗の第一歩であつて、寧ろ各方面の專門家より成る少數の委員より成立する委員會を設けた方が確に有効であり且つ事業は著しく迅速に運び得たことゝ考へる。又復興院の諸機關は政治的勢力を或程度まで代表してをつても豫算に對して豫約的承認をなすほどの權限も又好意も持たず、殊に是等の機關の決定を背景として政府が責任を以つて計畫の決定、費用の支出をなす決心も無く、後にあのように臨時議會を招集するのであつたならば、是等の機關を設置した理由は甚だ了解し難いことゝなる。殊に審議會に於いて意外の大修正を蒙つた如きは事

全く政府の豫想に反したものであつて復興計畫案の最初に蒙つた政治的の大障害である。もつとも政府の復興計畫案立案當時に政府部内に復興審議機關の組織權限について異論があつたことは復興に關する機關及び計畫の樹立を遲延せしめた一理由であらうが、政府が是等の機關の組織及び運用に當つてあまりに政治的の考慮を多く拂つたことが却つて總ての進行を害したものである。而して更に政府原案が臨時議會に於いて衆議院の大修正に逢つたことは政府の不面目は別として兎に角復興計畫のために重大な打擊である。審議會及び衆議院の修正が感情及び政治的の悪感に出たものであることは多くの人の言ふ所であるが、何れにしても結局政府の復興豫算及び計畫の決定が遲延に〳〵を重ね且つ大なる修正を加へられたことは罹災地方の市民としては畢世の恨事と言はねばならぬ。

殊に復興都市計畫の決定の遲延すると共に其の眼目である土地區劃整理を燒跡全般に亙つて斷行すべきや否やの根本問題に關する大方針が復興院當局の間に動搖して決定せず復興院の原案作成の時より、參與會議、評議員會、審議會、衆議院とあらゆる機關を經過する間結局最後まで復興院當局に土地區劃整理を斷行するや否やに關して方針絕えず動搖して斷定的の統一した決定を見るに至らなかつたことは最も遺憾な事である。此事はひいて復興都市計畫事業案及び豫算の決定を遲延せしめ又其の計畫案が幾度か斧鉞を蒙つた大原因を成したことゝ思ふ。復興計畫の決定が後れ就中土地區劃整理の斷行を最後まで逡巡した事は復興院當局の大なる失敗と見るべきものであらう。

復興院自身の出發點の誤り、方針の動搖に加へて審議會の機嫌を害ねたことゝ反對黨の悪戯とのために復興計畫は著しき支障を蒙つたがそれでも難産であり且つ多少畸形ではあつたが取敢えず政府の忍從によつて一應豫算は成立し必要な法規が制定される運となつた。然るに呪はれたる復興計畫は更に再び思ひかけ無き重大な障害に逢ふた。十二月二十七日の虎の門の懼るべき遺恨事は遂に山本内閣の總辭職となり復興計畫は生るゝと共に再び直ちに暗黒の難境に置かれ

るやうになつた。内務大臣後藤子爵が臨時議會の解散によつて復興豫算の全然霧消することを恐れて、世間の冷評を忍びて山本總理大臣に一時の忍從を勸め、山本伯も之に同意して時の内閣が忍び難きを忍んで漸くに成立せしめた復興豫算及び計畫も、思ひ懸け無き突發事件のために突然最初よりの立案者を失ふては、執行上に多大の障害を蒙るべきことは疑を入れぬことである。

次いで成立した清浦内閣は議會開會後間も無く例の暴徒の議會侵入事件を機會として議會を解散したために復興計畫の追加豫算は又も宙宇に迷ふに至り、復興計畫は重ね〲踏んだり蹴たりの慘めな境遇に置かれた。

今や帝都復興院――其の名の華かな事が一部の嫉視を招いたとも傳へられる――は廢止されて之に代つて内務省内に復興局が設置され復興計畫は着々として實行の歩みを進めつゝあるが、以上の如き道程に於いて復興計畫が政治的に幾度も障害を蒙つたことは復興計畫事業の實行上に恢復し難き惡影響を與へ、就中即時決定着手を必要とした土地區劃整理事業の如きは益々實行上の困難を増加するに至つた。

呪はれたる帝都復興計畫、咎められたる土地區劃整理、憐むべき罹災地の市民である。

（二）土地區劃整理即帝都復興計畫

帝都復興計畫を樹てるに當つては根本の着眼點としてはこの機會に斷行するに非ざれば再び實行する機會のないといふ事業を行ふことゝ將來再び今回の如き大損害を蒙らないやうに徹底的の準備をなすことゝである。第一の問題に該當するものは即ち是非ともこの機會に斷行を要する道路系統及び路幅の改良並びに土地區劃整理の問題であり、後者は即ち建築改革を――耐震、耐火構造の普及――を圖るとである。

西洋の大都市の如く既に凡ゆる文明的設備が完成して居り路面の舗裝は勿論、下水その他の地下埋設物も巨費を投じて出來上り、殊に建築物が總て永久的の堅固な且つ大きい構造であるために、その基礎工事も頗る堅固に出來て居るのであるから、假令大震災、大火災があつたとて全地域に亙つて道路系統、路幅の改良、土地區劃整理等の大事業を徹底的に行ひ得るものではない。然るに幸か不幸か我國の大都會は首府である東京市以下總て多少は文明的設備も出來て居るが大體に於て封建時代の都市その儘であつて、道路、建築物共に全く近代的の要求に副はない不便、危險なものであると同時に又これに徹底的の大改革を加へることが不可能でない狀態に在る。殊に今回の如き大火災に依つて帝都の大部分が燒野原となつたやうな時機に於ては、土地に關する改良工事が未だ十分に行はれて居ないのを幸ひに、この機會に於て帝都百年の長計に合するやうな道路の開設及び土地區劃整理を斷行すべきである。今回の如き大災厄は百年の後でなければ再び來ることがない。又大震、地異があつても、今回の如き大損害を生ぜしむる如きことは、今後は人力を以て防止し得るものと考へるから今回の大火災を機會に是非とも土地區劃整理を斷行すべきである。

土地區劃整理は右の如く、この際斷行するに非ざれば再びこれを實行する機會のないのと同時に現在の實際的問題として土地區劃整理を行ふに非ざれば帝都復興計畫は行へないことになつて居る。土地區劃整理を斷行するや否やに就ては、最初より政府部内に於ても異論があつたのであるが、もしこれを行はなければ、復興計畫に必要な道路を開設するために、その兩側の土地を從來の如く買收の方法を以て獲得せねばならぬこととなる。而して新たに道路開設のため獲得することを必要とする土地は約百萬坪であり、しかもその多くが主な街路に面して居るのであるから買收の費用は頗る巨額になる。しかのみならず買收に依つて立退を餘儀なくされた者は多年の營業所、住居を失ふことになる。その數約五、六萬戸、人口約三十萬人に關係することとなる。從來東京市の營業の最大勢力をなして居つた人々が數十萬人もその處を

失つて、大部分市外に追放されるやうな結果になるとは、社會上由々しき問題であるのみならず、そのため東京市の經濟復興は十年以上も遲れる結果となる。一方亂雜、不便な宅地割を改良すると同時に新設路線に當る者を從來の場所に近似した狀態に於て定着せしむるためには、土地區劃整理の方法に依ることが唯一の道である。これに由つて主要路線に面する人々以外の者が總て多少の影響を蒙る面倒と不便はあるが、しかし區劃整理の斷行に依り、政府は國費多端の際、土地買收費の一部を節約することを得、新路線に當る者は一人と雖もその營業所を失はず、しかも全體として交通、保安、衞生、經濟の點から各種の利益が伴ふのであるから、土地區劃整理は一擧三得の大事業であると言ひ得る。

この故に帝都復興院參與會議は勿論、評議會に於ても全會一致を以て土地區劃整理を燒跡全般に向つて斷行すべきことを進言したのである。然るに政府が審議會に復興計畫案を提出した時には、何故か國に於て土地區劃整理を斷行する案を提出しなかつたが、この審議會の特別委員協定案に依つて路線計畫の大部分が否認され約一億圓の豫算が削除さるゝや、政府は急に方針を一變して一億圓の削除に會つても路線計畫を實現する目的を以て遂に土地區劃整理の斷行を決心するに至つたのである。嘘から眞が出た次第であるが、經過は兎に角結果に於て土地區劃整理を斷行する決心を政府がつけたことは甚だ喜ぶべきことであつて、この意味から言へば、審議會の豫算削減は怪我の大功名と言ひ得る。

右の次第で政府は土地區劃整理を燒跡全般に亙つて執行する案を具して議會に復興豫算を請求するに至つたのであるが、衆議院は一方街路費に於て六千萬圓の削減を行ふと共に、土地區劃整理費を大部分削除して、自治體がこれを行ふべしと主張した。しかしながら區劃整理に對する衆議院の修正はこれを否認するのではなくして、事業主體に關する爭ひであつて、自治體がこれを行ふべしとしたに過ぎない。從つて、次の通常議會に政府の請求あるときは區劃整理事業補助費として自治體のために適當の支出を認めることを約束して居る。復興計畫決定當日の最後の貴族院に於ては衆議

院の修正を以つて甚だ過れりとし、貴族院各派の領袖は袖を連ねて壇上に於て政府提案の復興計畫案は最小限度の不十分なものであるとし、衆議院の修正を非難すると同時に政府が重ねて次の機會にこれを補足して完全な計畫案を樹つべきことを、滿場一致を以て決議し、殊に阪谷男爵の如きは貴族院がその日の夜半十二時迄殘されたる時間を持つに拘らず、輕々しく衆議院の修正に同意して、復興計畫を不完全のものとなしたれば、後世の歷史家は如何なる辭を以てこの貴族院を評するであらうかと悲憤慷慨して、最も紀念すべき大演說をされたほどである。

從つて土地區劃整理費は次の議會に於て追加豫算として政府が請求すれば、帝國議會がこれを承認すべきことは大體に於て疑ふ餘地はない　而して現在の復興局當局並びに東京市當局は區劃整理を斷行するに就て强い決心を持つて居るのであるから、當然次の議會に追加豫算を請求して東京市の行ふべき區劃整理が斷行さるゝに違ひない。殊に東京市會の如きも全會一致を以て區劃整理を斷行するを決議して居るのであるから市當局にはこれを實行する政治的、德義的の責任がある次第である。

かくの如く土地區劃整理は事業自體として、是非ともこの際に斷行しなければならぬ性質であるのみならず、既に貴衆兩院を通過した、豫算、法律があるのみならず、暗默の約束や諒解もあることであるから、政府としても是非ともこれを斷行すべき政治的、德義的の責任がある。況んや既に述べた如く復興計畫費が前議會と衆議院に依つて大削減を蒙つて居るのであるから、復興計畫を實現するための財政上の見地から見ても是非とも道路計畫の實行を土地區劃整理の方法に依らねばならぬ破目になつて居るのである。要するに政府は事業の重要と、政治的の責任と、財政的の必要と三重の理由に依つて土地區劃整理を斷行せねばならぬのである。

今や土地區劃整理を行ふに非されば、政府も東京市も復興都市計畫に指を染めることは出來ない。土地區劃整理即ち

帝都復興都市計畫である。

(三) 土地區劃整理の利益

東京市は徳川家康の江戸開府以來現在に至るまで、三百年の間に總ゆる點に於て著るしい變遷をしたに相違ないが、産業革命と所謂文明の利器の利用が西洋でも割合に新らしいものである丈け、日本に輸入されてこれが都市の文明生活に適用されるやうになつてから日が淺いのであるから、東京の都市としての形體は大體に於て江戸時代と變りはない。三菱ヶ原の洋館と蜘蛛の巣のやうに張つて居る電車の外には著るしい近代化はないのであるから、今回の大火災に依つて全部燒けたるを幸に、東京市を其利用の點に於て、安全の點に於て、眞の文明都市に作り上げて、禍を轉じて福と爲すことが今回の大震災を經驗した者の責任である。

現在東京市の道路及び宅地割は大部分封建時代其儘であるが、近來自動車、自轉車、車馬の利用が激烈となり、將來益々其勢を増すのであつて、駕籠で往來して居た街にトラツクが縦横無盡に驅け廻ることは出來ないのであるから、下町の問屋町と云はず、小賣町、住宅孰れも各々の必要から道路の狹隘を感じて居たに相違ない。又土藏作りで、番頭、小僧が前垂れ掛けで算盤片手に雜巾掛けを手傳つて居た時代と異り、營業は段々新式に大規模に行はれるやうになるのであるから、宅地割も從來のやうな小さいものでは不便であり、且つ元來不整形のものも多いから、何等かの機會に近代の營業や生活に副ひ、十分の經濟的利用を擧げ得るやうに、宅地區劃を整理する必要が迫つて居たことゝ思ふ。殊に商工業は益々盛になつて來るのであるが、住居用に用ひられる宅地割、商業用に用ひられる宅地割、工場用に用ひられる宅地割、等は其面する道路と同じやうに夫れ〱其目的に適ふ大さ、形狀を備へることが必要である。新都市を建設す

る場合なれば、商業、工業、住宅地域等を截然と區別すると同時に、道路の設備、敷地區劃等も夫れ〴〵の用途に對して最も合理的に作ることが出來る。東京市の復興計畫に當つては勿論斯樣に理想的には行くまいが、大部分燒失野原になつたことであるから、當局の研究と關係市民の希望、協議に依つては隨分理想的の改革が出來ないでもない。一時のめんだうと困難はあつても、多數の道路が新に開設又は擴張される此際に、燒跡全般に亘つて土地區劃整理を行ふことは又とない機會であり、且つ土地の所有者、利用者にとつても永續的な大きな利益を與へるものである。土地區劃整理は右のやうに交通並びに經濟上の利益の點から、封建都市を近代都市に改造する重大な利益のある外に、保安衞生上の點からも頗る緊要な事業である。

從來のやうな狹い街で露路もあれば、行詰りもあり、それに燃え草のやうな木造建が櫛比して居るのでは、火事に逢へば一堪りもないのは勿論のこと、生命の危險さへ此上もないことである。戰爭は最後の五分間に勝敗を決するといふが、火事は最初の五分間に事を決するのであつて、如何に文明的な自働車ポンプが出來ても通れない道が多かつたり、ホースを持ち込むにも困難な露路があつたりしては、血迷つた避難者や、厄介な野次のために、只さへ活動の自由の妨げられる恐れのある消防手が、たゞ氣ばかり焦つて、あれよ〳〵と云つて居る間に、烈風の日でもあつたが最後、火は見る見る中に猛火となつて恐るべき大火となるのは屢々從來の例に見る所である。東京市の火災の多い例は今更云ふも管であるが、慶長六年に駿河町から火が出て江戸全市が燒き拂はれたこと、寛永四年に横山町から火が出て延燒四十町に及び、死傷多數であつたこと、又例の明暦三年正月十八日本郷丸山本妙寺から出火して五百餘町を燒き、死者十二萬二千人に及んだと稱せられる彼の有名なな振袖火事の如き、其他數へ來れば江戸開府以來數百回の大火があるのであつて、此爲めに失はれた生命財産は實に驚くべき程である。今大火災々害論をする時を有たぬが、古きを尋ねずとも明治

以來の頻々たる市内の大火、否、特に今回の大震災後の大火災を經驗した者は、大火災の如何に恐るべきものであるかは一生忘れられぬ程深刻に印象されて居なければならぬ筈である。猛火と、天を被ふ黒煙に追はれて、狹い街路を右往左往に逃げ廻る阿鼻叫喚の焦熱地獄を眼の當り見た者は、東京の道路と建築に就いては何等かの印象を殘した筈である。むざむざと燒き棄てた數十億の富に對しても、悲慘な最後を遂げた十數萬の生靈の手前にも、將來再び斯くの如き大慘害を蒙らない準備をすることは、生き殘つた者の責任である。其手段は一は勿論建築改革に在るが、他は即ち土地區劃整理である。土地區劃整理を行ふことに依つて、今回政府が復興道路計畫として行ふ幹線道路の開設を可能ならしめるのみならず、市の行ふべき副道路並びに之れに沿ふ宅地に對して理想的の整理を加へ、之れに依つて表通は勿論、裏町、横町、小路の隅々に至るまで區劃整然として相當の幅員のある道路が設けられることゝなるのであるから、假令將來火災が起つても從來の如く最初の五分間に消防意の如くならず、遂に大火に陷らしめ重大な生命、財産上の危險を生ぜしめるやうな惧れを減少することを得るのである。

加ふるに大都會は益々密集住居の弊害が加はり、殊に下町方面には其傾向が甚しく、露路裏長屋に住む小兒の如きは國民保健上悲むべき狀態に置かれて居たのであるが、これらも區劃整理を行ふことに依りて其弊を救ふことが出來る。

其他區劃整理が行はれて、各戶が相當の幅の道路に直面することゝなれば、地下埋沒物の設置、瓦斯電燈の引き込み等に就いても多大の便宜經濟が生ずる次第である。

要するに土地區劃整理を行ふことに依りて、以上の如く交通、經濟、保安、衛生、其他の點から種々の利益があるのであるから、之れを燒跡全般に行ふことは、單に前段に述べた如く、復興計畫の實行上、止むを得ない、むしろ唯一の手段であるのみならず、今述べた如き種々の利益が伴ふのである。之等の理由は總て重つて土地區劃整理斷行の聲とな

つたのである。

（四）土地區劃整理反對及び延期論

復興計畫土地區劃整理の實行案が漸くにして決定した四月に至つて、一部に於て奇怪にも區劃整理反對及び延期論が起つて來た。反對論の要旨は、バラツクがかなり建つて來たのに區劃整理を行ひ得るか、地下埋沒物、架空線等の付換へは如何にするか、移動方法、移動期間はどうであるか、移轉の損害、營業停止の補償は如何にするか、借地權、借家權等に對する影響はどうであるか、土地の一割無償提供は憲法違反である等の議論である。然しながら根本から區劃整理に反對する者は殆んど無いやうであつて、多くは其必要は認めるが、實行方法を合理的にせよ、市民に對して損害を與へないやうにせよと云ふに過ぎないが、一方に結論として區劃整理の實行延期を主張して居る者もある。區劃整理を實行するに際して、なるべく之れを合理的に行ひ又は市民に損害迷惑を與へないやうにせよといふことに就いては何人と雖も異論のあるべき筈はなく、政府及び市當局と雖も勿論其覺悟であるに相違ない。只區劃整理即行反對者の中には、事實を善意に又は惡意に誤解して反對宣傳をして居る者もある。彼の喧びすしく宣傳された移轉料平均二十七圓五十錢の問題の如きも、之れは只政府が豫算請求に必要なる平均單價に過ぎずして、實際支拂ふべき移轉料は實費に從ふべきものであつて、通常生ずべき損害は、法律の命ずる處に依つて必ず支拂ふ、又支拂ふべき義務のあるべきものであることを繰り返して言明して居るに依つて、市民の誤解及び不安は恐らく一掃された筈であるが、それでも猶爲にする所のある者が從來通りの惡宣傳をした者もある。

移轉の爲めに營業の停止する期間に就いても、損害ある場合には相當の考慮をすること、バラツク移轉に際しては出

來得る限り便宜の方法を考案し、且つ技師或は忠言を提供し、止むを得ざる場合には國、市が代つて之れを行ひ、出來得る限り短時日に仕事を終了し、必要ある場合は移轉期間中の假住居まで國又は市で世話をするといふのであるから、當局は必死の努力を以て此區劃整理及びバラックの移轉を出來得る限り市民に迷惑のかゝらない方法に依つて行はんとして居るのである。

元來土地區劃整理は燒失土地面積一千百萬坪、燒失建物延坪數五百萬坪の地域の大部分に亘つて之れを決行せんとするものであるから、此事業は百數十萬人の市民殊に多數の不動産所有者、物上權利者、賃借人等に直接利害關係のあることであるから、頗る煩雜困難な事業であることは其類を見ない。百數十萬人の利害に關し、其營業と、財産と、居住に直接利害のある難問題を解決して、互に損益なく、公平に、合理的に、苦情の起らぬやうに事業を行ふことは困難此上もないことで、古今東西を問はず、政治家の行つた事業の中、之れ程の難事業は恐らくあるまいと思ふ。政治家は屢々利權が伴ふか、或は自己の勢力扶植に都合の好いことであれば、多少の困難があり、又は非難があつても決行する勇氣を持つ者であるが、國家百年の長計、正義、又は國民の眞の幸福等の爲めには必しも常に萬難を排して戰ふものでない。寧ろ自己及び自派の現在及び將來の利益、及び立場に都合宜からずと見た時には、正義も國策も棄てゝ之れを顧みない場合が多くあり得るのである。然るに今回の土地區劃整理事業の如きは何人にも特種の利益を與へるものでなく、事業執行者は怨まれ、嫌がられこそすれ、何人からも有難がられるものでないにも拘はらず、市民の根本的の又永遠の幸福の爲めに之れを斷行することゝを決心したことは、政府、市當局の眞面目さと勇猛心とを示すものであつて、心ある市民は深く之れに感謝すると共に、總ゆる援助を惜んではならぬ。

土地區劃整理は右の如く實行困難の事情ある上に、辛うじて資金を調達して、バラックを建設し、營業を開始した者

が、區劃整理に依つて再び移動を餘儀なくされ、又大なる損害を被むる如くに誤解し、不安の念を抱く者のあることは無理ならぬことであるが、苟も土地區劃整理の斷行が復興計劃の實現に絶對的に必要であること、又當局の實行方法は努めて市民に損害、迷惑をかけざる方針にて行ふことが了解されたる上は、決して之れに反對すべき理由はない。

反對論者の中には區劃整理に依つて土地の減少が一割以下であつた場合には、其部分に對しては補償されないといふ特別都市計畫法の規定に基く方針を憲法違反なりと論ずる者がある。然し之れは實に意外な、筋違な議論である、土地區劃整理事業に當つて無償提供をなさしめる例は耕地整理法にもあり、又例の獨逸の區劃整理法アヂケス法の中にもある。アヂケス法に依れば、田園を變じて宅地とする場合に、場合に依つて關係土地面積の三五％乃至四〇％を道路敷地として無償提供せしむる例もある。但し法文としては道路敷地の爲め公用に供した土地が三五％以上に達した場合のみに補償すると書いてある。今回我特別都市計畫法も此書方であつて、抑々此一割無償提供の事は復興院評議會の希望條件であり、十分の論議を盡した上で、全會一致を以て可決され、政府が之れを特別都市計畫法中に規定して、貴衆兩院に於て異議なく可決したものである。土地區劃整理の實行に依つて一般社會が利益を受けるのみならず、地主、其他の利害關係者が一般に直接に利益を受けることはいふまでもなく、殊に區劃整理費は政府又は市が全部負擔するのであるから、アヂケス法の如く、三割、四割は多すぎるが、假令都會地でも區劃整理の結果、面積に於て一割以下の減少に對しては補償はせずとも、其利用及び價値の增進の點に於て決して一般的に之れを見て損害を蒙るものではないと認めた次第である。無償收用では無い量と質の交換である。殊に事業執行者が換地を與へる際に於て、技術上、正確公平な計算をすれば、此一割以内の減少は補償せずといふ規定は、國費の節約を行ひ得るのみならず、最も公平に關係者に依つて分擔され得るのである。殊に法理の正面からは既に政府が提案し、帝國議會の議決を經た炳乎たる法文あるに拘はら

す、市井の辯護士が憲法違反論を主張する如きは血迷つた議論である。

區劃整理延期を主張する者の議論の要旨は、政府がバラックの期限を五年間認め、市民は之れに依頼して無理算段をしてまでもようやくバラックを作り、客足もついて生計が緒に着いた時に、更に大地震のやうに大移動を行はれては堪まらぬ故、五年の後市民に相當の餘裕の出來た時に區劃整理を行ふと宜いといふのである。

此延期論には種々の誤解があるやうである。第一に區劃整理に依つてバラックの移轉が命ぜられた時は、總てが本建築に着手しなければならぬやうに誤解して居ること。第二はバラックの移轉に依り、非常な損害を被るものと前提して居ること。第三には區劃整理の延期は即ち實行不可能となり、同時に復興計畫の廢棄となるといふことを知らないこと。第四には延期の結果バラックで充滿した帝都が七八年間繼續することは思ふだに肌に粟の生ずる程危險なものであるといふことを悟らないこと。等にあると思ふ。

土地區劃整理の實行に着手して新たな道路と宅地割が出來た時は、從來の土地に對しては、地位に於て、價格に於て、大體之れに等しい換地が與へられることゝなり、此新らしい土地は從來の土地と同一に見做されるのであるから、茲に借地權も、抵當權も、借家權も、そつくり其儘移る次第である。區劃整理は何等法律關係を變更するものでもなく、又係爭問題に解決を與へるものでもない。而して從來の土地にあつたバラックは、換地の上に移轉し來つても、勿論從來通りの權利關係を認められ、且つ其所有者の希望する場合には、無論大正十七年のバラック期限まで之れを存續せしめ得るのである。區劃整理に依つてバラックを移轉することは、單に換地を得た者が自ら本建築をなさんとする場合には、何時でも之れをなし得る狀態に在り、從つて耐火建築の普及を速かならしめ、市民の安定した生活、營業及び健全な東京市の復興が早く實現し得ると云ふに過ぎない。次に五年先きに市民の財力の恢復する時まで延期せよといふ

のは、初めから區劃整理は市民に大なる損害を與へるものと前提した誤解に出づるものであるから、此點は當局に於て十分の補償をなす以上は延期の理由とはならない。

區劃整理は災後餘燼の未だ消えざるに先立つて之れを實行すれば宜かつたことは云ふまでもないが、既に述べた如く、政治上の種々の行違のために不幸にも延遲を重ねたのであるから、此點は今から悔んでも詮ないことである。遲れたりと雖も尚一日も早く實行するを可とする。現在に於ては既に百三四十萬坪のバラックが建設されて居るが、假りに延期論者の云ふが如く、區劃整理の實行を五年以後に延期すれば、其時には帝都は約四百萬坪のバラックを以て充滿し、今なれば空地もあり、バラックも一般に簡單であるが、五年後一面に充滿して、且つ今以上に手入れし、又は堅固なものが出來た場合に之れを移動せしめることは不可能に屬する。強ひて斷行するとしても、其時には數倍の費用と、數倍の日數と、數倍の困難、紛議を生ずるに相違ない。而も五年後に整理を開始すれば、現在二三年で出來ることも五六年を要する故、結局十年以上も後に非れば區劃整理事業を終了しない事になる。其間には再び建換を要するバラックも出來、結局區劃整理を延期することは莫大の費用、損失、時日、勞力を費すものであるのみならず、事實上區劃整理實行を不可能ならしめるものである。

殊に區劃整理を五年後に着手するとすれば、勿論現在の復興都市計畫を全部廢止することになるのであるが、然らば現在協贊を經た五億の復興計畫豫算は之れを返上しなければならぬことゝなる　震災間際であればこそ國民の同情に依つて此豫算を得たのである。五年の後に五億乃至七億の豫算を請求したとて、何とて議會が之れを承認することを想像し得やうか。延期論者と雖も此延期は即ち豫算の不實行返上となり、同時に復興計畫の放棄に等しいことを知つたならば、直ちに延期論の誤れることを悟るに相違ない。延期論の誤まれることを知れば、當然直ちに一日も早く即行するこ

との利益であることを悟るに相違ない。

假りにバラックの移轉を延期して、帝都がバラックで充滿した場合を想像し、且つ何等の道路擴築、區劃整理も行はれて居ないとし、或る烈風の日に一度火災が起つたとすれば其結果はどうであるか。バラックは平素の建物の數倍の早さを以て延燒し、數時間にして慶長、明暦、或は先般の大火災に劣らぬ慘狀を呈することは容易に想像し得ることである。區劃整理を即行して出來得るだけ早く換地の上に安定し、本建築を促進して、耐火構造を普及せしむるに非んば、帝都に住む者の生命財産は其危險實に云ふばかりない。延期論者は胃病患者が苦い藥を嫌つて甘い砂糖を求めるからとて、藥を斥けて欲するまゝに砂糖を舐めさせ、其結果遂に死に至らしめる者ではあるまいか。良藥口に苦きが如くであるが、東京市は今や土地區劃整理を頓服せねば、都市計畫の實現は勿論、眞の復興の望みは絶えるものと思はねばならぬ。

（五）區劃整理と總選擧

今回の復興都市計畫が重ね〴〵政治上の行掛りに累せられたことは最初に述べた通りであるが、本年春は總選擧が行はれる筈であつた爲めに、臨時議會に於ける復興豫算に對する衆議院議員の言論も、政黨の行動も、殆んど總選擧を目標として居り、審議會の或老人が復興計畫を前にして國防の充實を叫ぶかと思へば、他方衆議院に於いては復興豫算を前にして農村の振興を高調し、偏へに選擧區民の歡心を幾分でも多く買はんことを努めて居つた。恐らく其影響と信ぜられるが、遂に復興計畫は彼の如き修正削減を見た。此時に當つて東京市民は自己のバラックの建築のみに汲々乎として忙しく、一部の名譽職、有職者の外、殆んど其成行の如何に就いて配慮する者もない様子であつた。歳末復興豫算議

護のために山王臺で行はれた市民大會の如きも、市民の參會する者寥々たるものであつた。彼の火災保險金の支拂運動に關して、市民の熱狂した狀態と思ひ合せて自ら淋しい苦笑の浮ぶのを禁じ得ない。然るに今回區劃整理が愈々斷行されんとするに當つて、一部に於て猛烈なる反對又は延期運動が起つた。復興豫算が衆議院に於て、手習草紙のやうに墨黑々と汚されて居る時に、對岸の火災の如く冷視して居た東京市民は、復興計畫の眼目であり、否、復興都市計畫自身である土地區劃整理の實行に當つて、眼色を峻しくし、腕を扼して之れに反對せんとする者あるは抑も何故か。勿論關係市民の利害に直接大影響を及ぼすことであるから、十分の諒解を得るまでは區劃整理の內容、方法等に就いて疑問を發し、意見を述ぶるは正當であるが、誤解と不安に驅られて輕擧盲動する如きは如何にもはしたなき行爲である。無智又は誤解に依つて反對する者は止むを得ず、寧ろ同情すべきものであるとしても、區劃整理事業に關し十分の知識を有ちながら、否、其必要を悟りながら、更に甚しきは之れに贊成をして置きながら、裏面に於て反對運動を煽動する者のあることは寔に歎かはしいことである。

聞くならく、水に溺れる者は藁をも掴むと。總選擧に臨む者は一票を增さんが爲めに爲さゞることなしと。土地區劃整理に對して眞面目な見地から適否の判斷を爲し、確信に基いて贊否の議論をするのであれば、勿論非議すべきことはないが、罹災市民が區劃整理に關して一般に不安の念に驅られ、一部には誤解を抱く者のあるに乘じて、此心理狀態を捉へて巧みに煽動すれば、燎原の火の如く炎え擴がることは、彼の火災保險金支拂運動の場合の例に見ても明かである。選擧通でなくとも、此種の心理狀態を利用することが投票を集める上に於て最も利益であることは少し悧巧者であればすぐに氣がつく。然しながら土地區劃整理は只さへ利害關係者と種々の苦情、衝突を惹起し勝ちのものであるから之れを總選擧に悪用されては堪つたものではない。或は如何なる大事を惹起するかも知れない。煽動の仕方に依つては

土地區劃整理事業の實行を阻止し、其必然の結果として復興計畫全體を破壞するのみならず、或は不祥の血を見ることさへ想像されぬでもない。恐ろしや。恐ろしや。東京市内の一部に潜在する、又時に爆彈の如くに活動する反對論者は、固より多く誤解と不安に出發して居るに相違ないが、我々の見聞する所に依つても、單に總選擧に利用せんとする目的で反對して居る者が存在する。或人は私に告げて曰く、或區劃整理反對の名譽職の直話に依れば、彼は「かうやつて騒いで居る間は人氣があるのだ」と云つて居たとのこと、又或反對の區では「此人に投票すれば君の家は動かさずに濟ましてやる」と勸誘して居るとのこと。其他多くの聞き苦るしいことを耳にするが、斯くの如き者が跋扈して眞面目に帝都永遠の長計の爲めに努力した者が不利益な地位に陷るやうなことがあれば正義は地を掃ふことになつて寔に憂慮すべきことである。然しながら土地區劃整理を總選擧の食い物とせんとする如き市民に對する反逆者は到底眞面目な世間の容れる所となるものではないから、他方に區劃整理反對又は延期論に對する撲滅運動が起つて、現在に於ては稍々邪心に基く延期論は聲を靜めたやうであるが、市民に油斷あれば何時でも又此種の徒に利用される惧れがあるから、此世界無比の大事業且つ難事業を敢行するに當つては、單に當局者の盡力に頼るのみならず、市民が擧つて之れと協力するに非れば完全に目的を達することは頗る困難である。

土地區劃整理が迅速に終了するに非れば、本建築も出來ず、耐火建築の普及も遲れる次第である。今や寧ろ土地區劃整理に就いて議論をして居る時機でなく、速かに之れを終了したる後の本建築、殊に耐火建築の實行に關する方法を研究し、建築費補助、建築資金貸付、建築企業組織等に就いて具體的手段を研究する、否其手段が決定して居ねばならぬ時期である。私は寧ろ當局、及び市民の考ふべきは、區劃整理後の本建築の實行及び耐火構造普及方法の問題に在ると思ふ。

進歩乎沒落乎

室伏高信

一

文明の沒落は旣に始まつた。今日は沒落期である。人々は沒落人である。彼等が意識すると否とにかゝわらず人々は今日は沒落人である。

政治家は進歩を、科學者は進化を、社會主義者は改造を尙ほ今日も約束しつゝある。欺くことを止めよ。政治家も、科學者も、社會主義者も、彼等自身が沒落期の現象なのだ。

多くの人々は尙ほ文明の沒落を信んずることはできないでゐる。文明は不斷の進歩、不斷の進化であるとは、旣に久しく人々の信仰である。凡ての文明人は神を恐れず、天を信んじない。無恐怖と無信仰とは文明人の生活原理なのだ。文明人はしかし文明の絶對を信んずる。文明の前に恐怖し、文明の像を崇拜する。古の羅馬人が彼等の文明の永遠を信んじてゐたように近代文明人は、絶對と永遠との觀念を否定しながら、意識的に若しくは無意識的に、文明の絶對と永遠とを信んずる。神を否定して神を信んずる。文明人は八頭一尾の怪物なのだ。

文明の沒落は、彼等にとつては荒唐無稽である。奇々怪々の豫言である。奇蹟なきことを奇蹟とする文明人にとつては、豫言は精神錯亂、詩人的直觀は幻影のほかの何ものでもあらぬ。俗人昭々、我獨若昏。古の豫言する鳥のごとくに、豫言者はたゞ一人にて飛ばねばならぬ。

文明人は昭々。戶を出でずして天下を知ることは古の傳説である。認識の限界は、文明人の限界である。認識の世界は、それゆえに全世界なのだ。長安を蒙塵した玄宗皇帝が、楊貴妃の夢に、尙ほ亡國の憂を忘れてゐたように、今日の文明人は、沒落の斷崖に立ちながら、文明の竪琴に耳を傾けつゝ、無邪氣にも、進歩を、進化を、改造を信んじてゐるのである。文明は今日は甘き竪琴なのだ。文明は自由思想である。文明人は自由思想家である。「一切雖且つ完全に過去と手を絶て。」デカルトの叫び

は近代人の叫びである。「明確且つ完全に過去と手を絶て。」進歩は、進化は、改造は、自由思想家の甘き竪琴なのだ。

凡ての文明人は、甘き竪琴とともに、今や沒落の斷崖に立ゐる。甘き竪琴の前に、歡樂の合唱は尙ほ聞えてゐる。トロイはしかし火に包まれてゐる。

二

甘き竪琴を捨つべきの時がきた。進歩、進化、改造なる觀念を、トロイの火中に投ずべきの時がわれ／＼の前にきた。進歩、進化、改造！ 如何に多くの人々が此の名に憧れてきたことであらう。進歩は、進化は、改造は、森を開き、沼澤を塡め、汽車、汽船、飛行機、電信、電話。神々が死んで、この地上は蒸汽機關的功利主義の演技場と化した。自由思想家等は、進步と進化との名によつて、世界を大マンチエスタアにと造りかへた。われ／＼は今や大マンチエスタアのうちに住むでゐる。われ／＼がこれを欲すると欲せざるとにかゝわらず、われ／＼は今や大マンチエスタアの市民である。ブルヂョアも、プロレタリヤも、若しくは農牧の民さへも、今は大マンチエスタアの市民である。神の王國が亡んで、一つの猶太帝國—Ghetto empire—が地上に建てられたのだ。

功利主義的民主主義が、感激を失ひ始めた時に、高名の智者は、十八世紀の傳說に歸つて、再び革命の旗を樹てた。甘き竪琴は、音調を新らしくした。プロレタリヤの群が、陶然として耳を傾けてゐる。安樂椅子的黃金世界の代りに、赤色の黃金世界が開けんとす。進歩、進化、改造は、かくして再び人々の信條なのだ。

資本家が自由思想家であるごとくに、革命家が自由思想家である。彼が文明人であり、これが文明人である。文明が交々爭つてゐる。人々はそれを階級鬪爭だといはんとしつゝある。勝敗の數は既に明らかである。高明の智者は、既にフエビアンの城を出でゝ、「資本主義文明の衰亡」を叫びつゝある。低調な聲である。詩人的本能と、豫言者的直觀とをもたないものは、低調な聲で語る。資本主義文明の衰頽を口にしながら、文明そのものは、尙ほ彼等の偶像である。ブルヂョアの偶像は再びプロレタリヤの偶像である。右に偶像破壞者、左に偶像崇拜者である。文明の偶像を崇拜しつゝ、進歩、進化、改造の古るき行進の曲が、再び革命の戰場に奏でられつゝあるのを見よ。進步なる思想の成功は、社會主義との結合によつて助長されてきた。ダアヰンのうへにスペンサアが立つたように、マアクスもまた立つてゐる。佛蘭西革命のデマゴオグが、劍と政治とによつて

安樂椅子的黄金世界を約束したやうに、露西亞革命の政治家等は、チエッカとネップとによつて赤色の黄金世界を約束しつゝある。ロベスペエルの血が再びトロッキイの血管に流れる。社會革命は、かうして政治革命の法廷相續人なのである。文明の破壞の代りに、文明の相續人である。彼の野心は、文明の完成にある。文明の科學化こそ彼の窮局の目標である。科學の科學化なのだ。テエゼとアンチテエゼではない。同一物の相續、合理化完成なのだ。ウヰンデルバンドに對してリッカアトたらんとすることが社會革命の野心なのだ。人々はレニンに、トロッキイに恐怖する。社會主義の自由思想家等は、しかし資本主義的自由思想家のエピゴオネンなのだ。獨創ではない。模倣である。革命ではない。修正である。反逆ではない。相續である。

獨裁政治、議會政治、政黨政治、軍隊、警察、官僚、大學、新聞、大社會、大國家、機械、大規模生産、商業、賃銀奴隷制度、賣淫、カフエ、大都會、電車、汽車、飛行機、小説、科學、文士、學者、煽動家、電信、電話。あらゆる資本主義文明の要素は、再び「プロレタリヤ」新露西亞文明の要素であることを見よ。舊露西亞は、露西亞を西歐化するために進んできた。新ロシヤは彼等の文明を西歐の第一列に進めんとあせつてゐる。資本主義文明が滅びてプロレタリヤ文明が起つたのではない。」プロレタリヤの名によつて資本主義文明が相續されたのだ。相續されたといふよりは、寧ろ剽竊されたのだ。一切のものが剽竊されたのだ。ソヰエトといふも模倣である。赤衛軍といふも模倣である。インタナショナルといふも、文化といふも、科學といふも、無神論といふも、模倣である。相續である。剽竊である。「資本論」が資本主義經濟學の最終點に立つてゐるように唯物的社會革命は、資本主義の最終點に立つてゐるのだ。

文明病患者は、今や世界に滿ちてゐる。ブルヂョアもプロレタリヤも、都會人も農民も、西洋人も東洋人も、文明病患者である。故郷喪失は文明人の生活原理である。文明は今や人々の故郷である。故國愛の代りにインタナショナルを、故郷愛の代りに文明を、人々は置き代へた。こゝに東歐が西歐となり、東洋が西洋となる。文明は世界を征服したのである。アレキサンダアも、シイザアも、ナポレオンもなし得なかつたことを、文明はこの地上に成しとげたのである。

文明は現にあるばかりではない。將にあらんとするものも、人々はまた文明だといはんとしつゝある。「資本主義文明の衰亡」の廢墟のうへに、左顧右眄のフエビアンは、瓦斯と水道との文明を、この地上に普からしめんとす。「露西亞の新ジエスヰットが、チエッカとネップとの「新文明」を建設しつゝあるように

英國の日和見主義は、瓦斯と水道との新文明を約束して內閣にある。世界は正に文明過剩である。進步過剩である。革命過剩である。

進步乎沒落乎。

三

進步なるものありや。

進步を說くものは、しば〱過去との斷絕を口にする。「過去と斷絕せよ。」デカルトのことは旣に述べた。破壞せよ、破壞せよ！ 創造は破壞からきたる。バクニンはこう考へた。破壞から創造がこないとはいはぬ。創造はしかし進步ではない。クロウチエの所謂善から比較善へと行くことではない。創造は創造である。新價値の誕生である。新世界觀の要求、新價値判斷の要求がこゝに必然である。創造には進步もなく退步もない。進步と退步とを超越したる活動なのだ。

進步なる觀念は常にその背後に過去を作つてゐる。途上の牝牛のように常に背後に車を輓く。牛から見れば進步、車から見れば退步である。

進步とは旣に存在する凡ての善の保存とその擴大とである。ミルの有名な定義である。善から比較善へ行くことの觀念がナンセンスであるように、ミルはナンセンスである。

價値觀念と量的觀念とを區別せよ。價値は獨立である。一つの價値と他の一つの價値とは獨立である。一つの星は、その輝きにおいて、他の一つの星よりは違つてゐる。二つの星が、一つの星より美しいといふことはありえないのだ。一つの星に他の一つの星を加へよ。それが進步だとミルはいふ。eudaemonism は價値を量化せんとす。積み重ねの觀念と價値觀念とはしかし二律背反である。ニュウトンのうへにアインシタインを積み重ねることは可能である。ミュウズのうへにバッハをワグナアをモッアルトを積みあげてゆくことは不可能なのだ。

進步たる言葉は一つの欺語である。化粧語である。イリュウジョンである。精神錯亂である。

歷史は進步と退步とを超越する。歷史の跡は、如何なる意味においても、進步の跡ではない。恥！ 恥！ 恥！ ニイチエのいふたごとくに、歷史の跡はたゞ恥である。ゲエテ、カント、シエクスピイアをもつてしても、プラトオ、アリストオトル、ホオマアのうへに、彼等の「善」を擴大したといふの證據はないのだ。

進步とは複雜化である。スペンサアの定義である。より多く科學的である。彼の社會學はあらゆる意味において近代的であ

る。tea-grocer's philosophy なのである。複雜化の觀念は、しかし進步の觀念ではない。價値判斷なくして進步はありえない。進步なる觀念は科學的觀念ではないのだ。複雜化の觀念は科學的であるとゝもに、進步の觀念ではない。進化の觀念である。進步と進化とを區別することが近代の科學である。進步を進化の概念中に沒落せしめることもまた近代の科學である。スペンサアの所謂進步とは、進化のほかの何ものでもないのだ。價値判斷ではない。無價値判斷なのだ。

社會進化論は歷史の無價値判斷である。浪漫派歷史哲學の發展の觀念の代りに、自然主義の形而上學は、進化の無價値判斷をもつて置き換へたのである。細胞から佛蘭西革命に至るまで、星雲から露西亞革命に至るまで、ジレタント哲學者、ジレタント科學者は、何等の困難もなくして、一夜のうちに說明することができるのである。世界史とはかくのごとき記錄である。宇宙論的ロオマンスに始まつて神話に終らんとす。今日の進化論者は神話の製造者である。クロウチエの歷史學にいふとほりである。科學的神話である。神話なき神話である。創造なき神話である。虛僞中の虛僞である。山師中の山師である。藪醫者中の藪醫者である。

社會進化論、歷史學上の自然主義は、科學的藪醫者である。スペンサアが、そしてバックルが藪醫者である既に進化したものゝ斷片をかき集めて、進化はこゝにありと叫ばんとす。こゝにスペンサアの根本誤謬の一つがある。ベルグソンが指摘してゐるとほりである。歷史學上の自然主義、社會進化論の誤謬は、しかしその學的方法にあるだけではない。自然現象と心理現象、自然と靈魂との混同こそ彼の根本誤謬なのだ。

自然現象は、發生せるもの das Gewordene の世界に屬する。空間的存在である。反覆する實在である。數學、論理、實證、經驗がこゝに可能である。心理現象は發生するもの das Werden の世界に屬する。反覆すべからざる存在である。時間的存在である。直觀、幻想、體驗がこゝに可能である。前者は統計學、系統學の對象である。後者は形態學、年代學の對象である。總じて前者は實證科學の對象である。後者は詩の對象なのだ。

歷史學上の自然主義、歷史的唯物主義、社會進化論は、一つの心理現象、一つの靈魂現象を、自然科學によつて分析し、解剖し、組織し、實證せんとするの誤謬である。直觀、幻想、體驗の可能の世界において、數學、論理、實證、經驗の可能を主張するものの誤謬なのである。

歷史の跡は、發展の記錄でもなく、進化の記錄でもない。因果關係の支配するのは自然現象のことである。歷史は物質的

現象ではない。心理的現象である。シペングラァの所謂 das Werden の世界に屬する。それゆえに時間的現象である。悠久なる宇宙の間にあつてたゞ一度しか存在しない。生者必滅、榮枯盛衰。各々の瞬間が各々の誕生であるとともに、各の瞬間がまた各々の死滅である。歴史はそれゆえに運命が支配する。因果關係と運命とは、空間と時間とに當るのだ。

今日は文明の時代である。近代文明は二百年、百年、または五十年をつゞいた。十九世紀はその全盛期である。世紀末は文明末であつた。文明は、今日も尚ほ餘喘を保つてゐる。或る國々では、文明はその絶頂を過ぎた。ある國々ではその絶頂にある。無邪氣なる文明人等は、進歩、進化、改造なる觀念によつて、文明の限りなき持續と向上とを期せんとす。短かきが、しかし文明の運命である。

ある時代は文化の時代である。ある時代は文明の時代である。文明と文化とが交錯して存在する。文化の時代は靈魂の時代、永久小兒的の時代、內生活の時代である。文明の時代は智の時代、形式化の時代、外生活の時代である。それゆえに多くの歴史家は、文明の歴史家である。文明史家である。歴史とは、今や文明の記錄、國家　記錄、支配階級的政治家の速記錄、外的生活の總記錄である。Zivilisation sind die äussersten und künstlichsten Zustände, deren eine höhere Art von Menschen fähig ist. ——文明は人間の可能なる最高の種類の、最も外的且つ人工的な狀態であるからである。

文明病患者等は、外的、人工的生活に陶醉しつゝ、人類生活の跡を、一途に文明の發展の跡と考へ、文明は不斷に進化してまた再び衰亡することなき上昇過程であると考へてゐる。文化の時代は長く、文明の時代はしかし短かい。希臘の文明時代も、羅馬の文明時代も、そして近代文明の年齡さへも、悠久なる世界進行の前には、たゞ一瞬時である。文化の歴史に比べるも、文明の歴史は僅にその一部分である。短かきは文明の運命である。再び、文明は人間の可能なる最高の種類の、最も外的且つ人工的な狀態であるからである。自然狀態ではない。不自然狀態であるからである。従つて安定的でない。不安定的であるからである。

進歩、進化、文明永遠視の迷忘から脱却せよ。文明そのものが一つのブルヂョア狀態であるように、進歩、進化、若しくは改造なる觀念さへも、一つのブルヂョア觀念である。功利主義唯物主義が、常にその背後に伴つてゐる。行商人の哲學、行商人のパラダイス tea-grocer's philosophy である。新時代にとつては、一片の紙屑なのだ。この紙屑を取り去れ。

四

行商人の哲學は、今や破産しつゝある。没落の運命が、近代文明のうへにふりかゝつてゐるからである。

羅馬について思へ。

羅馬文明に陶醉してゐた人々が、如何にして羅馬文明の滅亡を信んずることができたであらう!

コリシユウムは、時と自然とに任せたなら、永久に持續したであらうと。ギボンの說くところである。Quamdiu stabit Colyseus, stabit et Roma; quando cadet Colyseus, cadet Roma; quando cadet Roma, cadet et mundas. ――コリシユウムが立つてゐる間は、羅馬が立つてゐる。コリシエウムが仆れる時に、羅馬が仆れるであらう。羅馬が仆れる時に、世界が仆れるであらう。――コリシユウムの大建築を仰ぎ見つゝ、羅馬の文明人は、羅馬の天壌無窮を信んじてゐた。羅馬とともに、羅馬文明の永久、進步、進化、そして或は改革をも信じてゐた。

大劇場は一朝にして仆れた。羅馬の世界都市が、一朝にして田舍都市にと落ちた。大羅馬帝國が、羅馬文明の一切とともに崩壞して、再び復ることとなき死についた。

凱旋路は蔦葛によつて蔽はれ、元老院の椅子は肥料の堆積場に、公民會堂は野菜の栽培場にと化した。永久のごとくに見えたもろ/\の建物は、巨人の四肢のように、平伏し、晒らされ、破滅のまゝに横はつてゐる。形なき大理石の劇場、方尖碑、彫像、ネロ宮殿の柱廊。コルシユウムが仆れて羅馬帝國が倒れたのだ。

羅馬帝國が仆れて羅馬文明が仆れた。文明そのものが仆れた。世界が仆れたのだ。世界は再び「暗愚時代」にと入つたからである。

一片の夢である。文明は永久であることの代りに、一つの插話なのだ。――われ/\が今立つてゐるキヤピトリン丘は、嘗つては羅馬帝國の首都、世界の城、諸王の恐怖であつた。この世界の光景が、如何に没落し、變化し、害はれたことか!――キヤピトリン丘上から廢都を眺めて、ボッギアスが斯くも叫んだ。第二のボッギアスが出でぬであらうか。新世界のキヤピトリン丘から、倫敦を、巴里を、伯林を、紐育を俯瞰して、世界の廢墟、没落、變化を嘆んずるの日が、再びわれ/\の世にきたらぬであらうか。

倫敦が幾つかの田舍町に分裂し、商業中心地が貧民住宅地となり、牧場ができ、田園が起り、ウエストミンスタアが肥料市

場と化した。――無何有郷の記念してゐるところは、われ〱の世に、永久きたることなきユトピアであらうか。

われ〱の文明は日一日と不安定となり、そして、その終りは見えてゐる。――「基督教社會學」の最終の一節である。今日は世界不安の時代である。世界不安はしかしたゞなる經濟不安、勞働不安、國際不安だけではない。文明不安は、實にその根柢である。文明の大伽藍が動搖して、「終りは見えてゐる。」

人々は、シペングラアに聽かねばならぬ。

シラクス、アテネ、アレキサンドリアの後に、羅馬がつゞいた。マドリッド、巴里、倫敦の後に、伯林と紐育とがつゞいた。田舍となることが、凡ての國の運命なのだ。……

今日は一つの末期時代である。文明は一つの Spätzeit である。今日が一つの末期であるばかりではない。文明は常に一つの Spätzeit である。文化は始めである。文明は終りである。文化が、その永久小兒的の靈魂の目醒めによつて、無限なるものの、不滅なるものから、有限なるもの、必滅なるものとして生れ出でゝから、生長し、老熟し、硬化した時に、文明は生れる。文明は終りだといふのはこのためなのだ。文明は常に末期、常に澆季である。文明が進めば進むほど末期はいよ〱末期、澆季はいよ〱澆季なのだ。「文化から文明への轉化は、古代においては四世紀に、西洋においては十九世紀に行はれた。」その文明さへも今や絶頂である。文化はいよ〱遠くへと追ひやられて文明は正に絶頂に立つてゐる。危機はしかしこゝにある。

文化の危機は既に過ぎた。西洋哲學はカントにおいて、數學はガウスにおいて、音樂はモッアルト、繪畫はゴヤにおいて、最後の絶頂に達した。カントから、ガウスから、ゴヤから、モッアルトから、西洋文化は既に衰亡の道を急いできたのである。文化が遠くへと追ひやられる時に、文明は鬨の聲を揚げる。文明は十九世紀において完全に勝利を占めたのだ。文明の勝利とは何んだ。外的生活の勝利である。人工的生活の凱歌である。人間の可能なる最高の種類において、最も外部的な、且つ最も人工的な生活形式は、文明の絶頂である。文化はこゝに完全に分離する。文化なくして文明が立つてゐる。靈魂なくして人間が立つてゐる。滄々浪々として、心靈喪失者の群が世界都市のアスファルトのうへに立つてゐるのを見よ。

文明の危機はこゝに横はる。文明がその諸形式を整頓した時は、文明の絶頂であり、また文明の危機である。文明はたゞ一人で立つてゐることはできないからである。獨立性をもたないからである。寄生的存在であるからである。文化なく心靈なく、心靈なく生命なく、文明の外部的人工的生活形式の壓制は、破

壞、破壞、破壞、たゞ破壞するのみである。創造なく、價値なく、生々化なく、各々の瞬間は各々の破壞である。各々の積み重ねは各々の破壞である。生命が、心靈が萎縮し、創造なく、價値なく、生々化々なく、文明はこゝにその寄生木を失ふのだ。文化がその臟分を使ひ盡くした時は、文化が硬化して再び歸ることなき死についた時は、たゞなる文化の死滅があるばかりではない。文明それ自身も冷却して死の途に就くのである。文明の末期なのだ。沒落の日がやがてつゞく。

今日は正にその時なのだ。

五

智と靈とを區別せよ。精神と心靈とを混同すること勿れ。智は精神の活動である。精神は意識の上層に巣くう。靈は無意識の、下意識のどん底に横はる。精神は淺く、靈は深く、智は賢しこく、靈は永久小兒的である。

驚異！　驚異こそ人間が到達すべき最高の價である。ゲエテの言葉を思へ。靈の世界なのだ。小智の世界を超えて、遠き彼方に偉大を、神秘を、驚異を、無限を直觀する。こゝに詩があり、音樂があり、繪畫があり、彫刻がある。生ける自然があり宗教があり、神があり、文化があるのだ。文化の國は智を超えて遠き彼方に横はるのだ。

奇蹟！　奇蹟なきことが奇蹟なのだ。ポアンカレの言葉を思へ。驚異とは精神錯亂なのだ。錯覺なのだ。藝術は錯覺なのだ。Cogito, ergo sum. ——認識の限界こそ智の限界である。智の限界を超ゆることは錯覺なのだ。精神錯亂なのだ。神秘なく、不可解なく、恐怖なく、驚異なく、奇蹟なく、神なく、信仰なく、宗教なく、藝術なく、文明の帝國がこゝに横はるのだ。

智の國である。冷やかなる智の國である。數と論理との國である。三百代言の國である。科學は萬象の中央に立つて智を總覽するのだ。科學は智の象徴、智の總覽者なのだ。

智の總覽者は、今や哲學ではない。哲學は科學に讓つた。反形而上學的精神は文明の象徴である。カントは代表的文明人である。形而上學を攻撃することなくしては文明批評家となることはできないのだ。metaphysisch はカント以前である。unmetaphysisch は文明である。カント出でゝ形而上學を叩き大小のエピゴオネンが相爭つて形而上學を非難する。然りエピゴオネンである。今日はエピゴオネンの時代である。末期時代は Epigonenperiode である。

基督教は、今日はイエスのそれではない。お弟子の基督教である　お弟子によつて飜譯され、誤譯され、改作され、精神が

蹂躙されて骸骨が殘つた。力なき牧師、蒼ざめた顏を見よ。山羊怪はエピゴオネンの象徴である。末期現象であるのだ。「禍なる哉、富む者よ、汝等は既にその慰めを得たり。禍なる哉、今飽くものよ、汝等は飢えん。」……「他人の汗をもつて殿堂を建つるものは禍なる哉、それを築ける一々の石と煉瓦とは一々の罪なり。」――神は嘗つては弱者と貧者のためなる複讐者であつたのだ。神は今何處にありや。イエスは今何處にありや。貧しきものは地獄へと落とされて、富めるものが「神の王國の第一列」に坐せんとす。基督教は今や純然たるブルヂョア女の化粧品なのだ。朝に寄生堂に集まり、夕に教會の門を叩く。本質的墮落なのだ。ニイチェの言葉のごとくである。基督教は中世紀の終りとともに、終りを告げたのだ。

哲學もまた今やエピゴオネンの時代である。リッカアトは當代第一の哲學者だといはれる。第一のエピゴオネンである。彼は分析し、祖述し、組織し、老來尙ほ諄々として倦むことを知らない。分析と組織と、そして祖述の才能においては、彼は恐らく當代に比肩を見ることができないであらう。宜なる哉、ハイデルベルクは今や哲學のイエルサレムである。大小のエピゴオネンが世界の各國から相携へて彼の門を叩く。エピゴオネンのエピゴオネンである。エピゴオネンが世界に瀰延して、各國の大小の亞流哲學者が講壇のうへに文化哲學を說き、文化科を祖述し、基督降誕祭の代りにカント二百年祭を紀念する。Epigonenperiode なる哉。

哲學は今や一つの科學である。「哲學者は科學者のうへに進まなければならぬ。」――そのベルグソンさへも生物學の囚へるところとならんとす。生命の哲學は學に非ずとして排斥され、「哲學それ自身が科學である。」哲學が科學と化して新煩瑣哲學が生れたのだ。アリストオトルの哲學からスコラ哲學が生れたやうに、ガリレオの物理學から新スコラ哲學が生れたのだ。エピゴオネンの哲學は常にスコラ哲學である。スコラ哲學は Epigonentum である。煩瑣と複雜と祖述と說明とは亞流精神、お弟子氣質の象徴なのだ。こゝに生命から、靈魂から、端的に實在の內面を突かんとする力から、眞の哲學的精神から、ソクラテスから遠ざかつて、哲學は講壇の片隅に閉ぢこもつて、ひたすらに科學に媚びんとす。

リッカアトは西洋哲學の吊鐘者である。ハイデルベルクは哲學のイエルサレムであるよりはゴルゴタである。西洋哲學は今やゴルゴタにと運ばれた。生命なく、創造なく、感激なく、人間から、大地から、世界觀から遠くへと陷つて、智の巧妙なる一作用、一組織にと化した。われ〳〵は最早や現代哲學を學ぶの

必要はないのだ。そは一つの文獻學である。今日は文獻學の時代である。獨り哲學だけではない。政治學でも、經濟學でも、文學でも、自然科學でも、一切の方面を通じて文獻學者の時代である。古本を探し、頁をくり、索引を設け、參考書目を作製することが今日の著述であり、學問であり、學者である。紙屑製造である。魂の冒瀆である。腦髓人の遊戲、小智の演技場なのだ。亞流時代だからである。エピゴオネン哲學だからである。こゝに人々は、末期哲學を見るべし。沒落學者を見るべし。Symbol einer Spätzeit ――リッカアトは、哲學に於ける末期時代の象徴なのだ。

科學が最後の勝利者であるとするの信仰は、尙ほ今日も行はれてゐる。十九世紀は科學萬能の時代であつた。二十世紀になつてさへも、多くの人々は、尙ほ科學萬能の惡夢から脱却することができないでゐる。科學は微から細に入り、元子から電子に入り、エエテルを否定し、宗教を屠ふり、神を殺戮し、藝術の塔を覆へして、汽車、汽船、電信、電話、電車、自働車、飛行機、活動、蓄音機、爆彈、猫入らずと、寧日なきまでに、一歩々々彼の領土を擴張してきた。科學帝國は世界を領土とする。或は宇宙を領土とする。宇宙は有限であるとは科學の宣言である。アインシタインがこゝに立つ。アインシタインは科學の信仰を强めた。一般的には、科學はアインシタインの名と結びついて、一つの流行にまで高められた。上は皇室から下は貧民窟に至るまで、今日は科學を學ばぬものはない。科學を知らざるものは時勢後れである。ブルヂョアもプロレタリヤも、科學を崇拜する。農民さへもまた然らんとす。科學はたゞ一つの學問である。科學にあらざれば腦病やみである。人間は猿から生れた。猿のごとくに賢かしき文明人等が、親も子も、男も女も、富貴も、卑賤も、ともに人間は猿から生れたのだといふ。猿から出でゝ、人々は何處へ行かんとするか。知らない。誰れも知らない。知らざることを怪しみもしない。何故に猿から生れたか。猿から生れて猿に歸るのか。ニイチエのいふように、猿から生れて猿に歸るのか。知らない。誰も知らない。知らざるところは飛び越える。ギャップは飛び越える。これが科學である。ギャップを飛び越えつゝ、科學的説明がこゝにあるとする。無學者はたゞ信んずる。學校で教へるから信んずる。學者が口にするから信んずる。人々はパウロとヨハネを見るように大學教授を見る。懷疑は神への懷疑である。科學は新らしき神である。科學に疑はないのだ。懷疑から生れた科學は かくしてブルヂョア時代の信仰となつたのだ。

この信仰を打破せよ。新らしき懷疑の精神を呼び起せ。大道

廢有仁義、棄智出有大僞。科學は假定、小說から始まつて再證の語辞を說く。虛僞中の虛僞である。科學的智識は、眞理とは何のかゝわりもないのだ。たゞ事物の外面を轉回するのみである、物自體は、科學的知識とは何のかゝわりもないのだ。「科學的知識はたゞに眞理でないのみならず、謂ふところの知識の各々の斷片が、たゞなる便利なる虛僞である。」

たゞに虛僞であるばかりではない。科學は智のアリストクラシイなのだ。學者の學問なのだ。われ〳〵の追隨を許すことはできないのだ。しかく傾頂である。しかく階級的である。しかく貴族主義なのだ。統計學が官僚主義であるように、數學は貴族主義なのだ。少數の數學的天才だけが數學に通ずることができる。大多數い人々は、ナポレオンの軍隊のように、唯々諾々、天才の命令に追從するのほかはないのだ。試に見よ。相對性原理を口にするものは多い。小學校の生徒もまたアインシタインを口にする。アインシタインを理解するものが幾人あるか。世界に數十人あるであらう。その數十人だけが批判する。批判哲學の時代において、世界の大衆は、無批判に受取らなくてはならぬ。盲從である。迷信である。智の專制である。アインシタインは、科學帝國の王者、ネロなのだ。智のネロなのだ。何ものの與ゞこのネロに喝采するか。ネロがトロイを燒き、アインシタインが人間の魂を征略する。デモクラシイを謳歌す人々が智のアリストクラシイに跪坐してまた恥づるところなからんとす。人間の奴隷欲は限りも知らないのだ。

科學は智の奴隷制度である。科學の存在する限り智の不平等は免れがたき運命なのだ。可能の程度における最小の不平等なのだ。この不平等のある限り人々は智的從屬から免れることはできぬ。彼の判斷は彼自身に存在しない。科學の貴族が、王者が、彼を批判し、判斷する。彼はたゞ智的從屬者である。そして遂に一切の從屬者である。獨立人ではない。奴隷である。科學は奴隷制度であるのだ。

凡ての奴隷制度がさうであるように、智の奴隷制度もまた自己破産の道を歩みつゝある。ブルンチエルのするごとくに、「科學の破産」は、科學能力の限界にだけあるのではない。「七不思議」は七不思議である。科學の破産は、しかしたゞなる七不思議のうへにあるのではない。科學それ自身のうちに、自己破産の運命が内在する。自己破産こそやがて科學の受取るべき運命なのだ。そは智のアリストクラシイであるからである。アインシタインの後に第二のアインシタインが生れたとせよ。何人も追從することはできないであらう。そは批判のほかに措かれるのだ。即ち科學の破産なのだ。第二のアインシタインを待つ

文でもない。相對性原理それ自身が一つの破産なのだ。智の破産なのだ。科學的眞理の破産の宣告なのだ。
科學におけるアインシタインは哲學におけるリッカアトである。科學における末期的天才、沒落時代の象徴なのだ。

六

文明の生活形式は都會生活のそれである。シラクス、アテネ、アレキサンドリアの後に羅馬があつたように、マドリッド、巴里、倫敦の後に、伯林、紐育、維也納、東京がある。世界都市である。文化都市の代りに世界都市である。文化の時代が、文化都市において面影をとゞめてゐるごとくに、文明は世界都市において要約されるのだ。

今日は世界都市の時代である。倫敦、紐育、伯林、巴里、東京が世界である。世界の一切である。何人も世界都市の圏外に立つてゐることはできない。直接に市民であるものも、ないものも、都會民も農民も、世界都市の勢力範圍に屬する。そこは政治の中心である。經濟の中心である。警察と軍隊の中心である。交通通信の中心である。新聞と新聞文化の中心である。教育の中心である。カフエとカフエ文化の中心である。賣藥、化粧品、流行、社交の中心である。要するに文明生活の一切の中心なのだ。

一切の權力が集中されて、世界都市が世界に君臨する。世界都市は命令者である。小都市は、文化都市は、農村は、奴隷である。唯々諾々、世界都市の命令に服從しなくてはならない。世界都市は世界の骨髓だからである。

世界都市は金の場所、商工業の場所である。政治の中心であり、教育の中心であり、流行の中心であり、交通通信、警察、軍隊の中心であることは、そこが商工業の中心だからである。世界都市時代は商工業の時代である。金と機械との時代である。金と機械とは一切である。金、金、金。權力は金から生れる。金は機械を生み、機械は金を産む。世界都市の精神は科學、主人は金、手足は機械である。こゝに世界都市の本體がある。一切はこゝから流れる。一切はこれによつて支配されるのだ。

農民が都市を崇拜する。小都市が世界都市を崇拜する。笈を負ふて東都に出づ。野心ある青年は成功のために、貧しきものは生活のために、世界都市に向つて人口の波が寄せる。都會人は人間の貴族である。中世貴族が沒落して新貴族——高橋是清、加藤高明、後藤新平、大倉喜八郎、ビイバアブルックが取つて代る。素町人時代である。素町人は金によつて富めるばかりでは

ない。富めるものは貴族となり、正三位勳一等となり、大宮人となり、大臣となり、樞密顧問官となる。學者はこゝに飼り、宗教家は貧しきものを神の王國の第一列から落して、富めるものを置き代へる。白拍子は、俳優は、音樂家は、小說家は　彼のために舞ひ、踊り、歌ひ、舞文曲筆する。唯物史觀は世界都市史觀である。素町人史觀である。今日は正にその時代である。世界都市が一切を製造し、一切を支配する。世界都市は萬能萬智の怪物なのだ。

世界都市は合宿所である。故郷喪失の人々、コスモポリタン、インタナショナリスト、賣淫、伊太利乞食、苦力、猶太人、ダダイステン、フライマウレライ、近江商人、越後の三助、三河萬歲、あらゆる浮浪人の合宿所である。一つの「人民(フオルク)」ではない。一つの「群(マッセ)」なのだ。浮動する群なのだ。fluktuierender Masse なのだ。傳統喪失、形態喪失、靈魂喪失者の群なのだ。世界都市人は彼の隣人をもたない。隣人は蒼蠅である。金が統一者である。組織者である。金によつてこの尨大なる生活場が一個の統一個にと仕立てられるのだ。搾取が、世界都市の生活原理である。

彼は生產者ではない。本質なるものは、彼の手によつて一物だも生產されることはない。消費の生活である。世界都市は一個の消費場である。尨然たる一個の消費場である。農民の手に成りたるものが、勞働者の油が、漁夫の血が、こゝに集中され、消費される。生產なくして消費する。最小限度の勞力をもつ最大の效果を舉げるのではない。最小の勞力をもつて最大の消費をなすのである。功利主義は消費哲學である。tea-grocer's philosophy は consumers' philosophy である。今日は消費時代である。消費者の時代、消費哲學の時代である。

丸ビルを仰ぎ見よ。東京は今や丸ビルの東京である。日本は今や丸ビルの日本である。世界都市時代は丸ビル時代である。馬車鐵道がバスとなり、岩見銀山が猫入らずとなり、太田道灌の江戶が丸ビルの東京となつてから、東京は押しも押されもしない一つの世界都市である。丸ビルは東京の歷史に一時期を劃したのだ。日本の文明史上に、丸ビルの名を逸してはならぬ羅馬のコリシユウムである。丸ビルは日本文明のコリシユウムである。丸ビルが仆れる時に日本が仆れる。日本の仆れる時に世界が仆れる。意識的または無意識的に、人々はこう考へてゐるのだ。

丸ビルの東京は、日本の東京ではない。dieses Land sich verwestlicht —— 東京は西洋と化したのだ。西洋の東京となつたのだ。將軍の江戶が亡びて、西洋の東京が生れたのだ。カイ

ザアリンクの旅日記を、人々は讀まなくてはならぬ。人々が、丸ビルを仰ぎ見て、新らしい日本の輝きの日を思ひつゝある間は、日本の首都は、靈と型とを失つたのだ。靈と型とを失つて一つの猶太帝國が生れたのだ。東京は猶太帝國である。丸ビルはその首都なのだ。Ghettoempire の首都なのだ。

丸ビルは最大の消費者である。消費日本の代表者である。それゆえに日本における最大の搾取者である。搾取日本の象徴である。巨人の死像のごとき丸ビルの姿を仰ぎ見よ。吸血鬼のごときその面を仰ぎ見よ。新らしい日本は東京において要約され、新らしい東京は丸ビルにおいて要約されるのだ。再びいふ今日は丸ビル時代なのだ。

丸ビルに出入する人の數は、日日に數萬の多きに達するといはれる。一切が消費者である。消費者たらんとする人々である。最小の勞力によつて、最大の消費をなさんことを希ふ人々である。安樂椅子ミレニユウム――目的の國はこゝにあるのだ。

安樂椅子ミレニユウムを夢みて、農民の子弟が東都に上る。大學と專門學校とは幾十となく建てられて、學生の波が、神田に、本郷に、三田に、早稻田にと寄せる。洋行歸りの老いたる、若しくは若い先生が、西洋服を着て、西洋語を交ぜながら、洋行土産のノオトを讀むでゐる。幼稚園、小學校、中學校、高等學校、專門學校、大學、大學院。學校には七つの階段がある。各々の學校に、また數種の階段がある。學校に從つて、先生にも七つの段階がある。小學校の先生は幼稚園のそれより、中學校の先生は小學校のそれより、上等の先生なのだ。大學教授は人々の羨望の的である。奏任官になり、勅任官になり、親任官になる。官僚である。官僚政治である。官僚國である。官僚國の教壇のうへから、西洋學問を取次販賣する。學問は一つの職業なのだ。ソフヰストがしたやうに、今日の學者は、學問を職業とする一團なのだ。

牛津も、劍橋も、自ら有識者と呼ぶところの寄生蟲の特種階級の養成所である――ウヰリアム・モリスの言葉である。牛津と劍橋とは今や世界の各國に建てられた。日本[illegible]が大學校なり、大學校が大興となり、寄生蟲の特種階級は、世界の到るところに、養成所を拵へてゐるのだ。

彼等は自ら有識者と呼びなしてゐる。六法全書を讀み、經濟學のノオトを積み重ねてゐる彼等は、たしかに一つの有識階級なのだ。彼等の共通點は、しかし外國語を知つてゐることである。大學教授の特質は外國語を知つてゐることである。有識寄生階級の特質は、多かれ少かれ、外國語の知識をもつてゐるこ

となのだ。

西洋化の時代は外國語の時代である。インタナショナルの時代はエスペラントの時代である。エスペラントもまた外國語なのだ。今日の時代に、文明開化の時代に、志を得ようとするものは、外國語の知識をもたなくてはならぬ。一切が翻譯の時代であるからである。一切が舶來の時代であるからである。日本それ自身が舶來なのだ。ラフカデイオ・ハアンの日本が亡びて舶來日本が立つてゐる。舶來日本である。舶來日本の成功者は、舶來の言葉を知らなくてはならぬ。學者たらんとするものは、博言學博士にならなくてはならぬ。イイストレエキが去つてから、大小の博言學博士が、もろ〳〵の大學に滿ちてゐるのを見よ。「イエスは一冊の希臘語の書物をも讀んではゐなかつた。」……「最も偉大なる文人を産んだ二つの國民、希臘人と佛蘭西人とは、何の外國語をも習つてはゐなかつた。」――外國語を學ぶことは、一つの災厄なのだ。ニイチエの言葉である。文明の災厄なのだ。舶來日本の災厄なのだ。沒落人の災厄なのだ。

こゝに沒落の國がある。舶來日本は、日本ではない。西洋なのだ。亡國なのだ。靈と型とを失つて、日本は沒落の淵にと沈んだのだ。人々はそれを文明といひ、開化といふ。文明と開化とは災厄なる哉。

有識寄生階級とは、新聞を讀み、カフエに出沒し、新聞文化、カフエ文化を享樂する一團の特權階級である。新聞とカフエは、有識寄生階級の存在と沒落とを紀念する。有識寄生階級文明と、文明の沒落とを記念する。

今日は何人も新聞を讀む。朝起きて先づ新聞を讀む。朝刊よりは夕刊を讀む。夕刊はより多く末期現象である。夕刊記者はより多く沒落記者である。沒落記者が沒落世界の出來事を、あること、なきこと、取りまぜて、誇大に且つ面白く報道する。或るものは先づ相場記事を讀む。或るものは先づエロチックな記事を讀む。次いで講談、次いで小說、次で流行評論、外國電報を讀むで「新知識」たらんとするものもある。彼の政治觀も、經濟觀も、社會觀も、人生觀も 新聞によつて養成される。新聞はエンサイクロペデイアである。彼が新聞を讀み、新聞が彼を囚へる。その論說によつてではない。論說を讀むものは時勢後れである。新聞が天下の木鐸だと考へられたのは昔日の語草である。新聞は毒液であるのだ。夢遊病者のように、人の心臟に喰ひ入つてゆく。彼は人間の弱點を覘ふに機敏な動物である。それが營業方針と名づけられるのだ。營業局が編輯局を支配する。營業局はタマニイホオルである。編輯記者は傀儡である。Jumping-Jack なのだ。「獨立新聞！ 亞米利加にはそんなもの

はないのだ。……私は、私の正直な意見を、外に保つてゐるために、一週間百五十弗を酬ゐられてきた。……われ／＼は知的淫賣なのだ。」――「獨立新聞」の記者がこういふた。紐育における新聞記者の會合の席上でこういふたことがある。新聞の論說は、賣藥商の廣告と選むところはないのだ。ギブスン・バウルスのいふたごとくである。

新聞が政治を支配するといふことは、既に久しく人の言葉に上つてきた。エドマンド・バアク以來既に一世紀を過ぎた。ハアストあり、ロザミあり、ビイバアブルックあり、無數の猶太人あり、新聞帝國は益々その基礎を固めてゆく。今日は何人も新聞を敵として天下を取ることはできない。新聞は議會に代りつゝある。新聞記者は代議士に代りつゝあるのだ。

新聞記者はしかし政治を支配せんとするだけではない。智的賣淫は、今日は、あらゆる文化の創造者である。今日は、新聞文化の時代である。文明とヂヤアナリズムとは切り離して考へることはできぬ。文明における文化とは、顔と型とを喪失した文化、文化なき文化、新聞文化とカフヱ文化なのだ。

小說は、新聞時代の、唯一の、そして最高の文藝である。詩が滅びて小說が起つたのだ。誠に、マシユウ・アアノルドは豫言者であつた。詩と科學とは、彼においては、二律背反であつたのだ。科學が鬨の聲を揚げて、詩は、宗教とともに亡びたのだ。詩の廢墟のうへに小說が生れた。小說は近代に始まる。近代文明特有の形式である。印刷機械の發達、文章多量生産、文藝機械生産とともに、小說は誕生したのだ。一つの新聞藝術である。小說に階級戰はあり能はぬ。プロレタリア小說なるものはあり能はぬ。小說は、頭の頂點から足の爪先きに至るまで、ブルジョアである。ブルジョア時代とともに始まり、ブルジョア時代とともに沒落すべき運命を擔ふ。ウイリアム・モリスが將來社會においては、小說は存在しないといふてゐるのに據け、それは、先天的にブルヂョアだからである。

小說の讀者は、有識寄生階級と、そしてそれより以上に女である。近代的女性である。新らしい女である。新らしい女とは、文明女である。唯物女である。顔と型とを忘れた、理智的で、しかもエロチックな女である。職業婦人、カフヱの女、タンツヱンハウスのメエヂエンがこれを代表する。

小說はカフヱとダアメンザロンとオフヰスで讀まれる。ロオマンはロオマンである。藝術ではない。表現ではない。說明である。物語りである。凡ての小說が物語りである。通俗小說である。通俗小說であることが小說の約束なのだ。カフヱとダアメンザロンと月給取とがなくては、小說なるものを想像するこ

とはできないのだ。末梢神經によつて書かれ、末梢神經によつて享樂される。月給取藝術である。カフエ藝術、ダアメ藝術である。都會の腑餉[?]人の遊戯なのだ。デカダンの象徴、末期現象、沒落人の戲れなのだ。

職業婦人も、また一つの末期現象である。米國では婦人勞働者が八百萬に達し、小學教師の八割は女である。電車のうちに、バスの屋上に、街頭に、世界都市は職業婦人の多さに苦るしんでゐる。彼[?]は一ペニイ紙入絲間な手にして家——家ではない室である——を出で、晝はドラックで麵麭を食べて水を飲み、夜は「友」とともにタンツエンハウスに踊るのだ。「友」である。夫ではない。結婚は殆んど不可能事である。好むと好まざるとにかゝわらず、結婚は不可能事である。世界都市の有識寄生階級の間にあつては、結婚はゴオテアン・ノットを解くがごとくに難い。故郷喪失、家庭喪失、猶太帝國のコスモポリタンにとつては、結婚は苦痛である。結婚は責任と束縛だからである。世界都市人は、流動の生活者である。固定の生活者ではないのだ。こゝに「友」がある。「フロインディン」がある。Eine Kleine Freundin braucht ein jeder man——世界都市人の糧である。此所に彼所に、戀を求める。ブロンデが厭きて、ブラウネである。ブラウネが褪せてシワルツである。世界都市の戀は、朝に夕に活動する。故郷喪失、家庭喪失の戀なのだ。

カフエとタンツエンハウスとは、彼等の故郷である。家庭である。そこに友があるからである。フロインディンがあるからである。カフエとタンツエンハウスとは、世界都市の砂漠中におけるたゞ一つのオアシスなのだ。漂浪の世界人が、飲み、歌ひ、踊り、文藝を談じ、戀の葡萄を味はんとす。疲勞せる彼等の面を見よ。強烈なる刺激を求めつゝある彼等の面を見よ。無恐怖、無信仰は彼等の生活原理なのだ。不安と絕望とは彼等の收獲なのだ。思ふさま遊べ！ラブレッキイの心である。ファン・ド・シエクルである。カフエと舞踏場とは、ファン・ド・シエクルの樂園なのだ。この樂園に醉へ。沒落の時代なのだ。沒落人の黄金世界なのだ。小說も、音樂も、繪畫も、戀も、世界觀も、革命運動さへも、こゝに生れんとす。沒落人等よ、この樂園に憩へ。汝等の沒落を早めよ。「來れ、淋しき老年期、おゝこの無用なる生命を燒き盡くせ！」

酒にきたれ。飲酒は文明人の傳統なのだ。官能陶醉なくては文明の砂漠に堪へることはできないのだ。羅馬文明は、葡萄の樹とともに育ち、それとともに亡んだのだ。沒落期は理智萬能の時代だとともに、理智に疲勞したものの、官能陶醉の時代なのだ。

そこに賣女がある。賣女は都會現象なのだ。フレクスナアのいふごとくなのだ。農村に賣女はなし。農村は、食物とともに戀の自給自足所である。世界都市は、人を買ふ。賃銀勞働者、月給取り、賣女。買はれたる人々なのだ。一つの商品なのだ。世界都市では、人間の肉は商品なのだ。プラトオの時に、アテネの文明は、既に一千人の賣女をもつてゐた。羅馬では畜妾が富めるものの印であつた。小ゴルヂアナスは二十二人の妾を蓄へてゐたのだ。中世の比丘尼の代りに、近代都市は、人口增加率以上に、賣女を增した。往來に、カフエに、劇場に、舞踏場に、夜となく、晝となく、賣女の群の出沒するのを見よ。ピカデニリイを、モンマルトルを、フリイドリッヒシトラッセを見よ。Woman in scarlet の都を見よ。

たゞに數多いばかりではない。賣女は、しば〱尊敬の的なのだ。アスパシヤがペリクルスの妻となつたように、高名の政治家、流行の文士が、白拍子とともにある。希臘の女等は常に家庭に蟄居してゐたのに、白拍子は、公會の席上で、人々の喝采に包まれてゐたのだ。白拍子こそ、世界都市人の女王なのだ。沒落人の女王、末期時代の象徴なのだ。

沒落人の都を見よ、世界都市を見よ。末期時代の墓場、沒落の砂漠を見よ。文化と人と靈とは滅び盡くして世界は老年期である。人々は自然から、大地から、神から離れて、いよ〱人工的に、いよ〱外的にと移された。こゝに文明は闇である。ウオオル街に、バンク街に、丸ビルに、カフエに、舞踏場に、文明は闇であるかに見える。無邪氣なる文明人等は、甘き竪琴の前に、トロイの燒くるのを享樂しつゝあるのだ。眼あるものは見よ。沒落の日は近づいたのだ。歐羅巴は既に仆れつゝあるではないか。

七

文明は常に階級を作つてゐる。階級なくば文明なし。太陽のごとく明らかな命題なのだ。希臘においても、羅馬においても、近代においても、文明は常に奴隷とともにある。奴隷なくして希臘文明を想像することができないとは、グラントの有名な言葉であつた。羅馬では、實に六千萬の奴隷が存在したといはれてゐる。近代は解放の時代である。奴隷の解放は既に行はれて一世紀にまたは半世紀過したのである。一つの奴隷が過ぎて、しかし他の一つの奴隷がこれに代る。賃銀奴隷は近代工業帝國とともに分離すべからざる制度なのだ。賃銀奴隷なく、工業帝國なし。太陽のごとく明らかな命題なのだ。

こゝに社會主義がある。社會主義は奴隷道德である。奴隷に

よつての、奴隷の、奴隷のための道德である。

奴隷のあるところに社會主義がある。ソロンはレニンである。奴隷を解放し、土地抵當權を抹殺したのはソロンである。國債を抹殺し、共産黨の獨裁を樹立したのはレニンである。羅馬にはスパルタクスの叛亂がある。シイザアのファシッチに對して奴隷のスパルタクスがある。今日は伊太利の黑襯衣組に對して獨逸のスパルタクスがある。

社會主義運動は、文明の末期を表徴する。社會主義は一つの沒落現象である。文明が爛熟して階級の隔りが擴大し、富者が益々富み、奴隷がいよいよその數を增し、富者がたゞに富者であるばかりではなく、富者は權力となり、その權力が世襲されて貴族となり、奴隷軍が密集して一つの組織にまで意識される時に、社會主義は必然の産物なのだ。行詰まれる文明にとつての避くべからざる災厄なのだ。

社會主義は、文明の災厄である。文化の避くべからざる運命が文明であるごとくに、社會主義は文明の避くべからざる運命なのだ。

社會主義は反動である。反抗である。その道德は反動の道德、反抗の道德である。社會主義が一つの奴隷道德であるといふはこのためなのだ。

唯物的社會主義は世界を救ふことはできぬ。基督がしたごとくに、マアクスは、己の死に、世界の救濟を思ふことはできぬ。社會主義は世界の救濟者ではないのだ。唯物史觀はブルヂア史觀である。ブルヂョア時代批評である。ベエコンの時に、唯物史觀の萠芽を人々は見ることができるであらう。ブルヂョアとともに始まつたのだ。ブルヂョアとともに終るべき運命にある。社會心理學は、既に唯物史觀のために弔ひの鐘を鳴らしつゝあるのだ。

ブルヂョア時代は唯物主義の時代である。唯物主義はブルヂョア哲學である。唯物史觀はブルヂョア史觀である。科學時代、科學偏重の時代における病なのだ。金あり、ブルヂョア階級あり、科學あり、唯物主義あり。金 科學とは分離すべからざる二つである如くに、ブルヂョアと唯物主義とは分つべからざる二つなのだ。金と科學とが舞臺の中央に坐して、こゝに科學文明があり、こゝにブルヂョア・ミレニユウムがあるのだ。

社會主義は、ブルヂョアの哲學によつて、世界を救はんとす。たゞなる模倣である。たゞなる相續である。第二のブルヂョアである。こゝに社會主義の致命傷が横はる。新哲學の欠乏である。運動と倫理との不一致である。無哲學無論理である。

社會主義が、奴隷道德に始まつて、奴隷道德以上に出づること

のできないのはこのためなのだ。

地を領せんとするものは地を捨つべし。今日は地を領するものの時代である。明日は地を捨つるものの時代である。所有の道德の代りに、放棄の道德が樹立されねばならぬ。政治と經濟とはブルヂョアの遺物である。それによつてブルヂョアが立ち、それとともにブルヂョアが亡びんとす。光は政治經濟の運動のうへにあるのではない。その終るところに始まるのだ。目的の國は蠻の王國である。智の解放はブルヂョアである。目的は蠻の解放である。智の解放から蠻の解放へと行かねばならぬ。イエスは希臘科學の確立された時に生れながら、實證科學から高く超越し、唯物的羅馬の時代にあつて、高く蠻の自由を說いた。彼にとつては、貧しきものは神とともにあつたのだ。貧困、溫和、謙遜、敬虔は分つべからざる四つであつた。富、不信、兇暴、惡害は分つべからざる四つであつた。こゝに神は貧者のための復讐者であつたのだ。

社會主義運動が、新らしい時代の指導たらんとするなら、それは一切のブルヂョア觀念と絕たねばならぬ。社會主義運動は一つの經濟運動であるよりは、政治運動であるよりは、一つの宗教運動であらねばならぬ。目的の國は蠻の王國であるからである。科學的小智、行商人的史觀を超克して、高く目的の國に向つて進め。

今日は、社會主義はたゞ文明の災厄としてのみ存在する。文明の沒落を紀念するためにのみ意義がある。ブルヂョアとプロレタリヤと、ともに地を領せんとして交々爭ひ、マアクスの所謂とも仆れとなるの日がきたらんとす。文明は、文明の渴仰者の手によつて沒落せんとしつゝあるのだ。

農民とプロレタリヤとがある。プロレタリヤは最後の階級ではない。マアクスの社會主義は都會のうちにある。都會的社會主義なのだ。プロレタリヤ社會主義は都會的社會主義なのだ。農民とは何のかゝわりもない。農民にとつては第二の搾取者なのだ。露西亞について思へ。ボルシエギキの失敗はこゝにある。ボルシエギキの特色もこゝにある。プロレタリヤは都[illegible]である。文明人である。都會的世界觀が彼を支配する。彼に[illegible]民を輕蔑し、ブルヂョアを崇拜する。彼はアタイストである。生れながらのアタイストである。唯物主義は、意識的にまたは無意識的に、彼の哲學である。政治と經濟とは、彼にとつては全世界である。プロレタリヤの獨裁政治は　彼にとつては本能的欲望である。世界都市は、プロレタリヤの手によつて、その滅亡の時を繼延べんとしつゝある。カンフル注射である。露西亞のプロレタリヤは、或はプロレタリヤの名によつて、世界都

市のために、最後のカンフル注射を行はんとしつゝある。ネップなるものがこれなのだ。

ネップは、一面に農民の勝利である。農民の彈力がそれによつて反映されてゐるからである。一面には、しかし農民の買收なのだ。ブルヂョアのしたごとくに、黄金の力によつて農民を買はんとしてゐるからである。ボルシェギキの失敗はこゝに二重である。一つは農民への政治的降伏である。二つはブルヂョア經濟政策への復歸である。失敗も成功である！ レニンがしたからだ。大小のエピゴオネンがレニンを崇拜する。レニンを神にまで高める。英雄崇拜は神の禮拜に代つたのだ。こゝに政治がある。バアナアド・ショウの言葉を思ふ。「政治の術は偶像崇拜である。」

農民は最後の階級である。世界都市は、直接にはプロレタリヤを搾取する。プロレタリヤは、しかし本質的生産者ではないのだ。人間の生活にとつて、本質的に必要なものは、プロレタリヤによつて、たゞの一片も生産されてゐるのではないのだ。眞實なる生産者は、カインとアベルの子孫である。農民である。世界都市は、農民の生産した米を、肉を、酒を喰ひ、綿を、絹を、羅紗を着てゐるのだ。農民なくして都會なく、ブルヂョアなく、プロレタリヤもまたその生命を支へてゆくことはできないのだ。

世界都市は世界の農民を搾取する。世界の農民を搾取して世界都市が成立する。世界都市の記錄は、農民の血によつて書かれてゐる。

今日は世界都市の時代であると私はいふた。世界都市は、世界經濟の咽喉を扼してゐる。シンヂケエトがあり、トラストがあり、中央銀行あり、株式取引所、米穀取引所があり、法律が彼等の手によつて作られ、また彼等の手によつて行はれる。農民は、政治的にも、經濟的にも、世界都市の獨裁に服從しなくてはならぬ。こゝに商業と工業とは、農業に代つて支配する。農村いよ／＼疲弊して世界都市はいよ／＼膨脹する。今日は正にその時代なのだ。

農民と文明とは、二律背反である。農民が沒落して文明がある。文明が沒落して農民がある。世界都市時代は、世界的に、農民の沒落した時代である。農民の沒落は、今日は最早や完全である。英國では、農民は既にその跡を絶たんとしてゐる。日本でさへも、農民は枯れて死なんとしつゝある。人口がいよいよ都會に集中して、世界都市は、最早や一つの世界である。一つの帝國である。世界の農民を奴隷としつゝ、世界都市は今や世界のうちの世界である。

世界都市の危機はしかしこゝにある。人口が都市に集中して人間がいよ〳〵本質的生産から遠ざるの時は、世界都市もまた滅亡する時である。世界は今や腦病やみである。世界都市は世界の頭腦であるとともに、世界の腦病である。世界都市的經濟組織は經濟的寄生組織なのだ。寄生蟲は、木を喰ひ盡くした時に自ら仆れる。農民の仆れる時は世界都市の仆れる時なのだ。世界都市の膨脹と、農村の沒落とは、文明の沒落を紀念する。

世界不安はこゝにある。世界戰爭はこれを早めた。世界戰爭が世界不安の原因ではないのだ　世界不安は、その寄生的經濟組織のうちにある。その經濟的メキヤニズムのうちにある。文明それ自身のうちにある。世界不安は、文明不安なのだ。文明不安とともに、世界不安があるのだ。

世界不安とともに、國家不安がある。世界不安は文明不安だと私はいふた。文明不安はブルヂョア不安である。經濟不安がやがて政治不安である。階級不安である。權力不安である。警察政治はこゝに始まる。警察政治は末期現象である。巡査制度はラウリオン銀山に始まる。奴隷不安に備へんがためであつたのだ。羅馬文明がその絶頂に瀕した時に、コンスタンチンは、一萬の探偵を使つてゐた。近代の警察政治は、米國、露西亞、日本において、その絶頂に達した。支配階級の不安を象徵するのだ。

こゝにシニシズムがある。農民に皮肉はない。皮肉とパラドックスとは都會民の言語である。沒落人の表現である。都會政治、警察政治はシニシズムの母なのだ。羅馬の末期にホレエスがある。西洋文明の末期にバアナアド・ショウがある。日本には長谷川如是閑がある。末期現象である。ホレエスも、ショウも如是閑も、末期現象である。沒落時代の批評家である。彼等が文明の沒落を意識すると否とにかゝわらず、彼等自身が、沒落期の産物なのだ。彼等の理智を見よ。刄のごとき理智を見よ。シニシストは頭で歩るく動物である。信仰なく、恐怖なく、怪異なく、創造なく、詩なく、宗教なく、靈魂の代りに理智の自由を知る。批評家中の批評家、科學人中の科學人、文明人中の文明人、沒落人中の沒落人である。こゝに沒落期の人を見よ。

西洋文明沒落の時がきたのだ。現實にきたのだ。われ〳〵の前にきたのだ。眼あるものは見よ、「終りは見えてゐる。」

八

理智は最後の職分を盡くした。「行商人の樂園」は、その最後の林檎を喰ひ盡くさんとしてゐる。理智は人間の靈魂を喰ひ、唯物主義はわれ〳〵を地獄にと落とした。大地から、自然から、

食母から離れて、人間はたゞ懐疑し、たゞ所有し、政治し、權力し、犬のごとくに貪り、鐵のごとくに冷やかである。

文明に故郷なく、隣人なし。寂しきは文明の世界である。黄金の山、物質の海の間にあつて、文明は寂しい砂漠である。故郷なく、友なく、詩なく、信仰なく、たゞ懐疑し、たゞ所有する。文明人等は何處へ行かんとするや。

科學とともに理智の破産の時がきた。新らしい林檎が求められるの時がきた。新世界の創造、價値轉換の時がきた。靈魂の夜明の時がきたのだ。

羅馬の晩年に諾斯士教、新プラトオ派、マネス教があり、西洋文明の末期に接神派、心靈派、基督教科學派がある。近代文明があらゆる點において羅馬文明の復活であるように、今日はあらゆる點において、羅馬の末期にと復りつゝある。

基督教の初期の歴史を讀め。羅馬の唯物主義は、神秘的、心理的東方のために、光を奪はれた。今日もまたその時である。「印度崇拜」の時が再びきた。亞細亞が世界を救ふの時は再びきた。

世界の眼は今や亞細亞へと向けられた。文明はそこに摂取をつゞけんがために、そして次の時代は、その光に浴せんとして。

カイザアリンクの旅日記を讀め。シペングラアの「西洋の沒落」を讀め、パウル・エアンストの「獨逸理想主義の崩壞」を讀め。die höchsten Lebensformen seien die chinesisch Bauers und seiner tugendhaften Gattin. ——亞細亞靈が目ざめるの時がきたのだ。

亞細亞の西洋化ではない。西洋の亞細亞化である。西洋の智に對して、亞細亞の靈を呼びさますの時なのだ。文明を崇拜しつゝ、ひたすらに西洋を模倣しつゝ、利己主義のうちに窒息しつゝある人々よ、窓を開け！　再び食母の懐にと還れ！

火災保險金支拂から生ずる諸問題

法學博士　堀江歸一

(一)所謂火災保險問題の解決――邦人最大惡癖の暴露――地震免責約款の無價値――保險會社の態度――政府の所爲に過誤あり――契約蹂躙の惡風(二)保險問題と經濟復興との關係――國家として爲す可きの道――火保問題に關する民間の示威運動(三)政府の保險會社援助案――保險會社の經營に對する影響――諸會社に及ぼす影響の輕重――保險會社株主の地位(四)保險金の支拂と經濟社會――保險金と復興資金――火災後に於ける都市復興の原動力――燒太りは保險金のみに因らず――銀行の資金融通――世間一般の繁榮(五)我國の實際問題――保險金支拂と銀行――罹災者に對する銀行信用の不振――金融梗塞の狀況――消費に對する刺戟と不景氣――經濟復興の急を要す――經濟復興の要目

一

昨年九月の震災以來我國の經濟社會に於て、一の難問題と爲つたのは、火災保險金支拂の一事であつて、山本内閣も相當に手を焼いたが、清浦内閣も亦解決に困難を覺へ、紛糾錯綜、如何なる事と爲るや、測り知る可からざる趣きであつたが、兎に角政府と火災保險會社との間に、妥協案が成立し、震災後殆ど九個月を經た五月上旬に至つて、諸會社から一部分の保險金とも、見舞金とも、慰藉金とも、名分の明かでない金が拂出され、保險契約者亦曖昧裡に之を受取つて、保險契約に對して、持つ一切の權利を擲つこと、爲つた。政府、保險會社並に保險契約者は之を以つて火災保險問題の解決を告げたものであると云ふかも知れない。然しながら是れは我國民特有の妥協的性情から見た話であつて、通さなければならない道理や、守らなければならない權利は總て之を放擲し、又是等の道理や、權利の蹂躪されることを意に介さずして　目前の利益を欲求する。而して事を曖昧裡に付して、悔ゆる所を知らない我國民の最大惡癖は火災保險問題に於て、遺憾なく暴露されたものであると云はなけ

ればならず、又私は斯く云ふとを悲まざるを得ないのである。

元來火災保險契約に於ける地震免責約款に就ては、之を無效であるとする一二法律家の議論も世間に流布されたやうであつたが、兎に角契約の一條項として地震に基く火災若しくは其延燒に對しては、會社に於て責に任じないと云ふことが掲げられて居り、事實普通の保險料のみに依つて、地震に伴ふ火災の損害を賠償することは、如何なる會社に取つても、不可能の事であり、又外國保險會社の內には、普通保險料の外に、存外高率なる附加保險料を徵收して、地震保險の特約を締結して居る事實に徵するときは、地震を原因とする火災に對して、保險會社が負ふ可き何等の責任を有しないことは、明々白々の道理である。故に保險會社殊に諸會社に依つて組織されて居る保險協會の如きは、震災直後に於て、直に地震約款に依つて、保險金支拂の義務なきことを明にし、以つて保險契約者の誤解なからしめるのが當然の次第であり、契約者にして尙ほ此點に於ける諒解を缺いて、不法なる要求を會社に試みるならば、司法上の問題として、解決を求めなければならない次第である。

然るに火災保險金支拂問題に對する會社の態度は始から頗る曖昧なるものであつて、首鼠兩端を持するの嫌なきを得なかつた。此事たる我國の實業家なるものに、獨立獨行の氣慨なく、動もすれば政府の鼻息を窺ひ、官權に阿附して、以つて[illegible]さんとする卑劣の心情あるの致す所であつて、吾人の平[illegible]唾棄する所である。而して保險會社の態度の曖昧を極め[illegible]に、時の山本內閣は大膽と云はんか、無謀と云はんか、早く[illegible]保險問題に干涉する方針を定め、內閣總理大臣の告諭に於て、火災保險會社の如きは、平生の契約如何に拘はらず、斯る非常の事變に際會しては、宜しく犧牲の精神を發揮して、契約者の爲めに、財產上の保護に力を致す可きものであると云ふ意味の事を述べた。此告諭は其意味を推窮して、論ずれば、火災保險の契約を蹂躪し、火災保險事業に官權の壓迫を加へて、憚らざるものであつて、經濟上の關係から見るときは、此位亂暴を極めるものは、他に比類なしとしなければならない。經濟上の關係に於て、吾人の尊重せざる可からざる所のものは、自由對等の基礎に於て、締結された契約は飽くまでも當事者をして之を遵奉せしめるの一事であつて、斯くありてこそ經濟社會の基礎をして堅實のものたらしめるを得るのである。立憲國に於ては國民の一資格として、遵法的精神 (Law-abiding Spirit) と云ふことが認められる。此精神が私人間の關係に移されゝば、卽ち契約遵奉の觀念となる。憲法であれば、國民の力を以つて、之を改廢しなければならないが、法律として存在して居る以上

は、其善悪を問はず、之を遵奉するのが國民の義務であるが如く、如何に不利なる約定若しくは不利に爲つた約定であつても、一旦自己の自由意思に基いて、締結したものである以上は、之を遵守しなければならないと云ふ思想の確乎たるものがあつて、一國の經濟社會は其安定す可き所に安定するを得るのである。然るに火災保險の契約に就て、政府の取つた態度は何故であるか。總て震災當時に於ける非常の出來事に藉口して、契約の安全を蹂躙して、可なりとする。斯の如くして經濟社會の安定を期するが如き至難の業に屬するものと云はなければならない。

二

或は政府をして云はしめれば、當時人心頗る險悪であつて、政府にして保險金の支拂はれると云ふ言責でも與へなかつたならば、如何なる事變を醸したか、測り知る可からざる次第であり、政府は人心の安定を求めると云ふ政策上の見地に於て、右の如き聲明を敢てしたのであると。然しながら震災當時生活に營業に種々の苦痛を覺へた者は一般の罹災民であつて、保險契約者であると否とに依つて、其間に何等の區別の存せざりしのみならず、寧ろ平生保險契約を締結する餘力を收入の上に持たなかつたり、又は契約を締結する注意を運らさなかつたりした者こそ、大なる損害を蒙つた道理である。故に今國家が罹災民を救助して、彼等の營む經濟的復興を促進することを急務とする以上は、保險問題の如きは、政府として之を一擲する代りに、經濟復興に關する確乎たる計畫を立て、保險契約者であると、然らざるとを問はず、總べての罹災者に向つて、經濟復興の道を與へるのが國家として當然爲す可きの道であつたのである。固より斯くするに就いては、相當多額の經費を必要とし、國民に負担を加へることの免かれ難きは勿論であつて、一部罹災民に私する爲めに、一般國民に負担を及ぼす傾きを生ずるかも知れないが、本來震災に次いで彼の如き火難を生じ、東京市民や其他の人々をして慘憺たる狀態に陷らしめたことに就ては一般的に見れば、之を天の降した災禍とするを得るが、同時に國家の國民に對して施設する所國民の國家に對して要求する所に缺くるもの〻多かつた爲めであるとしなければならない。然らば震災善後處分として、國家が國民經濟振興の責に當り、國民全體が其負擔に任ずるといふことは、前後の事情に照して、當然の事であつたのである。故に政府としては、經濟復興の根本政策を大規模に樹立し、斯くして火災保險金支拂の如き一局部の問題は之を何れへか抹消し去るのが正しき手段でもあつたし、賢き方法であつたのであるが、山本内閣先づ自ら求めて火

中の栗を拾はんとし、能く之を拾はざる間に、内閣の倒潰を見るに至つたのは、今日から之を見ても、誠に見苦しき話であつたのである。

清浦内閣に至つては、火災保險問題に就て、何等の言質を與へて居らないと共に、何等の行掛りをも持たないのであるから、如何樣にも其解決に自由の手腕を揮ひ得る譯であり、閣員中に具眼の士があつたならば、火保問題の如きは之を一擲して、廣汎なる經濟復興計畫を確立す可き道筋であつたのである。無力無能なる清浦内閣に斯る根本的政策を施すことの困難なるは當然であるが、山本内閣から清浦内閣に至る間に、火保問題に對する保險契約者の意嚮に大なる變化を來したことは、見逃す可からざる事實である。即ち山本内閣の火保解決案は政友會の沮む所と爲つて不成立に終り、續いて内閣其ものゝ倒壞を告げるに至つた一方に、新に成立した清浦内閣亦議會を解散し、火保問題の形勢の逆睹す可からざるに至るや、保險契約者は政府の爲すなきを見縊つた爲めか、其れとも斯る政府は强硬なる要求さへすれば、何事でも意の如くするを得ると思つた爲めか、保險契約者は盛に群集して、政府や保險會社に向つて、種々の要求を試み、示威運動を催ほすに至つた。固より保險契約者が山本内閣以來保險金の領收されるが如く、されざるが如く、中有に引廻されて、無益の煩勞を課せられた點から云へば、契約者が直接行動に訴へて、保險金を獲得しようとする念を懷くに至つたことに對して、諒とす可き事情も存するが、清浦内閣が聊か斯る民衆の直接行動に脅かされて、保險問題の解決に努力した跡あるに至つては、將來に禍根を遺すものとして、吾人の考へざる可からざる所である。固より將來組織される内閣に清浦内閣の如き無力無能のものがあるかどうかは、一個の問題であるが、假に今後力の弱きことに於て、清浦内閣と同等又は其以下の内閣が在つたとしたならば、必ず民衆の團體的要求に會へば、直に之に服從する、民衆亦多數の勢を以つて、内閣に迫れば、其要求に確乎たる道理のあると、否とに拘らず、内閣をして之に屈服せしめるを得ると云ふ事實が今回の火災保險問題に依つて、立證された一事は政治上に民衆の團體的威力又は適切に云へば、民衆の暴力を有力なるものたらしめた一證左であつて、將來の爲めに、私の特記せざる可からざる所である。

三

然らば夫に清浦内閣の立案し、而して今回實行される火災保險問題解決案は如何なる價値を存すると認められるであらうか。政府は保險會社の資力を援助する意味に於て、貸付金を爲

し、會社をして保險金の一小部分を會社資力の許す程度を限つて、拂渡さしめることを以つて、計畫の骨子とするのであつて、支拂援助案の要點は左の如くである。

一、會社は自力出捐主義を基調とし、社會政策的に之を實行すること。

二、會社は其資力に應じ、五千圓以下の小口保險契約者に一割を出捐すること。

三、會社は保險契約者に既に聲明した自力出捐率を低下せざること。

四、援助交付金額は八千萬圓とすること。

五、最長納付年限は五十個年とすること。

六、納付加算利率は年四分とすること。

一方に保險會社側は右の援助的貸付金を交付される代償として、一割を最高限に置いて、保險契約者に對する保險金の支拂を爲すのであつて、其支拂の標準は

一、五千圓以下一割支拂。

二、五千一圓以上一萬圓まで、右超過分に對して、三分の割增を支拂う。

三、一萬一圓以上一萬五千圓まで、右超過分に對して、二分の割增を支拂う。

四、一萬五千一圓以上は五分を支拂う。

五、倉庫會社保管貨物に對しては、五分を支拂う。

こととなつたのである。即ち火災保險問題 解決が妥協に始まつて、妥協に終り、不徹底に不徹底を重ねたことは、驚く可きものであるが、斯る解決は如何なる影響を經濟社會に及ぼすであらうか。第一に考う可きは當事者たる保險會社の利害である。保險會社が政府から交付される援助金は貸付の形式に依るものであつて、會社は納付金の形式を以つて、之を返還しなければならない。而して納付金の條件としては、

第一、會社は政府より震災任意出捐助成資金の交付を受けるに於ては、助成資金交付に關する農商務大臣の命令書の定むる期間、毎年利益金中より、命令書に定むる金額を納付金として政府に納付するものとす。

第二、納付金の納付は利益配當其他の利益金處分に先だつて之を爲すものとす。

第三、會社は命令書の定むる期間、毎事業年度に於て、利益配當其他の利益處分に先だち、利益金中より、命令書に定むる金額を納付準備金として、積立つるものとす。準備金の總額は將來納付す可き納付金の總額を以つて、限度とす。

ることが定められて居る。即ち保險會社の立場から云へば 政

府から低廉なる利率の下に、資金の融通を受けるには相違ないが、納付金の形態に於て、其返還に當らなければならない。而して此負担たる、保險會社に取つては、本來擔制す可からざるものであり、準備を缺けるものであつて、之を支拂うに就ては、何等か別種の方法に依つて、財源を調達しなければならない。諸會社は何を以つて之に當るを得るであらうか。諸會社中設立以來時を經ること久しく、積立金の相當に蓄積されて居るものに至つては、此點に於て必ずしも大なる困難を感じないであらうが、新設會社であるとか、從來營業方針の放漫であつたものとか、又は他會社との均衡上、高率の配當金を株主に頒ち社内留保を乏しくして居つたとか云ふような會社は納付金の負担に大なる困難を感じ、之に當る爲めに、保險料の引上げを已むを得ざる手段として、採用するに至るであらう。然も此場合に保險料の協定が大小强弱の關係の異なる會社の間に圓滿に行はれるであらうか、又假に行はれたとした所で、保險に對する負担を重くして、保險契約の普及を妨げ、弱小會社の存立を脅かすに至りはしないであらうか。而して保險會社は斯る打擊を蒙るのも、畢竟政府の保險問題を處理する根本の方針に誤まりのあつた爲めであるとして、契約の實施期間内に、或は納付金の率を輕減するとか、或は利率を低減するとか、負担を緩和する種々の運動を試み、政府亦斯る要求に接して、之に從はざるを得ざるに至るかも知れず、保險問題は決して今回の支拂に依つて、全部の結了を告げたものと考へるを得ない。蓋し保險業の如きは、最も確實なる基礎の上に置かれなければならない、政府が從來法律を以つて、斯業に嚴重なる監督を加へる所以であるに拘はらず、基礎の薄弱なる新設會社があつたり、又營業上他に不法の競爭を試みて、自他の存立を危うするが如きものゝあることは、吾人の遺憾とする所である。然も今回の如く、政府が保險會社に向つて、課す可からざる義務を課して、爲めに會社の經營を不利なる境に導くものとしたならば、爲めに會社の蒙らんとする損害に對しては、當然政府に補償を要求するを得べき道理が存するからである。

現に右の條件に掲げた如く、保險會社は每年の利益金中から政府に納付金を爲す可きものであり、而して納付金の納付は利益配當其他の利益金處分に先だつて、之を爲すことゝ定められて居る。從來保險會社の内には、高率の配當金を株主に頒つ一方に、多額の社内保留金を爲すものがあり、隨つて斯る會社の株式市價は異常に騰貴して　放資の最良目的物を以つて、目された例もあるが、他のものに至つては、營業の成績良好ならず、配當率は一割以下に限られ、株式市價も亦拂込金額を上下する

に止まるものも亦少なしとしなかつた。今斯る會社が救濟せざる保險金の支拂を命ぜられた爲めに、政府から援助資金を借入れ、之に對する納付金は利益金分配に先だつて行はなければならないとすれば、進んで料率の引上げに依つて、利益金の增加を謀るか、强いて株主に對する配當金を減卸するか、二途の一を撰ばざるを得ないであらう。而して兩者の如き、保險契約者の負擔を加重するの故を以つて、遂に行ひ難く、行つて果して收入增加の道と爲るかどうか。殊に東京其他の罹災地の重なる建築物は多く燒き拂はれ、之に代つて、建築價格の小なるバラックが保險契約の目的物と爲つて居る今日の狀況であつては、會社の收入を增加することは、事實困難であつて、結局會社は當分株主に對する配當率を低減するか、或は資產の評價を過大にするか、孰れかの方法に依つて、納付金の支拂に當るの外はないであらう。而して是等の內、孰れの方法が行はれるを問はず、損害を蒙るものは保險會社の株主であつて、彼等の內に從來如何に保險會社に對する投資に依つて、莫大なる利益を收めた者があつたとしても、此道理なき負擔を蒙つては不公正なる取扱を受けたものと云はなければならない。私が當初から政府の保險問題に執着すること、彼の如くであつては、結局罹災民中の一部に過ぎざる保險契約者に謂れなき利益を與へる爲めに、何等緣故なき一部の人々に道理なき負擔を加へ、社會公正の關係を攪亂することを恐れたからであつて、今や事實に斯る危險に接せざるを得ざるに至つたのである。

四

然しながら火災保險問題の解決が如何に曖昧であり、又如何に不徹底であるとしても、兎に角今日の如くに行はれ、保險會社を經由して、相當の額に上る資金が保險契約者の間に撒布されるとしたならば、經濟社會に如何なる影響を及ぼすであらうか。之に對しては種々の方面から、觀察を下すことが出來る。保險金支拂に關する問題が世間に糾紛し來つた際、此支拂を必要とし、理が非でも會社をして支拂の責に當らしめなければならないと論じた人々は議論の基礎を此支拂に依つて、經濟復興に必要なる資金の供給される一事に置いた。如何にも震災直後罹災者に取つて最も大なる難事としたのは復興に要する資金の調達、容易ならざるの一事であつて、斯る場合に保險金が支拂はれたならば、如何に此點に於て好都合であらうかと云ふことは、總ての罹災者の同樣に感ずる所であつて、斯くて彼等の多くをして政府や會社に、保險金の支拂を強要するに至らしめたものと思はれる。然しながら保險金が罹災者に對して、復興資

金たる効果を生ずるのは、其全額又は之に近い程度の支拂の行はれた場合でなければならない。固より保險契約者が財産保險の契約を締結する場合に、保險金を財産價格以下に制限することは、當然の沙汰であつて、何等異とするに足らないが、我國に於ては保險金額と財産價格との間に、大なる開きが存し、前者の後者に比較して、頗る低いのが一般の例であつて、内には殆ど言譯ばかりに保險を契約したと思はれるものもある。故に物品保險にした所で、家屋建物の保險にした所で、罹災者の領收する保險金は其蒙つた損害の一小部分を補償するに止まり、更に事業を復興する資金としては、不充分の嫌を免かれなかつたのである。東京市の如き、從來幾多の區域に相當規模の大なる火災を生じたこと、敢て稀なりとしない。而して罹災後罹災地に於ける商工業の狀況を見ると、建物が新築されて、大小の商店が新面目を以つて櫛比する一方に、其れ等の商店には罹災前よりも豐富なる商品が備へ付けられて、其店頭を飾るの有様であつて、所謂燒太りの事實に接することを常とする。

然らば斯る燒太りの事相を生ずる原因は何れに在るであらうか、世人は之を以つて火災保險契約の普及、保險金支拂の確實に歸するかも知れないが、私は必ずしも斯く考へるを得ない。即ち前述の如く、保險金が損害を蒙つた財産價格の一部分に止まる以上は、保險契約者にして假令ひ保險金の全額を領收したとした所で、直に是れのみを以つてして、事業を罹災前又は其以上の規模に復興するが如き、極めて困難であると考へられる。而して實際問題として、從來多くの場合に於て、罹災者が罹災後早い時機に於て、復興の目的を達するを得たのは、兎に角保險金の領收に依つて、或る程度まで財産上の狀況を恢復するや、之を基礎として、資金を融通する銀行があり、信用を以つて取引を爲す製造業者や問屋業者があるからであり、而して罹災者に對して、銀行なり、製造業者又は問屋業者なりが斯る信用を與へるのは、畢竟一の都會に於ける罹災區域は全體に對して、一小部分であつて、他に何等の損害を蒙らざる大なる部分があり、是等の存立することに依つて、自然罹災地域の經濟的復興の速に行なはれると云ふ信念があるからである。

五

是等の諸點を念頭に置いて、我國今回の火災保險金支拂の影響に就て考へたならば、如何なる結論に達するであらうか。第一保險契約者の領收する金額は保險金の一割を最高とし、保險金の大なるに隨つて、其以下に遞減される次第である。總額に就て云へば、相當に纏まつて居るとしても、一個の受領に就て

見れば、契約した保險金の一割若しくは其以下に過ぎず、能く生産資本として活用されるかどうか、大なる疑問である。第二罹災者は昨年の罹災以來八箇月餘の期間を經過し、其間徒手空拳を以つて、暴利を獲得した者もあるやに聞くが、多くはバラツク住居を繼續したり、親戚故舊と同居したり、或は從來よりも小なる規模に於て、營業を行つて居たりするのであつて、自ら生活難を覺へて、賣喰をしたり、借金をしたりして居るものである。新に借金をしないまでも、燒失した家屋や、商品を抵當として、舊來銀行から資金を借入れて居るとすれば、燒失家屋又は商品に對して領收した保險金は自己の身に着くよりも先に銀行に對して債務を決濟する用に充てなければならない道理である。一時火災保險問題が解決されざる以上は、銀行中に破産するの已むを得ざるものがあると云ふ說が流布されたことがある。斯の如きは保險金の支拂を希望する人々が世間を脅かして以つて自己に有利なる方嚮に問題を解決せしめようとする私心に出でたものであつて、其說を承認することの出來ないのは勿論であるが、尙ほ銀行と保險金支拂との間に、如何なる關係が存するやを明にするを得る道理であつて、保險契約者の如き、保險金は領收しても、直に債務の償還に變換せしめられるに至りは、ないであらうか、一個の問題である。

斯の如く今回保險契約者の領收する保險金は極めて少額であるに過ぎない。隨つて其當業者に對する復興資金として、不充分であるのは論を俟たざる所であるが、一方に銀行の罹災者に對する信用は如何であるか。此信用にして罹災前に比較して、略ぼ同等の程度に居るとすれば金融の疏通必ずしも困難とす可き次第ではない。然しながら今回の罹災者たる、普通の事變に於ける罹災者とは全く其趣きを異にし、第一保險金の一割又は其以下に限つて、領收するを得たに止まり、資金の缺乏を感じつゝあることは、火災保險問題の解決前に於けると何等の異なる所を見ず、第二罹災區域は東京を始めとして附近の諸町村に及び、爲めに全市を擧げて經濟上沈滯たる狀況に居ること、今日の如くであるとすれば、經濟社會の恢復に依つて、個々の事業の繁昌を見る時の來るのも、自ら手間取るものと覺悟しなければならない。既に斯る二個の事情の經濟社會に存する以上は、銀行が當業者に對して、資金の融通に躊躇し、之を嚴重に制限するのは、當然の處置であつて、火災保險問題の解決位を以つてしては、到底此局面に變化を齎すに足らざることゝ思はれる。

前述の如く罹災者の昨年の罹災以來苦む所は資金の調達難であり、信用の不振であり、現金の缺乏であつた。保險問題の解

決は今や彼等に若干の現金を與へたに相違ない。然も其現金の額たる、保險金の一割又は其以下である以上は、何人に至つても端下金たるの嘆なきを得ないであらう。既に一個の端下金であつて、之を以つて自家の事業を復興する資金とするに足らず、銀行に信用を繋ぐ基礎としても、亦不充分であるとすれば、罹災者は此端下金を懐にして、何とするであらうか。昨年來窮乏の間に堪へ忍んだ奢侈的消費を行う資として、之を利用し、以つて目前の快樂を求めようとするのは、彼等の最も陷り易い所ではあるまいか。火災保險問題の解決と共に、一時經濟社會に空景氣を生ずるに至りはしないであらうかと云ふ論者は畢竟保險金の撒布に依つて、或る方面に於ける消費が刺戟されることを信ずるようである。然しながら私は此説に與するを得ない。若しも我國の現狀に於て、數億圓の外債が募集され、加ふるに其收入が内國に回收されて、物資並に勞力を需要すると云ふが如き場合には、一時的空景氣の到來を以つて、必至の勢とするのであるが、保險金の如きに至つては、其金額は何としても餘りに大であるとするを得ない。其全部が一度に消費されたとした所で、我國現下に於ける經濟社會の規模を以つてしたならば、其影響の大ならさる可きことは、之を想像するに餘りある。偶々バラツク附近の飲食店や、吳服店を繁昌させる位に止まりはしないであらうか。火災保險金が大部分の受領者に依つて、貯蓄され、其放資に依つて、株式市場を賑はすが如きことがあつたならば、經濟社會の人氣を一轉せしめるに足りるかも知れないが、斯る程度の效果は一火災保險問題の解決のみを以つては、到底之を期待するを得ない。

右の如く火災保險問題の解決は既往七八個月間を空費して、漸く成就したのであるが、之に依つて吾人は何事を望み得たであらうか。保險契約者に對して、道理なき要求を僅少なる程度に於て充たさしめたに止まり、此以外に何ものをも殘さない。若しも何ものか殘したとしたならば、其れは日本に於て何か一大事變が起つたときには、之に藉口して、總ての契約が蹂躙されるに至ると云ふ一事あるのみであつて、私は此點に就て、我國の將來に大なる危險の齎されたことを恐れざるを得ない。或は保險金の支拂が我國の經濟復興を助成する力のあるものであれば、斯る危險も亦多少忍ばなければならないと云ふ議論を生ずるかも知れないが、保險金支拂の經濟復興に及ぼす效果の微弱であること、前論の如くである以上は、我國は保險問題の解決に依つて、或る危險を將來に殘しただけであつて、何ものも之に對する利益として、見る可きの跡を存しない。政府としては既往の行掛り上、已むを得ざる所とするであらうが、局外から

見れば、誠に甚な不事であつたとしなければならない。

玆に於てか保險問題の解決如何に拘はらず、經濟復興に資する政策を確立することは　益々其急を訴へ來るのである。其要目を掲げれば、

第一、擔保品を有せざる者に對しても、其將來の營業狀態如何に信用を置いて、資金融通の道を開くこと、

第二、金利步合の一般的に低減される道を講ずること、

第三、市中諸銀行の極端に警戒を事とする營業方針を緩和せしめる道を講ずること

の三點は經濟復興に必要なる方策として、最も重きを置く可きものである。固より金利步合を低廉ならしめるには、(イ)物價を調節し、(ロ)經費を節減し、(ハ)殊に公債財源の事業費を減縮することを必要とし、市中諸銀行をして其金融方針を緩和せしめるには、(イ)貿易の逆勢を抑制し、(ロ)國際貸借の狀況を我國に有利なるものとし、(ハ)財政の金融を壓迫する弊を絶つことを必要とし、勢廣汎なる範圍に亙つて、施設しなければならない。即ち經濟的復興は一の火災保險問題解決に依つて、成就されるが如き、簡單なるものではない。保險問題の解決、保險金の支拂は單に保險金を受領した者に對し、其之を受領した程度に於て、利益を與へるに止まり、經濟的復興とは殆ど關係する所なきものと云へる。火災保險問題の解決された故を以つて、經濟復興問題を閑却するが如きことがあつたならば、啻に保險契約者以外の罹災者に對して、不公正であるのみならず、一般罹災者の苦痛最も大なりとしなければならない。

西、露西亞、東、米國との國交善後策

第二封建制からの進化的躍脫

杉森孝次郎

單なる事務員質の頭腦を外政上の樞要當局に任用するやうな政府はだめ。外政に對して無能または低能な政府を成り立たせたり、在らせたりする國民は、自己の必要と位置に對する意識、思慮を酷烈に缺いてゐるものだとして先づ深く悲觀される。

華府會議そのものが、今回の排日の論理的先件であつた。國際平和を直接目的とする國際軍備制限會議と一束に、極東問題を議するから來いといふ招介を、鵜呑みにして蒼惶として趨參したことが、わたくしどもは當時再三述べたことだが、わが國の外政無能を意味した。極東問題をば、當然、一般平和問題から識別して、それの會議の開否、開するとしてもその時、處、なほそのほかの條件等を一括して、要するに極東問題會議をば一個獨立の保留案として扱ふ當然的必要をなぜ敢然として主張しなかつたか。五、五對三、實は十對三の命令的制定も、かくして、屈從的態度の自然發展にほかならない醜觀をいよ〳〵鮮露にした事も、昨の夢ならぬ現實であつたがゆゑに、形勢は急轉直下、弱劣海軍、日英同盟なし、大震火災直後の日本を目がけて、米は、鐵砲一觸式に、先づ輕く紳士協約破棄と一喝した。

われらは、しかしたがら、一外交官や一內閣が國をあやまつたと考へるわけでは決してない。からにもない頭腦を不適の公職に就かせたり、置いたりする國民の政治的意識の低能を、批評の當の客體として痛憤するのだ。一個の僻日運の昨代と頭腦をもつてしてすら、なほかつ、かなりに强頑なる愛國の情念と志操とに於いて、「わづかの小島」、「日本一州」を舌に、口にせずにはをられなかつた、現代の日本の政治家、その國民の政治的意

識が、國内の小功名、小榮達、小競爭あたりに腐心し、埋頭してゐることは、そして、そんな小欲をおいてゐるまに、民族を舉げ、國家を舉げて、搾取、これに外部のために生けどられることは、いかにも嘆惜をあたひする事がらだと思ふのだ。

日本の自己保存、自己發達の目的を現實化する方法としては、一般的原則の特殊的適用のほかにはありえない。その一般的原則とはなにか。本質的友人主義の國内的及び國際的諸關係への擴充と、本質的生産主義の同じく國内的及び國際的諸關係への擴充だ。擴充の代はりに徹底というてもいい。

國内的關係において、工、農、勞働者、水平社、鮮、灣人、婦、兒童に對して眞の友人意識を持ちえず、國際的關係において、支那人に對してすら、またその他の諸色諸民族、諸國民に對して、先づ純眞なる友人意識を持ちえないあひだ、排日運動などこにどう現はれようと、日本人としては、先づ省みて自己を正す餘地がある。

本質的友人意識の新覺醒と關聯して、最も肝要な事がらは、本質的生産主義の國内關係及び國際關係への解放、伸達だ。

アメリカ移民の如きをば、先方からの排斥、拒絶、邪險扱ひを待たずして、當方から廢止すべきだ。南米出稼ぎなども、長計としては無價値だ。どうしてかといふに、北南兩米大陸は、國際的一大自由區たる必要と必然とを有するがゆゑに。南米の接壤國たらぬ日本が、それの實質的接壤國たる介在國を前にまはして、それを競爭者として、南米に移民發展しうる可能には、あはれむべき限度が見え透きすぎてゐる。現代及び近き將來に於いてはまだ、地理的近隣は、それほど輕視されえない一とつの巨大なる現實力だ。

隣邦支那への移民も、使役勞働移民のかたちに於いては話にならない。かくして、國境内に國民の全人口を幾らでも生存させる方法が必要となる。

いはゆる工業立國は反省と改正を待つて有價値だ。現在の工業立國論には、哲學的背景なきがゆゑに政策價がない。哲學的の代はりに原則意識的というてもいい。

國際的優質品を製産するかたちの工業立國でなくては、これへの主張は領土擴張論以上に無價値だ。

日本の現在の勞銀は上がるべくはあつても下がるべくはない。高價にして劣質な製品が國際市場に機會を見いだしえやうはない。現代のいはゆる舶來品を質において凌ぐ製作品が日本の工業の代表的特色となりうるまでは、輸出發展は絕望だ。

そんなら、どうすれば日本を國際的優質品の生産國とすることが出來るか。その方法は、國民の頭腦を深化するほかにな

い。そのことばの最も正しい意味に於いてそれを原則意識化するほかにない。模倣、まにあはせ、ここに日本の國難の全因がある。

日本には、技術はあつても科學はない。科學はあつても哲學はない。しかしながら、科學なき技術は精達せず、哲學なき科學は發明しない。不精達と無發明と、この姉妹が一家を支へうる能力には淺い、近い終局限がある。ついでながらに注意するが、原則意識と發明との間には、原因と結果との間の關係がある。

支那、印度、全アジア族にむかつて、この際、日本から、協力的自助の必要意識と目的意識とを誘發する努力を拂ふべき餘地と必要は絶大だ。しかしながら、それを啓め、それを進めるための先要事がある。それは、日本自身が、純眞なる友人意識と、純眞なる生產主義とに深徹し、全遂し、再生することだ。平民出身の功勞者をまでも華族にしてかれを優待した氣になれたり、平民出身の功勞者までもが、華族になつて優待された氣持ちになれるやうな制度及び慣習では、本質的友人意識や本質的生產主義は始まりやうがない。

日本自身の内的組織、原則、常識、學說殊に社會科學的及び倫理學的、哲學的學說の上に、破邪顯正の大斧鉞が先づ總統的、根本的に加へられねばならん。

自己を偽はらざるかたちに於いて、日本は、支那の盟友となり、支那を盟友とする眞必要に目ざめなくてはいかん。日本の開運策は、上述のかたちに於いての自己改作、それから、日支友善をほんものにする努力によつて指標される。

原料をば主として支那に仰ぐほかないから、次第にますますさうなつて行く可能が、多少遼遠な將來にわたつて確實だから、この一關係のみから考慮しても、日支間の經濟的協力は、投資、無關稅、なほその他種々の具體形に於いても實行されねばならん。

日露間の眞の友善關係が、すくなくとも日本にとつて必要であることは多く考へて見るまでもない明白事だ。適當に早く露を承認しなかつたことに、現代日本の小心卑志を眩明にかたる。しかしながら、過去は追ふべからず。日本としては、人格の本質價と行爲の社會價とを先づ國内組織の上に徹底的に保成すると同時に、支那の開發、成長、組織、強大化にむかつて誠意的努力を集中的に拂ひ、これを條件として、徐々に、確實に對露態度を積極的に且つ進捗し、且つ決定し行くほかない。

支那から隔絕し、孤立した日本は、ペリ來浦賀時及び以前の、民族的協力から遙かの下方に遠ざかつてゐた一雜藩のそれ

にも及ばない無力のものであることをわれらは深刻に意識すべきだと考へる。

、第二封建制からの進化的離脱が、内政的にも、外政的にも、日本の現代に於ける根本要事だ。

難關蝟集の日米交渉

法學博士　米田實

一

米國下院は四月十二日に於て、同じく上院は四月十五日及十六日に於て日本移民入國禁止の條項を含む移民法案を可決し以て我國民を驚かし且つ激昂せしめたのであつた、それは言ふ迄も無く「不能歸化資格の外國人の入國を禁止」すると言ふのであり、表面上日本人と言ふ文句は法律には現れて居らぬ、唯だ明治三年（一八七〇年）米國議會が制定した歸化法の中に「本題の諸項は白人たる外人及び阿弗利加出生の外人、阿弗利加血統の人に適用す可きものとす」（改正法規二千一百六十九條）と定め一般歸化法が白人及び黑人に適用せらるゝ旨定められ、爲めに其他の人種が歸化法適用から除外せられたので、白人でもなく、黑人でも無い日本人が歸化權を持たぬのに乘じて、コウ

言ふ「不能歸化外國人」てふ文句で日本移民の禁止を決定したのである、然かも考へて見ると、明治三年米國議會が此歸化法律を造つた頃は、日本人の米國移住と言ふ如きことは、問題とはなつて居無かつた、その前年たる明治二年に和蘭人檜平スネイルが約二十名許りの日本人を連れて米國カリフォルニア州に入つたのが移民として日本人の米國行の嚆矢と言はれて居るが、此小さい事實などは翌年には未だ米國立法者には知られて居無かつた、斯う言ふ事情の下に造られた右の法文が、それから五十四年を經過した今日、日本人排斥に利用せられつゝあるを聞いては、恐らくは今日大分部分地下の鬼となつて居る當時の立法者は、その思ひ設けぬ影響を生じたのを驚歎し且つ苦笑せねばならぬであらう。

そは兎も角も同法案は通過した、殊に上下兩院共に、三分二

以上の多數で通過したのだから、大統領クーリッヂ氏が米國憲法第一條第七項で與へられて居る否認權を一度行使するとしても、今日のところで兩院が三分二以上で再度通過することは疑ひが無い、我々は如何にして之に處す可であらうか、人も我も斯く心配しつゝある最中に傳へられたのは、五月七日、米國上下兩院協議會が右排日條項の實施の期日を明大正十四年（一九二五年）三月迄に延期する旨決定したと言ふワシントン府發電報であつた、此報道は不十分の事ながら、幾分我國民の氣持ちの緊張を緩めたことを承認せねばならなかつた。ところが此兩院協議會の決定も、議會では承認せねと言ふ報道が目下（五月十日）引續き到着して居る。然らば之も又々難問を發生するものと言はねばならない、顧みると、大統領クリーッチ氏は明後年迄の實施延期を希望して居たが、それが出來ず、來年三月と決定したにつきては、予はそれが大統領及上下兩院の任期を考慮に置いたものではあるまいかと思ふ。誰も知る通り、本年十一月には米國で大統領選擧が行はるゝと共に上院議員の三分一、下院議員の全部が改選せらるゝ筈であり、而して新選の大統領及上下兩院議員は三月に舊來の人々と代つて任に就く譯である、無論再選者もあらう、大統領クーリッヂ氏の如も又々共和黨の候補となつて再び大統領となるかも知れぬ、或は他の人物が擧げらるゝかも知れぬ、或は反對派民主黨の勝利に歸するかも知れぬ、孰れにせよ大統領も議會も任期が來年三月迄だとすると、それ迄排日法の實施延期をすることとし、それ以後の問題は新らしい大統領、議會の自由とする方が前の執政者、前の議會が後の執政者、後の議會に對する道德的義務と思はれたのは、自然ではあるまいか、又た一部には此議會で定めたことは、此議會の任期中に處分を終へねばならぬとも考へられたことを疑は無い、然かも予は玆に十分に此種事情の詮鑿立てをする餘裕を持た無い、唯だ餘程六箇敷いことだが萬々一、此延期案が實現するとすると、玆に予が希望し度いのは、此排日移民法規定の　施期中に行はるゝ日米新交渉の機に於て、我政府が（一）米國が日本移民の大體的中止を承諾する代りに、米國をして今回法案の如き差別待遇の形式を改めしめ、歐洲即ち英伊佛獨露等移民と同樣の形式に於て實質上現法案と同一程度の制限を日本人に加ふるの手段に出でしむること（二）我國側で右の如く移民中止に同意する代りに、已に米國に居住せる十一萬の日本人に對する平等待遇の保障を得、以て今後來る可き在米邦人の苦境を救ひ同時に日米兩國今後紛爭の機會絶滅を圖ることゝ則ち是れである。蓋し米國上下兩院協議會に說明させると、之は明治四十年（一九〇七年）日米紳士協約廢棄の爲めに兩

國間の交渉を行ふ時日を與ふる爲めだと言ふだらう、然かも斯くの如き交渉の機會發生するに於ては、我國側で之を捕へ日米移民問題のすべてを問題として、日本國交の永遠的親善質の爲めに根本的で公平な解決方法を講ずるが至當ではあるまいか。

併し唯今予の手に在る情報では、米國上下兩院が右協議會案を一旦否認した後、更らに新らたな形勢を展開し來ることは、困難になつたと見て善いやうである、從つて十中の八九、排日移民法條項は直ちに實施さるゝこととなるのではあるまいかと思ふ、そうなると、日米兩國は茲に愈、表面的に對抗的位置に立つて其主張を表白し、相爭はねばならぬ順序となりはせぬかと思はれる、所謂「三月迄の延期案」で友愛なる進行振りを見らるゝを得ば結構だが、それが出來ず、双方對峙して理窟を並べねばならぬ場合に會すると、日米交渉の地位はドンナものとなるであらうか、予は茲に少し之を考へて見度い。

二

愈日米兩國政府が相對峙して理窟を並ぶる場合を想像すると、予は本問題の解決が世人の想ふ以上困難な點があり、成功の見込が甚だ少き現狀に在ることを指摘せぬ譯には行かない。

何を以て之を言ふ、外でも無い。國と國との關係を規定し、相互臣民若くは市民の權利を主張する基礎となるものは、條約であるが、此點に於て明治四十四年の日米通商航海條約は極めて不運なる事情を含んで居る、一寸考へると、同條約は明治二十七年の日米通商航海條約よりも移民問題につき有利になつて居るやうに見える、又た我外務省も恐らくは斯くの如き見解で同條約を振り廻はさんと考へて居るであらうし、予もコウ言ふ見解を執り度いと考へて居るが、併し米國側ではコウ言ふ風には考へて居無いと信ぜらるゝ理由がある　是れ予が竊かに憂惧に堪えずとする所である、それは如何と言ふに、明治二十七年十一月二十二日締結の舊日米通商航海條約は其第一條に於て

「兩締盟國の一方の臣民或は人民は他の一方の領土内何れの處に到り旅行し、或は住居するも全く隨意たる可く、而して其の身體及び財産に對しては完公なる保護を享受す可し」

と規定し、更らに

「住居權、旅行權……に關し兩締盟國の一方の臣民或は人民は他の一方の領土内に在りて内國若くは最惠國臣民或は人民と同樣の特典自由及權利を享有し」

と定めて居る點に於て、十分に日本人の米國旅行及住居權を保障したのは結構であつたけれども、進んで第二條に入ると、下の如き但し書きを發見するのである。

「但し本條及前條（第一條の意）の規定は兩締盟國の各方に於て商業、勞働者の移住、警察及公安に關し現に行はれ、又は將來制定せらる可き法律、勅令及び規則には何等の影響を及ぼすこと無し」

即ち第一條は完全に日本人の米國旅行住居の權を保障したけれども、第二條の但書で勞働者の移住を之から除外し、米國は隨意に日本勞働者渡航を禁止し得ることになつて居たである、玆に於てか日本では米國に日本勞働者の移住を禁止する法律を制定する權利を與へたのを不都合且つ恥辱とする議論が高つたので明治四十四年二月二十一日締結新日米通商航海條約になると、この勞働者移住禁止の第二條但書は削除せられたのである、斯くの如くにして日米通商航海條約は明治四十四年に於て始めて面目を改めた觀があつたのである、思ふに我外交當局は必らずや此面目を一新した觀ある新條約を基礎とし、對米談判を進めんと考へつゝあるものであらう、即ち明治四十四年二月日米通商航海條約を、我が政府で發表して居る日本文の日米通商條約で見ると、下の如き第一條に依つて、日本人の米國旅行及び居住權を保障して居るのである。

「第一條、兩締約國の一方の臣民又は人民は他の一方の版圖内に到り旅行し、又は居住し、卸賣又は小賣商業に從事し、家屋製造所、倉庫及び店舖を所有又は賃借して之を使用し自ら選擇せる代理人を雇使し、住居商業の目的の爲め土地を賃借し其他一般に商業に附帶し又は必要なる一切の行動をなすことに付きその國の法令に遵由するに於ては内國臣民又は人民と同一の條件に依り之が自由を享有すべし」

右第一條は先づ日本人の米國旅行權及び居留權を保障し、次ぎに卸賣小賣商業に從事する權を保障し、更らに家屋等の所有權、賃借使用權を保障して居るのである、而して之に關しては最早や勞働者移住問題除外の如き規定も無いのである、從つて我日本當局としては、當然日本人の米國渡航を禁止する如き今回の排日移民法律に對して此條文違反の事項とし、大に爭ひを進むるあるも、誰か之を意外とするものがあらう。

併し乍ら斯くの如き日本側の條約論に對して、米國政府が同意を表するであらうか、異論を挾むこと無いであらうか、予は遺憾乍ら此點に於て樂觀側に立つことが出來ぬのである、之は何故ぞと言ふと、米國側の日米通商條約文面第一條は、日本政府公表の日本文日米條約第一條と容易ならざる差異を示して、其意味全く違つて居るからである　今予の手許に在る米國政府出版（goverment printing office 版）條約集第三卷（一九一三年出版）第七十七頁に依り明治四十四年即ち一九一一年日米

通商航海條約第一條を檢すると、下の如くである。

"The citizens or subjects of each of the High Contracting Parties shall have liberty to enter, travel and reside in the territories of the other to carry on trade, wholesale and retail, to own or lease and occupy houses, manufactories, warehouses and shops .... upon the same terms as native citizens or subjects, submitting themselves to the laws and regulations there established. 米人が讀んで居る日米條約は斯くの如き文面であるが、之を日本文にその儘移すときは下の如くなるのである。

「兩締約國の一方の人民又は臣民は卸賣小賣商業に從事する爲め他の一方の版圖内に到り旅行し又は居住し家屋、製造所、倉庫及び店舗を所有し又は賃借する……(中略)……ことにつきその國の法令に遵由するに於ては、内國臣民又は人民と同一の條件に依り之が自由を享有す可し」

以上の兩條約文を檢する人は、其間に頗る重大なる差異があるを發見するであらう、即ち日本文條約の文に於ては先づ第一に「他の一方の版圖内に至り、旅行し又は居住」する權利が保障せられ、此旅行居住權利にはその目的等に關する制限を附せられて居無いのである、而してその次ぎに卸賣小賣商業に從事する權利が保障せられて居るのである、然るに米國側の英文日米條約に依ると「卸賣小賣商業に從事する爲め他の一方の版圖内に到り、旅行し、居住し」とあり、之に依ると日米條約は日本人に對し唯だ「卸賣小賣商業に從事する爲めに旅行權、居留權」を保障したものであり、他種の目的に依る旅行權居住權は保障せられて居無いこと丶なるのである。コウなると、今度の排日的な移民法も、日本商人の旅行權居留權を大體承認して居る如くであるから、條約上の日本側主張が大に其力を減少することとならざるを得無い 斯くの如き日英兩文の徑庭は明治二十七年日米通商條約第一條に無かつた所で 四十四年の條約に於て獨り之を見るのである、是れ何たる慘事であらう、予は茲には右二つの條約文の孰れが正しいか、若くは日本に在る英文日米條約に至つてはドウなつて居るかと言ふ問題につきては姑らく言議と判斷を保留して置くが、少くとも右の如き程度の双方の差異あることは、實に今後日米交渉の上に一大難關を加ふるものと言はねばならない。

併し厄介な點は之のみでない、他に二つの大切な點がある、予は之を詳述するの遑が無いから、要點だけを述ぶると

「第一米國は移民問題を國内法の一問題と考へて居るから、日米條約が双互臣民若くは人民に旅行居住の自由を保障する條

項中に「國の法令に遵由するに於ては」とある文句を利用し、之に依つて排日法の制定を正當とする主張となすではあろまい乎」

是である、移民問題を國内法の問題と主張する米國の態度は、一九一一年英米總括的仲裁々判條約が問題となつたとき及び一九一九年國際聯盟規約修正の際に最も著く現はれて居る、即ち一九一〇年米國々務卿ノツクス氏の發案と翌一九一一年一月歸任した駐米英國大使ブライス氏の贊同努力で同年六月一切の國際紛議を仲裁に附する旨を約した英米總括的仲裁々判條約が締結せられたが、之が批准の爲め上院に提出せらるゝと、上院では、若し斯くの如き條約が出來ると英國を手始めとし段々他國とも造り出すことになり、同時に（一）モンロー主義、（二）南部公債問題（三）移民 問題が國際仲裁々判に附せらるるであらうと憂慨し 之が批准反對論が高まつた。其際即一九一一年八月二十四日、時の大統領タフト氏はロチエスターに於て「移民問題は内國法の問題に屬す」と述べ且つ仲裁々判に附せらるゝと無き旨を聲明したのである、尤も右英米總括的仲裁々判條約は一九一二年三月失敗に歸したが、此移民問題を國内法の問題とする主義は時の元首に依つて發表せられたと言つて善い、次ぎに一九一九年二月十四日巴里で國際聯盟規約原案が出來、大統領ウイルソン氏之を持して、米國に歸り、三月再び渡佛した後下の如き國際聯盟規約第十五條第八項の出現を見た。曰く

「紛爭當事國の一國に於て紛爭が國際法上專ら該當事國の管轄に屬する事項に付生したるものなることを主張し聯盟理事會之を認めたるときは、聯盟理事會は其旨を報告し且つ之が解決に關し何等の勸告をもなさゞるものとす」

何が故に斯くの如き規約原案修正を見た乎と言ふに、當時誰も知る通り日本全權は人種平等待遇を主張したので、米國は移民問題が國際聯盟會議に提出せらるゝことある可きを想像し、之を防止せんと考へたが、移民問題を明記するに躊躇し「當事國の管轄に屬する事項」即ち國内法の問題の除外する規定に依つて右防止策を講じたのである、然かも是れ丈米國が如何に深く移民問題を國内法の問題と解して居る乎を證明して餘りあるものでは無からう乎、是に依つて之を觀ると、米國は日米通商條約第一條の「國の法令に遵由するに於ては」の中の法令として排日的移民法律をも數へんとするではあるまい乎、コウ成ると「日本人は米國の移民法に違反せざる限りに於て旅行住居の自由を有す」と解釋せられて條約は實際に於て死文字となるであらう。勿論是れは三百代言的議論で、識者は其馬鹿々々しきに苦笑するだらう、又た我國側では斯くの如き不當な議論を是認

する必要は無いが、唯だ之も或程度に於て日米の論議上一難題たる可能性あることを記憶せねばなるまいと思はれる。次ぎに問題として忘れてならぬ點は、

「第二、日米間の條約上其他の交渉が面倒で、二國丈けの間で解決困難となれる場合、之を仲裁々判に附するのが適當であるが、此仲裁々判附托が困難ではあるまいか乎」

是れである、日米間には明治四十一年(一九〇八年)以來仲裁々判條約があり、法律問題若くは條約の解釋が外交的に處理し得られぬ場合、仲裁に附せらるゝことゝなつて居る、依つて今度の移民問題も條約の解釋問題と言ふ如き形式で仲裁々判に附せられるのが、形勢行詰つた場合に執られ得べき策であるが、之を前項に述べた所を讀まれたる人々は米國はそれが非常に米國に有利だと確信するに至らぬ限り恐らくは仲裁說に反對せずんば止まぬことを看取せらるゝであらう、それは前に述べた通り移民問題を國內法の問題とし、米國の移民問題は米國自身のみ之を決すとの立場を持つて居るからである、即ち前記一九一九年八月タフト氏は移民問題を國內法の問題と認めたばかりで無く、よしや總括的仲裁々判條約成るも、右問題の仲裁々判に附せられざるを言明し、又た米國側主張に成つた一九一九年四月國際聯盟規約修正(即ち國際聯盟規約第十五條)にも「當事國の管轄」として移民問題につき第三者の決定をなさしめざるの米國の方針を暴露して居るからである。

以上檢し來つた所に依ると、日米兩國政府が開き直つて爭ひ出すことになれば、談判が大分厄介なことをが豫想せらるるであらう。

三

然らば今日の日米交渉案は條約の文句爭ひなどで無くて、成る可く双方政府が同情と親愛とを以て本問題の妥協策を講ずることにあらう、而して之が道を開くのは所謂來年三月迄の排日法實施延期と之に伴ふ日米協議の策に在つた、若し之も華成頓急電所報の如く議會の頑強で蹉跌しそうだと言ふと、前途暗黒の觀無きを得ぬ譯である。

尤も之で萬事が駄目だと言ふのではない、兩國外交當局は常に友愛な立場に在るのだから、此間に一路の光明が殘る、但し之は雜誌締切期日に制限せられて居る本文の起草者は刻下の情報丈けで臆斷を逞うすることを避け度い、又た日米移民問題の公平なる處分策につきては、度々吐露したから、茲に繰返すの失當なるを感ずる、依つて茲には予は條約を基礎として双方開き直つて交渉する場合の難點で心に浮んだところを略述し

て、論議の責を塞いだに止まる、餘は將來形勢の進展に準じて　之を江湖に問ふこともあらうと思ふ。

大統領の決意如何

法學博士　林　毅陸

米國の排日問題最近の形勢は、一方に於て、大統領クーリッヂ氏並に國務卿ヒューズ氏の誠意ある努力の甚だ多とすべきものあるを示したると同時に、他方に於ては、議會が飽迄も非を遂げんとせることを明にした。果して孰れが眞の米國民の意思を現はすものであらうか。

實は吾人の意思を率直に言へば、大統領の妥協案なるものも、決して滿足し得べきものではない。議會の差別的排日立法其者には手を觸れず、唯實施期本年七月一日とあるを、明年三月一日迄延期し、其間に紳士協約の改定を行はんとするは、姑息の嫌なきを得ない。日本國民の要求する所は、差別的立法其者の斷然たる拒否であるのである。實施猶豫期の間に如何なる外交商議行はるるにせよ、兎に角排日法一たび正式に成立することを許されんか、差別待遇の原則は茲に確立せられ、日本國民の面上に拭ひ難き汚泥は塗らるのである。且一方に排日規定を作り置き、唯其の猶豫期間中に商議を行ふとせば、日本は宛も喉頭に劍を擬せられつつ談判するの立場に置かるることとなる。米國は侵し難き塹壕に身を潜め、日本は一木なき蕪原に曝されつつ相對陣するの形となる。餘り有り難い事柄ではないのである。

且日米間の移民問題は、明治四十年以來紳士協約に依りて處理せられ來つたのである。卽ち兩國間の外交商議の事項として取扱はれ來つたのである。今突如として之を米國中央議會の立法手段にて處理し、對手方たる日本との從來の關係を全然無視するは、明に國際信義に反くものである。若し紳士協約に滿足し難きものあらば　一應商議の手順を取り、然る後に他の處置に出づべきである。クーリッヂ氏が外交の方法に依り紳士協約

を改訂するの方針を執りたるは、右の處理に基くものと信ずるのである。併し外交商議に依るを穩當なりと認むる以上、其商議の失敗の證明せらるるに先ち、立法手段に訴ふることを否認せねばならぬ筈である。立法は立法として爲さしめ置き、同時に其傍に於て外交商議を試みんとするは、矛盾の謗なきを得ない。少なくも不徹底たるを免れない。

故に吾々日本國民としては、排日立法其者の拒否を第一に要求し、次に第二段の事として、紳士協約の改訂（若し其の必要ありとせば）に關する商議に入らんことを希望するのである。從つて米國大統領の妥協案は、日本の立場より見て、決して滿足し得べきものではない。併し米國にも種々の事情あり、クーリッヂ氏の立場の甚だ困難なるは、吾人の熟知する所である。而して困難なる事情の下に於て、同氏が日米親交推持の爲に一方ならず苦心し、妥協案を作りて之を兩院協議會に勸告するの勞を執りたるは、其好意誠に多とすべく、其苦衷誠に諒とすべきである。即ち暫く忍んで大統領の努力の結果を待たんと欲した次第である。然るに兩院協議會は右の妥協案に同意したるにも拘らず、下院は何迄も前議を固執して動かず、元老院亦同樣の態度を執り、協議會も其の態度を改むることとなり、最早此の滿足し難き妥協案すらも、其の成立は絶望となつた樣である。實に遺憾に堪へない。

米國の有力なる言論機關は、確に議會の態度を非難して居る。現に又加州に於ける大統領豫選に、排日派の巨頭ジョンソン氏は失敗し、クーリッヂ氏大勝を占め、公正なる輿論の存する所を明示して居る。然るに議會は敢て反省せず、執拗に不當不正の排日策を強行せんとす。暴戾寧ろ驚かざるを得ないのである。

クーリッヂ氏の妥協案は、唯形式に於て多少日本に讓り、實質に於て排日派の目的を達せしめんとして居るのである。然るに排日派は之に滿足せず、飽迄も差別待遇の立法に依つて、無益に且不必要 る侮辱を日本國民に加へて憚らざらんとするのである。我帝國の威信の斯くも輕んぜられ、我國民の面目の斯くも重んぜられざるは、果して忍び得べき事であらう乎。

想ふに米國の排日派は、自國の強大に就て深く恃む所あり、ジャップ恐るるに足らずと爲し、日本國民の自尊心を蹂躙し、其の怒を買ふも、意に介するの要なしとなすことであらうと思はれる。實際目下の日本は、米國に對して隱忍の外なき地位に居るのである。併し彼等排日派は、彼等自身の行爲に依りて如何に米國の偉大を傷けつつあるかを記憶せねばならぬ。彼等は日本民族に侮辱を加ふると同時に、自國を辱しめつつあるの

である。現に我國多數民衆の間に於て、米國文明に對する信用は大なる動揺を蒙らんとしつつある。米國より來る正義人道の聲は、最早尊敬の價値なきものとせられんとしつつある。其の影響は果して奈邊にまで及ぶべきや。吾人は深憂を禁じ得ないのである。

然しながら吾人は今猶排日議會の行動を以て、眞の米國民の意思を代表するものとは信ずることが出來ぬ。排日派が勢力を有する加州に於てさへ、クーリッヂ氏がジョンソン氏を破りたるの事實は全國民の信任、クーリッヂ氏の上に在るを推想せしむるに足るのである。吾人は敢て絶望はしない。米國民の眞の良心は、必ず不當不正に且非文明的にして非基督教的なる排日行爲を是認せざるべく、而して其の公正なる判斷は、早晩事實の上に現るるの機あるべきを信じたい。

されば妥協案を作りて議會の斥くる所となりたるクーリッヂ大統領は、其以上排日派に讓歩するが如きことを爲さず、斷然拒否權を使用せんことを期待せざるを得ない。日本政府との商議によりて處理するを適當と認めたる其の初一念を貫かんことを期待せざるを得ない。議會は再審議を求められたる時、三分の二の多數を以て再び原案を可決するやも測り難きも、兎に角大統領の拒否は世論の覺醒を促し、米國民をして其の眞意思を一層強く且一層明かに表示せしむるの機會となるべきを[illegible]い。今迄は大統領は議會と妥協的の地位にある。其の立場[illegible]徹底である。併し議會が飽迄も非妥協的なるの結果として、大統領に於て正義の大精神を發揮し、敢然として議會の行爲を否認し、眞正面より堂々の戰を爲すこととならば、全米國民の眞の良心は之に依つて刺戟喚起せられ、彼等をして進んで其の眞意思を發表せしむることとなるであらうと思はるるのである。

日米兩國政府の間に外交商議を開きて、何等かの解決法を立つるとするも、米國にては元老院の同意を必要とする。而して元老院は外交的方法に依ることに反對し、移民問題は國內的立法にて處理せざる可らずと主張して居る。そこに最大の困難が横はるのである。大統領の躊躇も十分了解し得られる。併し今日迄大統領及國務卿は紳士協約の趣旨を是認し、日本の自尊心を重んじて兩國の親善を傷けざるべく努力し來つて居るのである。其の努力が若し不徹底の妥協的態度以上に出づる能はずとせば、吾人は大なる失望を感ぜざるを得ない。大統領の決意果して如何。此場合我國民としては、努めて愼重なる態度を守り、且問題の根柢には、我民族の自尊自衞を切實に要求するもののあるを牢記するを要すること言ふまでもない。(五月十四日)

◎

護憲派の大捷と政局の新展開

總選擧の結果を觀て

水野廣徳

現政府者と其の與黨とが憲法の條文を盾にして如何に三百的強辯詭論を弄するも、淸浦現内閣が其の形式に於ても、實質に於ても、又其の組閣の動機より考ふるも、經緯より見るも、憲法の精神を蹂躙して民論の府たる衆議院を無視し、少數特權階級に依りて擁立組成せられたる特權專制内閣たることは爭ふの餘地なき事實である。其の特權内閣が極めて不徹底なる政治的理由に依りて衆議院を解散し、信任を國民に問ふて以來茲に一百日、特權内閣派と憲政擁護軍との間に激烈なる政戰が全國の都鄙を通して行はれた。今次の政戰は政見政策の異同に對する爭でなく、憲法の解釋に關する爭である。卽ち憲法の條文に禁止の規定なきを口實として少數特權階級の專制を認容するか、或は憲法の精神を尊重して民衆政治を擁護するかの爭であつた。一千戸に滿たざる特權階級勝つか、六千萬の民衆勝つかの政權爭奪戰であつた。民衆意識を强感する民衆の一人たる我等は、我等の國家生活、社會生活、個人生活の上に民衆政治を確立完成せんが爲め憲政擁護軍の勝利を熱願懇祈したのである。

世間或は今の政黨には憲政擁護を唱ふる資格なしと說く者ある。或は然らん、我等も同感である。從來元老軍閥官僚特權階級等と野合私通して憲政の發達を妨げ政界を汚濁したるものは實に今日の既成政黨である。中にも分裂前の政友會が元老に阿り特權階級と結び、依つて以て議會に多數を制し多年橫暴專恣を極めたる如きは我が憲政上の大賊である。自ら憲政を蔑し

憲政を傷けたる既成政黨が今更憲政擁護を叫ぶ如きは、泥棒の念佛同樣實以て片腹痛き次第である。足輕黨とか、仲間黨とかの稱ある政友本黨が護憲運動に參加せざるは、彼等が過去の罪惡を恥づる良心の作動と觀ずれば聊かしほらしき點もある。併し同黨が民衆に反きて特權内閣の草履を取り提灯を持つに至りては甚だ以て不良心と云はねばならぬ。

とは云へ、苟くも憲法の有効なる限り、苟くも特權專制内閣の存在する限り、憲政擁護運動は國家の善事である。善事を爲す者は其の人の善人たると惡人とを問はず、我等は之を賞讃し之を援助するに躊躇してはならぬ。人を以て言を棄てずとかで、我等は既成政黨過去の罪過を責めんが爲め今次の護憲運動までも非認するは餘りに偏狹である。之を賛助し、之を聲援するこそ憲政の進步發達を希ふ者の常に爲すべき義務であると信ずる。併しながら今次の護憲運動に依つて既成政黨過去の罪惡を帳消にすることは出來ない、彼等は政治上の前科者である。國民は鋭き眼を以て彼等の將來を監視せねばならぬ。

民衆、特權、兩軍の政戰は五月十日を以て決勝の幕に入つた。戰期の長かりしだけ戰も亦猛烈激烈であつた。言論戰、金力戰、叩頭競爭の外に我等の憂ひたる暴力戰すらも隨所に演ぜられ、憲政史上に流血の汚點を印した處も尠くない。選擧の公平を使命とすると稱せられたる特權内閣もいつしか誠心誠意表看板を打ち棄て、相當陰惡なる干渉を行つた形跡もある。選擧に干渉、火事に半鐘は付物と云ふが、東京では火事があつても最早や半鐘は鳴らなくなつた。選擧に干渉の聲を聞かなくなるのは果して何時のことであらう。

◎

是まで現役軍人たるが故に選擧權を奪はれたる自分も今回初めて參政の一票を得て、政治的に一人前の國民となることが出來た。自分の住まへる選擧區は議員の定員一名に對し、驚く勿れ五人の候補者が轡を並べて名乘りを揚げた。其の色分は憲政會、革新俱樂部、實業同志會、政友本黨の各公認候補と政友會賣約濟とかの中立候補とである。五人の候補者から自分の有するタツタ一票を狙つて追ひ掛け〳〵立候補の挨拶狀が來る。名士の推薦狀が來る、政見宣言書が來る、知人の紹介狀が來る、演說會案内狀が來る、「我が子に給へ清き一票」など〻歌に托した哀れつぽき依賴狀もあれば、陸海軍大將連署の威壓的なのもある。中には「所謂護憲派の主張勝を制することもあらば政治上社會上延ひて思想上に一大惡風を誘召し國民の禍之より大なるはなし」など〻「ムツソリニ」からでも來たのかと疑はる〻推薦狀も舞ひ込んで來る。此位主義主張に於て明確に相反すれ

ば誰に投じようかと首を捻ねくる必要もない。併し嘘八百並べ立てた頌德表式推薦狀よりもアッサリして却て小氣味が良い。何としても氣の毒なは郵便配達人である。

妻は臥病、女中は留守、玄關に客の聲がする。ヤリ掛けた仕事を中止して出て見ると金釦の學生君が二三人、候補者某氏の名刺を出して恭しく敬禮する。「何だ戸別訪問か、郵便函へでも投げ込んで置いて呉れりや世話が無いのに」と少し癪に障れど、「イヤ御苦勞樣。承知致しました」。學生君が有權者名簿に何か印を付け込んで行く。何と付けたか見てやりたい。流石に知識階級の多い土地柄とてか、候補者自身は唯の一度も、唯の一人も、訪問に顏を見せなかつたことを憲政の爲めに慶賀する。

初めて得たる國民の權利と義務とを最善に行使履行せんが爲め、各候補者の演說は一通り聞きに行つた。自分の區ばかりでなく時には他の區までも覗いて見たこともある。何處の演說會でも聽衆は概して靜粛であつた。青年會館式の火の如き霰の如き野次などは殆んど聞かれなかつた。候補者や應援辯士の演說は、淳々として口說くが如きあり、娓々として訴ふるが如きあり、吶々として唸るが如きあり、猜々として吠ゆるが如きあり、訊諤聽者々叱する如きあり、傍聽者に媚びるが如きあり、齒の浮く樣な提灯演說あり、嘔吐を催ふす樣な攻擊演說あり、慷慨の卓を亂打する者あり、悲憤の腕を振り廻はす者あり、吶辯の雄辯あり、能辯の駄辯あり、十人十色で聲と調こそ異なれ、說く處は殆んど悉く厚顏なる自派推薦と陋劣なる他派攻擊とにあらざれば、空虛疎漫なる慨世憂國論である。外交問題を論ずれば米國の排日を憤り、經濟問題を說けば外債の高利を歎き、思想問題を語れば二言目には國體を擔ぎ出す。遺憾ながら時弊に對する具體的政策に至りては餘り多く聞くこと得なかつた。「あれでも選良たるの資格が有るのか知らん?」と疑はれる樣な御粗末な候補者も見受けざるにあらずであつた。抑も今の代議士や候補者中自分で自分の宣言書を書き得る者が果して幾人あるであらうか。

何にしてもアレ程の依賴狀や推薦狀を出すには印刷費と通信費だけでも並ゝ抵の金ではすむまい。之に交通費や飲食費や所謂實彈射擊と稱する買收費等を加ふれば、選擧運動に何萬乃至何十萬と云ふ大金の掛かるのも無理はないと思はれた。殊に驚いたのは選擧當日投票場附近に於ける各候補者の名前を刷りたる宣傳ビラである。數丁に亘る道路の兩側には壁と云はず、柱と云はず、戸と云はず、芝土手に至る迄もビッシリ貼り詰められたる無數の宣傳ビラこそ全く紙の浪費である。昨夜まで演壇上で國家經濟、消費節約を大呼したる人達の爲すことゝは思

へない。兎に角今の選擧は金と勞力と時間と御辭儀の浪費である。選擧費用が國庫負擔にならざる限り貧乏人は忘れても近づくべき處でない。斯く多額の選擧費を使つた上、否使はされた上、多くの候補者は戸別訪問とかに引き廻はされて、有權者の飼犬にまで愛嬌を振り蒔かねばならぬ。晝も夜も演說會に引き出されて吶辯の汗を衆人の前に絞らねばならぬ。全く以て物好きや道樂でヤレる仕事ではない。或る氣の小さい候補者は投票の濟む迄は道を歩いても氣が引けて眞ん中は通れないと云つた。全然罪人心理である。是れだけの金を費やし、是れ程の厭やな思をして候補に立つ以上、幸に當選せばチツトやソツトの惡事を働くつも無理はないと寧ろ同情に價する。選擧界を此に至らしめたのは抑も候補者が惡いのか、選擧民が惡いのか。何れにしても政界革新の行はれざる限り立憲政治の前途は心細い。日本の有產階級と納稅階級とは明らかに立憲政治の落第生である。彼等の參政權を奪ふて今度は無產階級を試驗すべき順番である。

◎

護憲派勝つか、政府黨勝つか、民衆軍勝つか、特權軍勝つか、全國一千何百名かの選良候補者の運命を包める投票は今正に開かれつゝある「泣くか」、「笑ふか」、幾多の悲劇喜劇は到る處で演ぜらるゝであらう。當れば馬鹿でも阿房でも國家の選良として都大路に肩で風を切り、落つれば無理算段した借金の尻始末に窮して夜逃げする者もある。代議士となるか、詐僞師となるか、選擧も可なり大きなバクチである。

開票の全結果はまだ判らない。併し唯今までに判明したる成績より推せば、我等の豫斷したる如く護憲軍の大勝に歸した。第一黨の榮冠が憲政會に落ちよと、政友本黨に落ちよと、夫は我等に取りては問題でない。護憲同盟軍が勝ちさへすれば我等の目的は達するのである。特權内閣を信任せざる護憲軍が勝ちたる以上、清浦總理にして憲政の本義の何たるを解するならば、潔よく内閣の城を明け渡して反對派に讓るべきである。必ずしも特別議會を待つて詰腹を切らさるゝの愚を演ずるの必要はない。併しながら老人の癖に政權に戀々として内閣一日の長命を貪らんが爲めには、組閣の大使命たる「選擧の公平」をさへも破棄して干涉壓迫を敢てしたりとの評ある現内閣が素直に退却するや否やは今日尙ほ大なる疑問である。由來奸策陰謀は官僚政治家の最も得意とする處である。國民は護憲派の勝利に氣を弛むる事なく、特權内閣を葬つて政權を民衆の手に囘復する迄は奮鬪を續けねばならぬ。惟ふに清浦内閣は買收、誘惑、脅喝等種々の手段を盡して中立並に護憲派議員の誘拐に力めるであら

う。併しながら選擧の大勢より察すれば政府如何に藻掻くも、如何に足掻くも、到底多數を制し得るの望みはない。即ち清浦內閣の沒落は最早や既定の事實である。清浦老如何に筑紫態度の雜血を有するも、再度の解散を斷行するの暴逆は敢て爲し得ぬであらう。今次の選擧に於てすら其の赤熱期に入るや各所に血の暴行が演せられた。再度の解散の如きは正に是れ內亂の挑發で革命に急ぐの途である。

清浦內閣沒落の時期の如きは最早や多く論ずる程の問題でない。既に宣告を受けたる死刑囚、長くも特別議會までの命である。唯議會前に潔よく自決するか、議會に於て打首に會ふかの相違である。そこで問題は何人が次の內閣を組織するかである。先づ第一に來るべき政變に於て元老なるものが如何なる境遇に立つて如何なる行動を執るかは興味大なる問題である。清浦內閣推擧の失敗に依つて元老なるものは內閣製造試驗に既に落第したのである。豫期せざりし政友會分裂の奇功によりて其の失敗の責を帳消することは出來ない。舊例を重ぜられ元老優遇の聖意を以て縱令御下問ありとするも、元老にして苟くも責任を感じ時代を覺り、憲政有終の美を濟さんと欲する以上、宜ろしく「老軀其任にあらざる」の故を以て奉答を御遠慮し、清浦首相をして隨意に後任者を奏薦せしむべきである。我等は國家の功臣として元老を尊敬する。併しながら今や我等は元老に依つて內閣を製造して貰ふ程に小供ではない。若し彼等元老にして何時も政局に干渉するならば國民は憲政の發達を害するものとして彼等を敵視するに至るであらう。我等は最早や我國の政界に元老なるものゝ必要を絕對に認めないものである。

扨て然る時清浦總理は後任首相として何人を推擧するであらうか。再度の解散を避けんと欲せば、政治の常道として護憲派第一黨の黨首を推するの外は無い。而して護憲派第一黨が憲政會たることは最早や疑ふの余地がない。待てば甘露の日和ありで、十年不遇苦しく逆境に沈淪したる加藤憲政會總裁の頭にも熟柿が落ちて來た。加藤總裁が如何にして如何なる內閣を造るかは我等の關知せざる處である。護憲三派の聯立內閣可なり、協定內閣可なり、單獨內閣亦可なりである。我等は唯國民の實生活に沒交涉なる少數貴族の手慰みに成れる特權內閣を倒潰して、政權を民衆の手に奪回するを得ば我等の素志は達するのである。其の加藤高明內閣なると、高橋是清內閣（普選を斷行するならば）なるとは問ふ處でない。憲政會と云ひ、政友會と云ひ、普選問題の行懸りを除けば其の主義に於ても、政綱に於て

も唯僅に用語の相違に過ぎずして、政策的にも、思想的にも何等の差異を認めない。此際我等の望む處は憲政會も第一黨の調子に浮かれて政權獨占の野望を逞しくすることなく、革新倶樂部も何時までも感情に捉はれて偏狹排擠を事とすることなく、政友會も從來の行懸りを捨てゝ普選の卽行に贊成すべく、三派結束を固くして、協力協調以て元老の政界驅逐と貴族院の改革とに向つて邁進せんことである。否らざれば折角擁護せられたる憲政も復び逆轉して第三憲政擁護の叫びを舉ぐるの不幸を見るに至るであらう。若し夫れ政界一部に唱へらるゝ憲政、政友本黨提携說の如きは護憲の精神に背反し、政治の道義に悖戾する罪惡行爲と云ふべく、萬一憲政會にして特權内閣の番犬たる政友本黨と苟合する如きことあらば、折角得たる國民の同情は忽ちにして消失するであらう。我等は憲政會の滅亡を惜します、唯憲政の逆轉を憂へる。世上更に傳ふる處に依れば後繼内閣と第四次超然内閣の出現を說く者がある。或は權兵衛伯しての再起と云ひ、或は義一大將の擡頭と云ふ。日本の政黨如何に無氣力と雖ども、日本の政治家如何に無自覺と雖ども、護憲の叫尙ほ高き今日よもや超然内閣や軍閥内閣の下に膝を屈することはあるまいと信ずる。萬一にも有りとすれば我等は寧ろ憲法の中止を叫ばねばならぬ。憲政の名のみを與へて其の實を行はさる憲法ならば。有つて無きに如かざる無用の長物である。要するに清浦特權内閣の沒落は既定の事實である。而して後繼内閣は必ず護憲派である。否な護憲派であらねばならぬのである。

◯

目前に迫まれる政變に就きて詳述することは易者の仕事である。我等は唯護憲内閣の出現を確信して居る。本誌の刊行せらるゝ頃には或は既に新内閣が成立して居るかも知れぬ。我等は寧ろ稍や遠き未來に於ける我が政局に就きて考察するの必要がある。多年衆議院に絕對多數を擁し、貴族院の研究會と相呼應して我が政界を縱斷し、專恣横暴幾多の罪惡を重ねたる政友會の分裂は、我が政界革新の爲めに誠に慶祝すべきであつた。政友會をして不自然に尨大ならしめたるは元老並に貴族院の罪にして政友會罪惡の一半は慥かに元老や貴族院の一派が其の責に任ずべきである。是れ我等が元老の政界驅逐と貴族院改革の必要を唱ふる理由の一である。左れば將來元老並に貴族院の不純分子が其の特權を亂用惡使して一黨一派に私せざる限り、或る一黨が衆議院に絕對多數を占むるが如きは、向後の政界に於て到底再び見ることは出來まいと確信する。假令二大政黨の對立が議會政治の妙諦であるとは云へ、我が國民の如く理性より

も感情に囚く、道理よりも情實を重んずる國に於ては、之が完全なる運用を期することは困難である。官吏も、政治家も、一般國民も、政治的訓練と政治的節操との乏しき我が國に於て一政黨が議會に絕對多數を占むる如きは、假令政局安定の上に幾分の効果ありとするも、動もすれば權勢を亂用して政治の溷濁と政界の腐敗とを招徠するの危險がある。政策の過誤は別とし、今日國民思想の不安と國民精神の荒廢とは主として政友悪政の結果である。此の經驗に鑑み國民は一政黨の過度の膨脹を抵制せねばならぬ。而して政友會の分裂したる今後の政界は、相對立せる數黨の離合集散に依りて政權の移動が比較的頻繁に行はれるであらう。若し夫れ普選實施の曉に於ては更に小黨分立して政變は一層頻繁となり、政爭は一層強烈且つ眞面目となるであらう。而して先づ現はるゝものは勞働黨と無產黨とである。斯くて在來の政黨は漸次分解作用を遂げ、經濟的には有產と無產とに分れ、思想的には右と左との對立を見るに至るであらう。此處迄進まねば議會政治は本當でない。

今次の總選擧に於て護憲同盟軍は見事なる大勝を博し、特權內閣と其の與黨とをして顏色なからしめた。單に選擧の結果より見れば我國民の政治意識と政治思想とは頗る進步したるが如く考察せられる。併しながら一たび選擧界の內幕を窺へば其の政治意識の幼稚と政治思想の低劣とは誠に歎くべきものがある。

西洋人が嘗て日本の議會政治を評して猿の人眞似と言つたが、今にして思へば當らずと雖ども遠からざるの感がある。地方に於ける政黨の支部なるものが候補者を選定する主要條件は主義政見人物よりも運動費の多少と肩書とである。黨派の離合は護憲の大義に依らずして唯利害と感情とである。選擧競爭上、護憲派の同志打は或は已むを得ずとするも、護憲派にして同盟に裏切り特權內閣與黨と握手せるもあれば、御用黨候補を後援せるもある。地方心の強きは尙ほ恕すべしとするも、其思想の陋きに至つては全然奴隷根性である。地方出身大臣を立てることが國家の憲政を擁護することよりも尙ほ一層なのである。之では憲政も糸瓜もあつたものではない。況して憲政擁護に於ておやである。今度の總選擧に偶護憲軍が勝利を得たるは果して憲政に對する國民の自覺に依るものであるかは頗る疑はしい。思へば政界の黎明は尙ほ甚だ遼遠の感がある。何時になつたら議會は物言ふ動物園でなくなるであらう。代議士の選擧が競馬や相撲の如く、有產階級の遊戲であり、有閑階級

の閑潰ぶしであり、又選擧ブローカーの金儲仕事である間は、如何に憲政擁護を叫んだとて政治の眞の進歩も革新も到底望まれない。政治を生活と實感する無産階級と政界汚濁に染まざる青年とが政治に參加するに至つて、始めて選擧が眞面目になるであらう。此の意味に於て我等は普選の即行を主張する。若し普選實施の後尙ほ政界の革新が出來ぬならば、其時こそ我等は更に「憲政尙早」を叫ぶであらう。

年初以來世界多くの國に於て總選擧が行はれた。英國に於て、獨逸に於て伊太利に於て、佛蘭西に於て、而して日本に於て。さて英國に於ては勞働黨が古き歷史を有せる自由黨を蹴飛ばして第二黨に躍進し、自ら內閣を組織して世界勞働者の爲めに萬丈の氣を吐いて居る。然るに日本には勞働者の政治結社さへまだ造られない、ファシスチ治下の伊太利は語るに足らず、獨逸に於ては微溫の社會民主黨飽かれて共產國權の兩極黨が大に勢力を加へた。國民政治意識の澎湃たる證である。我が國には社會民主黨すらもまだ生れない。佛蘭西に於ては社會黨大勝して軍國主義のポアンカレー內閣は將に潰れんとして居る。要するに世界の政潮は保守主義より自由主義へ資本主義より勞働主義へ帝國主義より社會主義へと、駈足を以て進みつゝある。社會主義の大本山露國は勿論、獨逸も、英國も、佛國も、今は悉く社會主義の天下である。然るに世界五强の一たる大日本帝國に於ては今尙ほ社會主義と國賊とが同一に取扱はれて居る。時代後れの憲政擁護などの賑ふのも或は柄相應のところかも知れぬ。誠に光榮の至りである。國家の體面とか面目とかは獨り對外問題ばかりではあるまい。夫にしても護憲派が勝を制して政府黨常勝のレコードを破つたことだけは僅かに政治上の一進步であると民衆の爲めに祝意を表する。（一三、五、一二）

清浦內閣の失敗と今後の趨勢

文學博士　三宅雪嶺

明治二十三年初期議會以來、總選擧毎に反對黨の勢勁く、三十一年、憲政黨として絶對多數を制し、內閣を取つて代るに至り、引續いて其の絶對多數黨が二分し、憲政黨及び憲政本黨となり、前者が政府に接近し、種々變遷して政友會と改め、漸次擴張し大正九年絶對多數を制し、反對黨に於いて如何ともし得ない次第に立ち到つた。それが本年二分し、政友會及び政友本黨となり、後者が政府黨として失敗し、政府黨たる事が必ずしも總選擧に贏を得る所以でない事を明かにしたのは、二十六年來の慣例を一變して居る。前に最大政黨が分裂して政府の勢を勁くし、後に最大政黨が分裂して反對黨の勢ひを强くし、それが各々本黨といふものを出現して居る所も面白い。

其の本黨が前に反對黨、後に政府黨たりながら、失意の位置に置かれるに於いて似て居る。廻り廻つて此處に至るとは、政界の沈滯に飽き果てた人に幾分の興味を唆らずに置かぬ。前に政友會が續いて政府黨とし多數を制したのでなく、大隈內閣の下、一敗地に塗れたが、內閣の與黨で後に憲政會を形造る所のものが多數を制し、內閣を天王山とするに於いて變りが無い。總選擧毎に政府黨が勝つ可きものと定まり、長い物に捲かれろと云ふ諺の爭ひ難きを認めるを餘儀なくされた。それが最近の總選擧で根柢から引繰り返つた事、近來の痛快事と感ぜられる。

種々の事情が寄合つての事ながら、元老の勢が以前と違ひ、內閣の勢も以前と違ふのが頗る與つて居る。以前と違ふのは自然の變遷にせよ、當事者其の人の上で明かに力の減じたのを知り得られる。前の元老に較べ、今の元老は、何と云ふ弱い者ぞ。前の首相に較べ、今の首相は、何と云ふ弱い者ぞ。清浦子が樞相として山縣大御所の後繼者となつた時、聊か不似合と思はれつつ、多年の經歴があり、夫れ相應の力あると察せられ、首相としても或る期間何とか押切り得やうと云はれた。併て內閣組織に失敗しても、それは大事を取つての事であり、愈々お受けするとなつて、相應の成算あると考へるのも無理はない。研究會が献立したとしても、政友會を二分し、本黨なるものを第一黨にし、之を與黨とする所、意外に手際の鮮かさを示すともいはれた。其の調子で衆議院を解散し、總選擧に臨めば、やはり政府黨として多數を制し得せしめるかに見えた。組閣こそ難かしけれ、第一黨とするに難くなささうであつた。

然し實は幾年かの習慣でさう思はれたのであつて、內閣の間に於ける威信が著るしく減じて居る。今に始まつたのでなく、高橋內閣が瓦解し、加藤內閣が成り、山本內閣が成り、續いて清浦內閣が成るまで、內閣の基礎の弱味が冥々裡に知れ渉つて居る。山本內閣が何程の事を成し得たか、普選斷行を標榜し

ただけでも多少の力を發揮しようと思はれたが、それが突發の事件で仆れた後、清浦内閣が何處となく影の薄く見えるのも、是非が無い次第とする。有り體に云へば、清浦の出づべき幕でなく、柄でなけれど、他年の經驗で其の場を過すたけの事を爲し得さうに思はれた者、それが出來なんだとは、よくよくの事である。後から顧れば當り前の事であつて、内閣員も今更ら氣付いた所があらう。單に政府黨と云ふたけで多數を制す可き勢が變つて居るのを察しねばならなかつた。

前に地方官は政府黨を援助せねばならず、援助せぬとか、援助しても手緩いとか云ふのでは、無雜作に左遷又は馘首された。其の處分が覿面で、頗る畏るべきを覺える。司方官は獨立の筈であつて、上官の覺え芽出度なければ昇進する事が出來ず、昇進を欲せば長官と衝突を避けるを要する。其處に政府黨たるの利益あつたが、清浦内閣となり、地方官が長い事ないと思ひ、餘計な忠義立てするよりも、内閣の標榜する通り取締りを嚴正にするに如くはないとする。よもやそれで位置を奪はれるやうな事もなからうと高を括つて居る。水野内相は隅から隅まで地方官を知り拔いて居つても、首相の威力で處分し、其の威力を藉らねば何程の事をも爲すまいとする。清浦首相とて、有力なる首相の下に内相となれば、時に辛辣な腕を揮ふを辭しまいが、自ら大政の衝に當つては、離れ業を敢てするに[illegible]ずに居れぬ。老いて鑊鑠と云ふものの、いくらか後生心も出で、無理を通す氣にならず、少しは政府黨の爲めに手心を加減するもよく、選擧干渉の露骨なのを避けねばならぬとする。内閣それ自ら時の必要に出で、總選擧を嚴正にし、何黨が多數を制するを見ようかと云ふのは、口先きのみでなく、幾分か[illegible]に思ふ所があらう。思ひたくなくても思はねばならぬとしよう。首相が其の了簡では、内相も思ひ切つた事をする譯に行かぬ。本來大浦流と違ひ、立憲・非立憲の區別を知り、干渉の疑を避けようとし、地方官もそれならばと手控へするやうになる。

政府黨が多數黨と定つて居つた間、實業關係の金滿家が直接又は間接の援助を望んで其加金を出したが、内閣が何うなるか知れず、多數黨となるかも覺束ない政黨に奉公し甲斐ないやうに心得、政府黨が評判程に金が無く、案外に遣り繰り算段せねばならなくなつたりする。政府黨員として本黨側に比較的金持が多く居るにせよ、三井三菱に較べて何程いものでなく、寄せ集めたとて知れた額に止まる。特殊銀行會社から都合出來るにしても、後繼内閣で訐かれる恐れがあり、思ひ切つた事をする譯に行かぬ。候補者及び運動員の内には、本黨として金の成る木を持つて居るやうに心得、必死に奮鬪するよりも先づ金に依

頽するに傾き、思ふ樣に金が出なければさう云ふ筈でなかつたと云ふ事になる。政府黨が反對黨なる憲政會に運動資金の豐かなのを見て羨むとは、變れば變つたと云はねばならぬ、

政友本黨は政府黨として氣が緩み、其の割に金が豐でなく、初めの百五十名より三十も增さうとし、却て逆に三十を減ずるやうになつた。油斷大敵と云ふが、其の甚だしいのがいろいろある。盛岡市で高橋政友會總裁を落すに力を注ぎ、力を用ゆべきに用ひなんだなど、何とも云ひやうがない。政府黨たる事が必ず萬能と云へぬ事を明かにするの利益あつたと云へば、さうも承知して宜からう。

政友會も本黨の比例で減じたけれど、百以上を維持し得たのは、決して失敗と云ふ事は出來ぬ。寧ろ相應に鬪ひ得たものとする。政府黨として膨張したのが、反對黨として何處まで縮少するか、疑を招いて居つたのが、彼の如き程度に止め得た事は、外見よりも力を貯へて居つたのに因る。必死の働きで奔走した所、本黨の氣の緩んだのと違つて居る。金の綫が切れたやうで、本黨で察したほどに切れず、割合に兵站部を整へるを得た。之も清浦のお蔭と云へば云へぬでなく、一層腰の强い首相の下で更らに苦しんだらう。

何と云ふても今回の總選擧の成功者は憲政會であつて、殆と枯木に花の如く賑はつて居る。他の政黨政派が皆減員を餘儀なくされたのに、獨り憲政會は一躍四割以上も增員するを得た。金は廻り持ち、政權も廻り持ち、今は憲政會の運が向いて來て居る。若し其の增員が政府黨より奪ひ取つたならば、更らに稱すべきであるが、同志の護憲派よりも取つたとあつては、多少自ら警める所なくてはならぬ。たださへ少數の革新俱樂部より挘ぢ取るが如き、餘り好い氣持ちせぬであらう。

憲政會が著るしく增員したのに、革新派が減員したのは何と云ふ事か。運動費が潤澤でなかつたと云ふ所もあらうが、護憲の旗を押立てて、せめて從來の數を維持し得さうなのに、さう行かなんだのは遺憾の次第とせずに居れぬ。それでも革新派が優に交涉團體として存續し、實業同志會が交涉團體たるを得ぬ所一應同志會の失敗とすべきであつて、實業の本場なる大阪で、三人が最高點を以つて當選し、他にも有力なのがあるのは、來に希望を繋ぐに足らとぬせぬ。實業同志會が財政を初め政治を革新するの目的を以つて起ちながら、本黨の附屬物の如く見られたのは、少からぬ損失を受けて居る。其の首唱者は他の如何なる政黨政派よりも革新の急先鋒であつて、唯之に追隨する者のうち不純な分子のあるのを憾まれて居る。會員は少いけれど、議會に多少の波紋を起すと待ち設けられるが、何ういふも

のか。

最近の總選擧に關し、第一の失敗者は清浦內閣であつて、解散の恥を上塗りして居るが、故意か故意でないが、比較的選擧干渉を强くしなかつたのは、總選擧毎に干渉あると定まつて居つたのに對し、好例を示したとする。いつその事絶對に干渉の跡を絶つたらば、更らに賞賛を値する。憖じつか幾くらか干渉がましい事をしたので、折角の褒め所をも打消すやうになつて居る。今後政局が如何になるべきか、內閣が總辭職するの外なく、新內閣に就て噂取り取りなるが、六月二十五日臨時議會を召集する所、それまでに何とかする心組みと思はれる。今の所、後繼內閣は頗る簡單なる問題ながら、之を復雜にするやうな試みがあり、中にちよつと人をハラハラさせるやうなのもあらうと思ふのは餘計な事か。

横から見る

室伏高信

○

總選擧は在野黨の勝利に終つた。在野黨の勝利は、日本の選擧界では、一種の不可思議事である。あるものはこれを言論の勝利ともいひ、あるものは護憲運動の勝利だともいひ、在野十年の憲政會に對する國民の同情だともいはんとしつゝある。

今度の選擧も、黨派心を離れてゐるものから見ると、しかし平々凡々である。一つの不可思議事は、政府の選擧干渉が、甚だ不充分であつたといふことである。政府は何ごとを恐れたかは知らない。新聞なぞが口矢釜ましく選擧干渉を口にしたにもかゝわらず――またそのために――實際は、干渉らしい干渉は、殆んどこれをしなかつたかに見える。

清浦內閣は、そのはじめに、選擧公平を標榜した。その公平をやつたのかも知れない。愚ろかなことである。公平な選擧は

選擧ではない遊戲である。政治的遊戲である。公平な選擧を眞面目に考へてゐたなら、はじめから選擧をやらなかつたにしかないのだ。國民の一人だつて、清浦内閣なぞに同情するもの、心から贊成するものはないからである。

選擧は一つの戰ひである。選擧を行はんとするなら、戰はんとすることである。投票なる制度をとほして、國民なるものを征服せんとすることが選擧である。手段は、この目的のために使へる。政治家は、政治家たらんとするものは、手段を選むではならない。手段を選むのは政治家のことではない。政治家から手段を除いたなら、政治家ではないのだ。凡ての政治家は、ジエスキットである。目的は手段を正化するのだ。選擧「公平」とは、自己を欺き、世間を欺かんとするものであり、そして世間の何人をも欺くことはできないものである。「公平」は政治家のことではないのだ。公平なるものは神である。神のみが公平である。政治家は、神から最遠の距離にある。神の原理は放棄である。政治家の原理は權力である。マハトギイアが、凡ての選擧の動機である。これなくては、政治家もなく、選擧もない。公平無私の世界では、選擧もなく、政治もない。選擧も政治も不必要なのだ。ゼウスや、ミネルワや、ミユウズ、バッカスや、もろ〳〵の神がつどひにつどつてゐる世界では、政治も選擧も、無用の長物なのだ。從つて選擧された神もなく、政權を掌握した神もないのだ。丁度公平な政治家なるものがこの地上になかつたように。

清浦内閣は、選擧干渉をするほどに有力でなかつたのだ。一つの屬僚内閣では、選擧干渉をするほどの力もないのだ。選擧失敗の原因もまたこゝにある。

在野黨が勝利を占めたのは、在野黨が輿論を代表したからではない。輿論なるものは存在しない。從つて世界の歴史上、國民の意見が一致したことはない。一致した意見は意見ではないのだ。一致せざるがゆえに意見である。一致した時は、政黨もなく、政治もなく、選擧もない。國民の意見なるものが——若し民意なるものがあるとしたら——一致せざるものであるがゆえに、政黨がこゝにあり、政治がこゝにあり、選擧もこゝにあるのだ。如何なる政治家も、如何なる政黨も民意なるものを代表することができないがゆえに、こゝに政治家があり、こゝに政黨があるのだ。

政黨は黨派を代表する。政黨の代表するのは國民ではない。國民なるものなく、輿論なるものなく、これを代表するものはありえない。政黨の代表することのできるものは、たゞ黨派心である。

黨派心は妬嫉と貪欲とから成立する。政黨は嫉妬と貪欲とから成立する。ブルヂョア時代は嫉妬と貪欲との時代である。こゝに政治の形式としての政黨があるのだ。輿論なるもの――それが存在するとしたら――と政黨とは、二律背反なのだ。一つは神であり、一つは悪魔である。人間のうちに潜んでゐる悪魔がブルヂョア時代を造り、その時代の政治形式として政黨なるものが存在するのだ。政黨は組織された悪魔なのだ。

「輿論」なるものは、今日は新聞と買收とである。新聞の數種、中央都市の新聞閥が、筆を揃へてあるものを攻撃し、若しくはあるものを擁護する時に、輿論がそこにあると新聞記者がいふのだ。それがしかし選擧の結果において反對が證明された時には、政治家が、輿論は我黨にあるといふのだ。こゝに輿論は新聞から買數へと移つたのである。否、新聞それ自身が一つの買收である。政黨も新聞も、一つの買收である。買收なく政黨なく、買收なく、新聞なしである。

新聞が有權者を買收したといふのではない。新聞が政治家に買收されたといふのでもない。買收された新聞はある。某々の新聞が、某々によつて買收されたといふことは私も聞かないことはない。東京でもそうである。大阪でもこのことがある。地方新聞は、大部分政黨の翫弄物なのだ。買收された新聞は、しかし有力新聞ではない。政黨の機關新聞は、日本では、二流三流、若しくはそれ以下の新聞である。日本の新聞は、外國のそれとは違つて「公平」である。清浦内閣と日本の新聞とは、ともに不偏不黨である。王道蕩々たるがためではない。新聞が一つの企業であるからである。新聞は、今日では、たゞに資本家の側にあるばかりではない。新聞それ自身が一つの資本家である。大資本家である。大資本家が新聞を買つてゐるのだ。こゝに社説なるものがある。資本家の財布から社説が生れるのだ。新聞記者が書くのではない。財布が書くのだ。月給を受取ることによつて、新聞記者は、彼自身を資本家に賣つてゐるからである。

大新聞は概してリベラルである。リベラルであることが時代に投ずるからである。資本主義時代は自由主義時代である。新聞は、政黨と同じく、資本主義時代の特産物である。商業なく、大工業なく、大社會なく、大都會なく、政黨もなく新聞もない。小國寡民の世界には、新聞もなく政黨もない。新聞も政黨も資本主義とともに始まり、資本主義とともに滅ぶべき運命にある。農民時代には、新聞も政黨も無用の長物なのだ。それが新聞を必然的にリベラルなるものたらしめる。保守主義は、王黨の形で存在するなら、封建の遺物である。その遺物の機關と

して王黨派の新聞がないことはない。それはしかし新聞的ではない。反新聞的新聞である。王道の時代には新聞は無用である。反王黨が存在するがゆゑに王黨がある。王黨があるがゆゑに王黨新聞がある。要は反王黨の出現にある。資本主義の出現にある。リベラリズムの出現とともに政黨かあり、新聞があるのだ。眞に新聞らしい新聞はリベラルなのだ。大阪朝日はマンチエスタア・ガアヂアンである。大阪毎日はフランクフルタア・ツアイツングである。或はそれよりも少しく保守的である。日本が英國よりも獨逸よりも、資本主義に一歩を遲れてゐるだけに、大阪の二大新聞も、尙ほ純然たる猶太新聞とはなりえないである。傾向はしかしそこにある。同情はそこにある。新聞はそれゆゑに常に政黨内閣の側にあるのだ。

○

政黨内閣ができるであらう。その見込みが、選擧の前に充分にあつた。その見込みが在野黨の勝利となつた主もなる理由なのだ。

清浦内閣は政黨内閣でないがゆゑに有權者の同情がなかつたのではなく、無力であつたからである。國民は、清浦内閣を憎むだのではない。輕蔑したのだ。憎まれるものは强者である。弱者は輕蔑の的である。有權者は、若しくは選擧運動者、有志、口きき、政治ブロウカアの諸君は、清浦内閣を輕蔑するがゆゑに在野黨に走つたのだ。次の政權を考へてゐたのだ。在野黨の勝利、清浦内閣の辭職を考へてゐたがために、在野黨に投票したのだ。事大主義である。事大主義が在野黨の勝利をきたしたのだ。憲政會の勝利は、國民が憲政會に同情したがためではない。憲政會と國民とは沒交涉である。政黨の交涉するのは、有志、口きき、政治ブロウカアの類である。これ等の類が次の政權を想像した時に、一部は憲政會に、一部は政友會にと走つたのだ。ここに在野黨勝利の主もなる原因があるのだ。次の、そして遙に小さい原因は、護憲運動である。

護憲運動は、今日は最早や人々の心を燃やすことはできない。有權者はしかし新聞を讀む階級である。新聞の宣傳と、デマゴオグの煽動とは、有權者の一部を動かしたに相違ない。

護憲内閣ができ上るべく事態は展開してきた。加藤高明が首相となるであらう。多年の宿志がとげられるのだ。加藤高明を首相に擧ぐべし。彼は今日に最も適した役者である。彼が民意とともにあるからではない。資本主義時代に、彼が最も適してゐるからである。

新聞と政黨とは、資本主義時代の產物であると私はいふた。

資本主義時代における民衆征服の機關なのだ。政黨内閣がその頂點に立つてゐる。

政黨内閣は國民内閣であるとするの迷信がある。如何なる政黨も民意を代表するものでないごとくに、政黨内閣は國民内閣ではない。政黨内閣は國民征服内閣である。自ら國民の代表者だと宣傳しつゝ、國民を征服するの方法として政黨内閣がある。官僚内閣も、閥族内閣も、今日は時勢後れである。國民征服の方法として不適當だからである。資本主義時代はユウチリタリアン・デモクラシイ時代であるからである。

日本におけるユウチリタリアン・デモクラシイは、憲政會において最大の適任者を見る。そは尚ほデモクラシイに徹底してはゐない。普通選擧でさへ、一二年前に、泣く／＼贊成した位ひである。この政黨の幹部は、悉く舊官僚である。加藤、若槻、江木、濱口、有力者は悉く官僚である。官僚らしい官僚である。頭の頂きから足の爪先きまで官僚である。ユウチリタリアン・デモクラシイは、彼等の頭には充分に理解されることはできない。それはしかし彼等の氣分である。彼等を支配するものはユウチリタリアニズムである。最も露骨なるユウチリタリアニズムである。

加藤高明を見よ。日本一の果報者である。日本一の富豪に女婿となつたからである。岩崎に行くの心をもつて、人々が加藤高明に行く。加藤高明は政治上に岩崎閥を代表する。財閥派の最大頭目である。財閥のもの、若しくは財閥に媚びんとするものが加藤の門を叩くのだ。人間の最も卑しき心理が、加藤高明を政黨の總裁に高め、そして一國の宰相たらしめようとしつつあるのだ。

加藤高明は新聞の喝采を博するであらう。新聞輿論はかれを喝采し、ブルヂョアの政治的覇權は、新聞輿論の喝采裡に、こゝに最大最高の適任者をえたのである。原敬以後、彼は第一人者である。ブルヂョア覇權の代表者として彼は第一人者である「西のレニン、東の原敬」が枕を並べて逝き、「西にマクドウナルド、東に加藤高明」が出た。永井君の雄辯が讃美のために用ゐられるの時がきたのだ。

マクドウナルドは勞働貴族、加藤高明はブルヂョア貴族である。勞働貴族は、今まロイド・ヂョオヂから、アスキスから脅かされて遠からざるうちに仆れるであらう。ブルヂョア貴族は、今や馬鞍に乘つて長安の道を行かんとす。その得意や想ふべしである。その得意の時が、しかし第二の時代を意識するの時である。

第二の時代は、加藤高明によつて促進されるに相違ないの

だ。階級意識が、政治的に、二つの階級の間に促進されるであらうことがこれである。ブルヂョアとプロレタリヤの二つの階級が、從來の何人によつてよりも、岩崎の女婿を宰相とすることによつて、より多く對抗意識を高めるであらうことがそれである。加藤高明の出現は、それゆえに、二つの階級がそれを歡迎するのだ。

たゞ二つの階級だけではない。一層に興味のあることは、都會民と農民との、二つの階級意識が、これとともに促進されることである。

政友會は、それが都會民の政黨であるにもかゝわらず、また凡ての政黨は都會民の機關、都會民が農民を征服する方法であるにもかゝわらず、自ら農民黨と稱してきた。憲政會は、それに對して商工黨である。商工黨中の商工黨である。町人中の町人である。憲政會の立つことは、それゆえに都會獨裁の時代における、都會獨裁の適當な方法である。加藤高明がその頂點に立つてゐるのだ。

日本の歴史上における加藤高明の役割はこゝにある。今度の選擧の意義もこゝにある。

護憲運動成功の當然の結果

安部磯雄

總選擧も愈々終つて、其結果は人々の豫想通りに護憲派の大勝利に歸した。先づ日本の政局も第一の關門は無事に通過した譯であるが、實はこれからが眞の難關なのであつて、誰しも一方に於て懸念すると同時に、他方に於て興味を以て見る所のものは、即ち今後の政局の發展如何といふとである。先づ今後の政局の推移の順序として、第一に考へられるのは清浦內閣の辭職といふとであつて、これは當然さうあるべき筈であり、一般がさう考へるばかりでなく、清浦內閣の關係及び其援護者達もさう思ふ所であるに違ひない。或新聞などには、清浦內閣は場合に依つて再解散をやるかも知れぬといふとがあつたが、それは問

題ではない。今日斯かる無謀な擧に出づれば、淸浦其人の爲丈けを考へても非常な不利であつて、後々までも醜名を流すことになるのであるから、さういふ亂暴はやらないだらうと思ふ。時期然らば現内閣の倒れることは必然の成行きであつて、それは只の問題であるが、速かに今の内閣が辭職しなければ來るべき臨時議會に於て不信任案を提出されて辭職を餘儀なくされねばなるまい。此事は誰でも見當のつく事實であるが、其次に第二の既定の事實として考へることの出來るのは、護憲派に依る内閣の組織である。それは護憲派の聯合か、或は其中の一派に依つて爲されるかは兎に角として、政權が再び得體の分らぬ官僚の手に落ちるといふやうなことは萬々ないであらうと思はれる。そこで問題は次の内閣の組織は如何なる形式をとるかといふことであつて、それは最も興味のある點であるが、國民としても之れに對して意見を述べ、希望を述べることが當然であると思ふ。

私は内閣の組織に就いて三つの可能性を認めることが出來る。其一つは、護憲三派が各〻今迄の行掛りを棄てゝ、從來の黨派を解散し、新しい政黨を樹立することであつて、さうなれば其政黨は議會に於て絶對多數を占めることが出來るから、先づ政界も暫くの間は安定することになる。之れは望が少いが、併し可能性はあると思ふ。第二は護憲三派が聯立内閣を作ることである。これは非常に可能性が多く、今迄の行掛りを考へると結局それが一番實現される可能性を持つて居るのであつて、又さうなることを希望する人が多いであらうと思ふ。第三の可能性は憲政會が獨力で内閣を組織することである。それには云ふまでもなく、政友會及び革新俱樂部が援助を與へることの諒解の下に於てのみ憲政會内閣の組織は可能である。今後の内閣の組織は此三者の中の孰れかに依つて爲されるといふことは誰れも思ふ所であらう。併し此三者の中には、可能性に於て望の多いものと、少いものとのあることも事實である。

第一の三派の合同に依つて新に一の政黨を作るといふことは、之れは實現出來れば、内閣を組織するにしても、一黨の力に依つて統一ある内閣を組織することが出來るから、それの統制に依つて、我國の政治が安定の基礎を鞏固にすることの出來る利益はあるが、併し事實に於て三派の合同には多大の困難が伴つてゐる。それには從來の歴史を無視することが出來ない。日本人は從來の行掛りといふことに就いて強い執着心を持つてゐるので、憲政會と政友會とに就いて云つても、此兩者が手を取るといふことは一時的には兎に角、永久的には不可能な理由がある。殊に政黨の首腦と云はれる人々のことを考へても、加藤、高橋、犬養といふやうな一黨の中心人物が、眞に或る理解

の下に、十分なる提携が出來るかどうかといふことは大なる疑問である。私の見る所では、三人の首領連の中でも、犬養といふ人は最も難かしい人であつて、あの人の過去の歴史を見ても到底普通の人と一緒に提携出來る人とは思はれぬ。進歩黨の昔を考へても、進歩黨から黨員が脫して行つたといふことは、個人的に犬養と並び立つことが出來なかつたことを語るものでなければならぬ。今日でも犬養といふ人は少しも圭角がとれず、決して圓滿な人といふことは出來ない。此人をお山の大將として置けば無事であるが、自分が下に立つか、或は同じ地位の人と事を共にすることになれば、破綻を生じ易い。此意味から云つても三派の合同といふことには可能性が稀薄である。更に他の一つの困難は、三人の首領は兎に角提携出來ると假定しても、三派には餘りに人物が多過ぎるといふことである。といふのは三派の中には大臣候補として擬せられて居る人物が多過ぎるといふ意味であつて、斯かる人々に一々大臣の椅子を與へることは不可能であるから、其間に不平の生ずることは明かであつて、政黨員の數に依つて、按分比例で大臣を定めることにでもしなければ調和を保つことが困難である。次に他の方面から見て、三派の合同が實際に可能であるか、不可能であるかは別問題としても、假りに三派の合同が出來た場合を想像しても、それは我國の政治のために喜ぶべき事柄ではない。若し三派の合同に依つて新に一の政黨が出來た時には、それは議會に於て絕對多數を占めることになり、第二の政友會を生むことになつて、護憲派が利權黨、横暴黨と化する惧れがある。此點から考へても、三派の合同といふことは可能性が愈々望み難くなる。

第二の聯立内閣はどうであるか。これは可能性も多いし、實際やることになればそれを組織することは餘り困難な仕事ではない。殊に今迄三派が護憲運動に提携して來た關係上、出來るならば三派の聯合に依る次の内閣を組織させるもいゝ。此利益の點から云ふならば、三派の中一黨が内閣を組織する場合に其閣員に幾分か第二流の人物が入るやうになるのに對して、三派の中から閣員を拔くことになると比較的立派な人物を得られることになる。而も三派が合同して新政黨を作る場合には、黨員の誰れもが皆同等の權利を持つことになるから、大臣の選擇に困難を感じるやうな結果になるが、聯立内閣が出來れば、憲政會が其中心となつて、政友會、革新俱樂部は第二、或は第三の地位に立つことになるが、其時には憲政會の總裁が總理大臣になり、其他の大臣の選擇も多くは憲政會より取り、三名若くは四名を政友會或は革新俱樂部から入れることになつて、閣員の選擇も比較的困難を見ないで濟む。然し困難は全然ないとい

ふ譯ではない。其の點から云へば、日本に於ては未だ聯立内閣を組織するには人々の間に團結心が鞏固でなく、下らない衝突が導火線となつて、聯立的内閣が内部から瓦解し易い危險があるのであつて、我國はさういふ實例を有つて居るのである。我國に於ては未だ聯立内閣の澤山の實例はないが、我國に於ける板隈内閣の如きは著名な實例であつて、其命脈は長くはなかつた。茲に於て聯立内閣の可能性も甚だ心細い譯であつて、二黨の聯立内閣の時代に於ても其繼續は困難であつたので、三黨派の聯立は假令行はれるにしても、大なる忍耐と、目的の爲めに團結する固い決心がなければ到底其維持は不可能であらう。然らざれば茲に一の禍根を貽すことになつて、内輪の意見の衝突より、延いては嫉妬、猜疑の心を生ずることになる。即ち内紛に依つて三派が圓滿に提携することが困難の結果、將來のことを考へて互に他の者と提携せしむるやうになる下地を作るやうになる。今日でも評判になつて居るやうに、政友本黨は憲政會とさほどに不和な間柄ではなく、加藤子と政友本黨の首領株の間には何となく親みがあるやうな風で、總選擧後に於ける此二者の提携を說く者もある。一方政友本黨と革新俱樂部の間にも多少の連絡があるのではないかといふ疑も存するのであつて、犬養と政友本黨の首領株の間には多少の親みがあると認められるので、兩者の提携にも可能性がある爲めに此兩者の合同の實現說も傳へられて居る。此事が將來三派の聯立内閣の組の可能を困難にならしめるかも知れないのであつて、さういふ噂さがあるだけでも、互に猜疑心を生じて、結局聯立内閣を不成功に終らしめるやうなことになりはしないか。こうなると聯立内閣もいゝが、又其處に危險のあることも考へなければならぬ點である。

然らば故後の憲政會内閣は如何。無論憲政會は第一黨となつたが、それ自身では議會の過半數を占めることは出來ないから、護憲運動の繼續として、政友會及び革新俱樂部の援助を受けなければならないのであつて、此兩者の十分の諒解を得た後に憲政會の獨力で内閣を組織することが出來れば、それも亦好い方法であり、又それは可能性もあるのである。私は目下の日本の政治の狀態から云つて、憲政會をして内閣を組織せしめることが、一番理想に近いのではないかと思ふ。若し私共が英、米、獨の三國の政黨政治の現狀を觀察するならば、其處にそれ〴〵趣を異にする方面を見るであらう。米國は二大政黨主義であつて、一方の政黨が議會に過半數を占めた時には内閣の組織は其政黨に依つて行はれるのであつて、議會に於て過半數を占めた政黨が政權を握るのが常道である。英國は現在に於ては三

政黨鼎立の時代であり、其孰れもが議會に於て過半數を制することが不可能な狀態に在る。其場合には二個の政黨が聯合することに依つて、其聯合した黨派が政權を握ることになるが、英國に於ては、永い間一政黨の力に依つて内閣が組織せられて來たので、聯立内閣の成立した場合は稀れであつて、近來は殆んど其經驗がない位であるから、聯立内閣の組織には多くの不便を感じるので、勞働黨内閣のやうに自由黨の援助を得て内閣を作つて居る。獨逸に至つては小黨分裂の現狀であつて、此國には八つも九つも政黨が分れて居る。それはどうしても他の援助を得て一の政黨が内閣を組織することが不可能な事情に依るのであつて、假りに大きな政黨はさうして内閣を組織することが出來ても、小さな政黨は常に政權を得る機會がないので、小政黨はいつでも馬鹿を見ることになるから、獨逸に於てはいつも聯立で行く傾向がある。斯くて其時々の政黨の組合せが巧く行つて、議會に多數を占める内閣が作れゝば、其組合せの中の小さな政黨も代表者を内閣に割込ませることが出來るのである。日本は政黨の離合集散の立場から見れば英國の狀態と似て居る。英國に於ては政黨は三であるが、日本に於ては今迄は政黨の數は三であつた。孰れも自力では議會に過半數を占めることは不可能であつて、内閣を組織するには他の援助を得なければならない狀態に在つた。日本は現在四政黨となつたが、獨逸の如く小黨分立で行くか、英國の如く友黨の援助を得て一黨で内閣を組織するかといふ問題に逢着して居るが、理想としては憲政會に内閣を組織せしめて、政友會と革新俱樂部が之れを援けて行くのが一番いゝと思ふ。さうなれば一黨が内閣を組織する結果、内部の統一がよく行はれて、内輪から割れるといふやうな心配がなくなる。更に聯立で内閣を組織する代りに一黨でやることになれば、それ丈け責任が明瞭になる。若し憲政會を中堅として、聯立内閣を作る場合に、他の二政黨から閣員を三四名とることにして、其爲めに憲政會が妨害されることになれば、憲政會は眞に自分の力を發揮することが出來なくなつて、責任丈けは自分が分擔する不公平に陷るから、憲政會が一黨で内閣を組織する方が、憲政會のためにも、日本の政治のためにも好い結果を生むのではないかと思ふ。然し無論之れは現在の狀態から考へたことであつて、將來我國にも普選が實施された曉に、小黨分裂の時代が來ると、獨逸のやうに聯立内閣が必然の結果として起つて來るに違ひない。將來はさうなることが豫想せられるが、併し目下の問題として、一番可能性多く、而も結果に於て好いと思はれるのは憲政會内閣の成立である。只茲に問題となるのは、憲政會内閣が成立しても、政友會なり、革

新倶樂部なりが眞實に憲政會を援助するや否やが疑問であつて、最初の中は援助するかも知れないが、間もなく革新倶樂部などが政友本黨と氣脈を通じるやうになれば、日本の政界は再びもう一度動搖することを免れない。無論政局の動搖といふことは大して憂ふべき現象ではなく、護憲三派にしても何時までも長く提携して行かれるものではなく、又それは望まれもしないが、唯だ玆に注意すべきは、政黨の內輪の爭其事は大した問題ではないが、それに乘じて再び超然內閣の如き不自然なる內閣に出現の機會を與へるやうな失態を演じてはならないことである。此度の淸浦內閣の出現を見て、政黨は既に自覺すべき筈であつて、官僚や、藩閥や、貴族の內閣の如き、政黨に基礎を置かぬ內閣が出來ることは、日本の政黨が天下に信用を失ふ所以であることを悟らなければならない。そこで私の將來希望する所は、目前の內閣の組織などよりも重大な問題として、政黨に屬する人及び政黨は、卽ち政友本黨を入れて現在の四政黨は、恰も護憲三派が一になつて運動を起したやうな意氣を以て、今後三浦梧樓といふやうな人の斡旋で四政黨の首領が集つた場合に、譬え政黨は互に如何に爭つても、政黨以外には斷じて政權を渡さぬといふ固い誓約をなさしめ、それを實行することに努めることである。それには先決問題として政友本黨も仲間に入れることが必要である。總選擧の終るまでは、政友本黨は淸浦內閣の支持者の立場にあつたから、三派は政友本黨を攻擊し、新聞なども筆を揃へて、政友本黨の遣り方を憎むの餘り、足輕黨呼りをするに至つた。然し總選擧が濟み、殊に淸浦內閣も倒れた後に於ては、護憲三派の目的は達したのであるから、何時までも政友本黨のみを憎んで敵とする必要はない。政友本黨にしても眞實の心を云つたならば、必しも官僚と結んで政治を行ふことが其の望む所であつた譯ではあるまい。で、將來四政黨の首領が集つて、其時には從來の行掛りは水に流して、相談して見たならば、今云つたやうなことも實現が出來ないことはない。其際には誓約書を書いて之れを天下に公表するもいゝ。兄弟墻に鬩げども外侮を防ぐで、政黨は常に內に爭ふも妨げないが、一度官僚や政黨以外の者が政治に容喙しやうとしたならば、其時には一齊に立つて之れを擊破しなければならぬ。又窃かに彼等と手を握る者があつたならば、再び護憲運動を起して、彼等に款を通づる者を懲らさなければならない。政黨の態度が斯くの如くなつてくれば、國民も政黨に信賴することが出來るし、政黨以外の力が外部から加はらないことになれば、政黨は常に其政策に依る離合集散に於て、多數を占めた政黨が內閣を組織することになる。現在に於ては一黨にして多數

を制することは出來ないから、四政黨の中二黨が聯合して其數に於て最も多い者が内閣を組織するに至るであらう。斯くの如くなれば日本の立憲政治は初めて安定の基礎に立つことが出來る。又そこまで進まねば護憲運動の趣旨は徹底されたとは云へない　護憲運動は單に總選擧が目的で起された運動であつてはならない。過去に於て三浦氏などに依る立憲政治の爲めの盡力もあつたが、其運動の意義を無にしないで、將來も政友本黨も仲間に入つて、日本に於ける立憲政治の根抵を作ることに努力するやうになることを希望として最後に述べて置きたい。

總選擧の結果と憲政會の進路

法學博士　堀江歸一

各政派勢力の消長

五月十四日の新聞紙所報に據つて、今回の總選擧に於ける各派別を見ると、

憲政會	一五〇	革新派	三〇
政友本黨	一一六	實業同志會	八
政友會	一〇〇	中立	五八
合計	四六二名		

と數へられて居る。此外北海道第九區（定員二名）の投票未濟であつて、其選出議員の所屬黨派の如何に依り、右の各派別に多少の異動を生ずるが、固より大勢を動かすに足らない。兎に角總選擧の結果、憲政會が案外の多數を制し、衆議院の第一黨と爲り、今後も中立議員中に入會者があつて、益々黨所屬の議員數を增加するに至ることは動かす可からざる事實である。從來我國に於て、總選擧の行はれるや、政黨内閣の場合には、其内閣の基礎となる、政黨が、官僚内閣の場合には、其内閣を支持する政黨が必ず第一黨と爲り、多數黨と爲ることを常とした。政友會が寺内内閣の下に行はれた總選擧に於て擡頭し、

續いて原内閣の下に行はれた總選擧に於て、絶對多數を占めるに至つたことの如き、吾人の記憶に新なる所である。是等の事例に據つて、今回の總選擧を律する者は政友本黨が政府の庇護に依つて、第一黨と爲りはしないであらうか、斯くて總選擧後政黨間に生ずる分解作用に依つて、本黨は其大を成し、一方に清浦内閣を援助すると共に、近き將來に政權を獲得するに至るであらうと想像し、更に甚だしきに至つては、高橋が盛岡に於て田子に敗れゝば、政界を隱退するであらう、隨つて政友會の一部は必ず本黨に赴かざるを得ないと考へる者すらなしとしなかつた。然るに實際の結果は右の如くであつて、本黨は意外の失敗を演じ、第一黨たる憲政會に比較して、著しき開きを生ずるに至つたのは、何故であらうか。本黨の失敗は世間に不評判であり、人氣者の一閣僚すら持たない清浦内閣を擁護すると云ふ不利の立場に在つた其上に、清浦内閣は其無力の致す爲めか、有效なる選擧干渉を試みなかつたし、地方長官や、官吏の多くも清浦内閣に見切りを付け、此内閣の爲に忠勤を致して、干渉知事と云ふような惡名を買うことを不利とし、存外公平の態度を取り、斯くて本黨は其最も賴りとする所を失つたことを以つて、重なる原因としなければならない。殊に本黨は今日こそ政友會と相對抗する地位に立つけれども、本年二月以前に於ては、正しく政友會の片破れであつて、原内閣や高橋内閣の下に行はれた萬般の秕政に對して、責任の負う可きものがある其上、特權内閣擁護と云ふ點に於て、言論界から散々の惡評を蒙つたとあつては、其氣勢の熸まつたも亦敢て異とするに足らない。

政友會も積年の秕政に於ては、本黨と同罪であり、殊に秕政の發頭人である高橋是清氏を總裁に戴いて居る爲めに、不利の地位に居つたことは論を俟たない。此不利の地位を脱しようとして、所謂護憲運動に參加したり、普選論に早替りをしたり、高橋氏自ら一夜作りの平民に爲つたり、百方苦肉の策を講じたようであつたが　國民は今日に至つて政友會積年の惡業を忘れる程、健忘でもなければ、寛大でもない。其領袖は到る所に苦戰したり、敗北したり、結局黨所屬の議員をして百名に減ずるに至らしめたことは、國民が今日と爲つては憲政擁護と云ふような空漠なる題目に重きを置かず、寧ろ諸政黨の既往に於ける所爲に就て、嚴正なる批判を試みる傾きの著しきに至つた故であるとしなければならない。

斯の如く考へたならば、憲政會が百五十の議員を收め得た理由も自ら之を明にするを得るであらう。大隈内閣當時に於ける憲政會の秕政に對しては、國民の記憶は殆ど消失するに至つ

た。而して其後十年憲政會は常に在野不遇の地位に居り、時には餘りに熟柿を狙つて、消極退嬰に過ぎるとか、在野黨でありながら、民論を容れるのに、吝であるとか、民衆に接觸しないで、元老の門を叩くとか、種々の非難を蒙つたが、大體に於て左程見苦しいことはしなかつた、惡事はしようとしたか知れないが、憲政會を相手とする政商連もなかつたようである。殊に大正九年以來經濟社會に起つた種々の事相は積極主義が如何に誤まれるものであつて、今日の局面を展開するには、憲政會の年來主張する消極政策を以つてしなければならないと云ふことが多數の國民に理解されるに至つた。是等の事が憲政會を有利なる境地に導いたのであつて、護憲運動などよりも、憲政會年來の主義主張が今回の成効を齎らすに就て、大なる效果を生ずるに至つたものと思はれる。

革新派の選出議員が三十名に止まるのも、實業同志會が僅々八名の議員を擁するに過ぎないのも、兩派の現狀から云つて、已むを得ざる所である。革新派は一人一黨を主義とし、所屬議員の内には、一流の人物を網羅して居ることであるから、議會の言論に於て、世間の注目を惹くものもあらう。唯商工業者の利益を擁護する目的を以つて起つた實業同志會が八名と云ふ少數の團體であつて、何事を爲し得るであらうか。將來に伸びる基礎を築いたものとして、自ら慰れば兎に角、然らざる限り、同志會關係者は無用の金錢と勞力とを政治運動に擲つたものである。

政權は如何に移動する

右の如き總選擧の結末を以つてしては、清浦內閣は　日として其地位に晏如たることを許さる可きものではない。清浦內閣の局に當ることの長ければ長いだけ、國家の政務は曠廢するの道理であるから、當局者にして國家の利害を思ふの良心ある以上は、一刻も早く職を辭す可きである。然らば清浦內閣に代つて、內閣を組織するものは、如何なる方面から現はれ可きであらうか。官僚內閣の如きは、今日の機會に於て、之を組織せしめるのは、不合理の甚だしきものであつて、强いて其首班たる可き人を拉し來つて、寄木細工に類する內閣を組織した所で、清浦內閣の二の舞を演ずるに過ぎないのは勿論、民心の激昂を買つて、如何なる混亂を社會に釀成するに至るかも測り知るを得ない。政黨の實質に對する評價は姑く措き、今日の時勢に於て、政黨內閣を根本主義としなければならないのは、當然であるとして、護憲三派をして政權を掌握せしめるのが理義に於て正しいか、利害に於て宜しいかと云ふ問題を生ずる。

世間の一部には、清浦內閣に對する當面の反對者は護憲三派

であるから、是等三派の聯立内閣を以つて、清浦内閣に代らしめるのが當然であり、三派亦政權を獲得すれば、聯立すると說く者がある。然しながら私は左の諸點から此說に反對する。

第一、護憲運動は清浦内閣と云ふ非立憲の内閣を倒壞する爲めに、起されたのであるから、此内閣の倒壞と共に、自然解體す可き一時的性質を有するに過ぎない。

第二、聯立内閣に於て、必要とする所は諸政派の政見に於ける一致であるが、護憲三派は清浦内閣を倒壞し、立憲的内閣の組織を期すると云ふ點に於て、一致したゞけであつて、此以外の政策に就ては、何等の協定もなければ、妥協もない。殊に憲政會と政友會とは多年政策上の問題に就て、氷炭相容れざる關係に居るものとすれば、護憲を名として、聯立内閣を組織するが如き、殆ど常識を以つて、律す可からざる所である。

第三、政友會の在朝時代に爲した秕政の跡は今日尙ほ吾人の記憶に殘つて居る。現時に於ける財政の困難、經濟の疲憊は多く政友會内閣當時に於ける秕政の然らしめる所であつて、其跡の歴然たる際、政友會が政局を担任するが如き、餘りに責任を知らざる行動であつて、護憲運動の手前から云つても、政權に遠ざかるのが政友會として當然踏む可き道であると思はれる。

憲政會の進路

玆に於てか今日の政局を担任するものは憲政會を除いて之を求めるを得ざることゝ爲る。憲政會が局に當つた所で、對支對米の外交問題が遽に我國に有利に解決されるものでもなからう。唯私が憲政會に望む所は經濟財政に一大整理を施して、年來の病根を一掃することである。其爲めに一時は不景氣の勢は濃厚となるかも知れず、失業者の簇生亦免かれ難き所であらうが、斯くしない限り、我國經濟の根本的繁榮は之を見るを得ないからである。政友會や革新倶樂部が護憲運動の關係上、憲政會を助けて、此整理事業を完成せしめると云ふならば、甚だ好都合であるが、彼等が例の政黨根性から、政權爭奪の爲めに、故意に反對するようであれば、議會を解散して、國民の意思を質すのも亦不可なりとしないであらう。普選の即行斯くて生ずる政界の刷新、行政財政の整理に依る經費の削減こそ憲政會の爲す可き使命である。唯憲政會に之を達成する力量と信念とがあるかは、局外者たる私の知らざる所である。



清親の追憶

小林哥津

はしがき

この度の大震災で、その住居を燒かれ、身一つで逃げて來た姉の手に、後生大事に、かゝえられた風呂敷づつみの中には、父のスケツチ帳、十何冊と、その自畫傳と、それに、もうずいぶん年をとつてからの自畫像とが、ありました。

スケツチ帳の中で、一番古いもの、卽ち、父の最初の憧憬の反影である一冊は、あの折りの、たとへやうもない混雜な途上で、とりおとしたまゝ、ひろいとる方がくもなくして、了つたといふことで、その外、姉の家の二階に置いてあつた、大本箱の中にあつた草木動植物の寫生帳、知人の顏などを、多く畫いてあつた和とぢのもの、私達家族の、日常生活を、さまざまにかきためた、みの半紙のとぢこみ、父の旅日記などゝいふものが、すべて灰になつて了つたのでした。

おもへば、私達姉妹にとつては、今さらながらなつかしいものでありましたに、殘念なことでありました。と云つても、これだけでさえ、大勢の子等をひきつれた、姉の手には、中中の大荷物でありましたらうに、よくもまあ持ち出したものと、何となく、嬉しいやうな、悲しいやうな心持でありました。田舍の、農家構の、うす暗い電氣の下で、その自畫像を見、自畫傳をめくるにつれて、私達の胸には、なつかしい父の追憶が、また新らしく、よみがへるのでありました。

白い中に、黒いのも交ぢつた、長い髯を、きびらの胸にたらして、その細長い――ほんとうに、すぐすぐと細長い指に、畫筆をにぎつて、ぢつと上目づかいに、鏡の中にうつる目ざしは、今にも

「ようかつ公どうした。」

と、その昔、よく云ひかけた、父の聲音までも、耳もとにきこえるほどでありました。

室の眞中には、もうかなり朱色のさめた、もうせんがひかれて、何時も何枚かの繪絹や紙を重ねた中に、何一つ音をもたてぬ父が、座つてをりました。桐の丸火鉢からは、ほのぼのと、紫のけぶりがたつて、床には又兵衛の雷が、いかりをおとした圖のかけ物、草花のなげ入れ、多くの寫生帳、錦繪、書物をつみ重ねた、天平風の大書棚、その上にあたる壁には、これは又思ひがけない、ダウィンチの「微笑」、そして、何といふ人か、これも又いづれ南歐の人のものらしく、柔らかな、早春の日光をうけた露臺に、二人の少女が、一人は髮を編み一人は、ものを讀む後すがたのかゝれた、いづれはこの露臺の下に、さく花の匂ひの様に、やさしい圖からの銅版畫がかけられてあつた、あの富士見町時代の畫室の様と、この父の面影とは、嬉しい時にも悲しい時にも、さて何才になつても、けつして消すことのできぬ、おもひでゞあります。

唐紙で、れん落といふ細もの何枚かを、あるところから頼れたをり、そのたちくづの唐紙を、ひろひ集めて、とぢたもへ、やがて父は、ほつりほつりと、自分の幼い頃のことをかきはじめました。――これが、自叙傳でありました。

いくらか支那好みの青い表紙をつけて、それに、壯年の頃とはまるで異つたおもむきで、さつさと墨のかき流しに、その生れた日からのことを、かきはじめた自叙傳は、とう〳〵お終ひまでかゝないうちに、筆をおいて、了ひました。

その時までに父の命がなかつたのかといふわけでもなく、ふつと、思ひたつてかき初めた時と、同じように、ふつと、やめて了つたのでありました。端から見れば、あゝいふ人でありましたから、たゞそれだけの理由で、やめて了つたのでもいゝやうでした。けれど、これは、父の出會つた若い時代、又そのあとに來た時代が、あまりに、父にとつては、厭な事の多い時でありましたからであらうかとも、子である私には、思はれるのでした。

あのやうに、一頃は、世の中を皮肉に見、すべてをカリカチュルにしなければならぬ程な、意氣のうらに、あの詩人の眼と心とをもつてゐた人でありましたもの、ひどく、せまい心を、

そして、信の深いところをもつた、父でありましたもの、さうじた心が、かなり自分には、強くはたらけなかつたのでありませう。

ともかく、自叙傳は、おもしろくならうとして、つひに、やめられてありました。

私はこの父の末の子で、四十七の時、生れて來たものであります。で、父の記憶は、その後、もの心ついた後から、およそ、父の死ぬ六十九才までの十九年間ほどのことしかもたないのであります。かんがへれば、みぢかい月日でありました。

父の死は私の二十二の時で、よく親類の女達などは、ふだんから、おとうさん子である私をなぐさめるつもりで、それでもあなたなんか、その年まで、父さんと一緒にゐられたんですもの、いゝ方ですよ、などゝ云つてくれましたが、どうしてそんな事は決してないと、よく思ひました。時々、お爺さん、年増の親子などで、こつそり暮してゐる人々を、見たりすると、六十九の父の死が、ばかに早死のやうな心持がしてならぬ事があります。

さてその記憶の中に生きてゐる父の面影をおもひ出すまゝに書いて見ようと思ひたちました。むろん色々の波瀾の多かつた父の壯年の頃は知るよしもありませんが、その後に來た、かなり不遇な時代から晩年までを、ぢつと水底にゐる靜けさ淋しさの中にゐた父の面輪から、その時々の父をふりかへつて、新しく見やうと思ひます。さうして、それは、父の自分でかく事をも出來なかつた、——恐らく父としての朧な廻想の事實にも、渡ることでありませうが、それは、私の父である父として、又、父の魂として、おそれも、恥も、いかりもしない事と、信じてゐるのであります。

ゑがける自傳

自叙傳は弘化四年からはじまつて、丁度明治初年にわたる、數頁で、をはつてをります。

最初の一頁には、藏屋敷とよばれた、幕府のお米藏の小揚頭をつとめてゐた、祖父の屋敷の一室に、たらひの中に産湯をつかふ父自身の畫であります。

なるほど、六十才の時にも、なほ見上げるほどの背の高い人でありましたほど、その赤坊である父も、足の長いさまにかゝれてありました。父の母であつた祖母は、面長な人であつたらしく、屛風の影から、ちらりと、その長いあごをつき出してゐる風にかゝれてあります。

茂兵衛が十一人目の末子と生れた。とそのわきに、父の、例

の畫筆でかいた、ひよろ〳〵とした字で、したゝめてあります。父も祖父母にとつては、可成なおそこ子であつたのでありませう、

さてその產れ出た日の次には、もう安政の大地震の日にとんでをります。――思ふにその時が、父のもの心ついた最初の日でもありませうか。

祖母が行燈の下で、何やら縫物をひろげてゐる、その傍に祖父は、竹くづだらけの中で、一心になつて、竹刀をけづつてゐる、そしてその次の間には、おさない父の兄姉が、小さい頭を、づらりと並べて、寢つてゐる――さういふ時に、大地震がおこつたのでありました。ゐノこくに突然ゆれ出すと、あります。お藏役人でも、中々内輪はゆたかではなかつたと見えまして、祖父はいつもこの竹刀けづりを夜業してゐたのださうでありました。

さてこの突然の出來事は、貧乏な、しかもしごく平和な父の一家をも、地獄のおそろしさの中に、捲きこんで了つたのでありませう。次の頁は、大屋根を、とびぐちを手にした男達――大かた小揚人足でもありませうか、――が、せつせつとめくりおこしてゐる有樣であります。そして下敷になつた祖母が、子供等と共に、やつとはひ出してくる有樣でありました。

この時の事をよく父は、私達に話しました。どうした事かと氣がつくと、自分は誰やらにぐい〳〵と、手をひつぱられて、ま夜中の外に出て見ると、眞はだかであつたよしで、廣々とした大空には、かず限りもないお星樣が、さんぜんと、美しく輝いてゐて、泌々と、寒さをかんじたと、話すのでした。

誰やら男の人が手に大人の、ちやん〳〵こをもつて、赤裸の父に着せてゐる畫があります。さうして、その夜があける頃には、三方を、傘でかこひ上げた中に、姉たちと一かたまりになつて、大きなお結びを食べてゐる父がかいてあります。樣々な形ちの提灯をもつた人々が、右左に、行きかふありさまと、えん〳〵と上る火の手を見せた背景でありました。

それからは、今のバラツクである假小屋のありさまがそれからそれへと、色々にかいてあります。ある醫者が小供を連れて見舞に來ての口上に、

「まだ仇は見つかりませぬか」

と云つてゐるところがあります。なるほど、皆な甲斐々々しいいでたちで、大晏寺堤よろしくといふ小屋がけが、いかにも仇うちと云ひたいようであります。それを小供心に、忘れられぬ父が、今の、日比谷あたりを見たならば、まあ何と云ひませうか、――そこを見て、私達姉妹は思はず笑ひました。

その中には、父の屋敷に、どういふ事情かで、居候をしてゐた、劍術の先生が、その地震のおこる日を夜遊に出かけてゐて、ぐら〳〵と來た中を、よし原の張見世から、てんでに、手を出して、助けてくれといふ女達を、ふりはなして、ほとんど襦袢一つに刀だけをしつかりかゝえて、飛んで歸つてくる有樣もありました。

その劍術の先生の話に、石原河岸へ來た時に、よたかそばやの荷一つ、なげ出されたまゝ人子一人見えぬ、暗を、向ふ河岸の火の手がぱあと大河にうつつてゐて、何とも云へぬ心持であつたとか云ふような事がありました。

その後ともかくも、小揚の屋敷が出來上つて、一同がかりの小屋をうつゝたところがあります。それから間もなく、祖父が、一段小揚頭から上の、御勘定方とかいふ役目に變つて、こん度は、向ふ河岸の本所の役宅に轉居いたしました。首尾の松をすぢかひに見た、横網河岸であつたそうです。

その時分から父は毎日、そのあたりの廣場で、若侍達の、かけ馬の稽古を見に行つては、おさない筆で、その樣をかいて見る事を、樂しんだとあります。

そして、その後には、づつと繪をかく樂みに沒頭して、こま廻しをして、友達と遊ぶ折も、いつか仲間はづれになつて、地面の上に、竹きれで、何かかと畫いて夢中になつてゐて、友達の投げたこまに、したゝか小びんを割られたといふやうな、圖があります。糸びん奴に、大きな巾着をぶらさげて、五つ六つの有樣です。

ある時は、兄のところへ行つて、（物領は別に家を持つてゐた事と思はれます。）兄に畫をかけと、せがんだので、兄は、義經が、八島の八艘飛びに、おならをしながら飛んでゐる有樣を、かいてもらひ、大さう幼い父が、機嫌を惡くして、大むづかりをやつて、やうやく、兄嫁におぶはれて、繪双紙屋へ行つて、極彩色の武者繪を買つてもらつて、機嫌をなほしたことなどもありました。父の物領の兄といふ人は、他の兄達も多くさういふ型でありましたらうが、とりわけて、洒落な、云はゞ江戸末期の特有な、御家人型な人であつたとかいふ事をきいてをりました。早世した人も多くあつたようでしたが、後年この兄は、御維新から、煙管職人になつて、あまりよくなく、晩年の頃は父のところへ來てゐて、まことに佗しく死んだ人であつたさうです。

かういふ風に、あまりに畫が好きでありましたので、祖父が親心から、近くに畫の先生があるところから、ある日父を、その先生へ弟子入りに祖母が連れて行つたことがかいてありました。

先生はまづ手ほどきにと、書手本に、梅と竹を書いてくれました。父は、そんな梅や竹があるものかと云つて、泣き出して了つて、どうしてもきかず、祖母がまことに、氣まり惡い思ひをしてつれかへつて來た樣があります。——後年の、寫實主義が芽を出してゐたものでありませう。

その樣に父の幼年の時は平和に、又幸福におくられたものでありました。兎も角も、小役ながら、祖父は役人でありましたので、勝手に畫をかゝうと何をしようと、かまわずに置れたといふものは、この頃の町家育ちの人々が、如何に、ゆう福な家庭でも、見習とか云つて、他人の中へ出される風習の中で、はるかに、上等の身であつたと、よく父も話しました。

その幸福であつた幼年時代には、樣々におもしろかつた事があつたと見えまして、ほんとうに根よく、いろ／＼な見聞、色色な出來事を、細大洩らさず、かいてあります。

お藏内のがんま稻荷といふお稻荷樣が、安政の地震以來、雨風にうたれるにまかせた祠の中にうちすてゝあるのをおこつて、組下のある小倅にのり移つた不思議な夏の晩の話。コロリで多くの死人が出て、江戸の市中を、早桶又は、早桶が間に合はぬので、四斗樽、箱などが、しげく往來するさま、その外、樣々のことがありました。この自傳の畫になつて、現れてゐないことで、私達への物語も、等く、この時代の出來事、見聞でありました。

さうしてゐるうちに、早くも父の父の死が來て、父は家督相續をする事になりました。前に申しましたように、多くの兄達がありましたにはあつたのですが、どれもこれも放埒で、ほとんど、家によりつくものもないといふわけで、年若な父が、一番、祖父母から信用されて、とうとう、父がお役をつぐ事になつたのであります。そして、元服して勝之助といふ幼名は、時の將軍樣におさしさわりがあつて、それ以來、清親といふ、字をそのまゝ本名として、つひに死ぬるまで、父の時代にありがちな雅號といふやうなものも、持ちませんでした。

それ以後は、丁度、御維新前の、あわたゞしい時が來たのでありました。江戸の市中には、やれ乞食隊の、朱ざや組の、と、中々に物騷な世間になつて來たので、さすがに、父も、絵をかく道樂ばかりしてもゐられず、お役大事と、劍術の稽古、柔道、武術と、專心に勉強したさうであります。

さうしてゐるうちに將軍が、京都へ上るといふ供の中に加はり、始めて京を見た記が出てまゐります。かつぎ眞ぶかな京の女、ふんわりとした山のすがた、すべてが江戸と趣きのちがつた京の風俗、風物を、どんなに、この若い父は憧れの心で見た事

でありませうか。

さてそのうちに早くも世の中は、ごた／＼してまゐりました。大政が奉還されるといふ頃には、さしも賑かなお蔵の中も、草ぼう／＼と、かたく、戸前に、錠を下ろされたまゝになつてをりました。こそ／＼どろぼうが多くなつて、ひる夜油断が出來なかつたと、書いてありました。

上野の戰爭の折りには、父は印絆天を着こんで、すべて人足の體で、物見にやられたとあります。雁鍋の天水桶のかげから頭の上で、どかん／＼といふ音をきゝながら、首をちゞめてゐる樣子が、おかしく、かゝれてありました。

さて戰爭もすんで、いよ／＼、お蔵屋敷も、お蔵も、政府へ引渡しといふ日には、父は帳面をひろげて、きんぎれのお役人、幾人かを案内する圖がありました。

さてさうして、父のお役づとめはをはり、江戸を引拂つて、靜岡へと心ざす將軍家の、どこまでもお跡へついてといふ、祖母の　もうずいぶんな老年の祖母の命令で、父は、祖母を駕籠にのせ、自分は大小をかついで、袴のもゝ立ちをとり、なほ多くの道連れの一行と、江戸を一足出た、海ばたのありさまのところで、この畫日記は終つてゐるのであります。

その放浪の時

（この後から私の生れて物心ついた時までの、父の生活は、父自身から、折りにふれてきいた話、母の話したこと、また、色々に、父と交りのあつた人々の話からおして、かうであつたろうと思ふ事を書くのであります。）

さてそれから江戸を離れて、靜岡在の、ある濱邊に、祖母と二人住ふまでには、父の苦勞は、たいていな事でなかつたと、思はれます。いまゝでのやうに、頂く物もなく、たゞ將軍家のあとをついて來たと云つたところで、何一つ身すぎになるわざもない父でありましたので、昔ながら、ずいぶん困難な日日であつたさうです。

で、父は漁師の仲間に入れてもらつて、早朝から、濱邊で地曳をひき、又は、鰹つりの舟にのつたりして、その日のたつきを得たさうでありました。よく後に、私達に、生のよい魚はかうした色合であるとか、本場ものと、場ちがひは、かうした所であるとかいふ講釋をよくしたものでありました。

その漁師の暮も、わりに安氣なものではなく、中にも祖母が老病で、わづらひつくといふ世話場でありましたので、すゝめ

られるまゝに、ある時には、村の祭りの小屋がけの見世物に雇はれて、居合ぬきなどをやつて見せたといふ話でありました。この時の話を父はまた、この上もない面白いことだつたとよく云ひました。それはまだ若い十代をこすか、こさぬかの時だつたさうでありました。

かうした中にとう〳〵、祖母は死くなりました。まつたく自由に、たゞ一人になつた父は、この漁村を後に、かねて思つてゐた「繪をほんとうにかける所」へと心ざしたのでありました。

と云つて、さてそれがどこであるかは、勿論父も知らぬことでした。まづ、新東京として、活氣づいて來た東京へ行つたらば、といふようなわけで、その方角に向つて、旅立ちました。その途すがら立ちよつた横濱で、どうしたつてがあつたものか、父は、ある獨逸人の家にすみこんだのでありました。ところが、その獨逸人は、畫家であつたのださうでした。――それを知つてといふわけではなかつたのでせうが、何しても、無一物の父であつたので、何といふ事なしに世話をたのんだのが丁度よく畫家の異人の家で、あつたのでありませう、おかしな事には、父は、何としても、その獨逸人の名を思ひ出せないと云ふ事であります。何事にもよい記憶力をもつてゐる人でありましたが、この人の名前だけは、どうしても思ひ出せぬさうでありました。

その異人は、毎朝毎朝、おなじ時刻に、朝の陽をうけてさく、朝顔を、せつせと、寫生して、こつこつとかいてゐたさうでありました。父は、この人のおほかたの藏書を、――もちろん、それが何であるかは知らずに、片はしから、ものをがつがつ食べるほどな心持で見て暮したさうでありました。

さうして、その人から油で繪をかくことを、習つたのださうでした。

そのうちに、かれこれと、一年ちかい日が經つて、父の眼には、やつぱりその異人のかく繪も、あきたらない思ひのする樣な、時が來たのでありました。で、遂々又その人のところを暇をもらひ、かねて思ひ立つた、故里の東京へと出かけたのでありました。

さて東京へ來て、その頃の名人是眞の繪を見、または、在來の日本藝術を見ると、さてまたそこに、散服と、また別の飽きたらなさを、感じたのださうでありました。

さうした中に東京の町々は、最も西洋文明をとり入れられて來た狀態でありました。至るところにふるいものと、新らしくおこるものとの交り合ひを見る不思議な時になりました。

めづらしい形の吊りランプが、店の眞中からつり下げられ

て、光々とした光りを投げてゐる、――その店は名も知らぬ美しい色をした草花の間に不思議にからむ、横文の文字入りの、西洋煙草をうるうちであつた。さて、そのかざり戸棚の前にうづくまる娘は、唐棧のうす藍縞に黒々と繻子の襟をかけて、細く前がみを後へそらして、髙引をかけた投げ島田でありました。

と云ふやうな有様が、至るところに横はつてゐる中を、父は好奇と、憧れの眼をもつて見て過ぎたのでありました。

さうしてゐるうちに、それらのものは、すべて、詩化され、さうして、その過ぎ行くものと、來るものとのつくり出す一つの陰影のうちにさゝやく交響楽とが、やがて、若い父の手にあるスケツチ帳に、畫になつて現はれたのでありました。

それこそ、父の思ひのまゝの畫でありましたらう。そこに在來の日本藝術の約束からはなたれた手法で、又、かつて父の習つた、モデルと同じ様にといふ油繪とから又かけはなれた一とつの畫の世界でありました。さうして、それは父自身の好みにあつた、又一つの詩の世界に他ならなかつたのでありませう。

このやうにしてその父のスケツチ帳は、何枚かの紙をみたして、行きました。

まるで硝子のかけらの様に、朝の日さし、空の色々を反映する花のさく櫻の堤、または、洋館だての大時計にさんさんとふる粉雪――その下の路をゆく女はお高祖頭巾、ふかぶかと、襟廣の雨合羽をきて歩いてゆく。夕雲が、たとへようもなく美しく西の空に浮び出て、さゝやかな堀の橋の上には、子をおぶつた娘が一人、何を見るともなく、美しい夕やけを見て立つてゐる。傍にある「橋もと」といふ料亭からは、早くも夜の灯がひかりそめてゐる。――と、いふような、スケツチに、來る日も來る日も、父にはよろこびの日にちがひなかつたのでした。

無論、とぼしい生活でありました。おもちや繪の仕事、繪本かきの手傳など、相應に、たつきのための仕事をも、してゐたことと思はれますが、事實は、どうして居た事か、つひにほんとうの事は聞く時がありませんでした。がともかくも、當時の畫家連の內の一人に加つてゐた事は、樣々な述懐を聞いても、およそ想像されるのでありました。

役者繪かきの國周とは、かねて、交りがあつたものと見えまして、その人の美しい似顔繪を多くしまひこんでゐた私には、何かにつけて國周の噂をよく致しました。

一寸男前の好い人だつたさうで、根が役者繪でも書からうといふ程の人だけに、物腰に、ちよつと氣取つたとこのある人で、そのためにとんだ喜劇を、演じたといふ話は、中にもおかしな

話でした。つねに借金だらけで、首もまわらず、みなりは紋付の黒ちりめん、白扇を、ぱちつかせてゐてもまことにだらしなしで、稼ぐより借が多く、一つところにそのために永く住ふ事も出來ず、年中越してあるいて、ある時などは、どこそこに空家があるといふ人の話をきいて、丁度今ゐる家には、都合上事情悪くなつて來たので、弟子に車をひかせて、その方角へいきなりこして行つたらば、生憎とその隣が前借のある繪双紙屋で、ほいこれはこれはといふようなことから、あてのない荷車を、空家のありさうな方角へひつぱつて歩きまわつた等といふ始末だつたさうでありました。

ところがそんな風なのを見兼ねた、ある繪双紙屋が骨を折つて、國周のために一つ、畫會をひらく事になつたのださうであります。會は、その時田甫にあつた國周の自宅でひらく事になつて、頼まれて、父と曉齋とが、席畫に出たのださうであります。

田甫と云へば――よし原田甫の事ださうで、さだめて今の三の輪へ近い邊であつた事と思はれます。草屋根の百姓家のような家で、緋もうせんをひいて、中々の風流な會であつたさうでありました。そのうちにお酒も出て、例の曉齋がさかんに悪口毒舌をはき出して來ました。ところが、國周は前に申しましような、氣どりやなので、困るから會をしてもらつたといふしほらしい風もなく、悪くおさまつてゐるのがどうも段々に、曉齋の氣にくわなくなつて來てゐるところにもつて來て、一寸した繪の上の話からすつかり腹を立てた曉齋が、いきなり手を出して、國周の横面をはりとばす、國周もやつぱり酔つたまぎれで、そこにあつた、墨のすりためてあつた擂鉢をいきなりとつて、曉齋の頭からあびせかけたといふ大變な騒がはじまりました。

お客様は洗足でとび出す、さうしてたゞ、あれあれといつてゐる間に、眞黒な顔をした曉齋が、まるであれ獅子のようになつて、あばれ廻るので、手のつけようもなく、皆な大弱りでありましたので、父は仕方なくおかしさをこらへて、くんづほぐれつしてゐる二人をやつと、とりはなし、それでもしつこくからみついて來る曉齋を、庭さきへやつと投げ飛ばして、馬乘りになつて了つたのでした。やつと曉齋は氣づいて、

「やお前は淸親だな、とてもお前のその力ではかなはないから、勘辨〱」と叫ぶので、父も氣の毒になり手をゆるめたのださうでありました。父はその昔居合ぬきの見世物まで出た事のある人だけに、一寸こつを知つてゐるものと見えまして、さすがの曉齋も閉口したものと思はれます。

根が無邪氣な人であつたといふことで、曉齋もおさえつけられてゐるうちに、さつきからの、むしやくしやもどこへやら、忘れて了つて、

「さあもう會なんてつまらないから、お前と俺れば一と足先きへかへつて了うじやないか。」

と云ひだして父の袖をぐん／＼ひいて、國周が、ぷりぷりしてゐる中をかまはず、そこをでて了ひました。腹を立てゝつんとすました國周の顔も墨だらけで、何とも云ひようもなくおかしく、父はたまらなかつたと云ひました。さうしてそれから曉齋は、いやがる父をはなさないでほどちかい、仲ノ町の、知つてゐる茶屋へおし上り、父は、その墨のお化けの樣な連れがずいぶん、きまりの悪い思ひをしたといふのであります。

なんといふ人達か、さすがに昔の人は、のんきなものと、つくづく思はれました。

風景畫

さてその内に、父の畫きためのスケッチが世に出る事になりました。

即ち、人形町の具足屋、兩國の大平等といふ人々が、父のかいたスケッチ帳を見て、一ふんぱつの氣で、横畫の木版にして見たら、又變つてゐてよいかもしれぬといふような事から、賣行されたのであります。

ところが、出來上つて、繪双紙屋の店へ、下げて見ると、それが意外な成功で、賣れること賣れることおどろく程でした。何しろ、新しものばやりの時で、きの早いものは洋裝などをして歩くのがひどく流行の時節柄、芳年芳幾の風俗畫もあきられてゐるところへ、又思がけない異國趣味なものでありましたので、後から後からと、この風景畫の出版もかさねられたのでありました。

父の方は、父の方で、中々在來の、木版繪具、今までのすりの手法等も、氣に入らぬふしが多く、あゝでもない、かうでもないと、色々に苦心して、自分で木を彫るやら、繪具をあはせるやら中々大變であつたとか云ひます。

それにつれて物質的には、多少めぐまれて來たものと見えまして、米澤町に一戸、大平の世話で家を持つことになりました。そして、やはり、どこか繪双紙屋の世話で、妻をめとつたのでありました。その婦人こそ、私達の、一番上の姉を生んだ人でありました。

さてその家では、父の風景畫の全盛時代と見えまして、あまり新版ものゝさいそくが煩く、父は、家内や赤坊を家の中にの

こしておいて、表戸をかたくとざし、自分一人は高窓から、外へ出入りして、用達にあるいたなどゝいふ話でありました。尤もあの足の長い父でこそ、さういふ事も自由でありましたらうが、ずいぶん家のものは、不自由で、あつたらうと思はれます。

折から、神田から出た火事が遠く、川向ふの兩國へまでも延燒したといふ東京の下町を大半にやきはらつた大火事に出あつて、父は、スケッチ帳をもつて家を出たまゝ、それからそれへと、火について歩いてゐるうちに、翌朝になり、米澤町へ、辿りついて見ると、我家は跡片もなくなつて了つてゐたといふ事でした。その時のスケッチは、多く又出版され、大そうな賣行きであつたさうでありました。そして、づつと後年になつて、それは大幅な綸絹に、肉筆でかき、博覧會へ出品され、今なほ東京市役所にのこつてゐる筈であります。

井上探景

大よそ、この時代に、父の風景畫と、同じ様な構圖で――尤もそこに流れてゐるものは、よく見てゆくうちに、はなはだしい異りを感じられますが。――やはり風景の横畫が、出版されてありますのに、署名の井上探景としてあるのがありました。

この人は父の、云はゞ門人と云ふやうな人で、父の畫を見てひどく父の持つてゐる心を慕つて、自ら弟子になつた人でありました。惜しい事には、若くして肺をやみ、ごく短命で、なくなつた人であります。

もと淺草の、並木亭の細い露路に住んでゐました。

探景とは、ひどく父は氣があつたと見えまして、この後に來た、ある家庭の事情やら、自分の持つ藝術の不滿やらから來た、父の怠慢時代にも、多くこの探景の、並木の裏の家にころがつてゐて、よく並木亭の晝席夜席を、退屈けしにしてゐたといふ事を、父は話しました。

時々、この探景のかいたものと、父のものと一緒にしたり、あるひは、父の署名のあるものでも、これは探景が事實は書いたのだ、などと、所謂、玄人筋とかいふ商賣人が云ひますが、それは、大かたはない事だと思ひます。何故なら、ほんとうに探景の畫を見たならば、父とはまるでちがつた心をもつ人である事が、一目でわかるほど、探景の畫は、細心で、さうして、まるで父とはちがつた詩趣をもつ人である事がわかります。

ひどく天才肌な人でありまして、色々と、父の話にこの人の云つた事、した事などをきいた事がありましたが、多く忘れて

了ひました。父のスケツチにのこる面影は、青白い、髪の毛を房々と、初年風に分けたのがよく、似合ふ美しい若者でありました。

長くこの人の死後も、その並木の露路の家に殘つた、せり吳服を渡世する、この人の弟さんの家庭ともお交際をしてゐました。私が幼いをりよく母に連れられて、その暗い家へ行つた記憶があります。大勢女の子がゐた家で、中には、るいれきの出來た子もゐた事を、おぼえてゐます。

「新吉原櫻花園」といふ、大さう美しい三枚つゞきがこの人のものでは、いつも記憶にのこされてあります。

それから、つひ先達の事に、何とか云ふ貴婦人方が不用品をもちよつて、拂ふ會が丸の内にありました時、何の氣もなくのぞきにまゐりましたところ、大さう細心に、上野の花見の群衆をかいた横がくがありました。一寸父のものかと思つて、よくよく見ますと、父とは異つたおもむきで、おそろしく寫實なものでありました。時代は、たしかに父の時代に違ひなく、署名はありませんが、父か探景のどちらかのものに相違なく、この古びた額を、じつと見てかへりました。姉はその話をきいて、探景にちがひなく、買へばよかつかにと、云はれました。わずか七圓とかしてありましたが、父のものを、——まして若い父のものでしたら、七圓で買ふといふ氣持が、一寸悲しかつたので、やめて了つたのでありました。

加賀町一丁目

大火事で、米澤町の家を失くした後、加賀町一丁目の練瓦家に、また新規に家を持つまでには、そこに少し時日があつた事と、思はれます。何故ならば、父の曾て話した、ある時代——卽ち畫をかく事がつくづくとつまらなくかんじた時代があつて、その時には、晝も夜も、所在なさに、並木亭に通つて日を消してゐたといふ時が、その間にはさまつてゐた事と、思ひます。

何のためにあれ程熱心であつた畫をかくのが厭になつたのか、それを曾て父は話した事がありませんでした。つくづく風景畫が版になつたのを見ると、その頃は、どれもこれも、愛想がつきる程、あきたらない思がしたといふ事は、きいてゐたやうでありますが、もつとそこに、ひどく父の心を、動搖させた何物かがある樣な氣が致します。かんがへて見れば、第一の妻が、——一番上の姉を生んだ人が、幼い姉をのこして、家出をして了つたといふのも、その大火事の後の話らしく、そして、すでに、加賀町の家に住む頃には、私を生んだ母が父と同

棲してゐた事を、思ひ合して見ても、その時分こそ、父の、人間の苦しみに出會つてゐた時かと思ひます。

母は、私と姉と、もう一人死んだ姉とを生んだ外、前に嫁してゐた先きで、なほ二人の女の子を生み、その子等と、母の母である老母とを引つれて、父の元へ來た人でありました。さうして父のところには、すでに、一人の女の子がゐたといふ、おどろく程の、煩雜な家庭でありました。しかし、その事實を、私が大きくなるまで、女學生になるまでも、知らなかつたほど、家の中は、おだやかでありました。私達は、そこに何のへだてもない心で、父の異ふ姉を、お姉さんとよび、そして、その姉達からは、可愛がられました。

おそらく、母も父と住むまでには、苦しみの途を多く歩いて來たものと見えます。けれど、大抵の世間の親達の樣に、私の兩親も、その若い時の苦しみを、話した事も、おくびに出した事もありませんでした。お前のお母さんは、もと芝居茶屋の娘であつた。そして芝居茶屋の娘といふものは、丁度今の藝者の樣なものだつた。歌も踊も上手い女だつた。――といふ樣な、かげ口のやうなものが、いつか、私の耳に入つて來て、ああさうかと、思はれた時には、もう母も父も、かなりな年でありました。

しかし、さういふ風に複雜であつた家でありましたに、割にそこにめんどうな事實も、あまりをこらなかつたといふのは父も母も、一面から云へば、ひどく樂天家であつたせいでゝもありませうか。それとも、うるさい出來事をも、ふみ越える事が、なんでもない程、根づよい心を、ちやんとお終ひまで持ちつゞけられる程のものであつたのでせうか。――想像する程父が熱情家であつたとは、一寸思へない程、もう私のもの心ついた折の父は、もの靜かな、おぢいさんでありました。そんな昔話を、想像するさえ、不似合なほど、おちついた、水のやうな人でありました。

それはさておき、加賀町の家と云ふのはつひこの地震前までは、現存してをりました。も組の足袋屋の横を、新橋の方へ行く細い裏道の、二階建の煉瓦家で、門柱の二本立つたおくに、みがかれた格子戸をひき、今は、たしかにそこに、御神燈のかゝる家でありました。

「もしもの字の足袋のとこで、とめておくんなさい。」――とよく、おまゐり歩きなどに、母の母、――私には祖母にあたる老母と出かけて、その頃の鐵道馬車にのつてかへるをり、さう御者に聲をかけた事をよく、おぼえてをります。

この老母は、およそ、私の家へ出入りする人誰でも、知らぬ

人はないほど、小林の名物おばあさんでありました。口やかましい、云はゞ、口も八丁、手も八丁で、たいがいの女達には、足元へもおつゝかぬ程の、はたらきものでありました、で、勝手元、世帶向きは一切この老母がきりまわしてをりました。その代り女中なんかはとてもつかへず、だいぶ、姉たちからも鼻つまみでありました。たゞよく働きよくしやべるのが能で、別に悪い人ではなく、その代り、向見ずの考へなしで、天保生れの江戸子ときてゐるので、さうして畏んなと云つた調子で、しやべり立てる様は一寸、三馬の作中のおばあさんそのまゝでありました。父も少々この老母には閉口してゐたやうで、とてもかなはぬとよく苦笑しては、たゞたゞ敬遠してをりました。

遂々この老母は、八十六の高齢で、父が死ぬ一月後になくなりました。が、死ぬ一年程前までは、相變らず、がせいに働いてをりました。さうして死ぬるまで、若いものと同じ様にものを頂きお醫者も、昔の方は身體のできがちがふなどゝ舌をまいてゐたほどの、人でありました。

加賀町の家では、この老母を上置きに、母とさうして姉三人、さうして後から生れる子も、生れる子も女といふので、まるで、女護ノ島の様であつたなどゝ、古くからの知人はよく云はれるのでした。

父も、この家にともかくも住むようになつて、又元の氣力をとりかへしたものか、相變らずの版下もの、あるひは石版畫、等といふ風に、仕事をしてをりました。

間もなく當世百面相といふのをかいて、大變に評判になりました。これは、多くの知人たちがモデルでありましたので、中には、七癖の、悪いところをかゝれて、立腹する人等も出來るやらさわぎでありました。といふ事です。その中には私の知つてゐる人も多く、今かんがへても、實によくその人の特長が出てゐて、をかしいようであります。藝人、落語家はともかく、例の老母、美男で有名なある宗匠お醫者様、と云ふた風でありました。

父も、その頃は、大勢暮しにはなるので、中々大働きであつた事と思ひます。横畫もぽつ〳〵とかけば、新聞のさし畫も、どんどん、木版畫は出ろといふいそがしさでありました。團社へポンチらしいものをかきましたのもその頃で、この外雜誌もかく、團子、浮世新聞と、さまざまに關係してゐました。

純浮世繪風の三枚つゞきなどもかきました。名妓かゞみとかいふ、美人の大くびで、古今の、名妓を、大きく前へかいて、その後繪に、その時代〳〵の遊野郎、又は廓の物賣などを、よくしらべて、――例の寫實家でありますから――一風變つた手

法で、かき出してありました。

しかし、美人畫といつても、歌麿、淸長のたをやかな美人ではなく、すつかり、アカデミカルに、體格をそなへた女達なので、あまりこれは、當時においての評判はよくなかつたようでありました。

この三枚つゞきは、今に再版されると見えまして、美しく畫帖風に仕立られて、はい原の飾窓などに、かざられてありますのを、ゆきづりに、ふつとなつかしく思はれる事があります。

これと同時に東京名所圖會といふ、たて一枚のものが出ました。

これは、東京の名所に、やはりあしらふに美人を持つてしたもので、たとへば、隅田の夕ぐれに、薄物を――すきやといふ、紫かゝつたものを、す肌にきつけた美人が、大きく、圖一ぱいに立つてゐる後姿の、その涼風にあほられる袖の下から、はるかに、靑葉のくれてゆく、向島土手を見渡すといふ寸法の圖がらでありました。又、冬景色は、紫ひふの一人は天神、風通小紋を三枚、ふくふくときた夜會の美人二人が、かい間見の障子ごしに、雪の不忍池の見えるのもありました。

この方は前のとちがつて、その構圖が、まつたく、今までにはないものゝせいか、ひどく賣れ行きよく、今はまるで、版の跡もなくなつて了ひました。

この様に、父も仕事が忙しく、それにいろ〳〵な交際の人々が出入りして、中々、賑な暮しでありました。私の姉、――すぐの姉は、幼くして死にましたが、その上の姉が、生れて間もなく、私達の家庭に、一人人がふえました。それは、土屋氏とよぶ人で、今に、この方は、おつきあひをしてをりますが、この時、同氏は、十二才で、父のところへ入門したのでありました。お弟子入りと云つても、探景氏、又は、田口米作氏、又は、何々といふ人々よりもづつと、家族的になつた人で、その代り、お弟子とは云ひ條、はじめは、石版屋、出版元のおつかひあるきが、大かたの役目である小僧さんのようなものでありました。

多く弟子といふような立場の方々もありましたが、みなそれぞれ早世したり、又、後年になつてからの人々は、日本の美術界が、隆盛になるにしたがひ、何々といふ大家の作が、何千金であるの、何々は、まるで、お大名の様な豪者な住宅を持つたのといふ様な、藝術家にあるまじき、名聲、富にあこがれて、一つ、畫家になつて成功しようといふやうな人々が多くなりまして、くる人もくる人もそんな氣風が見え、とうてい父の様に、たゞ「畫工」であるといふ事に、滿足する様な人はなく、みん

な、向ふから父に見限りをつけて、長つゞきする人はなく、父も、たんせいしたいと思ふ人もありませんでした中に、この土屋氏――光逸さん――は、十二の時から、父の死ぬまでも、よく情誼をつくして、お交際下すつた人でありました。同氏は、中年になつてからおもに、石版專門になられて、あまり、藝術上の才分は、世間からみとめられてはゐませぬが、私達一家にとつては、中々に、忘れ得ぬ方であります。

さて、光逸氏を加へ、ます／＼と、賑かな日々がたつて行きました。

この頃は、物質的に云つても、父の全盛時代でありましたらうか、最も、今の世の大畫伯の生活とはくらべ樣もありませぬが、父も母もまだ血氣の年頃の中で、姉達も、それぞれ遊藝をしこまれるやら、父の意匠になる模樣ものなどを、お正月にはこしらへられるやらであつたさうです。

その頃の寫生帖には、まだ若い母が、流行の髮などを色々に結つて、寫生されてあります。髮の毛の多い人で、色の薄黑い美しい水々とした母のすがたを見ると、何となく、うれしい心持であります。最も、後年、年をとつても、一寸人樣の見返る程の人で、この時代の後に來た、色々の出來事から、ひどく氣むづかしくなつたとは云へ、どこやら昔を偲ばれる風情のあつた人でありましたが、それにしても、その寫生帖にのこる面影は、一寸私の母とは思へぬ程、小意氣な人でありました。その外、老母、――いつもたすきがけで、子供達に、行水をつかはしてゐる樣なありさま、三人の女の子がそろつて、上の姉のひく三味線と一緒に歌つてゐるところなど、みなその頃の日常生活が、父の寫生帖にのこされてありますのを、見るから、和氣藹々たるものであります。その頃から變らず、出入して下さる知人の皆樣におききしても、ずいぶん、私の育ちました頃の家の樣子とは變つた、一口に云へば、一寸はでな生活であつたさうでありました。

父はかなりな大酒であつたさうであります。勿論、母も頂く方でありました。そのうちに、支那との外交がやかましくなつて來て、遂々、日淸戰爭がはじまりました。

その折の騷ぎは、私達が想像も、およばぬほどであつたと聞えまして、よく老母の話にも、さつしられます。家の木版をつてゐた職人、すり師なども、みな血氣なものは、召集されて了つて、丁度年の瀬にせまつて、稼人に出られた家では、それはそれは氣の毒なありさまであつたさうでありました。

その時父は又戰爭畫を方々からたのまれまして、これは又馬鹿な忙しさであつたさうでした。人手のすくないのをよせ集め

て、かく、彫る、するといふ中に、つぎからつぎと、やれ奉天の黄海のといふ、すばらしく勇しい畫を、父は寢ずにかいたといひます。そしてその大酒であつたのをやめて、その畫工賃を出征した職人達の家々へ、みな、ふりまいて了つたのださうであります。

さういふ事の、實際上のお世話をよくして呉れましたのが、木彫家の杉崎秀明氏であつたさうです。この方の木彫はあまり、見もいたしませんが、とにかく美術界の運動家でありましたので、さういふ父の思ひつきを賛成し、すつかりそれの事務をやつて下さつた事かと思はれます。

さてさうして、父の禁酒は大さう、やくに立ちました。その内杉崎氏も、とう〳〵看護卒として、出征しなければならぬやうになり、その暇ごひに、見えてゐた時に、私が生れたのでありました。

表通りは、鈴をさげた號外屋が、大勝利〳〵とよんで行く、家の中では出征する人に、赤御飯を出してゐるといふ中に生れましたので、ごく無雜作に、「かつ」としようといふことになつて、さう名をつけられたのだといふことを、大きくなつてから、何遍も、杉崎氏にきかされました。

今は亡くなられた同氏も、さういふ理由で中々私ども一家には、深い關係がありました。私がおぼえて、大はげでありましたので、はげぢいちやんといふ通り名をよばれて、なくなられるまで通して了ひました。

母はいつも難産でありましたにかゝはらず、その時は非常に輕い産で、また赤坊も大きななき聲をたてゝ丈夫さうな子でありましたさうでした。で度々女ばかり生れますので、父も母も、今度こそ産聲をきいただけで、男だと思つたとか申します。それにやつぱり女なので、落膽りしたとか、その上近所でも、聲をきいて、小林さんでは、こんだは男の子さんでせうねと云はれ、姉も、――一番上の姉も何となくきまり惡く、女だとははつきり云ひきれず、つまらない嘘をつき通して、しまひにお湯へ行つて、赤坊の女だといふことの、ばけの皮がはがれたといふおかしな話が、のこつてをります。

さういふ風に、私をまぜて、六人の女兒、母、老母それに光逸氏、その外、勝手働き等と、何やかの大家族で、父も、せつせと働き通して、日清戰爭の終つた後、二年程、その加賀町で暮したのでありました。

寺内の家

寺内の家といふのは、淺草花屋敷の、丁度お堂の方へ向いた入口につゞいた隣にあつた家でありました。前には鹿の子といふ待合、一直、萬梅等といふお茶屋が近く多くありました。

この家へ一家はその後移りました。

どういふわけで、加賀町の家をすてゝこの寺内へ移つて來たのか、さらに、私にも、姉にもわからないことでありました。が、ともかくも、私達は、そこへ兩親に連れられて、移つて來ました。

この家は、そのごとりはらはれたのでありませうか、前の鹿の子といふ待合も、まがり角の寫眞屋ものこつてをりますのに、その家は、つひぞ、後になつて、見ませんでした。

子供等は、山城河岸の遊び歩き、三菱ケ原のつばなつみを、淺草の奥山あるきに變へなければならなくなりました。しかし、子供等にとつて、この淺草の寺内の家は、うれしい家でありました。生人形、玉乘などといふ、思ひもよらぬめづらしいものが、ずらりとかど並にあつて、どんなにか、加賀町の遊びとは變つた、面白さがあつたかしれなかつたのであります。まだ幼い私でさえ、やつと、結ひつけの足どりおぼつかなく、銀杏櫻の梢からのぞく、紅い五重塔を見て、おまつりだ、おまつりだと、かけて歩いたと云はれました。

さてこの家での父は、戰後の浮いた空氣もやゝおちつき、だん／＼に世の中は、しきしまつて來た所から、いろ／＼前の樣に仕事もなく、石版とか、團扇の繪とか、新聞のさし畫とかのわづかな仕事ばかりをして、つないでゆくのでありました。

この家に居たのはほんのわづかの間でありました。萬梅のとなりの水茶屋から、觀音樣の亡者送りを、暗いさむい晩に見た記憶が、かすかに遠い夢の樣にのこつてをります。

その外、光逸氏が、どこからか拾つて來た、小さな鐵砲玉を、柱で何氣なくこすつてゐるうちに、それが破裂して、手に大けがをしたといふ事をきいてゐますが、それは、私の一寸もおぼえのない事でありました。

さうして、又この家も、――百日紅の紅くさいた美しい小さい庭のあるこの家も、どういふ理由とも知らず、又私達は兩親に連れられて、引移したのでありました。

お化けの出る家

今度は、新畑町でありました。

この間の火事前までは、來々軒といふ支那そばやがあつたところのとなりにあたる家で、今ではその頃とちがつて、すつかり賑かな新道になりましたが、その頃は、いやにさびれたやう

な、はかない心持のする通りでした。それにその家といふのが又、古びた二階建で、暗い格子戸、同じやうな格子のはまつたれん子窓、といふつくりでありました。

この家に來て、ぢきすぐの姉が、病ひつきました。(この人は早く病死したせいか、母などは、一番、器量よしで一番利口で、おとなしい好い子だつたと、ほめて居ましたが、私には、ぼうと顔かたちをおぼへてゐるきりぐらゐ、何にもおぼへてゐないのであります。)脊髓病であつたとか云ふ事で、薄暗い茶の間の片隅に寢かされてありました。

で、家には病人もあり、自然私達は、外へ出されがちでありました。

父もきつと、この頃には、思ふやうな收入もなかつたのでありませうか、このんで、こんな家へすむこともないのに、きつと、そこはさうした一家のふところ加減と、比例しての事であつたのであらうと思はれます。

父はいつも二階に座つて、相變らず何やら畫いてはゐました。がある時には、おかしな香のする染料のやうな繪具をねり合して、いろ羽二重などに、模樣を書いては、干して見たり、何やら工夫してゐる樣な樣子でありましたが、さて何をしてゐたものですか。あまり元氣がありませんでした。

私は姉におはれて、よく水もぐり、玉乘り、手づまの見世物を見て歩きました。そして、水もぐりの眞似をして、おかしな歌をうたつたおぼえがあります。

それにいつの頃からのなじみなのか、大かた父母の昔なじみでありませう、坂東雛助といふ役者の家が、丁度ガラス湯といふ湯屋のうらにありましたので、よくこの家へ遊びに行きました。そこでは雛助といふ小父さんが、あらいどてらをひつかけて、長火鉢の前で文錢のついた長煙管を片手に、口三味線で、よくおどれおどれと云ひました。そして若旦那、お孃さんお新さん等とかいた人形樣のかいた繪双紙、猫のお湯や、ほうづきのお湯やと、今では見られぬ繪双紙をたくさん、くれました。

思へば、この家の榮ちやんと云ふ役者の兒さんの白痴の弟が狐につかれて、それを落す、こわいようなお祈りの樣を見たのもこの家でありました。

この外にもよく行つた家に、明林堂といふおし繪やさんがありました。この家は寺内の萬梅の水茶屋を出してゐる家で、住居が馬道の方にあつて、こゝのをばさんが、たいさう、私達を可愛がつて呉れました。そのをばさんは、小机を前にして、奇麗な小切れを一ぱいちらかして、いつも羽子板のおし繪をこしら

へてゐました。こゝの隱居である人、をばさんのお父さんである人は、長唄を大さうよく彈いた人で、父とは大の氣の合つたお友達でありました。で、私達はこのおぢいさんから代る代るお稽古をして頂きました。

さうして私達が、何の氣もなく遊び歩いてをります一方、家は、病人がある、父の仕事は大した事もないといふ有樣で、中中、大變なことでありましたらうと思はれます。

この折りには、すつかり出版もなく、何となく、火の消えたやうな、淋しさであつたと母も云つて居りました。

その內に姉は死んで了ひました。どうした事か、一番上の姉はこの時、いつか家の中に見へませんでした。——二番目の、母の連れて來た姉も居ませんでした。

父にも母にはあらゆる不幸がつゞきました。病氣で死んだ姉はともかく、一番上の姉は自分から進んで、奉公に出ますし、二番目の姉は、父にとつて、可成手いたい理由で、家出したのだといふことを、後になつてきいた時、泌々と、その時の父と母の心をさつしました。

そのうちにこの家は、お化屋敷なのだといふ近所の噂がきこえて來ました。それにしてもかならず一年に一度は、お葬式が出る家だといふ、これまでの事をどこからかきいて來た老母は、すつかり氣にやんで、しきりに、又引移說を云ひ出しました。だれもお化けの正體は見なかつたのでありますが、それをきくと皆な、落付いた心もなく、たゞ一人父は平氣でゐましたが、あまり母達がすゝめますので、丁度頃合の家が、下谷車坂にありますといふのを人におしへられて、そこに移ることになりました。

車坂の家

そこは一寸變つたつくりの家でありました。格子づくりで、表から中庭が見え、その中庭に車井戸があつて、離れ座敷、倉などがありました。

ごみごみした前の通りは、たえまなく荷馬車がゆきかひ、何となく氣の落付かぬ家であつたと、後になつて、皆が話してをりました。この家に來てからといふわけではないのでありませうが、上から三番目の姉は、めだつて、大人びて來て、よく日の當る倉前で、針仕事などをして居りました。

光逸氏はこの節から、かなり石版畫がいそがしくなつたと見え、いつも胸をおし當る樣な形で、石版に向つてをりました。

すぐの姉は小學校へ通ひ、私は自然母の腰巾着でありました。しじう面倒を見てくれた一番上の姉もゐず、何となくもの

淋しい氣がしてをりました。その上この家に來てからは、父も家にゐぬ方が多く、なほさういふ氣がしました。父は、足利や桐生といつた方面に、知人に招かれて、畫をかきに出かけてゐたのでありました。これは無論版畫ではなく、自然、すたれた版畫をかいてはゐられぬので、いろ／＼屛風やら、かけ物やらをかきはじめたものと見えます。この時代に、父のかいたものが、後になつて、いろ／＼遺作の展覽會などに持ち出されますのを見ますと、浮世繪が多く、しかも、父の寫實主義の極端に出た、何となくあくのぬけないといつたやうなものが多くありました。

この頃、何故か父と母とは、あまりおだやかな日がつゞかない樣でありました。と、幼い私の心にも感じられる程、さまざまな事を見たものでありました。

何が、原因であつた事か、むろん知るよしもありませぬが、車坂の家を、買ふといふやうな話、買ふに付いては、その世話人が、何かよくない事をして、まるでぺてんの樣なことに引懸つたといふような話を、きゝかぢつてはゐた樣ですが、さて今では、それもはつきりと筋道が立つては記憶にのこつてゐません。たゞ機嫌のよくない母の顏をおぼえてゐます。さう云へば父の不機嫌な顏も見たのも、この頃はじめてゞありました。

たゞ、私達は小さくなつてゐる樣な日がつゞきました。母は老母や姉たちへの、八つ當りの小言ばかり云ひ散らして、ては、父は家が煩さいと云ふ口實に、松葉町邊の寺の座敷をりて、そこで畫をかいてゐるといふ風でした。この車坂とお寺との間のお使ひはいつも、すぐの姉で、何かしら父の好きなもの――この頃には、お酒は頂かず、甘いものが好物でありました。――をお重に入れ、私は姉に手をつないでもらつて、ほこりぽい、萬年町の表通りをよく通ひました。

どういふわけか、この頃は光逸氏も、いやに氣むづかしい人になりました。時々、もの淋しさを忘れて、はしやぎ出す子供の本性にかへつた私達が、歌をうたつてさわいだりしてゐると、おそろしい顏をして、にらみつけたりなぞして、厭な人でありました。――さうかと思ふとちつとも畫もかゝず、古い長持なんかを、とんとんとこわして、一心になつて、本箱をこしらへて見たりしてゐました。何となく、かういふ風に家中が陰氣くさく、子供ながら變でありました。

そのうちに、一番上の姉が、奉公さきの、兩國の象牙屋さんから下つて來ました。

さうして、もとの樣に、畫のつかひ歩きにも、又、上野の山へ團栗拾ひにも、よくつれて行つてくれました。どんなにこの

姉のかへつた事が嬉しかつたかわかりません。さうして夜は、何かむづかしさうな世帶話に、眉をひそめてゐる父母には、こつそりと、私をおぶつて、ぼうと水氣立つた夜の空に、一きわ明るい灯のかゞやく、淺草の公園の方へ向つて、ぶら〳〵と歩いて行くのでありました。

どういふ事が、あれほど父に厭な顏をさせたものか、かんがへても不思議な事でありました。物質的に心の美しい人であつた事は、後年、はつきり私の成人した後にでも、知れてゐます事故、物質的にむくゐられぬ生活であつたとしたところで、あんなになるわけはないのでありますに、何と云つてもわからぬ事でありました。さう云へば、母はお酒を頂くと愚痴を云ふ人でありましたが、よくその愚痴にも、この頃の父があまり無理解であつて、どんなに苦勞したかといふような事を云つてゐたようでありました。

そこには何か、父と母のもと踏んで來た道で拾つた苦勞が原因になつてゐた事でせうか。——さう云へば、父にかくれて、母は私を連れて、その頃下谷の數奇屋町にゐるといふ、父に背いて家出をした二番目の姉——母の連れ子の長女である姉である人の所へ訪ねて行つた事がありました。曾て行つた事もない母の知邊であるといふところへも、汽車にのつて行つた事もありました。いろ〳〵思ひ合して見れば、何となく、その樣な事を考へられます。

二六　新聞

何かと、家中の者皆が不愉快な、おもひ出をもつた車坂の家も、長くはつゞきませんでした。

そんな氣づまつた日夜を、とうてい父も母も、我慢できる人人ではありませんでした。で誰云ひ出すとなく、家でも變へて見れば又、そこにいゝ事もあらうかなどといふ、しごく樂天的な根が人々の事ですから、そんな風に、云ひ出して、光逸氏が家探しに出かけるといふ事になりました。

方々を歩いて、やうやくいく日めにか、光逸氏の探して來た家がありました。向島の秋葉神社の裏手に、蓮田をひかへた階家で、何々寮とでも云ひたげな趣きのある家でした。

父は例の氣で別に見にも行かず、たゞ、下檢分に出かけた母の話をきいたゞけで、早速そこをきめました。

大きな冠木門、表庭には芝生に松が五六本、房々した柳の立ち木、紅梅、海棠、小さい泉水、さうして、枝折戸をあけて出る中庭には、椎ノ木の垣をこして、さゝやかな流れをこして蓮田の一面、向ふに有馬溫泉といふお茶屋と向ひ合ひ、花畑もあ

るといふ家でありました。

上下で十二間もあらうと云ふこの家が、わずかに九圓の家賃であつたさうであります。ともかく、その頃では、一きわさびれた向島ではありましたが、それにしても嘘の様におやすい家でした。父もひどくこの家は氣に入りまして、早速、二階の二間を畫室にあてゝ、陣どりました。老母は玄關から次の六疊へ、母と子供たちはそれからつゞく中庭に面した三間を茶の間なり、遊び部屋なり、一番おくまつた四疊半のはなれは、そのまゝ空しく、光逸氏は玄關傍の八疊に机を置きました。それでもなほ空部屋が多く、臺所もだゞ廣く、それにもと醫者の住ゐと見えて、藥局らしい板敷があり、そこのガラス戸棚に、いろ〳〵な書物をつみました。

東坂では、つねに腦が惡いなどと云つてゐた父も、朝早く田舍の空氣をすひ、氣分がいく分かさつぱりとしたものと見え、二階の畫室で、一日樂しさうに筆を持つてをりました。

「向じまの家へこしたら、庭がひろくて、草もあるからたんと遊ぼうね」と云つてゐたすぐの姉は、そこへ越しておちつくと、そんな話は忘れて了つて、机を光逸氏の部屋のすみに出して、せつせと、錦繪をうつしたり、たんねんにそれを彩色したりする事をはじめました。

私達にはわからなかつた父の不機嫌の原因が、どこからのか知らぬ様に、又それはどこへか行つて了つたのでありた。いつの間にか、父は又ニコ〳〵とした好いお父さんにかりました。

「かう云ふものを畫いて見たが」などと、光逸氏や、知人のお客様などに、せつせつと、かきためた綺絹をかけて見せ、そのをきくといふ有様でした。その時代のもので、私の心にのこつてゐるものは、若い女のやみほゝけた、何となくすごい顔の畫、それから、云つて見れば、後期印象派風の風景などで、肉筆物と云つても、ひどく、日本畫の約束を無視した、獨創的なものでありました。

さうして、晩になれば、下へ下りて來て、松まきでたく內風呂に、私と共に入り、さうして、お話お話とねだる私にいろいろな話をして吳れました。おかしな事に父はよくそのお話の時に、子供の私に向つて、人情話の文七元結とか、おぎ江節とか、牡丹燈籠とかといふものを話してきかせました。

それは中々一晩では話しきれないので、又あとはあしたあしたと、おもしろさうなところへ來て、寢て了ふのでした。

まことにこの父の話はおもしろく上手でありました。しんみりと、情をふくんだ話ぶりで、子供心にも、話の中の悲しさや

おかしさにつまされる事が多くありました。――父は、その昔、並木亭のひる晩に、圓朝などの話をいやになる程、きいてゐたのでありましたので、自然上手くなつたのでありませう。

時々は、又散歩に出かけました。よいお天氣の日の午後などは、遠く四ツ木の方までも、田甫をこし雜木林をぬけて、歩いて行きました。又百花園、綱井戸といふ風に、かならず、寫生帖をふところに入れ、ステツキをもち、私を連れて行きました。さうして、かへりはもうたいていうす暗くなつた田舎道を、小唄を口の中でうたひながら、かへるのでした。

「死んだとおもつたお富さん――」とよく何のつもりか、與三の聲色をつかふのが、子供の私に感染して、二人してそんな事を云ひながら歩いたものであります。おもへばおかしなお父さんもあつたものです。

今まではあんまり幼いせいでしたか、相手にされなかつたのが、今度の家に來てからは、ひどく相手にされる様になつたのでありました。それに一つは父が閑散であつたせいでもありませうか。

秋葉の酉の市、白髪前の早朝の花市などとよく歩きました。枯れた蓮田の中の細道を、いかにもなつかしい心持のする赤い灯の、空にうつるのを見ながら、背の高い父の後からほつほつと歩いて行くほどに、柑子みかんの青い匂が高く鼻をついて來て、その店でつかみどりをするのを、父はぢつとおもしろさうに見てゐるのでありました。

父はかういふ時でも、けつしてお金入れをふところにもつてゐた事はなく、出かける前に、

「お母さんからお錢をもらつてけ」

といふ風でありました。

そのうちに粉雪が庭の松につもる、私達にはめづらしい冬が來て、やがて學齢になつて、私は村の學校へ行くやうになりました。子供心にもさつしられる程、内輪はゆたかなことはありませんでしたが、父も母ものび／＼として暮してゐるのがどんなに私達の喜びでありましたか。――

そのうちに一番上の姉が嫁くといふ日が來ました。學校からかへつて見ると、いろ／＼家の中の模様が變つてくるうちに、いつか、父がゐない日ばかりつゞく様になりました。

「お父さんは」

きまつて私がかうきゝますと、母は

「社ですよ」

と云ひました。社といふのは何の事か、わからぬながら、社といふところへお父さんは毎日お出かけになるのだといふ事だけは

合點されました。

どうかすると、私の母と思はれる程、ふけてゐて、そして又私にとりつかれどほしの姉がゐなくなり、又この頃になつて、とりわけ何につけても「かつ公かつ公」と云ふ父もゐず、何となく淋しくてなりませんでした。

で、父のかへるまでは、玄關傍きの板の間の、ガラス戸の中の書物をかたはしから出して、よみました。中でも、「清親」とある挿畫の、多く入つた、アラビヤナイトは、幼い心を、どんなに、おどらせたかしれませんでした。

その本は物語と共に又、畫も一種不思議な畫でありました。それは、井上といふ人の、我國で最初のアラビヤナイトの譯本である事をづつと後になつて知りました。

大抵は外が暗くなつてから、父は車でかへつて來ました。私はそのわだちの音をきくと、すぐ本をよして、表へ飛び出しました。いつも紋の付いた羽織に、――尤も他にはもたなかつたのかも知れませんが、――大きな折鞄をかゝえてをりました。

時には、その鞄の中から、あられの入つた袋などが出ました。さうして、その時分は、あまり二階の書室には行かず、そのまゝ下で、色々母や姉たちを前にして、日々の表の出來事などを話してをりました。

そのうちに私は父の社といふところへまゐりました。

それはたいそう賑なところをいくつもいくつも通つて、行つたところでありました。妙な風の家でしたが、づん／＼母が入つて行くのでついて行きますと、何となく物音がごた／＼したやかましい家で、二階へ上つて行くと、ある部屋に父が座つて、机の上で、一生懸命に何かかいて居りました。

そのまわりには、見知らぬ男の人々が多く座つてゐて、煙草の烟りがもう／＼としてゐました。

「如何ですお嬢さん、ほうら川が見えますよ。あれがお家の方の川ですよ。」

と、そのうちの一人が、私を窓ぎわへ連れて行つて、何かふみ臺にして、見せてくれる方角を見ますと、なる程、大屋根小屋根をこした、はるかむかうに、銀の樣にキラ／＼とひかつた、一すぢの流が見えました。

それがはてしもなく遠いものに思はれて、一體こゝはどこであらうかと、心細い氣がしました。

「そらこゝが社なんですよ」と母は、云ひました。その社といふのは二六新聞社であるといふ事が、その後、だれからきいたともなくいつか知る事が出來ました。

團々社以來、久しくひつそくしてゐる、父の行方をたづね

て、その時の社長秋山定輔氏が見えて、無理やりに、入社させたのであつたといふ事は、後になつて、家の者からきゝました。

勞働者大會

それから、櫻の時になつて、目がつら賣り、かんざし賣が、つねに人通りもない家の前を、繁くゆきかふような時になりますと、しぜん家のお客樣も、日々多くなりました。

それから、社員の人々が代る代る、宿つて行きました。その人々は、夜になると、詩を吟じるやら、はては踊り出すやら、——どうかすると、ポケツトからピストルなどを出して、さわぎまわりました。

父は別に何とも云はず、たゞ、その若い人々のたはむれを、笑つて見てをりましたが、光逸氏は、にがりきつて、はては、その人々と聲高に口論する、とめやくの母も、ずいぶん、骨が折れたさうであります。これは、その四月十五日に、二六社主催の勞働者大會をやる、下準備に、會場が、白髮神社のつひ先きの、空地であるところから、ちかい家が何のかのと役に立ち、それで、大勢の人々が出入りしたのでありました。當時にしては、勞働者大會などといふ事は、まづ、日本最初のことでありましたのでせうし、何分にも、意氣昂進した人々とて、やることが、さわぎだくさんであつたのでありませう。それに何時の世にも、さういふ事には、光る目が煩るさく、しじう、私の家のまわりは、妙な風體の人がうろ〳〵してゐるといふ有樣でした。

この勞働者大會以來、その會場の空地は、今に二六の原と、土地の人々が云ふ程、ともかくも、大人氣のあつた催しでありました。その上この社では、公娼自由廢業を叫んで、盛んに遊廓をおしまわり、おきまりのごろつきとの喧嘩などに花をさかせたものでありました。これらの運動は、秋山氏の氣質の理想から生れたものか、どうかといふ事は知りませぬが、大勢の社員達は、いく分かの衒氣と、若い心の勢とで、やれやれと云ふ調子で、云はゞ野次馬、おまつりさわぎ、又は、一つの賣名的な手法とでした仕事であると云ふ事は、打ち消せない事實でありました。

父はその人々の蜂の巢をさわられた樣な騷を、何時も、ニコニコとした微笑で、傍觀してをりました。しかし、かなりするどい批評眼で見た、政界のことは、日々の紙上に、戲畫となつて現はれましたので、淸親も危險思想であるといふ事は、かたく當時の官憲に信じられてをりました。

その樣な風で、二六はたちまち、やれ發賣禁止であるの、秋

山氏が入獄のと、この新聞の生命も長くつゞかないやうでありました。

私の家の者達は、――殊に母などは、父のゐる社であると云へば、なほさら、意地になつて、善悪かけかまいなしによく云ひたいといふような性質でしたから、一にも二にも、政府から憎くまれてゐるからとか、御用新聞でないからとかと云ふばかりの理由なしに、この新聞は、事實さう價値の高いものではなかつたらしく思はれます。

この新聞のおかげで、ひどく父も迷惑した事實がその頃もち上りました。

あまり事實がよい事でないのと、思ひ出してもぞつとする程、家の中に、暗い記憶をのこした事なので、誰一人今になつてその話をしだすものもありませんので、委しい事は、幼かつた私もよく知る事は出來なかつたのでありますが、何でも母の遠緣にあたるある家が、ひどく家庭が亂れてゐるとか、家内に、不倫な事實があつたとかいふのを、二六の探訪の知るところになつて、何分か、それを針小棒大に、三面に書きたてました。何しろ、正義潔白の金看板で、自分達は皆な高潔な人間ばかりである樣な顔をして、よろしく、筆誅してやろうと云つた意氣ぐみで、そんなつまらぬ事を仰々しく書きたてたものでありました。そんな呼賣の瓦版ものみたいなものでも、出された方は又、それ相當に困る事が多いと見えまして、母の遠緣であるところから、しきりに何とかして呉れる樣に、父に泣きついて來たのでありました。

よせばいゝ事を又父が例の佛性で、頼まれて見ればなほの事、社の方へも話し、それを中止すべく世話をやいたのでありました。

ところが、その間を、あつちこつち盡力した者が、よくない人と見え、何分か、金をとつたとかとらぬとかといふ樣な事が、反對側の、しじう、八ツ當りされてゐる新聞の知るところとなり、果ては、淸親が、さう云ふ脅喝手段でやつたものであるといふ事になり、父にとつてはまことに迷惑な事になりました。

それは刑事上の問題にまでなりました。あまりな話で、いくら政治ポンチをかくからと云つて、かならず、危險人物であるといふ樣に、きめて了ふ人達も人達なら、父の日常を見ても、父が脅喝なんていふ事をほんとうにする人かどうかはすぐと判る事でもありますのに、ほんとうに災難はどういふところにあるものかわからぬ話であります。しかし、これは、父をよく知る人々の盡力もありかた〳〵大した事はなくてすみました

が、そのおかげで、父は、すつかり、世の中を馬鹿〳〵しく思ひ、母は母で、事のおこりが自分の身内と云ふところで、なほの事、父に申譯けがたゝぬと云ひ、その上、そんな風に、二六の者であるからみんな惡い者だといふ風に、事をきめる樣なお上なら、おかみも何もあつたものかと云つた風に、すつかり捨ばちな氣持になつて了ひました。事は何でもない事でありますのに、それが一つの家庭にとつては、大問題でありました。まして、私達にとつては、重大で、父は又、いつか面白くない顏をしてばかりゐる樣になる、母はそれを見るも辛いし、何しても居たゝまらない心持から、とう〳〵老母を連れて別居するといふ風な事になりました。父の一まきは、――前に申しました父の兄姉の子等が多く、下町に居りました。何事をも母が惡い樣に、云ひたい口をきゝますので、母としても、中々我慢が出來ない程の事が、さぞ多くなつたのでありませう。

深川の父の甥の家の裏手の、二階長家の一軒へ、母は老母と共に移り住みました。根が、きかぬところをもつた人なのでで、誰が何と云つてもきかず、よほど、その問題は腹が立つたものと見え、新聞に出された家と同性の家の前へは、わざ〳〵まわり道してでも歩きたくないといふ風に、はげしい心で、をりました。

父は無論社もやめて了つて、たゞくさくさと暮してゐました。根がわりに小心な、頑固なとこのある人でありましたので、それが、だん〳〵と表へ出る程、一寸性質が變つて見えて來ました。まつたく、私達家族も、くさくさして了ひました。その上、一番上の姉が、嫁り先きがごた〳〵つゞきで、とう〳〵赤坊をかゝえて戻つてくる仕末でありました。その又連れ合がどういふ氣持か、しじう家のまわりを、うろ〳〵と歩いてゐるので、氣の弱い姉は又、いつか家を出て行つて了ふやら、もうさまざまな事ばかりありますので、父は、極端に心を傾くしてちつと殼の中にすくんでゐる樣なありさまでありました。

一體父は、ひどく若い者、――まして、自分の子等が戀愛に關した問題を、ひきおこすのを好まない、又怖れてゐた人でありました。これは、づつと後になつて知りましたが、父は、の時代以來、さういふ人間の煩雜な心理を、きらひさせる樣になつたのだとも思はれます。――ともかくも、それ程、その姉のことも父の心を亂れさせました。

母も居ず、姉もゐず、たゞすぐの姉と、その次の姉と、光逸氏とにとりまかれて、私は淋しい日を暮しました。遠く、上野の方からきこえてくる汽笛の音をきいて、どことも知らぬ風景

の寫眞などを見て、そつと、涙をながす夕方もありました。ものゝ哀れを知り初めたと云ひませうか、なんだか、無性にさみしくありました。

その内、父が重い風にかゝりました。中々の重病で、肺炎とか云ひますので、母も呼び、そのうちに母にもそれがうつつて、母も枕を並べてふせつて了ひました。

さうなると、別居もなにもなく、老母をもむかひに行き、家の中は、大混雜でありました。上の上の姉や光逸氏は夜の目も寝ずに、看護に多忙をきわめました。一方災難以來、これといふ畫料も入らず、中々困難でありました。病人やら、くらしの事やらで、今になつて見ればまだ二十とはならない姉たちが、さぞ苦しかつた事であらうと思はれます。

老母も思へば、中々大抵ではありませんでした。働く事は持前とは云へ、もう少し腰の曲りかけた身體に、いつもたすきがけで、大わらわになつて立働いてをりました。

その時には、はじめて私も使あるきをさせられました。

うちつゞく厭な事を、老母はすつかり氣にやんで、一日淺草の方へ用達の途すがら、ある易者へよつて來たと云つて、たゞならない面持でかへつて來ました。何でも、そもそも加賀町を出た時から、方角の惡い方へ、惡い方へとさして來たので、まして、車坂から、向島へ來た時は、暗劍殺とかをついて來たのだとか云ふ話で、その上、この家のかまへが金神様にさからつてゐるといふので、まだまだ、主人の命のあるのは不幸中の幸であるから、早くよい方向にむいて、うごく様にといふのださうで、すつかり老母は青くなつてしまつてゐました。

丁度、ぶら〱とまあやつと父はおきられる様になつてゐたところなので、母もこれをきくと、氣をいらだつて、家をこす說をとなへ出しました。光逸氏は、この家をさがして來た人なので、やつぱりこれをきくと、いゝ氣持もせず、今度は家さがしは御免だと云ふので、いろ〱人を頼み、やつと探しても、長しみぢかしできまらず、方角といふものが、わずかに、一ところ好いところがあるだけなので、中々きまりませんでした。

父もすつかり元氣を失くしてゐたせいか、あまり、易者の云つた事もくさしもせず、皆の云ひなりになつて、引越する事になりましたが、さて家は中々なし、一同何となく、不安な心持でをりました。

母もどうやら起るほどになつた頃、人から山ノ宿河岸に家のある事を、おしへられました。丁度方角もよし、川つきの二階家で、少し狹い事はせまいけれど、新しい家であるといふの

で、ある日私は、母と共に、渡にのつてその家を見に行きました。淺草といつても、淋しい裏道で、そこらあたりは、大きな家が多く、靜かなとほりでありました。母はすぐとその家をきめて了ひました。

河岸の家

この折には私は尋常三年生になつてました。
ずいぶん長い事のように子供心にはおもつてをりましたが、向島の住も、三年間ほどのものでありました。
こんだの家は、花川戸の方から竹屋の渡しへ行くみちすぢの一寸さびしい合ノ宿で、すぐ裏手は川で、今とちがひその頃はまだ川の水も美しく、あげしほのをりは、心持のよい程、水が滿々と、ゆるくながれ、寢おきにきく艫の音のこゝろよい家でした。
さう云へば、土手の櫻も今のように見すぼらしくはありませんでした。丁度三圍の鳥居をすぢかひに見るその家の情趣は、又向島とは變つたよいところがありました。
猫のひたひほどの庭乍ら、庭木も多く、袖垣のかくす、お隣のお庭は、さながら、豐國の田舍源氏にあるほどの立派なものでありました。その家は、本町邊の油問屋の妾宅とか、想像するよりもまだ美しい女の人が、姉妹で住んでゐました。片どなりの方は、また、朝から晩まで、ゴタン／＼と音をしめやかに立たせてゐる、障子四枚を引まわした店屋で、ぬかやさんでした。家の裏から見えるその家の樣子は、古びた軒に、せまい椽側、そのはじに赤くなつた唐茄子がつんである、何樣古くからゐる家であるらしい家でした。父は、この家を見て、橋場今戸の朝煙り時代からの家だなど丶よく冗談を云ひました。
病上りの父は、ひきつゞいて、今度は右足が痛むと云ひ出しました。
暗劍殺の一件から、すつかり御幣をかつぐようになつた母は、この父の足もさまざまに氣をもんで、その頃よく家に見えました、吾妻橋向ふにゐる、父の姪の子の子とかいふ、洋服屋さんが、ひどく信心やでありましたので、その人にすゝめられ、大そうその人の信じてゐます、長榮樣といふお稲荷さんに、うかゞひを立てに出かけました。
その時長榮樣は、淸親の足の惡いのは、性の惡い野狸がついたのだと云はれてかへつて來ました。そして、母は父に是非その野狸を長榮樣におとして頂くようにとすゝめるのでありました。
父だけについたものも、野狸とは、ずいぶん、ふざけた話

で、今考へてもおかしくありますが、そんな事を云へば、すつかり母におこられますので、そのをりは皆、だまつてゐました。

父もさすがにおひそれとは出かけませんでしたが、あまり服屋さんと、母とが眞顔に云ひますので、まあ、どんなものだかといふもの好きの氣で出かけました。

長榮様では、牛につかれた人、馬につかれた人、狐つきなどが、行者のお加持のうちに本性を出して、四つ這ひになつて、あれまわるやら、妙な聲でなき立てるやらで、大分變な氣持になつてかへつてまゐりました。

なんでも、途でたをれた、馬などを見て、可哀想にふつと心に感じたような場合、それが、馬のすがりつかうといふ氣に通じて、そして、それがついて、何とか、そのもの〻靈が、なぐさめられぬうちは、苦しむのだとかいふ事を、その行者にきいたのださうであります。ずいぶん不條理な話ですけど、母などはすつかり感服して了つて、お前たちもお氣をつけ、かりにも、道ばたのすて猫などを、可哀想だとなんかおもふな、などと云ひました。

しかし父はまさかに、お加持に通ふ風もなく、母が代理に出かけたようでした。間もなく、野狸もおちたさうで、父はその後得度した御影像をかいて、家の中に祭りました。あたりお坊さんのすがたでありました。

この後、父は何かたくさんの軸物を、ある地方からたのまれまして、大宮の百松楼といふ旅館へ、出かけてゐて、少しるすに致しました。大宮へは、すぐの姉が供で、もうその頃は、姉は、父にはなくてならぬ、繪の具ときの役をつとめられるようになつてゐたのでありました。

この時代には、光逸氏は向島の家以來、別れてべつに一世帶を持ち、父のお弟子とも云ふ位置には、一人家へとまりこみの人と、前々から時々かいたものを持つて見せにくる、おきいさんといふ女の人とくらゐでした。この人は、新堀の紺屋の娘で、一寸、一葉女史の面影のある、無口な、純下町風のおみな娘さんでした。話はたいさううまいさうで、父も大さう大事にしてゐましたが、丁度この折の大宮行きに、父のところを訪ね、一緒に、百松楼の庭で、寫眞をうつしたりした後間もなく死くなりました。

父は長く百松楼にをりました、そこのお湯が痛む足に工合よく、こちらで、ぽつ〳〵と頼まれるものもそこでかいてをりました。

この頃に父、久しく見えなかつた、杉崎氏が、訪ねて見え出

しました。同氏は當時、美術協會の役員をしてゐられましたので、しきりに父にすゝめて、肉筆畫の出品をするように云はれてゐました。父は年來の、寫實をまつたく洗練した、また一種とくべつの畫風で、源氏などの古典的な題材で、いろ〳〵かきましたが、多く好評でありました。

しかし、依然として暮しむきは乏しく、母もいろ〳〵と心をくだきました。丁度、娘ざかりを二人、おひ〳〵物入りの多くなる年頃の子弟がありますので、その上、人樣の出入りははげしく、父の氣性で、どなたへも御馳走が出したくと云つた調子で、中々母はふところが苦心でありました。

で、杉崎氏や光逸氏とも相談の上、父が二六を出ます時の、お手當にもらつてありました、公債をお金に代へて、花屋敷の前に、ずらつと並んだ店屋の權利を買ひ、この店で、何かあきなひをしようといふことになりました。それで、萬一暮が立てば、父もその方の心づかひもなく、畫をかく事が出來ようからと、母は一心になつて、その方の下ごしらへにかゝりました。

で、そこで何を賣りましたかと云ひますと、はじめは、さつとした紙本仕立の細物、又は扇子、がく面といつたものがよいだらうと、皆の說で、むろん父の筆のものが多く、こしらわれました。さてふたをあけて見ると、ちつとそれでは高價すぎて、何一つうれないのでありました。御近所は、何しろ、二十五錢の應擧の虎、至上の御尊影と云つたものの石版のかけもの屋さんが多く、又、淺草公園のお客樣では、どうもその方が手とり早いので、とうてい家はだめでありました。

で又々皆なとも相談して、今度は、エハガキを置いて見る事に致しました。

コロタイプとか云ふ寫眞版の流行しかけた當時で、父のかいた、まねぎ猫の細物をうしろにして、母は、愛想よくお客樣に、いろ〳〵の美人エハガキをお見せするような有樣で、どうやら、この方は、追々と繁昌してまゐりました。

そうかふしてゐるうちに姉のつぎの上の姉は、前々から大こん意の明林堂の息子さんへ、お嫁りしましたので、その頃は、老母が山の宿の留守居、姉は、父の手傳に、時々は父と共に、方々へ出あるきました。私は母と多く店で暮しました。

藝者の寫眞、役者の、戰爭の、(日露戰爭がこの時でありました。)又は、父のかいた、ポンチなどが日々多く賣れて行つて、おもしろいようでした。お辨當持で、母はせつせと店へせいを出す、學校から廻つた私と、夜は十時くらひまでに店をしまひ、かへり途で馬道の東月といふお汁粉屋へより、よくお汁粉

をたべさせてもらひました。

父は夜になるとよく出かけて來ました。そして、店番の手傳の私を連れて、公園の見せ物をあさり歩きました。

「さんざん、結構な芝居を、あき／＼する程見てゐるのに、お父さんもずいぶんもの好きだ。」

と母が呆れる程、父はよく見世物あるきが熱心でした。源氏節、女芝居、――それは名古屋者の達者揃で、おそろしい全盛で、淺草は當時すつかりそれらの女達に風靡されてゐて、小學校の女の子まで、やれ禮枝がよいの、友治がよいのといふように夢中になつてゐるほどでした。――父はそれらを片はしからのぞいて見て歩きました。その外、少しつゞ流行しだした活動なども大好きでありました。

この時分から、いつか父は夜は畫をかゝず、散歩あるきをするくせがつきました。

母の小商賣が、案外に、うまく行きましたので、父も無理な仕事もあせらず、なんとなく、のんびりとした日々でありました。

昔、加賀町時代に、紅葉などゝ共にやる筈であつた浮世新聞の編輯者であつた方が、ふつと、長年の外國生活から戻つて見えて、山の宿へ父を訪ねて見えました。そして、その折に、昔の新聞（と云つても雜誌のようなもので、週刊でした。）を、さえかへさうではないかといふ御相談で、それは、本文は多く英文、それに表紙、さし畫は父のかゝりで、全部木版で、名前は、インタアナショナル、レヴィウとつけ、おもに、米國へ發送されました。

社員はその編輯者と、父と、それに、西森骨皮氏とで、その外木版の方の人とでありました。一體、何がかいてある本なのか家の者は、誰れにもわからず、父は、英文の意譯の原稿をもらつては、さし畫をかいてゐました。その畫が、たいさう米國ではうけがよく、もつともその頃の畫は、昔の、西洋趣味のおくがぬけ、すつかり墨一色のかれた、スケッチでありました。――色々と外人の方も訪ねて見え、父も、Kyocka と、ローマ字の署名などをして、すつかり大ハイカラになりました。一そ、一家あげて、米國へ來てはと云ふお話も、出した方もありましたが、どうして、そこまでは父も、ハイカラになりきれず、これは問題になりませんでした。（つひこの頃になつて聞いた事ですが、この雜誌にかいたさし畫は、全部無料であつたさうで、毎月數年間つゞきました。）

その外、父は「渡米」といふ雜誌の方もさし畫をかいてをりました。これは、片山潜氏の雜誌であつたと思ひます。時々

同氏が、父の隅田川の目の下に流れる畫室に見えました。どういふわけで、父が、同氏と御ちかづきであつたかしりませんが、よく、高等係何々といふ名刺をもつた男が、何故、同氏と交際するかとか、同氏はおそろしい人物である事を知つてか、知らぬかなど丶、き丶に來ました。けれど、いつも、かんじんの用件は不得要領で、その男達も、父の、のんきな話を變な顔をしてきいて、かへるのでありました。社會主義がどんなにおそろしくても、又、政府の高等係が、どんなにうるさくても、父にとつては、馬の耳に念佛で、お手數をかけたゞけが損といふくらゐな事も、その後は、わかつたと見えまして、どんな人々が出入りしようが、あまり煩く申してはまゐりませんでした。

その時分は、私も尋常を出る年頃でありました。父は、どういふ思ひ付きか、しまいに、私に、外國語の知識の必要な事を云ひきかせまして、ある所を、先きの、インタアナショナルレヴィウの編者の方に、紹介して頂き、學校のかへりには、かならず、その方の勉強にまわるやうになりました。

姉は、專心に畫を學つてをりました。――母はさうして、店を一生懸命にして、父も安氣に、さうして、二人の娘達は、一寸、御近所の方々と、好みのちがつたものにしたて上げやうといふ心ぐみでありました。

そのうちに、どういふ機會があつたか、かなり長年、家を出たま丶、出入りのできなかつた上の姉が、父のところへ人づてに詫を入れて、出入りするようになる、又その次の姉も、さまざまな世の中の波にもまれたあげく、一つの家の女主人に、落付ける身分になつたので、母を慕つて、これ又、いろ〱とつてをたよつて、家へまゐる様になりました。

何となく、家の中がにぎやかで、老母などは、ひどく幸福に見えました。

丁度、姉の、――すぐの姉は、年頃ではあり、方々姉達も心配して、何とか身のかたまるやうに、などゝいふ話をもちこんではまゐりましたが、この頃は、ひどく父は、すべての結婚話を、きらう風でありました。父は、ひどく、その結婚といふ事をも、戀愛といふ事をも、きらふ風でありました。私などは、まだまだ子供の事でありますし、何が何か、判らぬながら、この父の意見を奉じなければならぬものと信じる程、これらの問題には、父は頑固でありました。母は無論、一にも二にも父次第の人の事で、なほの事でありました。――もしかすると、母は、父以上に、それらのことは、頑固に、厭ふといふ風でありました。よつぽど父母は、さういふ事で苦い經驗をなめたもの

と見えます。可愛いゝ子等であればあるだけ、その苦さを、子等には味はしたくないといふ親心でありませうか。――さういふ風なので、しまひには、姉の縁談をもち出す者もなく、たゞたゞ、私達二人は、ひたすらに、兩親の柚婷風の中に、幼い夢を見つゞけてゐたのでありました。

そのうちに、戰後の不景氣のあをりでもありませうか、花屋敷前の店も、かいむ、賣れない樣になりましたので、結局、費用だをれでありますので、思ひきつてやめる事になりました。それに、私も女學校へ入る年頃なので、山の宿からは、その頃、電車の便もよくないので、杉崎氏の親類の家が空くので、そこへ移る事になりました。

そこは、牛込見附を一寸入つた、富士見町のとある横町でありました。一足出れば、神樂坂の繁華な街をひかへ、そのくせ、ゐまわりは、ひどく靜かなところでありました。父は、又河岸とはちがふ靜かさが氣に入つたようでありました。一寸陰氣な心持のする家ではありましたが、私の行かうとする佛英和には、歩いても歩ける程度な場所なので便利でした。母は、下町住ひを多くつゞけた人だけに、何となく田舍じみて、などゝ云つてゐました。

富士見町

富士見町の家といふ言葉は、私達にとつて一つのなつかしさと、又忘れがたい哀愁をもたらす言葉であります。

丁度、二十から二十六七までの姉と、十四から二十一までの私との朝夕を暮した家で、その上何事にも、さまで、心を働かせなかつた今迄とはちがひ、やがては母を失ひ、晩年に向ふ父と共に、ふかいふかい思ひ出をのこす日々をすごした家でありました。

暗い玄關を入つて、右の茶の間には、老母といつも猫の眠つてゐる炬達、長火鉢、簞笥、佛壇などをおき、左手は勝手につゞく女部屋、つき當りの八疊は、父の畫室、その隣の六疊は、姉と私の勉强部屋にあてられてありました。

この家に移りすむと間もなく、父のために、その六十一のお祝をかねて何か畫會のようなものをして下さらうと、お友達方の御相談を頂きましたので、父もお受けいたす事になりました。

唐紙半折に、千枚の畫をかけといふ御注文なので、父もせつせと畫きました。

そして、その當日は、季節はづれの大雪の四月八日、兩國の

伊勢平（今ではさうは云ひませぬが）でありました。

常に父のまわりに見える方々は、前日から宅につめてゐて、それぞれ仕度に働いて頂きました。姉たちも、みんなよつて來て、父のお祝ひの會には出席しようと、みな、それぞれ樂しさうに立働いてをりました。前夜の十二時頃から、ほた〱とした雪がふり出して、春の淡雪だからと、みな高をくゝつてゐた眼を、おどろかすばかりの、翌日は大雪になりました。

父は、これではとてもお客様も見えないであらうと、一たんおきたのを又寢つて了ひますと、車にのつて、使がまゐり、どうもお客様がたいさう見えて、みな先生をお待兼ですからといふので、おどろいて、父も出かけました。母も私達と、雪の中を車にのつて出かけました。さかりの花の上を、雪がつもつて、今まで見た事もない美しい景色の日でありました。

ともかくも、そんな日に見えた方々が、非常に多く、千枚の畫が、全部でたらぬくらゐの盛會で、父もたいさう面目をほどこして歸つてまゐりました。

清親は浮世繪しかかけぬと思つてゐたら、肉筆も又、珍らしいものであるといふ評判を、それからうけまして、その後は、つぎからつぎへと、それぞれ御注文もあり、おかげで、母もくらし向きの心配も少くなりました。當時は、やうやく世間が、文展などのために、美術を觀賞しだした頃でありましたので、畫壇の運動もはげしく、杉崎氏などは、ひどく多忙の御様子で、その中を毎日の様に見えては、姉の畫をかく事をはげまし、そして父にも何か出品畫の様なものをとおすゝめになりました。しかし父は、つひに、一度も大きな出品畫には筆をとりませんでした。そのくせ、賴れものには、相當に大きなものもありました。

その氣運に連れてでもありませうか、父は、一時やめてゐたスケツチ歩き、又は、名家の秘藏にかゝる名品などが、美術協會などに展覽されると、すぐに姉をつれて出かけるといふ風でした。そして、よく又、展覽會をも見てまわりました。一般、日本畫のよりは、西洋畫の方を多く好んで感服してをりました。

父のスケツチ歩きは、たいていの日曜日で、この時の供は私でありました。徒歩で、雜司ケ谷、目白、はては遠く、むさし野のはづれまでも歩きました。目にさえぎるものゝない青空の下で、父と子は、草の上に座し、あまいお菓子を出して食べながら、日のくれるのも忘れるほどでありました。

この頃の生活は、まるで、昔とはくらべものにはならぬ程質素なものであると、よく老母が話しました。が、その昔を知ら

ぬ私には、べつに何とも思へず、家ほどよいところは外にはないとばかり思つてをりました。

學校をしまつてかへつて、ランプ掃除、それからおさらひ、夕飯、そして、父が散歩に行くのについて出るのが、私の日課でありました。六十をこした人とおもはれぬ元氣で、そして、子供らしい心の人とて、緣日のものうりはかたはしから立ちどまつて見てあるくといふ風でした。

よく話をして呉れる人でありましたが、この頃は、又よく話をきく事の好きな人になりました。姉は無口でした故、あまり變つた話もしませんでしたが、私が、學校の出來事なんぞまでも、それからそれへと、きゝたがりました。わけて、父の好きでありましたのは、學校の宗教であるカトリックの樣々のならはしの話でありました。

ほんとうの意味はともかく、母もその宗派の人々の、清く純一に、强くあれといふのがひどく氣に入つてゐるらしくありました。――私さへ好きであるならば、その神の下女である童貞女に、私をさゝげて了つてもよいと、ほんとうに思つてをりました。

この頃から又、父は好んで讀書をいたしました。二葉亭のもの、又は花袋の小說などを愛讀してをりました。

美術界が、日に日に盛んになつて行きますにつれて、畫なども一寸、投機的な目的のものになる樣なことになりはじめて行きました。

文展の何等賞のはいくら、誰々のは何千金と云つた調子で、畫そのものよりもその價の方が、より多く人氣をあほるといふ習慣は、自然、父の畫などは、見かへらないやうな時になつて行くのでありました。

で、父の畫なぞは、だん／＼と世間から忘れられて行くばかりでありました。一頃は、かなりな依賴品でありましたが、それもおひ／＼と片附いて行くうちに、まつたく閑散になりました。で、丁度招く人がありましたので、父は、金澤の方へ出かけて行きました。その時は、姉も供に行きませんでしたので、その方面で、どういふ仕事をしましたか判りませんが、半年ほどの滯在に、かなりなお禮をもつてかへつてまゐりました。もつとも、それとても、大雅伯の一枚の勞作に、あたひするほどのものではありませんでしたが、百圓もあれば、一年は樂であらうと、平氣な顏で云つてゐる父の事でありますから、勢よくかへつて來ました。

その後も、信州とか、青森とか、それからそれへと、スッケチ旅行を兼て、知人の招くまゝに歩いて來ては、一家の暮をた

て〻行きました。ほんとうに父として、この數年間はよく勇敢に働いたものと云はねばならぬと、今にして見れば泌々と思はれます。けれど、中々に意地の張つた母の事とて、私等には苦しい事も話しませず、たゞ、い〻氣になつて學校へ通ふのが、自分の仕事のやうな氣で暮して居たことを、まつたくもつたいなく思はれるのであります。

「お父さま何をしてゐらしやるの。」

「畫をかきますの。」

「まあ、何と云ふ方なの。」

「清親と云ふんです。」

かうした對話は、よく私の廻りにおこりました。若い女學生達には、父の名を知らぬ人の方があたり前の時代でありました。

文展の賞をうけた方々は、そのくせ、大した人氣で、女學生たちまで、あ〻のかうのといふ頃などでありますのに、あまりに父の名を知られてゐない淋しさが、まだ少女である私には、たまらなく悲しくありました。

本科の學年を卒業する時に、何か、私も畫をかいてならべねばならなくなり、上手でない私は姉と相談して、父のスケッチにある、江戸川べりの晩春を、そのま〻大きくかいて出しました。その折圖畫の先生であつた日本人のO先生が、大變にほめて下さいまして、

「あなたもお父さんのお子さんですから、畫家におなりになつたらよござんす。」

とまじめに云つて下さつて、ほんとうは、父の模寫であるといふ事のきまり悪さと、思ひがけなく、その先生が、父を知つてゐて下つたとの嬉しさで、すつかり、あわて〻了つた事を記憶してゐます。

その年の秋のをはり頃から、母が風を引こみ、どうも、はかばかしくなく、遂々、年を越して、どつと寝ついて了ひ、櫻のさかりの四月の半に、五十五才で亡くなつて了ひました。

その後は、姉と私とで、もう老母は、ほとんど座つたなりでありましたので、できぬ乍ら、世帶の事をやつて行かねばならなくなりました。今までは、何しろ、母一人の寸法でやつてゐた事とて、中々私等の手にはをへず、毎日の様に、當分は、姉たちが見まわりにまゐりました。氣の毒な事には、父も餘計に心づかひでありました。

前々の様に、旅に出れば、長くかへらぬといふわけにはゆかず、急いで出かけて、急いで仕事をしあげ、又急いでかへつて

來るといふ有樣でした。

父が、信州の上諏訪へ、例の樣にして、出かけてゐました留守に、つひぞ、見えなかつた、大平の御主人が見えて、又昔の樣な、横畫の風景が出版したいといふ御相談に上つたといふ事を云つてかへられました。

と二三日して、又玄關に人が見えて、

「えゝ人形町の具足屋でございますが、先生は」

と云ふ聲で、あまり長らく、便りのない同氏が、人の話で、支那とかへ行つて、すつかり失敗して、大かたあちらで亡くなつたものと見え、どこにも音沙汰なしだといふような事を云つてゐた時でありましたので、もう眞暗になつたくれ方ではあり、何となく氣味惡く、すぐには、取次にも出られない樣な氣持――(後になつて、姉と大笑ひをして了ひましたが)――でした。

やつぱり同氏も、横畫の事で見えました。そのうちに父ももどつて來ましたので、その話をしますと、昔の樣なと云つてもさてあんなものは今更らしくかけやしないと云つて、あまり、氣乘りもしないらしい返事でありました。

そのうち、又、別な人が見えての話に、この節は、大層、父の昔の風景畫が値うりが出來るので、再版も出來、又僞物までも、出來てゐる有樣で、昔からの彫師、すり師などは、唐紙などにはりつけてもつてゐたものまではがして、賣始末だといふお話をきゝ、たゞ程と思ひました。

いくらその樣でも、かんじんな畫手には、まるで沙汰なしで、その人からきくまでは知らぬ有樣で、これが父の樣な人ですから、へえさうですか、ですみますが、ずいぶん、世間は勝手なものでありますと、家中で笑ひました。

一枚、二十錢たらずのものが、わずか、一圓に賣れるのもあれば、中には、花火とか、雪とか、特別によい出來のものは、十圓の二十圓のといふのだとかと、いふ事をきいても、さつぱり、父は何とも思はぬらしくありました。したがつて、後の注文も、おひそれとはかゝず、そのまゝになつてゐました。

丁度その頃は新劇などがあつちこつちに盛んでありました。父は東京にかへれば、そのはやり物を見て歩くのが、又好きでありました。伊庭孝のメフイストは、わけて好きでありました。

まだ專攻科にをりました私も、御多分に洩れぬ文學づきで、色々なものをよみ散しますので、父は退屈すると、それらを私の机の上から持つて行つて、讀みふけつて居りました。

そして口癖に、勉强しろ、勉强しろと申しました。

その當時は、ずいぶん世間が煩さく、書稻社などは、おもひきり冷かされたり、馬鹿にされたり、ある事ない事さんざんでありましたが、私もその仲間の一人であるといふところから、木氣になつて、心配する人達も多くまわりにありましたが、父は、てんでそんな事には、無とんちやくでありました。

私のお友達なども、よろこんで、父は自分の畫室にお迎ひいたしました。死くなつた野枝さん、富本さんの夫人さん等は、よく父に昔話をきかされてゐた方々でありました。

しかし、そのごもよくあつた、若い男女の、自由戀愛の問題などは、やつぱり父は好みませんようでした。よく、「虐げられし人々」を愛讀してをりましたので、あの中の、ワニヤの様な人が、自分の好きな男だなど〻申してをりました。

しかしこの頃の作品には、あまりい〻出來なものも出來ませんでした。日本アルプスの風景などを、いく枚も畫きましたが、やつぱり、自分の氣に入らぬ節が多いと見えまして、そのま〻部屋のすみに、かさねて立てかけてありました。

何かの折に、木下杢太郎氏が、昔の父のスケッチを御紹介になりました時には、父は、ひどく、あんな物をと、恥じ入つてをりました。

たゞ枯れた水墨の、一寸したなぐりがきに、さすがはすてがたいところをもつたものは、その以後も多くありましたが、つひに人様のよろこぶ、昔の、異國情調をもつたものなどは、一つもかきませんでした。

さう云ふ情熱は、父の年と共に、いつか過ぎて行つた夢であつたのでありませうか――たゞ、世間の人々は、清親といふ畫家は、年と共に退歩した等といふ批評をするのでありました。

しかし、當人の父は、けつして、そんな、老ひさらばひた氣は、さらに持たなかつたのでありました。昔は昔、今は今だといふ氣で、父のよく云ふ一生の勉學の道程をつゞけてゐたのでありました。

ことにおかしくありましたのは、つひ富士見町の御近所でありました川柳の久良岐氏が、一度遊びに見えた後、ある雜誌に、

「ポンチの老木に新しい女の花が咲き」

といふ川柳をか〻れ、それを又御丁寧に、お送り下さつたのを見て、父は、大不服でありました。

「だつてお父さん、六十いくつのお父さんをだれも、若者だなんて、書く筈はありませんよ。」と、私と姉とが、おかしがつて申しますのに、

「いや年はとつても、私のボンチは老木ではない。」と云つて、きゝませんでした。

その樣に、冗談にしろ、老いたと云ふ事は、自分から云はぬ人でありました。

けれど、そのきかぬ氣ながら、母の死後二年目あたりから、どうも右の筆をもつ手が、痛み出しました。長年の筆の勞働のせいであらうと、自分では云つてをりましたが、醫者は、リウマチであると申しました。

これには父もひどく閉口して、畫をかく道具は、並べたゞけで、火鉢の前で、背をまるくして、本を讀みくらしてをりましたが、中々服薬ばかりでは、はかばかしくなく、すゝめる人があるまゝに、溫泉へでも行つて見ようかと云ひ出すのでありました。

かうした病の出るせいか、その前後から、ひどく、私達の姉妹の行末を案じ出しまして、內々氣をもんでをりましたやうでありました。と　丁度ある人が持つて來た話で、例の父の性急で、一も二もなく、しきりにその頃氣にしてゐた事ではあり、その話をまとめ、ともかくも、年の若かつた私が、他所へかたづけられる事になりました。

そうして、私が家を出て、一年目と少したつうちに、急に父の容體が惡く、歸つては、又行きしてゐました信州の淺間溫泉から、九月の末にかへつてくると、そのまゝ床についたなりで、十一月の二十九日といふのに遂に永眠して了ひました。

まことに、私等にとりましては、名殘をしいことでありました。父の最後の家は、姉一人で、都合惡く、上の姉達の住居の近くと云ふところから、瀧の川に、父の溫泉にまゐつてゐた留守中に、移つてをりましたので、その家でゞありました。この郊外の、霜の深い朝を、今更父を見送つた悲しみに、一しほ、寒く肩をつぼめたその日の事を、いつになつても忘れる事が出來ないのであります。

姉と逢へば、いつも父の思ひ出話でありました。大きかつたこと、そのお菓子好きであつた事、時々歌つてゐる淸元の鼻唄のこと、それからそれへと、つきないのでありました。

大きかつたと云へば、ちやちな夏物などは、とうていきられず、大かた片袖がたりない程でした。その昔、茶番をしたをり、お輕になつて、高島田のかつらをのせたらば、天井につかへたなどゝ、嘘のような話もありました。――肥肉ではなく、たゞたてに長く、私のお友達のある夫人は、越前の手長のかいの樣だと云はれましたが、ほんとうに、おかしいほど、長い人

でした。

お酒をやめてから、めつきりと、お菓子づきになりまして、まるで子供の様に、お八つを催促しました。何にもなくて、一寸口さみしい時には、干したかきもちを、ちやんとかんの中からもち出して行つて、繪ノ具をあぶる網の上で、ぷん〳〵匂ひをさせて、一人やいてゐる事もありました。

ある時は、例の通り、少しさみしくなつた時分と見え、本をよんでゐた私一人の茶の間に のつそりと入つて來て、その長い手をのばして、佛様の中から何やらつまみ出して、頂いてをりますのを、ふつと見ると、それは親類の女(ひと)が、先刻持つて來て呉れました、七面様のお砂を、おき場にこまり、一寸佛様へ入れておいたのを、出して食べてゐますので、私はなみだが出る程おかしく、父はまた、落雁だと思つて、半分もうすでに、のみこんで了つたと云つて、さすがにしぶい顔をしてゐるおかしさで、さんざんお腹をかゝえたことがありましたが、落雁を見ると、今だにこの時のおかしさを忘れられないのでございます。

こんな事を、思ひ出せば出すほど、父はまだ死んでゐるとは思はれないのでありますに、まだ生きれば生きてゐられる年な

のを、さて、命數と云へば仕方なく、ほんとうに、はかないものであります。

踊と唄の地方色

松川二郎

潮來出島の
眞菰の中で
菖蒲咲くとは
しほらしや

此の優にやさしい歌詞を、あの春の水の流るゝやうな本調子の潮來節で聽くときは、人のこゝろは自づと水郷潮來にひきつけられて行つた、ほんとうに水郷情調のにじみ出てゐるやうな唄だ。潮來は古くから、一種の歡樂郷として聞えたところで、水郷の三社詣り――利根川を船で下つて香取、息栖それから鹿島へ參詣してくるのは、江戸時代には一の型のやうになつてゐた行樂であつた。或ひは、歸りの遊廓を樂しみにして、三社參りに出かけるやうなのも、少くなかつたのではないかと思はれる。今日でも、東京附近一二泊の旅としては、殊に晩夏より秋にかけての旅としては、ちよつと是くらゐ愉快な旅は、他には見出されなかつた。無論初夏から夏にかけても、秀れた行樂の一つではあるが。

潮來へゆくには、佐原から小蒸汽で横利根を通過してゆくよりも、矢張り津の宮（香取）の大鳥居下からお船でギッチャラコ、大利根の閘門をくゞつて與田浦へ出て、加藤洲の十二橋を經て行くのに趣きがあつた。舟は眞菰の中を、すべるやうに漕いでゆく。右を見ても左を見ても眞菰ばかりで、昔、十六島と云つて名高かつたのは實に此あたり、島は陸つゞきとなつて、蘆荻菰蒲の生茂つたところ、今は多く水田と化した。誰やらの紀行に、中天の小さな日影を浴びながら褌一つといふ無態で、水揚車に乘つかり無限の足踏をつゞけてゐる農夫達のその尖微な尻を見上げながらゆく、と云へるものも、亦一つの水郷情景である。

こゝは加藤洲、十二の橋よ
行こかもどろか思案橋。

兩側から樹の枝がさし出て、さながら青葉若葉のトンネルを

つくつてゐる態。螢の名所で、夜は宛ら星の世界をゆくやうだと。

並ぶ灯(ともし)は、潮來の曲輪
月はおぼろの十二橋。

橋つきて北利根のひろい流れに出る、對岸は卽ち潮來の町で此あたりを菖蒲河岸と呼んでゐるのもなつかしい。町は北利根から北浦へ通ずる運河に沿ふて半里に伸びてゐる。――イヤ、私は潮來案内を書いてゐる筈では無かつた、すぐ其の唄と踊とに入らう。

明治初年頃迄は十軒ばかり在つたと云はるゝ妓樓も、今は纔家、菖蒲樓、玉樓の三軒となつて僅かに殘つてゐる。然し引手茶屋の方は、未だ十五六軒も殘つてゐるやうだ。都の人の行つて泊る旅館は、菖蒲橋の袂にある三層樓の「角菱」、二階からも三階からも、居ながらに水鄕の全幅を展望して、水鄕情味を滿喫することができる。名物の菖蒲踊も此宿で取計らつてくれる。必らずしも妓を買はなくとも好いのだ。

さり乍ら、其の踊なるものは、決して唄の文句のやうにしほらしいものではない。歌と三味線は藝妓が承り、（外に太鼓がはいる、）踊子は凡て娼妓だ、鮟鱇のやうに逞しげな女が、松丸太のやうな脛を出して、赤い腰卷を蹴飛ばしながら「アリヤサー」と來るところは、さあ何と云はふか、滅法活潑なものである。三味線も二上りで、所謂「潮來節」の本調子とは頗ぶる異つたものである。おれの好いのどで（誰だい笑つたのは？、三歩前へ出ろ）一つやつて見せうか。

歌手　揃ふた〲よ、踊子がそろた
踊子「アリヤサー」
歌手　秋の出穗より好く揃た
踊子「ションガイー」
合唱　よく揃た、秋の出穗よりよく揃た、ションガイー、
「潮來出島の眞菰の中で、アリヤサー、菖蒲咲くとはしほらしや、ションガイー。
合唱　しほらしや、菖蒲咲くとはしほらしや、ションガイー。
「こゝは加藤州十二の橋よ、アリヤサー、行こか戻ろか思案橋、ションガイー、
合唱　思案橋、行こかもどろが思案橋、ションガイー。
潮來出島のさんさら眞菰、アリヤサー、誰が刈るやらうすくなる、ションガイー
合唱　うすくなる、誰が刈るやらうすくなる、ションガイー。

踊は二段に分れ、あとは甚句になるので、こゝで三味線の調子（本調子）を直す間、踊子は暫時休憩とある。

揃ふた〳〵よ足拍子手拍子
秋の出穗より、ヤンレ、よく揃た
ヨイ〳〵ヨイヤサー

囃詞　潮來通ひの船なれば、津の宮前から帆をさげて、濱町の河岸へと、のりこめ〳〵。

どうせやるなら、大きな事おやり
奈良の大佛ヤンレ蟻がひく
ヨイ〳〵ヨイヤサー

囃詞　松前殿さま持物は、いかだこなまこに鯡の子、數の子もて來い、醬油かけろ。

囃子の唄にはいろ〳〵ある、御多分にもれず淫蕩なのが多いが、娼妓に云はせると、此蹈は客に對する挑發機關だらうからそんな事は當然すぎる程當然なことであらう。その中に一つ『こゝは神崎(かうざき)森の下、かぢをよく取れ船頭どの』といふのがある、神崎森の下は大きな渦流のあつた所で、往時利根川航路の最難所として、船頭の頭を痛めたところだ相である、それが今も唄に殘つてゐるのだ。

潮來節の變遷に就て――などゝ、何もおれがちよいいじみた講釋をしなくても、式亭三馬の「潮來婦志」を一寸失敬すれば、大凡のことはわかる、かれ曰く、

『……江戸にて唄ふ「いたこぶし」と云へるは此里の川崎節とりて、章句を江戸流になほしたるものなり、世に潮來いふてもてはやすは、これより始まれり。尤藝妓は歌をうひながら三味線をひく、女郎はつれびきにて、一人は太鼓を打つ

川崎サワギヘ　わしが―思ひは―仙臺河岸よ―、立て―しイやらアいの―、數ゥよ―り―も―、ヲサヤレヤレ〳〵、ソレソレ〳〵〳〵〳〵〳〵

但ソレ〳〵といふ囃子はいふにゝばず、凡て合の手のはやし方、江戸と違ひて甚だ口早にはやして、後より追かくるやうなり。……まことに古を忘れぬ姿、おろかなる鄙に及ばず、おもしろきこと譬ふるに物なし』

イヤに感心してゐる。右の唄にある仙臺河岸の名は、今も尙のこつてゐる。潮來は江戸時代には奥州より中山道に通ずる要津として、所謂出船入船千艘の盛觀を呈し、諸國大名の倉屋敷など建ちならんでゐた。仙臺河岸はその一つであつた。

潮來節が「江戸に出でたる頃の唄」として、常陸國誌に掲ぐるもの二三を擧ぐれば、

逢ふたうれしさ別れのつらさ、
逢はぬ昔が增しかいな。

しだれ柳に櫻を咲かせ、
梅の匂ひをもたせたや。
夢の浮世に見る夢さへも
みるが憂世のならひとて。

など、拾遺集の「逢見ての後の心にくらぶれば」や、後拾遺の「梅が香に櫻の花を匂はせて」續古今の「うつゝにてあるだにあるを夢にさへ」等の作り替とも思はるゝ、品よくしかも情緒の濃かなるものであつたらしい。潮來節は潮來に起つて江戸に入り、本家の潮來には却つて其の跡を斷つに至つたかたちである。

菖蒲踊を見て歸つて、『一等國だと威張る前に、先づ彼の陰慘な踊を何とか始末して貰はふ』と云つた男がある、了見の狹いことを云ふもんぢやない、あの盤趣滿々が御愛嬌なのである、潮來くんだりへ行つて、へたな常盤津でもきかされたら、それこそ堪るまい。眞菰の根にこびりついてゐる泥臭いところが潮來の味なのだ。その潮來に、菖蒲の一本だつて無いのさへ、私は面白いことだとおもつてゐる。

◇

松岸の「大漁踊」とくると、菖蒲踊に更に毛をかけて、痛快至極なものである。それは俗に「松岸の芳流閣」と呼ばれてゐる妓樓開新樓の名物の踊で、自ら「現代戲作者」と名乘る森曉紅が、實錄で懸値なしに書けばと斷つて、極く遠慮のないところを紹介してゐる、一寸それを拜借しよう。

『樓閣の大廣間、宛御殿の如く古びて、疊は赤黒く光りを帶び二十何人グルリと輪をつくつて、何が何して此ヶ漁年と、手振を揃へて踊る姫なる者の態姿たるや、いづれ豚やらもゝんぢやら、然も其の手振り足取り、エンヤコラサが杭打の綱を引く如く、亦廊下に持出した大太鼓を打込む者は、汚れたメリヤスのシャツに半股引といふ失禮御免の荒くれ男、此れに加へて地方に竝ぶ藝妓三人、女按摩にさも似たり……。

曉紅、振られたな?。これでは餘り可愛さうだから、私は少し賞めてやる。その大廣間は利根川に面して、――利根川と云つても彼へんになると、ひろびろとして、宛然海洋の趣きがある、川風のぢかに吹込む廣間を明放して、その海洋のやうな潮の波光を望み見ながら、大漁踊の妓群に擁せられて大盃の満を引くのは、くすぐたい乍らに、一種豪快な氣分がある、失禮御免の彼の荒くれ男のドンと打込む太鼓の音で、御祝儀の多寡が村中に知れわたるのださうだ、東京の紳士よケチな眞似はできないぞ。

それに松岸は、汽車で行つては甚だ平凡だが、佐原あたりか

ら船で下つてゆくと、水郷の旅としての興味がふかい。だん〳〵下つてくると、水勢悠々として、川といふよりも江といふ感じに近く、兩岸は目も遙々と、舟から見えるものは只水色ばかりで、その水線の果てに野の線が眉黛のやうに、低い一線を刷いて見えてゐるにすぎない。

兩岸には蘆荻が多く、よしきりが、水の底から湧き出るやうに、鳴いて飛ぶ。

『まるで繪のやうだね。』

『さうだね、ちよつと龍宮と云た態だね』

芦の一すじのやうに、空を限つた青い水線の上に、ポツカリと浮き出た一樓閣を、夢見るごとく望み見た時に、船客の誰彼は口々に、かく歡喜の聲を放つであらう、その龍宮城こそ即ち大漁踊の開新樓である。

大漁踊の唄はかうだ。

一ツトセ　一番づゝに積立てゝ、川口おしこむおゝやごゑ。この大漁船。

コリヤ〳〵イ。

二ツトセ、二葉の沖から外川まで、續いておしこむおゝやごゑ。この大漁船。

コリヤ〳〵イ。

三ツトセ　皆一同にまゆをあげ、かよはせ船のにぎやかさ。此の大漁ぶね。

コリヤ〳〵イ。

「此大漁船」は「大漁だねエー」とも云ひ、コリヤ〳〵は時にナンダイ〳〵ともなり、ア、マダ〳〵ともなる。

四ツトセ　夜ひるたいても焚きあまる、三ばい一ちよのおほ鰯。此大漁船。

五ツトセ　いつ來て見ても干魚場は、明間も隙間も更に無い。此の大漁船。

六ツトセ　六つから六つまでかす割や、大割り小割りで手に餘る。此大漁船。

七ツトセ　名高き銚子の高瀬船、粕や脂を積み送る。此の大漁ぶね。

八ツトセ　はちだの沖合若い衆が、舞祝衣揃ふて宮まゐり。此の大漁船。

九ツトセ　此の浦守る川口の、明神御利益あらはせり。此の大漁ぶね。

十ツトセ　十を重ねて百となる、千をとり越し萬漁どし。

ア、大漁だね。

云ふ迄もなく、漁夫の間に行はれた豐漁祝ひの俗謠で、今で

も漁夫仲間の酒もりには、必ずこれが出る。それが妓樓の名物となつて、年に一度ぐらゐ、銚子の劇場で大漁踊の興業をすると、まゆわいを着た漁師どもがぞろぞろと、木戸錢を拂ふて見物に行くのだから、世の中は逆さまなものだ。

大漁唄は九十九里濱など、最とも盛んである、唄の文句は少々づゝ違ふが、節は大抵おなじと云つてよい。常陸の平潟附近で聞いたものは、少しちがふ。

安波様から吹き來る風は、ハアヨイ〳〵、
鰯とれとーのヤレ御告なり、ハアヨイ〳〵、
大漁〳〵。
船の新造とエ女子のよいは、ハアヨイ〳〵、
人も見たがーるヤレ乘りたーがる、ハアヨイヨイ、大漁〳〵。

◇

私は、磯節が好きだ。いろ〳〵の地方で、いろんな俗謠をきいたけれど、磯節の如きは、俚謠として最もすぐれたものだといふに、躊躇しない。歌詞にも、調子にも、豪宕なところがあつた。尤も、磯節を東京あたりの藝妓の歌ふあれだと思はれては、こまる。

沖に鰹の瀬の立つ時は、
四寸厚味の櫓がしなふ
四寸ネ、厚味のイツ櫓がしなふ。

これを大洗に行つて、名人盲安中の彼のさびのある咽喉できいては、實際何とも云へないうま味がある。板子一枚に身を托して、數十海里の波濤を蹴つて、遠く鰹漁に出てゆく、壯快の漁夫生活そのものを聽くやうな感じがする。かれは、全く、氣分で歌ふ男である。氣が向かなければ、いかに金を積んでも、彼は決して歌はない。歌情動けば、一子守ツ兒に促されても、かれは恰々として歌ふ、確かにかれの如きは一個の野生の藝術家である。

船唄には、なか〳〵良いのがある。殊に房州附近でよく聞く

船の舷端に兩手をかけーて
主はいま出て何時戻るー、
聰さ、來月なかば頃ー。

なども堪らなく好い歌だ。これは、鰹漁でなくて鮪船であらうが、此歌には、勇ましい中にも一種の哀愁がある　磯節には哀音がない。

磯で名所は、大洗さまよ
松が見えますほのぼのと。

磯節の起りは此歌だらうと云はれてゐる、漁に出た船が歸つ

て來て、海上はるかに、大洗神社の松の林丘を望んだ時の漁夫の情懐をうたつたものであろう。ポンポンポンポンと可笑しな音を立てゝ走る今の石油發動機の漁船では、此の氣分は出にくい。

水戸を離れて、東へ三里
波の花散る大洗。
三十五反の帆を卷上げて
行くよ仙臺石の卷。

次で此二首を、磯節の代表的歌詞として私は採る。文句入りの長いものでは、

私にー逢ひたけーりやー、音にきこえし大洗しーたーで、
大きな石を掻分けて、
小さな石を掻き分けて
細かい小砂利を紙につゝんで、
ばらーり、ばらりーと、投げーしやんーせー
その時私も推量して
雨ーが降って來たーと、イソ逢にー出ーるー。

磯節の踊は、波に千鳥の飛ぶかたちを象徴したものだと云はれてゐるが、果して其の氣分が現れてゐるや否やは、疑はしい。それに大抵は彼の『テヤ〱〱』で、遺憾なくぶちこはしてしまつてゐる。

傳へ聞く、安中（あんちゆう）こと『從來の磯節の歌では、何うもほんとうの磯の氣分が出ない』と不滿を懷くやうになり、近ごろ何とかいふ大洗附近の詩人に、次のやうな新しい歌を作つて貰つて、

蝦もざつこも、しんとろ、とろり
海がそだてた子ぢやないか
水がぬるめば、雑魚もはねる
はねて、海松藻の花ちらす
汐がれ濱だと、いはれて啼くか
草の葉かげのきりぎりす。

『これなら、ほんとうに磯の匂ひがするやうに思ふ』と、得意がつてゐるとか。かれが從來の磯節の規繩を破つて、かれの聲と調子とに、より強く磯の香を匂はせよふと苦心しつゝある、藝術家的努力には敬服する。私は早くその新らしい歌をきゝたく思ふ。然し、磯節に磯の香を匂はせようとするのは、安中此が履違ひではないかな。磯節の生命（いのち）は海濱の「磯」の香りではなからう、矢張り豪快な「海上生活」そのものではないのかな。

◇

磯で曲り松、湊で女松
中の祝町（いはひ）、男まつ。

磯節にかういふのがある。祝町は那珂川の河口の右岸にある

遊女町である。徳川の中世期頃からある可なり古い遊廓で、水戸藩の武士が通ふ頃には全盛を極めたと。今は寂れて、五軒の古風な妓樓があるばかりだが、尚七八軒の引手茶屋も殘つてゐて、昔を偲ぶ誰そや行燈の、櫻並木のかげに朧ろなのも、艶めいて見える。茶屋の裏木戸から、飛石づたひに、妓樓へ送られて行くのなども、一種の風情があつた。

　酒にほてる顔を、風に吹かせるべく、欄に凭れば波の音がちかく〲と聞えて、沖に漁り火の連なつてゐるのが、美しくも亦涼しい。

　此處や松岸には、まだ「三枚通し」だの「五枚通し」だのいふ古風の慣はしが行はれてゐて、座に落つくと、禿が方一尺ばかりの函（中には花魁の源氏名を記した漆塗の木札がはいつてゐる）を眼八分に捧げてくるのも、興あることにおもふた。茨城縣は公娼の少いところで、こゝと潮來とそれから筑波の山の町と、三箇所きりだつたと記憶する。群馬縣下には一箇所も無かつた。

◇

三浦三崎は女の世張り
男ごしよらく寝て暮らす。
房州よいとこ女の夜濟
男極樂寝てくらす。

　これをみだらな「夜這ひ」ときゝ違へて、避暑に出かけた連中が、昔は多かつたさうである。海岸地方や海上の島では、どこでも男の數よりも女の數の多いのが定例で、房州のごときは現住人口十七萬六百餘の中、男は八萬三千八百、女は八萬六千八百、即ち女の數が三千から多い。房州は「女の國」である。數の上から言つて優勢なるのみならず、房州女は實際よく働く。男も決して働かない譯ではないが、かれ等は多く外洋漁業に從事し、海上で命がけの劇しい仕事をする代りに、陸上に在る時は、ぶら〲と遊んで暮らすやうな日が多い。殊に鮪漁にでも出かけると、可なり長い日を海上に送るやうなことが多い。一方は女の勞働が盛んで、氣候は温暖である。生理的要求としても、房州よいとこ女の夜濟――夜這、一脈の消息相通ずるもの無きにあらず、かも知れない。兎角、房州女は昔から尻輕な女と見られてゐた、特に船形附近を以て最とすと云はれてゐる。但女の多いといふことは美人が多いといふことにはならない。

船の船頭衆とキンピラ牛蒡は
色の黒いのに味がある。
（或は、色の濃い程味がよい）

われ鍋は、矢張りとぢ蓋が好きなのだ。

　輛の女は牛蒡の煮つけ
　色は黒いが、味がよい。

これは瀬戸内海の名區仙醉島で聽いた歌。これ等は吸國の海岸や船着場には、殆んど普遍的な俗謠で、平凡ながらも良く共のカラアを語つてゐるものである。

房總半島に於て、やゝ特色のある歌はお勝節と東金節である、近年は餘り流行らなくなつたやうであるが、それでも時々は耳にすることが出來る。

　お勝お勝と、名は高けれど
　親は相模で乞食する。
　たとへお勝が乞食の子でも
　わたしや吉野の花と見る。
　花と見られて咲かぬも口惜し
　咲いて見せませう咲かせませう。

北條あたりから始まつた歌だといふ、他國者を卑しめた安房の國に、乞食の娘を讚美した唄のあるのを面白いとおもふ。お勝は滴たるやうな美人だつた相である、――或ひは親は癩病患者などであつたのかもしれない。親、血統、貧富、そんなものが何だ、美しいものを啻に美しいものとして嘆美した所に詩がある。

　東金(とうがね)茂右衛門の、ナーヨー、嫁は何處から、
　七濱探ねてナー、なくてお江戸から、
　江戸も江戸、本町の、ナーヨー、茶屋の小娘、
　繪もかく、手も書く、ナーヨー、疥癬かく。

此唄は兩總一圓に、可なりひろく歌はれてゐる、七濱を附近三箇村など、又本町を本所、茶屋の娘を糸屋の娘など、處によつて多少の相違はあるが……。日本傳說叢書などに依てみても、東金の茂右衛門は聞こえた長者であつたらしい。

　東金の茂右衛門の女、樂だよ、
　山の上へ樋かけて、水は居て取る。

山の水を筧で引いて使つてゐることだけでも、當時の百姓達には、思ひも及ばぬ贅澤な事だつたので、その水を汲む婢女さへも、村人には羨まれてゐた位である。その長者の家へ、江戸の下町の娘が嫁入つて來たことは、近郷一圓の耳目を聳動せしめた一大事件であつたに相違ない、「生きた小說」以上の噂の種であつたに相違ない。一片の俚謠も、引伸ばせば立派なローマンスである。

◇

北海道の寄席でアイヌの「松前」を聽いたときは、全たく惚

れ惚れしてしまつた。聲量の豊富なところ、聲のおほ味なところ、而もその奥底には自然な哀音の籠もつてゐる具合、いかなる日本人も「追分」ではアイヌの敵でないとおもつた。日本人のつくつた追分は、アイヌに於て始めてその好歌手を見出したのである。——處が、大島の「御神火」に至つては、全たく紅い椿咲く島の、髪の長い島女(アンコ)のものである。御神火そだちの女のみが歌ひ得る唄だ。島の男のうたふのも聽いたが、餘り感心しなかつた。

御神火とは、三原山の噴煙を靈視した彼等の祖先の信仰である、御神火そだちは即ち三原火山の氏子の意だといふことだ、かかるが故に胸におもひが絶えぬのだと感じた、そこに美しい「詩」がある。之に較べると、淺間山の噴火を「鬼が臀(けつ)出して鎌でカッ切るやうな屁を垂れた」と歌つた佐久地方の人々は、天性滑稽趣味に富んでゐたのか?、信州地方の俚謠は多く樂天的で、哀音を帶びたものは殆んど見當らない。

妾や大島御神火育ち
胸に煙が絶えやせぬ。
つゝぢ椿は御山を照らす
殿の御舟は灘照らす、
男だてなら乳ケ崎沖の
湖のはやいのを止めて見ろ。

此外いろ〳〵あるけれど、要するに「御神火」は悉く戀の歌であると云つてよい。然しアンコの「御神火」——秋の夜の空に水のほとばしるやうな、晴れ晴れとした中に哀音を含んだその歌ひ聲は、大島に行つても、容易には聽かれなかつた。かれ等は決して內地人(くにもん)の前では、唄をうたはないし、歌つて居てもクニモンが聽いてゐることを知ると、すぐに止めてしまふからである。

三原山へ登る道には、赤い椿が、兩側に低い林を成して咲いてゐた。葉の數よりも花の方が多かつた。すき透るやうな悠長な聲で御神火をうたひながら、牛を曳いて降りてくるアンコに會つた。然し洋服を着た私の姿を見ると、ピタと歌を止めて、默つて擦れちがつた。そして一二町も行きすぎた頃、復たその歌聲が聞えて來た。私は後戻りして、暫らくその歌聲について行つた、泌々大島節を聽いたのは、前後に此時だけであつた。

伊豆の下田に永居はお止し縞の財布が空になると歌はれた下田港は、古から有名な溫柔鄕で、今も尚船つきとして相當の生命を維持し、此の港には日に十艘や二十艘の船の居ないことはない、名物の「牛」は後を斷つたけれど、船員の出入の頻繁な埠頭附近には、白粉を塗つた女が白晝そゞろ歩いてゐる。ちよ

つと町を散歩して見ても、ひる日中、旅亭の二階から賑かな三味線の音が、頭の上へ落ちてくるところである。

伊豆の下田を朝山卷けば
晩にや志州の鳥羽の浦。
お前上りかわしや今下り
灘で逢ふたと云ふてくれ。

かうした「下田節」は、今も尚ほ此地では幾分の命脈を保つてゐる、然し特筆する程特徴のあるものでもなかつた。

◇

仙臺地方に行くと、「さんさ時雨」に「鹽釜甚句、」それから矢張り此地を發祥の地としてゐるらしい「おいとこさうだ」などが、なか／＼盛んである。

さんさ時雨か、萱野の雨か
音もせで來てぬれかゝる。

此唄は伊達正宗の作歌として有名なものである。初め軍歌として用ゐられたといふが、眞僞のほどは知らない、曲舞(くせまひ)などに見える「松風の音はさゞんさ」などから出たのではないか。今うたはれてゐる唄の代表的なものは、

さんさふれ／＼五尺の袖を
今宵ふウらいでいつの世にシヨンガイナ。
共(と)さま百まで爰や九十九まで
ともに白髮の生ゆるまでシヨンガイナ。
飲めや大黑歌へや惠比壽
中で酌とるうかの神、シヨンガイナ。

「しよんがえ」節の影響を受けたもので、囃は菖蒲踊のによく似てゐる。

鹽釜甚句は所謂「ハツトセ」だ。一時廢れてゐたのを復活し東京の寄席などへも、しば／＼遠征して來たことがある。三味線の外に鼓、笛、太鼓などを入れて賑かな踊りで、甚句の中では、こいつが一番騷々しいかも知れない。その歌は、

鹽釜街道に白菊植ゑて
何をきく／＼、アリヤたよりきく。
千賀の浦風身に泌み泌みと
語り合ふ夜の、アリヤ友千鳥。
さあさヤツコラサと乘出す船は
いのち帆をかけ、アリヤ浪枕。
船は稻荷丸船頭衆は狐
中のお客はアリヤ皆な狸。
鹽釜出る時ア大手ンぶりよ
奏社の宮から、アリヤ胸勘定。

鹽釜街道は鹽釜から奏社の宮を經て仙臺に通ずる道路で、今は街道となつてゐるが、昔は遊女は此の社の前まで客を送つて來るのが例であつた、それで皆こゝまでは元氣よくやつてくるけれどポンと背中を叩からて別れると、そろ〳〵享樂の夢さめて、昨夜つかた金の勘定をはじめると、遊冶郎のさもしい心持を穿つてゐる所がおもしろい。

鹽釜神社の背面、高丘の東端に旗亭勝畫樓がある。舊別當法蓮寺の一閣で、明治大皇東北地方御巡幸の際には一夜の行在所に當てられた。鹽釜の全港はもとより、松島灣の半を双眸に收め、金華山をも遙か煙波の間に望んで、頗ぶる眺矚秀絕である。況や阿嬌我れを待つに於てをやか。鹽釜では、飲むには先づ此家だ。

仙臺の南、野馬追の行事で有名な相馬地方には、「相馬甚句」がある。

相馬相馬とコラ木萱もなびくナーエ。
なびく木萱にジッ花が咲くとナーエ。
相馬あらひどこオヤ女の夜這ナーエ。
男とくからジッ來て待ちるとナーエ。
相馬中村のオヤ新改樓が燒けたナーエ。
寢てゝ金取るオヤほんまにその罰だとナーエ。
竹に雀はコラ仙台さんの御紋ナーエ。
相馬六萬石コラほんまに九曜の星とナーエ。

相馬が昔榮えた地であることを思はせるには充分だ。

◇次は金山踊。南部鐵瓶や下駄表とゝもに盛岡名物である。

盛岡の市街は、中央を中津川が貫流して、南北に二分せられ江南に「八幡町」河北に「本町」の兩花街を持つてゐる。俗に幡街で通つてゐる八幡町の方は遊廓地で、貸座敷の間に旗亭・御神燈が入まぢつて、花柳情調の濃かなる上に、藝妓の數に於て優り、また藝に於ても秀で、本町の方はやゝ氣壓されの觀がある。盛岡藝妓が藝に身を入れることは格別で、わざわざ東京へ修業に出る者も尠くない、三代目常盤津文字太夫を出したことは、かれ等の以て、白頭宰相を出した以上の誇りとする所なのである。殊に舞踊を良くし、年に一二回は必らず盛岡劇場に大規模の演藝界を開いて大いに氣を吐いてゐる、無論、その際は金山踊などをやるのではない。

で、我々が——旅の者が、金山踊を觀にゆくのは大抵幡街と極つてゐた。三上亭、澤田屋、瀬川屋などが其處では聞えた旗亭である。本町の方では芳田屋、丸竹、花芳久などが聞こえてゐる。盛岡一の割烹店は山善(秀清閣)、これは内丸中の橋畔に

あつて、會席を主としてゐる、川魚料理の多賀の「細川」寺の下の「川鐵」なども、さつぱりしてゐてよい。是等は廓外の旗亭だが、金山踊を観るには何處と限つたことはないので、踊に用ふる「大直利」と染抜いた前垂や赤ダスキ、小笊などはどこの料理店にも備へてある。

六七年前だつた「三越」の樓上で東北銘産品展覧會の催された時、餘興として此の金山踊がやつて來たことがあるが、本年三月また三越で同様の催しがあると、再度のお招きとあつて、庄内の「おばこ」と共に京都に遠征して、可なりお馴染になつてゐるものだから、來歴その他の説明は抜きにするが、出雲の鰯すくゐに一寸似た所のある此踊は、鑛石精選のさまを模したものである。我國に於ける最初の金産地は黄金花咲く金華山でその金華山から南部地方一圓の地は總稱して陸奥の國と呼ばれてゐた。「金賣吉次」も南部の人間だ。今日も釜石。仙人、鷲の巣、水澤、大荒澤などいふ有名な大鑛産を有する岩手縣は、依然として我が國に於ける鑛産國である、此國にして此踊あるは最もよく其のローカルカラアを發揮したものと云つてよい。

金山踊の唄を「からめ」節といふ、からめは鑛石精選の意味ださうである。

からめ〳〵と、親父(おやぢ)が責める
なんぼからめても、からめだアてアならぬ
ハアからめて〳〵、からめて千貫、親父の借金、年賦ですませ。
金(きん)のべごこに錦の手綱(べごこは牛の事)
おらも引きたい、引かせたい、
ハアからめて〳〵、シつかりからめて、握つた手綱を、しツかり放すな。
鳥ア啼く〳〵、床屋の屋根で
お山繁昌と、啼く鳥
ハアどッこい〳〵、どッこい千兩、どッこい萬兩。
金が出る〳〵、白銀黄金
鐵もなまりも赤がねも
ハアどッこい〳〵、どッしり掘り出せ、お國の名物。
日出た〳〵の、若松よりも
盛るお山の黄金花
ハアかねつる千年、からめは萬年
直利ア出てくる、世中は豐か
何處もかしこも皆繁昌
ハアどッこも繁昌、どッこも繁昌。
直りア出てくる、お山が盛る
上も小前もみな盛る

ハアどッこも繁昌、どッこも繁昌。

田舍なれども、南部の國は
　西も東も金の山
（ハアからめて〳〵、からめた黃金は岩手の花だよどんどと吹き出せ
花は咲く〳〵、御國の山は
　北も南も黃金花
ハアからめて〳〵、からめた黃金は岩手の花だよどんどゝ吹き出せ。
からめ〳〵と、御山の唄は
　御家繁昌と鳴りひゞく
ハアからめて〳〵、からめた黃金は岩手の花だよどんどと吹き出せ。

是だけが一聯となつてゐる。處で、——別の話だが、盛岡藝妓は金山の鑛石のやうに硬いのを誇りとしてゐる。所謂「南部美人」の產地で、美人系に屬してゐる所爲か、南部藝妓は悉く土地の女だ、他所から稼ぎに來てゐるやうな女はすくない、從て此地には東京式の抱妓といふのはなく、凡てが幼い頃から養女或は妹分として養はれて、專ら藝を仕込まれる。藝妓となつての後も、藝以外の不都合を働かない、これが盛岡藝妓の自慢の一だ。結構な事に相違ないが、亭主持や子持藝妓の多いのは少々野暮くさい氣もする。近年は全く、田舍藝妓の堅いのも餘りアテにはならないが、それこそ金山踊の唄の文句ではないがからめて〳〵（搦手）だ。

金山踊に因んで、名物「からめ餅」がある、牛肥に胡桃を加へた餅菓子のやうな物で、家福餅なるものも亦、甚之に酷似してゐる。盛岡地方は實際眼につく程桐と胡桃の木の多いところである。

◇

氣仙沼は、雅名を鼎浦と呼ばるゝ氣仙沼灣の一部が深く深く入込んだ入江の底邊にある港町で、小ぢんまりとして、風光もなか〳〵好いところだ。それに未だ汽車の煙も見ない僻遠の地だから、昔の船つき氣分を濃厚に保有し、總戶口二千ぐらゐの處に四十餘軒の料理屋があるといふ町で、花街南町あたりの情調も、一寸捨てがたい氣がする。こゝに「濱甚句」がある。

氣仙氣仙沼の、烏賊釣船は
烏賊も釣らずに、アレサ女郎釣る
　トコヤツサイ、ヤツサイナ。
島と唐桑に、そり橋かけて
渡りたいぞや、アレサ今一度

　　　トコヤツサイ、ヤツサイナ。
島で龜山、唐桑で早山
氣仙沼では、アレサ安波山
　　　トコヤツサイ、ヤツサイナ。
島のあゐまの、とべア口の鮑
七日なぎても、アレサとれやせぬ
　　　トコヤツサイ、ヤツサイナ。

島といふのは氣仙沼灣の中央に横はる「大島」、唐桑はその外側に又海をへだてゝ斗出してゐる半島である。色の黒い、そして醬油樽に着物をきせたやうな勇敢な藝妓は、この甚句を踊るには誠にふさはしい。三味線の外に皷と太皷がはいる。

此の氣仙沼を中心として、陸前の海岸一帶に行はれてゐる追分じみた一種の船歌がある。

氣仙坂ハラヨイ
七坂八坂九坂十へ
　　ハラヨイドコラ、サーハイドナイ、ヘイヨコラ〳〵。
雨が降るヤーエ
船場に笠を、忘れ來たぞエー
笠も笠ヤーエ
お江戸で流行るしげ(菅)笠ぞーエー。

◇

「おばこ」は羽前羽後一圓に行はれるが、莊内地方が本場らしい。眞に野趣横溢、これくらゐローカルカラアに富んだ俚謠もすくなからう。これもいろ〳〵に歌はれてゐるが、

おばこ居ーだがやーとー
なンがしの、さまこーから覗いて見ーだー
　　アー、オバコデオバコデ
おばーこ居もせーでー
隣の婆さーが絲ーうーみだー
　　アー、オバコデオバコデ
絲はーなーにーいど、可愛いをどこの、ゆぎばーかまー

がその原歌だと云はれてゐる。酒田の旗亭で、藝妓などの歌ふのをきけば、きゝ取れるが、田舍道をあるくとき、娘たちが特有の庄内音で歌つてゐるのを聴いては、容易にきゝ取れるものではない。

おばことは十七八の娘盛りの娘のこと、唄の起原に就ては一のロマンスがある。さる庄屋に貰はれて來たおばこは、出羽の國に隱れもない美人であつた、彼女にはたつた一人の弟があつたけれど、卑しい身分の者であつたので、公然と會ふことを許されなかつた。で、彼の弟は家人の居ぬ折や、夜の間などに密

と忍んで來て、姉弟は儚ない運命を悲しんでゐた。かうした境遇がおばこを憂うつにし、その憂ひを含んだ風情が、一層おばこを美しく見せるやうになつた。「おばこ」は即ちその弟の作つた唄であると傳へられてゐる。

おばこ來るかアと、田圃(はづ)の外れまで出て見たばおばこ來もせで、用のない莨賣なんど觸れてくる

コバエテ、コバエテ。

おばこ心持や池の端の蓮の葉の溜り水

少し觸るでど、ころころころウんで、そまゝ落ぢる

コバエテ、コバエテ。

これは羽後の山本地方に行はれるおばこ節である。おばこ踊も三越の東北銘産品展覽會の餘興でお馴染であらうが、からめてやハットセほど騷々しいものではない。

◇

羽後には又羽後特有の「秋田音頭」がある。

ヤートセエ、ドコドツコイナ

コラ昨夜(ゆうべ)もがたくゝ、今夜もがたくゝ

棚から鍋落ちた、ドコドツコイナ。

と云つたやうなものだ。名物づくしにこんなのがある。

秋田名物八森はたはた(鰰)、男鹿(をが)では男鹿鰤卵(ぶりこ)、能代春慶檜山納豆、大館曲わツぱ。(曲わツぱは曲物のこと)

秋田名物コの字づくしを摘んで云ふならば、子供(ぼっ)コに香物(がっ)コ、笠椀(かさっ)コに小皿コ、酢コに醬油コだ。

もつと面白いのがある、

橋の下に河童コが河童コ産(な)た、その子も河童コで、親河童子河童コだ。

これを一息きに歌へたら懸賞を與れる相だ。

秋田音頭は九手一組が本式ださうであるが、普通の酒席では略して五手又は三手でやつてゐる、三味の外に太鼓、小鼓、笛摺金入りで囃し立て、頗ぶるお賑かなものである。尙それに花音頭、笠音頭、組音頭などの別があるさうだが、深くは知らない。踊はもと士族町に濫觴し、手振り足ぶりは柔術の手から出たもので、可なり武骨なものであつた——と同地の或る故老の話である。

秋田地方の盆踊歌。

何だば家このででア雨降る中に—

笠もかぶらねで、アノーけらこも着ねで—

イヤサカ、キタサカ、イヤサカサア、イヤサカカサア。

姐(あね)ちやソラくゝ、空の星見ねかア

空に何も無やアノー星ばかりー
　イヤサカ、キタサカ、イヤサカサア、イヤサカサア。

津輕地方で聽いたヨサレ節なるもの。

をーやが承知でー、茶屋奉ー口させてー、サアーンヨ、浮ー氣するなーも、よーく出ー來た、ヨレサーンヨ。

津輕は淫風の盛んなところで、五十路を越した老人なほ壯者を凌ぎ、若きは十三ぐらゐの少女、寸にして蛇を呑むの概がある、茶屋女に「浮氣するな」などは全く以て止さアれさふよである。

米澤市の郊外できいた盆踊の唄。

　アー盆の十六日、スタコラドツコイ、
　二度あるコラならばサ
　裏の枯れ木に、スタコラドツコイ、花が咲く
　ヨーイトサ、スタコラドツコイ。

同縣下の上の山溫泉から一里程はなれた田舍で聽いたやつは、

　盆の十六日、二度あるならば、ハア
　裏の枯れ木に、オーハラマンチヨウ
　　花が咲く。
　踊をどらば板の間で踊れ、ハア
　板のひゞきで、オーハラマンチヨウ
　　三味やいらぬ。

も一つ、南へ來て福島下三春町の盆踊唄。

　大輪にバラツとせ。
　盆が來たのに踊らぬ奴は
　猫か鼠か、お稻荷か
　　アラヽツト、チヨイ〱、スツトコドツコイ、ドツコイシヨ。
　切つて見やがれタヾ泣くものか
　藁の人形に、五寸釘
　　アララツト、チヨイ〱、スツトコドツコイ、ドツコイシヨ。

先きを急ぐから說明は省く。

◇

　玄如見たさに朝水汲めば
　玄如かくしの、霧がふるー。

これは會津の田舍で聽いた唄。晴れた秋の空にすきとほるやうな好い聲であつた。旅できいた唄の中で、最も印象深いものゝ一つである。玄如は、或るうつくしくて若い佛弟子の名であ

つた、里の少女が戀をして、やるせない胸の思火をうたつたものだらうである。

◇

新潟は水の都であり、橋の都であり、柳の都であり、而して又美人の都である。柳、橋、水……誰が新潟の地を踏んでも、これがその第一印象であつた、昔から「杉の大木と男の子は育たぬ」と云はれて、新潟は松と柳と女の子の幅を利かせるところである。

『久しぶりだつたね、一杯飲むかね。』

さう云つて土地の人が、東京の客などを引張つてゆくところは、鍋茶屋であつた。大宴會にも、淺酌低唱にも……。その家は萬事が都會式で、食ひ物なども、ちよつと凝つた甘いものを食はせた。正に新潟の代表的旗亭である。新街の花街といふのに、古町から西堀前通り及び東堀前通り八九番地に亙る地域でそこに料理店待合藝妓屋などが軒をつらねてゐる。此の地域にある藝妓を上組と稱し、朱引地（遊廓）にある者を下組と云つてゐるが、額から云つても品位から云つても藝から云つても、上組が勝を占めてゐる、鍋茶屋は勿論上組の勢力範圍である。

おけいさ（樽きぬた）はまた、鍋茶屋の名よりも更に廣く遠く知られてゐる、客あり遠方より來る、第一の御馳走として選ばれるのは此のおけいさである。——私が初めて新潟へ行つて、初めておけいさを觀たのは、隨分古い話だ、明治といつた年號の最後の年かその前年であつた。同地の富豪K氏と一緒に、矢張鍋茶屋へ行つてそれを觀た。その時私がおけいさ踊の繪葉書を持つてゐるのを見て、K氏は、

「この繪葉書を實物で御覽に入れませう、まあそんなものでもお土産にして下さい」

さう云つて、其の繪ハガキに出てゐる藝妓をそつくり呼ぶやうに女中に命じた。踊子の中堅が二人間に合はなかつただけで（繪葉書には七人出てゐた）、あとは皆揃つた。元來が盆踊りだから人數は多いほど好いのだが、樽たゝきと三味線と笛と、それから踊子が先づ四人、大小七八人も呼べばそれをやらせて見ることが出來るのだ。三味線は普通の二上りだが、特にコマを低うし絃を細くしてある、これは歌ひ手に銀鈴を振るごとき美音を要求してゐるもので、鹽辛聲には、あの調子は甚だ以て不向である。

おけさの唄の最も代表的なもの。

おけさエーヤそれ〳〵 茶椀落ちるヨウ落ちてすたれうとヤア
レ手に取らぬ。

おけさエーヤ おけさ見るとて茶で眼を突いたヨウ 亦仍おけ

さはヤアレ目の毒ぢや。
おけさエーヤ正直なら側にも寢せうがヨウ　おけさ猫の性で
ヤアレじやれかゝる。
來いとエーヤ云たとて行かれうか佐渡へヨウ　佐渡は四十五
里ヤアレ波の上。

然しおけさの本場は新潟ではない、出雲崎だといふことだ。恰も新潟美人の主なる產地が、出雲崎であるやうに。越後の盆踊といへば概ねおけさで、矢張り出雲崎附近が最も盛んなやうである。盆踊となると太鼓、空罐、笛、團扇、拍子木、音のする物は何でも持出して亂打し、何も持たない者は拍手を打つて調子を取り、甚だ喧燥を極める。高さ三間もある大きな櫓を組んで、紅提灯や盆燈籠をつけて飾り立て、一晩中を物狂はしげに踊り明かして、疲れた者は草原へ打倒れて寢てしまふ。そして朝日のカンカン當る頃漸く眼をさまして歸つて行くやうな人もすくなくない。

來いと七聲來るなと八聲
まめでおいでとこゝの聲。

など盆踊となると、敢て此地方に限つたことではないが、恐ろしく露骨な唄が多い。

◇

おけさは四十五里の海を越えて、佐渡に入つて「佐渡おけさ」となつた。佐渡おけさは小木港が本場である。和船時代に於ける北海航路の避難港であつた小木は、有名な溫柔鄉であり、兼て又美人の產地として知られてゐる。あんな小さな町から、他國へ出て藝妓をしてゐる者が、二百七八十名もあるといふ一事で、その一班が推しはかられる。故紅葉山人もこゝの情調を懷かしんで、一二度遊びに來たと土地の人が云つてゐた。美人ばかりでなく、風光も非常にすぐれてゐる。

佐渡おけさは越後おけさに比して、優し味がある、調子もやゝ悠やかである。

小木は澗で持つ、相川山で、
夷港は漁でもつ。
佐渡の三崎の四所御所櫻
枝は越後に葉は佐渡に。
花が散るぞえ彼の御所ざくら
拾ひませうよ振り袖に。
鶴が舞ひます鶴子の山で
御山繁昌と舞ひさがる。

御所櫻は小木町の郊外元小木の海潮寺の境內にある順德帝御手植の櫻で、結局を「枝は越後に葉は能登に」といふやうにも

歌ふ、この方がほんとうらしい、稀有の大木であることを歌つたものである。然し今ある櫻は二代目か三代目のものと見えて幹の周圍は六尺位しかない。鶴子山は佐渡金山の舊坑で、鑛山の繁榮を祝する際には、必らず、三百年來歌はれて來てゐる歌詞である。囃は「アリヤサ」だ。

もう一つ、佐渡で有名な唄。

　澤根通れば、團子が招く
　團子招くな錢がない。

澤根は河原田から相川へ通ずる街道の要處で、「名物澤根團子その名高し」などゝ書いた旅行案内もあるが、笑かすな、團子は賣笑婦の別名だ、そんな名物を矢鱈食つて堪るか。

◇

「おけさ」の越後は又甚句の越後である。越後ほど甚句全盛の地方はない、それが土地々々で若干の特色をもつて、異つた發達をしてゐるからおもしろい。それもその筈、甚句は越後甚句が元で、甚九なる男がうたひ始めたと傳へられてゐる。かれは石地浦產の成金もので、難波の遊廓に豪遊をつゞけて、贅六どもの度膽を拔いた、或る日かれは酒席で興に乘じて、

　四十だ四十だと今朝まで思ふた
　三十九ぢやものツーレ花ちやもの

と歌ふた、するとかれの相方たる遊女が直にこれに相和して、

　甚九、甚九は越後の甚九
　越後甚九はツーレ世界の花ぢや。

と謡つた、これ甚句の濫觴にして、大いに諸國に行はる。――と誠しやかに說く者がある。俚謠插話としては面白いが、アテにはならない話だとおもふ。

　佐渡で餅ついて、越後へ投げた
　佐渡と越後が、ソリヤ一ねばり。
　でんでんでんの、大い嬶もてば
　二百十日の、ソリヤ風よけだ。

これが普通に「越後甚句」と稱するもので、「米山甚句」は誰も知るごとく、

　行こか參らんせうか米山の藥師
　一つは身の爲サヽ主のため。
　主の爲なら米山さまへ
　はだし參りもササ厭やせぬ。
　頸城や見おさめ米山三里
　峠こえればサヽ柏崎。

此の外長岡甚句、新津甚句、村上甚句、せんさくしたらもつと有るかもしれない、但大同少異、村上甚句だけがやゝ特色を

もつてゐる。柏崎の「三界節」も可なり有名なものだ。柏崎地方は盆踊にもこれをやるので、揃ひの菅笠をかぶつて圓を描いて踊るのを、海水浴場の鯨波で觀たことがある。

閻魔前なる茶屋の婢
あれを地獄へやらぬは
さりとは閻魔のよこひいきぢやア。
柏崎から椎谷まで——
間に荒濱あら砂
あくたの渡しが無かよからう。

要するに餘ほど甚句調のものである。

高田附近にはヤラシヤレ踊といふのがある相だ。八九才から十二三位までの少女が、揃ひの衣裳に揃ひの花簪をさして、例の如く太鼓笛三味線の囃子につれてヤラシヤーレ、ヤラシヤーレと云つて踊るのだ相だが、今は殆んど廢れて行はれぬ由で、遂に見たことがない。

復、甚句へ戻るが、甚句で名高いのは相撲甚句に名古屋甚句これ等は説明の埒外に屬すとして、十和田湖できいた甚句を御紹介する。

山でしゆろいのは、うしやぎによきよしやとでしゆろいのはしよばのふあな。

解つた人は手をあげた。「山で白いのは兎に雪よ里で白い蕎麥の花」と譯する。「小坂甚句」である。

◇

或る夏であつた。名古屋から松本へ廻つた汽車の中で、その夜福島で名物の盆踊が行はれるといふ新聞記事を讀んで、忽かに旅程を變更して福島に下車した。岩屋といふ旅館は、今は何うだか知らないが其の頃はまだ入口に油障子が立つて、木曾街道の宿場としては甚だふさはしい氣分の宿屋であつた。奥座敷の下を木曾川の水が、さら〱と音たてゝ流れてゐるのも、大變嬉しい氣がした。さて晩飯のとき、目的の木曾節を聽くべく女中に藝妓をよべと命じた。女中は『さあ』と小首を傾げて立つて行つたが、やがて一時間も經て酒のすつかり無くなつた頃どんなに努力しても今夜は迚も駄目だと云つて歸つて來た。盆の十六日には馴染の客にお座敷をつけさせて、皆な踊に出るのだ相である、そして踊がすめば其の客の座敷へ行く、盆の十六日にお茶を引くなどは無上の恥辱としてあるのだと説明した。かうした經驗を私は二三箇所でもつてゐる。

然し此の不幸は、私にほんとうの木曾の盆踊りを實見する機會を與へてくれた。木曾節は卽ち例の「中乘さん」である。

木曾のナア、ナカノリサン、木曾の御嶽さんはナンチヤラホイ、

夏でも寒いヨイ／＼
袷しよナア、ナカノリサン、袷しよやりたやナンチヤラホイ、
足袋添へてヨイ／＼／＼。
袷しよナア、ナカノリサン、袷しよばかりはナンチヤラホイ、
遣られも爲まいヨイ／＼／＼
襦袢ナア、ナカノリサン、襦袢やりたやナンチヤラホイ、
足袋添へてヨイ／＼／＼。

盆踊歌としては可なり特色のあるものである。歌の作者である彼等の先祖の頭が、北アルプス南方の重鎮御嶽山の爲に、常に支配さてゐたことがわかるやうな氣持がする。

處が一たび、西駒ケ岳の山脈を東へ越して天龍の河谷に入ると、唄も調子も全然一變するからおもしろい。

木曾へ木曾へとつけ出す米は
伊那や高遠の、伊那や高遠の餘り米
ソリヤコイ、アバヨ、マクオイデ。

心ぼそいぞ木曾路の旅は
笠に木の葉が、笠に木の葉が舞かゝる
ソリヤコイ、アバヨ。

三居の日蔭も西野の果ても
住めば都で、住めば都で花が咲く
ソリヤコイ、アバヨ

木曾の慣ひか藪原流か
婿も取らずに、婿もとらずに孫を抱く
ソリヤコイ、アバヨ

此の外「はるか向ふの赤石岳に雪が見えますほのぼのと」「天龍降れば飛沫に濡るゝ持たせやりたや檜笠」など、其の環境を歌つたものも無いではないけれど、木曾地方を罵詈した歌が大部分を占めてゐるのには、驚ろかさるを得ない。蓋しこれには理由のあることとで、德川幕府は「武にして頑」と云はれた信濃國を十三の小藩に分割して、その勢力集中を妨げる政策を取つた、伊那地方は高遠藩に屬し、木曾河谷たる西筑摩一圓の地は名古屋藩に屬してゐた。木曾の峽谷には米がとれない、伊那の河成平原は、たいした平野でもないが、それでも山國たる信濃では松本平、善光寺平と倂せて三大平野と云はるゝ肥沃の地で、その產米は伊那人を養ふて餘りあり、餘米は木曾地方へと移出されてゐた。『何だ木曾の奴等ア、御三家の隨一だなんて大きな面をしやがつて。俺達の殘米で生きてやがる癖に』、かうした一種の反感を、伊那地方の人はつねに懷いてゐたらしい。歌の調子もせゝこましくて、甚だ急調なものである。——然しかうした例は外にも時々はある。三浦三崎の子供は、向ケ崎(漁場)の

子供を罵つて歌ふらく（盆唄）

　三崎の子供衆は新縮緬の袴、向ケ崎の餓鬼共ア天鵞絨の袴
　よく見れば茄子の皮茄子の皮、

向ケ崎は怖い、何故また怖い、榮螺が殼が化けて出る化けて出る。

向ケ崎の者に呉れたい物は、蛇の生燒とかげの刺身、まだ〳〵呉れたいものは唐辛子唐辛子。

向ケ崎の子供はまた、此唄をそのまゝ逆にして、三崎の子供を罵りうたふのだから痛快である。

信州安曇地方（北アルプス直下）に行はるゝ盆踊唄も、歌詞はちがふが調子は伊那地方のに似たもので、

盆にや御座れよ盆中にや御座れ、
コラ死んだ佛も盆にや來る
　チココイ、コラコイ

信州信濃の新そばよりも
コラ妾やあなたのそばがよい
　ソレコイ、コラコイ

淺間の南麓小諸附近の盆踊唄は、

今夜こゝで寢て明日の晩は何處で
明日は田の中畔まくら
　ヨンヤサデ、コラサデ、ヘツサツサ。

淺間山さん何故燒けしやんす
裾に十六持ちながら
　ヨンヤサデ、コラサデ、ヘツサツサ。

十六は三四九（三宿）の洒落で、その三宿は追分、沓掛、輕井澤である、昔は中山、北陸兩驛路の分岐點として全盛を極めたところで、その各宿場には遊女や飯盛などが群を成して、その繁榮をたすけてゐた。裾野に三宿を持ちながら淺間山さん何故燒けしやんすと諧謔一番したところに、前にも述べた如く此地方人特有の樂天的をかし味が現れてゐる、かれ等は決して、唯の一つだに、雄大壯嚴な淺間山を讃美した歌を、有つてゐないから不思議だ。

然しながら、三宿をもつた淺間山麓は、我が民謠史には到底その名を逸することのできない土地だ。「追分節」發祥の地だからである。

西は追分、東は關所
せめて峠の茶屋までも。

こゝは何處だと、馬士衆に問へば
こゝは信州中仙道。

碓氷峠の、あの風車

誰を待つやらくるくると。

蓋し是れ等が追分の元唄で、その峠の茶屋は（外人の所謂サンセット・ヒル）今も殘つて居り、碓氷權現の石の風車も舊に依て舊の如しである。越後追分や江差追分は、ともに是より分派したもので、淺間山麓の馬士唄は各地を流れて海に入り、ついに船頭唄となつた、これが追分節發達のコースだとおもふが、追分については專門の研究家もあるから、私のやうな通り一遍の旅客が、餘り通がつたことをいふのは危險だ。

◇

美濃から尾張の北部地方へかけて、在方の酒宴の席には今でも行はれてゐる、

お婆どこへ行やるナーアナーナ
おー婆どこへ行やーるナア
三升樽さーげて候ばイ
　ヒュルヒュルヒュー〳〵
嫁の在所へナーアナーナ
よーめの在所へナア
初孫だーきに、候ばイ
　ヒュルヒュルヒュー〳〵。

といふ唄、あれなども私は、素朴なうちに無限の愛が溢つてゐるやうに思はれて好きだ。此地方では、古くからの慣はしに從つて、最初のお產は里方へ歸つてする、そこで姑は、お祝の酒樽をさげて、山路をイソイソと、初孫の顏を見にゆく姿が眼に見えるやうだ。

◇

地方色の顯著なものとしては、平家の落ウ人の聚落として知られた飛彈白川鄕の「白川ワジマ」なども、その一つと云へる。

輪島さのおー小夜ャーイナ
眼ーこそ、すーがめなれーナ
衣ー裳がアー―佳いエー。
向ひ通ーるはャーイナ
かーなーやーま御ー衆かャーイナ
かーねがこーぼーれーる、たーもーとーオーからエー。

三絃を取る者は男で、女が歌ふ。踊手は菅笠を持つ。その前はやゝ舞がゝつてゐる。調子は二上りである。

同じく酒席で歌ふのに「小大臣」といふのがある。唄が少しく長い外は、大抵似たやうな調子のものである。

容貌がーサーエー、良いとーてけんたい振やおーきやれ、深山奥やーまの、岩に咲たる千重のつーつぢ、なんぼ器量よく咲き亂れーても、人が手出さにやー、その身そーのまー

まで果るサーエー。

血のにじみ出るやうな唄だ。高山地方では美人を見ると「白川者ぢやないか」と云ふ程、彼の一鄕は美人の多いところである。その美人も、古來傳統の極端な家長專制—分家禁止の制度に支配せられて、公然結婚することも、他鄕に出る自由も持つてゐないのだ（男とても次男以下は同じ運命、但此の風は近年大分破られて來たが）。戀はあつても、それは極めて局限せられた範圍に於てのみ、許されてゐるのに過ぎない。此地には、生れるべくして、生れた哀歌である。

同地方の「田植唄」に、又こんなのがあつた。

大足踏さも、一夜け御座れ
五月すぎての農休みに。

（大足は農具の名、之を使用するを大足踏といふ）

一夜おいでと云ひたいけれど
末だカ、マ（母）の傍に寝る。
最早待つまい待つ時すぎた
門の戸は立つ夜は更ける。

公然と結婚をゆるされぬ内緣の夫婦は、いつも男の方から女の許へ忍んでゆく、親子が一つになつて、家族生活らしい氣分に浸るのは、月に二三回與へらるゝ公休の日ばかりで、而もその公休日に働いた特別收入を、彼等は自分たちの小遣に當てたり、育兒費にも當てたりするのであつた。

◇

越中八尾の「小原節」、加賀の山中溫泉の「山中節」。八尾は信州の機織女の輸出地で、こゝに淫靡なるこの俚謠あるを怪しむに足らず、山中は溫泉地にして「夜の夜中にシヽ（湯女）が出る」てふ有名な溫柔鄕、こゝに喚國的節調の山中節あると不思議としない。唄は略する。

「縞の財布が空になる」の本家は、伊豆の下田でなくて、矢張り丹後の宮津であつたらしい。汽船が埠頭に着く、切符を渡して改札口を出る、出た所が即ち新濱遊廓で『へえ、手前は宮津館でございます』『山崎はこちらで御座い』と呼び立てる宿引の間に交つて、綺麗にお化粧をすませて、華美な風態をした妓がなまめいてゐる。『ちよいと、旦那はん』などゝもくる。手荷物を一時預にして、——否そんな手數をも要せず、妓夫は直ちに大きな鞄を引かついで御案内は、『流石に宮津だなあ』とおもはせる。

「宮津節」は、例の丹後の宮津でピンと出したといふやつ、以上の餘言を必要とせぬであらう。私は寧ろ、餘り世人には知られてゐない此地の盆踊唄を紹介せんとする、但大分むかし見聞

したものであることを斷つておく。こゝの盆踊は、中央に床几を据えて、そこに三味、笛、胡弓等の樂器を有つた囃方と歌ひ手がゐて、踊子は其の周圍に大きな圓を描きつゝ踊りまはる、その唄。

櫻、さくらと唄はれて、櫻さん――、

踊子「トセ、ヨーイ／＼」（手拍手）

とは、どなたやら。

そもや二人が馴染めは、おもひ――、

踊子「トセ、ヨオイ／＼」（手拍手）

おぼつの芝居町。

芝居町と云つてゐるが、それは「柴屋町」の誤りである。柴屋町は大津の古い遊廓で、江戸の吉原、京の島原、大阪の新町とゝもに日本五廓の內にかぞへられた有名な遊廓であつた。今は此外に新町遊廓、稻荷新地の二廓があるが、尙依然として、柴屋町は大津花街の中心勢力である。

柴屋町の小冬は、その頃はまだ若かつた。幼い時から色町の中に育つて來た女でありながら、物しづかな性で、胸におもつてゐることも、客の前ではあけすけには言へないと云ふやうな女であつた。――然しこんなことは、實際この記事には何の關係もなかつた。

『こゝは大津繪の本場だつたね、ひとつ本場の大津繪を拜聽しようかね』

と云ふと、かれは

『大津繪なぞ、何處できいたかて、おなじもんどすえ』

と云ひながら、最も月並な、然し乍ら大津繪節の原歌ともいふべき「げほう大黑」と、「近江八景」とをやつた。誠にかれの言ふ通り、大津繪の如きは今日では全く地方色を脫却し去つた唄である。物靜かな節調の割には、うま味の足りない、丁度琵琶湖の風光の如きものである。『此女にも一寸似てるな』、さうも思つた。

小供が瓢簞で鯰を抑へてゐる圖、犬が按摩の褌を咬へてゐる圖、鬼の念佛に藤の花をかついだ遊女……。さうした當時の漫畫である大津繪を取入れて作つた唄、

げほう梯子ずり、雷太鼓で釣をする、お若衆は鷹をすえ、塗笠おやまは藤の花、座頭のふんどし犬咬えつけア仰天し杖をば振上げる、荒氣の鬼も發氣して、鉦撞木。瓢簞鯰をおさへませう。奴の行列、つり鐘辨慶、矢の根五郎。

これに作曲したのが、大津繪節の始まりださうである。その大津繪は、昔から禁厭のお守りとして用ゐられた、例へばげほう大黑は無病長壽、藤娘は良緣を得る、鬼は邪魅を拂ひ小供の

夜泣をとめるの如き――。で大津の花街は勿論上方の藝妓や、茶屋の女中などは、大抵紙入の中に二三枚の大津繪を藏してゐる。丁度東京の花柳界の女が、紙入の中に笑書を秘めてゐるが如くに。

◇

圓山の池の端の枝垂櫻が咲くと、引つゞいて京名物の都踊がはじまる。祇園通りからその舞臺（歌舞練場）のある花見小路へ曲らうとする一力の角の處に、例のつなぎ團子を染めぬいた紅提燈が、賑やかに懸つらねられて、その踊へ出るだらりの舞妓が木履を踏鳴らしながら、漫らかな京言葉をまろばせて行くのが、艶めかしい。踊は地方が十人、囃方が十人、踊子が三十二人、乃ち五十二人を以て一組としてある、舞臺も衣裳も極彩色、殊に曲の進むにつれて轉換される背景の大袈裟なのには、誰も一驚を喫せずには居られないであらう、東京の帝劇歌舞伎も共處退けの大道具を使ふのだから。都踊の生命は、この邊にあるのかもしれない。

『いゝやあ。』といふ金屬性（誰やらの云つた言葉だ）の懸聲に次いで、冴えた小鼓の音がポンポンと二つ響いて、きり／＼と緞帳が上る。緞帳があがつてから、『都踊はエー』の掛聲をうけて『よーいやさあ』と嬌喉一轉、兩花道からきらびやかな踊子の隊列が揃れ出してくる迄の、彼の緊張した氣分と。踊が終つて、

こんこんちきちきこんちきちん、
ちきちきちきちんこここん……

といふ祇園囃子につれて、踊子が足拍子輕くきざみつゝ、揚幕の中へ一人々々吸ひこまれるやうに消えてゆく、それをやゝ疲れた眼に淡い離愁をもつて見送る心持とが私は好きだ。都踊といふけれど、あれは踊ではなく舞に近いものである、舞としては柔かく、餘程踊り味を加へてはあるが。

都踊り（約四週間）が終ると、引つづいて先斗町の紫紅館で「加茂川踊」がはじまる。頃はすでに初夏、東山の翠綠いよいよ濃かにして、加茂川には柳の葉のやうな小鮎が、スイスイとさばしる。所謂「お上りさん」は漸次引揚げていつて、京の遊びはこの頃から面白くなるのであつた。

◇

京阪地方の盆踊で、最も名高いのは「河内音頭」である。今ひろく行はれてゐるか何うかを知らないが、私は先年の或る夏大阪電軌が生駒トンネルの西口の日下遊園地で、納涼客誘引の餘興として、此盆踊を催してゐるのを觀たことがある。高い櫓

を組んで提燈などを飾り立て、その上に音頭が陣取つて唄をうたひ、太鼓を叩く、踊子は揃ひの浴衣揃ひの手拭で大きな圓を描いて踊る。そこに異つた點はないが、河内音頭の特色は「白石斷」とか「いさりの敵討」とかいふ段物を歌ふ點である。――但かういふ例は他にもある。

その白石斷の一節をやつて見ると斯うだ。

姉の宮城野に妹の信夫、ヨン、ヨホ、ホイ〳〵、ふたりが並闕先に頭を下げてサ、あなたに志願がござります、ヤットコセ、ドッコイセエ、お願申すは餘の儀にあらず、こゝへひとり來て給べサ、少しの遺恨が元になり、ヤットコセ、ドッコイセエ、段々詫すれども聽かずに團七どのは、ヨン、ヨホホイ〳〵、殺されました、此無念晴らしサ、父上さまや面々どもが、ヤットコセ、ドッコイセエ……。

踊子も音頭取も金で雇れたのが、お勤めでやつてる所爲もあつたらうけれど、私には、餘りおもしろいものとは思へなかつた。

◇

一時京阪地方を風靡し、次で東京地方も席捲した「アラエッサッサ」は、昨年の地震以來東京では殆んど忘れられた態であるが、尙ほ場末の町々をば、飴屋などが歌つてあるいてゐる。

「出雲節」「松江節」「安來節」などいろ〳〵に云ふが、安來節といふのがほんとうで、出雲の安來港があの唄の本場だ。家元と稱する渡邊いとの家も矢張りそこにある。

安來千軒、名の出た所、
社日ざくらに十神山。
(その櫻はすでに枯死して「社日櫻は昔のことよ、今は愛宕の山ざくら」)
十神山から沖見れば、いづこの船かは知らねども、三味の絃ほど帆を卷いて、ヤサホヤサホーと鐵積んで上のぼる。

などが其の原歌である。十神山は海中に突出した正圓錐形の小山で、積翠宛ら滴るごとく、さして絶景といふ程でないが、何とはなく旅客の心を捕へずには措かないやうな山である。十神館は安來の旅館としても二流以下であるけれど、對岸の十神山麓に靜かな別館を有つてゐるので、私は何うしても安來へ行つて他の旅館に泊る氣にはなれない。客があると直ぐ小舟を出して、お客と鞄と茶道具などを持つた女中や女將を積んで、やぢが船頭でギイコギコとその別莊を指して漕いでゆく、あい氣持は忘れられない。

安來節や關(三保關)の五本松などは、餘りに世間に知られすぎてゐる、書くにも興が乘らない。然し隱岐は、はなれ島で

あるだけに、そこの「ドッサリ」節を知つてゐる人は、すくないであらう。「ドッサリ」は隠岐に於ける唯一の俚謡で、祝儀の宴などには必らず一齊に聲を揃へ手を拍ちつゝ歌ふものである。盆踊などにも、先づ此「ドッサリ」を歌ふて、それから始めるといふことである。平板な、悠暢な調子で、長く引張りつゝ斯くうたふ。

叶ふたー、叶ふたヤ思ふことと叶ふたー、御所がー御門にー巣をかけたー、サノーイ、御家、コレワイ、ドオヂャイナ、、御繁昌とチヨイト巣をー懸けーた、サノーイ。

内地人には此の「サノーイ」の音が、何うしても出ない、正に此島に生れた特有の發音であるらしい。繪のやうな風光といふ使ひ古しの形容詞も、隠岐の西郷港に當箝めれば生きてくる。その美しい湖水のやうな海に臨んで、旗亭手錢水亭がある。

◇

四國では土佐に「土佐節」、伊豫に「伊豫」。しかし名物と云はれるのは徳島の「氣ちがひ踊」である。尤、氣ちがひ踊とは徳島人自から云つてゐる言葉ではない。多人數一所に集合して圓形或は楕圓形を描き一定の音頭のもとに歌ひ且踊るといふ形式には外れてゐるが、要するに一種の盆踊には相違ない。

期間は七月十四、五、六の三日間。喉口漫や三味線口漫の連中は、手ン手に洒落れた扮裝に造花などを飾つた菅笠を被つて三々伍々、午前中から繰出す、樂器は三味線の外に笛、太鼓、鉦、中にはヴアオリンなど持出すのもある、そして唄ひつ踊りつ市中を練りまはる。

篠山通ればさゝばかり
大谷通れば石ばかり
寺町とほれば蛸ばかり
猪が豆食ふてホウイ〳〵ホイ。
踊る阿呆に、見る呆阿
おなじ阿呆なら踊らな損ぢや
イケソリヤ、ヨイ、ソリヤ〳〵〳〵。

唄は先づ斯様なもの、踊は双手を頭上に高くかざして、頗ぶる奇妙な手付をする。成る程氣ちがひ踊の名、全くその實に副ふてゐる。往く往く親類や知人の家に寄つて、一杯引かけて、元氣を付けて又踊つてゆく。夕方から夜に入ては、追々集まる小團隊が打つて一丸となり、そこに自然の統制も行はれて、道幅一ぱいになつて踊りあるき、全市熱狂のかたちとなる。

女は多く責問出動するが、その衣裳は縮緬の長襦袢に縮緬の浴衣、互ひに華美を競ふのが目的らしくも見える。徳島は元來

藍玉によつて富榮えた市で、豪商が多く、城下町といふよりも商市であつた、人情氣風も大阪に負ふ所が多い、働くこともよく働くが歡樂を追ふ心の旺盛なところなぞ殊によく似てゐる。此氣ちがひ踊も、藍商全盛時代の遺風であらうか。

土佐はよい國南を受けて
薩摩あらしがそよ〳〵と。
　ヨサコイ、ヨサコイ。

土佐の高知の播磨屋橋で
坊さんかんざし買ひよつた
　ヨサコイ、ヨサコイ。

神の池には蛇が居るさうな
ふとい蛇ぢやげなウソぢやげな
　ヨサコイ、ヨサコイ。

夜さ來い晩に來いと云はんすけれど
眞實行で見りやこいぢやない
　ヨサコイ、ヨサコイ。

土佐のよさこいには、いかにも南國らしい氣分がある。山のやうに積上げた節鰹の肉をおろしながら、大勢で歌ふには相應はしい唄だ。名物の箸けんも「合せて四つ袖」「お手は兩よ」といふ掛のかけ聲が、いかにも土佐訛りには克く適つてゐる、三味線ぬきの拳といふものも土佐らしくてよい。――近所に土佐の男は居ないのだらうな。

◇

博多の博多ぶしは、世既に定評がある。「どんたく」は正月の十五日或は陸軍記念日などに行はれるもので、大抵は假裝して出かける。荷くも一藝あるは、笛、太鼓、胡弓、三味線、何なりと得意なものを持出して、義太夫、端唄の藝づくしをやつて先づ兵營、知事の官舍等を訪ふて、それから市中を練り廻るのだが、藝無し連は兩手に宮島を持つて叩きながら、

坊ち可愛い寢ンねした、品川女郎衆は十もんめ、十匁の鐵砲玉、玉屋が川へスツポンポン。

と歌ふ、行列の大部分は無論此みやじま黨が占めてゐる。私は青島攻圍軍凱旋の日、これを久留米市で見て、その彌次氣分の猛烈さ、到底東京ツ兒などの敵ふところではないと思つた。

熊本地方の「ノンシノンシ。」

親は鈍なもの紫茶に迷ふて、ノンシコラ、知らぬ他村に娘やる、アラヨカ、ノンシ〳〵、ホツホヨカ〳〵、ユウナカバツテン、ドウショウカイ、カンニンセイ〳〵。

此の外『私やあなたに惚とつたい、惚とるばつてん云はれンたい……』とか、「お竹どん〳〵、お前近頃嫁入したちやにやい

かイな、嫁入したてたしたばつてん……』とか、方言を取入れた唄は多いが、私は矢張り、

肥後の刀のさげ緒の長さ
まさか違へば玉襷。

などを、兎にも角にも特色のあるものとして採り度い。

別府溫泉でき〻覺えた盆踊唄も、こ〻で紹介しておきたい。特色のあるものである。

盆の十六日伯母ン方行たら、サノサ
上れ茶を飲め、やせんま食らはんか
　ハア、ヨイサノセイ、ヨイサノセエ。
ほうら出た〱せどやのわくど
せどは小まうても、わくどは太い
　ハア、ヨイサノセエ、ヨイヤサノセエ。

註釋を要する、やせんまは團子、せどやは小路などの意、わくどは蟇蛙のことである。此二首は別府市濱脇町崇福寺の中古開山大純和尚の作と云傳へられてゐるが、こ〻な生臭坊主め。せどやの唄の意は、惡からず御賢察を乞ふ。

大分附近の盆踊唄は口說などがはいつて、文句は長いけれど囃はヨンヤセーヨンヤセーで、別府附近のものと大差はなかつた。

◇

さて、踊と唄の巡禮も巡りめぐつて、とうとう九州の南端までやつて來た。薩摩は勇武の國、兵兒の國、男女七歲席を同じうせんじやつた國である。是國の農村に、盆踊に代る極めて勇壯な太鼓踊（それは武田神社の祭事に行はる〻士踊から來たものだといふ）や、五尺の樫の棒を揮つて打合ふところの「棒踊」の行はる〻ことも、いかにも鹿兒島らしい氣がする。薩摩琵琶は、征韓役後本國の士風の衰ふるのを恐れて、日新公が女性的な平家琵琶に刷新を加へて男性的な音樂とし、尙武の目的を以て藩中一般に奬勵したものださうで、『藩人の武勇を勵み、生命を輕視せしは、琵琶の感化に負ふ所實に大なりとす』と、薩摩士風沿革も之を嘆賞してゐる。

『錦心の琵琶？、あれは矢張り寄席琵琶ぢや。ほんとうの薩摩琵琶は、あんなものではない。大體琵琶は寄席などでやるべきものでない』

と、薩摩の男はよく私に云つた。成る程、鹿兒島に行つてみると、錦心流の琵琶は餘り流行らない、所謂古流と稱する薩摩正統の琵琶のみである、音樂としてのうま味は缺けてゐるが、甚だ雄壯にして剛健、聽者も亦威儀を正して、文字通りに謹聽してゐる。

わしが稚兒さんを、こなさばこなせ
腰の朱鞘はだてぢやない。

變態性慾の發達も、過度に尙武思想を奬勵した結果と、見れば觀られぬでない。

此の武勇剛健を旨とする兵兒の國に、俗謠「はいんや」のあるのは、些か不思議である。

はいんやへ――、はいんや、
はいんや〳〵で半年や暮れたや、ヨイ〳〵
後の半年やサーマ泣暮らす――ャ。

囃「お前さんの頃ぢや、盜ぬちゆはウソぢや、燮の火の付く覺えぬ頃ぢや。

はいんやへ――、はいんや、
俺とお前さんな背戸やの茄子、ヨイ〳〵
成るとならぬはサーマ人知らぬ――や。

囃「…………………………

はいんやへ――、はいんや、
姿や鹿兒島の魚屋ン馬場育ちやヨイ〳〵
米の實る木はサーマ未だ知らぬ――や。

囃「…………………………

囃の詞を書入れたが爲に、禍を發行者に及ぼし、延て讀者に及ぼすであらうことは、決して兵兒の名譽ではあるまい。僕おもふに、暖國の薩摩に淫歌のないちゆうはウソぢや、鹿兒島に行つて「はいんやー」を聽いて、はじめて名君日新公が薩摩琵琶を奬勵し、士踊を奬勵した心もちが、ほんとうに解つたやうな氣がした。さうした武骨な音樂や舞踊と、俗謠「はいんや」とは、疑ひもなく、正面衝突をしてゐるかたちである。錦江灣の風光は畫圖の如く、名物「輕かん」は風味淡泊にして滋養に富んでゐる、櫻島大根の舌頭にとろけ込むやうな味ひは、天下其比なしと云つて、過言でない。はてな。もう少しうま味のある民謠が、是地には有りさうなものだがな。

蘭館醫シーボルトと遊女其扇

大庭耀

一

日本近世醫學の恩人 Philipp Fr:nz Von Siebold を載せた阿蘭陀船が、長崎出島蘭館前海に錨を下したのは、西暦千八百二十三年八月十一日、我が文政六年七月六日で、今年は百一年目に當つてゐる。昨年の秋開かるべかりしを關東大震災の厄に類せられて延期されてゐた彼の渡來百年紀念祭が、去る四月廿七日長崎なる彼の宅趾で擧げられた。シーボルトが日本の文化に寄與した功蹟や事業については、夫々專門の人士によつて發表されることゝ思ふ故、私は彼の長崎に於ける裏面史の一端を爰に書きとめて置かう。

永祿末葉から慶長の頃にかけて、長崎に來航した南蠻船は、吉利支丹の教義と共に優れた學術を我國の人々に傳へた。慶長以後、德川幕府の吉利支丹禁遏令に伴ふ鎖國政策の爲に南蠻船の渡來が杜絶えた後も、時かれた種子は大地の懐ろで徐ろに柔かい新芽を育くまれ、更に、南蠻船に代つて、阿蘭陀船の來往が繁くなるに從つて、一かどの茂りを見せるやうになつた。かてて Andreas Cleyer (アンドレアス・クライエル)や、Engerbelt Kempfer(エンゲルベルト・ケムペル)、さては Charles Peter Thunberg (カルル・ペテル・ツンベルグ) などといふ碩學者の渡來によつて、我が國の蘭學熱は、年と共にいよいよ高められて行つた。青木昆陽、前野良澤、大槻玄澤などが、遙々と蘭學を學ぶため、長崎に來たのもかうした頃である。諸國の俊傑は、異國の新知識を修めるため、長崎へ、長崎へと憬れ來つた。シーボルトが、長崎の土を踏んだ頃も、さうした蘭學振興の機運が長崎――ばかりでなく、諸國の眼覺めたる人々の胸に漲つてゐた時である。

名醫シーボルトが、阿蘭陀屋舗に來れりと聽くと共に、天下の英俊たちは、雲のやうに長崎に集り、ドクトル・フォン・シーボルトに親炙して、異國の新しき學術を修得しやうと、若い胸

を躍らせた。美馬順三、岡研介、湊長庵、平井海藏、二宮敬作、高良齋、高野長英、楢林榮建、楢林宗建、吉雄幸載伊、東玄朴、戸塚靜海、工藤謙同、百武萬里、小關三英、竹內玄洞、伊藤圭介、武谷元立、土生玄碩、靑木周弼などは、數多き門下中の高足弟子である。

シーボルトは、學者としてその門下にさうした英俊を集めたが、更に、美しい一人の長崎女を愛人として獲た。この美しい長崎女こそ、わたくしが爰に叙べやうとする丸山遊女其扇――お瀧である。

二

お瀧の姓は楠本、文化四年、長崎薬町で生れた。父は佐平、母はおきよといひ、二人ながら五十歳前後まで生きてゐたらしいが、その女を遊女勤めさせる位であるから、生活程度の極く低い商人であつたらしい。お瀧は三人姉妹の眞中に生れた。姉はおよね。妹はおさだである。男の兄弟は一人もなかつたらしい。彼女は十五六歳の頃、長崎丸山の遊女屋である引田屋鐵之助の抱遊女として賣られた。多分、貧しい生活を助けるため、身を河竹に沈めたものであるらしく思はれる。引田屋の抱遊女となつた彼女は名を其扇と呼ばれ、丸山の全盛となり『山の花』と謳はれた。其も扇も共に、引田屋に久しく傳はる遊女の通り名である。

引田屋といふのは、現在も尚、古き格式を高く保つてゐるので知られてゐる丸山花月樓の前名で、彼の賴山陽や蜀山人、武元登々庵、さては後年の大隈重信、山縣有朋などの維新大業に參した當時の長崎留學生たちが豪遊を極めた家で、支那の歷史に悲壯な戲曲的色彩を副ゆる玄宗皇帝と楊貴妃が用ひたといふ鶴の枕が傳へられてゐる妓樓である。其扇――お瀧はさうした家の、阿蘭陀行きと名づけらるゝ種類に屬する遊女であつた。

三

わたくしは、ここで、聊か、當時の長崎遊女について記して見やう。さうした方が、ドクトル・シーボルトの渡來した頃の、長崎の雰圍氣と異邦人との關係がはつきりするばかりでなく、其扇の生活や氣持が好く理解されると思ふ故である。

德川時代――紅毛船や唐船が渡り來る頃の長崎遊女の生活格式は華麗、豪奢を極めたものであつた。其の格式の如きも、江戸吉原の高級遊女と同等或ひは夫れ以上の權識を備へてゐたが、更に、その生活振りに至つては、遙かに遙かに豪華を極めてゐた。一代の文人井原西鶴は『長崎に丸山といふところなくば、

上がたの金銀無事に歸宅すべし。爰通ひの海上の氣づかひの外何時を知らぬ戀風おそろし……』と叙べてゐるが、この西鶴の讃辭は、決して單なる修辭的誇張ではなかつたのである。唐、紅毛貿易の利潤にうるほふ丸山遊女たちは、徳川幕府が下した天和、元祿、享保、天明、寛政の數度の戒飾令などにかゝづらふことなく、思ひの限り婉麗華美を競つたものである。彼女達は、阿蘭陀渡りの黒白の天鵞絨、羅紗、更紗に金絲銀絲をもつて、眼覺むるばかり美しく刺繍をほどこした裲襠や、唐船が舶載して來た緞子、繻子其他唐紅毛の文化の精髓を蒐めた異國味豐かな衣裝に身を飾つて、出嶋蘭館の饗宴枕席に侍しては、珍陀の香りに醉ひ、唐人屋舖に赴いては、唐人達が掻き鳴らす胡弓の音に九連環の唄を唄ひ、看々踊りを舞つた。

それは、その當時としては、長崎のみに許された特權であつた。それ丈け、長崎遊女の制度のごときも、他地方の遊女に見ることの出來ぬ特異のものを有してゐた。

その頃の長崎遊女には三つの階級があつた。一つは日本人の枕席饗宴にのみ侍するもの、一つは唐人屋舖にのみ行くもの、今一つは出島阿蘭陀屋舖の紅毛人とのみ綿々の戀を語らふものである。そしてこの唐人屋舖に行く遊女を唐人行或は唐館行と云ひ、紅毛人の客席に侍する遊女を阿蘭陀行きとなづけて、劃然とした區別を立ててゐた。唐人關係については、爰に餘り必要がない故、總て省略して置く。

當時、紅毛人はすべて出島阿蘭陀屋舖に孤住せしめてゐた。そして阿蘭陀屋舖の門前には

禁　制

一、傾城の外女入事

一、高野ひじりの外出家山伏入事

一、諸勸進之もの幷乞食入事

一、出島廻り榜示木柱の内船乘廻る事

附　橋の下船乘廻る事

一、斷なくして阿蘭陀人出島より外へ出る事

右條々堅く可相守者也

奉　行

と認めた高札が人々の心を威嚇するやうに立てられてあつた。そして阿蘭陀人達の出入は一年の中何回と限り常に衞士に圍繞され、極めて窮屈な掟の埒外に出づることを許されなかつた。それ故、蘭館内に態のいゝ蟄居を命ぜられてゐる紅毛人達は、僅かに許された傾城によつて、寂しい異邦生活を慰めてゐたものである。阿蘭陀行の丸山遊女達は、時に應じ、美々しい裝を凝らして出島蘭館の門を潜り、上はOpper hoofd や [illegible]

buys meister や Capitain roorman 下は一船夫迄、あらゆる碧眼紅毛の異邦人たちの胸に媚を送つた。其扇——お瀧も亦、さうした阿蘭陀行遊女の一人である。

四

其扇は美しい容貌の所有者であつた。それは後段に叙べる彼女とシーボルトとの間に生れた愛兒おいねや、その子おたかが、稀れな美人であるのに徴しても明らかであるし、亦シーボルトの著書 Nippon 中の附錄圖繪に描かれた肖像を見ても、斷定を下すことが出來る。ことにその瞳が、非常に美しかつた。やや薄茶色を帶びて、魅力に輝いてゐた。それに鼻筋のよく通つた細面である。シーボルトが惹き附けられたのも、其扇の美貌のためであつたらしい。

シーボルトや其扇を好く知れる城某と呼ぶ唐人番が近年まで生存してゐた。この人から聽き得たところによると、其扇は最初、他の蘭人の饗宴の席に侍してゐた。それを覗見したシーボルトが、その美貌に魅せられ深い戀を覺えたのが慇懃を重ねる最初であつたといふ。事實の如何は、にはかに斷定されないとしても、其扇が衆人に立優つた美貌の所有者であつたことは、證據だてられると思ふ。

シーボルトは彼女を呼ぶに Otaksa といひ、Sonogi と云ひ、モクシヤレと言つてゐる。Otoksa がお瀧さんの轉訛であり、Sonogi が其扇の轉訛であることは、何人にも直ぐ氣附かれるのであらう。モクシヤレといふのは一種の愛稱ではなかつたかと思ふ。當時の長崎遊女の間には既に南蠻、唐、紅毛の言葉が語られてゐた許りでなく朝鮮、黑人等の言語すらも語られてゐた。言語の輸入と共に起る現象は、それらの言語が語られる人々によつて著しく絡まり合ひ轉訛されることである。當時の長崎にあつてもさうした異國の語が訛つて、長崎獨特の言葉がいくつも出來た。夫らのいくつかは今も尙長崎びとによつて日常の對談に用ひられてゐる。モクシヤレも多少意義は違ふがさうした言葉の一つであらう。なほ、之については專門の人々の手によつて解決されることが出來れば幸ひである。

遊女其扇がお瀧であり、シーボルトの愛人であつたことは、シーボルトの著書及び唐人番倉田氏の日記によつて明白に判する。

其扇を其木又は彼杵、或は園木と書く人がある。しかし、これは何れも誤りである。

其扇——お瀧が丸山引田屋の遊女であることが明らかになつたのも亦唐人番倉田氏の、シーボルト在崎中の阿蘭陀屋舗に出

入する人々の上を細密に記した日記によつてである。

説を爲すものは、其扇——お瀧は元細川侯の侍女であつたのを、シーボルトが、細川侯の診療を爲した謝禮として賜つたものであるといふ。しかし之は當時の出島蘭館の制度と女性との關係を知らないことから起るとんでもない間違ひである。阿蘭陀屋舗の記錄中に Zuijker Lijst といふのがある。出島蘭館在住の紅毛人が、その愛する遊女其他に送つた砂糖について明細に記したもので、甚だ貴重な史料であるが、その中には遊女を記すにすべて meid 何々……と記されてゐる。細川侯の侍女説の如きもここから出た誤謬ではあるまいか。

又或者は、其扇は單なる遊女でなくして、名附遊女であつたと說く。しかし、之とても明らかに誤謬である。何故ならば長崎側の重要な記錄が、明らかに打消してゐるばかりでなく、シーボルトの著述中に描かれた、彼女の姿態扮裝や、ともに描かれてゐる糸瀨の姿態などを比較研究することによつても證明出來る故である。

わたくしは、ここに名附遊女といふ言葉が出たから、これについて聊か說明を加へて置かう。德川時代、幕府は遊女の外婦人の出島阿蘭屋舗に自由に出入するのを許さなかつた。これは主として異國人と長崎女との接觸を深めることによつて、混血兒の出生することを忌み防ぐためであつた。この事はかの寛永年間の紅毛人追放などと、深い關聯を有することで、すこぶる興味ある問題である。

兎にかく、出島蘭館に婦人の出入を確く禁じた爲め、いろいろの理由から、蘭館に出入せねばならぬ女たちは、一つの變則な方法を採つた。すなはち、たゞ一つ許された遊女として取扱はれ、丸山に籍を置いて、紅毛人に親んだものである。勿論、全くの遊女ではない。之を稱して名附遊女と言つたのである。この中には、使ひ女などが大部分混つてゐた。

其扇が名附遊女でなく、又、細川侯の侍女でないことは、以上に叙べたところによつて明らかであらう。案ずるに、かうした二つの說は、長崎に於ける出島蘭館の制度、習慣を知らないことから起つたもので、それが更に其扇を遊女でないとしたい人々の言說が重ねられて事實らしく傳へられたものであらう。

わたくしたちは、シーボルトと其扇の上を考へる場合、彼女が丸山遊女であつたといふことによつて、何等の幻滅を感ずるものではないばかりでなく、反つて、さうしたことによつて二人の生活の上に必然的な一脉の彩りを副ゆるものとして、意味深く眺めるものである。又、紅毛人と丸山遊女との密接な關係を傳へる一事實をしつかりと崇るものである。かうしたことは

徒らに淨化して考へるべきものではなく、事實をあからさまに確めて置くべきであらう。

五

ドクトル・フォン・シーボルトが、長崎に來たのは、彼が二十八才の頃である。そして其扇を知つたのは、それから二三年經つた文政八年の冬か文政九年の春かであらうと推せられる。文政八年とすると、シーボルトが三十歳、其扇が十九歳の年である。

冷靜にして寂しい異邦の研究室の空氣の中に、始めて美しい丸山遊女其扇の情を感得したシーボルトの心情は、必ずや深い歡びに滿されたであらう。其の頃は未だシーボルトも若かつた。彼は滿身の愛を美しきこの遊女の上に傾けた。熱情的な性格をもつたシーボルトの愛は、國境や人種を超越して純厚、熱烈であつたらしい。そして渡來の最初から「果實の熟せる丘陵。高き神殿の杜、さては緑ふかき連山」其他こよなく愉快に思つてゐた長崎を一層愛すると共に、更に日本の凡てのものにまで深い愛を感ずるに至つたらしい。

さうした中に、其扇は間もなくみごもつた。そして文政十年五月六日、彼女が二十一歳の春、一女兒を產んだ。この女兒がおいねである。おいねは伊篤とも稱した。おいねが生れたのは出島蘭館のシーボルトの外科室中である。卽ち紅毛人の描いた出島蘭館の圖にホスピタアルとあるのがそれである。出島蘭館中で、遊女が分娩することは、當時としては異例であつた。如何に紅毛人の寵を鍾めてゐる遊女でも姙娠、分娩、病褥、死亡は許されなかつた。それにも拘らず、シーボルトと其扇の場合に於いてのみこの禁が許允されたのはシーボルトが產科の名醫であつた爲め、研究上必要として、その特典を許されたものであらう。わたくしは、これらの事實から見て、シーボルトの威望が、當時の長崎役人たちの上にどんな力を示してゐたかを知ることが出來る。

其扇には乳が乏しかつたのでおいねは山羊の乳で育てられた。それから三月を經た五月九日一人の乳母が傭はれておいねに乳を哺ませた。勿論この乳母は、遊女の外蘭館に入ることを許さない禁制に從つて、丸山遊女の籍に入れられ、名附遊女として傭はれたものである。かうした場合を、長崎人たちに御内分と謂つた。内緒乃至秘密の意味である。名附遊女はかうした場合、抱主にいくらかの手數料を拂ふを慣ひとしてゐた。

六

シーボルトが其扇を熱愛したやうに、其扇も亦優しい情をもつて、慰めたであらうか。もちろん、かうした微妙な男女間の心情は、後人や局外者が、自由に想像を許さない秘中の秘であらう。しかし、わたくしは、いろいろの點から考察してかうしたことだけは言ひ得る。

其扇は、最初シーボルトを知つた頃には、大方の丸山遊女や長崎びとが異邦人に抱いて居たと同様な、人種的冷眼や、職業的な冷たさをもつて接してゐたものであるらしい。

心から愛してはゐない。たゞ金の爲めに買はれるのだ。さうした氣持も多分に働いてゐたであらう。或場合には、それが更に進んで一種の反抗の形をとつたこともあつたであらう。さうした心理は、唐紅毛人の枕席に侍する長崎丸山遊女達の大部分が、その接する初期に抱いてゐた心情である。其扇の場合も之と軌を一にしたものであつたらしい。

しかし、おいねを産む前後ごろに至つて、多少さうした冷靜から覺めて、シーボルトの愛を素直に受け入れ、これに酬ひやうとつとめたものであるらしいことが、現存する記錄の上から窺はれる。そして、これは人間本然の心理の推移であらう。やはり其の間に、人種を異にしたといふ悲劇に絡まれてゐたとしても……。

或者は、シーボルト歸國後に於ける其扇の行爲から推して、多情であつたと説いてゐる。しかし、歸國前と、歸國後とは、おのづからそこに事情の異るものがあるのである。わたくし一個の考へでは、シーボルトの切なる愛情にほだされて、次第に愛を覺えつつあつたものと解釋したい。彼女は可成りに聰明な女であつたらしい。彼女が、その當時の女として、蘭語を自由に讀み書きし得たといふことは、たとへそれが阿蘭陀行遊女として當然爲さねばならぬ勤めであつたとしても、この間の機微を語る一つの有力な事實ではあるまいか。

おいね出生後の其扇の居は銅座である。現在の五十五番地が其處に當つてゐる。しば〳〵出島蘭館及び鳴瀧の別邸に來往したことは勿論である。

七

わたくしは、爰に、鳴瀧の別邸について、いさゝか筆を費して置かう。長崎に於けるドクトル・フオン・シーボルトの生活の一面を偲ぶに重要なものがそこに語られてゐると思ふ故である。

鳴瀧の別邸は、其扇の爲め購はれたものと大方には信ぜられてゐる。しかし之は誤謬である。醫學及び植物學其他泰西の學

術を、集ひ來る門下生達に教授する爲めに求められたとするが妥當である。別邸といふよりも寧ろ家塾としての性質を多分に有してゐる。

始めシーボルトは、官許を得て、請はるるまゝに、吉雄幸載、楢林宗建の家で隔日臨床講莚を開き、傍ら、市人の疾病を診療した。しかし、それは、シーボルトの側から言つても、門生たちの側から見ても、不便に堪へないものがあつたらしい。さうして遂に、校舍を以外に求める必要に迫られたものであるらしい。

鳴瀧の別邸は、シーボルトが購ふ以前は、長崎の氏神諏訪神社の神官青木氏の別邸であつた。

當時は、紅毛人に對して自由に蘭館以外に出づることを許さなかつたばかりでなく、蘭館在住の紅毛人にして別邸を求むることは絶對に許されなかつた。

しかも、さうした場合、シーボルトにのみ之を許したのは異例であつた。之は前に敍べたおいね出生時の場合とひとしく、シーボルトの學識が、長崎奉行をして、この異例を許させたものであらう。

もちろん、表面に紅毛人の名で、別邸を求めることは、法規上、不可能であつた。思ふに、何人か阿蘭陀通詞の名によつてあがなはれたものであらう。

ドクトル・フオン・シーボルトの門弟中に美馬順三といふ人がある。阿波の産で、夙にシーボルト塾の都講として、異彩を放つてゐた。シーボルトの著書 Frola Japonica 中の植物圖を描いた人で、牛痘、接法等に長けてゐた。この美馬氏が死んだのは文政八年である。そして長崎の記錄によると、鳴瀧シーボルト塾に於いて歿したと記されてゐる。美馬氏は、生存中既に蘭學の蘊奥を極めてゐた人であるから、少くとも、シーボルトについて、三年以上は學んだであらう。

さうした諸點から考察すると、鳴瀧の別邸は美馬氏の歿した文政八年以前に求められたと見るべきであらう。わたくしは、文政七年であると推定する。

文政七年には、お瀧——其扇は未だ十八歳である。わたくしは、シーボルトが其扇を始めて知つたのは文政八年ごろであらうと、前に敍べたが、今少し讓つて文政六年か、七年であつたとしても、文政七年は、それから一年乃至二年足らずの年月が經過してゐるに過ぎない。シーボルトが如何に其扇を熱愛してゐても、僅か一年そこそこで、禁制の埒を離れて、居宅を購ひ與へやうとは想はれない。わたくしが、學究の爲めであると推定するのは、かうした點からである。

鳴瀧家塾の構造はすべて日本造りであつた。しかし内部的に觀る時、多少の異國風を加味してゐた。現らされた生垣の入口を入つて突當つた家は二階建で階上も階下も板敷であつた。下十疊、階上八疊位である。そしてこの家は研究室に當てられ、いろいろの珍奇な研究材料や和洋様々の圖書が置かれてあつた。この建物の左方に平家建の一棟がある。室は十疊二室で、これも矢張り板敷とされてあつた。この平家建の方がシーボルトの居室で、そこには椅子、卓子などが備へられ、數多い門下生達の教養や、市人に對する診療なども其處で行はれたのである。緣側はすべて硝子障子が立てられてあつた。

藥園は入口を入つて左手其他にあつた。そこには、シーボルトが、門弟を指導して九州各地及び其の他の諸國に亘つて採蒐された廣汎な種類の植物が所狹き迄植えられてゐたばかりでなく、阿蘭陀船が積んで來た、長崎の人々が名も知らぬやうな異國の植物が常夏の彩りを見せ匂ひを漂はせてゐた。

家塾の有様を目のあたり偲ばせる一葉の寫眞が、現在長崎に存せられてゐる。安政ごろ寫したものであるらしく、建物、樹木ともに當時の狀態を壞さないでゐる。わたくしは、この寫眞に向ふごとに、さうした珍奇な匂ひと彩りの漂ふ藥園のほとりや樹間を逍遙する、丈高く容貌鋭い一人の紅毛人の姿を、懷しく想ひ起すことが出來る。

時には、朱楠のやうに幽かにかゞやく夕月の影を踏み乍ら、父親らしい優しい面持で、おいねをその腕に擁きつつ、異邦の夕べを樂しんだこともあつたであらう。わたくしは、西洋醫學を我國に傳へた最大の恩人である碩學シーボルトを追想するよりも、さうした人間らしいシーボルトの面影が、彼を偲ぶごとに腦裡に泛び上つて來るのを覺ゆる。

鳴瀧の家塾は、シーボルトの歸國後下見國吉氏によつて管理されてゐたが、幾春秋の雨淋風打にいたく朽廢してしまつたので、三十餘年前解かれ、今はその礎石のみが、僅かに點々と殘存し往昔の面影を探ぬるよすがもない。宅址は大正十一年史蹟として内務省から指定保存されてゐる。長崎巡禮の旅人はそのかみの礎石を磨き用ひた碑石面の文字によつてやうやくその然るを知るであらうほど、宅址はしどろに荒れ果ててゐる。たゞ荒るゝに委せた雜草の間に見出でるシーボルトの樹と呼ばるゝ桑に似た古樹と、二箇の古井戸と、倉庫趾の石垣、草中に殘る石造りの小徑などが、何かしら無言のうちにそのかみの彼の生活を語り顏である。

シーボールが、最初の歸國を企てたのは、文政十一年九月であつた。しかしこの行の當初、彼は思ひがけもない災危に遭遇した。それは、有名なシールボルトの疑獄事件である。この事件の顛末は、あまりに煩雜に亙る虞れがあるので爰には省略しやう。唯、簡單に記すと、高橋作左衛門及び其他の門人を介して蒐集した國禁の地圖、地誌、戰記、刀劍等の類を、研究資料として持ち歸らうとしたのを、阿蘭陀船出帆前に發見せられたのである。

この事件の爲め、門下の阿蘭陀通詞や、その他の人々は罪に坐した。シーボルトも、最初幕府の咎むるところとなつたが、審問の結果、彼が日本に對して異心を抱いたとの嫌疑は次第に薄るゝに至つたので、文政十二年十二月許され、再渡來を確く禁じられて歸國を命ぜられた。

この事件は、シーボルトにとつて、可成りに大きい打撃を與へた。更に深い研究をこゝろみようと心に定めてゐた、日本の國土は、最早永久に踏むことを許されない。又、切角苦心慘憺の結果、築き上げた日本との親誼も、力を盡して薫育の途にある門人達をも、すべて放擲し、地に委して、しまはなければならない。

ことに、彼の胸奥に、一番深い憂悶の雲翳を投げかけたのは愛する其扇と、愛兒おいねとに永久に袂別することであつた。彼が、この二人を——日本に於ける至上の慰めとして熱愛して來ただけ、その苦悶も大きかつたことゝ想像される。

彼は、深い懊惱の果、やうやく、次の方法によつて、悲しみを慰めやうとした。即ち彼は、愛する二人の毛髪を、せめてもの形身として常住携へて、遠い海の彼方から、彼女達の上を偲ばうとしたのである。其扇とおいねの毛髪はつまれて別々の紙に包まれ、シーボルトの肌深く秘められた。彼には、いろ／＼の品を携へてゆくより、この二品が何よりも大切な想ひがしたであらう。この時のシーボルトの心情を憶ふと、痛ましくも哀れである。

わたくしは、かうしたところにも、シーボルトの純情にして熱意のこもつた性格が、はつきりと現れてゐるやうな氣がする。

ドクトル・フオン・シーボルトが情の人であつたとは、彼が恒に、ウエルツブルク大學で學んだ折の恩師 Cunier Ignaz Döllinger の毛髪を、肌身離さず持つてゐたことによつても、明らかに證據たてられる。

かうした情に厚い彼のことであるから、この惜別の折も、何等かの形見を二人に殘したに違ひない。その中の重要なものと

して、彼の毛髪も加へられてゐたであらう。又、彼は自分が去つて後も、二人の者が安らかな日を送れるやうにと、そればかり心にかけてゐたらしい。その爲めには經濟上のことでは、及ぶ限りのことはしたものらしい。

それでも猶、案じられるので、彼は日本を去るに臨んで、自分の薫陶した門下中、最も信任してゐた二宮敬作、高良齋の兩人に託するに二人の行末を以つてした。

シーボルト歸國後、二宮敬作が、愛玩の小硯の裏面に

爲せば成る爲さねばならぬ何事も
成らぬといふは爲さぬなりけり

と刻んで、シーボルトの遺兒おいねに贈り、その心を慰め勵したのも、惜別時に於けるシーボルトの痛ましい心を反映させるものと考へられる。

哀しみにつつまれたドクトル・フオン・シーボルトを乘せた阿蘭陀船 Cornelias Hontoman が、長崎港口小瀬戸まで來たとき、島蔭に隱れてゐた一艘の小舟が、阿蘭陀船目がけて漕ぎ寄せて來た。小船には一人の門人が漁夫に扮して乘つてゐた。シーボルトも亦ひそかに、阿蘭陀船から短艇に乘うつり、小瀬戸に上陸した。小瀬戸には、諸門人や其扇、それに當時三歳であつたおいねも、母の腕に抱かれて、去り行く父に最後の別れを惜しまうとしたいであらう。

斯くて、一同は愁然として別れの言葉を交した。勿論、この最後の別れは、長崎奉行の眼をのがれて、ひそかに行はれたのである。

船が次第に、長崎の港から遠ざかりゆく時、シーボルトの胸には、どんな感懷が宿つてゐたであらうか。彼は恐らく甲板の上に立つて、長崎を圍む連山の姿が見えなくなるまで、遙かに東方を眺め入りつつ、深い想ひに沈んだに相違ない。

その時、彼が持ち歸つた、其扇とおいねの毛髪は、二回目の來朝の折、再び携えられ、今は、恩師 Döellinger の毛髪と共に楠本周篤氏所藏のシーボルト遺品中に加へられてゐる。

おいねの髪は、小さい硝子の容器に收められ、それを包んだ紙には Von meine kleine liebe Oin: Für meine mutter と記されてゐる。母とあるのは maria Apollonia Joseph Loty である。彼は愛兒の毛髪を自らの慰めとするばかりでなく、慈母にこれを見せたいとの氣持であつたのであらう。おいねの髪は一見して混血兒のそれと判る程、やや茶褐色を帶びてゐる。

其扇の毛髪は、紙につつまれ、羽織の紐のやうに編まれてある。そして包紙には、Von meiner lieben Sonogi と記されてゐる。それは、艶こそ褪せたが、黒い微光を帶びて、在りし日

の彼女の面影を坐ろに偲ばせる。

恩師デーリンゲルの毛髪は矢張り紙に包まれ Haare meines Lehrers I. Döellinger. April 1835. と記されてゐる。そして、それは、銀の如く白い。

シーボルトから、其扇に、歸國の際形身として贈つたものは何であつたか。現在、楠本家には、何等の證據だつべき遺品も殘つてゐない。惟ふに、これは、シーボルトの第二回渡來前に散逸されたものではあるまいか。しかし、何處かに藏されてゐはしまいか。これこそ、史家並に好事家の垂涎措かないものであらう。

九

母國に歸つたシーボルトは、ひたすら著述に耽つて、長崎――日本を歐洲に紹介した。

Nippon(日本) Flora Japonica (日本の植物) Fauna Japonica (日本の動物) 其他枚擧にいとまがない。

日本研究家としての彼の名は、しばらくにして、歐洲の學界に重きを爲すに至つた。しかし彼の名が學界に高くなればなるほど、彼の心の中では、懷しき長崎の風物、わけても、愛する其扇とおいねに對する思慕の念が昂められて行つた。

彼が日本の風物、文化に關する著述を重ねる時、參考資料として携え歸つた植物、風俗にかゝはる蒐集品の一つ一つが懷ひ出の種となつて彼の心を遙かな長崎に馳せさせたであらう。更に想ひの果は、唯一の形身として、肌身離さず秘めてゐる、其扇とおいねの毛髮に、熱い接吻を與へて、竊かに、心を慰めてゐたものであらう。

又、彼は其扇を偲ぶよすがとして、其の著書 Nippon の中に彼女の肖像を描かせて挿入した。これを描いたものは、彼の助手 Carl Hubert de Villeneuve である。そればかりでなく、彼は長崎から携え歸つた漆塗りの圓い香筥の蓋の裏面に、おいねの愛らしい稚兒姿を、その表に、其扇の姿を、優美な貝象眼させたものを、常住坐右に備へて、ひとり悲しみに堪へてゐたものである。

彼は、歸國以來一意著述に沒頭して、故國の女を一切顧みなかつた。恐らく、彼の心は日本に殘した愛しいおいねと其扇を想ふの念でいつぱいになつてゐたものであらう。

その爲めか、彼は、長崎を去つてから十五年間、まつたくの孤獨で過した。そして、千八百四十五年始めて妻を娶つた。妻の名は Ida Helene Caroline Von Gagern である。

そして、その間に三男兒と二女兒を擧げた。

しかし、結婚後も、彼の長崎を懷ふこゝろと、おいね及び其扇を想ふ念は、いささかも渝らなかつた。

彼は、どうかして、おいねと其扇との消息を知りたいと試みたらしいが、僅かに、出島蘭館在住の紅毛人の書翰を通じて、長崎についての仄かな狀況を知ることを得ただけで、其扇とおいねについては何等得るところがなかつたらしい。

其扇、おいねは勿論、長崎に於ける彼の知舊門弟は、すべて彼との信書の往復を確く禁ぜられてゐたばかりでなく、蟄居同様の境遇に在つた紅毛人の見聞は、極く小局部に限られてゐてさうした私事の詮鑿など、殆んど不可能の狀態にあつたのである。

斯くて、其扇おいねと、シーボルトとの間に於ける接觸は、一時完く中絶してしまつた。第二回渡來時に於けるシーボルトの性格破綻は、實に爰に大きい素因を結んだのである。

十

シーボルト歸國後の、其扇の生活は、どうした狀態であつたであらうか。

シーボルトが其扇を見る心は、妻としてゞあつた。しかし、其扇がシーボルトを見る眼は、完全なる夫としてゞはなく、一保護者としてゞあつた。從來の制度や習慣の上から、異邦人との戀愛生活は、儚ないものと概念づけられ、覺悟を定めてゐた彼女としては、シーボルトの歸國は戀の終焉であると見る他なかつた。しかも、相手は再渡來を禁ぜられた異邦人である。多情な女でなくとも、そこに自から運命轉換の要を迫られて來る。まして愛慾の葛藤に面接すること多き遊里に人となつた女である。彼女が、其後、他の男の上に愛を移したのも、咎められない人間の弱さの故であらう。

其扇は、天保二年、シーボルトと別れた後わづか二年にして一女兒を産んだ。おつねである。そして、それからしばらくして、一男兒を産んだ。文作である。二人は異父姉弟である。文作は弘化二年夭折した。

其扇――お瀧の位牌に、俗名俵屋時次郎の法名が並んで記されてゐる。位牌に名を連ぬることは、夫婦關係を意味する。案ずるに、この俵屋時次郎は、お瀧中年以後の夫であらう。時次郎は文化十一年生れで、お瀧よりも七歲若年である。彼は安政四年九月六日四十四歲で沒してゐる。シーボルト第二回渡來前である。この時次郎とお瀧との間に生れたのが文作であるらしい。

おつねの父は何人であるか不明である。とにかく、時次郎以

前に、今一人の夫があつたこと丈けは確かである。

お瀧のがうした一面を捉へて、直ちに、亂倫呼はりする者があるかも知れない。しかしわたくしは、さうした表面的な解釋によつて人間生活を片附けることは當を得てゐないと思ふ。

何故ならば、其の頃は、未だ異邦人に對する偏見や、侮蔑の念が、長崎の大部分の人々の頭にあつた時代で、異邦人と肉身の交渉あるもの、例へば異邦人の寵愛した女や、混血兒は、ひどく卑しめられ、擯斥されてゐた。

長崎人は、一度異邦人と契りを結んだ女と、婚姻することを甚しく嫌惡した。又、混血兒は、町役人其他公儀の役につくことを許されなかつた。それで、彼等はやうやく、僧侶や、芝居者として、世を避けた生活を送るのを常とした。僧織心や、朝顏日記の作者芝屋芝叟は、共に唐人と長崎女との混血兒であつた。

かうした、不文律の確い慣習は、弱い女の心を深く迷はせる。お瀧の場合に於いても、シーボルトの歸國後、さうした周圍の壓迫を強く感じさせられたものと解釋される。

彼女が、シーボルト歸國後幾何もなく、若い男の上に心を移したのも、さうした環境から來る頼りなさを救ふ爲めと、壓迫に反抗した末の行爲ではなかつたであらうか。

俵屋時次郎が、純粹の長崎人でなく、旅の人であつたことも、これを有力に裏書するやうである。

お瀧は、前に敍べたやうに、シーボルト第二回渡來前、おいねを二宮敬作に託し、銅座町で油屋を營み、そこで晩年を送つた。そして、明治二年四月十二日、六十三歳で歿した。墓は、寺町晧台寺に屬する幣振坂（へぼりさか）上手の墓地にある。法名は、白巖妙瀧信女である。

十一

其扇の上に、かうした變化が起つてゐるとも知らぬシーボルトは安政六年八月、再び長崎に渡來した。

この時の渡來は、學者としてゞはなく、日蘭兩國間の通商親和を計るべき使命を帶びてゐたのであつた。しかしさうした表面の理由以外に、その胸奧に潜められてゐた想ひは、其扇と愛兒おいねに見えて、久濶の思慕の情を慰めたいことであることは、容易に察しられる。彼は、久しく踏まなかつた郷國に歸るごとき思ひで、長崎の風物に感慨深い瞳を投げかけたに違ひない。

愛兒おいねは、父の再渡來を知ると共に、二宮敬作に伴はれて、伊豫宇和島から長崎へ來り老いたる父に逢つた。彼女は當

時既に卅三歳、石井宗賢との間に擧げた八歳の女兒おたかさへも携えてゐた。シーボルトも既に六十三歳。お瀧も五十三歳であつた。

彼ら四人は、出島蘭館の甲比丹ドンクル・キュルシウスの室で逢つた

『三十年に近い間、いかな日もいかな日も、お前たち母子の身を忘れたことはなかつた』

シーボルトが慈眼を濕ませつつかう述懷した時、母子は萬感胸に迫つて泣き伏した。後年いね刀自は、父を憶ふごとに『いかな日も、いかな日も……』と云つた言葉が耳元に歷々と蘇つて來る——と感慨深く近親に語られたと傳承する。

長崎側の記錄に依ると、二宮敬作は、その時すでに、握手すべき右手指の自由を缺いでゐたといふ。昔語りに時を過す四人の胸に上つた感懷は、深刻複雜、言語に絕したものがあつたであらう。

しかし、さうした溫い歡語のうちにも、一脈の冷氣が何處にか藏されてゐた。何故なれば、お瀧はこの時既に、他の男子との間に擧げた兒の母であつた。シーボルトが、三十年に近い間抱いてゐた幻影の半ばは、夫からいくほどもなく、崩されてしまつた。彼の失望と哀しみは想像する丈けでも痛ましいものがある。しかし、彼は、お瀧にかゝはるさうした事實を知つた後も、尙彼女を淸らかに愛した。彼にとつては、昔日の樂しい夢を老いし胸に描くことがせめてもの慰めであつたのであらう。彼が彼女の微恙の爲めに懇ろに處方箋を認めてやつたり、その日記のところ〴〵に彼女の心境に親しむ文字をつらねてゐるのに徵しても、この間の消息が判然と窺はれる。

彼は文久元年江戸に召されて、幕府の外國事務顧問となつた。しかし、さうした表面的な榮譽もなほ彼を喜ばせなかつたらしい。彼は何かしら滿ち足はぬ思ひに蔽はれて苦しんだ。さうした內面的の痛ましい苦悶と、外面的に徒らに華やかな政治的生活は、第一回渡來當時に於ける如き樂しい生活を送らせなかつたばかりでなく、やゝ自棄にも近い迄の荒んだ生活に陷らせたものであるらしい。

わたくしは、シーボルトのかうした一面を叙べるのが、何となく心苦しく思はれる。しかし事實は如何ともしがたい。わたくしは心苦しさを忍びつつ、いさゝか記叙して置かう。

文久の初年頃である。彼は四人の愛人を有してゐたと。一人お榮と呼ぶ二十歳位の美人であつた。一人は伊木姓を名乘る女で、シーボルトとの間に一兒を擧げた。今二人は、鳴瀧家塾附近と本河內附近の女であつたらしい。お榮は尙生存してゐる。

この頃は既に、異邦人と長崎女との關係も、以前ほど喧しく言はれなくなつてゐた時代である。

わたくしは、婦人達の名譽を尊重して、之以上の精細な穿鑿は、ここに省略して置かう。

勿論、かうした世界も、彼の心に滿足を與へなかつた。そして彼は、暗い心を抱いて、文久二年飄然と日本を去つた。彼は去るに際して、久しく愛持してゐた、其扇とおいねの毛髮も、二人の姿を彫つた香筥も、長崎に殘した。彼にとつては、もはや、それらの品を持つてゐることが、苦しい聯想を伴ふ素因となるを恐れた故である。

六十幾歳といへば、既に人生の老年期である。大概の人々が人生の哀歡を外に、枯淡な趣味に生きようとする頃である。しかもシーボルトに於いてはさうでなかつた。

彼の晩年に於ける長崎の生活は、表面的にのみ觀る時、亂倫とも見られるであらう。或者は、かうした反面を擧げて、シーボルトの全人格を否定し、彼が日本に於いて爲した事業にまで卑しみの眼を向けやうとするかも知れない。しかしそれは盾の反面のみを見た淺い理解である。わたくしたちは、思ひを過去にかへして、靜かに味つて見なければならない。

わたくしをして言はしむれば、シーボルトの晩年の生活は、失意から來た人間の弱さを示す一つの相であると云ふことが出來る。そして、かうした僞らさる眞相を深く味ふことによつて徒らな偶像的偉人崇拜の氣持から脫して、人間味豐かな、生きたシーボルトの面影を知ることが出來るばかりでなく、一層彼に對する敬愛のこころを深くするものである。

十二

シーボルトの長崎に於ける生活を懷ふごとにわたくしの心に思ひ起さるゝのはヘンドリッキ・ドーフ(Hendrick Doeff)である。彼はシーボルト渡來に先だつこと二十餘年、享和文化の頃甲比丹として出島蘭館に在つたが、矢張丸山遊女である瓜生野を愛し、一男兒を擧げた。道富丈吉である。彼は文化十四年故國に歸つたが、この時の事情及び長崎に殘した二人の上に施した恩愛の情は、あだかも、シーボルトが其扇、おいねに於ける場合と相似てゐる。ドーフ及び丈吉と長崎の關係については他日筆を費す機會があるやも知れぬ。

わたくしはシーボルトを想ふ時、ドーフを思ひ合せて、離すことの出來ぬ歴史的感興を覺えてゐる。

十三

わたくしは以上を以つて、シーボルトの長崎に於ける裏面史を記敍したが、更に、シーボルトと其扇との間に生れたおいね及び其娘について筆を費して置かう。

おいねが文政十年五月に生れたことは、前に記した。彼女は父シーボルトの愛を一身に鍾めた。しかし矢張り不幸な運命を背負はせられた。彼女はシーボルトが第一回歸國後、二宮敬作に引きとられて育てられ、長ずるに及んで、產科婦人科に屬する蘭學を、敬作によつて授けられた。そして蘭語なども自由に操つた。父に似て極めて頴悟であつた。

彼女は、母の系統を受けて面長で上品な美人であつた。そして顏は白皙であつた。鼻が高く、大女であつたところなどは、父の血を多分に享け繼いだものであらう。そして、こころもち顋の擶んでゐるところなどは、シーボルトの若き折の面持と非常に似通つてゐる。

おいねは、父の門人の息である石井宗賢との間に一女兒を擧げた。おたかである。出生は嘉永五年二月七日である。たかは一名ただとも呼んだ。おいねは後年、鳴瀧の家塾に住してゐた。彼女の名義とされてゐた故である。

おいねと、その指導者二宮敬作との間に、愛情關係があつたと說くものがある。しかし之は虛說である。何故ならば、敬作とおいねとの年齡の差異は、父子ほどであつたばかりでなく、敬作は師弟關係の上には、非常に義理がたい性格の所有者であつたことが知らるる故である。

これは、恐らく、敬作の弟逸二の次男である三瀬周三（諸淵）とおたかとの愛情關係を誤り傳へられたものであらう。

おいねは、その姓名を記すに多く、志本いね、又は矢本伊篤といふ文字を用ひてゐる。思ふにこれはシーボルトかおいねかが、自己の姓シーボルトの字韻を日本語に當嵌めて志本或は矢本と記したものであらう。

これはヘンドリツキ・ドーフが、自己の姓氏から轉じて道富といふ日本文字を當嵌めたのと軌を一にしたもので、日本姓氏と異邦人といふ研究項目の上から見ると可成りに興味ある問題である。

おいねは、石井家を去つて後、產科醫として宮中に召された。杉孫七郎氏や、福澤諭吉氏の推挽によるものである。そして宮中の產事にたづさはつた。福澤諭吉翁から、杉孫七郎氏への推薦書狀は、今長崎圖書館に藏されてゐる。このことは、おいねにとつて、身に餘る榮譽であつた。

彼女は明治三十六年八月二十六日歿した。

おいねの娘おたかは、十六歲にして三瀬諸淵と婚し周三を擧

げたが、後山脇泰助氏に嫁し二男二女を擧げた。が、後三度、醫師片桐氏に嫁し一男を擧げたが、故あつて離縁した。

このシーボルトの血を享け繼いだ老女は、今も尚東京に現在してゐる。しかし、老後を養ふべき嗣が無いため、乏しい生活に滿足せねばならぬ境遇にゐるといふ。傳へ聞くところによると、彼女は若い折習つた箏曲を生活の糧として、寄邊もない老の身を、そのかみの華やかな生活を偲びつつ、ひとり寂しく暮らしてゐるといふ。現在年齡七十三歳であると思ふ。

山脇家といふのは山脇玄博士の一統である。

長崎鳴瀧なるシーボルト宅止のほとりには、今周三氏の息楠本周熊氏が、家族と共に住んでゐる。

又、下見岡吉氏の女田川つや媼も、その近くに住んでゐる。

本稿には、尚幾多の記叙すべきことが殘されてゐる。しかし餘りに冗長に失するを恐れて、それらは他日に讓つた。

淺學非才なるわたくしの筆は、長崎に於けるシーボルト先生の一面を描くに、足らない點が多いであらう。又若輩黄嘴、徒らずに感傷に陥り過ぎた悔もある。それらについては、切に、諸先輩及び研究家諸氏の教示を俟つものである。

わたくしは終りに、本稿を草するに當り、多大の教示と、激勵を與へていただいた古賀十二郎先生に深き感謝を捧げつつ、此の稿の筆を擱く。

都市の美と看板廣告物

栃内吉胤

一、我都市に於ける看板廣告物の現狀

近時都市の美觀といふことが唱ひ出されて來た。都市の美觀といへば極めて廣汎で、そのうちには、都市の地形や歴史的背景をも豫想して居るし、街路や造營物から來る美觀……よく配置された廣場や公園……塵埃糞尿汚水の處理……其の他極めて

隠微な事象にまで關係を持つて居るものであるが、そのうちでこの看板廣告物に關する事は比較的に閑却されて來た嫌がある。

さて一概に看板廣告物といふが、其のうちには、店舗の軒頭に揭ぐる看板……架空廣告……屋外廣告……電柱電車內の廣告……旗幟……ポスター……ビラ……特定揭示場に表示する廣告等を含んで居る。而してこれらの看板廣告物は都會地になるだけ劇しく利用されて居るのであるが、殊に近時の帝都のバラック街を見ると、その生々しい看板の鉢合せが一層眼を衝く。しかもそれらの看板は段々大きくさるゝ傾で、巨大な文字はザラに跋扈して居るから、更に法外突飛に大きな文字でも使はなければ、街路通行者の眼には、一山百文的に映じて、其の感銘が薄いものとなる。即ち互に大きな文字を競ひ合ひ、しかも互に其の効果を相殺するといふ矛盾した結果になつて居るのである。

一體建築美上重要視さるゝのは建築物のファサードであるのだが、家屋の上半分が全部看板になつて居るのが現今の店舗に珍しくない。これは宛然看板の化物を見るやうであり、大きな看板で頭から抑へつけられるやうな感じがする。しかもその看板が意匠や色彩で雅致づけられたものであつたならまだしも、ローマ字などに比して、線の美に乏しい文字が、いたづらに大きく表示されて居るのは、いくら贔負目に見ても快感ではないであらう。

又雜多なポスターやビラ廣告は、屋壁、塀、電柱等所きらはず膏藥のやうにビタ〳〵貼り附けられる。すると又それを防遏せんがために禁札が貼り出されるといつた具合で益々醜態を累加する有樣である。殊に震災後の帝都ときたら、全く貼札の帝都といつてもよい位で、吾々の行く先々にまで雜多な廣告ビラが附き纏ふのであるが、あまりに饒多なビラを一々注視するの煩に耐へないので、顧られずに素通りされがちである。

仁丹の廣告塔の如き架空廣告も、都市の美觀を毀けない範圍で許可さる可きで、殊に、海軍省構內の無線用の摩天支柱が目障りであるといふので識者の反對があつたと聞いて居るが、從來からある不様な營業的廣告塔に關しては何等反對の聲を聞かないのはいさゝか奇異の感を起さゞるを得ない。しかもこれらの廣告塔の或るものから夜間人の眼を眩するやうな光りを明滅させて居るのは、都市の美觀上のみならず交通上から觀ても充分取締る必要があらう。

又近時種々な形狀の看板代用の旗を、步道に突出して揭揚する風が流行するが、著しく大きなものを揭げると、往々街路美

の一要項である見通(ヴイスタ)を阻害するもので避けなければならない。

二七 看板廣告物の取締

左に我國の看板廣告物取締に關する規定を擧ぐれば……(明治四十四年四月法律第七〇號廣告取締法及び大正三年四月警視廳令第九號第一〇號を參酌)

一、行政官廳は美觀又は風致を保存するため必要なりと認むる時は命令を以て廣告物の表示其他之に關する物件の設置を禁止若くは制限することを得

一、左の地域内に廣告物の表示其他之に關する物件を設置することを得ず

但し公益の爲にするものにして警視廳の許可を受けたる場合は此の限りにあらず。

宮城、離宮、東宮御所、青山御所、麻布御殿の各附近、各皇族邸附近、各皇族御墓附近、社寺佛堂説教所境内、公園地、勝區(向島、荒川堤、井ノ頭、小金井、道灌山)墓地。

一、廣告物其他之に關する物件にして汚染褪色剝離若くは破損したる時は速に改修すべし。

一、形狀彩色意匠等拙劣にして見苦しきもの又は褪色し易きもの。

人物其の他圖畫若くは文字形狀等異樣に渉り人の惡感若しくは嫌厭の念を惹起せしむるもの。

偉人豪傑の肖像を利用するもの。

花柳病等に關する廣告にして其の表示形狀等の惡感なるもの。

市街の美觀を害する虞あるもの。

風致を害する虞あるもの。

公安又は風俗を害する虞ありと認むるものは許可すべからず。

斯樣な取締規則が存しながら殆んど勵行されて居らないのは當局にその人なきを語るものであると同時に、市民も概して都市の美觀といふことに對して無關心だからである。或る人は、都市の美觀などゝいふことは贅澤の沙汰で、實用の目的に適ひさへすれば足ると言ふかも知れない。古來この美と實用といことは、分り切つた事で、しかも依然として誤解され易い問題となつて居る。例へば私共は實用の目的をもつて一個の茶碗を造りあげたとする。然るにその瞬間其れに滿足せず、更に雅致ある手法で夫を飾ることを希ふやうになるのは自然の法則である。都市の場合にあつても、其の建築物や街路は勿論、假令一

本の燈柱でも、何等の装飾を加へずに置くといふことは事實あり得ないことである。かのヴェニスのセントマークス前の見事に装飾された旗桿基脚……フロレンスのストロッツパレースの一角に見る鐵細工の燈籠……ピストヤの病院に見る帶狀の彫刻装飾……アントワープの廣場に於けるクインテンメツエースの噴泉……ギルドの標章等、ルネッサンスの諸都市に於ける遺物は何を語つて居るものであらう。

三、歐米看板廣告概觀

次に歐米都市に於ける看板廣告取締の狀況を概觀せば、その美觀上道徳上いかゞはしき廣告を法律でもつて禁止するといふことは共通の事實であるが、我國に比して餘程その取締が嚴行されて居るやうである。米國の或る都市に於ては、街路の步道に突出した看板の高さの最小限度を規定して居る所もある。シンシナトに於ては塀にポスターを貼示することを禁止してゐる。

シカゴ市の如きは看板の高さ及び其の用地面積に對して制限が設けられ、しかも住宅地域に看板を立てる際には、先づその附近民家の過半數の承諾を得なければ建てられないことになつて居る。サンフランシスコでは、電柱廣告を禁止し、建築物上部に附する廣告は、高さ三呎、地上では十呎を超過してはいないことに規定されて居る。

シカゴでは住宅地の街路や遊步道にはその地先の四分の三の同意を得なければ看板を建てられない事になつて居る。英國に於ては、廣告濫用防止會と稱する團體があつて、廣告取締の實際に關與してゐる所であるが、エヂンバラでは建築物の頂上に取り附けられる架空廣告を禁止し、グラスゴーでは每歲四千磅の減收を敢てして電車內の廣告を禁じて居る。この法規はリツヴァプール其他二三の都市に於ても採用されて居る。

マンチエスターに於ける都市の中にはその改良委員所管の一切の看板廣告物は、市參事會の權限で濫りに廣告をすることが出來ないやうにされて居る。若し廣告をなさんと欲する場合には、その圖案設計者は契約者の希望をも參酌し、豫め市の提示する雛型に依らなければならないことになつて居る。ロンドンに於ては、架空廣告法といふものを公布し、市參事會が實際の權限を持つてその取締に任じて居る。

一時ロンドンに見かけた職業的な娘達の廣告持ちも、人道上の問題として禁示された。又或る鐵道會社は、プラットフォームに掲げた惑亂するやうな廣告の群に撤去を命じたこともある。又嘗つてボストン埠頭を醜惡ならしめた廣告札も何時しか

影を潜めるに至つた、リールに於ては或る劇場の側壁に石鹸の巨大な廣告を取りつけたといふ理由で、その開場を許可しなかつたといふ事例もある。リチモンドに於ては、廣告物を建設する目的で、河中の一小島を莫大な價格でもつて使用することを運動した者があつたが失敗に歸した。尙廣告濫用防止會あたりでは、掲示場に出す廣告の文字の大さを、十八吋に十二吋に限定しなければならぬと主張して居る。

ベルリンに於ては警視總監が屋外或は窓邊、乘合自動車等の廣告取締法を公布し、街路に於ける雜多なビラ廣告は特定の掲示場以外には貼り出すことを禁じて居る。パリに於ては、尨大た文字の看板は建築物前面の美を傷けるものであるとして、中々やかましく取締つて居て、若し廣告者が、嘉すべき趣味を顧みず、劣惡に走るやうなことがあつた場合には、法がそれを追及し、その處斷をするのが警察であるが、廣告せんとする場合には、先以て、それが外觀のみならず道德的にも差支ないかといふことについて市の認可を經なければならないことになつて居る。

又嘗つてブラツセルの博物館に於て、看板廣告に關する博覽會が開催され、藝術家が競ふて出品したことがあつたが、それは當時の人々を刺戟して、ブラツセル市の看板は勿論、ベルギー諸都市の看板は著しく美術的になつたといはれて居る。

尙ベルギーにはかの有名な L'Œuvre Nationale Belge といふ團體があつて、都市の美觀といふことに對して、常に監視を怠らないのである。

四、看板廣告の理想

巨大な看、廣告は、なるほど通行者の目を惹くに違ないが、併し建築物の調和を害ひ、都市の美を減殺するに至つては、却つてその廣告主の我利的專擅に對して反感を懷かしむる結果になるであらう。假令小なりと雖も、其の建築物のファサードと調和し雅致に富める看板廣告は、いかに人々の眼に快く印せらるゝであらうか。しかも事實私共が、所要の商品を購はんがために、店舖の軒をくゞらんとする場合には、先づその軒頭の看板に表示された營業品目を見て歩を入れることは極めて稀で、多くの場合ショーウインドーや店頭に露展された品目によつて、直ちに、其れと知つて歩を入れるのである。故に誇大な看板の表示といふことは實際は無意味なものであるといつてもいゝ。かの商品を店の奥深く藏し、一見如何なる商品を取扱ふ店であるか判らなかつた往時に於ては、何々商であるといふことを大きく表示する必要があつたであらうが、現今に於ては、前

述の意味で、何々商といふことより、屋號若しくは商標を表示する方が、寧ろ賢こい方法ではあるまいか。ルネツサンスの伊太利の都會には、かの御用商人が、その店頭に、主君の榮ある紋章を金色まばゆく掲げてあつた。併し封建時代が終りを告げると共に、紋章に對する考へも薄くなつたのであるが、然るに現在の商工業全盛時代に於て、何故に、その昔勇武と門地を矜つたやうに、その商標が美彩をもつて誇りがに店頭に掲げられないであらうか。

この商標と共に考へられるのは、象徵廣告である、例へば革手袋を鬻ぐ店頭の鐵細工の山羊の子、支那商品の店の扉に浮彫の支那陶器、魚商の店の石彫の魚といつた風なものがそれである。英國の宿屋には○○屋といつた屋號を、判じて讀める様におもしろい形象を吊して現はした昔もあつた。現今では纔かに質屋の金色の球、床屋の有平糖のやうな棒、煙草屋の木彫印度人などが殘つて居るに過ぎない。これとても段々稀になつて行く傾である。我邦でも、昔は酒屋の店頭に杉葉或は笹葉の束を吊した、今でも足袋屋の足袋型、茶所の茶壺といつたものが老舗の軒頭に見受けられる所である。

この看板の象徵化といふことは、シヴィックアートが漸次諒解さるゝにつれて必ず復興して來るに違ないと思ふ。即ちそれによつて、從來の商業術衞が陷つて居た無意味な文字の行列から脫せしめ得るのみならず、かの横暴な我慾を表明する野卑な看板は影を潜め、所謂 Art dans la rue の爲に、すぐれた藝術家が自づから街頭に打つて出ることゝなり、永く閑却され來つた看板廣告に美と生命が吹き込まれるに違ない。

最後に附言したい事は、我都市に於ても、亂雜な廣告を整理する爲に、一定の公共掲示場設置の必要を痛感する者である。殊に過般の震災の當時、一家離散の罹災者が、妻子の安否を尋ね、自己の所在を知らせんがために所かまはず貼り札を出したのであつたが、併し其は雨露に剝離する虞もあり、又所期の相手が偶然その貼札の個所に通りすがれば僥倖、その可能性が極めて尠ないことと申すまでもない。若しかゝる場合に一定の地に、公共の掲示場が設置されて居つたならば、如何に的確にその目的が達せられたであらうと切に感じたのである。(了)

文明史家の立場から見た日米問題

高須芳次郎

一

太平洋の波の音は近來非常に高い。その大きい波が強く日米の岸を打つて、私らの耳の鼓膜を破らうとしてゐる。いかに無關心でゐようとしても、その音が否應なしに聞える以上は日本國民の一員として默つてゐるわけにゆかない。今や日本の地位は極めて困難である。日本の向上と飛躍とが目立てば目立つほど、世界から嫉視せられ、咒咀せられようとしつゝある。すくなくとも、アメリカ、支那その他二三の國では、さうした態度を日本に向つて示してゐる。私らは久しく排日の聲に聞き馴れて來たが、今日ほど、この聲について最大の不快、最大の公憤を感じたことが曾てなかつた。それはアメリカ合衆國のすべてが殆ど一致して、日本及び日本人を排斥する意を明白に示したからである。

日本の識者は、この排日問題をいろいろの方面から解釋して、その對策を講じつゝある。が、歸するところは、日米の經濟的競爭を主因とし、人種的鬪爭を客因とするものが多い。その他にも、原因として擧ぐべきものがないではない。(一)ハアスト系新聞雜誌の煽動(二)アメリカに於ける野心多き政治家の盲動(三)日米兩國民の氣質乃至文化の相異などがそれである。かうした諸原因の錯綜によつて醸し出さ た日米の葛藤について、これを文明史家の立場から解釋することは、極めて必要の一主題である。

わが祖國の人たちは、口を開くと「アメリカは正義の國である、平等、自由、博愛のために戰つた國である。この國が排日運動を爲すのは頗る不可解だ。」といふが、要するにそれは善意の解釋に過ぎない。勿論、私はアメリカを以て「無正義の國である、自由、平等、博愛を賣物や看板にした國である。」といはうとは思はぬ。けれども史家として事實にもとづくところの結果から、アメリカを見るならば、率直に「アメリカは徹頭徹尾

實利主義の國だ。」といふに躊躇しない。その外交も亦悉く實利本位であると斷言する。多數のアメリカ人のうちには、正義を以て起つ人もないではない。自由を愛し、平等を愛し、博愛を尊重する人がをらぬのではない。またアメリカの輿論中には、正義の聲が一隅に聞えぬのではない、けれども大體に於て、その正義も平等も動もすれば、實利主義に打消されてしまふ場合の方が遙かに多いやうである。

わが祖國の識者は、好んで、アメリカ建國の精神が正義にあつたことを說く。また奴隷解放戰爭が正義によつたことを說く。勿論、さうした傾向があつたことを打消すわけにゆかぬ。けれどもそれらのうちに、私は實利主義の影がさしてゐたことを看取するのである。アメリカの獨立戰爭は正義によつたものとされてゐるが、率直にいふと、イギリス政府がアメリカに於ける紳士階級の商工的發達の上に妨害を加へようとしたことが開戰の主因となつたとも見られる、この階級は密貿易によつて巨利を得たり、うまい方法で移住民を驅使したり、比較的贅澤な生活をしてゐた。それらについて、イギリス政府が本國の利益のために强壓的干渉を試みたので、紳士階級がまた實利擁護のために起つて反抗した。戰ひは農民や勞働者の自由のために起されたのではなくて、紳士階級の私利のために起された點が確かにあつた。勿論、アメリカが本國に代議士を送らないのに茶などに課税するのは非立憲的だといふ理由はあつたのだが、その茶も當時奢侈品として紳士階級が愛飲した丈で、多數はそれに與らなかつた。茶の課税を怒つて、それを燒棄したのは紳士階級の子らで賤民ではなかつたといふことでも、略ぼ事情を推測することが出來よう、それらの事實によつて、私は獨立戰爭が必ずしも正義の戰ひでなかつたと推定するのである。

またアメリカに於ける奴隷解放のために行はれた南北戰爭は、北方人士の正義の心に根ざしたといはれてゐるが、もつと深くその眞相に徹すると、奴隷解放は戰爭の一因であつて、他にもつと重要な衝突的原因が明かに存在してゐた。それは北方の神權政治と南方の貴族政治とが、主義、傾向の上に於て異つたのみならず、利害關係に於ても亦一致するところがなかつたのである。北方には、南方に於けるやうなロオマ風の奴隷制が行はれてゐなかつたけれども、僕婢や勞働者を最劣等の地位に置くところの階級的區別が出來てゐた。それらから考へると、奴隷解放の戰爭とても、正義の心にのみよつて爲されたものでないことがわかる。つまり、南北の利害不一致がこの戰爭を生んだともいへる。

以上によつて、私はわが識者の一部が殊にアメリカの建國精

神を賞揚し、その獨立戰、奴隷解放戰などによつて「アメリカは正義の國だ。」と口癖のやうにいふことの甚だ當を得ないことを斷言する。私はアメリカを不正義の國とは思はぬけれども「アメリカは建國以來、實利的傾向の多い國で、すべてを實利の上から批判し取捨する風が夙に動いてゐたのだといはなければならぬ。

(二)

以上の推定は、日米八十年間の國交の上に回顧すると一層深く確かめらるゝであらう。長い間、鎖國主義の下に桃源の夢を貪つてゐた日本の門戶を叩いて、わが祖國の目ざめをうながしたペリイ提督については、確かに感謝すべき點がある。ところが、ペリイが日本の扉を手强く打叩いた最初の目的は何であつたか、誠實な友愛の心を以てしたのであるか、それとも侵略的な考へでしたのか。史實によると、最初は矢張、侵略的意圖を抱いてゐたのである。アメリカの實利獲得を主眼として彼れは極東の島國を訪ふたのである。それは當時の大統領ミラアド・フイルモアが帝國主義者で、太平洋政策の上から日本を手に入れようとした野心を持つたのに原因する。

が、幸ひにも、その後、間もなくピイヤアスが、フイルモアに代つて大統領となるに及び、平和協調主義を抱いて、日本に對するやうになつた。それがため、日米の國交は圓滿に進行して、安政元年二月、日米條約を取り結ぶに至つた。當時江戶政府の官吏は、ペリイらと交歡して、その一人はペリイの肩を輕く叩き「日米同心、日米同心。」と連呼した。この語には、極めて親しい心持が明かに含まれてゐた。日米國交の歷史は、つまり「日米同心」によつて開かれたのである。

勿論、アメリカが爾後、日露戰爭時代に至るまで、比較的によく日本の友情、誠意に酬ゆる事實を示した所以は、日本の地位、勢力が、アメリカの實利主義に牴觸しないからであつた。また日本は物質文化の上で、アメリカの後進として、嘆美者として、極めて控へ目に謙遜にアメリカに對したのである。それで江戶末期から日本がロシヤと戰ふまでの期間を日米親睦の時代と見てよい。

ところが、日本が、ロシヤに打勝つて、その國際的地位を進めると共に、支那に於ける勢力を增し太平洋上に雄視する風を示してくると、アメリカの態度は親睦から嫉妬に變つた。それは日本の發達が漸くアメリカの實利主義と衝突するやうになつたからである。それらのことから、サンフランシスコに於ける

日本學童抑壓事件や移民問題や太平洋岸諸州の太平洋艦隊建設決議やホブソン大尉の『日米戰爭論』などを生じた。かうして日米間の國交は、日露戰爭前に見たやうな圓滿を缺いて、日本移民排斥の聲が、アメリカで益々高くなつた。が、根本の問題は太平洋上及び支那に於ける日米利害の衝突にあつた。この事は今日もまだ解決せられないのである。私は日露戰後からヨオロッパ大戰が開かれるまでの期間を日米暗鬪の時代と見る。それは、アメリカが主として日本の勢力を嫉視したのである。

それが、ヨオロッパ大戰の開始と共に、日獨戰爭となり、東洋からドイツの勢力を驅逐した前後から、アメリカでは、日本憎惡の傾向を强く示しはじめた。日本の勢が山東省の一角に伸びて、東洋平和の擔保者であり、保證人たる實を修め、更に日支條約を締結すると、アメリカは、日本の飛躍をひどく憎んだ。その傾向は、アメリカの新聞によく反映せられた。つまり、それは支那に於けるアメリカの飛躍を妨害するものだとして、日本をアメリカの利權破壞者のやうに見なすに至つた結果である。爾後、今日までの日米關係は、暗鬪から明白な抗爭に轉じて、到頭、アメリカの上下兩院が排日決議を爲すに至つたのである。

結局、日米八十年間の國交は、アメリカの實利主義を基調として旋回した。日本がアメリカの實利に牴觸しない時代は圓滑な交際を續けることが出來た。ところが、日本の進步につれてアメリカの實利主義と多少牴觸しなければならぬ時代に立ち至ると、先づアメリカが日本を嫉視するやうになつた。それが更に度合を强めて、日本を憎惡する時代に入つた。親睦から嫉視へ、嫉視から憎惡へ、國交の上に三つの時代を劃したのである。もしアメリカが最初から、徹頭徹尾、正義に終始し、自由、平等、博愛の主義を嚴守する國であつたら東洋に於ける平和擔保者としての日本の使命及び地位を正しく政治上から確認し、理解して、日本を嫉視したり、憎惡したりせぬ筈である。が、アメリカは主として實利主義の國である。正義は些も乏しくはないが、大體が實利本位でゆく國である。傳統的にさうした傾向を多分に有する國柄である。實利主義と正義の觀念とが稍もすると背離しようとする以上は、アメリカが日本を嫉視し憎惡することも亦避け難いのである。アメリカは、今日支那の親友を以て自任してゐるけれども、もし支那の狀態が進んで、アメリカの實利主義に牴觸することになつたら、アメリカは支那の仇敵となるであらう。それはアメリカの豹變でもなければ、變質でもない。實利主義に立脚して、實利本位に國交を支配してゆかうとする自然の結果にすぎぬ。

（三）

静かに日米親睦時代の歴史を回顧すると、今日の日米葛藤と見くらべてその國交上に於ける變化の餘りに甚しいことを感じないではをられぬ。親睦時代に於ける日米双互の感情は春の風が柔かく私らの胸を吹くやうに平和で暖かつた。アメリカの物質文化は、日本に少からぬ便益を與へると同時に日本も亦感謝の心を以て素直にそれを受け入れた。

元來、アメリカは若々しい國であり、新興の國である。日本の建國は、アメリカよりもずつと古いけれども、鎖國の夢からさめて、歐米の新文化を取入れようとした點に於て、やはり若々しい國、新興の國であつた。この點に於て、日米間には明かな一致があつた。また日本魂とアメリカ魂の上で生々、光明を尚ぶ風が共通的にあつた。平和を尊重する點、秩序を愛する點、進取、活動、氣力の旺んな點などに於ても亦一致してゐた。勿論、アメリカが個人に力點を置いて共和制及び地方的勢力を重んじ、日本が國家に重點を置いて、君主政及び皇室を敬仰するところなどには、大きな相異があつたけれども、双方、文化的傾向や民性的特徴の上で共鳴しやすい點が少くなかつた。

今から六十三年前、わが萬延元年（西紀一八六〇）五月に日本最初の遣米使節が、アメリカを訪ふた時、サンフランシスコの人々は殆ど熱狂的に一行を歡迎した。『福翁自傳』のうちには當時親しく見たところを可なりに詳しく記してゐる。その一節に「彼方の人の歡迎と云ふものは、それは〳〵實に至れり盡せり。此上の仕樣がないと云ふ程の歡迎、亞米利加人の身になつて見れば、亞米利加人が日本に來て始めて國を開いたと云ふ其日本人がペルリの日本行より八年目に自分の國に航海して來たと云ふ譯けであるから、丁度自分の學校から出た生徒が實業に着いて自分と同じ事をすると同樣、乃公が其端緒を開いたと云はぬ計（ばかり）の心持であつたに違ひない。そこでもう日本人を掌の上に乘せて不自由をさせぬやうにとばかり、サンフランシスコに上陸するや否や馬車を以て迎ひに來て取敢へず市中のホテルに休息と云ふ其ホテルには市中の役人か何かは知りませぬが、市中の重立つた人が雲霞の如く出掛けて來た樣々の接待饗應、れから桑港の近傍にメーールアイランドと云ふ處に海軍港附官舍を咸臨丸一行の止宿所に貸して呉れ、船は航海中なか損所が出來たからとて船渠に入れて修覆をして呉れる。[illegible]は勿論彼方で賄も何もそつくり爲て呉れる筈であるが水夫を始め日本人が洋食に慣れない、矢張日本の飯でなければ喰へないと云ふので、自分賄と云ふ譯けにした所が、亞米利加の人は兼

て日本人の魚類を好むと云ふことを能く知つて居りますので毎日々々魚を持つて來て呉れたり、或は日本人は風呂に這入ることが好きだと云ふので毎日風呂を立てゝ呉れると云ふやうな譯け。」とあるのを見ると、アメリカの好意がよくわかる。

當時『ニユウヨオク繪入新聞』は日本使節歡迎の辭を掲げて「日米修好はひとり兩國のみならず、世界文明史上に一新紀元を劃する大事件である。わが米國民は日本今回の使節派遣の價値をいくら高く買つても買被りにはならぬ、これが歡迎のためにどんな御祭り騷ぎをしても、むだにはならない、今のところでは、日本が長い間、世界の文明國と交通を絶つてゐたので、この國との修好が將來どんな利益を生むか確言し難いが、併し日本は不文の國ではない。從來どの國の感化をも蒙らず。學術や文藝や農工業などの上に於て立派な獨自の發達をして來た。今後、日本が西洋の文明と接觸し、キリスト敎的思想の感化、影響を受けるやうになつたら、その前途の發展はどうであらう。人類文化史上に於ける最も希望多き問題である」といつた。

以上の言は必ずしも誇張的なものではなかつた。日本獨自の文化、思想が東方の光として歐米に於て顯發すべき動因となつた點に於て、歐米文化が日本に攝取せられ統合せらるゝ點に於て、東西文化の調和、抱擁が行はるゝ點に於て、分立、疎隔してゐた人類共が存共榮の同一路を辿るやうになつた點に確かに世界文明史上に一新紀元を劃するものであつた。それは人類史上に於ける最も希望多き問題であつた。この重要の意義の上で日本とアメリカとは一番深く相觸るゝところがあつた。安政六年に發布せられた日米條約第二條に「日本國と歐羅巴中の或國との間に若し障り起る時は日本政府の囑に應じ、合衆國の大統領、和親の媒となりて扱ふ可し。」と友愛の意を特に表明したのは、當時ひとりアメリカに見るを得た特殊の交誼で、イギリス、ロシヤ、オランダ、フランスとの條約文中にはこの意味のことが少しも記されてなかつた。かうした日米の友誼の上に最も力をつくしたタウンセンド・ハリス――最初總領事として日本に來て後に全權公使となつた――の事蹟は今も尚ほ私らが感謝するところである。日本外交の危機は一再ならずハリスによつて緩和せられた。

アメリカの友情を回顧するについて忘れることが出來ないのは、明治初期の新文化が主として、イギリス及びアメリカに負ふところが少くなかつたことがある。傳道會社ともいふべきミツシヨン・ボオルドがキリスト敎思想をひろく日本に宣傳したことを始め、小學敎育、師範敎育、農學、英學などの上にアメリカ及びアメリカ人が日本に寄與したことが多かつた。フルベ

ツキ、モオレイ、スコツト、ゼンス、クラアクらの名は日本教育史から消すわけにゆかぬ。それに日本の留學生は大抵アメリカに出かけて、そこで歐米文化の新潮に觸れた、その他、外交財政、農業なども、アメリカ人の手によつて助成せられた。長い間、日本の外交事務に貢獻したデニソンのことは誰れもよく知つてゐる。殊に明治十六年（西紀一八八三年）アメリカが馬關砲擊事件――長州がイギリス、アメリカ、オランダ、フランスと戰つた――の償金を他國のやうに受取ることをしないで「それは不正の掠奪だ。」といつて、償金の元利七十八萬五千弗を日本政府に返したのは、最も美しい友情の發露であつた。日本ではその好意を長く紀念するためにその金で横濱港を改修したのである。

それらに對して、日本がアメリカへの友情發露を濃厚に示したことも亦極めて多かつた。明治十二年、前大統領グラントが日本へ來た時、わが朝野は熱狂的に彼れを歡待した。明治三十四年には、ペリイ紀念碑を建設して、日本交歡の誠意を象徴した。概してわが國はアメリカ文化に對して過度の敬意を拂つた。そして日本美術の精華は、アメリカに向つて相當に力強い影響を與へた。以上のやうな具合で、日米國交は日露戰爭前まで圓滿な關係を持續することが出來た。勿論、日清戰爭後、アメリカは支那に於て、漸くその鋒尖を示しはじめたけれども、大體に於て日本と仲が宜かつた。

（四）

ところが、日露戰爭は、日米國交の上に大轉機を與へた。いひ換へると、それは一種の暗影を日米の平和地圖の上に投げかけた。その理由はいろいろあるが、最も重要な一つは、支那に於ける日本の勢力伸長が、アメリカの營利主義に牴觸する點にあつた。アメリカの過剩製品を賣捌くべき一大市場とされてゐたのは支那である。アメリカの資本家が重視した投資好望の國はやはり支那である。金權政治を基調の一つとするアメリカは、何を措いても商工的に支那に伸びようと力めつゝあつた。日清戰後、列強が支那を蠶食するのを見て、アメリカはそれに對抗するために、領土保全、門戶開放及び機會均等を主張した爾後、アメリカは、あらゆる機會を捕へて、支那の歡心を買ふことに力めた。が、支那人排斥法がアメリカの議會を通過した爲めに、烈しく支那を怒らせると、西紀一九〇一年の團匪賠償金未濟額を支那に寄附して、綏和策を講じた。かうしてアメリカは、對支文化事業の上に於て、日本よりも、より多く力を入れたのである。

が、日露戰爭前迄、支那に於けるアメリカ文化と日本文化とは、略ぼ衝突なしに進んで來た。けれども日本がロシヤに打勝つて、滿洲に於ける勢力を增大すると、日本文化はアメリカ文化よりも優勢となつた。それに對してアメリカの抗爭振が漸く露骨になつて來た。由來、アメリカ人は直截、明決である。その性質は外交の上にも反映せられてゐる。日本人は不明快な氣質の所有者ではないが、外交上に於て、久しく江戸政府の因習に影響せられて、曖昧、摸糊たる趣が見える。アメリカ人は、外交上の方針を大膽に言明するけれども、日本人は概して控へ目である。外交に見るアメリカ人の態度は積極的であるが、日本人は消極的だ。彼れは能動的、これは受動的である。それで一九〇五年。(明治三十八年)タフト(陸軍卿)が東洋へ來遊した時、上海に於て「アメリカの支那に對する態度は單に貿易上の關係から考へるばかりでなく、太平洋を挾んで接壤する善隣國たる地位からも推考しなければならぬ。」といつた。それと前後して日米仲裁條約の締結、日米覺書の交換を見た。總じてアメリカが直截、明快に積極的外交を發揚した結果を見るべきである。覺書のうちには、太平洋に於ける兩國商業の自由、平穩な發達を希望する旨及び支那に於ける商工業の機會均等主義の擁護や現狀維持のことが記されてある。が、國務卿ノックスは尚一段進んで、日露兩國の所有に屬する鐵道を列國共同經營に改めようと日本その他五國に提議して、日露のためにはね付けられたことがあつた。

この頃から、アメリカが日本に對する態度は著しく嫉妬的で、日米戰爭を口にするものが、アメリカ人中に往々あつた。それはホブソン大尉のみではなかつた。資本家ヤコブ・シイフは「私は極東に於て、大戰爭の機が來ることを確信する。日英露三國は支那を臣從的地位に置かんがために協約を結んだ。その約束こそは世界に於ける最大の脅威である。アメリカ人はこの約束を失敗に終らしめなければ殘念ながら東方の事件に引込まれるに至るかも知れぬ」と誇張的な演説をした。そればかりでない。一九〇八年(明治四十一年)サンフランシスコ商業會議所は、五十年前、最初の遣米使節を熱狂的に歡待したのと打つて變つて、軍國主義的氣勢を揚げ「太平洋岸に於ける二大急務は、太平洋上に於て一大艦隊を設備し並に外國貿易に從事する航海船舶を奬勵すべき合衆國の法律を設ける事だ。」といつたそれは一九〇七年(明治四十年)の米國大西洋艦隊の東洋方面廻航のことと相俟つて平和地圖の上に一つの暗影を投げかけたものであつた。

蓋しアメリカの共和黨中には、對支政策について大膽、猛烈

の傾向を執らんとするものがあつて、それが一部の帝國主義者と呼應して、日本の對支勢力を打壞さうとするのである。勿論その背後に資本家の飛躍があるのはいふを俟たぬ。結果は着々現はれて、一九一〇年(明治四十三年)に於けるノツクスの滿洲鐵道中立案の提議、錦愛鐵道經營について英米借款の運動などを見た。また支那では、袁世凱、唐紹儀などの親米派があつてアメリカの對支政策を助けた要するにアメリカは支那に於ける日本の勢力を極端に排斥し去らうとするのを一つの使命と爲すやうに見えた。

蓋しアメリカは、日本の東洋に於ける地位を理解しないのである。支那は東洋のバルカンである。昔もさうであつたが、今もやはりバルカンである。東洋の一大禍源は依然として支那に横はつてゐる。それは支那が自らその國を統治してゆく力が乏しい爲めである。その紛亂、動搖につけ込んで、歐米列强はいろいろの野心を支那に逞うしようとする。危險はいつもそこにある。日本は支那と同文同種の國であるのみならず、久しい以前から最も長く支那と交際して、アメリカなどよりも深い特殊の友好關係がある。そして地理の上から支那の盛衰は、直ぐに日本に影響することが深いので、必然支那のために力を入れて東洋平和の擔保者となり、保證人とならねばならぬ第一者の地位にゐる。アメリカは平和を口にしながら、東洋の平和を尊重する日本の使命を理解しないのである。日本が支那の平和維持に終始努力してゐることが、アメリカの對支通商の上に多くの利便を與へつゝあることに想到しないのである。支那に於ける日本の勢力を排して、それに取つて代らうとして、支那に於ける日本の云爲をすべて惡意的に解釋しようとする傾向が見える。その上、支那の政治家は、春秋戰國時代に用ゐられた遠交近攻策を時代錯誤的に襲用して、最も善隣の誼があり、最も恃みになる日本に反抗して、遠いところにある國と近接し、一向恃みにならぬものに依賴する風を久しく馴致した。支那の心腹の病はこれである。それには、アメリカの排日宣傳が背景の一つになつてゐると思はれる。

(五)

日米の支那に於ける對峙と共に誰れも考へ及びのは、太平洋に於ける日米爭覇である。アメリカが太平洋に關心するやうになつたのは最初、南支貿易に着眼した頃からである。それから北太平洋に於ける鯨獵の利や、カリフォルニヤの金礦發見などいろいろの事で太平洋はアメリカに取つて重要な部面となつた。それで日本を訪ふたペリイは、太平洋方面に於ける根據地

として、琉球若くは臺灣を占領しようとした事があつた。それは實現せられないでしまつたけれども、アメリカは、メキシコに伸び、次ぎにハワイを手に入れて太平洋方面に於ける侵略的形勢を明かに示した。

アメリカが太平洋沿岸に伸びようとして、日本侵略を企圖したことは、蓋し當然の歸結であつたかも知れぬ。唯前に述べた通り、大統領の交代に伴ふ國是の變化によつて侵略の手をゆるめたのである。たとひ、さうなつても、アメリカが太平洋に勢力圏を維持する日本を邪魔物と見るのは避け難いことであらう。かうして太平洋に於ける日米の爭覇を生じた。勿論、アメリカはいつも攻勢で、日本はいつも守勢である。「太平洋は太平洋でなくて太騒洋だ。」と誰れか皮肉をいつたのは實勢を穿つた言葉である。大暴風雨は稍もすると、この方面から起らうとする傾きがある。心あるものは常にこの點を憂惧してやまない。

アメリカにも、太平洋の平靜を切望する平和主義者が時々ある。上院議員ボラア氏はその一人で海軍大制限案を主張した。また單税論者として名高いヘンリイ・ジョオヂの令息――若きジョオジ氏も曾て日露戰後、わが國へ來て「外交上の辭令の交換には何等の價値がない。アメリカが眞に平和を愛するならば先づ太平、大西兩洋に有する自國の大艦隊をすつかり爆沈してから、世界に向つて、平和の會議を爲すべきである。世界の平和は、これによつて、當然來るにちがひない。さうなると、日米問題の如きは殆ど問題とするに足りない。容易に解決が就く」といつた。一見向ふ見ずの議論のやうに思はれるが、そのうちに打消すことの出來ない至理がある。

ところが、アメリカに於ける實勢は、ボラア、ジョオヂ二らの希望に合致しないで、太平洋方面に於ける帝國主義的傾向を益々強めてゆくのみである。その海軍は擴張に次ぐに擴張を以てして、底止するところがない有樣である。そしてその擴張は何のために行ふかといふと、すべて日本を假想敵としてゐるためである。太平洋に於ける日本の勢力を壓倒して、ひとりアメリカが覇を爲さうとする野心のため、海軍擴張を一日も休止しないのである。そこに大なる危險がある。

在來、アメリカは、その主力艦隊を太平洋沿岸に廻はして、その陣形を整へることに力めたで、昨年冬、大西、太平兩洋艦隊をやめて、一つの總合大艦隊を編制することにした。それは海軍卿デンビイ氏が大統領の許可を得たもので、編制方法は總司令長官ジョオンス大將（大西洋艦隊司令長官）の下に戰艦隊、偵察艦隊、根據地部隊、制海部隊の四つを置き、戰艦隊はエバアル大將（太平洋艦隊司令長官）がその司令長官に選ばれた。

それから程なく、本年春、總合大艦隊の大演習を行つた。それと共にアメリカの海軍政策が明確に定められた。その主眼とするところはどの國にも讓らぬ勢力を建設し維持し運用するにある。つまり、世界第一の大海軍を擁する決心、用意をしたのである。在來、イギリスと共に海軍の上で世界の最强者であつたアメリカが更にその海軍擴張に鋭意することは、啻に太平洋上の脅威であるばかりでなく、また世界の脅威であらねばならぬ。

元來、太平洋はその名が示すやうに平和の象徴であり、愛の女神の歌ふ世界である。その浪の音は、靜平を祝福する交響樂であらねばならぬ。戰爭や鬪爭や不安の影をほのめかすべき場所ではない。けれどもアメリカの太平洋上に於ける帝國主義、侵略主義の政策は。平和と愛の女神を驅逐し去らうとしてゐる。すくなくとも、さうした暗影を波の上にうつし出してゐる。平和と愛とを尊重する日本はそこに大きい不安を感じないわけにゆかない。

(六)

以上述べたところによつて、アメリカの排日傾向が、ひとり移民排斥に留らぬのがわかる。移民排斥は排日の一部分を爲すもので、その全部ではない。支那に於けるアメリカの排日運動は十數年間根强く執念深く行はれてゐる。その方法は極めて惡辣である。日本を軍國主義の權化のやうに誣認して、ひどく日本を傷けた。一例を擧げると明治四十四年、支那に暴動が起り革命軍が現はれた時、アメリカ各地の新聞は「日本政府は、支那目下の叛亂に際して盛んに北京政府に援助を與へつゝあるのみならず、この機に乘じて、大々的野心を成就しようとしてゐる。それで密々、暗中飛躍をやつてゐるが、南方支那の漢人はこの點に留意して、日貨排斥を斷行すべきである。」と煽動した。また日本の野心を具體的に證明するものとして(一)軍費の供給(二)九州に行はるゝ大演習の準備として西南部各師團の活氣付いてゐる事(三)滿洲に於けるわが守備隊が兵舍の掃除を始め、駐剳部隊の間に異動が行はれた事(四)日本政府が長江筋に多數の艦艇を派した事などを擧げた。いづれも謬妄の極であるが、猜疑の眼を以て日本を見たり、故らに排日本位の態度を固執する以上は、どうしても不合理に日本を誣する事になるのである。かうした論調はアメリカの新聞が、日本のドイツに對する宣戰や日支條約のことにも現はれてゐた。

大正三年八月、日本がドイツに向つて宣戰したのは、日英同盟の誼を重んじ、東洋の平和を顧念した爲めであつた。それは一種の義戰であつた。ところが、アメリカの或新聞はそれを惡

意的に解釋して、『ニユウヨーク・トリビユウン』の如きは「日本の行動を嚴に監視せねばならぬ。」と叫び、『ニユウヨオク・ヘラルド』は「日本はこの戰爭で福建省分割を要求し、大に漁夫の利を占めようとしつゝある。」と惡口した。更に大正四年五月に締結せられた日支條約——所謂二十一箇條と稱せられるが、それは歐米で勝手に付けたものだ、對支要求五項と稱するのが至當だ——の合理的な内容についても矢張惡意の解釋を下した。アジヤは、ヨオロツパのアジヤでない、アメリカのアジヤではない。アジヤ人のアジヤである。アメリカが、アメリカのアメリカたる如く、アジヤはアジヤのアジヤだア。そのアジヤの永遠平和の保證人たるべき國は、アジヤの或一國に見出さねばならぬ狀勢にある。支那が强ければ日支協力して、この事に當るべきであるが、支那が弱い間は、日本が全アジヤのためにその平和の大責任を負擔するよりほかはない。白人種の貪慾に對しては、日本が相當の用意をせねばならぬ。日支條約はつまりさうした理由の下に成立つた。支那問題は日本に取つて死活の大問題である。支那が白人の貪慾をきつぱりはね付け得るほどに强くならない間は、日本の不安が絶えぬ。日本はどうしても支那分割を防ぐために、白人の貪慾を制するために、アジヤに於ける優越な地位を保たねばならぬ。日本が支那に對する關係は、アメリカがメキシコに對するのと略ぼ同じである、否、メキシコに對するよりもまだまだ重い。而もアメリカ人士の或部分はこの見易い道理をも故らに知らぬ振をするのである。勿論、『アウトルツク』の如きは、日支條約を正當としたが、『イヴニング・サン』などは、やはり惡口を日本に浴びせた。その後、アメリカの上院は大正八年のヴエルサイユ會議と前後して旺んに山東問題を論じ、支那を煽動して、日本に當つた。つまり、アメリカ及び支那協同の排日が行はれた。それには、ワシントン會議に於ける日本使臣の失敗やわが政府の外交方針がしつかりしてゐない爲めもあつた。が、アメリカが山東問題を利用して支那の歡心を求め、日本の對支活動に大きい障碍を與へることに腐心したことが殊に日本を不利ならしめた。その餘殃は今日も日本に大きい累を殘してゐる。勿論アメリカの背後にまた猶太人が潜んでゐて、世界霸亂を希圖し、排日によつて東洋をアジヤを最大不幸の地位に陷れようとして排日に執心しつゝある事實の存在を打消し難い。この點に想ひ到ると、日本の前途は何となく暗い。容易に樂觀をゆるし難い。が、それがために日米開戰の場合を豫想するのは早計である。

私の見解によると、アメリカの心持一つで日米間の紛爭を一掃し去ることが出來るやうに思ふ。元來、アメリカは日本の眞相や日本の傳統文化を充分に知らないで、最初は日本を後進視して愛撫的態度を示した。それは根底に於て何等理解なき愛撫であつた。そしてアメリカの營利主義そのものに根ざした愛撫であつた。それで日本がその傳統文化の力を發揮して、東洋の平和を主眼に「アジヤ人のアジヤ」を標榜して次第に正當な意味に於てその勢力を伸ばすと、元來、無理解の愛撫をくり返しつゝあつたアメリカはまた無理解的に日本を嫉視し、日本の進みゆく路をふさがうとした。けれども日本の勢が愈よ伸びてやまぬのを見ると、また無理解の呪咀、憎惡を以て日本に臨んだ。この無理解が尙ほ續いてやまぬとしたら、日米間の紛爭は長く絕える期がないであらう、太平洋の波も亦靜まらぬであらう。

國際上、無理解といふことが一番わるい。世界文化史や平和史の上から見ると、日本の地位は、アメリカの重要なるが如く一層重要である。アメリカの若い、生氣ある文化は、ヨオロッパの老いたる文化、爛熟、頽唐に陷つた文化に淸新な空氣を與ふべき使命と力とを有する。それは日本に於て東西文化を調和して、その歸一、統合の上に平和の實現を期する使命と力の可能性があるのと同樣に尊い。唯アメリカには、宗教的、人種的に差別を設ける風習がいつまでも去らぬのは一つの欠點である。殊にアジヤ、東洋の文化を理解し得ないのが大きい欠點である。アメリカでは、日本思想がいかに獨自の長所を有するか、印度思想、支那思想がいかに或時期に偉大を示し、今もその價値に世界的優越さがあるかといふことについて、何等知るところがない。たとひ、知るところがあつても皮相で淺薄である。アメリカ人は文化の根源たる思想の上に於て、東洋を知らぬ、アジヤを知らぬ、支那を知らぬ、印度を知らぬ、更により多く日本を知らぬ。それで日本が傳統的に平和を愛することをも亦知らぬ。

アメリカはかうして、いつまでも、思想の上に於て、無理解に終るであらうか。必ずしもさうとは限らぬ。アメリカが白人文化、歐米文化の優越を自尊し、キリスト教を尙んで他の宗教を輕視し、白人種のみ人種的に優等であることを妄信する弊から目ざめるならば、思想上、東洋に對し、日本に對して無理解に終ることはない。勿論、それには、日本自身が歐米盲拜、歐米畏怖の念から解放されて、思想上からアジヤを說き、東洋を說き、印度、支那に言及し日本の特色について闡明するところがあらねばならぬ。殊に東西文化は双方、截然たる區別の下に相對峙して、いつまでも離ればなれになつてゐるものではなくて、曾て朝鮮、支那、印度、ヨオロッパの文化が日本に於て調

擬せられたやうに、もつとその度合を強めて、日本に於て調和せらるべき所以を説かねばならぬ。その統合、歸一の上に東西人が暖く握手して、久遠の平和を實現すべきことをも明かにせねばならぬ。この日本の文化的使命、平和的任務が、正しくアメリカ人に解せらるゝならば、排日は當然消え去るべきである。

それにアメリカにも、日本に對して相當の理解を持ち、日本を愛する有識者が往々ある。日本がアメリカ氣質乃至その國民性をよく解して、率直に淡白に行動し云爲するならば、アメリカの排日態度は相當緩和せらるべきである。けれども日本政府の外交が、いつも退嬰的で屈從から屈從を追うて終始し、いふべきことを十分いはずに終るやうでは、却て排日氣勢を増大するばかりである。それには日本政府の當局者が果して日本の世界に於ける文化的使命や平和的任務を自覺してゐるかどうか。只管眼を當面の事に注いで、遠大、莊重な使命、任務に思ひ到らぬ傾きが明かにある以上は、排日問題を根本的に解決することなどは永久に不可能であるのみならず、排日氣勢の緩和も亦困難であらう。自覺は一方の自覺だけでは効を爲さぬ。アメリカの自覺 日本の自覺、この二つが文化的、思想的に促進されなければ、新局面の好望的展開を見ることが出來ない。

今日の日本には、極少數の軍國主義者があるかも知れぬが、大體に於て、世界人類の共存共榮を尊重する平和主義が一大勢力を占めてゐる。一時、日本はロシヤの壓迫やヨオロッパ列強の支那蠶食を憂惧して戰爭をしたけれども、それは日本の眞意でなかつた。その目的は東洋の平和――世界の平和にあつた。江戸政府の時代に三百年間の平和を維持したことは、日本人が傳統的に平和を尊重し愛好した精神の具體化にほかならぬ。この傾向は今日の日本人を支配して、國際聯盟や平和會議、縮軍會議に對する一般の興味と熱心とは著しく増進してゐる。[illegible]來、日本建國の精神たる積慶、重暉、養正の三要綱が既に大平和主義の象徴であり宣言である。アメリカが眞に平和を重んじ、世界人類の共存共榮を重んじ、アジヤの平安を心から祈るならば、日本と衝突すべき事情も理由も全くないのである。たゞ[illegible]である。兩國民間に於ける氣質の相違、宗教の差異、皮膚の黄白などは少しも介意するに足りない。若き日本と若きアメリカは茲に考へて、平和を基調とする新文化創生に協力すべきではないか。かういふと、いかにも理想に偏してゐると思はれるかも知れないが、私は單に日米問題を經濟方面から見たり、會社主義的に解決したりする丈では滿足することが出來ないのである。そして私は聰明なアメリカが職業政治家や資本家や猶太人などの煽動に誤られて、不合理に日本を敵とし、全アジヤを敵として、自ら大きな禍の因に落ぬよう、直下に正義と人類愛の上に目ざめんことを促がしたい。アメリカよ、文化は一つの環狀を爲して、最初東から西へ行き、次ぎに西から東へ來り、更に今や東から西へ行かうとしてゐることを知れ。そして文化西漸の衝に當り、その使命を荷へる日本の地位について考へよ。公平に切實にそれを考へよ。

勝負事の興味

勝負事と心境

菊池寛

勝負を爭ふ道には、二つある。技倆實力であらうか、チャンスで爭ふかの二つである。二つとも勝負事と云へるが、然し普通は後者の場、即ち投機的性質あるものを、「勝負事」と呼んでゐるやうだ。

たゞ、技倆實力の爭ひにも、チャンスが働くごとく、外見チャンス丈の勝負にも、また技倆實力の働くこと、さいころを使つてのばくちにもなほ技倆の高下があるのでも知られる。

角力、劍術、柔術、將棋、圍碁、などは實力技倆の戰ひであるが、然れども時のはづみと云ふことあり、ふとした偶然に依つて勝敗を轉ずることがある。殊に、野球、テニスなどは、無情の轉々し易きひようきん者のボールを使ふことゆえ、勝負を決定する要素の中、一、二割はチャンスを含むと云ひて可ならん。バットに觸れる球がわづかなる違にてヒットとなり、或はファウルとなることを考へれば、チャンスが勝負を決すること往々ありと云ひても可ならん。

たゞチャンス丈に勝敗のかゝる場合は、さいころを使つてばくちの如く、花札を使ひてなすおいちよかぶの如く、その勝敗頗る簡單にして殺伐、たゞ勝か敗かの一六勝負に全身の緊張をつなぐところに面白さありと云はゞ云ふべきも、相當發達せる理智と感情とを持てる者の、長く樂しむべき業にてはあらざるべし。

我々が樂しむべき勝負事は、その内に自分自身の計畫と、實

力と、豫想力と、膽氣と、その他あらゆる精神的機能を十二分に働し得るが如き勝負事ならざるべからず。藝術が人生の縮圖であるが如く、その勝負事そのものが、生活の縮圖の如きものたるを要す。人生に於て、我々の豫想が適中する欣び、計畫が成就する欣び、實力が發揮せらるゝ欣びなどは、容易に得られない。多くの歳月を拂ひ、多くの犠牲を拂はねば得られない。それから人に對して、優越感を感ずることも、甚だむつかしい。

たゞ、勝負事に於いては、わづか一時間か二時間かの間に、自分の計畫を立て、自分の實力を振ひ、膽氣を出すなど、あらゆる精神活動が出來、またそれが生む効果を享樂することが出來るのであるから、勝負事が人生の一大慰安である所以である。

我々が、時々新聞の講談などをよむのは何故だらう。それはあしこに現代と全く無交渉の世界が展開してゐるからだ。そこでは、久米の平内だとか、清水の次郎長などが、時代を超越して、活躍してゐるからである。そこでは、我々は實生活の勞苦を悉く忘れることが出來るからである。

それと同じやうに、勝負事の世界も、また別世界である。將棋なら、その一局の裡に、新しい世界が拓かれ、新しい喜怒哀樂があるからである。どんな貧乏人でも、將棋をさして居れば手に金銀を澤山持つことが出來、ゆたかな氣がするのである。そして、そのゆたかな氣は、可なりリアルで、實生活の勞苦を充分忘れるのに足るほどである。そして、實生活では、一度も人に優越を感じたことのない男が、町内で盤面では誰よりも偉くなつてゐるのである。

チャンス丈で爭ふ勝負事が單調で殺伐であると同時に實力技倆ばかりで、戰ふものも、何となく息ぐるしくて、するどすぎていけないが、半分のチャンスと半分の實力とで戰ふものは面白い。

先年文士賭博云々で文壇の士の間に、八々が盛んであることが、挟摘されたが、勝負事として、風情のあるのは、花やトランプが一番であらう。あらゆる實力を發揮して然る後に天命を待つところが面白い。人生で冒險的企業をやるのと似てゐる。その遊びは、一つ一つの企業で、銘々の主義や方針や、性格や性情までが勝負の裡に反映して來る。そして、花の勝敗などが結局可なり深い人格的な力に依つて左右されて來ることが分るのである。一定の資本を擁し、ある事業をするのと、スケールの大小はあるけれども、結局成敗利鈍の依つて來るところが同じだとまでに思はれる位である。

英國人が、嘘のつきっこをしたとき、「私は生涯賭をしたことがない」と云つた男が、一番巧妙なウソとしてほめられたが、それほど英國人は賭が好きである。そんな意味で、人は一六勝負が、すきである。まだるこい事をするよりも、一時に勝負を決し、それに依つて精神的緊張を味はうとする。特に、ダルな人生で、心を緊張させる少數の物の中では、勝負事は最大なものであると云つてもいゝだらう。

カキガラ町の米穀市場をめぐつて、合百師と云ふものがありそれが米相場に大影響をして居り、合百その物が、弄花よりもつと面白く、一度それに手を出すと生涯ぬけ切れないと云ふことを聞いたが、勝負事の面白さは、人心に宿る癌で、結局命をとられるまで、除かないものかも知れない。

そんな意味で、勝負事は藝術と同じ位に、人の生活に喰ひ入つて居り、藝術よりは下品であるが、その重要さは同じ位であらう。人生から勝負事を取られるのと、藝術を取られるのとどちらがいゝかと、投票してみたら、必ずしも藝術派が勝つとはきまつてゐないのだらう。そして、勝負事から得る面白さも、やつぱり藝術から來る美觀と同じく、生活の實感でないところで似てゐる。

勝負事は、世の道學者達から屢々世務を荒廢するものとして排斥せられるが、然し實際生活で、經濟的制限や社會的制限などで、枉屈されてゐる人間に取つては、勝負事の世界で活躍することが、せめてもの慰めではあるまいか。

學問でも技術でも、あるところへ行けば、人格なり精神の問題だが、勝負事もある程度以上へ行けば、精神の問題だ。幕府將棋所大橋宗桂が、將棋工夫の便としてかきつけた精神陶冶の心得書を拔いて見よう。

予象戲深望の餘り萬一斯くの如き心持にて其れを執行致さずば罰す可し、思慮の工夫書附畢

象戲簡條之次第

一、氣の勝氣の負と云ふこと、業の勝業の負と云ふこと、位詰めの勝位詰の負と云ふこと、熟未熟と云ふこと、氣の強弱と云ふ事、業の強弱と云ふ事、氣の虚實と云ふ事、業の虚實と云ふ事、強中の弱といふ事、弱中の強と云ふこと、先を取るといふ事、先を待つと云ふ事、先となり後となると云ふ事先之中の先と云ふこと、先を指すと云ふ事、先之後といふ事後の先と云ふ事、亂して之れを取るといふ事、手前を指すと云ふこと、見合せと云ふこと、見屆けると云ふ事、見切ると云ふこと、始中終と云ふ事、氣のそゝると云ふ事、氣のいらつと云ふ事、氣のおこたると云ふ事、拍子に乘るといふ事、

位を見ると云ふ事、ねはきと云ふ事、早きと云ふ事、遲きと云ふ事、麁相と云ふ事、藝にはまると云ふ事、なづむと云ふ事、あぐむと云ふ事、中推しと云ふ事、嗜みと云ふこと、思案と云ふ事、しよりと云ふ事、根なくなると云ふ事、見屆けて詰めると云ふ事、推量の詰めと云ふ事、駒を進むと云ふこと、駒を退くと云ふこと、駒を引くといふ事、駒をよると云ふ事、駒を上ると云ふ事、駒を行くと云ふ事、駒をあてると云ふ事、鬪ふといふ事、氣の進むといふ事、氣の急ぐと云ふ事、氣のせわしきと云ふ事、氣の靜かと云ふこと、氣の戻るといふ事、氣のこると云ふ事、氣の離ると云ふ事、氣の移るといふ事、氣のおこると云ふ事、氣の練ると云ふこと、氣のゆるむと云ふ事、氣の輕重と云ふこと、氣をうばはるゝと云ふ事、氣のはやると云ふ事、氣と業と一致といふ事、業のひゝきと云ふ事、業の移ると云ふ事、相人を恐ると云ふこと、相人をつゝしむといふ事、相人をあなどると云ふ事、藝を惜しむといふこと、負けを惜むといふ事、損の德といふ事、德の損と云ふ事、釣合と云ふ事、はりあひと云ふ事、あやに乘るといふ事、圖に乘るといふ事、打替るといふ事、打棄てると云ふ事、兩道と云ふ事、打寄せると云ふ事、突き寄せると云ふ事、兩王手と云ふ事、駒をなると云ふ事、待駒と云ふこと、歩を切ると云ふこと、はねると云ふ事、手すきと云ふ事、指掛ると云ふこと、受けると云ふこと、受けとめると云ふ事、指組といふ事、盤果氣充と云ふ事。

右百箇條は象戲工夫の便ともならんと予一心の樂みに任せ筆する者也

元祿十一寅年春三月吉日　大橋宗桂作之

勝負を爭ふ場合に於けるあらゆるデリケートな心境をつくしてゐると云つてもいゝ。これに依つて心を練れば、凡ての競技勝負ごとに於ける心境の修業となるばかりでなく、人生に於けるあらゆる對人關係に於ても、得るところが多いであらう。

これを以て見るも、將棋の中に、處世觀人世觀の工夫がつめる如く、他のあらゆる勝負事の中にも、かうした契機はあるだらう。

勝負事をいやしむべからざる所以である。

勝負事の誘惑

竹久夢二

勝負の興味はいくらか僕にも解りさうな氣がするが、勝負事の興味となると、自分が勝負事を好きにならないと、ちよつと面白味も解りさうもない。僕は勝負事は、碁も將棋もトランプもあまり好きでない。碁や將棋は子供の時分に覺える機會があつた。親爺が碁枰を弄ぢつてゐることもあつたし、丹波や播州の方から、冬出てくる酒造りの杜氏が、よく將棋や尺八を僕に敎へてやると言つたがとう／＼習はないでしまつた。その頃よく遊びにいつた吉野屋といふ宿屋の若内儀が僕を可愛がつてくれて（主人と若主人は、何を商賣にしてゐたのか子供には解らなかつたが、年中旅に出てゐた）冬の日など、炬燵へあたつて旅の役者だの藥の行商人どもが泊合して、花を引いてゐる光景を屢々見た。ある時、吉野屋の庭で遊んでゐると、障子の内で壓搾したやうな聲のない聲と物音に驚いて顏を上げる途端に、障子を蹴倒して一人の男が肩先を押えて飛出すと、後からつゞいてドスをかざした男が躍りだした。二人の男は庭の木立の間を追かけくらをしてゐたが、親方らしい男が、ドスの男をやつと抱きとめると、斬られた男は塀を越えて駐在所の方へ馳けだした。一人の男がすぐに駐在所から半死の被害者をかついでくると、これはあとで聞いたのだが、加害者はいつの間にか逐電させて、表沙汰にしないで濟ませた。この彼等仲間の道德を面白くも思つたが、血の飛散つた壁や、天井や、そこに散ばつた櫻のピカや坊主のピカが變に寂しかつたことを、その後東京の裏町の鼈甲屋の二階で五厘花を引いてゐる婆さんや蝙蝠傘のやうな男の顏と共に思出す。その頃そこで少し上等の宿をして、なんでも彼等仲間の道德を超えた惡事をした男が、一枚の花札をかくした手の甲を花札と共に、ぐさと針で突刺された話もきいた。

櫻のピカと菊の丹が好きで、吉野屋の若い内儀さんに一通りは敎はつたが、いまだに好きにはなれない。

その頃、權現樣の春祭に境内でやる競馬や、吉井川の川原で

催される競馬會が好きで、自分も七歳の時から馬に乘つた。ある時、家の者に内證で厩へ入つて裸馬に乘つた、外へ出ると馬の癖で胴震ひをするものだ、それに振落されて眼をまわしたのが、恰度小學校へ入つた春で、七歳の時だつたから、覺えてゐる。東京へ出てからも、根岸の競馬にはよく出かけた。しかし勝負に賭けるのでもないし、自分で乘つたわけでもないから、これは勝負の興味とは言へない。馬が好きなので、これは餘談だが、僕の作畫の最初の對稱になつたのはやり馬だつた。女の繪を描きだしたのは二十過ぎてからだ。しやんとした馬の首やすんなり伸びた四肢や、尻の丸味などあかず眺めたものだ。冷たい柔かい鼻先を撫でながらあの大きな眼を見てゐると、遊ぶことも忘れてゐた。好い馬になると尿の香まで好きだつた。

競馬もさうだが、野球やテニスのやうな競技も、所謂勝負事とは言へないかも知れないが、前にも言つたやうに、どうも僕は、勝負が單に智力と技功だけでなく、身體全體の運動を伴つた經過に面白味のあるものの方が好きだ。早慶球仕合の最後の一つ前のマッチの時、泉谷の打つたスリーベースヒットがホームランになつてホームのプレートの上で橋戸と抱き合つた時がましい光景を忘れない。あの時の慶應のピッチであつた聰明な櫻井が何故泉谷の好きな低い直球を投げたのか、泉谷がまた、勝負の別れ目になる球でホームまで易々と走つたか、そこに理詰以上の面白味がある。この間三宅の率いた日本代表選手が比島の選手と見えて敗れたのは、前の晩に宿屋へつめかけた先輩が日本の名譽のために明日は是非とも勝つてくれとか言つた時、三宅は惡い事を言つたものだと思つたのださうだ。果して翌日は負けた。日本の名譽を背負つたのが敗因になつたのもおもしろい。先年早稻田が日本の代表選手として、比島と芝浦で戰つた時、何とかいふ比島の打者が打つた球は當然スリーベースだつたのを、その時センターを守つてゐた趙が、球の音を聞いただけで球は見ないでバックすると恰度球がグローブへ入つたさうだ。こんな仕合になるともう、勝負は第六感の調子一つだと思はれる。野球仕合の思出話はちよつとしたくなるが、題意に添はないから、よすとして、一體僕は、シユニッツレルの「猛者」の客と主人が賭事をする、あの一か八かの心持にはなかなかゆけさうもない。

主人。身につけてゐるものを皆賭ける、家來も來たらお主にやる。買ふておいた馬車の中の席もお主にやる。

客。それればかりの事では足らぬわ。

主人。（少女を指す）こやつもお前に付けてやる。

かういふ心持は、玉突前の双六を爭ふ心持とは訣が違ふ。

「たつた十五分前までいとしい女子の世話になり金も十分持つてゐて、行末の望もあつた身が、かうして一人で死ぬのは、思へば／＼儚い事ぢや。ほんにこれも惡い洒落ぢや。笛を吹いて見る氣にもならぬわ。」といふ幕切れもさすがに南歐らしい。

かうした一か六かの賽の目に運命を托する心持に、勝負の興味をおくまでになると、高い所から飛下りる刹那の快感に似たものがあるであらう。その誘惑は僕にも解るが、さてそこまでゆく勝負事の手管が面倒くさい。

スペインの賭博場へいつて百萬圓握つたら、すぐに電報打つから出かけて來いと約束して、去年の春日本を立つていつた彫刻家Tは盛んに負けてゐるのかして、まだ、電報を打つて來ない。

勝負事と私

徳田秋聲

勝負事は私の性格が弱いせいか、餘り好かない。人の勝負を見ることは相當に興味があるが、自分自ら勝負を爭ふことにはさう興味がない。勝負事を見物するにしても、自分がその中へ引入れられるのではない。たとへば相撲の例でいへば、格別個人的に主觀的な強い好惡感があつて、その立場から興味を感ずるのではなくて、緊張した力士たちの氣分、興奮の極度に達する周圍の空氣、仕切つて立つときの力士の全力的な努力、又は土俵に現はれる力士の氣質、さう云つたやうなものが面白いので、偶には好惡感も動くが、どつちが勝つても負けても、さうひどく夢中になつて騒ぐといふ氣にはなれない。多くの場合負けて引込む力士に、可愛さうだといふ感情が動くくらゐのもので、また角力といふ職業が、さう云ふ點でづゐぶん莫迦げた[illegible]な種類のものだと思ふだけで、格別痛痒を感じない。ボートレースにしても野球にしても競馬にしても、同じである。將棋や圍碁などには、殆んど興味を感じない。強いものが勝つて、弱いものが負けると決つたやうなことが、見てゐて面白くないのも

當然である。たゞ花だけは伏せた札のなかに、半ば運命が秘められてあるから、いくらかの興味はおるが、これも花を遊ぶと云ふ氣分が面白いので、勝敗のことは、さう氣にならない。これは變に私の頭腦が決定的なことを好まない證據である。

物事を決定的に考へるといふことは、私に取つてはづゐぶん氣詰りなことである。無論實際のうへで、決定しなければ、何うにもならないことは澤山ある。たとへば私が旅行するとすれば、行く場所を豫じめ決定しなければならない。選擧權を行使しようとすれば、どつちかの候補者に決定しなければならない。趣味生活にしても、思想問題にしても、總てさうであるのは無論だが、後者の場合、それを決定的に考へるといふことは、私の流儀ではやがて現實につくといふことを意味するので、現實を離れては、何一つ決定することはできないやうに思ふ。現實につくと云ふと、人はそれを現狀そのものに滿足してゐることのやうに考へがちだが、現實がそんな固定的なものでないことは、現實その物が證據立てゝゐるとほりで、又現實主義と云ふものが、さう粗大に取扱はれては大變なのである。私が人生に於て決定的態度を取ることを嫌ふのは、むしろ眞實の現實を見出さうとする心、現實にぶつからうとするので、私は自分の弱さから常に現實を逃避したがつてゐるのを氣づいて以來、さうなつて來たのである。私はしひてもさうしてゐなければならないのである。

話が少し岐路へそれてしまつたが、勝負事が同じ遊戲でありながら、人の感情を緊張させ興奮させるのは勿論で、それには端的に自己の優越を明白に知り又た知らせようとする人間本然の慾望が働いてゐるので、それには大抵の場合物質的慾望が、その人々の性質によつて、大なり小なり交つてゐることも見のがせない。それゆゑ勝負事にはとかく耽り易いので、ともすると賭博が一番興味が深い理由でもある。それらは道樂としては、むしろ酒色以上にも人間の社會的生活を頽廢せしめる魅力をもつてゐるのである。又た特殊的な一つの方則若しくは約束によつて行はれる人間同志の爭鬪でもあるので、優劣を決すると言ひ條、個人同志の喧嘩や國際間の戰爭のやうに勝つことが最後の目的でありながら、或る制限された範圍のなかでの爭ひであるだけに、茶道や何かと同じやうに、づゐぶん窮屈であるのが、私が勝負事を嫌ふ一つの原因でもある。

スポーツは文明人の餌だ

植村陸朗

『此の勝負が一番決するまでは親が死んでも手が離されん』なんて云ふ勝負事に凝り性の人がよくあるものだが、大した凝り性でなくとも勝負事に興味を有たぬ人と云ふのは一寸ないものだ、又一面に『俺は勝負事は大嫌いだ、負けても勝つてもあとがいやだ』なんて云つてる人もないではないが、そんな人に限つて満更ら嫌いでもなく勝負事に只勝つ事にのみ興味を有つ人で負けるのが嫌さの負惜しみなのだ。

闘争本能とやらを人間が有つて生れて來てる以上、勝負事は決して嫌いな筈はなく、又よく〳〵世相を考へて見ると恐らく何事でも勝負事でないものはあるまい、只勝負そのものを意識しないでやつて居るに過ぎないのだ。

然しまあ、一般に勝負事と云へば碁將棋、カルタやあらゆる運動競技等が數へられるのだが何れにしても津々盡きない興味があるに違ひない。

碁將棋をやつた人は、アンな面白いものはない一度やつたらやめられぬ、二晩三晩は徹夜でもいゝと云ふので全く凝つて了つて、お終ひには大事な身體を毀して迄も夢中になる人があるが、斯うなると興味を通り越して結局は不愉快を覺える樣になるのではあるまいか、勿論碁將棋のたぐひも興味深いに違ひないが、同じ勝負事でもフイジカル・テースト（肉體的の快感卽ち健康の快感）をともなふ各種の運動競技の方が一層興味をそけるし又他人にもお薦めしたいものだ、そして又此の運動の興味と云ふものは必ずしも競技に携はらなくてもそれをして居つた丈けでも味ひ得るのであるから却々廣く行き亘つので、又その見物の興味と云ふのは競技者には覗ひ知る事が出來ない程尊い興味があるものだ。此の點に於いて例のベースボール競技はやつて面白く見て面白い點では第一だと云ふ事を誰れでもが云つて居る。此の野球の本場である米國では例の世界選手權試合のある日には午後になるとその試合をやるグラウンドがある町のオフイスは皆空つぽになつて了ふそうだ、それは

事務員達が支配人に『お祖母さんが死んだから』と斷つて暇を貰つては皆野球見物に出掛けるのだそうたが、支配人もそれを公然に認めて居るので事務員共が皆出掛けて了ふと自分もあとからオフイスを閉ぢて見物に出掛ける事になつて居るのだそうだ、それで又面白い事にはその野球試合の見物が五萬人あつたとすると翌日の新聞は『昨日は五萬のお祖母さんが死んだ』と云ふ見出しをその野球記事につけると云ふのだが、以つて如何に野球競技は米國人の興味を惹めて居るかゞわかる。こんな話は西班牙の鬪牛に於いてもある、有名な鬪牛士が現れて何日鬪牛競技があるとなると町の男と女、年老と小供を問はず擧つて見物に出掛ける、そうしてその見物の男女の數の割合は驚くべし六分四分と云ふのだから競技の興味と云ふものは男性ばかりの獨占でもない事は瞭かだ。之等の事は諸外國人が勝負事を只見物する丈けに興味を有つ一例だが、日本の相撲見物の熱狂振りを見ても手近なところで勝負事に對する興味は見物する丈けでも相當にある事がわかる。

斯くの如く見物本位にしての競技の興味も割合に廣く且つ深いものがあるが競技者自身の興味となると却々複雜になつて競技者でなくては味ひ知り得ないものが多く、野球、庭球、相撲、ボトトレイス、蹴球、競泳、ランニング、投擲、跳躍、柔道、劍道、ボクシングその他各種の競技の個々にスペシアライズされた興味があるのだ、そして又同じ競技の中でも個人競技と團體競技とは各別種の味があり、競技の方法が復雜であればある丈け競技者が有つて居る力の活用の妙即ち術なるものが科學的に作用して、興味深く或る場合は實力以上の力も出し得るし、或場合には實力丈けも發揮する事が出來なくなる樣な事もおこり得るのである、個人の競技で腕力丈けが拔群に優れて居るものが腕力はそれより劣つて居ても脚力と腕力との平均が一つになつて拔群の腕力者に勝を制する樣な事も起り、團體競技ではその團體中の二三の者が非常な力を有つて居り、その相手となる團體は優れた力を有つ者が居らなくても各メムバーが平均した力を有つて居る爲めに團體として纏つた力は却つて前者より後者の方が強いと云ふ樣な結果を來す事があるのであるから頗る面白い、又個人競技にあつて歐米のボキシングやレスリングは體重に依つてクラスを分け、同クラスの競技者をして戰はす事になつて居るのだが、日本の個人競技では相撲でも柔道でも體量の制限などは更になく發達したものであるから小兵が大漢を向ふに廻して見事に勝を制し得る樣な、實際の體力以外に術力を十分發揮させる樣になつて居る丈け此の點では外國のボクシングやレスリング等から見ると我が相撲や柔道は異つた興味が

そこに湧いてくると云ふ様に百種百態の興味がある。

又競技者の味ひ得る競技の興味には勝敗そのもの丶外に深い〳〵興味を有つ事が澤山ある。その第一に擧ぐべきものは先づ競技者が競技をするまでの身心のトレーニングだ。これは勝負事の興味として大した關係がないと思はれる謬りが往々あるのだが、勝負事を好む者は此のトレーニングを度外視しては勝負事の興味は誠に薄いと云はねばならぬ。如何なる敵に對しても恐れぬ、即ち勝敗事をするに先立つてアノ手に對してはコノ手で行かうと云ふ様な事を研究するのは確かに競技の一部分であつて之れを勝負事から引離して考へる事は絶對に不可である。そして或る意味に於いては勝敗そのものよりも競技者は此のトレーニングに興味を有つと云つても決して過言ではないであらう。そして此のトレーニングが苦しいから興味がないと云ふ者があるとすれば、それは眞に競技を愛好するものではないとも云ひ得るもので、トレーニングなしに競技すると云ふ事は殆んど意義のないものであらう。此の意味に於いて眞の競技愛好者は競技前（と云つては語が當らないかも知れぬ）寧しろ日常のトレーニングの中に絶大な興味を有つものである。斯んな例はよくボートーメンが一番よく味ふものだ、長い間の練習の後でレースはたつた五分か十分で勝敗が決せられる、選手はどうして漕いだかレースに關しては殆んど夢中だが、思ひ出されるのは練習中の事共で、その都度の研究苦心がレースの際に奏功したり失敗したりして、失敗すれば更に研究慾を挑發し、成功すれば見事な實を結んだ事になるから、その快味は一寸喩へ様がないものだ、斯う云ふ風にトレーニングの興味と云ふものは却々深く且つ尊いものである。

更に興味深いのは競技には勝敗を決する力倆の比較以外にスポーツマンシップ即ち競技精神を競ふ事である。勝つ許りが愉快でなく譬へ敗れても敗れた中に言ひ知れぬ快味があると云ふのは即ち此の競技精神の戰が力の戰の他に伴ふからである。正々堂々と戰ひ鍊え上げた已が力で最善の努力を盡し、然る後に敗れる事は何の恥辱であらうか、正にスポーツマンの本懐であつて所謂武士道の華である。即ち競技を開始するにあたつて旦始まり戰ふにまた禮を失せず、勝敗決して又禮に別れ勝者らず敗者は來るべき機を期して快よく退く、その快味こそ眞のスポーツマンのみが獨り味ひ得る敗者の快心である、と云つて此の光景を目のあたり見る者が果して不快の念がおこるだらうか、觀者と云へども眞にスポーツを愛好する者ならば感激なきを得ないであらう。

之等の尊い興味の上競技者は更に尊い尊い流汗沐浴から來る

ところの生理的の快味がある、即ち一戰交へたのちシャワーかバスにつかつて涼風を懷に入れたときの快感を味ふときに競技に對する興味は彌が上にも加はるのを覺えるのである。

斯くの如く競技の上に湧いてくる興味は何競技にせよ同樣に又多樣に津々として盡きないものではあるが、何が故に之れ程人間は競技を好む樣になるのであらうか、素より前述の如く有つて生れた闘爭本能が然らしむる事は言を俟たないのだが、更に此の本能慾を誘導すべき何ものかゞあるのではあるまいか。

今、先進文明國を觀ると何れの國でも運動競技の盛んでない國はない、そして又此の運動競技の盛んな國ほど文明の程度が高い樣にも見受けられる。或る識者は『一國の消長はその國のスポーツの盛んな程度によつて推し測る事が出來る』とさへ極言して居るのを聞くが。果して之れは何を意味するのであらう。察するに文明の進んだ所謂文化生活の當然の歸結として世は漸次に分業に進んで行く、從つて人間は益々片輪の發達をとげて行く事をいなまれない。そして生活は愈々單調とならざるを得ない。斯うなると人間は何ものかによつて單調な生活から起る倦怠に對して慰安を求めねばならぬ事になる。そこで萬人は單調な生活によつて失はれたる趣味の生活を求め、身心の圓滿な働きを基調としたスポーツに依つてその不滿足を充さねばならぬ事になるのではあるまいか、從つて文化生活を營むものはその餌としてスポーツを愛好する樣になり、興味を有つ樣になると云ふ順序になつて來るので、即ち文明人は本能に依つて與へられた闘爭心の滿足をスポーツに依つて得られると云ふ事になる、換言すれば人間は有つて生れた闘爭本能を文化に依つて誘導せられ、競技を愛好する樣になるのである。

依つて以つて萬人がスポーツ即ち競技を愛好する所以がわからう。(完)

一九二四、五、十二

勝負

長田秀雄

私は友だちと二人で電車に乘つてゐた。例によつて、滿員寿司ずめである。

お白粉のハゲた女の顔や、ネクタイの曲つた洋服も眺め倦きた——丁度、本郷の區役所前であつた。區役所の前には、感謝と大きく書いた白い紙をハツたボロ自働車が、一臺、忘れたやうに置いてあつた。

「君は誰に入れたい。」と、友だちは私に云つた。

「鳩山だ。」

「ふん。」と、答へて、窓の外をながめた友だちは、やゝ、少時してから

「や、面白いぞ。」と、云つた。

私も窓の外をみた。電車は正に切通しにかゝらうとしてゐる。

何屋とも分らないガラス戸を閉め切つた商店の前に、當選した人たちの名と得票の數を書いた紙がれいれいしくハツてあつた。

一段大きな字で、田子一民、高橋是清と並べて書いてある。そして、その下に、數字は忘れたが、四百何票か、兎に角、兩方が同じ得票に書いてあつた。

「同點か。」と私は眼を瞠つて云つた。

「いや、之は午前中の得票だよ。」と、友だちは說明してくれた。そして

「賭をしやうか。」と、薄笑ひをしながら云つた。

「うむ、してもいい。」と私は答へた。友だちは敢然として

「俺は高橋だ。」と云つた。私は、その實、何方でもいいのだが、さう云はれると、やはり反對に出たくなつてきた。

「ぢや、俺は田子にするかな。」と笑ひながら云つた。

「よし、負けた方が奢るんだ。」と、勝負事の好きな友だちは決定的な聲で云つた。

私たちは、それから、誰でも話すやうな高橋が落ちたら政友會がどうなるだらうとか。盛岡と云ふ土地は外から來た者を入れない土地だから、高橋だつて、油斷は出來まいとか、新聞で讀んだ事を種にして話合つてゐた。その内に電車は御徒町で停つた。

「やあ、失敬。」と、大きな聲で云流して、私は蜘蛛の子を散らしたやうな人混みをつきつて、和泉橋行の電車に乘つた。そして、私の關係してゐる市村座の事務所に行つた。

四時頃になると、號外がきた。

「どれどれ。」と云つて、私は二三人の人を押分けるやうにして號外をのぞいた。

「高橋氏勝つ。」と大きな活字が躍るやうに眼に入つた。

何だか當然の事のやうな氣がしてつまらなかつた。

「爺さん、大分氣をもんだらうな。」と私は云つた。

少時すると、今朝の友だちから、電話がかゝつてきた。

「おい、やつぱり高橋が勝つたよ。」と、威勢のいい友だちの聲がきこえた。私は忘れてゐた賭を思出した。

私はたうとう奢らされてしまつた。

こんな賭は、恐らく選擧の日には、日本全國では無數に行はれてゐただらう。

「選擧の興味は、まあ競馬みたいな物だね。」と、奢らされながら、私は、いくらか負けた業腹さから、友だちに云つた。

「うむ。大分儲けた奴がゐるよ。」と、もう大分眼のふちを赤くした友だちは愉快さうに答へた。

「君はどうだい。」と、私はたづねた。

「君を入れて四人だよ。俺が賭をしたのは。」と、得意な樣子でまた友だちは云つた。

主義や主張なんて生ぬるい事なんかどうでもいい——兎に角何萬と云ふ人が、凝乎つと盛岡の方を見つめながら金を賭けて、手に汗をにぎつてゐる念力だけでも、けだし、天下の壯觀である。

私と友だちとの賭は、まことに熱のないつまらない賭であるが、勝負事の好きな人たちの間には、餘程思切つた賭も行はれたであらう——世の中が進むにつれて、いろんな事が遊戯化されてくる。

「君、高橋が八五九票で、田子が八一〇票だからね、實際危なかつたよ。」と、酒を飲みながら眼を輝かした友だちの顏をみて私は當日、自働車を烈風の内に飛ばしてゐた運動員たちの氣持が分るやうな氣さへしたのである。

「アメリカの大統領の選擧なんて、大へんだらうね。」と私は云つた。

「うん。愉快だらうよ。」と友だちは答へた。

「だが、かう云ふ風に選擧が遊戯化されてくると、政治家の仕事なんて、つまり芝居みたいな物になるね。」

「そりや、さうさ。競馬に使ふ馬は、實用には役に立たないからね。」と、友だちは云つた。やがて友だちは、熱い奴を一パイぐうつと引かけて、スバラしい聲を出した。

「だが愉快だなあ。今に君、議會なんか、傍聽席をうんと廣くするよ。そして、入場料を取つて、特等一等二等で見せるんだね。立見なんかも造るんだ、そして、議會の内で、政府の役人が公然立合つて、大バクチが開かれるやうになるよ。」

「さうなると賭博法原理なんて云ふ本が出たり、大學に賭博法講座が出來たりするかね。」

「うん。愉快だなあ、さうなると。」

友だちはかう云つて、さも嬉しげに呵々大笑した。

競技の社會性と賭博の反社會性

長谷川如是閑

勝負事といふものは、所謂競技と賭博との双方を含んで居るらしい。競技と賭博とは大體同じ性質の現象のやうであるが、さうして屢々同じ範疇の下に説明されて居るが、この兩者は頗る異つた要素を含んで居る。共に闘爭といふ範疇には入るが、競技は本能的の生物學的要素に於いて優つて居り、賭博は後天的の制度が與へた心理狀態が勝つて居る。動物に競技はあるけれども賭博はないといふことだけでも、兩者の性質上の差異が想はれる。

競技を戰爭と同じやうな闘爭の種類と見る者もあるが、之れ亦た性質上の差異があることを知らねばならぬ。競技も原始的又古代中世等のそれに於いては、戰爭と同じやうな闘爭の性質を帶びたものであるが、元來戰爭行爲が社會的動機による協同的意識を以つて行はるるのが競技である。謂はば戰爭と競技とは、毆り合ひと訴訟との差に同じである。戰爭も次第に協同的となり、一定の約束の下に行はれるやうに進みつつあるが、それは畢竟戰爭の競技化である。が今日でも尙ほ戰爭は競技のやうな、協同意識の下に行はれる闘爭とはなつて居ない。競技は闘爭を協同の組織の下に行ふ一つの方法である。

が、それは戰爭が競技に進むと云はれるか何うかは問題である。戰爭と競技とは何れが先きであつたかを斷定することは出來ない。全く戰爭の無い所に競技が起り得る。競技の説明に就いてはまだ定説が無いのであるが、闘爭の練習でないことは言ふまでもない。寧ろ生存狀態が生物の行動に及ぼす第一次的の現れであつて、生れた子供が無意義に手脚を動かす行動を爲る

のと同じ性質で、それが自分の有機的組織の機關に取つて必然の行動なのである。と同樣に二人寄れば二人の行動が競技的に表はれるのである。それが生活の行動の上に於いて何ういふ性質を有つかといふことは暫く措き、個體の機關として、又社會的關係として必然の行動なのである。

競技は畢竟一つの生存行動である。走るといふことが動物の生活上必然のことであるならば 走ることは啻に必然の場合にのみ行はれるばかりでなく、走るといふことそれ自體を社會的必然から引離して、唯走る爲めに走るといふことが始まるのである。若し必然の場合にのみ走るとすると、恐らくその走ることが必然の場合役立たないといふ結果に陷る。いざといふ場合に走るには、走るといふことがさほど必要でない場合に屢々繰返さなければならない。競技が社會的に起つたのは、その故である。赤兒は自由に身體を運動させる前に、頻りに手脚の使用を無意義に練習する。この無意義の運動が無かつたならば、いざといふ場合に赤兒はその手脚を使ふことが出來ない。競技はこの社會的必然の行動を、必然から引離して無意義に行動する所にその意義がある。

賭博は社會的の意義に於いて競技とは頗る違つた性質を有つ。競技は生活本能の社會的の現はれであつて、生存の爲めの行動がこの競技的行動を繰返すことによつて始めて可能なのである。教育といふやうなことも、實はその社會的意義に於いては競技と同じなのである。教育は社會的必然の行動をまだその必然の關係に置かれてない年少者に、必然の關係から引離して練習せしむるのであつて、數學でも、習字でも、語學でも、その意味で皆競技の性質を帶びて居るのである。今日の教育は寧ろ餘りに競技的性質を帶び過ぎて、不必要な鬪爭狀態に教育を陷れたといふ非難がある位であるが、少くとも教育はさういふ競爭に陷り易い性質を有つて居る。で、競技すらももつと鬪爭心理を除いた協同的の關係に於いて行はなれけばならないと云はれて居る位なので、教育も出來るだけこの競爭心理から解放して、もつと競爭心理の少い遊戲に進まなければならないのである。然しそれによつても、競技が社會的生存の行動と引離すべからざる關係で結び付いて居る社會的行動であるといふことが思はれる。

賭博は之に反して、それは本能的の要素を含んでは居るが、然し賭博が包含して居る本能的要素は、實は賭博の特徴を形造るものではない。賭博にも亦た、競技がその根柢に有つて居る生活の本能が働いて居るが、然し賭博といふ行爲を特徴づける

ものは、その本能ではなく、後天的な社會事情である。或る學者は「賭博本能」といふやうな本能があるらしく說いて居るが、そんなものは無いと思ふ。賭博本能と考へられるものは、賭博の起る或る衝動であつて、組織された賭博なる制度は、全然別な事情があつて始めて成立つのである。それを譬へれば、榮養本能と小笠原流の料理との違ひのやうなものである。小笠原流の料理も料理としては榮養本能に基ゐた行動であるが、然し小笠原流そのものは決して榮養本能の現はれではない。寧ろ後天的の事情が榮養本能に加へた變化である。賭博も亦生存行動としての闘爭本能に立脚して居るが、然し賭博そのものはこの本能と關係ない後天の事情によつて形造られた制度である。この事情が往々混同されて、人間には何うしても賭博本能がある、何等かの形で賭博の存在することは社會的必然であると考へる者が多い。これはこの賭博制度を生じた後天的社會事情が如何なるものであるかを研究すれば、その錯誤であることが判る。

賭博が根本的に競技と違ふ點は、賭博者は競技者でないことである。(尤も場合によつて賭博者と競技者と同一人であることがある。懸け碁、懸け的の如き例もある。)賭博は全く偶然の機會が事物の可能性を明かにしない場合に起るのであつて、偶然性がその生命である。何かの調子でその偶然性が失はれれば、賭博は行はれなくなる。必ず勝ち負けの分つてゐる勝負は賭博の手段とはならない。從つて競技が賭博の手段にはなるが、その場合には競技が賽の目と同じ性質を勤めるに過ぎない。競技者は賽の目であつて賭博者ではない。賭博は根本的にこの點で競技と違ふ。

競技が偶然性に依頼する場合は無論あるが、然しその場合でも競技者は決して賭博をして居るのではない。賭博者は何物でも確實性が知られないもの程、それによつて賭博心を刺戟される。又、確實性の想定されるものでも、萬一その確實性が破れることも想定される場合には、やはり興味ある賭博となる。だから賭博は決して競技ではない。又競技そのものによりて賭博するものでもない。相撲の勝負を賭けることも出來れば、明日は雨が降るか降らぬかを賭けることも出來る。從つて賭博は社會的生存の必然的行動を積極的に行動して居るものでないことは勿論、その行動も必然から引離して、行動自體を行動して居るものでもない。極端に云へば、賭博は生活行動ではない。從つて賭博をしなくても生存は亡びない。之れに反して競技——遊戯——はそれをしなければ生存が亡びる。賭博と競技とはそれ程違ふのである。

社會學者や心理學者が賭博と競技とを混同するのは、競技を

看る者の心理狀態と、賭博者の心理狀態と共通點があるので、この錯誤に陷るのであると。然し「競技を看ること」は競技ではない。從つて賭博は競技でないと云へる。この競技を看る者の心理が賭博者の心理と共通であるといふことは、競技と賭博とを區別する理由になるのに、それを以つて兩者を混同させて居るのである。

競技を看る者に取つては、競技は全然偶然性を有つた對象である。何れが勝つか負けるか、その確實性の全然缺けて居る所に興味が存する。然しただそれだけでは賭博にはならない。それは唯一つの社會的共同生活の心理である。生活を共同的に營む集團に於いて、生存の必然的行動の優勝なる者に對する尊敬、讃美、敬服の念を有つことは、共同生活の上の第一條件である、競技が社會的に非常の興味を有つのは、共同生活に於ける優勝者は誰であるかを發見することの興味に根柢して居る。從つてその心理は極めて社會的性質を有つたものである。が、然しこの見物その事がそれ自體競技でないことは云ふまでもない。而してこの社會的性質に富んだ心理は、賭博の心理とは必ずしも共通して居ない。賭博者も無論競技を賭博の手段とする場合には、競技その物に興味を有つ。けれども賭博は唯偶然性に依賴するものであるから、眞實彼等が興味を有つのは、競技者の生存行動の優秀に對してではなく、彼等の間の競爭の偶性に對してである。だから賭博者は相撲取りに興味を有つのでなく、鬪犬にも、軍鷄にも、賽の目にも興味を有つ。人間優劣が彼等の興味ではないから、光榮ある競技者も彼等に取つては軍鷄や賽の目や骨牌と同じに取扱はれる。

何故に偶然性が賭博者の興味を惹くかと云ふに、それは唯「偶然」に對するだけの興味ではない。人間は本來偶然性に對して興味を有つ。然しそれは無邪氣な社會的興味であつて、一つの感情生活である。ところが賭博はそれだけでは興味を成さない。賭博者は無邪氣な子供のやうに偶然性を樂しむのではない。賭博者はその偶然性によつて、所謂「勝負事」を試みる場合にだけ興味を有つ。その勝負事なるものは、つまり財物を得る方法である。偶然性によつて財物を得るといふことだけが賭博の本質的特徵である。果して然らば賭博は一つの獲得慾の現はれに過ぎない。

この獲得慾は人間社會の原始的共同生活を今日の私有財産制度にまで進化させた心理狀態であつて、それが社會的に如何に根深いかは推察するに足るのであるが、賭博はこの獲得慾の最も墮落的の現はれである。墮落的といふのは、私有財産制度その物が含んで居る反社會的性質を極度に表はしたもいであると

いふ意味である。

私有といふことは本來物の生産に伴つて發達した制度である。それも初めは個人的私有ではない。神の造つた土地は神の所有、人間の造つた米は、共同してそれを作つた人々の共同所有といふ風であつたが、そこに複雜な征服狀態、支配狀態が發生して、個人的所有の發達となつたが、それでも生産者が先づ所有し、不生産者は生産者から取り上げるといふ組織で發達したのである。その所謂「取り上げる」方法の最も墮落した方法が即ち賭博なのである。凡べて「取り上げ」には何等かの代償を伴つてゐる。支配者地主等ならば管理の責任、征服者ならば軍事的勞作といふやうに、心理的に生産者を納得せしむる代償が必ずある。私有財産を神聖化したのも地主や資本家の「取り上げ」を社會的に、心理的に、法的に納得せしむる方法だつたのである。而してそれを納得せしむるには、少くとも多少の社會的負擔を取り上げる者に課したのである。ところが賭博は全然社會的負擔なしに、少しの生産行動なしに、全く無意味に相手方をして利益を提供せしむる約束である。

かような約束が成立したのは即ち決して賭博それ自體の單獨の發達ではなく、「偶然性による所有」の肯定が一般に成立した結果である。所有狀態が生産行動によらずに偶然性による社會制度が發達するに伴つて賭博が發達する。一般生産勞働者もこの社會制度の影響を受け、出來るだけ生産による所有でなく、偶然による所有を得ようとする。けれども元來この心理は、「生産によらない所有」に生存の本位を置く階級の心理である。故に賭博階級は不勞所得者の階級と一致する。貴族、商人、文士、藝人、浮浪人、無頼漢等の階級が賭博階級に屬する。今日では商業その物が大部分賭博である。要するに生産によらない所得を生活の本位とする階級が社會的に支配する制度が、即ち賭博の發生を可能ならしめた制度である。生産勞働者の間には決して賭博は行はれない。生産勞働者が賭博を行へば、忽ち彼は生産者の資格を失つて、貴族以下浮浪人に至る賭博階級に歸化するのである。賭博は畢竟不生産的生活階級を社會生活の中心とする組織の産物である。だから賭博の反社會性は、かやうな階級的社會制度の反社會性と一致する。

新綠に對して

新綠に憧がれて新綠を見ず

小川未明

小高いところに、新綠の色がエナメルのやうに、底光りのした、ニツケルのやうに、日の光りにつや〳〵と、しかもぢつとしてゐる、その下方の廣々とした平地には、まだ震災當時の生々しい痛手を殘した、大きな建物が、トタン家根の光つた、粗雜なバラツク建の街のところ〳〵に錯立つてゐる。そして、もう、夏に近い、空の雲は、漂泊の心をそゝるやうに浮動してゐる。

この頃の東京は、市中に、前の如く、綠葉を見ることが少ない。しかし、山の手の丘陵には、去年の慘禍をも、知らぬ顏に、そして、それは、永久にさうであると思はれるやうに、綠葉が日の光りの中にまどろんでゐる。

私は、タアナーの繪を思ひ出す。「昔のイタリー」と「今のイタリー」といふ、二つの繪をくらべて見たことがあるが、人事や、自然の風物の變遷に、一味の哀傷と憧憬がこの畫家の得意であつたやうに思はれる。

去つて、東京の郊外へ出ると、去年の震災の慘禍の影だも、見ることがない。二十萬人からの死者を出したといふことにも、夢のやうな氣がされる。そして、青々とした麥畑と、新綠の木立に、微風が戲れて、銀の如く、波立ち、空氣の裡に、光りの跳躍を見せてゐる。私は、これに對して、コローの繪を思ふのであつた。

私には、性情の然らしむるためか、南國のロマンチシズムの

諸作家を、また、佛國初期の印象派の畫家を、年々、五月、六月に至ると何かにつけて、思ひ出されてなつかしむのである。

何人か、新緑に對して、自然の生命と、哀愁と、漂泊と、形なき戀とを感じないものがあらうか。

往年、新緑の頃、伊勢の桑名附近を汽車ですぎて、燕に、水草に、廣重の版畫を目のあたり見るやうな氣がした。その途次、關西線を經て、奈良に行き、あの草茫々として、何の眼を遮るものもない、大極殿跡のあたりから、遙かに、奈良市街の方をかへり見ると、こんもりとした若葉の森の間から、ちやうど建築工事にかゝつてゐた、東大寺の家根が、高く、白く光つてゐるのが私の心を惹いた。

その他にも、霞ケ浦の煙雨の朝の新緑に、忘れがたい記憶もあるが、私は、現住する、雜司ケ谷墓畔の新緑を、またなつかしいものに思つてゐる。こゝは、冬の木枯の日に、血のやうな夕陽を見るためにも、私には、感銘の深い場處である。もつとも、こゝには、私の二人の子供の墓があり、顔を知つた、藝術家等が、地の下に眠つてゐるからでもある。しかし、春が來てもやがて、冬になつても、二たび、その人々は、蘇がへることがない。そして、私達も、いつか、墓に行く時があるであらう。

北國の五月は、まだ寒い。たまく咲いた花をたづねて、どこからか、蝶が飛んで來ると、ひとしきり吹きつける風のために、花の上に落付くことができずに、風の方向へ、飛ばされてしまふ。

私は、山の上に立つてゐた。木々の新緑が海の方から吹いて來る風に、揉まれに、もまれてゐるのを見てゐた。それは、あまりに傷ましい景色だつた。背後には、日本アルプスが雪を憫んでゐた。空は、もとよりうす暗く、日本海は、黑づんで見えてゐた。北國の新緑の頃は、私をして、あまりに少年時代のメランコリーであつたことを、いたましく回想せしめる。

「風雨はからず明日のこと、夜半燭を乘つて牡丹を看る」といふやうな詩句がある。待ちに待つた、年に、一度咲いた花の慌しく散つてしまふことは、それによつても、分るのであるが、これに劣らず、また、新緑の季節が短かい。眞の新緑は、ほんのまだ淺いうちが一番美しいのである。そして、知らぬ間に、濃緑となり、青葉と變つてしまふ。新緑に憬がれながら、仕事にかまけてゐるうちに、つひ、新緑を見ずにしまふのである。

私は、二三年ことに、この憾みが深い。

——二四、五——

底光る

豊島與志雄

新緑の感じは、底光るといふ一語で殆んどつくされる。山光る、野光る、そして空光る。

私は往年新緑の頃、或る山間で一週間ばかり過したことがある。宿の室は、可なりの溪流を距てゝ、すぐ對岸の山に面してゐた。

山には、各種の樹木が茂つてゐた。それに日の光があたつて、一面にきらきら光つてゐた。殊に風がさつと吹いてくる時には、木の葉の一つ一つが、葉表を見せてるのも、葉裏を返してるのも、一樣に輝かしい光を反射して、眺める眼の底が痛くなつてくる。雨霧の霽れた時などは、殊にそれが甚しい。葉末にたまつてる水滴が、ゆらゆらと一面の陽炎になつて立昇り、その透明な空氣の底に、鮮かな若葉の層が、重疊し錯雜した光の亂舞を示してゐる。ぢつと眺めてゐると、息がつけないほど悩ましい咽つぽい氣持になる。餘りに濃厚な輝かしさである。

さういふ時、私は、ふら〳〵と散歩に出て、高原の野を見渡せる山裾に、ぼんやり腰を下すのだつた。目渡す限りの野原全體が輕やかな緑の衣をまとつて、大地の胸といつた厚ぼつたい感じで、ゆるやかに息をついてゐる。その波動につれて輕い緑の衣が、きらきらと一面に光つてゐる。そして處々に、二三本づゝ立つてゐる樹木が、大地の胸から吐き出される温い息のやうに空に向つて勢よく燃え上つてゐる。

それらの景色をぼんやり眺めてゐると、私はいつしか新緑の光に醉はされて、うつらうつらと、眼を半開いたまゝ白日の夢心地になるのだつた。投げ出した足の先のあたりに、何やらよろちよろと動くものがある。氣がついてみると、紫と黄ととの縞筋鮮かな、大きな蜥蜴だつた。蜥蜴はきよとんと頭を振立てゝ、私の方を怪訝さうに眺めては、またちよろちよろと匍ひ出してゆく。私の心も蕩けらのやうになつて、緑の草の間を、蜥蜴の後について匍つてゆく。あちらこちらに、澤山蜥蜴が走つてゐる。新緑の間に黄や紫の色が流れる。蜥蜴の領分を

過ぎると、白や黄や赤の花が咲いてゐて、小鳥や蜂が飛び廻つてる場所に出る。次には蛇の領地になる。大きな枯木の倒れた横に、縞蛇が幾つもとぐろを卷いてゐる。その向ふには泥深い沼があつて、眞黒な蝌蚪が無數に泳いでゐる。親蛙はゐないのかと思つて見廻すと、向ふのこんもりと茂つた森の中の、薄暗い冷かな影に、自來也でも跨りさうな大きな蟇が一匹、まん圓い目玉をむき出して、こちらをぢつと睥んでゐる。その木影の蟇の目玉が、淫蕩な無神論的な氣味合ひで、ぢりぢりと迫つてくるので、私はぎくりとして我に返つた。

我に返つてみると、晴れやかな日の光が空に地に漲つてゐて、新緑の燃え立つやうな輝きに、山が光り、野が光り、空が光つてゐた。

その時の感じを、私は毎年新緑の候になると——そして今年もやはり——まざまざと思ひ浮べるのである。燃え立つやうな光と、木影から覗いてる蟇の目玉、それが新緑の候の感じである。

一體緑の色は、人の心を靜めるものである。書齋の壁を緑色に塗らせる人が多いのも、緑色に沈靜の效果があるからであらう。然し戸外の新緑には、さういふ沈靜の效果は少しもない。それは寧ろ、人の心を刺戟し眩惑させる。何故かなれば、戸外の新緑は光つてるからである。生々と燃え上つて光つてるからである。新緑の本質は、その色によりも寧ろその光にある。

然し新緑の光は、單なる光ではない。單なる光は、人の心を浮立たせ晴れやかになすものだけれども、新緑の光は、人の心を濁らせ惑はせ、或る不氣味な焔に燃え立たせる。何故かなれば、木影の薄暗がりからぢつと覗いてる蟇の目玉、さういつたものが中に籠つてるからである。無神論的な、樹液の濃いねばねばした、底深い不氣味なものが、中に籠つてるからである。晴々と輝くのではなくて、變に神秘的に底光るのである。

それは精神的ではないが、精神と肉體とが一緒に混淳として醗酵するのである。大地が醗酵し、樹液が醗酵し、大氣が醗酵し、そして人の心が醗酵する。醗酵しながら底光る。——この季節を本當に愛し得る者は、本當に偉大な人だと、私は思ふ。

新緑の庭

芥川龍之介

櫻　さつぱりした雨上りです。尤もまだ花の萼は赤いなりについてゐますが。

椎　わたしもそろそろ芽をほごしませう。このちよいと鼠がかつた芽をね。

竹　わたしは未だに黄肌ですよ。……

芭蕉　おつと、この緑のランプの火屋を風に吹き折られる所だつた。

梅　何だか爽氣がすると思つたら、もう毛蟲がたかつてゐるんですよ。

八つ手　粹いなあ、この茶色の生ぶ毛のあるうちは。

百日紅　何、まだ早うござんさあね。わたしなどは御覧の通り枯枝ばかりさ。

霧島躑躅　常――常談云つちやいけない。わたしなどはあんまり忙しいもんだから、今年だけはつひ何時にもない薄紫に咲いてしまつた。

覇王樹　どうでも勝手にするが好いや。おれの知つたことぢやなし。

柘榴　ちよいと枝一面に蚤の生つたやうでせう。

苔　起きないこと？

石　うん、もう少し。

楓「若楓茶色になるも一盛り」――ほんたうにひと盛りですね。もう今は世間並みに瑞々しい緑色です。おや、障子に灯がともりました。

新緑その他

宇野浩二

私は六七歳の時分から二十歳の年まで、大阪の下町の極く繁華な町の中で育つたので、少し誇張していふと、物事に一番驚いたり、感じたりする頃を、木とか草とかいふものを知らずに過ごした。中學の二年頃から、學校が稍々町外れに近いところにあつたので、稀に友達と一緒に郊外に出たことがあつたし、又春や夏の休暇に母等に連れられて田舍に行つたことがないではないが、兎に角、草木といふものとは縁の遠い生活を送つた。

殊に私の住んでゐた宗右衛門町の邊は、それが甚しかつた。私は子供の頃からどこか孤獨な性分があつたと見えて、屋根に上ることが好きだつた、その癖は二十歳時分までつゞいてゐた。そして今でも、――今はまさか屋根の上に上る譯には行かないが、高い山の上とか、塔の上とか、さういふ高いところに上るのが好きである。――私は退屈したり、氣に入らぬことがあつたり、暇さへあると二階の屋根に上つて、（物干臺が一階の屋根にあつたので、そこから輕業のやうに傳はつて、二階の屋根に出るのである。）彼方此方と見渡すのだ。どちらを見ても屋根ばかりだつた。屋根より上に突き出てゐる木などは、一本もなかつた。私の家にも二坪か三坪の庭はあつたが、あるものはせい〳〵四五尺の檜の木か、二三尺の南天か、その外鉢植の木だつたし、私の家よりはずつと大きな家も近所にあるにはあつたが、それ等の家でも多分庭は五六坪以上ではなかつたらし、一間以上の木を持つてゐなかつた。そして屋根ばかりであつた。その邊では町幅にしても矢張りさうだつた、ほんの人と車とが通れるだけの狹さにそれをとつて、後は家とそして屋根

だつた。だから、私の屋根の上からは、屋根の海の外に、私の目を遮ぎるものは、道頓堀の五座の芝居小屋の櫓と、天氣のいゝ時は南の方に天王寺の塔と、東に生駒山がある位のものだつた。

だから、十歳位の時分からの、私の田園に對する憧憬は素晴らしいものだつた。讀本の挿畫や、雜誌の口繪やに出てゐる、田舍生活の場面などは、私を有頂天にした。今でも覺えてゐるが、多分小學校の讀本にあつたのだらう、左手に一軒の田舍家があつて、右手は見渡す限りの野原で、野原の向うに朝の日が出てゐて、雀が空に飛んでゐる、左手の田舍家の戸を一人の老人が、にこ／＼した顏をして開けてゐるといふ繪である。私は自分がこんな家に住んでゐたら、どんなに毎日が愉快だらうと思つた、私はこの庭の隅に金魚の池を堀つたり、好きな木を植えたり、奇麗な花の種を播いたり、小鳥の家を建てたりするだらうと思つた。

同じ都會の町といつても、私の住んでゐた町は殊に少し特別なものであつた。私の家の前は路次の石疊になつて居たので、雀の聲の代りに、無數の足音であつた、物賣の聲であつた。そして、やつと十時頃になつて、初めて近所隣の家の主人たちが起き出した、それ等の主人たちの半分は女だつた、そしてこの町は夜になると、一層足音が繁くなつた、それは夜更の二時頃までつゞいた。藝者どもが男衆に送られて歸つて來る足音が石疊に響いて、各々家に着くと、男衆が送りとゞけたといふことを家の者に向つて叫ぶ。私は今とは反對で、その時分は子供の癖によく夜更をして、夜遲く勉强してゐたので、それ等の物音にどんなに惱まされたか知れなかつた。

それは餘談であるが、そんな風だつたから、季節の移り變りを草や木で知ることなどは、私の思ひの外のことであつた。花の咲くのでさへ、近所の女たちが花見の仕度をして居るのでそれを知り、或は金魚賣りの聲や、私が勉强してゐる私の前の、格子に嵌まつて居る障子に映る日傘の影や、鯉のぼりや、芝居の櫓の飾りやで知れば知られるのである。だから、新綠とは何であるか？——實のところ、私は二十歳を過ぎるまでそれを知らなかつたのである。

中學を出た年、半年ばかり私は初めて田舍住居をしたことがあつた。長い間そんなに憧れてゐた生活であつたのに、私はそれを始めると、三日もしないうちに飽き出した。飽きたばかりでなく、全くそれが私の肌に合はないことを知つた。考へて見ると、私が初めて田舍住居を始めたのは五月の末だつたから、先づ新綠の頃であつた。が、私は新綠を樂むどこか、第一に弱

らされたのは蚊であつた。今こそ蚊には相當に馴れたが、初めてこれに刺された時は、ことごとく赤く腫れ上つて、まるで大變な毒蟲に嚙みつかれた程に惱まされた、一週間も醫者に通つた位である。その外、私は極端に蛇が嫌ひで、あれを見ると乾度發熱する。だから、田舍の草の生えた道などを歩いてゐて、風か、私の足かのために、シュッとでも葉が鳴ると、私は忽ち蛇を聯想して、動悸の爲に三分間以上惱まされる、これは私を神經衰弱にさへした。その外、男のくせに、馴れない水を使つた爲に、顏の皮が擦り傷でも負うたやうにたゞれたり、ひどいのは土のにほひに醉つて、目まひがしたりした。私は早速大阪に逃げて歸つて、又一ケ月ほどしてから、別の田舍に行つた、腳氣をわづらつて、その養生のためにである。そしてそこでは一ケ月程辛抱して、それから近くの田舍町で三四ケ月送つた。それが二十歳の春であつた。その年の四月に私は東京に來たのである。

初めて私が東京で住んだのは、赤坂の靈南坂にあつた親戚の家であつた。私が來た時、東京中は花盛りであつた。花が散つた頃から、私は每日その靈南坂の家から牛込の學校に通つた。その時、私は初めて新綠といふものを感じた。あの廣い、眞白な坂道を上り下りする時に、何某の屋敷だとか、何國の大使館だとか、誰某の官邸だとかいふ、長い、單調な塀の上に、盛り上げたやうに新しい木の葉が繁つてゐて、そこから何ともいへぬ、胸を壓すやうなにほひを放つのである。私はこのにほひには辟易した。私はこのにほひを憎んで、靈南坂は廣くて、まぶしくて、埃つぽいので、まん中を歩くのは困るのだが、それでも仕方がなくて、あのにほひに遠い道のまん中を歩き歩きした。同じにほひが牛込の學校の傍の、何某公爵の屋敷の、矢張り塀の上に盛り上つてゐる木の葉から起つた。幸ひこれは片側だけだつたので、反對の側を歩いたが、狹い町幅なので、十分それから逃れることが出來なくて、鼻を抑え抑えして、早足に歩いたものである。だから、私が初めて感じた新綠は喜びであるよりも、惱ましさであつた。もつとも、この新綠の惱ましさは、誰にでも多少さうであるやうに、私自身の青春の惱ましさをも多少暗示するものに違ひない。

だが、同じ時分に、私は或時友人に連れられて、江戸川の終點の傍にある久世山といふ丘に上つたことがあつた。この丘はその後大變私の氣に入つて、私はしば〳〵一人でこゝへ來るやうになつた。初めて私はこの丘の上に上つて、牛込から早稻田の邊にかけての町々を眺めた時の、私の驚きは非常であつた。それは日の下が屋根と樹木と半分半分の割合で埋まつてゐること

であつた。東京といふところは、何と木の多いところだな、と私は感嘆して思つた。私には假りにも市と名のつく都會に、こんなに樹木が澤山あるのを想像出來なかつたからである。考へて見ると、殊にそれが新緑の頃だつたので、一層私の目をその美しさで打つたのに違ひない。

私は今でもさう思ふのだが、新緑の美しさは日光とか、曠原とか、木竹とかいふ所では、新緑そのもの丶力とか美しさとかを直接に現してはゐるだらうが、町の中で見る新緑の美しさには又特別のものがあると思ふ。狹い町の往來や、路次やを歩いてゐて、殊にそれが始終通るところだと、或日ふとその町が變つたやうな氣がして驚くことがある。氣をつけて見ると、それは昨日迄氣がつかなかつた塀の上に、突き出てゐる木の枝が、急に青葉で飾られたからなのだ。だから、町が急に青くなり、道の上にしても、今迄は塀の影だけだつたのが、木の葉の影を映してゐるからなのだ。今の私の家の庭などは、私の少年の頃の庭と同じで、矢張り三坪位しかない中に、枯れかゝつた杉の木が二本と、楓の木が一本としかない。その楓の芽が出る時を私は知つてゐるが、それはほんの一夜のうちにである。そして若し私が二日家を空けたとすると、枝だけであつたその木が、次には造花のやうに一ぱいの葉をつけてゐるのに驚かされるだらう、それはまるで嘘のやうな氣がする位だ。だから、この二三年來、私はこの一本の楓の木で、季節の移り變りを最も痛く感じる。

今はもう新緑の頃を過ぎたと見えるが、私が毎日自分の家から、仕事をする爲に借りてゐる本郷の下宿屋へ通ふのに、上野の森から根津に下りて、大學の横に出る本郷の森へ上つて行く道で、丁度私の家から一町ばかり歩いて行くと、石屋と萬屋とが向ひ合つてゐる町角に出る。まだそこは上野櫻木町の部分であるが、その角から根津に向つて行くのに、谷中何々町の一部分を通る時に、道が急に少し曲つたところで、突然、目の下に根津の町が見えて、その町の向うに大學に向つて上つて行く本郷臺の阪道が一直線に眺められるところがある。その本郷の阪道の兩側は、此方と違つて大體が屋敷町である上に、大きな邸宅が多いので、一種の單純化された畫に見える。突當りの大[illegible]の工科のでもあるか、大きな一本の煙突も畫の中の一つの役をしてゐる。無論、その中で廣い、眞白な阪道は畫の中心で[illegible]る。その阪道にぼつ／＼と人が通つてゐるのも面白い點景になつてゐる。私は毎日見馴れてゐる景色ではあるが、いつでもこゝへ來ると、新しい感嘆を以てこの景色を眺めるのが常である。或時、私は友人の畫家と歩いたことがあつたので、こゝ迄來た

時この景色を友人に注意すると、彼も即座に感心して、これはアンリイ・ルツソオの畫そのまゝだね、といつた、その畫が近頃一層著しくなつた。それはいふ迄もなく、向うの坂道の兩側の家々の塀の上に、五月の綠が飾られたからである。

少年の頃と違つて、私も此頃は斯ういふ草木に注意を拂ふやうになり、興味を持つやうになつたのは、幾分年齡のせゐだらうか。一體私たちのやうに都會で育つたものは、木といふと、松とか、杉とか、せい／＼八ツ手とかいふ位の植木の名しか知らない。椿とか、栗とかとなると、もう名だけ知つてゐても、實物を見てそれを名指すことが出來ないが、さういふことにも親しんで見たいやうな氣が此頃は幾分かする。今に又田舍住居などに心をひかれるやうになるかも知れない。だが、それだけは矢張り私には一生肌に合はなさうに思はれる。以上――新綠そのものに就いてはいふことがないので、いろ／＼別のことを書いて見た。

（五・一四）

伯夷叔齊と新綠

上司小劍

いつもいふことだが、私は一年を通じて、新綠の頃が一ばん好きである。これあるがために生きてゐる甲斐もあるやうな氣がする。人間――動物――の生活と植物の生活とが、渾然として融け合ふもこの時が一ばんだと思ふ。私はこの世界に生を受けたものが、いづれも睦まじく爭ふことなしに、一大家族として樂んで生きて行くことを欲してゐる。眞の平和が好きなのだ。人は痴者の夢として、嗤ふかも知れない。……かも知れないぢやなくて、笑ふにきまつてゐる。もう其の邊に笑ひ聲が聞える。しかし、私は笑はれても搆はぬ。人間同志はもとより人間と他の動物と親しくし、人間と植物と親しくし、進んでは人間と鑛物とも親しくせんことを望んでゐる。地球上のあらゆるものが、渾然として融和する世界……それが私の理想なの

だ。それをば特に若葉の頃、新綠の時に於て、甚だ強く考へるのである。

非情の草木といふけれど、植物にも苦痛のあることは、科學者の研究を待つまでもなく、私は幼い時から考へてゐた。爺やが斧を振つて、裏の林の木を伐り倒すのを見て、私は折角あれまでに伸びたものを可哀さうにと思つて、涙ぐんだことがある。嘸痛からう、苦しからうと、爺やの斧が樹の根もとに觸れて、鋭い刃が深く切り込んで行くのに、眉を顰めないではゐられなかつた。若しそれ、爺やが一つ斧をあてただけで、伐り倒すのを見合せた木が、傷痕からじくじくと液を吹き出して、創をなほさうなほさうと力めてゐるのを見ると、私はそこをば小さな手で撫でゝやつたことがある。さうして人間といふものはなんといふ殘虐なことをするものだらうと、しみじみ考へた。爺やにそんなことを言つたとて、鼻先きで笑つてもくれないほど無關心だ。私はこの爺やが私の家の忠僕として、正直男として、村中の褒め者になつてゐるのを可笑しいと思つた。爺やの忠實も正直も、たゞ人間に對してだけの話だ。其の鶏を締め殺し、立木を伐り倒すところを見る時、爺やは一つの惡魔だと思つた。鬼だと思つた。夜叉だと思つた。新綠の頃、折角芽を出した木々の林に、爺やの斧が入る時、幼い私は、全く涙なしに見てゐられなかつた。私が植物に對してもつ愛着は、即ち新綠に對してもつ愛着であつた。人は秋霽が美しく、植物は新らしい葉をつけたところが麗はしいと思つてゐる。

史記の伯夷傳を私は好んで讀む。さうして伯夷叔齊といふ人間が古今東西で一番好きなやうな氣がしてゐる。今日の世界で國といふ國、人といふ人に、外へ向つて正義呼ばはりをする資格を備へたものがあるであらうか。正義といふものが、安價に賣買されて、すぐ正義のためになぞと、血眼になつて、正義を看板に喧嘩を吹ツかけるものが多い。他國に、或は他人に、排斥されたり何かすると、すぐ正義のために……とやり出すが、位地をかへれば、自分の方で同じやうなこと、或はヨリ以上の不埒をやるのだからたまらない。丁度鶏が群つて飼はれてゐるのを見るやうなもので、弱い鶏はいぢめられて可哀さうだが、其の弱い鶏が更に弱いのに向ふと、強いのから受けたのと同意地わるをして、ひどい目に遭はせるのだから、スツカリ興が冷めてしまふ。世の中の人が皆伯夷叔齊のやうになつた時はじめて、眞の正義があり、平和も來るのであらうと、私はよく中學時代から考へた。伯夷叔齊が首陽山に隱れたのは、新綠の頃であつたらう。新綠の頃だとしておきたい。蕨が芽を出してゐたので、それを採つて食つた。さうして、綠をもつて綠

に易へる政治や國家を呪つた。こゝのところが、私にはたまらなく好きなので、選擧だ投票だと血眼になつて騒いでゐる狂人どもを尻目にかけて私は若葉の匂ふ書齋で、靜かに史記の伯夷傳を讀んでゐるのである。

しかし、さすがの伯夷叔齊も、飢ゑには適しかねて、薇を摘まんで食つた。其の時私は折角芽を出しかけた薇が可哀さうだと思つた。新緑を眺めて、植物と融和するのはよいが、新緑を食ふのは殺風景ばかりでなく、罪惡だと思ふのである。人間の中では最上の愛の人、平和の人たる伯夷叔齊も、植物に向つては、やはり周の武王に負けない殘虐な人間だ、殘虐な人間にならざるを得なかつたのだと思ふと、私はつく〴〵世の中がいやになる。

そこで私は霞を吸ふて活き得る生物の世界を想像して、そこに空想を馳せ、動植物から礦物まで、地球上のものが、すべて互ひに相食む兇慾から遁れることを考へてゐるが、それは新緑の題下で說くべきことでないから、稿をあらためることゝしておく。

新緑の頃の懐しさ

近松秋江

自然の恩寵を心から感謝し、自然の美に心醉し、柔かい自然の懐に入つて甘えたい氣持ちにならされるのは、新緑の頃が最もさうである。

新緑の頃になると、私は、若い時から、何故となくたゞ懐しい感情が胸の底から湧いて起るのが常であつた。それは、何を對象として懐しい思ひが生ずるのであるか、明に分らない。蕭殺として滿目枯死の冬の季節から、天地が生々の氣に蘇つて來て、自然は豐麗なる色彩に色どられる。この四圍の環境の變化は人間の心を化して自から生存の幸福を意識し、生命の躍動を覺えしめるのであらう。

人間はその頃から、戸内よりも野を思ひ、山を慕ひ、草樹を親なやうになる。何處かの青い芝生の上にいつて、仰向けに寢轉んで、思ふ存分に自然の詩人になつて、人間生活の苦味を忘れてみたいやうな氣がする。

野にはもう菜の花の黄もすがれて、却つて白い菜の花がいつまでも咲きつゞけてゐる。その花の生れ代りでもあるかのやうな黄白の蝶々も老いて、薬の伸びた、[illegible]の花から花へと戯れてゐる。青い麥は穗を拔いてきた。蠶豆や豌豆の莢が成育して、薄紫の花が物憂い五月の日に照らされてゐる。蓮華草の紅紫色の花は今が盛りで、處によつては、農夫は稻を植える支度に、それ等の野草を掘り返へして水田に水を仕掛けてゐる。春雨に降り篙んだ小溝の用水は畦の小草を浸して、どふ／＼と流れてゐる。何處からともなく、小蛙の啼く聲が懷しく聞えて來る。私は、さういふ時に、たゞ生きてゐることゝの幸福を意識し、生命の愉快を感ずる。そして、それとゝもに又、靜に暮れて行く晩春の日の永きに倦み夕暮れの新綠に映つる灯の色の懷しさにも何とは知れず、いさゝか物足りない佗しさ、淡い哀愁を唆られることもある。

長い冬中親んでゐた座右の火鉢もやゝ手持不沙汰になり、さうかといつて蚊帳の悩せさも知らず、寢起きの身體の自由さ、快さがしみ／＼と味はゝれる。

私のかなり長い間の體驗によると、毎年五月の頃に最も健康を覺えるやうである。夏期炎暑と苦鬪した疲れは十月清秋の候に至つて回復するものであるが、嚴冬の寒威に虐げられた衰弱は新綠の季節になつて漸く回復する。そして五月・と月に回復した健康を以つて更に來る夏期の炎暑と戰はねばならぬのであるから、もし五月になつて身體が健康を回復しなかつたならば私の身體は非常な苦戰に出會はなければならぬのである。

近年この新綠の季節に、私の最も期待する好晴の續くことが少いのは、天候の所爲で、如何ともし難いが、甚だ物足りない。一昨年（十一年）の五月は割りに好晴の日が多かつたが、一昨々年（十年）と昨年（十二年）とは雨天が多かつた。今年もどうかと氣づかつてゐる。天は幸ひに人類草木に惠みを垂れて、どうか晴々しい五月の陽光に接することを得せしめてもらひたいものである。

東京の郊外の住宅にゐても、今、五月の中頃が丁度新綠の最も好期である。春宵千金といふが、花期よりも寧ろ　の方が眞に一刻千金である。天は人類に對して常に冷酷のやうであるが、偶には又恵深いのであるといふことを思はしめる。新綠の頃は最も天の惠みを感謝する氣にならされる。朝起き出で、靜

かな朝靄に映發してゐる軟かい黄緑の色は何ともいへずよい。此の頃の常として、日中はよく青嵐が起るが、好い夕方になると、樹間の風は靜まり、遠くの田園の森や家ゝちの彼方には蒼茫として一抹の晩霞が棚曳いてゐる。私は、そんな夕方には、家の中に靜つとしてゐるのも惡くはないが、何となく、家に閉ぢ籠つてゐるのが惜しいやうで、居宅からあまり遠くない、近い處の森や木立の多い郊外の住宅地のゐまはりなどを、ぶらぶら逍遥して見る。たゞ、それだけの散歩が何ともいへず樂しい。そして氣分を和げさする。

さうすると、まだ年少の頃、田舍に居る時分のこと共が懷しく思ひ起される。青い穗を拔いた麥の畑の間の野徑を歩いて行くと、微かに、柔かい植物性の匂がして、四方を顧望すると、野も山も清々しい新緑を裝ひ、遠くの山は淡蒼く霞が棚曳いてゐる。野から戻つて來た村の童子が、だれか器用に、麥の葉を取つてそれを舌の先で口笛にして吹いて行く者がある。それが「青葉茂れる」といふ節である。その節は子供の唄ふ節であるが、その調子が何となくその頃の氣分にふさはしい、懷しさを唆るのである。

新緑の時分になると、世界の何處へいつても、凡て此の世界が美しく樂しいものに思はれる。それは、やがて夏が來て、秋が來て初冬の頃になつて容しく末枯れるものだと知りながら、そんなことなど勿論考へる暇もなく、只眼に見る清々しい生した緑の世界が人間の心を化して生存をたゞ樂しく思はするのである。夏の暑さ、冬の寒さには、つい愚痴を溢す者があつても、何人といへども。此の新緑の好季に對して愚痴をいふ者はなからう。

私はある時、それはもう、五月の末頃であつたが、京都から宇治の方を巡つて、奈良の方にいつたことがあつた。桃山から宇治に行つた日は、ひどい風で砂塵が起つてゐたが、その夜宇治に泊つた晩から嵐はあつらへ向きの雨になつてしと〳〵と一晩中若葉に降り灑ぐ雨の音を聽いて靜かな夜を明かし、心ゆくばかり宇治の新緑を味はつて、翌日雨の上りかけた午頃から宇治を立つて奈良の方に廻つた。汽車の窓から見てゐると、南山城のそのあたりは、殊のほか新緑の美しい處である。柿の嫩葉など殊に多く見られる。やがて木津川を渡り、木津驛を經て、奈良の方に行くと、午前一旦晴れたと思つた空はその頃の氣候の常とて再び雨模様の雲が湧いて、それが次第に濃厚になつて來た。そして笠置山脈につゞく奈良の東方の連山には雲を流したやうな黒雲がもの〳〵しく中空を鎖して、その爲に、山の形容が一層鮮かに浮き上つて見えた。

私はその時は、奈良に下車するつもりはなかつた、法隆寺へ行つてみるつもりであつたので、大和平野の遠景近景を車窓から眺めて行くと、大臺ケ原であらうか、それとも奥吉野の金峯山脈の一角でもあらうか、初瀬から多武峯につゞく一帶の連山の上に當つて、遠く、峻剛なる高山の頂が幽かに望まれるのも好い眺であつたが、少し右手の方の西南にあたつて金剛山が青黛色をなして巍然として聳えてゐるのが何ともいへず崇美であつた。それは春も十分に熟した新緑の頃でなければ見られない山の色野の景色であつた。それにつけても思ふのは、蕪村の句に。

　大和路や宮も藁屋も燕かな

といふのがある。燕は晩春初夏の新緑の頃には何處からともなく飛んで來る小鳥である。そして此の蕪村の句は實によく大和路の特調を、わづかに十七字を以つて遺憾なくいひ表はしてゐると思ふ。

年はちがふが、その大和路を經て、新緑の初に吉野にいつた時のことが好い記憶に殘つてゐる。それは五月の初で、まだずつと奥の方へ入つていけば、吉野の櫻はいくらか殘つてゐるといふことであつたが、私は花でなく、むしろ若葉の方が結構であると思つたのだ。實際、輕便鐵道で、夕方吉野川の畔なる吉野驛に下車した時には、先づ好い感じがしたといふのは、吉野杉を製材する機械の音が、ステーション構外に高く響いて、――その音はともかくも、――吉野杉の薫の高い木香の香がつんと鼻を突いたことであつた。それから約一里半の山道を二人轆の車で吉野に登つていつた。晝間から強い南の風が吹き荒んでゐたのが山を登つて來る頃一天俄に掻き曇つてその晩遅く宿に着いて、一浴の後夕飯を認めてゐる頃から、山を流すかと思ふやうな凄じい豪雨が沛然として來つて、雨戸に鳴りはためいた。私は何となく悲壯な感慨を以つて吉野の雨聲を聽いてゐた。

そして、翌朝になると、一山の風物は拭ふたやうに清朗になつて、後醍醐帝の吉野宮趾に立つて四顧すると、金剛山は昨夜の雨に洗はれて、匂ふばかりに懷しく、西の方の空に浮き上つて見えた。私はそれから櫻の若葉の蔭を踏んで延元陵に詣うでた。

新緑の頃

徳田秋聲

いつであつたか、新緑の京都へ行つたとき、秋江、茅原兩君と嵐山に遊んで染みこむやうな緑の蔭で、お湯に入つて飯なぞ食べたことがあつたが、その時茅原君が花木春過ぎて夏既に中ばすと云ふ誰かの詩を口吟んだ。京都はちよつとさう言つたやうな氣分で、づゐぶん暑かつた。嵯峨から金閣寺へ行く途中なんかも、てく／＼歩いてゐると、汗が出て外套が邪魔になつた。しかし能くは知らないが、京都も花時は都踊や鴨川踊りなぞがあつて、随分雜踏もするし、俗つぽくもある。京都の俗つぽさは、東京の俗つぽさよりも又たちよいと厭味なところもあるやうで、自然が美しいだけに一層その感が深いのだが、新緑の時分はさすがに落着いて來るやうである。しかしあの邊で、私の知つてゐるところでは、宇治の新緑氣分が一番好きだ。それは涓々として流れる水勢の迅い宇治川があるからで、環境も廣く、山も深く、水上に重なり合つてゐて、やゝ箱庭の感じのある嵐山よりも景色が暢びやかで、大きく深みがあるからである。私は浩一路氏に贈られて、同氏の興聖寺の畫をもつてゐるが、多分青嵐の頃の宇治だらうと思はれて、翠の點々で刷いた、あの環境の深い青葉若葉に、さながらの風が爽やかに動いてゐる。

新緑といへば、楓や何かが柔かい芽を吹いて、眞黄色の山吹の株のあいだに、櫻の花瓣が腐りついてゐるやうな時も、何となく淡々しい哀愁のあるところが好いが、もつと移りかはつて大きな角のやうな竹の子が、黒土をはねあげて伸び出し、山路が葉を擴げはじめて、躑躅などの咲く時分が、殊にも花木春過ぎた感じで、晩春の哀感がないだけに、氣持が爽かである。この頃は汽車旅行の一番愉快なときで、どこへ行つても氣分がせい／＼する。健かに伸びだした桑の若葉も好いし、山田の溪邊に咲き匂ふ桐の花などもいゝ。山間の緑のあひだから、生毛のやうな新芽をつけたものの見られる頃、私はよく甲州を横截つて、信州へ旅をしたことがあるが、汽車の窓を過ぎて行く、あの邊の新緑も棄てがたい。落葉松の林が、窓の間を過ぎて行く

ときなど、殊にも感じがいゝ。東京邊では餘り新綠を見に行つたことがないが、江戸川べりなどは、水の色が深いので、特別の趣きや美しさがないながらに、どこか水郷らしい感じがする。どつちにしても新綠で裝はれた自然は、四季の他の何れよりも美しいのは當然で、目だけの感じて、譯なしに生きてゐるやうな氣持がする。どんな厭世家でも、新綠だけには氣持を惡くしないであらう。

もう筍も少し伸びすぎて、堅くなつて來た。本郷通りの銀杏の綠もやゝ濃さが加はつて來たが、今年は自然界の調子もかはつてゐるので、初夏のやうな感じを樂しむやうな日が、まだ一日もない。毎日荒い冷たい風ばかり吹きたてゝゐる。否題なしには、一日も生活を樂しむことのできない私には、迚も遣り切れない。どこかシベリヤあたりからでも風が吹いてくるやうで、日本にゐるやうな感じがしない。



面白い面白い滑稽

面白



六月號出来

素晴しく面白い傑作が集りました

お臍を押へて御覧下

◎諷刺物語 **お禿つばくら**…（鳥居冠）

郊外のある町の生活や環境を軽快な筆致で素破抜く。アモ油断のならぬつばくら奴

◎喜劇脚本 **腹の中の金剛石**（久佐太郎）

◎滑稽小說 **居候合宿所**（石井敏郎）

◎非實滑稽 **馬方の庄兵衛**（大角陽一）

◎ **食傷三人男**（滑稽小說）碧蘭迷

妙な處へ意地を張つた男が二升の豆と卵の交換

◎ **今様久米仙**（滑稽小說）滿千夫

何れは現代生活が生んだ泣くに泣かれず仙人氣取り

◎滑稽小說 **泥ちやんと辰ちやん**…（平野茂）

牛鍋の泥ちやんと云ふノラクラ書生が、美人の從妹な對手に喜劇の一幕・當選の名作

此の外に澤山、滑稽奇抜な挿畫と、一流大家の設計は本誌の独擅場、無類の面白さです。

◎探り合ひ…（滑稽小說）雨草克三

◎弟歸る…（滑稽小說）小橋梅夜

▼怪奇物語 酒呑み仲裁（山雨路人）

▼事實奇談 秘密魔境（澤田撫松）

▼歷史小說 龍安の大蝦蟆（長地春水）

▼西條驛情話 甚九の戀（山手庵）



忘春述懐

室生犀星

或る日わたしは裏町を歩きながら町角をまがらうとするときに、一人の老人が四五間さきから歩いてくるのを見た。白い毛糸の防寒帽をかぶり手に杖を曳いてゐる。わたしはその人が通りすぎるときにあやぶく、

「あゝ、もし……。」

とざう口にまで出して呼ばうとした。しかし老人はそんなことは少しも知らないで、乾いた故郷によくある土の塀にそふてとぼとぼと歩いて行くのである。塀ぎしには四月といふのに漸と梅が虻のやうなうすい花びらを撥きかけてゐるばかりだ。——わたしの掠れたこゑでそのあゝ、もし……と呼ばうとしたこゑは或ひはいくらか感傷的であつたかも知れぬ。あるひは普通の聲であつたかも知れないが、ともあれわたしはその人のあまりに老ひ込んだのに、平靜であつたわたしの心がやや少し搖れたと言つていいのである。わたしが半年もこちらにゐる間にいろいろな人に出逢つたが、むかし四十五六の人はたいがい達者で、そしてわたしに會つてもみんな忘れてしまつて

ゐるらしかつた。かれらは六十七八くらゐになり奥深いむかしの家に住んでゐるのである。——わたしは出たふりかへつてその老人が白い坂の上を登つてゆくのを眺めた。あまりに明るい春昼の中にも拘はらず老人のあゆみは追はれて歩いてゐるやうにのろのろとしてゐる。

「あゝ、もし……。」

わたしの心はすなほにもう一度呼びかけたいくらゐに、その姿を佇ちながら見送つてゐたのである。そしてゐる間にわたしはわたしの傳記のなかに自ら恥ぢてゐた小僧のとしごろが心に浮んでゐた。傳記といふものを書くときにさへわたしは名譽がほしかつた。まつたく見るかげもない人物にさへ名譽がいるものである。わたしはその名譽を重んじるためにわたしの傳記の中から、かなしい小僧だつたわたしをそつくり表面から拔き取つて知らん顔をしてゐたかつた。それになかば成効してゐるやうな形になつてゐたが、このごろわたしは名譽といふものは他人が勝手につけたものであるために、それを奪つてゆくものも他人であることを知り、そんなものの果敢なさが次第わたしをさとらせてくれた。むい、つを一つはなして見よう。たつたわたしの一つの名譽のためにと、そんな氣がいま道ばたに佇つてゐるわたしに考へ浮んだのである。その心はやはりあんな老人でむかしのわたしを知つてゐる心に向つて、

「あゝ、もし……。」

と呼びかける聲音に外ならない、——。

かれは一種のへんな人物であると言つてよい。何かのまぎれにわたしの手をとつて、手のひらを見てからふんと一つ

鼻さきで言つてから、

「おまへは非常に惡黨になるかも知れない。どうもわたしには左う見える。用心せんといかん。」

かれは裁判所書記の制服を上からかむり、黑い垂れのあるかんむりを冠つてから、すぐ民事法廷へ判事と一しよに硯箱をもつて出て行つた。わたしにはその言葉が氣になり一たいどういふ惡黨になるのだらうと思つた。四谷書記のさういふいかめしい法服姿が廊下に見えるごとに、心でその言葉をくり返して考へて見た。たんに手のすぢで人間の一生のことがわかるものかと思つてみたが半分は信じないとわるい氣がしたといふのは、四谷書記はさういふ手相を見ることにくわしかつたからである。

四谷書記とわたしは二つしかないはばかりで、ひよつこり小便をしながら、おたがひに四角な窓さきから瓦屋根にうつる春ぞらを見てゐた。わたしはふと口をすべらして尋ねた。

「あくたうといふのはどう言んです。」

四谷書記はみんなまで訊かずに「わるくなれば酷く惡くなるし、よければうんとよくなるんだよ。」と、でたらめらしく言ひ、手も洗はずに出て行つた。わたしの心はなほ半ば不安であつた。が、でたらめであることはわたしに明瞭と判つてゐた。——四谷書記は當時の所長がつれて來た男であるために、それゆゑに羽振りがよかつた。何となく同役からもすこしづつ敬遠されてゐたが、わたしにはその事がかれを輕く考へさせたことがあつた。

わたしは半紙を持ちながら閑暇な晝下りには、すこしくらゐ書ける人に畫をかいてもらふ癖があつた。たのんで見ると大概の人はうるさいと小言はいふが、きつと何か書いてくれた。四谷書記はきまつて櫻の花をかき、幹を曲げて書いてから自分のらくかんをした。

「四谷書記かい、あれは櫻の花しかかけないんだよ。」

わたしはしまひにこんな風なことを言つた。さう言ひながらやはり幾枚もかいて貰つた。三四年すると四谷書記は辯護士試驗に及第して、上京した。

はじめて役所のゐろりに立つてゐるときに、同年輩の小僧たちがじろじろと新參のわたしを覗き込むごとに、かれらを何か憐れむやうな氣がした。自分もそれの仲間に投じなければならないものか、さういふ氣がしたのはいまでも不思議だつた。娼賞人もこんな氣がするものではなからうか？——わたしの眼の前に湯のたぎつた大釜があり、それから土瓶に湯をくみ込む小僧たちが、あまりに小さいために濛々たる湯氣の中からやつと頭が見えるくらゐである。わたしはじごくごくらくの辭令を思ひ出しながら、早く辭令が下りぬかとそればかり氣になつた。

「一たん拜命したらしくじりのないやうにせんければいかん。どんな物品でもみんなお上のものだから。」

天井のがらんとした室に七八人の人がゐる。わたしの眼の前の少しいすかの目をしたのがかういふと、雁び紙の辭令をうやうやしく手渡しした。そのとき拜命といふ言葉が分らなかつたが、そのままさまざまの室々を同じ年ころのものにつれられ、ぐるぐる廻り梯子段を下りたり上つたりしてゐる間に、わたしは人間の顔といふものの區別がつかぬほど、ぺこぺこ人前におじぎをした。

「ちよいとお見せ。なるほど！」

かれらは一々辭令を手にとつて見て、それとわたしとの顔を見くらべ、一ととほりの合點がゆくとやつとおじぎをわ

たしの三分の一くらいの程度でかへした。わたしは結局二度も三度も同じいことをやつてゐる間に、ふしぎにみんなの人が一やうにきせるでたばこを吸つてゐることに氣がついた。しまひに硯箱のわきに必らずわたしは汚れたきせるを見出すことによつて、當座のなぐさめとした。なかに胡蝶を吸つてゐる人があつたが、このごろ考へると胡蝶といふたばこはよほど古いたばこだなと思つた。あるひは胡蝶でないかも知れない。――ともかくわたしは生れてはじめてあれだけのおじぎを、あんな短かい時間のあひだにしたのだつた。

窓ぎわに小さいうしろのない椅子と机とがわたしにあたへられ、硯箱の中にたつた一本だけ穗の白い筆が這入つてゐた。そのあたらしい白い筆がよごれた硯箱の中に寂然として置かれてゐた。わたしはそれを手にとり又もとの位置にかへし、これから何をしたらいいのだらうと考へ、わたしを世話をしてくれた岩上といふ人をじろじろ見てゐたが、きふにその人がよけいな世話をしてくれたものだと、腹立しく高い鼻をながめた。

「君、君はひるめしを持つて來たかい。」

同じ年ごろの、まるで女のやうに美しい少年が、――池田とか言つた、のが、活潑に君とちからを入れて言つた。

「持つて來ん。」

わたしはきみわるく此の美しい少年を見かへした。かすりの、わたしより上等のきものを着てゐた。

「ぢや宿直室へ行つて食はう、僕も一しよに食はう、べんとうやへ言ひ附けてもいいだらう。」

わたしはうなづいて見せた。

宿直室に疊が敷かれてあつたのが、わづか半時間ああして椅子の上にゐたわたしに、たいへん嬉しくもあり珍らしくもあつた。心がへいぜいの自分にかへつて來たやうな氣がした。

黒塗りの箱の中に三重になつたうつはものに、ごはんとおつゆらしいものと、酸い香の走る香のものがあつた。芹がぺつとりと柔らかく箸の兩側に垂れさうなのを、かれは口さきへ持つて行つて、

「これは七錢だぜ。」と言つた。

かれは十分とたたないうちに食べ終つて、ぱたんと蓋をしてしまひ、よこになると、家はどこだいと言つた。さうか、とわたしの答へをきくと左う言ひ、小僧仲間は二階と下とは別々なことや、二階は上品だとか、べんとうは十錢のものあると言つた。わたしはうんうんとこたへてゐるきりだつた。

跫の音がしてスリツパを引く音が廊下でした。池田は硝子戸から素早く覗いて見て、あいつは？ と言つた。

「あいつは山瀬といふのだ。會計にゐるんだ。なかなかのやつだよ。」

あいつといふことばがわたしには異様にきこえた。わたしに先刻辭令をわたした男だつた。

「こんなところに居るのもあいつに見つけられたら叱られるぜ。だがけふは君がゐるから關はない。」

こんな女のやうな顏をして口のわるい男だと思つた。かれは間もなくたばこをふかした。けむりの中から、君はどうかと言つた。のめないとこたへると、たばこなぞ飲むのはすぐ覺えられるものだと教へた。

「君も喫みたまへ。」

さういふと立ち上つた。わたしはあとに居いた。何度も注意されて呼ばれてゐることに氣がついた。書類をあちこちゆきして持つて行つたりした。

窓ぎわから殘雪の山々と、小使室の入口とが見え、そこに犬がいつもねてゐた。犬といふものは氣樂なものだと窓の上から始めて氣がついたやうに思ふた。きつちり四時近くなると今まで靜かだつた室が、きふに元氣さうな聲がしてみ

んだ机の上のものを片づけ初めた。そして梯子段を下りて裏玄關から歸つて行つた。わたしは人氣のない草臥れたやうな室の中で、さつきから窄めてゐたやうな呼吸を一息吐いて、默つてならんでゐる机をみるとやつと悲しいやうな氣がした。

寒さうな拘留處分を受ける人たちが被告人溜の兩側に腰をかけ、まんなかに卓子があつて加藤といふ巡査が坐つてゐた。そこへ拘引狀とか拘留狀をもつて行かされるわたしは、或る日加藤からさんざん揶揄はれた末に、

「これを知つてゐるか。」と言つた。

加藤は右の手でふしぎな眞似をしてみせたが、わたしには分りかねた。が、ひよつとするとあれではないかと思ひ、羞かんであかくなつた。かあいさうにといまでもわたしはその時の、わたしの羞かんだことをあはれんでゐるのだ。――にも拘はらず加藤はしつこく同じことをくり返した。どろぼうやばくちうちがわたしの顔をみて、たいくつざましに嗤つた。加藤はそのことを知つてゐるにかかはらずなほ面白さうに言つた。

「そんなこと知るものか！」

そんな口を叩いてもいい人物に、加藤といふ老巡査が見えたので、かまわずわたしはさう言つた。

「だんだん覺えるよ、敎へてやつてもいい。」

用事をすますとわたしは階段を上りしなに既うそのことは忘れてゐたが、あれのことだとは氣がついてゐた。あくる日も加藤は同じことを言つた。あんなことはああいふ老人でも知つてゐるのかと、笑ふと眼尻にめがねの皮のやうな皺の

たくさん寄る老巡査の、さるのやうな顔をわたしはあのことを考へたりしたりするときに思ひうかべた。――いまから見ればあのことも、ああいふ年ごろでは可哀想に神聖なことではないか。ひとりで、そしてつみのない悲しい氣もちで、あじけない陰地のあそびであるあのことをあんなに露骨に言ふなんぞは、おとなの恥かしさを知らない言分だ。不道徳といふことばは加藤のやうな人物に向つていふべきではないか？――はづかしがつてゐるわたしの魂をあいつはしばらくおもちやにした。あいつの前でわたしともあらうものがさんざんな目にあふたと言つてよい。わたしはあの手つきを思ひ出すと慄ひたくなるほどだ。――何かのものかげにゐるわたしに添ふて加藤がよく笑つてゐるゆえ、何度も悲じい目であたりを見まはさなければならなかつた。

ぎん猫、――誰がさう言ひ始めたか分らないが、なりの高いこの小使はまだ若かつたが、いつもわたしの兩方の頬へ平手をあてて、そのまま空にぐいぐい引つ立てた。わたしの足は床をはなれて苦しかつたが、ぎん猫はやめやうとしなかつた。かれはわたしが憎かつたのであらう。わたしを見たが最後かならずわたしの目になみだの出るほど空につるしあげてをいて、

「ほい！」

と床におろして、顔のまるい奴だと輕蔑し切つたやうに言つた。わたしは兩手を兩方のこめがみにあて、しびれの切れた間を忍び泣きをして、急につるし上げられたときの身の輕さから、床におろされたときのどんときた感じの交錯になやんで、うつ向き加減になつてゐたのだ。さういふときの小使室はひまで皆が使ひや掃除のあひまにゐたから、おも

しろさうに手を叩つて笑つたりした。たまごの殻のやうな笑ひごゑがばちばちはぢと痛さに沈んでゐるわたしの耳にひびいた。あいつはひどい奴だ。が、わたしにはその男が、いぢめるのが宿命としか思へなかつた。當然受けるものを受けてゐるとしか思へないほどの、愉快のどんづまりに氣の毒なわたしはふるえてゐた。が、次ぎの瞬間にわたしの頬にうかぶものは何であるか？　みにくい反抗らしい冷笑でなければ、子供に一番憎むべきふてぶてしい笑ひ顔だつた。さうすることに依つてわたしはそんなに參つてゐないと言ふことを示したかつたのだ。みんなの顔をずらりとならべてゐるなかで、

「ぎん猫、——。」

とさう呼びすてなければならなかつた。さうしたらこのつぎに又遣られることは分つてゐたが、だが、ぎん猫よ、吊しあげることだけはよしてくれ。あれはこたへ過ぎるとわたしはお腹でつぶやいたことが何度あるかも知れない。——かげでならわたしはあの男のおもふ存分の憎しみを受けることは平氣だつたが、人前ではこまつた。若しかげであの男がえたいの分らない憎悪をわたしに持つてゐたのなら、わたしは默つてうけてゐたのである。——人間同士では故なく憎み合ふくらゐのことはあり得やう。たんに容貌とか物の言ひ方などにもそれがあらう。ぎん猫の場合はわたしの指一本までにくにくしかつたに違ひない。わたしはそれが役所へ這入るなり感じたことだつた。ぎん猫は桑の木の枝の中へ燒いた火箸をさし込み、そのころ流行りかけたパイプをこさへてゐたが、火箸がうまく小枝のずいに通らなくて、よこへずれて徒らに木口を燒くばかりだつた。何氣なくそれを見てゐたわたしをかれは焦れた氣もちの遣り場がなくて、ちよつと睨まへたが、そのときにわたしはお愛想のつもりで頬笑んで見せたのが、かれには腹立たしかつたらしく、何か呟やくとそれを板の間へ叩きつけ、火箸を火鉢にさし込んだ。——生木の削がれた小枝は間もなく爐の中へくべられ

た。

「何か？　ここへつとめることになつてゐるのか。」

「はあ。」

わたしはさう傲厳なかれにこたへ、かれのなりの高い額をみあげた。そのときに何かわたしはこの男を好かぬ氣がした。生優しいその顔立ちから猜疑もちらしい苛立たしさが窺ひ見られた。

いつかわたしは用紙備品の本箱のそばで、掃除しながらゐたぎん猫が鍵の外れた本箱の中から、新しい半紙の幾帖かを抜き出し、それを反古籠のなかへたてに入れたことを茶碗をあつめながら見た。夕方にはかれらの茶碗をあつめる役目があつたからである。ぎん猫はたしかにわたしが見たことを知つたらしく、すぐその半紙をもとの本箱に入れてしまつた。そしてわたしが卓のかげにゐるのを追ひ廻した。たんにそれだけの理由のためにわたしはわたしの宿命であるかれに、椅子と椅子と卓子と卓子とのあひだをねずみのやうに趁ひ廻されたが、うしろの窓から廊下へ出たときに、あくまは趁ふことを断念したらしく箒を手に取つて立つてゐた。

だが何時ころとなくぎん猫はわたしを追ふことをしなくなり、たまに、全くたまにしかわたしのからだに手をふれるとがなかつた。どんなことからさうなつたのか覚えない。わたしの宿命はやや手ぬるくなつたが、わたしの心の奥の方にはいまでもぎん猫が両方のこめがみをねらつてゐるやうな、遠い遠い記憶がある。そのたびにそれがぎん猫でなくともそれは名前がちがつた別のぎん猫のやうに思へるやうである。——わたしを皷らせる仕事、それを倦きずにあくせくしなければならないこの世のぎん猫は、ぴやうぴようと吠えくさるのだ。

「ぎん猫よ、どうかもそつと手をゆるめてくれ。」

さういふ腹のなかで叫んだこゑは、あれきり絶えたのではなく又次ぎにえたいの知れないぎん猫がやつてきてゐるのだ。それゆゑわたしの考へることは一生ぎん猫にたたられ通しのやうなものだ。人間は子供のときに一番恐ろしかつたものに、もう一度姿をかへたそいつに出會すものらしく思はれた。——倚子と椅子の間に恐ろしいぎん猫がわたしをねらつてゐる。わたしはすずめのやうに慄えてゐる。——が、その吠えくさるぎん猫はいまはすつかりああいふ廷丁服のそれではなく、又、べつにこれといふ姿のあるものではない、ただ何かわたしを疲らせるこの世のさまざまな責任のやうな淡然としたものである。わたしはわたしの名譽にさへ値段をつけそれを賣らなければならないそれである。わたしの恥かしいことだらけを克明にできるだけてぎわよく、あんなにまでいとしかつたところを最一度ふりかへつて見ることである。さうしてゐるうちにわたしの頭腦のなかに吠えてゐるぎん猫がしづまるやうな氣がするのである。

わたしの仕事といふのは、十幾人かのお茶を飲む茶碗を洗ふことが朝の仕事の一つであつた。わるい藍呉須の瀬戸ものをくるくる水のなかで洗ひ、それをかれらの出勤前の卓上にならべておくことと、土瓶に熱いお湯を二人前に一個づつを配つてをくことであつた。わたしが始めてゐろりの前に立ち、大釜の湯氣のなかから汲み出す小僧たちの姿をじごくごくらくの繪にくらべて憐れんでゐたのが、もうその繪圖のなかの人物になりながらゐたのである。そしてわたしの考へたことは、どうしてかれら十幾人かのひとびとにうまい茶を飲ましてあげるかといふことだつた。その他にわたしは何も考へなかつた。そしてわたし自身もかれらに出したあとで、その一杯をいつも心樂しくのんでゐたのである。さういふ僅かなゆとりが毎朝わたしの接する半老人のかれらから傳染るゆとりで、後年わたしを早老にせしめた一因にな

らないとも限らないのである。

悲哀とは何であるか？——正しく悲哀といふものはわたしに取つて恐らくこれが最初のものであつたらう。——わたしはどうかすると茶碗を洗つてゐるうちに茶碗と茶碗と打ち合つて缺かしたり、あるひは床の上に取落して二つに割れたりしたときに、わたしのいつも考へたことは片町の瀬戸もの屋へゆけば、それと同じい茶碗を賣つてゐることや、それを默つて償ふておけばいいといふ考であつた。決して自分の過失をくやんだりする心でなく、過失の代償がたやすく行はれるから、それをわたしは默つて買つて來てつぐなふてゐた。ただおそれるのは役人たちが自分の茶碗の香蓋に自分の頭文字をかいておいたり、あるひは藍呉須の文様の濃淡によつて自分の茶碗が他人の分とかはつてゐるのを知つたときに、わたしはこまつたのである。

「君、これはちがつてゐる。もつとうすい文様ぢやなかつたか？」

「いいえ、けふあたらしく會計からもらつてお上げしたのです。」

「さうか。」

それきりでかれらは昨日までの自分の茶碗にたいして愛情をもたなかつた。どんなものでも自分のものでさへあればよかつたらしかつた。そしてわたしは過失の悲哀をこんな工合に遠退いた。

が、三度に一度は會計へ印章を持ち、れいの、いすか目の山瀬の前に立たなければならなかつた。かれはどういふ忙しいときでも、仕事の何切りのつくまではわたしを立たせておいたきり、自分の仕事をいそいでゐたのである。わたしはかれの仕事振りをみてゐるうちに何度も心を幾色にも代えるほど、どういふふうに山瀬に茶碗の言ひわけをすべきかを思ひ惑ふた。

「何んぢや。」

「お茶碗をそそうしたのです。」

山瀬はこちらへ向くと疲れた目つきでわたしをぢろりと眺めた。そんなときにわたしはならはしのやうに憎まれてゐるといふことを感じた。茶碗のことではない、たゞ憎まれてゐると思ふた。

「お上のものだといふことはお前にはよく分つてゐるね。そのお上のものを自分のあやまちで壊したことはわるいことではないかな。」

「ええ。」

「でこのつぎにはどうする。」

「この次ぎには割らしたりしません。」

わたしは蓮畑のゴミ棄場へ捨てた茶碗のかけらが、自ら蒼白い光線をつくりながらひつそりと、しかもなまなましく眼に射てつく思ひがした。山瀬はもの憂げに傳票に印を捺してからもう一度、

「このつぎには辨償しなければならぬぞ。」と言つて傳票をわたしした。その間は二十分くらゐかかつた。役人たちはみなわたしに眼をそゝいでゐる。わたしは何故自分で買つてきておかなかつたかを悔ひた。——その傳票は小使の取締の机の上にもつて行き、そこで帳面にわたしの印章を捺さなければ渡されなかつた。

「またか、——。」

取締はかう言つてわたしの顔を見た。仕方なくわたしは腹の中で、又だよとこたへた。取締は蔵から新しい茶碗をもつてくるとわたしに渡した。わたしはそれをていねいに洗つて、役人の卓上に置いた。

「何かい又割つたのかい！」

「えゝ。」

わたしは三度目にやつと頬笑んで見せた。悲哀はすりへらされ頭腦にはあとかたもなかつた。却つてわたしが小僧の役目をひいてからそんな色の茶碗をみると、何か考へ込んでしまつた。そして生新しい瀬戸物のすさまじい光線が永い間わたしを不愉快にもし、主人のそれのやうにわたしの心に何かかげを落した。それはわたしが一人の小僧としての從順な氣質のなかつたことを厭ふ感情らしい。なぜわたしは夕方の片町の瀬戸物屋に同じい茶碗を買つたかといふことを、くやしく思ひ出すのであつた。

「お前にたびく言つたが、しかしなぜお前にわたしの言ふことが分らない、——お上のものはお前のものではなくお上がお前にあづけたものだ。」

山瀨はいつもふだんにかう言つて、わたしのうつ向いた襟元を見つめた。わたしはたんじゆんに憎まれてゐるとしか思へなかつたのである。

或る朝、所長の室の卓の上にはたきをかけてゐたとき、そのはたきの先がすこし重いなと思ふ間もなく、はねたはづみに壁のところへ一文字に墨汁をひつかけた。筆洗ひの中にはたきをつき込んだものらしい。——そのときわたしは頭腦が輕すぎるくらい呆氣に奪られ、いち早くその墨汁をふきとらうとした。とりの子紙だつたせいで、紙質がむしられるばかりで墨の痕ははげなかつた。しまつたと思つた。次ぎの感じは、こりや一たいどうしたらいゝだらうと考へた。はたきのさきから墨汁がぽとりくと落ちてゐる……。椅子の上にわたしは腰をおろして見て、そのはね墨が點々として二尺あまり天井へ向ふて、だんくその點々が小さくなり二つ三つ飛んで止んでゐるのを眺めた。

わたしは思ひきれなくてこんどは墨汁をうすくするために、紙をすこしづつ剝いで行き、自分の指さきをちよつと眺めた。だいぶうすくはなつたが、なほ見にくゝなつたやうな氣がした。時計は所長の出るまでにたつぷり一時間はあつた。合計の人々はあと二十分で出揃ふてしまふだらう。山瀬はどんなに驚くだらうと思ふた。肥つた所長がぎしぎし階段を上つてくる、帽子をぬいで帽子かけにかける、そして自分の卓の方へゆくときにこれが目にはいる。目がうすいのでゆつくり近づいて眺めるだらう。

「そしてこのベルを一つ押すにちがいない、……。」

わたしは死んだやうな無表情な笑ひをして、テエブルの緋羅紗の上をすうすうとなでさすり溜息をついた。あたりに人のけはひがない。いまの内にどうにかならないものかと、それぱかり考へ込んでゐた。わたしは所長室を出たがまだ誰も出てゐない。靜かである。何も起らないでゐる。時計は八時に十五分前をさしてゐる。

山瀬が出勤した。わたしはかれの前と横とへ二度行き、二度ともからもどりをした。わたしのからだの中は何も彼も留守だらけのやうな、浮ついた輕さであるけた。あるけたと言ふよりうしろから押されでもしてゐるやうに、すこしづつ行つては歩き停つた。しまひに熱病やみのやうになつて山瀬のよこへ、そつと身をかたむけた。わたしはかれの汚たい老人らしい耳へ食ひつきでもするやうに近寄つて何かささやいた。あたまの中はぐらぐらしてゐた。山瀬は自分で自分を疑つて自分の耳を手のひらのやうに差し出した。わたしはそこで、

「け、け、けさのことです。」

と舌のさきを飲まれてゐるやうなもどかしさで言つた。山瀬はそのとき一尺ばかり飛び上つたかと思ふくらゐ、すつかり顏色をかえて椅子をうしろへはね、わたしの顏を見つめたが、

「ど、ど、どうしてそんなことをして呉れたのだ。」

「け、け、けさのことです。」

山瀨のあとへついて所長室へ這入つたときは、あらためてその飛び墨を眼に入れたときには、わたしは山瀨のうしろ姿ばかり見てゐて、山瀨がきふに飛びかかつて來はしないかと、そんなことが考へられた。すくなくとも頭をがんと一つくらはされはしないかと思つた。山瀨は墨のあとへ指をふれてみてから、

「はたきだな。」

さう言つて袴の間から時計を出してみてから、それが止つてゐたのか、きふにあはて上つて、

「何時だか見てこい。」

わたしは時間をかれに告げると、あと三十分で所長が出てくるとさう思つた。取締を呼んで來いと又言つた。わたしは慌てて取締りを呼びに行つた。取締は朝茶をのんで小倉の仕きせの膝を二つに折り、のんきさうに坐つてゐた。

「朝から何の用事があるんだ。」

かれは不機嫌にひとり言をいふとわたしの先になつて行つた。山瀨はすぐこのあとへ墨だけ目にとまらぬやうに紙を張り、所長がひけたころに經師屋を呼べ。そして一時のがれをしておくのだと言つた。山瀨はその他に何も小言らしいことを言はなかつた。あるひはかれ自身あはててゐたのかも知れない。とにかくいいあんばいだとわたしは自分の椅子の上に腰をおろした。あまり血の氣をなくしたやうなわたしの驚きはだいぶ經つてから頭痛を催ほした。――廊下がぎしぎし鳴ると所長が出勤した。呼鈴が鳴つた。わたしは所長室へ行つた。

「お茶!」

かれはかんたんに左う言つた。わたしはせいぜいうまいお茶をかれの前に置き、罫のあとに張られた紙をみた。そして引き下がらうとしたときに、わたしはきふにドアを半分あけしなに、

「はあ」

と立止つて再た室へはいらうとした。が、かれはいや呼ばないといふふうに頭をふつて見せた。所長は何も氣づかずにゐたらしかつた。

その日は山瀨をわたしは何となく監視するやうな氣になつてゐたが、珍らしく監督書記の上坂のところへ行き、何かおじぎ交りの話をしてゐたが、どうやらわたしの身の上らしく思はれてならなかつた。そしてわたしを二度ばかり見た。上坂監督書記！わたしはかれが色の白いやさ男であると言はれてゐるそれとは反對に、唯一のにが手に見えた。わたしだちの進退もかれの一了見になるからだつた。わたしはかれの眦に紅みをもつた眼つきが折々そそがれるのを知り、けさの事件がかなり大きいものであることを、空恐ろしく感じた。人間にはどういふときに災難がくるものか分らない。それがわたしの氣質とは反對にあらはれてくるものらしいのを、わたしは午後過ぎになつてやつと悲しく思ふた。

わたしと同じい年ごろのかれらの中には、何か勉強してゐるものもゐたし、またわたしのやうにしくじりをしたものがゐなかつた。わたしはかれらを羨やむやうな氣になつてゐたのである。美少年の池田のいふのには、山瀨があして默つてゐるのはよくない。あいつが默り出したら碌なことがないと、かれは先輩らしい口をきいた

「多分、君は受持ちを代えられるのだらう。

「それで僕はどこへやられるのか？」

階下だね。所長づきではない。」

その方がよほど安心だと思ふた。わたしは山瀬や上坂のそばから隔れた方がよいと思つた。

わたしの毎日通ふ道は公園の土手でそこの茶店の前を通つてゆくのである。夕方、三味線をひいてゐる家があつた。松の多い古い公園に三味線はかん高くいきもわたしの耳に不調和にきこえてゐる。わたしはこの間そこをあるいて見て三味線をひいてゐた娘がもうおかみさんになつてのを知つたが、それよりもわたしはわたしの毎日あるいた道路に、なぜに白い一本道が悲しかつたか？――さくらの垂れた枝の觸る冬帽のわたしが、悄然とむかしのそれと少しも變つてない姿であるいてゐるのを、わたしは家に居ればよかつたと思つたくらゐに考へ出した。

「演説なんかできるものか。おれはそんなことはきらひだ。うちにゐた方がよほど氣もちが樂だ。」

わたしの演説きらひはできないから嫌ひなのでなく、する氣がないからきらひだつた。さう言つて或る學校のそれを斷はりわたしのやうな人間の演説などを聞かうとする人々に、內々わたしの考へてゐることなど話をするのは、全くのわたしが奪られるやうな氣がしたからである。わたしの考へてゐることは語らないことのきれぎれで、それを紙の上にならべて見ないとわたし自身にさへ分らない思想である。ばらばらに話してしまつては聞く人も面白くはなからう。紙にまとまつたものがわたしだと言つていい。それを紙にではなくばらばらな人間に話しかけたつて駄目だ。それゆえわたしはその話をことはつて、いまこの道路を通つてゐる。道路は白い一本の通りになり悲しく明るい日の中にある。

わたしは道づれであるかれに、かれとはわたしの幼ないかれだ。――それにいまわたしは人間は過去を負ふべきもの

であるかどうかと云ふこと、このわたしに飛んでもない一かどの名士か何かのやうに演説をしてくれなどといふ馬鹿者のゐること、そんな馬鹿者におだてられて演説をしてみる氣になる人がゐること、ドストエフスキイだつて演説したことがあるではないかと云ふ事、人間は一人前になつたら一人前で通すことが當り前だかどうかといふ事、世間と一しよに圖に乘ることが普通だかといふことなど、つべこべとわたしは喋舌つた。

「それでこの話はお前のこの傳記の中に何の必要があつたのか。」

「あることはあるのだ。大有りだ。この白い道にはお前の姿がみえてならないから、わたしはお前の名譽のために演説の話をもち込んだのだ。あんまり時々お前が可哀さうでならないから。」

「それだからおまへはまだ俗物だといふのだ。お前のへんにへり下つたやうな心には少しくらゐ病的があるのだ。それが何よりお前のしろものをよくするのだよ。お前はお前で勝手にあたまの惡さの程度のよさで考へてゐて、あんな演説をことはつたことはいいんだよ。だがそれをつべこべ喋舌るのは俗物だといふのだ。内々うれしさうでそれでゐてその演説のできないお前が斷るのはあたりまへだ。」

わたしの冬帽に櫻が枝垂れてゐる。先刻もそれを書いた。だがこんなに櫻の枝が低くなかつた筈だ。わたしのあたまの上にずつと高いところに曾てこの枝があつた。わたしはそれを見い見いあるいてゐた。冬帽の上にどうかすると花びらがぽろぽろとこぼれる……。

「ねえお前、この木はふとつたらしいんだね。」

かれはひくい背丈を悲しさうに伸び上らせながら、やや考へながら幹にちよつとふれて見た。

「いや、すこしは大きくなつたが元々とほりぢやないか?——。」

「お前が低いから左う見えるのではないか?」

かれはかれらしく笑つた。「どつちも太つてゐるんだがよく分らないのだ。」かれはさんぎり頭に學帽のやうなものをかむつてゐるが、ある筈の徽章が見當らない。徽章のない學帽といふのは寂しいものである。さういふものは學帽のうへはいらないものだ。かれは手をやつて、これかと言つた。

「徽章はもとからないのだよ。つけたくともね。」

では何故あんな學帽を撰んだのだらう。その他にいろいろな帽子がたくさんにあるではないか?――わたしはさう思ひながらも、れいの、羞かしい氣もちがまたかげのやうにさしてくるのを感じた。かれは何かのはづみにかれの經驗したことのない學生らしいそれらしい姿でゐたかつたらしかつた。すくなくともかれのやうな年ごろには必要らしかつた。

わたしは小さいかれの肩を叩きながら言つた。

「お前はせいぜいさうして學生のやうな格構をしてゐたいのだらう。だがどう見たつてお前は學生でもなければ何んでもない普通の小僧だよ。」

「小僧でたくさんだよ。その他のものでないから。」

かれはさう言ふと寂しげにうつ向いた。全く學生とは別な風俗をしてゐる。風俗といふものはいつはれないものだ。

「ふむ。」

と、わたしは考へた。可哀さうに、いくら思つてみても可哀想だ。わたしはあんな澤山の人の前で演説をすることなど、思ひ切つて了はう!途方もないことだ。わたしの幼ないかれをもつと可哀がつてやらう。それがわたしに最も適いてゐる。こんなに明るい春晝のなかを既にかれはつかれ切つてゐるやうにとぼついて歩いてゐるではないか?かれの素

足の甲には灰ばんだ白い砂ほこりが溜つてゐる。――

「もつとお寄り！小さいの。」

わたしは言葉を繼いで、扨て「お前に一つ徽章をやりたいのだ。劍をさげてゐない軍人がゐないやうに、徽章のない學帽といふものがないからね。ほうら、この徽章はどうだい。――。」わたしは手近いところの花を一つ千斷つて見て、それをかれの學帽の穴に挿し込んでやらうとしたが、いや、それならと言つてかれはその花をぽんとわたしに投げ返し、よけいなことをすると言ふやうな顔貌をして見返した。

「氣に入らないと見えるな。それならいいぢやないか。」

「花なんか帽子にさす奴はゐなかつぺいだよ。」

「それなら勝手にするさ。だが可哀さうにおまへそんな丸腰のぼうしを冠つたりしてさ！」

坂にからたちの深海色をした垣根があり、それには白いヒヤシンスのやうな花が一杯に着いてゐて、香はあまいものを食べたあとの、鼻さきにかんじる匂ひで一杯だつた。そのかげでわたしはかれを力一杯に抱きしめてやり、ねんばりしたきすをしたらかれはおいおい聲をあげて泣き出した。わたしは膝の上にかれを寄せながら、ほんたうに彼の演説を斷つてしまはう！　そんなどころかい、そんな氣になぞなれるかい！　わたしは立てつづけに同じことをつぶやいて、かれを抱きしめた。

「泣くな、小さいの！」

わたしはすこし自分にもなくおろおろ聲でさう言ひ、からたちの垣根を背中にかんじながら、漸らく白い眩しい一本の道路が町へつづいてゐるのを見渡した。

平島忠一はまだ平屈であつたが、かれは會計部の、いろいろな部課から集まる書狀に切手を添貼する役目だつた。かれは若かつたせいか法律書を勉强してゐるらしかつた。そしてかれは珍らしくわたしを好愛した。わたしは他の人人から叱られたりするときに何となくかれの傍へゆくやうになつた。かれは役所がへりにあをやぎといふ席貸へ二度ばかりわたしをつれてゆき、青と黄の粉つぽい菓子を食べさした。平島は親切なひとだとわたしは考へた。

かれは川べりに夕方どきによく散歩をしてゐた。かれの口くせは散歩といふほど、散歩好きだつた。散歩といふことばが今のやうに流行らないころに、新しい言葉にちがひなかつた。なぜにわたしがかれと一しよに公園の櫻の下を歩いたりしたか！　わたしには分らなかつたが、わたしはかれと一しよにゐることを好いてゐたからだつた。

證據物件の這入つてゐる土藏の二階に、檢事局の犯罪人名簿や第一審判決錄や、その他の記錄が本棚の小路ができるほど一杯につまつてゐて、紙魚の匂ひがしてゐた。それに濕つた紙質のひいやりしたのが空氣を重くしてゐた。窓は三つあつた。空地に茫々とした土筆が簇生してそこだけ凹らんでゐるほどだつた。わたしはそこで平島を待つてゐたがかれは或日三錢切手を二百枚わたしにわたした。それをわたしの町の郵便局で金に換えることをわたしに言ひつけた。わたしの町に知合ひの局があつたので、とにかく百枚だけはよそから送つて來たのだと言つて、買つてもらひたまへと言つた。かれは書生流の何々したまへといふことばを好んでつかつた。東京辯をまねることは言ふまでもない、——。

「百枚だけだよ。あとの百枚は君の方にしまつて置いてくれるとよい。本か何かの間に入れてをくんだな。」

「もし局でかへないと言つたらどうしませう。」

「賣手がわかつて居れば大丈夫だ。つまり保證するひとがあればばね。」

二百枚の三錢切手は窓から忍び込む乾いた風にひそつと、硬ばつた。眼もくらやむ赤色の燦爛たる切手の堆積は、わ

たしの心の下の方にその色を沈ませた。わたしは何も訊ねやうとはしないで、あごの長いかれの青い顔をまじまじながめた。へいぜいとは少しくらゐこそこそした様子が窺ひ知られたが、その他にはかはりがなかつた「實は僕もよそから僞物のかはりに送られたが、どうにも仕方がないから君にたのむのだ。」と言つた。わたしは局のおやぢを知つてゐるが、これはわたしの家の向ひの指物屋のおばさんに托んで見たらどうだらうと思つた。おばさんは局へよく行くらしいからとさうかれに言つた。かれはしばらく考へて、よからうと言つた。

平島はわたしとは一と足さきに土藏から出て行つた。窓さきで切手をもう一度調べたが、ふところで干乾つてさわさわした。わたしは平島に向つて、

「どうしてこんなに澤山切手があるんですか。」

などと尋ねる氣にはなれなかつた。それよりも、

「うまく賣れるかなあ?――。」

といふ心が先立つた。そして平島の卓上の小簞笥に三錢二錢一錢とかかれた小抽出しがあり、そこに一杯の切手がしまはれてゐるのがわたしの眼にあつた。平島は切手の切取線のない方に食つついてゐる餘白を手紙に貼るときに、その一分ばかりの餘白におまけとかいたりして、わたしを笑はせ投函させた。まつたくあの餘白はおまけだとわたしはおもしろく思つてゐた。わたしは平島がお上の切手をちよろまかすのだらうと考へたが、かれが切手の番人であるためにそんな事くらゐはどうでもよいのだらうと思つた。公園の小島の番人が一晩だけ小鳥を自分の家へもつて歸つて鳴かせるくらゐのことに考へた。――だが、わたしにはそれよりも何か他人に話されぬものが隱されてゐるやうで、これは小鳥の番人とは少し違ふぞと思はれた。

わたしは机の抽出しに切手をしまひ、抽出しの中で手早く本のなかにはさんだ。平島は誰にも話をするなとは言はなかつたのは、わたしにそんな事がないと思つたのだらう。——いつか公園の坂で、何かの拍子に何かの花に手をふれたわたしに、平島はそりや國事犯だよと言つた。

「屋外窃盜ぢやないんですか？」

わたしは聞き覺えのそれを利用して言つたが、かれはいや國事犯だと言つた。その區別がわたしには分らなかつた。——わたしはそれを今思ひ出した。が、ふしぎに自分の好いてゐる人からたのまれたことと云ふものは、その善し惡しの正體をはつきり見定めることをしないもののやうに思はれた。わたしはどういふふうに指物屋のおばさんに頼んで、局へ行つて貰はうかといふことを、殆終日考へてゐた。それといつしよに燦爛たる切手の同じい模樣がうづ卷いて、机の抽出しにあることを、やや恐怖に近い氣もちになつて感じてゐた。それが時間が經つに從つて深くなつて行つた。

かへりにわたしは平島があごさきで、たのむと言つて室を出てゆく姿を何時になく一種の親密以上の、わたしと同等の人物のやうな氣で見守つた。その日の歸途は不愉快であつた。町の景色の中にも何か疑りかけてゐるやうな、それと言つて名づけがたい異常をかんじた。

翌日、わたしは同じ場所で平島に金をわたしたときに初めてほつとした。平島はだまつて受けとるとそれなりに職を出てゆくときに斯う言つた。

「この次ぎにあの分を頼む。」

あの分——の、百枚はまだわたしの机の中にあつた。

「ええ、でもしかしどうだか？」

わたしはこれだけ言つて、指物屋のおばさんから印形を捺されたこと、よそから送つて來たのに相違ないかといふことなど、切手を賣る人からくわしく聞かされたことを思ひ出した。そしてわたしの受取つた額のいくらかは切手賣捌人がはねたことなどを話した。わたしは最後におばさんからの金をこつそり握つて、家へかへつたことを思ひ出した。おばさんは何かの事情が判つてゐるらしく、うそうそと秘密めいた口ぶりで亭主の仕事場の、蠟引をしてゐた煙草盆を積んだかげで、低いこゑで言つた。

「どんなお友だちなんです。ただ役所ではわからない、――。」

「おとなですよ。」

「ふう！しかしあんなことは二度とたのまれるものではない。」

おばさんはこれだけしか言はなかつたが、何か解つてゐるとしか思へなかつた。その金を握つたときはわたしは漸つとどきついたくらゐの、あさましいものをこの事件の内からかんじ出した。――で、わたしは平島さんと呼びかけておいて、

「あとの分はかへしておきますから、取つておいてください。」

さう言つたが、どちらが持つてゐても同じことではないか。

「だから君があづかつておいて呉れるといい。折をみて賣つてくれたまへ。」

平島は藏から出てゆき、わたしは氣味のわるい土筆の簇生した空地の、あからんだ日南をながめてゐるうち、さむ氣がした。しかし金は平島にわたしてしまつたら、わたしに何もかかはりのあらう筈がない。わたしは仲に入つてゐただ

けだ。しかしやはり不愉快だつた。わたしは犯罪人名簿のならんだ行列をみたが、別に何とも思はなかつた。あれとわたしとはちがふ！

「しかし何を書いてあるのだらう。」

わたしは脚つぎの上から、その四冊くらゐある一冊をおろした。印刷紙で姓名とか年月日とか犯罪の種類とか、再犯か初犯かまたはその生國とかを書いてあるにすぎなかつた。いろは分けに書いてあつて何年何月には何處でどれだけの刑を受けたことまで詳しくかいてあつた。わたしは又脚つぎに上つてそれを元の棚の上に返した。「犯罪人名簿とはあれのことか？——。」わたしは見ない前よりも見たあとがさつぱりした。そしてあんな中へわたしや平島が書き込まれることなぞがあらう筈がないと思はれた。しかもこんな帳面のそばにゐるわたしに、そんなことがあるものかと思つた。もう一つ、わたしの空想したことはあの中に平島の名前のある一枚があつたら、いま、わたしはそれを切り取ることさへ出來るのだ。そしたら若し平島が、わるい人間だとしても、永久にそれが分らなくなるぢやないか！わたしの親戚のものの名前があつてもわたしはその一枚を拔き取るかも知れない。——わたしはいまなら何んでもできる。さう思つてわたしは藏をみしみし下りた。

被告人溜りで身がらのしらべがあつた。はだかになつた男のこまごましたものまで、みな書き立ててあつた。れいの加藤が目金の下で罫紙に何かかいてゐた。わたしはぼんやり眺めた。わたしはいつでも此の警察から引かれてくる人人の中に、わたしの見知顔がないかといふことに注意をもつた。それは選擧違犯で來た片町の雜貨店の主人を見てから、一種のもの好き以外の、こんないやなところにゐる人を樂々とながめたい氣もちから、わたしはいつも見てゐたのである。だが、知り合ひはいつ見てもなかつた。近在の人人のやうに色のくろい人が多かつた。加藤はやはり何か書いてゐ

る。そして釣竿が一本、壁ぎしに立てかけてあるのを場所柄に見ることのできないものを見た面白さで、わたしはその前に坐つてゐる男よりもゆつくり眺めた。釣竿のさきに鈴の鈴が下つてゐてそこから細い糸が弓なりにひかれてゐるのが、よごれた硝子戸越しのあかりに仄かに浮いて見えた。もちろん尾籠もついてゐた。底が濡れてゐるから或ひは魚がはいつてゐるかも知れない、――ただ、さう直覺的にかんがへて見た。這入つてゐるとするとどんな魚であらうとわたしは考へた。いづれ禁魚區で釣をしてゐたのか、それも無鑑札だつたのか分らなかつたが、わたしにはその尾籠に何か魚がゐるとしたら何がゐるだらうと、半分優しい氣もちでながめてゐた。

「あの尾籠に何かさかなが這つてゐるんですか。」

加藤はいつもより氣むづかしさうに目金の上からわたしをちよいと見て、その目つきをわたしの言ふところの尾籠の上に、じろりと目路をたどらした。そしてあたりまへの調子で、いかにも被告人になれてゐるものらしい安易さで、

「石斑魚(うぐひ)だつたね？――。」

と、こんどは尾籠の上をさしのぞくやうにして言つた。

「はあ。石斑魚(うぐひ)です。」

「石斑魚(うぐひ)ださうだよ、おい、なかをちよいとお見せ。」

「はあ。」

かれはさう答へると、その古い尾籠をすこし傾けわたしの方から見えるやうな位置にした。わたしは小さい石斑魚が五つ六つかわいて、小さい鮒のやうに反つてゐるのを見た。かれらは石斑魚だと言つた。石斑魚にしてはすこし感じがちがつてゐると思つた。

「石斑魚ぢやないね。加藤さん。」

「石斑魚だよ。」

加藤は又た目金を紙の上にさらした。「鮎ですよ。坊ちやん。」と、さきの男はやさしい聲で言つた。わたしはさうかな

あと温良しさうな男だと思つた。

坊ちやん、――と、さうかれの言つた言葉がうれしかつた。わたしは階段をあがりながらふゝふとひとりで微笑つて、

どうだい坊ちやんと言つてみた。

その日わたしはをりをり平島の顏をぬすみ見て、何となく心配がかさなつてゆくやうな氣がした。平島は平氣だつた。

その平氣さはわたしをやや安堵させながらも、なほ不安がちだつた。美少年の池田が來て君の窓はいいところにあるぜ

と、窓の下をのぞきながら言つた。

「何故?」

わたしは下をみたが其處にからべんとうを取りにくる役人たちの女中が、午前十一時ころには七八人も來たし、午後

にも來たのである。あれを池田がいふのだなと思つた。で、わたしは何ごころなく、

「あれかい!」と言つた。

あれだよとかれは答へた。それよりお前の方がよほどきれいぢやないかと言つたら、何言つてやがるときつい調子で

言つた。かれはそんな機嫌をすぐ直して、

「山瀬に娘がゐるぜ。」と言つた。

「袴をはいてくる娘がゐるだらう。あいつだ。」

わたしも時々それを見たが大してきれいではなかつた。しかし池田はちよいときれいだと言つてきかなかつた。所長に三人の姉妹がゐる。中のやつはきれいだと言つたが、わたしは見たことがなかつた。池田はそんなことには詳しかつた。

「袴に時計なんぞ卷いてなかなかハイカラだよ。」

「どこで見た……。」

「朝よく道で出會すぢやないか？主人づれの。」

「はアは、あれか？」

それはわたしもよく見かけた美しい姉妹だつた。が、わたしにはそんなひとに適かないことが分り、目をつけても叶ぬやうな氣がしてゐた。池田は白い前歯を小指の爪で叩いて見せ、微笑つて言つた。

「これだよ、中の妹は？」

何だか分らなかつたが、ものになるといふのだらうかとわたしは思ふた。池田はみんなに可愛がられてゐるのは、顏がきれいなせいだとわたしは考へ、顏のきれいでないわたしが憎まれるのはあたり前だといふふうに、わたしはあきらめてゐたのである。が、顏がきれいでないわたしにぎん猫並みの憎まれ方がしばしばあつたが、顏のきれいな池田にはぎん猫さへ慘たらしい手を下ろすことがしなかつた。ぎん猫にもあまりに美しい顏にたいしては自分のむごたらしい性質のままにうごくことができなかつたらしかつた。わたしの鼻のしたにはうす青い、かすかな、震えるひげさへ仄見えてゐたのを、わたしはしばしば珍らしく覗き込んだりしてゐたのである。それはなにやら悲しい氣もちだつた。

「給仕！」

そのころはわたしのはらはたに沁みつき、凍てて顏をそむけさせてきたのも、このごろから感じるくやしさであつた。何がくやしいと言つてわたしにはこの言葉ほど、はらわたにぐりぐり抉られることばはなかつた。——わたしは或時、或る雜誌社に原稿をとどけ金を受けとり、階段を下りしなに素足の、びんぼうたらしい給仕が上つてくるのに一度出會した。何とも思はづにわたしは埃まみれの靴をいまいましく思ふ前に、東京の道路のわるいのにかんしやくを起しながら、エナメルの光る靴のさきを柔らかい紙で拭いて、そとへ出た。ぽけつとに貰ひ立ての金が幾らかあつた。それさへわたしには氣にならなかつたが、ふいに全く、何といふざまをしてわたしはその門の前で佇立をしたことだらう。わたしはわたしのうしろの窓で、わたしのいやないやな呼方が、臆面もなくもう二十年も經つてゐるわたしに、まんまと、正面から叩きつけられて來た！

「給仕！」

あゝ、あれだ。わたしはなるべく早足でその雜誌社の門前を隔れた。もう少しでやられるところだつた。わたしはあたりの人氣のないのを幸ひ、あぶない！と、さう呟いた。わたしは額にじりじりあぶら汗のにじむのを決して氣候のせいではない、あれのせいだと思つた。わたしは不機嫌にじりついて、

「あれだ、あれが珍らしくだしぬけに、まんまと一杯くはせやがつたのだ。ちくしやう。どろぼう。贓取り。」

わたしはできるだけ喚いて、間もなくしんとして、扨て、やはりくやしさうに唇をかんだ。その道路に電車も自働車もうごいてゐたが、わたしの頭腦はぐらぐらと旋廻しはじめ、はづかしさで一杯だつた。なぜにこんなに恥ぢなければならないか？いまは何んでもないではないか。悠然として歩け！わたしはさう呟いてゐるにかかはらず卑屈に蹈まつた心は、さうはゆかない。あれだ、あれが呼び立てるのだ。埃ばんだ汚れた容氣の中に白い顏がわたしを眺め、笑ひ立て

てゐるからだ。雜誌社などへ行くのは止さう。素足でひたひたと床を走り使はれてゐて、自分の健康など少しも考へられてゐない可哀さうな奴、――そいつが一人前になつたてやはり飛び上るくらゐ吃驚りして、あれを聞かなければならないのだ。

上坂監督書記は古いモオニングのやうな服の塵を拂ひながら、わけは別にないが、とにかくと言つて、

「お前は階下の方へ行つて貰はう。登記所の方だ。あそこはお前に適當だらうと山瀬さんとも御相談をしたのだ。」

「はあ。」

わたしはおめかしやで、氣障なほど氣取り屋のこの男にも威權があるのを、内々恐れてゐた。

「あちらへ行つたら最つと失敗をすくなくして貰はねばならん。」

「はゐ――。」

わたしはまだ何か言ふのだらうと思つて立つてゐたが、かれはもういいと言つた。椅子にかへると山瀬がおいおい些つと言つて呼んだ。

「上坂さんから聞いたかね。」

「ええ。」

「上坂さんともお話したがこんどあんなことをして貰ふと、此處を止めて貰はねばならないからね。よく自分で考へて何んでもした方がいいね。」

「はあ。」

此間の罪を飛ばした一件をいふのだ。わたしはかれの前を引き下つて登記所の方へ行つた。そこは埃ばんでゴミ箱のやうに帳面が卓上に散らかつて居り、階上より人間がすこし下等なやうな氣がした。わたし自身もそのゴミ箱のなかへ坐らなければならなかつた。そこでは人間なみよりも犬ころなみに使はれた。激しい呼ごゑがわたしの眼の前を十文字にゆききした。あちからも此方からも呼び立てられた。わたしは自分で自分の耳をあつちイ立て、こつちイ立てした。としよりも若いのも皆そこではまるでやけくそに働いてゐるといふより、役人の屑だらけがゐるやうな氣がした。實際、かれらは成績のわるい頭腦をしてゐたために、どんどん此風塵の登記所へ追はれたらしかつた。かれらはたばこ一服喫むのにさへがんがん烟管をはたき、登記簿を卓上に叩きつけた。

ここへ代書人といふひとびとが登記簿の閲覧にきたが、かれらは甲羅のある虫のやうに終日卓上にかがみ込んで、老眼鏡でをりをり疲れたらしい眼をやすめてゐた。かれらの古いかび臭い羽織にみるみるうちに白い埃がたまつた程だつた。抵當權や賃借權乃至は家屋賣買の記錄であるこれらの帳簿に、個人個人の財産が明記されてあつた。しかも古いものには何時の間にか名義人がちがつて人のものになつてゐるのなどあつた。お上の仕事にもそそうがあつたが、書いてゐる一人づつではそそうがなかつたらしかつた。とにかく、役人の屑であるかれらの中に、屑の中の屑であるわたしの卓の上で、わたしは終日申請書の收入印紙を叩き破ることが仕事であつた。虹いろの百圓印紙や青つぽい五圓印紙など二度とつかへない程度にいちいち叩き破つた。消印とかいた鐵槌の四角な輪廓に、鋸の齒のやうなぎざぎざがあつてそれが印紙にぴつたり食つつき、破りぬいでしまふ程叩かねばならなかつた。わたしはわたしのうしろにも最う一人、そんな消印の槌を振つてゐる奴がゐるやうに思はれるほど、めまひに近い惑亂をかんじながらえいえい……と、叩きつぶ

したそしてわたしを憐むぎん猫や、上坂や山瀬のあたまをわたしはここで思ふさま、全く思ふさまちからを込めながら、えたいの分らない憤りの浅猿しさにかられ、片つ端からなさけなく、

「あいつの分だ、こいつの分だ。——」

と、槌を揮ひあげながらやけくそにつかれて了ふのだ。そしてよごれ黄ばんだ硝子戸にあつい頬べたをあて、……

と、がらにもなく吐息をついた。疲れで耳の底がひりひり痛かつた。

主任に葛谷といふのがゐて、かれは一かどの紳士だつた。かれは日曜ごとには獵に行き黒塗りの立派な箱べんとうをかかへ、必らず服を着て山高をかむりちやんとして歩いては出勤した。その姿態はどこか軍隊式ではあつたが月に三百圓くらゐの月給をもらつてゐる人のやうに見えた。だが滅多に倦いた煙草を吸はなかつた。長きせるで煙一杯をけむりでふくらがし、ぱつと水道のやうに吐き出す癖があつた。なぜか椎化といふ號をもつてゐたのである。そしてかれの言ふことは主として獵のことだつた。

「それでつぐみなぞがきりきり舞ひをして落ちてくるのは、なかなかいいものでしてな。」

といふ調子で、次席としやべつてゐた。かれは鳥渡したひまにも獵のことを、又かと思はれるくらゐに話した。

「だが鴉といふ奴は鐵砲のさきが見えても、つういと逃げを張る奴でしてな。やつてごらんなさい、洋杖だつてから身がまへしたら逃げてしまひますよ。」

わたしはかんかん叩きながら鴉といふものはそんなものかなあ、こんだ杖でやつてみるかなあ、ちくしやう、かんかんと終日叩いてゐた。かれは犬をもつてゐたのか、よく獵犬がついて来て又かへつて行つた。そしてかれは藏（そこにも登記簿を入れる藏があつた。）へ這入つて帳簿をしらべるときには、書類の讀み合せをするときのやうな拍子で、よく、

「行く川のながれは盡きずして……。」

と、何かの文句を諳記してうたつた。それゆゑわたしはかれに桂花といふ號のある由來がおぼろに知られた。わたし自身もその行く川のながれはつきずしてを能く口の上にのぼらせた。

土藏には長谷川といふ老小使が終日默つて書類の製本をしてゐた。誰とも話をしないで一日同じことを繰り返し、おひるには、何かの干物を燒いてたべてゐた。その臭ひをかぐと老小使が土藏にゐることをやつと思ひ出すくらゐで、それほど誰にも知られてゐなかつた。かれの小倉の服はボロだらけであると言ふより、かれ自身のからだが矢張りボロだらけのやうに見えた。わたしはかれが製本に妙を得てゐることと、紙をそろへるときに手ぎはよく小指をはねては、そろはぬ紙のつらを合せるのを眺めてゐたが、何か感心するやうな氣になつた。糊も自分で煮たし紙にうす刃を自分であてて磨いでゐた。役人の前へ出て製本のことについて何か言ひ付けられるときには、膝を床の上に折り土下座をして神妙に聞いてゐた。やさしい老犬のもぢやもぢやな毛なみを撫でるやうな氣もちを、わたしはこの人のひとがらに眺めた。

「又、そんなことをしてゐる。」

かれはわたしを見ては笑つた。わたしは用事があつて藏へはいるごとに兩眼を閉ぢ、めくらの眞似をして歩いてみたり、帳簿の棚へまで行つてみたりした。そんな癖がついてしまつたのだ。藏へはいるとめくらの眞似がおもしろく、さうすることが心を柔らげた、と言ふときざだが、よく子供といふものはそんな眞似をするものぢやないか?――。眼をあけることと閉ぢることとの比較が、しつかりと心に區別できるのが面白かつたのであらう。――長谷川の耳はよほど遠かつたからかれの傍へ寄つて行つても、鳥渡分らないときがあつた。さういふときはわたしはかれの耳を引いてやつた。かれの耳は大きくよごれた見醜い、悄げな姿をもつてゐたのである。わたしがその耳を引くのが小氣味よかつた。

そして大して叱りもしなかつたから、よい氣になつたりした。

「これ、これ、よさんか。」

物憂さうにさういふだけであつた。わたしはこの老人がさうされるのを厭がりながらあきらめてゐるのを知り、圖に乘るわたしをきつく咎めないことを知つてゐたから、ときどきその耳をひつぱつてやつた。木耳のやうに硬い肉がゆい耳だつた。わたしの本當の心はそれを捩ぢ切つてやりたいくらゐ、しやりしやりと小憎らしい氣になつてゐた。ただ、もの音に遠い耳——幽遠な耳をわたしはわたしの精一杯の仕返しに、ふいに發作的に忍び寄つては引つぱつてやつた。しまひには少しづつそれが悲哀を帶びて感じられた。長谷川さん、わたしにはそれがいまから思ふと樂しみの一つで、欝晴らしのおもなもので、そして何と悲しげな忌々しいめくら遊びのひまひまにやつたところの、つみ深いいたづらであつたらう。その耳はまだ指さきに殘えてみえる。——默つて煙草をのみながら誰ともつきあひをしないで、自分は自分だけの仕事をやつて居ればいいといふ考へではなく、ただ、自分の氣質のまま沈湎してゐる老小使、——べつに話すこともなくそこに茫乎と十分くらゐの時間をつぶしてゐるわたしに、老人の暮しかたが靜かでいいといふことを、あんなに幼ない頭腦をもつてさへも考へた。さういふ鈍い生命(いのち)に對する溌剌としたわたしの生命(いのち)が齒がゆがるのは、無理のないことに思はれた。

わたしの役目である申請人の呼出しがわたしには恥かしかつた。それは登記申請人の控所にゆき、その一人づつの名前を呼ぶことであつた。わたしの町の人でわたしを知つてゐる人などが微笑んで顏をみるとき、わたしは職業を恥ぢる氣になつた。何の某さん、——と呼ぶわたしは控所の硝子戸の半分にからだを隱しながら、なるべく人々から見られまいとする切ない努力をもつてゐたのである。にも拘はらず澤山の人の眼はすぐわたしに蝟集した。短袴をはいた素足の

わたしがそこの曇り硝子戸に立つてゐた。羞かしさを嚙みしめてゐる變な顔立ちが、かれらには何と言つても明瞭と見へたに違ひない、――。

「婆め、また來てゐる――。」

廣見のばばあめ。わたしはそのばあさんが抵當貸しの金をあちこちに貸しながら、期限がくると直ぐ流してしまひ、その登記をしにくるのを一と月のうちに一度か二度はかならず見た。色の白い美しいごけではあつたが、何かわたしの嫌ひなものを顏の中に交へてゐたから、それを見るたびにばばあが來てゐると思つた。小さい信玄袋を下げ髮を隱居風に小さく結んで、遊山でもするやうに樂しげに役所のべんとうを食つてゐたりした。すこしづつ貸してゐる金に利が胎んでゆき、その利が他人の家をいつも二三番の抵當後にはかれの手に握らせた。「あのばばあが又家を一軒手に入れた！」役人たちはいまいましげに左う言ひ、その名義人書き換えを己れ自らの手で登記濟にしたがら、舌打ちをした。みんな憎んでゐたがおばあさんは反對に朗らかで、且つ年にも似ないで肥つてつくりは小綺麗ではあり美しくもあつた。おばあさんには自分の家がこの町のあちこちにあることや、その數の殖えてゆくのが、子供が河原で拾ふ紅い小石の殖える程度で嬉しかつたのであらう。いつもにこにこして、快活さうで、そして何も彼も愉快さうであつた。だから他人から憎まれてもそれをそれとする氣もちを別に持ち合せてゐたのであらうとわたしには思はれた。

「廣見ゆき、――。」

わたしはかう呼んで、かれの白い顏がさらに樂しげに受附の窓へ向いてくるのを能くいたいたしく眺めた。

わたしがゴミ箱を漁る犬のやうにくらしてゐる埃ぽい登記所に、或日、平島が辭令を持つて掛りの人々に挨拶をして廻るのを見て、とうたう平島がこのゴミ箱に追ひ詰められたのではないかと思つた。――あれから間もなく平島は切手のあと百枚をわたしが返したときに、自分で始末したらしかつた。賣つたか或ひは自分の擔任の切手箱へ返したかどうかは知らない、――ただ、あの事以來わたしは何となく近づかなくなり、平島も滅多にわたしに口を利くことがなかつた。要事さへあまりわたしに言ひ付けないやうにしてゐるのが、故意とのやうに感じられた。が、けふかれが辭令を持つて廻つてゐるのが、必らず掛りがちがつたからだと思へた。かかりの違つたときは左うやつて廻つて挨拶をするのが例になつてゐたからだつた。

平島はやはりこの登記の方へ追ひつめられたのだつた。かれは窓ぎはの一席に椅子を置いて、なれない仕事をその日の午後から始めた。わたしは眼と眼で微笑つたきり別にものも言はなかつたが、あのことが祟つてゐるのではないか？――なぜか、そんな氣がして、淋しさうに仕事をならつてゐるのが餘計にさびしく見えた。みんなの忙しく筆を動かしてゐるなかで平島は手持無沙汰な姿で、煙草をふかしながらゐるのを見ると、あのことがかれをこんな役人の屑の方へ追ひ込んだやうに思はれてならなかつた。

午後には大概監督判事の行正といふ男が、のつそりと背丈の高い姿でみんなの事務を執つてゐる間を歩いて、一々登記簿を覗いて歩いた。うしろに手を組んでゆつくりと散歩でもする歩調だつた。かれの靴音がするとみんな靜粛になつた。黄塵が夕づいた日の中に舞ふてゐる中に、二十人くらゐの人間がみな踏み込んで、できるだけ忠實さうに筆をうごかしてゐた。行正判事は不意に仕事中の登記簿を役人の卓上から取つて、ばらばらと頁を繰つてながめ、やや靜かではあつたがぱたりともとの卓上に返した。そのたびに蒼白い顔をした役人は一揖をした。判事はつぎつぎへとさうして廻

ると、まだ時間がいくらも潰れてゐないときには、わたしの卓の傍へ來て消印をながめた。わたしは判事の背丈が天井裏にまでとどくほど高いこと、川漁が好きで色が眞黑であること、それから決して直接に小言をいはない男であること、たとへばかれの小言は監督書記へつたはり主任書記を經て役人に聞かされることとを考へ、あひかはらず槌をふるひかんかんやつてゐた。わたしはそんな時によく印紙の上にではなく、書類の上へ消印を打ちそこなつたりしたために汗をかいた。かれはゆつくりと煙草を喫みながらゐることもあるし、消印された分を手に取つてながめることもあつた。とにかくかれは默つて來て默つて去る氣味のわるい男であつた。乾いたこゑで一二度笑ふほかは滅多に笑つたことがなかつた。

かれが去るとみんなは吻として、帳簿から頭を擡げ或は一服したり話しはじめたりした。かれのさういふ散歩的な事務監督は二時半か三時ころかにされるところから見ると、退廳前のどうにもならない時間つぶしのやうに思はれた。

「あいつは閑暇だからな。だからああして廻つて來るのだ。」わたし初めみんなそんな心でゐたらしく思はれた。

階下の監督書記の內藤は一日ぶつぶつつぶやき、ちよこちよこ歩きをしてゐた。かれは老人などにはしよつちう小言をいつた。そのくせ行正判事の前では氣の毒なほどぺこぺこしてゐた。何となく卑劣めかしいかれはうすい髯をなでながら、行正判事と同じい歩調と勿體振りとで、しばしば登記所に姿をあらはした。そしてれいの登記簿をしらべたりする外、その細字の書き込みに對して字が不鮮明であること、朱肉が硬くなつてゐること、調印がよごれてゐることなどを言つた。そんなとき葛卷主任はわたしにさつそく洗滌を命じたのみならず、特に業々しく叱るやうなこゑで、

「かねがね洗つておけと言つたぢやないか、——。」と言つた。

わたしは默つてそのとほりにした。

内藤は又たよく藏の中まで這入つて帳簿の背中ががたがたになつてゐる小言を言ひ、散在された帳簿をながめると、

「このざまはなんだ。」と言つた。

わたしはそれを一つ一つ拾ひあつめた。はげしい帳簿の出し入れはそんな一々きちんと整理しておく暇をあたへないほど、忙しかつたからである。かれはふきげんにあたり散らして、こんどは老小使の長谷川にまで當つて眼を尖らせた。

「土藏で火をつかつてはいけないことになつてゐる。」

「實は鏝手（こて）を燒くために少し要るのでございます。」

長谷川はかしこまつてさういふと、内藤はすぐ「土藏のそとで燒くといい。」と言つた。そして一々それを取りに行つてゐたら仕事ができるものではない、――しかし長谷川は唯へいへいと聞いてやたらに頭を下げて恐れ入つてゐるやうだつた。内藤にはさういふ蟲けらのやうな對手を見るのが、さう悪い氣がしないのであつたらう。かれは藏の二階までも見て廻りゆつくりと出て行つた。そのあげくは葛卷主任が呼ばれたりした。主任は又た老小使をいびり立てた。「ああいふ人だから氣をつけてな。」かれはさう言つて長谷川を少しづつ叱つた。わたしは矢張り階下が階上とちがつて役人くさいとげがさされてゐると思つた。――老人たちはここには多かつた。かれらは老眼鏡でやつと見えるくらゐの、五號活字くらゐの文字を登記簿にかいてゐるのさへ、やつと見えるやうな人々だつた。暗い咳をしたり喉を卷いたり懐爐を入れたりするのが多かつた。かれらの煙管はやにで詰つて風邪ひいた鼻のやうだつた。それをこくめいに隔日置きくらゐに掃除をしてゐるが、へんにわたしの氣になつた。毎日そんなやにのけぶる匂ひのしないことがなかつた。しまひには老人たちの顔の皺や手や足などまでに、深々とやにが溜つてゐるやうに思はれてならなかつた。その證據には硝子戸

に煙草のけぶりがこびりついてゐたから、――かれらは煙草がまるで命のやうに見えたほど好きだつた。かれらはどれもこれも釣りきちがひであつたために、よくその話をした。葛卷は自分とは年上のこの人だちの前へ行き、頭を掻きながら幾らか氣の毒さうに、

「釣の方はあと廻しにしてこちらの方を一つ願ひたいものですなあ。――」

と言つた。申請人は受附の窓口に群れ、まだ自分の分は濟まないかと急かしてゐたから、釣の方はあと廻しにしなければならなかつた。老人だちは氣がつくと、れいの老眼鏡の下からたどたどしい遲口の筆をはこんだ。そして漸つと書けるやうな五號活字のやうな文字をかいてゆくのだつた。田中、野村、中野といふ老人、みんな髭を生やし娘や息子をもつた老人、――。

「あいつらは煙草をすひに出てくるやうなものさ！」

美少年の池田はさう言つたが、かれは相渝らずあちこちで皆に可愛がられた。その反對に瓜か茄をつぶすためにゐる老人とか、法廷に行く判事だちを蝙蝠のお化けなどと罵ることが、數多くなつた。そのかはりかれはその美しい顏を卓と卓の間に、いつも輕々しく飛んであるいた。

判事光用は或日こんなことをわたしの顏を見て言つた。

「變な顏をしてゐる小僧だなア。」

光用は陪席判事であつた。かれは茶をのんでから退屈でしかたなささうに、大審院判決錄の表紙の上で爪を剪りなが

ら、人間のうちの最下等なものをゆつくりと充分な輕蔑を以つて言つた。

「川鰭みたいな顔だな。」

わたしはあいそよく笑つてみせた。こんな上級のひとがわたしにこんな戯談を言ふことも、卑劣なわたしの心に不愉快より先立つた或る親密さがあつた。わたしは再度のあいそ笑ひをしながらそこから引き下つた。そして自分の卓のところへくるとわたしが果して川鰭の顔に似てゐるかどうかを、ほんの、ちよつとの間考へたがそれも急ぐに忘れてしまつた。が、光川判事はそれからあとにはわたしなぞに口もきかなかつた。かれは所長のところへ折々判決例をもつて行き、何かしやべつてゐた。わたしはかれの親密を致したことばを實際は親密ではなく、でき心の、たいくつから左う言つたものであることを、何となくおぼろげに感じ出した。ちやうど、わたしどもが三つか四つくらゐの子供の顔を何とか批評したくらゐであつたらう。

――だが、わたしはそれから後に、この判事の顔をみるたびに、變な顔だなアと左う言はれてゐる氣もちを否めなかつた。どういふときでも、それから後にわたしはわたしの顔を氣にした。誰か初見の人とか、會合とかではきつと顔のことを思ひ出した。或ひは人と交際ふことが嫌になつたのも、こんなところから次第にその思ひが重なつたのかも知れない。自分の好きであるための女にでもつい默つて引つ込み思案になるのは、氣質もあるが自分で自分の顔を氣にしたからであつたらう。

「全く變な顔だなア――。」

わたしは自身にさへ左う思へた。一つとして美しくないがいこつ、この世ながらあらゆる點で叩きのめされた歪んだ表情、それを人前にさらけ出したくない。自分だけの世間でのみ通用する顔で通つてゆきたい。尊敬とか遠慮を交へた友

情などではわたしはわたしの顔をひと前にさらしたくなかつた。何たる貧乏たらしい季節遅れの神經病みであつたらう。――顔でとくをする世の中ではもうなからうが、顔でそんをする世の中でもあるぢやないか？――わたしはわたしの四十一になる義兄とならんだときに、そばにゐる人が言つた。

「お兄さんよりか老けておみえになりますのね。」

わたしは笑つて答へなかつた。全く老けて見えたからである。このごろ老けて見えると言はれると、輕い、極く輕い、ちくりとした不愉快を感じた。三十六になると左うかなと思はれた。若くは見てはほしくないが、四十一の人とは老けてみえては叶はない氣がした。色戀に飽きはしてゐるが色戀を慕ふ心は青年の時より倍したやうだ。慕ふ心はそのまま己れのこころで蒸れて咲く、やつれであらう。精力や肉體に少しばかりさして來たやつれであらうと思はれた。

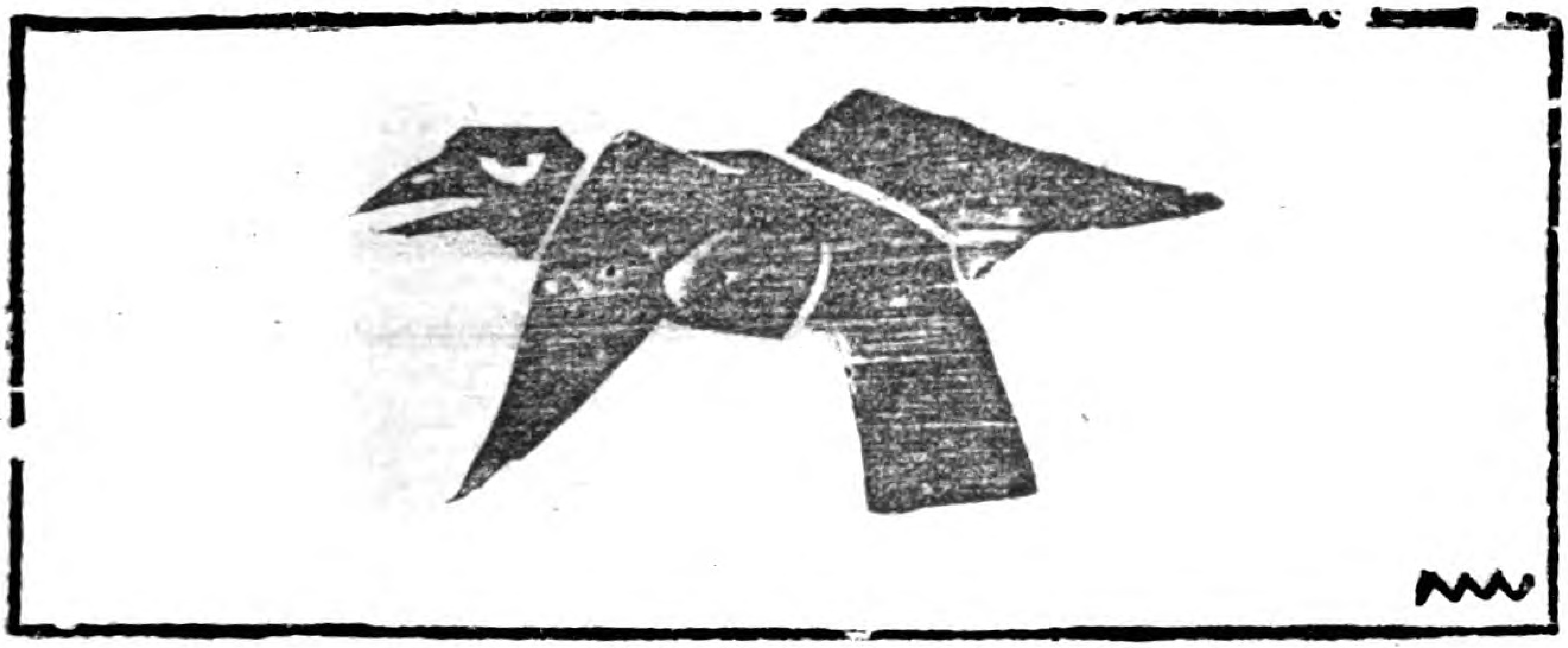
光用判事は言つた。

「變な顔をしてゐる小僧だなア。」

それは全くかれの心から發した青葉のやうに、このごろになつて漸と氣づいた。

わたしは土の塀にそふて曲らうとしたが、そして、あゝ、もし……と呼ばうとしたときに、もう老人の影は坂の上を登り切らうとして、樹の深い陰に坂が曲つてゐるので隠れやうとした。あれは山瀬さんではないかと思つた。わたしはそのあとへ、すたすた歩く自分のかげを眼にえがいたが、なほ哀憐をかんじてならなかつた。同時にあの人に會つて何かゆつくり話したいやうな氣がした。詫びなければならぬこと、聞いて貰ひたいことなどがどつさりあるやうな氣がし

た。切ない笛を吹く子供のやうに、わたしは塀をまがり、春のまひるの寂しい明りのなかを矢張りあの人のかげを趁ひながら歩いた。だが、わたしはもうあの人に會ふことはなからう。どうか達者でゐて下さい。——何も彼も人間同士では忘られてしまふことが多いからと、平凡を慕ふわたしの心は左うひとり言をして、花樹の多い裏町を片かげを落しながら歩いた。



未解決のまゝに活きる

宮地嘉六

遲くも夜の八時には上野に着く筈の列車を、保科は急に思ひを變へて土浦で下車した。そして驛からは二三丁歩いた。よささうな旅館を見つけたのでそこへ入つた。女中は彼を奥二階の八疊の一室に導いた。

外套を脱いで、座りこんでほつと落ちついて卷煙草に火をつけてゐるところへ、先刻の女中と異つたやさ型の二十五六の、色白の品のよい女が障子を開けて意外な挨拶をしたので彼は驚いてしまつた。

『まあ、先生！おつほほほ……しばらくぶりでございます。絹子でございますの……』

『おう……』保科は眼鏡いつぱい目を見張つて口をおかしく尖らせて彼女を見た。『意外だなあ……』『さつき廊下をお通りになる時、ちよつとお見うけして、たしかに先生のやうだと思つたんでございますの、矢張先生でしたわ。ほほほほ……まあよくいらつしつて下さいました、今日こちらへいらつしやいまして。』

『え、今ステーションからやつて來たばかりです。貴女が此の土地にゐるとは知らな

かつたゐ。此家へ嫁入つてをられようとは。」

此の時女中は茶器を運つて來た。絹子はそれを受けとつて自分でいれながら、

『此家は伯母の家でございますの。』

『あゝさうですか。』保科はさう云つたがまだよくのみ込めなかつた。絹子は、七八年前まだ保科が△△市の女學校の國語教師をしてゐた時分の生徒であつたが、今はすつかり見ちがへるほど人妻らしく完成されてゐるのであつた。

『まあ先生はお變りがなくてほんとに結構でございますわ。ちつともあの時分とお變りになつていらつしやらないんですもの。私達はどん／＼老けてお婆さんになつて……おつほほほ。』彼女は片手で顏を掩ひながら肩を搖つて笑つた。『もうあの頃の同級生の方は矢張皆方々へおかたつきになつて、逢ひたいと思つてもお目にかゝれませんのよ先生。』

『さうでせう。皆幸福なお母さんになつてゐるでせう。』

まことに保科には意外と云ふより外はなかつた。彼女はしばらくゐていろ／＼の談話をした。談話の間に彼女はちよい／＼現在の自分の身の上をほのめかした。それによると、保科の最初の推察とは稍々異つてゐた。彼女は此の旅館に嫁入つて來てゐるのではないのであつた。此の土浦の海軍飛行將校と結婚したが、その良人は一年ほど前に練修中に死して、今彼女は未亡人で、此の伯母の家へ手傳ひかた／＼身を寄せてゐるらしかつた。

彼女は食事の時もやつて來て女中に代つて保科にお酌をしたりお給仕をしたりした。そしてまた話し込んだ。

『うむ、それはお氣の毒だなあ、そして子供さんはないのですか。』

『はあ、ございませんの。子供でもあつたらと思ひますけれど、かうなつては矢張なかつた方がよかつたとも思ひますのよ――先生はお子さんは……』

『僕ですか、まだ子供はないです。』

『御結婚なすつたことはお聞きしましたの。』

『いやもう、その結婚が貧乏籤で弱つてゐる。』

『あら御笑談ですわ。そんなことはございませんわ先生……』

何と云ふ偶然事だと保科はその夜寝床についてから、ひとりしみ〴〵思つた。誰にも云へないやうないろ〳〵のことをも彼女について考へた。そして眠りに入つた。

翌日保科は潮來へ向つた。汽船は兩舷の水かき車を鈍く旋廻させて風寒い霞ケ浦の湖面を走つた。飾りつきの支那靴に似た此の汽船は土浦から銚子へ通ふ遊覽船であつた。夏場と異つて水郷めぐりの遊覽客らしいのは殆ど乘つてゐなかつた。海邊の商人だの、漁夫の親方だの、里行きらしい嫁さんや、鹿島へ歸る老人や、さうした近在の者ばかりであつた。保科は初めての霞ケ浦の景色を見る爲めに右舷の窓に寄つたり左舷の窓外へ出たりした。右舷の窓からは遠くの水際に海軍飛行場の灰色の格納庫が眺められた。左舷の窓外に立つと、枯れ色の眞菰にかくれた水村の各景色が眺められた。彼は畫家のやうな歡喜と詩人のやうな哀愁とを同時に感じた。水際の枯れた眞菰の中には田舟が捨てられたやうに浮いてゐた。草家が見えてゐた。太陽は雲間から現はれてはまた長い間隱れた。そして寒い潮面には時雨がひとしきり降つた。遠くの西岸の方では幾臺もの水上飛行機が飛び亂れてゐた。飛沫をあげては着水し、また水を離れては空を旋廻した。汽船の行く手には水鳥が浮き沈みして寒げに羽叩きした。廣い湖上のところ〴〵には竹垣のやうに區劃した魚とめ簀があつた。若鷺の養殖場だつた。漁夫の親方は高聲で話した。

『何ちふたかてはあ、學問と實地とは異ふだつぺえ。此の前、何ぢやはあ、縣の水産技師が、寒暖計持つて湖の溫度を

計つて、華氏四十度の温度がねえから銚子から此方にや鮪は入えつて來ねえちふたがな、俺ら達あは昔から鮪が度々とれたことを知つとるで、それ聞いておかしかつただよ。俺ら達や何ぢや、學問は根つから無えけんど生れてから此の年になるまではあ、漁師でやつて來とるでなあ、海の色見りや、此のへんにはどう云ふ魚がをるちふぐらゐなことは分るて。水產技師は寒暖計で理くつを云ふたが結構何ぢやはあ、鮪は毎年入つて來るだあね。それちふがお前さん、學問上ぢや潮の温度が四十度以下のとこへ鮪は入り込まねえか知んねえけんど、俺ら達に云はせると鮪ちふ奴あ鯱に追はれりや、から意くぢのねえ魚だで、怖えものに追はれりやはあ、どんな温度の低い海へでも逃げて來るとしたもんぢやて、銚子から此方で鮪がとれるのあそこぢやて、へつへつへつ……』

『なるほどなあ、鮪は鯱にはかなはねえもんかいな。』

『お前さん、鯨でせえ鯱にやかなはねえちふだものはあ、あの大きな鯨めが、鯱からやられるちふと、血を吹ひて逃げるちふだからなあ、鮪がかなはねえのは無理はねえさ。鯱に追はれりや温度もくそもありやせん。人間だつてお前さん、さうぢやらう。東京に住んどつて、田舍はいやぢや云ふとつても大地震に逢ふちふと、いやな田舍へ逃げて來るだ。理くつは同じだつぺえ、わははは……』

『大きにさうぢやて、わはははは……』

漁夫の親方と田舍商人と鹿島へ歸る老人とは笑つた。少し離れて座つてゐた保科も笑つた。鹿島へ歸る老人はやがて保科へ話しかけた。

『どちらまでおいでなさるかね。』

『え、潮來までです。』

『東京の方でごわすな。夏場は此へんも好うがすが、冬はこの通り、どこを見やしても水ばかりで寒うがすで。』老人は言つた。

『先刻の鮪の話は面白く感じましたが、此のへんでも鮪がとれますかね。』

『此のへんまでは、いかに鯱に追はれた鮪でも來ませんでがすよ。』

二人はまた先刻の話の續きに笑つた。

『此のへんは全くの淡水でがす。昔から潮來までは潮の干滿があるとしたもんでがす。潮來といふ地名もそれから出來たもんでがす。潮が來ると書いていたこと云ひますぢや。』

『なるほど。』

牛堀で鹿島行の汽船に乗り換へて、潮來へ着いたのは午後五時だつた。保科は船の上でも考へたことを、もう一度考へた。此の潮來と云ふところで一夜を面白く明して見たいと云ふことであつた。然し彼の懐中は度はづれの豪遊を許さなかつた。東京を立てから最早一週間になるので用意の旅費はいくらも殘つてゐなかつた。よしんばふところがたつぷりであつたとしても彼と云ふ男は思ひきり豪遊の出來る男ではなかつた。彼は遊蕩にかけては小膽であつた。その爲め旅行中は何等目ざましい歡樂を味ひ得ないで來た。彼は唯到るところの旅館でひとり寢をする爲めに、留守居の妻に情夫との逢曳の樂みを與へる爲めに旅行を續けてゐると等しかつた。

冬の潮來は水際に絃歌の賑も聞えず唯見るわびしい水郷の田舎町であつた。町はこの寒い冬の夕暮に時はづれな都會人らしい一人の客を默つて、そつけなく吸ひ込んだに過ぎなかつた。彼は一先旅館に落ちついた。枯れた眞菰の間にポプラの樹がところ〳〵土筆のやうに立つてゐる土堤の緑色の見える二階に女中は彼を案内したのであつた。彼はすつか

り此の旅館に對する感興を失つた。それは旅館の女中のそつけなく、ぶあいそであるその爲めであつた。頬骨の尖つた、三十三四の眼のぎら〳〵した女中は火と菓子を持つて來た。それからドテラを持つて來て投げるやうにそこに置いて行つた。しばらくして食膳を持つて來た。

『此の家は風呂はないかね。』

『あります。』

『風呂へ入つてから食事をしたいが。』

『ではお入りなさい。』

風呂から上つた時は膳のものは氷のやうに冷たかつた。彼は鈕を押して女中を呼んだ。女中は大きなおひつを持つて入つて來た。

『飯はあとに……酒を。』

『はい。』

彼は此の女中のぶあいそが不思議でたまらなかつた。女中は間もなく、ぬるい燗徳利を持つて來た。無論お酌をしようともしなかつた。彼の方でもしてほしくなかつた。彼はさびしく、まづい食事をひとりでした。女中は寢床を敷きに來るまでお膳を下げに來なかつた。彼は此のそつけない、ぶあいそな女中に對して始めて無頓着になつた。そして彼はから思つた。

『自分に對して特にあの女中がぶあいそである理由がないではないか。あの女は男について何か不仕合せな目を見たのであらう。その爲めに男を敵視したいのであらう。それとも俺の顏が彼女を虐げた男の顏に似てゐるとでも云ふのであ

らうか……』

彼は寢床に入ると間もなく酒の醉で眠りに入つたが二時間ほどしてハッキリ目がさめた。それからはどうしても眠れなかつた。時計を見るとまだ十二時前だつた。彼は夕方、汽船で着く時に見た町の遊女屋の二階の欄干のさまなどを思ひ浮べて、此のまゝ眠れぬ眼を無理にも閉ぢて朝まで寢るべきか、どうしようと考へた。非常に喉がかわくので、そこらを見たが茶器も鐵瓶も例の女中が持ち去つてしまつてなかつた。彼は起きて梯子段を下りたが、店にも奥にも宿の者の起きてゐる樣子は見えなかつた。誰一人彼の足音を聞えて起き出して來る者もなかつた。彼は宵に一度通つた風呂場への廊下を行つた。そこには冷たい清い水があつたからである。彼は存分そこで冷水を飲んだ。

『お目さめでございますか。』宿の嫁さんらしい女であつた。

『え。これからちよつとそのへんを歩いて來ますから。』

『ぢや、おはき物をあげませう。』若い嫁さんは女中よりはずつとあいそが好い。

『行つてらつしやいませ。』

彼はドテラを着たまゝ宿の下駄をはいて潛り戸を出て行つた。

彼は夜が明けるまで歸らなかつた。朝になつて歸つて來た。

汽船の都合があるので彼は大急ぎで朝食をすませた。潮來から午前十一時に出る汽船を待つよりも、朝の九時までに牛堀まで一里の道を歩いて行つて銚子から來る九時半發の土浦行の汽船に乘る方が早いと昨夜のあひ方に聞いたので彼はさうすることにした。彼は例のぶあいそな、佛頂面の女中に五十錢玉を一個やつて旅館を出た。冬場は客馴れた女中が皆ゐなくなつてしまふこと、今ゐる變な女中は飯炊女で實は風呂番の女房であつたが男に逃げられて氣がへんになつ

てゐることなど、彼はすつかり昨夜のあひ方から聞えたのであつた。そのあひ方は此の旅館の老主人の買ひ馴染の女の話まで彼にして聞かせた。

『わたしもあの角安の旦那には時々あげて貰ふのよあなた。あゝした旅館の主人は時々方々の家へ行つてお金を蒔かないと人望がなくなるから、月に一度ぐらいは必ず此家へも來て大散財をしますわ。』彼の昨夜のあひ方は寢床の中でさう話した。

保科は旅館を出て、小ぢんまりとした潮來の町を通りぬけて往還へ出た。平坦な砥のやうな二間巾の道路が續いてゐた。町の商店の若主人らしいのが自轉車の梶棒へ風呂敷包をゆはへ附けて保科の後方から驅けぬけて行つた。往還のところ〳〵には幸福げな田舍家があつた。まだ八時前だつたので九時半までには急がずとも牛堀へ行き着くことが出來るのであつた。空は昨日よりも晴れやかで、朝日は黄金の網を水郷全體に投げかけてゐた。保科は一種の滿足を感じながら輕い足どりで歩いて行つた。彼の顏には時々頬笑が浮いた。昨夜のあひ方のことを追憶してゐるのであつた。

『全く人なつこい女だつた……』彼は道々心にさう呟いた。

無論美人ではなかつた。づんぐりとした肥つちよで、然し色白の、丁度女の曲馬師に見るやうなからだつきの女であつた。さう云へば女は寢床の中で赤い毛糸の襟なしのジヤケツを着て、同じ赤色の都腰卷をはめて、曲馬師そつくりの風つきをしてゐた。夜中彼を一睡もさせないで話を強いた。冬場の間の地廻り客に飽きてゐた女は東京の客が珍らしかつたのであらう。女は東京者であつた。然し彼はさすがに『昨夜はよくもてた……』と云ふ愚かな自足を自分に許さなかつた。唯愛すべき白い牝豚と一夜を明かしたと云ふほどの感想に止めた。

『貴男東京の話をもつとして頂戴てば、四ツ谷は少しも大地震で燒けなかつたと聞いた時、わたし嬉しかつたわ。どん

なに嬉しかつたでせう。だつて兩親や兄弟がゐるんですもの……』

　彼女はいろ〳〵と身の上話をした。湖來はつとめが割合らくだと女は話した。唯さびしいのがつまらないと言つた。彼女は十七の時、東京の親元を無斷で逃げ出して、情男の爲めに土浦の或る旅館に女中奉公をしたこと、それからその情男が兵隊へとられることになつて別れねばならなくなつたこと、一旦飛び出した親元へは歸れないので、そのまゝ土浦に奉公してゐる間に活動の辯士にかた入して、そしてその辯士につぎ込む爲めに料理屋の酌婦をしてゐる間に借金はます〳〵殖えて、たう〳〵此の湖來へ六百圓で身賣りをして來たことなどを話した。

『活動の辯士て、そんなに女を惚れさせるものかい。』彼はからかつた。

『わたしが馬鹿だつたのよ貴男。その辯士の松之助の聲色にわたしすつかり惚れちやつたの。』

　罪のない色懺悔であつた。

『でもわたし、あきらめてゐるのよ。身から出た錆だから誰をも恨むことないんですもの。』

『まあ、それはさうだが……』

　彼女は六百圓の身のしろ金で土浦の借金を支拂ひ、つとめの衣裳をこしらへ、その殘金の百圓を東京の親元へ送つたと云ふのであつた。此の湖來へ身を賣つて來てからまだ半年たゝないと云つた。まだ年は二十二だと話した。保科は彼女が土浦の旅館に女中奉公をしてゐたと聞いて絹子のゐる旅館のことを訊ねて見たかつたが、それはやめにした。

『わたし、お願ひがあるわ。聞いて下さる。ほんと……。わたしたつた一つほしいものがあるの。貴男、東京へお歸りになつたら、わたしに伊達卷を一筋買つて送つて下さらない。』

『伊達卷……よし買つて送つてやらう。』彼は即時に承諾した。女の頓狂な賴みを面白く感じたからであつた。

『あらほんと……ねえ貴男。ほんとう……』女は客があまりに輕く無造作に承知したので念を押した。

『ほんとうに買つて送つてやらう。伊達卷て高いものかい。』

『いゝえ、三圓も出せば買へますわ。ほんとに買つて送つて下さる。あゝ嬉しい。わたしだけ伊達卷がないの——あの松坂屋で買つて頂戴、ねえ貴男。わたしそれを樂しみにしてゐますわ。いつ頃までに送つて下さる？』

『さうだなあ、なるだけ早く送ることにしよう。』彼は三圓ぐらゐの品物なら東京へ歸ると直ぐにでも買つて此の女を喜ばせたいと思つた。

『あゝ嬉しい。』女は幾度もくり返し云つた。

『ほんとうにでせう貴男。今年中に買つて送つて頂けるとわたしどんなに嬉しいでせう。どんなに……』

『よろしい。ぢや大丈夫今年中に送ることにしよう。』

女は犇と彼を抱きしめた。そして云つた。

『わたし、貴男は決して嘘を云つたり好い加減のことを云つたりなさる方でないと思ふの。でせう——あの、ほら、黑地に赤い線の三本入つたのがあるでせう。わたしあれが好きなの。忘れないで頂戴。』

『黑地に赤い線が三本だね。よし〳〵』

『あら、わたし何て馬鹿でせう。初會の貴男にこんなお願をしたりして……ほほほ。』

『それは構はないさ。』

『さう…わたし、貴男がほんとに買つて送つて下すつたら一生忘れないわ。』

『忘れたつて構はないさ。』

『いゝえ忘れない。忘れはしない。死んでもわたし。……』
『その代りに若し買つて送らなかつたら恨むのだらう。』
『いゝえ恨みはしないわ。』と女は云つたが
『あら、恨むわ。恨んでやるわ。』と云ひ直した。そして笑つた。
彼女は朝、彼を送り出す前まで伊達卷のことを云ひ續けた――昨夜はさうした一夜であつた……。
四十分ほどで彼は牛堀の汽船發着所へ行き着いた。そこには土地の若者が入營するについての見送人が多勢集つてゐた。何々助君の入營を祝すと書いた紅白の長旗が幾本も待合所の廂に立てかけられてあつた。集つてゐる者は村の青年會の連中や在鄕軍人達であつた。昨夜來の飮み續けらしく皆赤い顏をしてゐた。駄洒落を云ひ合つては高笑ひをして、朝の船場に時ならぬ景氣を作つてゐた。その中の、縮緬の兵古帶をしめた、紋附の羽織を着た、新らしい下駄をはいた、刈りたての五分刈頭をした、にきび面の青年は、親類や親兄弟の一團に圍まれて、靜かにしんみりと返事をしてゐた。青年は後方からも前からも話しかけられた。彼は一村の名譽を代表して兵營に赴く此の日の花形であつた。
やがて汽船が來て棧橋に橫つけに着いた。
青年會の幹事の一人は鐵砲を空に向けてズドンと一發おつ放した。續いて二發おつ放した。景氣をつけたのである。萬歲の聲に押されて紋附の若者は汽船に乘つた。するとまた續けさまに石垣の岸の上では鐵砲を鳴した。
汽船はそれから十分ほどして棧橋を離れた。保科も此のもの〱しい鐵砲の音に送られて兵營へ行くその若者と汽船で一緒になつた。汽船は走つた。船尾の方には紅白の長旗が繩でしばり附けられて飜つた。船中で入營の若者は見きや姉婿とさしつさゝれつ正宗の四合瓶を傾け合つた。彼は北海道の旭川の師團へ行くのであつた。

『家のことは思ひ惱くことねえだで、行つたら、しつかりやれ。』

『そだとも。』

『兵隊へとられりやこそ樺太までも行つて來られら。』

『そだあ。俺あ除隊になつて歸る時にや虎を一疋お土産に持つて來らあ、なあ兄さん。』

若者は紋附の羽織を脫ぐと、兄きはそれを疊んでやつた。

『結構なことでがすよ。兵隊へとられねえやうな男の子でもつまらねえだで、ほほほ・・家にもあんたより一つ年下の息子がをりますが、來年はどうでのがれはしめえと云ふとりますが——ほんとに御苦勞さまでがすなあ、あんた。』牛堀の次の船場から乘り來んだおかみさんは若者をいとしげに見て云つた。

『ありがたうがす。おかみさん、まあ一杯ごめんなさい。』

『わしは一向お酒はいけませんけ、どうぞもう。』

汽船はもう牛堀から餘程離れて走つてゐた。保科は此の若者が旭川の師團に入隊してからのことをいろ〳〵とひとり想像した。吹雪の亂れ飛ぶ練兵場で當分は步調の稽古で暮すであらう。毆られるであらう。船場で見送られた時の鐵砲の音を思ひ出すであらう。何が爲に祝賀されてこんな辛い苦しいところへ來たかを考へるであらう。虎を土産に持ち歸ると兄や姉婿に誓つた自分の空想を思ひ浮べるであらう。消燈喇叭の哀調に寢ながら故鄕のことを思ひ續けるであらう。朝は暗い起床時前に起きて寒い便所の電燈の下で惡臭をものともせず上官の靴を幾足もごし〳〵磨くであらう。磨き方が足りないと叱られるであらう。

然しさうした勞苦に耐へて二年の後に歸鄕してからも此の若者の生涯はまだ澤山殘つてゐる・・。と保科は思つたり

した。

二時半に汽船は土浦へ着いた。豫定よりも少し早く着いた。例の絹子のゐる旅館にもう一泊したかつたが、日暮里まで買つてある汽車の切符の通用期間が許さなかつた。その切符を無効にしてまでも一泊するには彼の氣持はあまりに消極的で突然としてゐた。唯も一度その旅館に立ち寄つて夕食でもして、そして今夜中に東京に歸ることに考へを定めた。

『まあ湖水はお寒かつたでせう先生。』絹子は云つた。

『え、寒かつた。』

『角安へお泊りになりまして。』

『え、角安へ泊りました。あそこは一軒しか宿屋はないやうですね。』

『はあ、一軒しかございませんさうですの。あそこはお女郎屋がございますから、いきなり宿屋へ泊るお客は少いさうでございますわ。』

『あ、なるほど。』

『お女郎達のあやめ踊は御覧にならなかつたのですか先生。ほほほ。』

『え、ちつともそんなものは。』

『あら、どうですか、分りませんわ。ほほほ。』

絹子は前日よりも輕い調子で保科に應對する風があつた。今は飛行將校の奥さんではなく旅館の主婦代理と云ふ格で人馴れた態度を見せた。それが保科を一層くつろがせた。彼は風呂からあがつて食事をする間ぢゆう絹子と輕い話しを

した。

『私、今度東京へまゐりましたら先生のお宅をお訪ねしますわ。ねえ先生。』

『え、是非どうか。待つてゐますよ。』

『私、こんな田舍にゐるよりは東京へ出て暮したうございますわ。つく〲さう思ひますの。東京で職業婦人になつても好いと思ひますの。』

『そんなことを貴女などは考へなくても……』と保科は云つた『どうせ再婚しなきやならないでせう。まだ若いんだもの・・・』

無論彼女の周圍は彼女をいつまでも若後家で置くわけもないと彼は思つた。かうした旅館などにゐれば、彼女を希望する相當の男がいくらも現はれるであらう。希望者の中には實業家もあるであらう。少壯な飛行將校もあるであらう。と彼は思つた。

『東京へ出て職業婦人になるなんて僕は不贊成だなあ。立派な再婚が出來るんだもの貴女などは。』

『でもねえ先生、再婚するにいたしましても、私もう飛行機乘は御免ですの。もう〱こり〱いたしましたわ。前の良人と一緒にをります時分は、ほんとに一日だつて安心して家にゐたことはございませんでしたのよ。』

『では飛行將校でなしに他の適當な人と再婚なさいよ。』保科は笑ひながら云つた。

『ですけれど……』彼女は皆まで云はなかつた。

保科は察した。飛行將校との再婚問題でもあるのかなと思つた。

『なるほど、飛行士官の奥さんも骨の折れることでせうなあ。心配は常に絶えないだらうなあ。』保科は彼女の言葉を

迫はないことにしてうなづいて見せた。

『ほんとうでございますよ先生。それに、こんな身になりますと、土浦なんて飛行場の近いところにゐたくございませんの。士官達を見るたんびに前の良人を思ひ出されなければなりませんの。』彼女は指先で藤色の襟をつくろひながら首をかしげて云ふのであつた。そして急にまた調子を變へて『あら、私、飛んだ愚痴を先生に申し上げてすみませんわ。おつほほほ。御免あそばせ。』

保科は八時半の上野行の列車に乘つた。そのまゝ絹子と別れて旅館を出るのが心惜しくも思へるほどだつた。

『あゝは云つてゐても彼女は若い飛行士官などが好きなのかも知れぬ。思ひ思はれてゐる身なのかも知れぬ。あのくらいの美しい女を默つて見のがして置くわけがない。……』保科は列車の中でさう思つた。さう思ふと何故か彼はさびしかつた。

彼は列車が東京に近づくに從つて留守居の妻のことをのみ考へるやうになつた。彼は家を出てから九日目に今夜は家へ歸り着くことになるのであつた。此の九日間に於てどれほど目に見へぬ汚辱を蒙つてゐるか知れないと思ふと冷笑と侮蔑に値する意くじのない一人の男を見た。それは彼自身であつた。それは決して彼の思ひ過ぎではなかつた。此の度の旅行をするについては留守居の妻の行爲を前以て承知し、それについての從容とした決心が彼にないではなかつた。その爲めに彼は出來るだけ此の旅行を長びかせて歸宅を急がなかつた。然し今夜中に自宅に歸り着くと云ふ間近な歸途に於て今更のやうに彼はいたましい自己に歸つたのである。彼は同じ車中に一人の堂々たる紳士を見た。その紳士は彼の直ぐ筋向へに腰をかけて煙草を吸つてゐた。金縁の眼鏡をかけて、毛皮の首卷をしてゐた。彼はいつの間にかその紳士を妻の情夫と假定した。妻の前夫と假定した。そして其の紳士と自分の妻とが抱擁してゐる光景を彼は想像した。そ

の紳士の堂々たる身體に妻が小さく抱きしめられてゐる光景を想像した。妻がその紳士の胸に顔をあてゝ泣いてゐる光景を想像した。そしてその想像は彼を堪へがたくした。

彼はまた自分の不在中の自分の家の中のありさまをはつきり目に浮べた。書齋のありさまを、茶の間を、玄關を——彼の目に浮ぶ自宅は、彼の不在中、晝も往々空家のやうに窓も椽先の雨戸も閉められてあるのであつた。家の裡は暗かつた。妻の姿はなかつた——。

彼が妻の不貞操をどうしてかくまでも想像し得て、しかもそれを默認同樣にして一人で旅行などをしてゐるかと云ふことは一つの奇であつた。然し彼自身に於ては、それは或る結末に到るまでの過程であつた。或る結末とは勿論それは離別を意味してゐた。彼はその結末を穩やかに來らしめたいのであつた。

彼が妻の貞操を信じられなくなつたのは夏頃からであつた。匿名でしば〳〵彼に忠告状を送る者があつたからである。彼は最初その匿名の手紙を直ぐには信じなかつた。信じたくなかつた。信ずることは苦しく不愉快だつたからだ。むしろ匿名で他人の平和を傷けるその手紙の主に憎惡を覺えた。第一の手紙にはかう書いてあつた『突然ながら貴男の爲めに書面を以て御忠告いたします。既に御承知かは知りませぬが、貴男の夫人園子さまは先夫安岡某と今春以來しばしば密會され、二人は再び以前の如く同棲することを堅く誓はれてゐるのであります。その爲めに安岡某は二度目の妻女をわざ〳〵離縁されて今はその機の到るを待ちをらるる模樣であります。云々』彼の妻には前夫があつた。

彼は最初その書面を見て男の筆蹟と信じた。そしていろ〳〵の人物を想像したがどうしても見當がつかなかつた。彼はその手紙を妻にも見せた。妻は笑つた。そして次にはぷん〳〵怒つて見せた。

『あなたはそれを信じてゐらつしやい。』

『信じても好いと思ふ俺は……』

『では信じてゐらつしやい。』

『俺はお前が前の亭主と一緒になるのだつたら何時でも認容するよ。然しさうでなく他に愛人をこしらへて不義をされるのは俺はいやだがなあ。』彼は笑ひながら云つた。

それから間もなく同じ筆蹟で第二の手紙が來た。彼はそれによつて妻に疑ひを深めざるを得なくなつた。でその手紙は妻にも見せなかつた。それには逢曳の場所、彼女が前夫との離別後初めて二年ぶりに出逢つた場所などまで書いてあつた。彼は一歩判斷を進めた。と云ふのは、筆蹟は男子らしいが、文章のどこやらに女性らしい感情が、嫉妬に堪へられない女性の失つた感情が閃めいてゐることを感受し得たからである。彼はこの手紙の主が安岡某の二度目の妻であることを想察し得た。此の想察は動かさるところだと彼自身でも信じた。さうだとすると此の忠告の手紙は單に保科の平和な生活を傷ける爲めの惡戯でないことは確かであつた。尠くも根據があると彼は思つた。果して此の手紙の主が安岡某に棄てられた後妻だとすれば彼女が安岡の秘密を最も有效にあばからうと試みることはあり得べきことであつた。彼女は棄てられた安岡に對して復讐を試みると共に、安岡の後妻としての自分の地位を覆へす爲めに再び前夫との同棲をもくろんでゐる保科の妻に對して腹いせをせずにゐられない爲めにかうした保科への忠告の手紙と云ふ形式に托したのではなからうか。然しそれは安岡某の後妻が果して離縁されたのかどうかを確めないうちは保科にしても斷定しかねた。

保科の妻は保科と結婚する以前に安岡某と六年間つれ添うてゐた。前夫との間には二人の子まであつた。彼女の前夫安岡は或る會社の外交部長を勤めてゐた。その間に管谷孝子と云ふ同じ會社に勤めてゐるタイピストと關係した。その爲めに安岡はその會社をやめた。そして六年間つれ添うて來た妻を棄てゝそのタイピストを後妻に据えた――保科は妻

と妻の前夫とについては唯それだけを知つてゐた。保科は再度の忠告狀によつて妻を疑ふやうになつてからは無論妻のいろ／＼の點に注意をした。或る夜、妻は寄席へ行きたいと云つた。無論一緒に行きたいと云ふ意味だつた。保科は同意した。彼等が居住してゐる駒込林町に近いその場ちがひの寄席に圓右がかゝるやうなことは珍らしかつたからである。大地震後でなければあり得ないことだつた。彼等夫婦は芝居よりも活動寫眞よりも落語が好きだつた。彼女はその前日から保科を促して寄席行きを迫つたのであつた。そして彼女はその夜はめづらしく髷に結つたりしてゐた。彼女はいそ／＼としてゐた。二人は夕食をすませると間もなく出かけた。神明町の寄席までは三十分とはかゝらなかつた。まだ七時を過ぎたばかりであつたが、階下の座席は七分通りふさがつてゐた。

『二階がすいてるわ貴男、二階にしませうよ』彼女は云つた。二人は二階の正面に座をとつた。三十分とはたゝない間に二人の座席の前後左右はふさがつた。彼女の直ぐ左脇には年頃三十七八の、口元の髯はきれいに剃つた、一見にがみのある面長の、りゆうとした和服姿の會社員らしい眼鏡の男がいつの間にか來て座つてゐた。保科は始めてその男に氣づいた時、ふと次のやうな豫感を胸に受けた。

『妻の前夫の安岡と云ふのはこんなやうな男ではないだらうか……』

彼は自分でも馬鹿らしいと思ふほどそれを感じ續けてゐる自分を氣づいた。此の男が若しさうだつたら……と彼は考へたりした。さう思ふて注意すると妻の擧動までが異つて見えた。彼女があまり自分に話しかけないそのことまでが變に思へた。彼が話しかけても氣を入れて彼女は返辭をしないやうな氣が彼にはした。そのうちに演者は三四人變つた。五人目に圓右が出た。圓右の話しは短かつた。あとまだ二三人あつた。保科は圓右を聞いたから出ようと云ひ出した。

『おしまひまでゐたつて好いぢやありませんか。折角來たんですもの……』彼女は不平さうに云つた。で二人はとうと

うはねまでゐることにした。はねて、出口で下足をとる段になつてから彼女は小用へ行きたいと云ひ出した。保科はその時はもう先刻妻の左脇に座つてゐた男を見失つてゐた。出口はかなりにこんだ。彼女は十分以上もたつてから出口へやつて來た。

『隨分こんでゐたの。』彼女はちよつと云ひわけした。

二人は寄席を出て通りへ出た。

『何かそこらへ入つて喰べようか。』

『わたし澤山。』彼女は云つた。

保科は通りへ出てから先刻の男によく似た男が町の向ふ側に立つてゐるのを今一度見た——。

彼はその夜の、その男の顏を時々その後も思ひ出した。はつきりと覺えてゐた。

『若しあの夜、妻の左脇に座つてゐた男が安岡某だとすれば……』と保科は思つた。

『あの男はひとりであつた。つれも何もなかつたやうだ……』と彼は思つた『あの前日に安岡某から妻に手紙が來たとすると……何日の夜、神明町の寄席で落ち合ひたい……お互に顏は知らないんだからお前は良人と一緒でも好い……唯二人が逢はれさへすれば好いではないか……俺は何喰はぬ風でお前の横に座る……そのうちにちよつとぐらゐお前と言葉を交す折があるだらう——さうした手紙が安岡から來たとしたならば……』と彼は思つて見た。

『妻はそれに對して返事をやるであらう……あなたは好いことを考へたのねえ……わたし、とても今一人では出られないのよ……保科と一緒になら出られますわ……あなたさへよければ……あなたと隣りあつて座れば好いわ……分らないわ……保科がどんな男か見せてあげますわ……小川に行くやうにして廊下でちよつとぐらゐは話しが出來るわ——それ

で夜の七時までに寄席で逢ふと云ふ約束が出來る……それはあり得べきことのやうだ……俺はさう云ふ事柄を曾て聞いたことがある……』と彼は思ふのであつた。

保科は旅行中も、その夜の、その男の顔をよく目に浮べた。さすがに彼は妻が彼の不在中に大膽にも前夫の安岡を家へ引き入れるやうなことはしないであらうと思つた。それは分らない。とも思つた。

『保科はかう云ふのよ。お前が前の亭主ともとのやうになるのなら俺は認容するのだらう。つてさう云ふのよ。全く他の愛人を持つたと云ふよりも俺には了解がしよい。つてさう云ふの……』

保科は自分で妻に云つたことを思ひ出して、妻が前夫の安岡にそのまゝ云つてゐるありさまをも旅行中には想像した。

汽車は取手の一つ手前で故障を起したりした。その爲め日暮里驛に着いたのは十一時過ぎだつた。彼は自分を落ちつけようと努めた。そのくせ自分の家へ近づくに隨つて或る焦燥を覺えた。それは旅行から幾日目かに歸宅する彼にはなつかしさも半ばあつたからであつた。彼は日暮里驛で列車を下りてから駒込林町の空をのみ仰いでは急いだ。町の家々は大部分戸をしめてゐた。そば屋と風呂屋の前だけが明るかつた。彼は妻がどんな樣子で自分を迎へるか、それを見たかつた。

『寢てるだらう。無論寢てる。もう歸る頃だと豫期はしてゐるだらう。俺は鋭感を以て不在中のすべてを直覺しなければならぬ。……』

冬の星は彼に對しては此の場合無數の謎の閃きであつた。月はなかつた。暗い町の夜更は彼に目かくしをあて、夜の暗を利用し得る者の爲めにのみ更けてゐるかのやうに彼を二度ほど小石につまづかせた。彼は小さな坂を上つて行つた。彼はやつと自分の家の前に行き着いた。門口の電燈がさびしく標札を照してゐた。門の潜り戸は彼が引くと滑りな

がらも開いた。しまつてゐない……と彼は思つた。門を入ると、そこに夕刊新聞が宵に投げ込まれたまゝ斜めに落ちてゐた。夕刊も拾つてない……と彼はまたさう思つた。

『おい歸つた。おい〳〵……』彼はゆつくりと云つた。

家の内からそれに答へる聲がした。その聲は非常に歸宅した主人に對して感動のない聲であつた。二つの聲が聞へた

彼は首を傾けた。やがて玄關に足音が近づいて來た。戸は開けられた。

『お歸んなすつたの。』さう云つて彼を迎へたのは老母であつた。妻の母であつた。

『お母さんですか。』彼は意外だつた。

どうしたわけか妻の母親が來て泊つてゐたのであつた。めつたに來ることのない老母が來て泊つてゐた

『園が工合が惡いと云つてよこしたもんですから、わたしが三四日前から來てるんですよ。』妻の母親は云つた

『工合が……さうですか。風でもひいたのですか知ら。』保科は訊ねながら靴をぬいた。此の時はもうすつかり彼は落ついてゐた。ほつとしてゐた。座敷へ入つた。妻はそこに寢てゐた。半分ほど夜着の襟から顏を見せて眼を開いてゐた。

『お歸んなさいまし。』

『どうした。工合が惡い。』

『え、あなたがお立ちになつた翌日から寒けがしだしたの。』

『醫者には見せたかね。』

『いゝえまだですの。』

『見て貰へば好いのに。』

『熱がなか〳〵ひかないんですよ。あんたがもう歸んなさるだらうと云つてゐたのですよ。』老母は云つた。
『どこまで行つていらしたの。』妻は云つた。
『宇都の宮から水戸へ廻つて歸つて來た。』
『御飯はどう。』
『少しおなかがすいてるやうだ。』
保科はそんな會話を寢てゐる妻と交へながら旅服を脱いでドテラに着かへた。老母は茶の間で火をおこしてゐた。
『るす中に手紙は來なかつたかね。』
『机の上にのせてありますわ。』
『誰か來なかつたかね。』
『いゝえ。』
彼は妻に對して旅行の歸途何ごとも考へなかつた人のやうであつた。彼がさうである如く、彼の妻も、良人の旅行中に何の疚ましいこともないかのやうであつた。彼は不在中に來てゐる四五通の手紙を開封した。その中には田舍の中學校の校長をしてゐる昔の友達からの手紙もあつた。帝都の復興のありさまを見學の爲めに新春早々職員を率いて上京するから、一週間ぐらいで大體の町々を見るにはどう云ふ順序にしたらよいか、あらかじめ日程を作りたいからお手數ながらそれを知らせて貰ひたいと云ふ手紙であつた。
『あゝやつてくるのか、うるさいことだ。然し此方は謂はゞ罹災民だから、押しかけられても簡單にすませば好いだらう。』彼は思つた。

次には質屋からの流期の通知であつた。一金二十圓也、半圓打指環二個、同十七圓也、斜子紋附羽織一枚、同二圓五十錢也、夏羽織、同五圓也、アルパカ上衣一枚、右本年限り流期に相成候間十二月末日までに利子差入被下度候、伊勢屋――その他何々會の通知書、忘年宴會の通知書等であつた。

彼はやがて茶の間で老母がこしらへてくれたお膳に向つて酒を少々のんでから茶漬をかき込んだ。そして寢た。

旅行から歸つて一週間目に潮來の遊女から手紙が來た。封筒の表書の男文字で書かれた男名前は誰かに頼んで書かせたものと思はれた。差出人の姓名は萩原芳太郎としてあつた。中はまずい字の長文であつた。

『拜啓、あなた樣には無事御歸京なさいましたこと〻存じまゐらせ候――』と云ふ前書きであつた。そして例の伊達卷のことが書いてあつた『お別れ申して以來あなた樣のことばかりあけくれ考へをり候――あなた樣も男でゐらつしやるからには、一旦約束なされたことはお間違へなさらぬこと〻存じ候。どうぞ〳〵年内に伊達卷をお送り下されますやうくれ〴〵もお願申しまゐらせ候――』と書いてあつた。

『あ〻さうだつた。伊達卷を買つて送る約束をしたつけ……』と彼は思つた。

然し年末に際して彼の手もとはそれほどらくではなかつた。云ふまでもなく旅行が祟つたのであつた。

『まあ好い。買つて送つてやらう。送つてやれば喜ぶんだ……』

彼はわざ〳〵松坂屋まで行つた。年末のことで、松坂屋の入口は人で埋まつてゐた。然し彼は、女が是非松坂屋で買つて送つてくれと云つたことを忘れなかつた。で彼は澤山の人にもまれ押されながら、やう〳〵のことに松坂屋の陳列場へ入つた。女の注文は黒地に赤い線の三筋入つた博多の伊達卷であつたが、なか〳〵その赤い三本筋が見あたらなかつた。やつとそれに近い柄を選り出した。四圓三十錢と云ふ正札がついてゐた。彼は早速それを箱入にして貰つた。そ

して發送部に賴んだ。

『あゝこれですんだ……』

彼は女がその贈物を受取つて喜ぶさまを、ちよつと想像した。挽臼のやうな胴體にその伊達卷をしめて、嬉しがつてゐるさまを目に浮べた。彼の妻はもとよりそんなことは一切知らなかつた。

五日目に女からお禮の手紙が來た。

『みごとな伊達卷を早速お送り下さいまして、私は嬉しくて嬉しくて夜も眠れませんでした。朋輩たちも皆で悅んでくれました。ほんとに我がまゝを申し上げてまことに／＼今更お恥かしく存じます。ありがたく頂戴いたしました。どうかまた是非そのうちにいらして下さいませ。お待ちいたしてをります。おやさしき私の保科さま。』

保科はその遊女の手紙をも粗末にするに忍びなかつたので、妻に見つけられないところにしまつて置いた。

土浦の旅館の絹子からも、それと相前後して手紙が來た。來春早々蟲齒を拔く爲めに東京へ出て來ると書いてあつた。その際、お目にかゝつていろ／＼承りたいことがあるなどゝも書いてあつた。そして終りにかう書いてあつた。

『先生、私は政子と改名したいと存じますの。如何でございませう。絹子と云ふ名は姓名學上からあまりよくないさうでございますの。さう云はれゝば何だかさうも思はれますの。良人に先だゝれたり、身體が弱かつたりして、少しもよいことがございませんですもの。またこんな愚痴を申し上げていけませんわ。でもお笑ひ下すつてもようございますわ。不幸を重ねるといろ／＼の迷信を持ちたがるものですわ先生。政子と云ふ名は如何でございませう。おいやでございますか、どうかそれについて何とかおつしやつて下さいませ――』などゝ書いてあつた。保科はそれを讀むと、彼女の女らしい迷ひに微笑した。さうした相談を持ちかけられることがまた嬉しくもあつた。

『あれで矢張いろ〳〵惱んでゐるのかな……』保科は同情した。

彼は絹子が來春早々東京へやつて來ると云ふことに少なからず興味を感じた。そして早速それに對して返事をやつた。

『政子さんと云ふ名も決して惡くはないと思ひます。が絹子さんと云ふ名の方が私にはなつかしく思ひ出が深いのです。然し姓名學上からいけないと云ふことならば致し方がありません――』と書いてやつた。

『彼女と今度逢つたら……』保科はそんなことを考へた。

保科の妻は旅先で良人がどんな婦人に逢つて來たか、どんな遊女と一夜を明かしたかは無論知る筈はなかつた。それは保科以外に知るものはなかつた。それと共に、良人の旅行中、彼女がどんなことを考へ、どんなことをしたかは彼女以外に知るものはなかつたのであつた。彼女は良人の旅行中に何ごとも疚しい行爲がなかつたかのやうに見せてはゐたが、全く何ごともなかつたわけではなかつた。良人の保科が旅行に立つた翌々日に前の亭主と逢つたりした。彼女は決して前夫を家に呼び込んだりはしなかつた。いつも逢曳するに定めてある場所で逢つた。逢曳する場所と云ふのは或る小料理であつた。彼女と前の亭主との逢曳は春から始まつてゐた。それは保科への匿名の忠告狀にある通りであつた。此の二人の關係の成り立ちをよく知つてゐる者は、或る夫婦者より他には恐らくないと云つてもよいのであつた。或る夫婦者と云ふのは麻布の三ノ橋の洗濯屋夫婦であつた。保科の妻は前の亭主との間に出來た二人目の娘の子をその洗濯屋に預けて保科に再婚してゐるのであつた。此の洗濯屋の女房はもと〳〵保科の妻が前の亭主と一緒だつた頃に娘の子の乳母として二年間雇はれてゐた女であつた。一度亭主に死に別れをした上に赤ん坊までも失つた爲めに乳母奉公をしたのであつた。年はまだ三十二三であつた。そして此の乳母は今、働きものと云はれる丈夫な洗濯職人の女房になつて

麻布の三ノ橋に店を構へて、かつちりとした生活をしてゐるのであつた。

保科の妻は前の良人安岡と別れる時、四才になる長男を良人の方に置いて、二人目の二つになる娘の子を自分が引きとつたのである。そして彼女はその娘の子と共に四ツ谷の實家で一年ほど暮した。そのうちに保科との縁談が持ちあがつた。彼女も實家にいつまでもゐるわけにはゆかなんだ。實家は兄夫婦が主權者であつたので、いろ〳〵の點で氣づまりだつた。彼女の娘の子と同じ年合の兄の娘の子がゐたりした。そこで彼女は保科との再婚話しが起ると共に乘り氣になつた。邪魔な娘の子は三ノ橋のもとの乳母であるその洗濯屋の女房が預りたいと云つてくれた。それは娘の子の爲めにはまたとない仕合せなことであつた。彼女は娘の子を洗濯屋に預けた。そして保科と再婚した。娘の子の養育費は、年、四期に分けて前の良人の安岡から三ケ月毎に四十圓宛彼女の實家の方へ來ることになつてゐた。で彼女は保科との再婚後は、その養育費をそつくり洗濯屋夫婦へ實家から渡して貰つてゐた。娘の子については自分の手もとに置くよりも彼女は安心してゐられた。乳母は娘の子が生れて直ぐの赤ん坊の時分から我が愛兒同樣に乳をやつて育てゝくれた女であつたからである。乳母には今だに子供がなかつた。

彼女が一旦別れた前夫の安岡と、どうしたはずみで再び接近するやうになつたかは、洗濯屋夫婦でもよほど後に知つたくらゐであつた。彼女は保科と再婚してから、時々娘の子のことを思ひ出しては戀しくなつた。それでも最初の半年は我慢した。然しとう〳〵たまらなくなつてその方へ足が向いた。或る日、四ツ谷の實家へ行つた歸りに彼女は三ノ橋へ廻つて洗濯屋に立ち寄つた。彼女は幾月ぶりかで可愛い我が子の顏を見た。彼女は、今は此の子の父親でない人と一緒にゐると云ふ心で娘の子を見た。娘の子はもう四才であつた。

「まあ奥さんよく……」

『ほんとに御無沙汰しましたわ。つい今日は四ッ谷まで來たもんですから。』

『さあまあ、おあがり下さいませな。』夫婦は云つた。

洗濯屋の主人は忙しさうに店でアイロンをかけてゐた

『いゝえさうしてはゐられませんの。直ぐおいとましますわ。』

『まあ、そんなにおつしやらずに。』洗濯屋夫婦はしきりにひきとめた。

娘の子は母親を見ると妙に、はにかんで、乳母の背中にかくれたりした。彼女はそれを見ると僅かにさびしい心になつた。が、洗濯屋夫婦に對しては、娘の子がいきなり自分に飛びついてくれるよりもその場の義理が立つのであつた。彼女は土產の菓子を出してやつた。そしてちよつとだけ、久しぶりに娘を抱いた。娘の子ははにかみながらも、母親の胸に抱かれると、馴らされた小鳥のやうにすなほであつた。

彼女はその抱き心地を家に歸りつくまで身體中に感じてゐた。その夜は娘の子のことを夢に見た。保科には無論何も云はなんだ。それ以來彼女は時々、何かと用をこしらへては町へ出たついでに洗濯屋を訪ねるやうになつた。月に一回ぐらゐは必らず行つて娘の子に逢つた。四月の或る日のこと、彼女がその洗濯屋を訪れると、女房はいつものやうに狹い茶の間に彼女を上らせて、そしていろ〳〵の話の後にかう云つた。

『それはさうと奥さん。此の間ひよづくり前の旦那さまがお見えになりましたのよ。矢張かうなつても此の子のことが心にかゝると見えますよ。しばらく話してお歸りになりました。』

『あら、さう……』彼女はさすがに、僅かばかり聲をはずませて云つた。

『まあねえ奥さん。』と女房は彼女に聞かせても惡くはないと思つたまゝを云つた『何だか旦那さまのお口ぶりでは今の

奥さんとの間がそれほどでないやうですのよ。第一ご隠居さまがお氣に入らないやうな風ですわ。旦那さまも今となつては後悔してゐらつしやるのかも知れない。つてたくともさう話したんですの。おつほほほほ。』

『そんなことはないでせう……』彼女はそれを事もなげに打消すやうに云つた『だつて今更後悔するもしないもないぢやないの乳母や。あの人のことだから。また好いのを捜せば好いわ。』

『おつほつほほ……』と女房は笑つて『まあ奥さんさうですわねえ。旦那さまだつて、もうあまりお迷ひにならないがようございますわねえ。でも旦那さまのお話しの様子ではそのタイピストと云ふ方は大へんな人らしいですのよ。』

彼女はそれを皆まで聞くまいとした。聞く用もないと云ふ風をした。乳母の話しを本氣で信じまいと思つた。然し彼女は多少豫期してゐたことを聞かされたやうに或る滿足を覺えずにゐられなかつた。そして、その滿足感は彼女をしてから乳母やに對して云はしめた。

『わたしは今どうやら仕合せよ乳母や。仕合せに行かれさうなの。』

『まあ結構でございますわ奥さん。』

『唯子供が丈夫で大きくなつてさへくれゝば何にも思ふことはないわ。子供は此の家で大きくして貰へるし、今のところ大して氣苦勞はないのよ。』彼女は云つた。彼女は乳母やに對してさう云つたばかりでなく、目先に浮ぶ前夫安岡の映像に對しても云つたのであつた。その日はいつになく長話して歸つた。

彼女は前夫の安岡が三ノ橋の洗濯屋へ來たと聞いてからは娘の子に逢ひに行くのが妙に不安になつた。萬一安岡と洗濯屋で出くはすやうなことがあつてはと思つた。そしては思ひ止まつた。それでも彼女は一月に一度か二度娘の子の顔を見ずにはゐられないのであつた。娘はだんだん可愛らしくなつてゆくばかりであつたから。そして娘の方でも彼女の

來るのを待つてゐるやうに彼女には思はれたから。で彼女は此の前逢ひに行つてから二十日ほど經つてまた洗濯屋を訪れた。彼女は此の日は長くゐないつもりであつた。それでも三十分ほど茶の間で乳母やと話した。そして歸らうとしてゐるところへ誰か店に來た。乳母やは硝子障子からその方を見た。ちよつと慌てた顏色をした。

『奧さん……』女房は小聲で云つて園子の袖を僅かに引いた。

『どうしたの……』園子は不安な目で乳母やを見た。そして店に入つて來た人を見た。彼女は狼狽した。

『構ひませんよ奧さん。さうしてゐらつしやいよ。』女房は小聲で云つた。

その洋服を着た三十七八の紳士は前夫の安岡であつた。先方も園子を目早く見た。店とは硝子障子一重隔つた、直ぐに外から見えるその茶の間に横向に座つて女房と話してゐる園子の姿が安岡に見えないわけはなかつた。安岡は店の土間に立ちながら主人と挨拶を交した。それから娘の子に買つて來た箱入の人形をそこに置いた。

『今日は急ぎますから、これで失禮します。』

『まあ、およろしいぢやありませんか旦那。』主人は云つた。

『ありがたう。いやさよなら。』洋服の客は直ぐに行つてしまつた。

『あ、惡かつたわ今日來たのは。ほんとに惡かつた。』園子はさう思つた。

『まあわたし、どうしようか知らと思つたのよ。』

『でもよかつた。奧さん、あなたが來ていらつしやるとはお氣がつかなかつたやうですわ。』

『さうなら好いけれど。』

『まあ、思ひかけない妙な日。おつほほほ』女房は笑つた。

園子は先刻歸らうとして浮かせた腰を再び落ちつかせた。然し彼女は平靜を失つてゐた。

『あの人はわたしが來てゐることを全く氣づかなかつたであらうか……』彼女はそれを氣にした。然し若し見られたとして彼女はさう恥づるには及ばなかつた。とも思つて見た。此の日の結ひたての丸髷を、二年前にくらべて少しも落ちてはゐないと思ふ自分の今の容姿を、ちよつとぐらゐ前の亭主に見られることはその偶然を恨むほどのことでもないのであつた。

彼女は電燈がついたのに驚いて洗濯屋を辭して歸りを急いだ。彼女が去つたあとで洗濯屋夫婦は次のやうなことを話した。

『あれで、旦那の方ぢや少し未練が起りかけてるかも知れないぜおい。』

『さうねえ。此の節よくやつて來るやうになつたわねえ旦那も。だつて……』

『分るものかよ。唄にさへある。矢張前の女房が好いてことがある。』亭主は店でアイロンをかけながら云つた。

『おつほつほつ……ぢやあんたもさうなの。』

『きまつてるよ。だが今更墓場から堀り出して來るわけにも行かねえや。』

園子は洗濯屋を辭して三の橋から直ぐ電車に乘つた。彼女は芝園橋で乘換へねばならなかつた。電車は夕方のことで少しこんでゐた。芝園橋へ來た。彼女はその電車を降りた。彼女はそこの停留場に立つた。

『園子……』

彼女は誰か自分の名を呼んだやうな氣がしたので、ふと振り向いた。そして身顫ひした。前夫の安岡がそこに立つてゐたからであつた。前夫は彼女が洗濯屋から出て來るのを待つてゐたのである。然し彼女は落ちついて見せねばならな

かつた。

『しばらくでございます。』彼女はちよつと會釋した。

『今歸るのかい――洗濯屋ぢや京子を可愛がつてゐるやうだから俺も安心してゐるよ。光雄も變りはないから安心してゐるが好い。ます〳〵やんちやつ子になるばかりだ。』

『さうですか。光雄は男の子ですからそれでもようございますわ』彼女はさう云ひながらも早く此所をきりぬけねばならぬと思つた。丁度そこへ巣鴨行の電車が來た。然し滿員で鈴なりに人が飛びついてゐた。

『こんでゐるから乘れまい。そのへんまで一緒に歩いて見るのはいやかね。』

『わたくし急ぎますから。此所で御免蒙りますわ。』

次の電車が間近に走つて來た。然しそれも滿員で、彼女には乘れさうもなかつた。彼女は義理にも彼と一緒に歩くなどゝ云ふことは出來なかつた。

『光雄がお前に逢ひたがつてゐるから、一度そのうちに逢つてやつてくれゝば好いがな。』

『ですけれど……今のわたしにそんなことをおつしやるのは貴男の方が少しお間違ひだと思ひますわ。』彼女は冷やかに頬笑んで見せた『光雄がわたしに逢ひたいと云つたつて仕方がないぢやございませんか。』

『さう云へばさうだが……』

『かうして途中でお逢ひした時は、唯御挨拶ぐらゐでお別れすれば好いぢやございませんの。世間體がございますからねえ。』彼女はさう云つてゐるうちに自分の方が少し云ひ過ぎではないかと思つたので口をつぐんだ。

『それはお前の云ふのがほんとさ。だが子供等には罪はないからのう。』

彼女はそれを聞くと涙ぐんでしまつた。であたりの人の手前もあるので俯向いた。然し日のくれあひだつたので、彼女の涙にうるんだ目はあたりの人々には氣づかれずにすんだ。彼女はだん〳〵停留場に集つて來る大勢の人の中で前夫と話しを交へるわけには行かなくなつたのでよぎなくそこを避ける爲めにやをら歩き出した。

『一緒に少し歩いてくれるか、芝公園のあたりまで……え…』

『いゝえ、わたくし貴男と歩くなんてことが出來るものですか。』彼女はさう云ひながらも歩いてゐた。

『まあ好い。お前も光雄のことは聞きたいだらうから……のう。』

『それは聞きたくもございますけれど……現在の私の境遇が許しません。』

二人はもう公園近くまで來てしまつてゐた。彼女は前夫とすれ〳〵に並んで歩いてゐたのに氣づいて急いで間隔を作つた。

『まあ好い。すべては俺が惡いんだから。』

『まあ、あなたは、そんなあまいことをおつしやつてわたしを……まだわたしを苦しめ足りないのでせうか。』彼女はきつとなつて安岡の横顏を見ながら云つた。

もう公園の附近へ來た時は暗くなつてゐた。

『あゝこんなに來てしまつた。わたし此所から引き返します。』彼女は大へん歩いて來たことにびつくりして云つた。

『まあ好い……』安岡は此の言葉をくり返した。彼女は一歩々々彼に引きずられて行つた。二人の影は公園の中に消えた――。

彼女と前夫安岡との關係はその時からであつた。前夫は彼女に對してもとのやうになる氣はないかと迫つた。彼女は

それを最初は拒んだ。然し唯一つ彼女の心を動かすものがあつた。それは、彼女の考へ一つで、彼女を一度窮地に陥れたそのタイピストあがりの後妻の地位を覆へすことが出來ると云ふことだつた。覆してやりたいと云ふ願望の爲めに彼女の心は轉換しかけた。彼女は一度自分を離縁して自分を泣かせた前夫の安岡よりも、安岡をさうさせたそのタイピストと云ふ女が腹の底から憎くかつた。彼女はその敵をひしぐ爲めには現在のすべてを抛つことにまで考へを進ませた。彼女は現在の良人である保科を愛してゐないではなかつた。保科は小心な、そしてすばらしい立身の出來る男ではなかつたが、彼女に對してやさしく親切であつた。彼女の生涯の良人として愛してゆくに彼女はそれほど不足を感じなかつた。然し彼女は一度奪はれた地位を取返へしたいと云ふことの外に、二人の子供の爲めと云ふことをつけ加へた。そして二人の可愛い子の父としての安岡を見ると彼女は矢張いつになつても彼の妻であると云ふ情緒に降伏せずにゐられなかつた。彼女はその後もしば〲前夫の誘ひを受けた。彼女の方でも進んで彼と逢ふ機會を工夫するやうにまでなつた。そして春は過ぎ、夏は來た。現在の良人の保科は一週に二度乃至三度、或る私立大學の國文科に教へに出かける他は大抵家にゐるので、前夫との逢曳は思ふやうには行かなかつた。唯、保科が一週に二度學校へ行く日を待つて彼女は辛うじて不安な計畫をして前夫と逢ふのであつた。

彼女の實家である四ツ谷の母や兄は彼女にそれとなく注意をした。

『お前は今になつて何か迷つてゐるのぢやないのかえ。親兄弟の顔の立たないやうなことをしておくれでないよ。保科さんだつて學生の時分から深い知り合ひだし、長い間、あゝして家に同居してお互に氣心を知りつくしてる間柄だから今更お前が迷ひ氣を起したりしては私達が第一申しわけがないよ。お前だつてそのくらゐのことは分つてるだらうから、私は云ふまいとは思つたけれど、氣にかゝるからさ。』老母は彼女が或る日實家に立ちよつた時、さう云つた。老母

がどうしてそんなことを感づいたかは彼女にも分つた。或る日彼女は三ノ橋に預けてあるお京をつれ出して前夫と光雄とに逢はせた。もとの親子四人がそろつて三田四國町の鳥屋で晝飯を一諸に喰べた。誰にも云つてはならぬと母親に云はれてお京は大きくうなづいた。然し子供はいつの間にかそれを忘れて祖母が逢ひに來た時にもらしたのであらう。

『わたし何にも迷つてやしないわよお母さん。』彼女は老母に云つた。

『そんなら好いけれど。』老母はさう云つてあまり突込んで訊ねようとはしなかつた。

『でもねえお母さん』と彼女は云つた『子供の爲めにはいろ〳〵考へても見るわ。』彼女は子供の爲めと云ふことで自分の行爲を許されたかつた。

老母の云ふ通り保科は學生時代に彼女の實家の二階に四年間も間借りしてゐたことがあつたのである。彼女が保科と一緒になつたのも、さうした以前からの知り合ひがもとだつた。それはもう十年も前のことである。保科はその時分苦學生であつた。あまり口數をきかない、勉强好きの、きたない大學生であつた。頭髪をいつもぼや〳〵と伸し放題にした、垢臭い無骨な青年であつた。その頃園子は十九で、既に安岡のもとに嫁入つてゐた。時々彼女は四谷の實家に歸つて來て、その、もつさりとした垢臭い大學生を見た。そして言葉を交はしたこともあつた。當時それ以上二人の間には何の記憶の材料も發生しなかつた。保科は五年間かゝつて私立大學の國文科を卒業すると直ぐに地方の中等教員になつた。地方を轉々して、中學や女學校の國文の敎師をした。そして八年目に再び東京へやつて來て母校である現在の大學の國文科の講師に聘された。園子の親兄弟は皆、保科の人物を信用してゐるのであつた――。

『母にだけ打ちあけて見ようかしら……』彼女はさうも思つた。然し今しばらくと思つた。いよ〳〵と云ふことになるまで待たうと思つた。

彼女と前夫との逢曳の場所はその頃は既に定まつてゐた。大抵日暮里の横現裏の緣福亭と云ふ小料理屋であつた。彼女の現在の住家からは近くて人目がなくて一番便利だつた。そこの奧座敷からは三河島、尾久の新開町が一目に見えた。茨城、千葉へ續く平野の果てには筑波山が見えた。常磐線を行く汽車が見えた。座敷の直ぐ崖下を山の手線の電車が往き來した。そこでは全く二人はもとの夫婦になりきつた。二人はそこでどんな話しを多くしたか。それは次のやうなものだつた。

『もう今度一緒になつたら別れるの入れるのと、それだけはよして下さいねえ貴男。二人の子供の爲めですわ。お願だから。例へ浮氣をなすつてもよ。それだけはなさらないで下さるでせう。でないとその時こそ私世間からあいそをつかされますわ。貴男だつてさうよ。今度だけは子供の爲めだと世間も許してくれますけれど、もうその次から許しませんわ――私もう、さうなれば生きてゐられませんわ……』

『わかつてる。わかつてるよ。俺もそれほど馬鹿ぢやないよ。』

『で、あなたは、そのタイピストの女をどう云ふやうにして離緣なさるの。』

『それは、間に人を入れて金で解決すれば好いよ。女の方でも出て行けるやうにしてさへくれゝば出て行くと云つてゐるほどだから。』

『でもたんと要求するのでせう。』

『法外なことを云つたところで始まるまい――それよりもお前の方はどうだ。お前の方が、ことはめんだうぢやないかい。保科と云ふ男はどんな氣質な人だ。亂暴でもするやうな男かね。』

『いゝえ、ちつとも、そんなことの出來る人ぢやないの。』彼女は保科を善良な男として紹介した。

彼女は保科が水曜と金曜とに學校に行つてる間に家を拔け出てゝは前夫とそこで逢つてそのやうのことを多く語り合ふのであつた。彼女はさうゆるりと話してはゐられなかつた。せい〴〵二時間であつた。然し大地震後、しばらくその小料理屋は休業した。その間二人は逢はなかつた。すると十月の中頃からもとのやうに開店した。そして二人の逢見は再び始まつた。保科が十二月の二日に東京を立つて旅行を續けてゐる間に彼女は三日續けて前夫とそこで逢つた。思ふさまゆつくりと逢ふことが出來た。三度目に逢つたその翌日から彼女は寒氣がし出したのである。その夜から熱が出た。女中がゐないので彼女は四谷の母に來て貰つた。若し彼女は、風邪に罹つて床につくやうなことがなかつたから、恐らく保科が不在の間ぢゆう前夫との逢ふ瀨を樂しみ續けたであらう。然し風邪で床についたことは彼女を度はづれにせずにすんだ。そしてまた、病氣で床についてゐるところへ良人が歸宅したことは、どれほど彼女をして自分の罪惡をしらばくれるに易からしめたか。良人の疑ひを忽ち同情といたはりの心に變化させるに好都合であつたか。如何にその妻の貞操を信ずる良人でも、愛妻を家に殘して數日間旅行を續けて歸宅する時には多少の不安なきを得ないであらう。しかも歸宅して見ると妻は病床で良人の歸りを待つてゐた――誰がその妻の面瘦の寢姿を見て疑ひを忽ち愛憐といたはりの心に變へずにゐられよう。そして妻を疑ふた自分の心を心に恥ぢるであらう。男はそれほど時に愚かしいのである。妻を欺くことに於てすぐれてゐる如くまた欺かれることに於ても劣つてはゐない……。

保科は自分の不在中に於ける妻の行動に對しては疑ひを捨てた。彼は病床の妻をいたはつた。そして妻の風邪は數日後には全快した。年は明けた。

新年早々震災見學の中學校長がやつて來た。此の敎員一團はその地方の藩士である某侯爵邸に滯京中は宿泊したのであつた。校長は酒も煙草も好まない謹嚴な人物で、保科はもてなしやうがなかつた。彼は東京のそばと天どんが大好物

であつた。保科は唯、一日だけ同伴してバラック街の一部を案内して、そして一緒に晝飯をたべたのであつた。二人は新人教育と云ふことについて話した。

『新らしい教育と云ふことも僕は此の數年間心がけては來たが、どうも思ふやうには行かないものだよ。我々始め學生時代には新思想を吸取したつもりだが、學校を出て世の中に立つと現實と云ふ奴がその新思想を許してくれない。だから單に新らしい教育と云ふことだけを急いでも効がないと云ふことを近頃はつくぐ〲感じてゐるよ。』校長は歎じて云つた。

『それはほんとだ。現存の社會がもつとどうにかならなくては仕方がない。』

『少し新らしい教育法を生徒に對して實行しようとすれば當局に睨まれる。だから、まあ〱と云ふ氣になる。英語教師などの中には馬鹿に急進的なのがゐて、僕自身ではそれを認めてやりたいと思ふが、校長としては矢張さういかんて。』

『君等が一番骨の折れる立場だ。そこへ行くと僕等はのん氣だ。もう此の頃はどうでも好いと云ふ氣でやつてゐる。』保科は張りのないことを云つた。彼は家庭に失望したことからひどく投げやりな人生觀に陷りかけてゐた。校長は五六月の頃きた校長會議の爲めに上京することになるだらうと別れ際に握手を交しながら云つた。

土浦の絹子は二月の初めに上京して來た。彼女はいきなり保科の家へは訪れて來なかつた。牛込の親類へ來てゐると云ふ通知をよこした。保科の方でも彼女が家へやつて來てくれない方が好いと思つたので、此方からお訪ねしてもよいと手紙を出した。すると絹子の方からは『復興の東京を見物したいからお暇でしたら先生におつれして頂きたい。明後日の午前十一時まで東京驛でお待してをりますから。』と云ふ手紙が來た。保科は何となく嬉しかつた。明後日とあつたが手紙の日附では明日のことであつた。彼は翌日用事にかこつけて午前中に家を出て東京驛へ行つた。

『まあ、先生、』絹子の方が先に保科を見つけた。

『おゝ、大分貴女を待たせたでせう。』保科は少し昂奮して云つた『どこかそこらでちよつと憩みませう。』
彼は丸ビル内の喫茶店へ絹子をつれ込んだ。
『虫歯の方は、どうしました。』
『え、抜いたんでございますの。奥歯を。』絹子は白い頬の上を指先で押へて云つた。彼女のきやしやな指には小さなダイヤがあつた。葛茶の棒縞のお召しに唐草の飛び模様の金紗縮緬の羽織を重ねてすらりつとした姿をしてゐた。髪型から化粧の工合まで土浦あたりにゐる婦人と思へないほどだつた。
『それからと、あゝさう〳〵、例の改名はどうしました。』
『あら、ほほほほ……』と彼女は顔を赤らめて笑つた『だつて先生があまり御賛成なさらないんですもの。』
『いや、さうでもなかつた――ぢや矢張もとの絹子さんですねははは――絹子と云ふ名は姓名學上よくないと誰か云ふんですか。』
給仕が二人分のココアと菓子を持つて來た。
『はあ、あの土浦の伯母の家に來るお客の人に姓名學に通じてゐると云ふ方がございますの。その方がさうおつしやつたもんですから、つい迷つたんですわ。姓名學なんてほんとにあてになるもんでせうか先生、おほほほ。』
『さあ、どう云ふものですかな。多少根據がないこともないでせうが。』
二人は茶をすゝり合ひながら笑ひ〳〵話した。
『それはさうと、土浦へは何日歸へるんです。』
『一週間のつもりで來たんですけれど、急いで歸りたくもございませんわ。此のまゝ東京にゐたい氣がいたしますの。』

『こんな燒け殘りのきたない東京なんかにゐるよりは土浦の方が……。』保科はさうは云つたが、彼女が東京にゐたいと云ふ言葉は何となく嬉しかつた。彼の心を少なからず引き立てた。

『わたくし、先生のお宅へも伺つて奥さまに御挨拶したいのですけれど……。』

『僕の家においで下さいと云ひたいが、まあ好いでせう。僕の家内なんて貴女に……

『あら、先生、どうして……』

『實を云ふとあまり僕等夫婦は幸福ぢやないんですよ。貴女にでも打ちあけたら、或は救はれる道があるかも知れないと思つてるくらゐです。』保科はつい口を辷らしてしまつてから、こんな所でこんなことを云ふんぢやなかつた。と直ぐ悔いた。そしてあたりを見た。喫茶店の中はそろ〳〵客がこみ始めてゐた。

絹子は保科の言葉をどう受けてよいかまどついた樣子だつた。保科は話頭を轉換した。

『さあ、今日は貴女をどこへ案内すれば好いかなあ。』

『わたくしどこでも構ひませんわ。先生のおよろしいところへ。おほほほほ。』

『でも貴女は復興の東京を見たいと手紙で云はれたやうだから。』

『でも大體は見物いたしましたわ。淺草へもまゐりましたの。神田のバラック街も電車で通りながら見物いたしましたの。』

『それぢや僕が今日は異つた方面へ案内して見ませうか。』保科はさう云つて彼女の目を見た。それは彼にも難解でない、解き易い謎を含んだ目のやうであつた。

二人はカフエーを出た。

「横濱の方へ行つて見る氣はありませんか。唯電車の上から眺めて歸つて來るんです。あの方面もついでに見物して置いて好いと思ふな。」

『あら横濱つて隨分でせう。ほほほ。』

『三十分かゝれば行けます。ぢや横濱まで行かなくても大森へんまで行つて見ませう。』

『わたくしは構ひませんけれど。』

此の鳩は自分を怖れてはゐないと保科はいよ〱信じた。保科は大森行の二等切符を二枚買つた。プラットフオムの時計は十一時を少し過ぎてゐた。二人は横濱行の電車に乘つた。保科は車窓から見えるバラック街を彼女に指しながら京橋から芝區へかけての震災當時の慘狀を話したりした。電車はやがて品川驛を過ぎた。車中にはいろ〱の髮形をした婦人が乘つてゐた。然し保科はそれらの婦人に彼女を擬してもひけをとらないと云ふ自信をさへ感じてゐた。それにもかゝはらず彼女は絶えず俯向きがちにした。彼女の金紗の羽織の袖はいつの間にか保科の外套の袖と重なり合つてゐた。保科はそれを知つてゐた。そしてうつとりとなつてゐるのであつた。二十分で大森に着いた。二人はそこから別の電車に乘り換へて三つ目の停留場で下車した。やがて二臺の俥は森ケ崎の鑛泉旅館の方へ走つた。俥は田舍町を横切つて田圃の間を幾つか曲つた。海岸寄の鑛泉旅館はもう見えてゐた。保科は曾て著述の仕事を携へてそこの旅館で數日間過ごしたことがあつたので、彼はその馴染の旅館へ俥を着けさせた。

二人は離れの一室に通された。彼女は旅館の伯母の家にゐるだけ、かうした場所にはものなれて見えた。八疊の部屋には長火鉢や衣桁や鏡臺や茶櫃の茶ぶ臺など一通りそなへてあつた。保科は緣側へ出て、萱芝に掩はれた寒げな土間の向ふの東京灣の海を久しぶりに此所から眺めた。彼女はその間に、鏡臺に向つてちよつと頭髮の形を直してピンを差し

替へたりした。そしてやがて同じく縁側へ出て來て外の景色を眺めた。二人はあまり現在を感じ合つてゐたので、なるたけ別の話しをして笑つた。保科は何の爲めに彼女を此處までつれ出して來たかを自分の心に問へば分つたし、彼女もどう云ふ氣持で彼に從つて此所へ來てしまつたかを自分の心に問ふて分つてゐた。そして、それが今更のやうに此の二人をきまり惡くした。で二人はその心持を互に初めはしらばくれてゐなければならぬのであつた。

『あのお風呂はいかゞでございますか。』

女中が來て云つた。

『まあ食事を先にさせて貰はう。』

『かしこまりました。』

『あゝ此の人は昔私達に敎へてくれた先生だ……あの國語の先生だ……』絹子はふと今になつても さう思ふては保科をそつと見た『皆で自然專と綽名をつけて蔭で冷かしてゐたあの保科先生……そして私はその頃の生徒……私は結婚してからも何故か此の先生のことをよく思ひ出した……私は此の先生と二人きりで今こんなところへ來てしまつてゐる……』彼女はまだ、昔敎へられた先生、と云ふ追憶にどうかすると心の自由を邪魔されがちであつた。保科に於てもそれは同樣であつた。

『あゝ昔敎へた女生徒だ。しかつめらしい顏をして俺が昔敎へた女生徒だ』然し彼は彼女に對してそれを忘れようと努めた。

保科は今は昔の女生徒として彼女を眺めることよりも現在の、女になりきつた美しい異性としてより多く感じてゐた。どちらかと云へばすつかり現在の彼女に魅せられてゐた。昔彼が敎へた女生徒の中には絹子よりも、もつと保科を

ひきつけた女生徒が他にゐた筈であつた。その當時に於て絹子に心をひかれた記憶を彼はそれほど多く持つてはゐなかつた。然し現在の彼には、彼女以外の昔のどの女生徒よりも彼女は美しく魅惑的に見えるのは無論であつた。

二人は間もなく運ばれた食事についた。彼女はお酌をしながら頰笑んで云つた。

『わたくし、こんなことをしては奥さまにすまないやうな氣がいたしますわ、先生。』

『そんなことを思はないでも好い。』と保科は云つて『僕の妻は却つて喜んでゐますよ。貴女にかうしてお酌などをして貰つてゐることをです。』保科は笑ひながらも洒落でなく眞實を云つたつもりであつた。

『あら、變ですわ先生。どうして……』

『それについて、貴女に打ちあけたいのです。今日は。』保科は少し語調を正しくした『僕等夫婦は實際不幸なんです。妻よりも僕の方が更に不幸なんです。』

『まあ、わたくし、さつきから先生のおつしやることをどこまで本當にお聞きして好いのか分らなくなりましたわ――どうして、先生まあ……』

『僕の家内には前の良人と云ふのがあるんでしてね。そして、その良人との間に二人の子供があるんです。家内はもう一度そのもとの良人と一緒にならうとしてゐるんです。それは彼女の爲めにも、その良人の爲めにも、また二人の子供の爲めにも好いに定つてゐますからねえ。唯、僕が少々氣になるのは、その前の良人の人物ですなあ。然し、それは僕の知つたことぢやないんですが……うまくもとのやうになつてくれゝばよいと、まあ僕はそんな風に今は半ば傍觀的に、多少妻の爲めにさう考へてゐます。隨分と割りの悪い話しで……だが僕と妻との間には子はなしするから、別れるなら今のうちですからね。』

『まあ、それはほんとでございますの、先生……』絹子はお附を忘れて小さく吐息して見せた。

『僕は誰にもまだ此のことを打ちあけてゐません……あ、貴女に救はれたい爲めに貴女にだけ打ちあけた。』

彼女は相手の急激な言葉に答へることが出來なかつた。二人は隨分長い時間かゝつて食事をすませた。呼びリンを鳴らして女中にお膳を下げさせる時には二人は椽側へ出て海の方を眺めてゐた。

『まあ、でも先生、奧さまはどう云ふお氣持なんでせう。』絹子は云つた。

『無論その前夫の誘惑がもとでせうが、その誘惑に陷つて行つた氣持は妻にだけしか分らないものでせう。僕にも多少は察しがつきます。一種の、必然的なものかも知れません。』保科は云つた。

やがて午後三時であつた。風が寒かつたので二人は椽側から部屋の內へ入つた。保科は眞面目にしんみりと話すかと思ふと急に調子を變へて彼女を笑はせるやうなことを云つたりした。若し第三者が聞いてゐたとしたら、此の男の女を口說くことに於てあまり馴れてゐない、そして憶病で、かゝる場合にも始終自己反省に煩はされ、そしては自分を叱りつけ、際どい瞬間をとり逃しては喉をから〳〵にさせて唾を飲み下し、氣が遠くなるまでに失意を感じ、やたらに女をもどかしがらせてゐるのをはがゆく思つたことであらう。男はやつとのことで女の手の上に自分の手をかぶせた。女は最初の時はそつと手を引いた。そして俯向いて吐息した。男も俯向いた。そして長い間二人は沈默した。男はそれから數分たつて初めて女の手を完全に握ることを得た。そして彼女の身體を引きよせて×××することを得た。かくして二人が××××××までにはかなりに手間どつたのであつた。然し易く得られたものに價値を感じないと云ふ意味では、男にとつてはその如くして得られた彼女は高價なものに感ぜられたに違ひない。男は自分の臆病を失望に終らせずによい結果を得て悅びに燃えた。彼女はその瞬間から完全に彼のものであつた。彼は永遠に自分のものだと信じたいほ

どであつた。二人は続けさまに接吻し通しであつた……。

絹子は十日ほど東京に滞在して土浦へ歸つて行つた。その間に二人は無論しば〳〵逢つた。彼女が去る時保科は日暮里驛まで彼女を送つた。そして一月は過ぎた。二人は絶えず文通をした。或る日、絹子からの手紙と一諸に潮來の遊女からの手紙を配達夫は投げ込んで行つた。

「保科さま、その後何のおたよりもございませんが、如何お暮し遊ばしますか。わたくしは無事に働いてをりますゆゑ御安心下さいませ。もうだん〳〵これからは暖くなるばかりですから、つとめもらくでございます。ぜひ〳〵もう一度潮來の方へおでかけ下さいますやうにわたくしは明けくれ念じてをります。春先から夏にかけて潮來はよろしうございます。此のあひだお手紙さし上げましたが、お手もとへ着きましたでせうか。奥さまがお氣附きになつて、それで御返事を下さらないのではなからうかといろ〳〵御案じ申してをります。もし奥さまに知れたとすれば申しわけございません。お許し下さいませ。兎に角、おいで下さるのをお待ち申してをります。書きたきことは山々ありますけれど、これにて御免下さいませ。御身御大切に。あら〳〵かしこ……」

保科はそれどころではなかつた。彼は此の手紙の主をいつしか忘れてしまつてゐたことを氣づくだけであつた。好い加減の返事をやる氣にもなれないので彼はそのまゝに過ごした。絹子のことを思ふ心で彼の胸はいつもみたされてゐた。彼はもうこれまでの彼ではなく、幾分活潑にさへなつて若返つて見えた。唯、土浦と東京とのことで、一週に一度も絹子と逢へないのがさびしかつた。絹子の方からもそのことを頻りに云つて來た。彼女は一日も土浦へ長く止まつてゐる氣はしないと手紙で愬へて、今後の二人の方法について何かと自分の意見を述べてよこした。東京の場末の町でよいから二階借りをして仕立物の賃仕事をしても自分の生活の爲めに貴男を煩はせないやうにして、そして尠くも一週

に一度か二度お逢ひすることが出來るやうにしたい。とか、どこかに奉公してもよいとか、奥さんとお別れになることが困難であれば、それでも私は貴男に欺かれたなどとは決して思はないとか、そんなことが書いてあつた。保科は此の最後の文句に狼狽した。そんな極端なことを云つてくれては自分は苦しくなると書いて返事を出した。すると絹子からはまた長い詫びの手紙が來た。その手紙と相前後して、少しは用意のものもあるから思ひきつて近日中に上京するから、どこか貸間を心がけて置いて下さいますやう。と云ふ手紙が來た。そして、それから一週間目には絹子はもう東京へやつて來てしまつた。彼女は田端驛の近くの旅館へとりあへず宿をとつて、そこから保科へ手紙を出したのであつた。保科はむしろ彼女の勇氣を喜んだ。彼は早速彼女のゐる旅館を訪ねた。二人は二月ぶりであつた。ほんの二ケ月ぶりであつたが互に話したいこと、聞きたいことが溜つてゐた。然し何よりもかうして顏を見ればそれで互に滿足してしまつた。これからは常にかうして顏が見られると云ふ喜悅が、それ以外のことを後廻しにしてしまつた。此の場合、その喜悅が二人のすべてゞあつた。

『土浦の伯母さんの方はどんな風にして來ました。』

『お裁縫の學校に入つてその方を二年ほど修業して女學校の裁縫教師になりたいつて、さう云つて納得させたんすの。今からそんな考へを起すよりは再婚でも早くした方が好いつて、いろ〳〵云ひましたけれども、仕方がないと思つたんでせう。おしまひには一旦思ひ立つたことならさうした方が好いだらう。つて云ひましたの――先生どつか借間を探して下さつて。』

『あるにはあるが、どうも思ふやうな貸間がない。なあに、その氣になつて僕これから探せばあるに定つてる。それまでまあ此の旅館にゐたが好いでせう。』

『ではさういたしますわ』彼女はそれから小聲になつて『私からの手紙で奥さまはすつかり感づいておいでになりはしない、貴男・・』

『それは早く感づいてくれた方が僕としては好いんだ。がまだ感づいてはゐないらしい。』

『分りませんわでも。知つてて默つてゐらつしやるんでせう屹度』

『いや、それは少しも氣にしなくとも好い。僕と貴女とのことを彼女が知れば彼女の良人はらくになつて決定を急ぐでせう。そしてそれは相互の爲めに好いことなんだ。』

　保科はその旅館で彼女と晝飯を喰べた。それから彼は早速貸間探しに出かけた。人目も氣になるので彼女は宿に殘すことにした。彼は田端、中里、と探して歩いた。あるにはあつたが、どれも隣室に誰かゞゐると云つた風の思はしくない二階ばかりであつた。彼はさき〳〵歩いて行つて、とう〳〵西ケ原まで來てしまつた。そして遂に一軒の貸家を見附け出した。植木屋の地内にある二軒續きの家で、二人住ひには誂へ向きの空家であつた。震災後貸家を見出すことは容易でない筈であつたが、家主の植木屋の話しでは、前日さる夫婦者が越して行つたばかりとのことで、彼は運よくそれを見出したわけだつた。早速交渉した。家賃も二十一圓といふ間代に等しい値段である。敷金は六十圓と云ふので彼には考へる必要はなかつた。その場で取定めてしまつた。家は六疊と三疊の外に玄關の二疊があるきりだつたが、小ぢんまりと住み勝手よく出來てゐ、少しも住み荒した風も見えず、疊もそれほど古けてはゐなかつた。

『貴男様は會社へでもお勤めでございますか。』物かたさうな家主は訊ねた。

『いや、會社へ勤める者ではありません。私は大學に勤めてゐるもので。』

『へえ、さいですか、大學の先生でゐらつしやいますか。昨日までお住ひになつた御夫婦は小説家の田川さんてえお方

で、三年ほどおいでになりましたが、今度何でも外國へ洋行なさるとかで。』
『あ、田川京六。小說家の……』
『御存じで。』
『いや、別に深い知合ではありませんが知つてゐるだけです。田川君は此の家にゐたんですか。』
『なか〳〵お手まめな方でして、此の通り袖垣などは御自分でおこしらへになつたりして、手前が庭師でごわすもんですから、門前の小僧習はぬ經を讀むんだとおつしやつて、暇さへあれば庭いぢりでございましたよ。へつへつへつ。』
家主は云つた。
保科は家主とそのやうな話しの間にすつかり取り定めて、直ぐにそのまゝ田端の旅館へ引き返した。
『絹さん、家があつたよ。素的に、あつらへ向きの家があつた。』
『あら、さう……』絹子は安心して喜んだ。
『小說家の田川が昨日までゐたと云ふ、こぢんまりとした家だ。』
『まあ、そしてお家賃はどのくらいですの。』
『それがまるで素的に格安なんだよ。二十一圓。敷金が六十圓、敷金はやつて來た。』
『それはよござんしたねえ。』
絹子の荷物はまだ驛に着いたまゝになつてゐた。それは大行李二個と蒲團であつた。彼女は夕方までにそれらの荷物と共に俥で定めの家へ越した。二人は忙しかつた。ちよつとした炊事道具をもとゝのへねばならなかつた。
『いや、今夜はどつかへ行つて食事をすますことにしよう。そして歸りにバケツやしちりんなどを買ふことにしよう。』

『さうねえ、ではさうしませう。さきにわたくしお風呂へ行つてまゐりますわ。あなたおるす番よ。』

『風呂屋はどこにあるか貴女はまだ知りもしないだらう。』

『あら煙突を見あてに行けば分るぢやありませんの。』

『ぢや風呂屋に行きしなに、そば屋が見つかつたら、寄つて引越そばを三軒分ほどね。此の家に越して來たものだと云へば分るだらう。』

二人が戸じまりをして町へ買ひ物に出かける頃は日が暮れてゐた。彼等は巣鴨の町へ出た。そして蒲燒屋へ入つてうなどんで晩餐をした。それから、そこを出て町を歩いた。バケツだの、赤いお釜だの、しちりんだの薄鍋だの、杓子だの庖丁だの、椀だのを買つた。

『あら、貴男、お火鉢がないわ。』

『何、火鉢は林町の方から持つて來る。なるたけ買はないで、一つ宛さらつて持つて來ることにしよう。』

『だつて……』絹子は笑つた。

『大丈夫、心配しないでも』

『あら、わたくし、お裁縫臺が一つほしいわ貴男。』

『まあ、それはあしたでも好いだらう。』

新らしい生活が二人に始まつた。保科にとつては彼女は傷んだたましひの看護婦であつた。消えかけて暗くともつてゐた蠟燭のしんを摘みとつて、それを明るく燃えしめてくれた白くやさしい手であつた。同時に絹子にとつては保科はむしばまれむとして、枯れむとして水を待つ鉢植ゑの花樹に於ける最初の培養者の救ひの如露であつた。二人は再生を

得た灯と花であつた。彼女はまだ一度も良人に先立たれた悲みなどを經驗したことのない人のやうに明い女に見えた。それどころか一度も人妻になつた經驗さへない、女學校出の娘のやうにさへ若々しく見えた。彼女の容姿は直ぐ近隣の注意を惹いた。彼女はこれまで保科に對して先生と呼んでゐたが、いつしか『あなた』と呼ぶやうになつてゐた。此の郊外の二人の住居には誰一人訪れて來る者はなかつた。店屋の御用聞きと、朝夕の新聞配達夫とだけであつた。まだ郵便すらも彼等には誰からも來なかつた。夜も靜かであつたが、晝も靜かであつた。朝早く納豆賣の少年が定つて、高らかに聲をはりあげて通るのが例であつた。その少年の觸れ聲は彼等二人の心を何となく愉快に晴れやかにした。新鮮な朝の空氣にみちた、あたりの郊外いつぱいに少年の觸れ聲は生々とよく響き通るのであつた。その觸れ聲は特別に長くそして少年の純眞な勵みと、それの魅力とがあるのだつた。二人はその少年の顏を見たいと思ひながら、いつも朝寢坊をした。晝近くになるといろ〳〵の物賣が、異つた觸れ聲を響かせて通り過ぎた。

『燒きに、がんちやん、生あげえ……』と豆腐屋は一種變つた觸れ方をした。午後二時頃には定つてハンペン屋が通つた。

『ちくわに、ハンペン、さつま揚げはよろいし……』

彼女は毎日のやうに靜かに裁縫をした。保科のゐない時はさびしかつた。そのさびしさはどうかすると彼女を不安な思ひに陥れるのであつた。それはまだ、自分は保科の正妻ではないと云ふことであつた。まだ保科は表面上はその妻との夫婦關係を續けてゐると云ふことの不安であつた。形式上保科がまだ完全に彼女のものでないと云ふことの不滿であつた。保科は時々林町の方へ行つて二日ぐらゐ來ないことがあつた。彼女はそんな時は夜も眠れなかつた。然し保科の顏を見ると彼女は直ぐにすべてを忘れた。決して此の人は好い加減のことを云つたり、不誠實なことを考へて自分を欺い

たりする輕薄な人物ではないと云ふ信賴に彼女は歸するのであつた。彼女は彼のやさしい笑顏に出逢ふと、自分の考へがすべて邪推であつたことを耻ぢねばならなかつた。

『ねえ、あなた、そこの養鷄所に可愛い、それは可愛い生れたばかりの犬の子が四疋ゐますの。わたくし、あれを一匹貰ひたいわ。』

『種はよさゝうかね。』

『ええ、テリヤ種ですつて。』

『ぢや、たゞ貰ふわけには行くまい。』

『五圓もお禮すれば屹度あの家ではくれますわ。それは善良な好い若夫婦ですの。玉子を買ひに行つても人柄が分りますわ。唯の人ではなさうですの。』

『そんな可愛い犬なら話して見よう。』

『あら、さうして下さる。あゝ嬉しい。』

保科はその四五軒さきの養鷄所の家へ行つて見た。全く可愛い犬の子であつた。毛のつやつやとした、モルモットほどの四匹の小犬は母犬の乳房に集つて居た。保科は主人夫婦に貰ひたい旨を話した。主人は直ぐ承知した。お禮の金はどうしても先方ではとらないと云つた。絹子は夢中になつて嬉しがつた。

さて、保科は一日も早く妻の園子との夫婦關係を斷たうと急いでゐた。然るに昨今、彼は妻に對して、これまでとは異つた意味で、氣がかりなことを感じ始めて居た、それは妻の樣子が此の頃になつて著しく變つて來たことであつた。その變り方が彼には氣になつた。彼の妻は最近になつてひどく沈み込んで見えるやうになつた。顏色が惡く蒼ざめて、

考へ込んでそしては眼に涙をにじませてゐるやうに彼には見受けられた。

『おい、どうかしたのか。園子。』保科は遂にさう云つた。

『頭痛がしますの。』妻は俯向いて云ふのみであつた。

『醫者に見せたが好いよ。』

『えゝ靜かに寢てゐた方が好いんですの。』

『ぢや、寢てゐれば好い。』

保科は、妻が姙娠でもしたのではないかと、それを第一番に感じた。若しさうだつたら……と彼は思つた。若しさうであつたら、彼女の罪跡はそれによつて明らかに曝露することになるのであつた。何故なら、保科は此の秋以來妻との同衾を絶對に避けて來たからであつた。彼は妻の貞操に疑惑を起した當時から、即ち第二回三回と續いて匿名の忠告手紙が彼の手もとに舞ひ込んだ當時からよぎなくさうすることに努めた。然し幾度か心を堅めたが、それを堪へ忍ぶことは一つの困難であつた。それでも反抗の出來るだけ妻に對する性慾に反抗した。そして昨年の十月以來彼は絶對に妻の身體にふれなくなつた。妻はもとよりそれを悦ばなかつた。然し彼は不健康を口實にした。妻の方ではそれを良人に求める必要もない筈だつたがそのことだけでも彼等夫婦は單なる冷たい同居であつたのだ。それにもかゝわらず彼等夫婦は一度も夫婦喧嘩らしいものをしなかつた。それは一面から云ふと一層の性質の惡い平和であつた。

『姙娠したわけでもあるまいなあ。』保科は妻に云つた。

『………』妻は微笑を見せただけであつた。その微笑は『貴男も隨分ね。姙娠するわけはないぢやありませんか』と云ふ意味の微笑であつた。

『嫉妬ではない……いや嫉妬だと云へるわけもない。』保科はさう思つた。

『では何が故に氣分がすぐれないのだ。これまで不義を平氣で續けた妻が今更何を惱んでゐるのだ。』

保科は更に彼女に對して別の想察を持つた。

『彼女はわざとあんな様子をして見せてゐるのではないのか。彼女は俺と絹子との關係を知つてゐるに違ひない。絹子と云ふ女がどんな女であるかは知らないにしても、兎に角自分にさう云ふ女があらうとは感づいてゐるのだ。然しその爲めに彼女が惱まねばならぬと云ふのはどうしたわけだ。何故彼女は俺と一日も早く思ひきつて別れようとはしないのだ。何故早く前夫と一緒にならうとしないのだ。まだ俺をも愛してゐると云ふのか。その爲めに惱んでゐるのか。まさか……』

然し保科は更に更に彼女に對して別の想察を持つた。それは前夫の安岡から妻は欺かれたのではないだらうかと云ふことであつた。欺かれたことを今になつて妻は氣づいて、その爲めに悶えてゐるのではないだらうかと云ふ一事であつた。或は分らないと思つた。此の想察と共に彼の胸には妻に對する大きな憐憫が湧き起つて來た。盜まれた花が、盜まれた爲めに既にあきらめてゐたその花がさん〲花瓣だけむしりとられ傷けられて再び自分の前に投げ返へされていたましく横はつてゐるのを見る氣持がするのであつた。然し彼は何事も妻に云つて見ようとはしなかつた。それを云ふ勇氣がなかつた　それを云ふ必要さへもないと思つた。が妻を憐みいたむ氣持を彼はどうすることも出來ないのであつた。

『若しさうだとすれば何と云ふ輕薄な男だ……』彼は安岡と云ふ妻の前夫に對してさう思つた。

『自分の此の想察が事實であつたら妻は一體どうなるのだ。』と彼は考へた。彼はもう妻を憐れむことは出來ても妻を眞に愛することは出來ないと思つた。然し妻に對する彼の想察と憐憫とは絹子に對する彼の熱愛にまで影響した。これま

では不義をする妻のことなどを顧る必要なく彼は絹子にのみ愛をそゝいでゐられたが、今は絹子を愛すると共に妻を憐まねばならぬことになつた。然し絹子には無論そのことを彼は氣どれらたくはなかつた。

『妻は前夫に欺かれたとまではまだ斷定出來ないかも知れぬ。唯、彼女は今になつて安岡と云ふ前夫がたよりなく思はれ少しく不安になり出したのであらう。』保科はさうも思つて見た。

『あゝ馬鹿らしい話だ。俺も馬鹿らしい男のやうだ。妻に不義な行ひをされて、そしてその不義な妻がその間男に棄てられはせぬかと云ふことまでも心配しなければならぬとは何と云ふ馬鹿げた話だ。妻が不義な行を一年間も續けて來たことは事實ではないか。俺はあの再三の匿名の手紙によつてそれを信じなければならぬ。俺には不貞の妻が間男に棄てられる心配までする義務はない。俺は泥を塗られて來た。俺は絹子を愛してさへ行けばよい……』保科は思ふのであつた。

『ね貴男。』

『なあに。』或る日の夕、二人で晩餐をしてゐると、絹子はその日の新聞記事の話しを彼にしかけた。それは、二人の頑是ない二人の子供を殺してその身も自殺したと云ふ憐れにいたましい母子三人の不幸な記事であつた。

『まあ何んと云ふいた〳〵しい死にやうでせう。』絹子はその美しい眼に涙をにじませながら云つた『母親に好いおべべを着せて貰つて二人の子供は母の實家へつれられてゆくのですの。然し母親はその前から死ぬ覺悟で、その可愛い二人の子をも殺すつもりで、もなかに毒藥を包んで用意して、それを自分の實家へ行つてから何も知らぬ二人の子供へたべさて三人が死んだのですわ。あゝその母親の氣持はどんなでせう。』

『うむ……』保科は彼女の話しを聞いてはゐたがさうした悲慘な事實は彼の今の心を暗くした。それでも彼は彼女にか

う問ふた。

『どう云ふ事情でその母親はそんな死に方をしたのだらう。』

『良人に貞操を疑はれて、それが口惜しくて遂に死を決したのらしいと書いてございますわ。』

『どこです。』

『前橋ですの。まあ二人の子供が可愛さうですわ。わたくし此の記事を讀んで今日はいろ〳〵一人で考へましたの。』

『つまらんことを考へないが好い。』保科はさう云つたが、彼自身もそれを聞いて何かを考へてゐるのであつた『死んだ母子も可愛さうだが、生きてゐる良人は一人で罪を脊負はされたやうなものだなあ……』

保科はいつの間にか自分の不安な氣持を云つて居たのであつた。

三月二十七日



氣分よく映画を
御鑑賞遊ばすには
是非東キネへ
東キネへ
増築落成
東洋キネマ
經營者 徳川夢聲



四方山

宇野浩二

この二三年來、私の母は彼女の書き入れの年中行事の一として、それは大抵二月から三月にかけての十日程の間を選んで、彼女の故郷である關西地方へ旅に出るのが習慣であつた。それは彼女自身の老後の唯一の樂みであると共に、更に彼女の心では、彼女の慰めのない嫁のために、――彼女の嫁、即ち私の妻は、宿入りする親の家もなし、往來する親しい友達もなし、年がら年中、家を離れて何處へ骨休めに行く安息所を持たない上に、夫である私が、連れ添うてから最早や五年近い月日が經つのに、その間唯の一度も彼女を連れて、用事にも娯樂にも外に出たことがないのだから、せめて姑である彼女自身が留守の間だけでも、氣保養が出來るようにとの考から、又二には、彼女の不幸な長男のために、――彼女の長男、即ち私の兄は、幼年の頃に致命的な病氣をわづらつて、その爲に腦力が人より劣つたのと、それから私たちの家の柱である父が早く亡くなつたのとで、十三四歳の頃に神戸の或親類に預けられたまゝ、今だに獨身で、その家の庭を掃き、使ひ歩きをして暮してゐる、（母親が六十歳で、その

子が四十歳であるといふことが、何の親子の情合ひの隔てゞあるだらう。）彼は今も二十六七年前に、母の膝を離れて、泣く泣くその家にやられた時と少しも變らない感情で、母親を慕つてゐるのである、――その子を見舞ひにと……

それに、故郷にある彼女の數多い親類――それは主に從兄妹たちであつたが、彼等はそれ〳〵彼女と同じやうに、今はこの世の勤めを果たして、その家を子供たちに讓つて、所謂隱居の身分の者ばかりであつたので、彼等も亦その從兄妹である私の母が、一年に一度東京から遊びに來るのを、彼等の樂しい年中行事の一として、今年はどこへ遊びに行かうか、どことどことの芝居を見ようか、どこでどんな物を食べようかなどと、年寄らしい樂みを心に描いて、指折つて待つてゐた。だから、私の母も亦、一年のうちのその頃が近づいて來ると、年の内から年が明けて、二月三月のその日が來るのを、子供のやうに待ちこがれてゐた。私は別に貯へのないものではあるが、私の仕事である小說を作る仕事を、例月の其よりも一つ多くすることに依つて、彼女にその旅費をこしらへてやることが出來た。すると、彼女はそれを親から與へられた子供のやうに、嬉しさうに受けて、彼女は口には出さなかつたが、心ではその金を私が持つて來るのを催促せずに飛立つ思で待つてゐたのに違ひなかつた。だから、それが二月であつても、三月であつても、それを手に持ち次第に、それから一週間と經たないうちに出發するのが常であつた。子供が遠足の前の晚、辨當や、紙や、手巾や、と樂しく用意するやうに、彼女は汽車の寢臺券や、行く先々への土産物や、彼女自身の仕度のものや、と出來るだけ早くから用意して、さて、その日には、タキシ自動車を家の前まで呼んで、妻と女中とに送られて、いそ〳〵と乘り込むのである。私もその日はその時間の頃には吃度都合して、外出先から家に歸つて來て、自動車の窓の前まで送つて出る。自動車が出發の用意をする。と、彼女は中から窓のところへ顔を出して、「いろ〳〵有難う、ぢやあ、行つて來ますよ。」と私に挨拶する。「いろ〳〵有難う」とは、旅費のことなどを含んで禮をいふ意味であらう、私に答へる代りに、

（彼女は耳が少し遠かつたので、）大きくうなづきながら、「行つてらつしやい、皆さんに宜しく、」と叫ぶ。自動車が動き出す。彼女は車の中から頭を下げる。――子供なら、萬歳！　と叫びたいやうな、嬉しさうな顔をして……。それは、一年のうちで、大方家を留守にして、朝は早くから外に出、夜は大抵彼女が寢てゐる十二時頃でなければ歸らないので、ほとほと親子で口をきき合ふこともない、――さういふ私が、その時がたつた一の、彼女へ盡す孝行であるやうな滿足を覺えるのであつた。だから、私は感傷的な氣持になつて、彼女を停車場まで送つて行つた妻と女中との歸つて來るまでの、家の留守番を珍しく神妙に勤めるのである。

丁度去年の今頃は、まだ私の從兄弟の公吉がゐたので、女中を除いて、彼と、母と、私と、妻との、この家は四人ぐらしであつた。その頃、私が例に依つて夜おそく歸つて來ると、私の爲に入口の戶を開けてくれるのは、學年試驗が近づくので、玄關の次の間で、遲くまで勉强してゐる習慣の彼であつた。が、彼の顔は勉强の疲れだけでなしに、何か悲しさうな色と、何か訴へるやうな表情を浮かべてゐるのを私は注意した。彼の後から、遲れて、奧の間で針仕事か何かしてゐた私の妻も迎へに出て來た。私は惡い癖で、そんなに遲く歸つてからも、必ず何かの夜食をするのが習慣だつたので、やがて茶の間でそれをする時、公吉をも呼んで、みんなと一緒に茶を飲むのが常であつた。その時、公吉は十七歲であつた。彼はさういふ年少の男の子としては珍しくおしやべりで、その癖吃音で、今日は學校でどんな事があつたとか、途でどんな事を見たとか、友達がどんな事をしたとか、さては今の事から、昔の事から、聞いてさへやると、取止めもなくしやべりつゞけた。それはこの少年の惡い癖であると共に、快活で、人見知りをしないのは又彼の愛すべき

點でもあつた。さういふ氣性の彼が、その頃どうしてそんな風に沈んで見えたかといふ理由を、私は推察することが出來た。それは少年期から青年期に移る時に、誰でもが襲はれる憂欝でもなく、又季節が人の肉體に及ぼす憂欝でもなく、――それ等のことは彼には殆ど何の影響をも働かないやうに見えた、それはもつと具體的な心配、――即ち彼自身の家庭の事情で、遲れて中學校に入學して、やつと二年から三年に進まうとするその頃になつて、學校を止めさせようかといふ相談が、故郷の親類の方で持上つてゐるがためであつた。

　彼の父は私の母の兄で、今から八九年前に公吉と外に二人の子供と、そして妻とを殘して死んだものであるが、彼は後に妻子のものが辛うじて食つて行けるだけしか殘さなかつた、辛じて食つて行けるだけ――しかし、それがどの位の額であつたかは、彼の殘された妻の外に、親類中の者で誰も知るものはなかつた、それは彼の後家が、一所懸命秘密にしてゐたからでもあつた。が、兎に角、彼の死後、數年後の今日に至る迄、彼等はそれに依つてどうやらかうやら人の世話にならずに暮して來た、それればかりでなく、公吉の姉の娘を、今から二年前に嫁づけさへしたのである。けれども、到頭或年――それは公吉が小學校を出て一年後、中學校に這入る一年前のことであるが、彼の母親から私の家に、公吉を東京で勉强させたい、就いては中學校の授業料とか、その他の學費とかはこちらでするから、食べさせることと、住ませることとをそちらで世話してくれないかといふ申込があつて、私の方でそれを承諾したのであつた。そして、公吉が來て、やがて三年經つた譯である。

　死んだ公吉の父である私の伯父は、いふと所謂獨善主義者の部類に屬してゐた。彼は、だから、彼の唯一人の妹である私の母が、早く夫に別れて苦勞してゐるのをも、彼女の心柄として餘りかまはなかつた。まして、そんな風であつたから、大勢の從兄弟たちとも、殊にその中で當時貧乏してゐた者たちとは、出來るだけ當らず觸らずの交際をして、彼

自身もつゝましい、俗にいふ爪で火をともすやうな暮しをして、その短い一生を終つた。だから、彼の一生は、彼として何も非難されるべきものではなかつたし、無論間違つてもゐなかつたのだが、唯不都合だつたのは、彼が少し早く死んだことであつた。彼の妻は、少し酷評していふと、無教養で、身勝手で、始終目前のことだけしか考へない質で、そしてさういふ種類の女にあり勝の、彼方へ行つては此方の惡口をいひ、此方へ來ては彼方の惡口を吐くといつた風な、中流以下の惡い女によく見る型の人だつた。自然、彼女は親類中の者から疎まれてゐたのである。が、彼女にしても、僅な財産を殘して夫に死なれた後、三人もの幼い子供を抱えて、十年近い月日を送るうちには、そして田舍に引込んだり、一寸した商賣を始めたり、淺い女の智慧でいろ〳〵と迷ひながら暮してゐるうちには、さて殆ど財産はなくなるし、前途は遠いし、ひがみ心は起るし、つく〴〵と世の辛さに泣くことがあるに違ひない。それで、親類中を見廻すと、彼女自身にも立派に暮してゐる兄もあつたし、その兄の妻で、同時に亡夫の從姉妹に當る者もあつたし、その外、先にもいつたやうに、亡夫の數多い從兄妹たちはことごとく裕福に暮してもゐたのであるが……どうして、彼女が彼等からそんなに孤立しなければならないのか、或家とはどんなに憎み合ふやうな因緣になつてゐるか、或人とはどうして仲惡くなつたかといふやうなことは、こゝで一々述べる煩は避けよう。兎に角、それで、公吉がどんなに不幸な境遇にあつたかといふことが知られさへすればいゝのだ。

その公吉の母が手紙を寄越して、次のやうな事をいつて來たのである。いふのは、月々僅な金ではあるが、もうそれを送るだけの餘裕がどうしてもなくなつたから、この上は彼を故郷に呼び戻して、以前のやうに役場の小使か、銀行の給仕かにでもさせる外はない、のみならず、上の娘は最早や嫁づけたからいゝが、未だ一人下の娘が足手まとひとして殘つてゐる、今では自分とその娘とたつた二人の家でさへ、どうにも支へて行けなくなつたから、此間も町で以前彼女

が知合ひであつた或人に遭つたので、その事を訴へると、深切な他人のその人が、親子二人で自分の家に厄介になりに來ないかといつてくれたので、さうしようかとさへ思つてゐる。――が、驚いたことには、その或人といふのは、現に彼自身の三人の娘を藝者にして、その娘たちの産んだ子供をも又それ〲藝者にするつもりでゐる、といふやうな人柄のものなのである。だから、無論、この親と娘とがその家に世話になるといふことは、公吉の妹を將來は藝者にするといふ覺悟がなければならなかつた。

その手紙を見ると、母も私も驚いて、早速大阪の或親類の家へ、その事を知らして、公吉の母親の樣子や、財産の狀態などを聞いてやつたところが、その返事に、それは彼女の手だらう、そんなに未ださし迫つて困ることはない筈だ、あのやうな人のことであるから、何とか彼とか事を構へて、少しでも親類から生活の補助をさせようとばかり考へて、いろ〱な手を使ふのだから、かまはずに放つておく方がいゝだらう、といつて來た。が、それはそれとしても、差し當つて困るのは、矢張り公吉に違ひなかつた。

さういふいきさつがあつた事なので、去年の春、私の母が大阪に立つ時は、彼女が行つて、そこの何人かの親類と相談して、公吉の妹が藝者にさせられるやうな目から救ふことと、それから公吉の學費がどうしても母親の手から出せなくなつたのなら、親類たちからたとへ三圓か五圓かづゝでも出し合つて、今迄通り公吉を私の家に置いて、中學校だけはつゞけさせてはどうだらう、といふこととの相談をもつてゞあつた。私は、私の伯父である公吉の死んだ父が、そんな獨善主義者であつたにも拘らず、もつとも彼が未だ妻子もなくて落魄してゐた頃、私の家で彼を數年間養つたといふやうなことがあり、而も私の家が潰れて、仕樣がないので彼が私だけを引取ることになつた時には、隨分澁々にではあつたらしかつたが、然しだん〲と彼は私に好意を持つて、出來るだけの世話をしてくれ、そして今日丁度公吉がさう

であるやうに、私が中學校へ行く間、學費は他の親類が出してくれた代りに、食べることと住むこととだけは彼が受持つてくれたのである、が、さういふ表面上の恩義のことだけではなく、私は彼を思ふと、今だに涙を催すほど彼に愛を感じてゐる、そのことだけでゞも、彼の唯一人の男の子である公吉を、公吉が私の家にゐて、そして彼が學校に行くとの費用位は、私としてそんなに苦痛なしに出來るのであるから、私一人でゞも彼の世話をしたいと思つてゐるのである。が、私は公吉には從兄弟であつて、彼には外に私より年長で、金持の伯父たちが大勢ゐるのであるから、その人たちをさし置いて、餘りさし出がましいことをしてはいけない、といふ母の意見に任したのであつた。

私は長い間、それ等の母方の親類の人たちと會つたことがないし、といふよりも唯それ等の存在を知つてゐるといふだけで、これ迄にも殆ど會つたことがないので、彼等が斯ういふ場合どんな意見を持つだらうかといふことは、察しやうがなかつた、そして察しるとすれば、僅な金高のことであるし、どこの家でも今日その位の金には少しも事を缺かない身分であるらしいから、當然出してくれるだらう、そして公吉は今迄通り學校につゞけて行けるだらうと思ふのであつた。が、公吉は、そんな少年にも拘らず、これ迄大阪にゐた時分には始終出入りしてゐたゞけに、彼の家とそれ等の家のいろんな因果關係をも知つてゐたらうし、又それ等の家の主人たちの氣質をも呑み込んでゐたからであらうが、彼の考では、私と正反對で、甚だ悲觀してゐるらしく見えた。果して、私の母が歸つて來ての報告には、親類たちの意見として、公吉の母のやうな者は、もつと苦勞さした方がいゝ、助けるのには未だもつと先の時期がある、公吉だつてさうだ、そんな苦しい中で何も無理して學校になぞやらなくても、學校に行つたからとて必ずしも成功するとは定つてゐない上に、その方が身を立てるのに却つて年月がかゝる、それよりも今から何か有望な職に就かした方がいゝ、そしてさうするなら此方で何か世話してやつてもいゝ、と斯ういふのである。

さういふ譯で、公吉は愈々國に歸ることになつたのであつた。無論、私は彼に心から同情した、何故といつて、これが彼が小學校を出た切りの時だつたら、それで學校生活を打切るのに、そんなに未練は殘らないに違ひない、然し、中學時代の二年三年といふ頃は、學生時代で一番愉快な時であることを私は知つてゐる、そして私も亦その頃に、家庭の事情で危く止めさせられさうになつた悲みを知つてゐる。私は妻と相談して、此際、なる程、自分が親類中の一番年少者ではあるが、外の人たちがどうしても公吉を援助しないといふのなら、では自分一人でも彼を助けるのにそんなに骨は折れない、それには何とかしてそれをする爲のいゝ口實を考へようではないか、さうだ、一旦公吉を國に歸して、彼自身でもう一度親類中を說いて廻らして、それでも愈々いけないとなつた上で、どうだらう、彼一箇の意見として此方へ逃げて來さしては？――それにはいくら悧巧な彼とはいへ、何かさうさせるやうな暗示を與へなければならぬが、それを私は自分の口からいふのではまづいと思つたので、妻からそれとなく敎へさせることにした　そして、私も妻もその氣になりその段取に着手したのであつた。

ところが、その間に、私の公吉に對する氣持に少しづゝ曇りが掛つて來た。それは、これ迄三年の間、彼が私の家にゐる間にも、それが屢々見えないではなかつたが、この話が起つてから、一層それが屢々現れ出したのである。といふのは、彼が母親の悪い氣性を可成り受け繼いでゐると思へるやうな事で、例へば、私が彼を今後とも援助することで、彼から注文を出された時に、いろ〳〵なその時の都合で、少し曖昧な返事などをすると、直に彼は私が彼の父に世話になつたことを持出して、私が彼を世話するのは當然の義務だらうといふやうな理屈をいつたり、或は又女中などをつかまへて、自分はこゝの家ではいくら威張つてもいゝ、何故といつてこゝの主人は昔自分の家に居候をしてゐたからといふやうなお喋りをしたりするのである。然し、そんな事は未だ我慢が出來るとして、彼と彼の母親の性質をいろ〳〵考

へ合せて見ると、今私が彼に學校をつゞけるやうに心配して、そのことは無論一時は彼をも彼の母親をも喜ばすだらうが、後になつて、あの時學校に行くことなどをすゝめてくれなかつたら、今頃はもつと……などといふやうな事をいひ出し兼ねない、それに又、息子をそれ程までに世話してくれるのなら、ついでに私も賴みます、といつて彼の母親が妹の子をつれて出かけて來ないでもない、——つまりいゝ事にも惡い事にも、何事かで接觸すればする程、人を惱ます人間がこの世にはあるもので、公吉の母子にも多少さういふ氣質があるのではないだらうか、さう思ふと、私は今迄よく知らなかつたが、彼等に對する親類たちの、如何にも腑に落ちない程不人情らしい仕打をしてゐるやうに見えるのは、結局彼等にさういふ惡い氣質がある爲ではなかつたらうか、などと考へられ出したのである。

ところが、國へ歸つた公吉からの手紙に、自分はどうかして東京に出たい、どんなに苦學してもいゝから、東京で學校をつゞけたい、大阪ではどこへ行つても自分に味方してくれる人はない、自分は母に對する人々の憎みを分配されなければならないのでせうか……僕の頭は今混亂してゐます、と書いてあつた。私は少年の彼にとつては、少し重過ぎる苦勞であることを思ひやつて、又も彼を哀れに思つた。で、私は母や妻やと額をあつめて、彼の善後策に就いて相談したが、中々纏まらなかつた。すると、それから一週間と經たなかつた或日の午後、公吉が突然上京して來て、私の家の玄關に姿を現したのである。が、公吉がさうして出て來ることは、かねての私の望みではあつたのだが、いろ〳〵と聞いて見ると、彼の母が彼の影にあつて糸を引いてゐるらしい事が幾分不快に感じられた。

が、私の母がふと思ひついて、父方の私の又從兄弟に當る者で、この東京で或大會社の社員として、可成な位置にある者があつた。それは私が修學時代に、私に學資を出してくれた者の一族のものでもあつた、母はその家を思ひついて、自分で出かけて行つて、事情を明かして公吉のことを賴んだところが、その人が幸ひ承知してくれたので、公吉は私の

家でなく、その家から學校へ行くといふことに定つた。その家には主婦に當る人がゐなくて、朝出ると、夜遲くでなければ歸つて來ない主人と、書生と、女中二人といふ暮しであつた。公吉もそこの書生といふ名目ではあつたが、さういふ家であつたから、彼は何の縛られることもなく、普通に中學校に通ひ、普通に豫習や復習の時間を持つことが出來、たゞ書生的の仕事といへば、庭を掃く位のものであつた、そして主人の顏などは殆ど見ることなしに、毎日を送ることが出來た。すると、彼は持前の人見知りしない性質で、直に古くからゐる女中や書生などと仲よくなつて、戸棚の中から菓子をつまみ食ひをしたり、客間から煙草をとつて來て吹かしたりすることの、先頭に立つやうになつた。それが、二三ヶ月するうちには、自然と主人に知られて、主人は公吉を追出す代りに、彼の友人である、彼の家よりは遙かに嚴格な家へ公吉を書生として預けることになつた。そこでは、公吉も可成り辛い思ひをしたらしかつた。朝起きると、學校に行く迄に大きな庭の掃除をし、午後學校から歸つて來ると、學校へ行く倍もあるやうな遠方へ使にやられ、日曜には主人が道樂に作つてゐる裏の畑の手傳ひを終日させられ、殊に最も惱まされたのは、そこの女主人が激しいヒステリイ持で、始終機嫌が惡いことだつた。彼は學校の歸りの僅な時間をぬすんでは、私の家へ寄つて、私の妻にその不平を訴へた。そのうちに九月一日が來て、あの大地震にあつたのである。四日の日に彼は突然私の家に現れて、いふには、今度の家からも、前の家からも、兩方ともから暇が出た、どちらの家でも、こんな際だから歸つた方がいゝといひ渡された、仕樣がないから、これから國へ歸ります、といつて、私たちが止めたにも拘らず、あの混雜の中を汽車に押し乘つて歸つて行つた。後で、私と母が――不斷よりも今は一層手の入る時でもあるのに、どちらの家でも彼に歸れといつたといふのはをかしい、といひ合つたことがあつたが、果してその後、彼のその言葉は嘘で、彼の方で無斷で逃げ出したのだといふことを知つた。が、考へて見ると、子供の頃母親の手一つに我儘に育てられた彼として、二度目の家での、不平の書生の

やうな取扱ひが如何にも辛かつたのだらう。そしてこの世がひどく心細くなつてゐた時に、突然あんなに土地まで揺れ出したので、一層不安な思がつのつて、母親の胸が戀しくなつたのだらう、それは生意氣て、しかし中々の悧巧な少年ではあるが、彼の年としては無理もないことであるかも知れない。その後、彼は彼の母親の里のある田舍へ行つて、その近くの中學校に轉校して通學してゐるといふことが誰からとなく私の方へも聞えたが、彼自身からは何ともいつて來なかつた。――

去年の今頃、彼が試驗勉強のペンを休め休め、溜息を吐いては眺めてゐた私の家の小さな庭に、草木と云へばそれが唯一本であるところの楓の木は、あんな大地震を經驗したことをも忘れたやうに、丁度又去年の今頃のやうに梢々にふつくりと芽を持ち上げ出した。それを見てゐると公吉はどうしてゐるだらう、と私はやつぱり考へ出すのである。

それは去年の春のことであるが、同じ春の一昨年のことには、私自身のことに就いていひやうのない不快な、後悔する思出を私は持つてゐるのである。その記憶は（それが記憶としてだけでなく、今だに私の生活を脅かしてゐるのであるが、）その前の年の秋の頃から始まるのであるが、さうだ、もつと古い事をいふと、その又一年前にもさか上る事が出來るであらう。――或晩、おそく、私は二三人の友達と行きつけのカフェーをあれこれと廻り歩いた末、最後にとある一軒に這入つたのが十一時過のことであつた。多分そのカフェーには、私たちはその同じ晩に二度目であつたかも知れなかつた。そこでももう店を閉める少し前で、私たちの顏馴染の女給たちは大抵歸つた後らしく、殘り番に當つた二三人の者だけが、寂しさうにちよこなんと部屋の隅にゐたことを覺えてゐる。が、その中には一人として私たちの注意を

引くものがなかつたので、私たちは卓子の上に運ばれた珈琲と、私たち同志だけを友達にして、相變らず無駄話をつけてゐた。が、そのうちに愈々店の戸を閉める時間が近づいて來たらしく、一人の見馴れない新來の女給が、私たちの卓子だけを殘して、他の數多の卓子の上にそれ〴〵所屬の椅子をさかさまに載せることに依つて、片附け始めた。無論、その女は新來の者であると共に、その顏形も私たちの誰の注意をも引くやうなものではなかつたので、「やあ、もう遠慮なく片附け始めたな。歸りますよ、僕等も。」と私たちの一人が聲をかけた切りであつた。が、女は、新來であることから、常連であるらしい私たちに、つとめて顏馴染になりたいらしく、變ににこ〳〵してお世辭を振りまいた事を覺えてゐる。彼女が向うへ行つた後で、「可愛さうだアね、新らしいやつは。あゝしてお世辭をいふんだが、誰も相手になつてやらないし……もつとも、あれぢやアね、誰も興味がないだらう。」と誰かがいつた。「ないね。」と誰かゞ、その外の者みんなを代表するやうに答へた。そして私も無論同感であつた。それは顏立からいつても、私の好かない、ぼちや〳〵した、所謂おかめ型の部類であつた。でも、中で誰かゞ彼女に向つて、お世辭に「君は何ていふの!」と名を聞いたところが、「つたと申します、どうぞよーろーしーく。」と女が嬉しさうに、愛嬌を持つて答へた樣子は、顏が子供々々して見える割合に、變に大人びて、どちらかと云ふと厭らしくさへ見えた。私がその時のことで覺えてゐるのは、その鼻の低い、頬の丸い顏が、笑ふと、成る程愛嬌が溢れるのだが、その中に、人にかへり見られない寂しさが漂つて、妙に哀れつぽい感じを與へられたことだけであつた。

さて、その後も始終私たちはその家に出かけもし、又その家でも入れ交り立ち交り新しい女給たちが現れ、それ等の中にはそれ〴〵私の何人かの友達の興味をひいたものもあり、私も亦多少の興味をひかれたものもあり、しかし要するにそんな事をいひながら、唯中學生のやうに騷いでゐるだけで、やがて一年が經つたのである。ところで、いつかの新

來の女――つたはといふと、彼女は相變らず休みなしに、いつの時でも顔を見せてゐたのだが、矢張り私たちの仲間の中で、誰一人として彼女をかへり見るものなしに過ぎたのである。唯、彼女のやうなものでも目についたのは、その一年間のうちに、彼女はあの初めての晩に見たやうな、子供らしい、哀れつぽいところが次第になくなつて、彼女の持前らしい愛嬌とお世辭とだけが益々大人らしく發達して行つて、自然いつからとなくその存在だけは確立し出したことだつた。さうなると、彼女のおかめ型の顔も、おかめ型のまゝに次第に引立つて見えて來て、結局、あの女は話相手にいゝよ、といふものなども出來て來た。が、或時私たちの一人の剽輕な友達が、その家のお上を相手に、いろ〳〵そこの女給たちの品定めをした時聞いたといふ報告の中に、そのつたといふ女は以前或老人の妾をしてゐたことがあるといふ話だつた。

そして、その一年の間に、私は私がいつ頃から、どんな風にしてその女に少しづゝ氣を惹かれて行つたのか、今は思ひ出すことさへも出來ない。多分「僕は君が好きだよ」「私もよ」などと、いつか冗談をいつてゐるうちに、それが次第に心の中でも本當になつて來たのだらうか、それにも一つ原因したことは、その時分私の相棒の友達が、矢張り同じ家の別の女給に出鱈目な興味を持ち出して、「では、君は彼女に惚れ給へ、僕は此女をとらう」といつたやうな輕はずみから、私は到頭深入りして、つたと特別な仲になつてしまつたのである。

が、特別な仲といつて、或日、私は彼女と一晩か二晩の旅行をしようといふ約束をしたのであるが、元々そんなに心から好いてもゐない彼女と、根が虚榮家である私は、二人切りで歩くことなどはどうにも氣がさしてならなかつたので、丁度公吉が學校の冬休みだつたのを幸ひに、彼女を勸誘して、謂はゞ彼を子役にして、彼女と三人で二日半ばかり鎌倉へ行つたことがあつた。が、その時は未だ私と彼女との間に、それ以上に深い關係は結ばれずに終つたのである。

公吉には無論その時のことは口止めして、家の母や妻やには彼と私と二人だけで旅行したことにいはせた。ところが、その後、彼女が腫物か何かのために、二週間ほど病院に這入つたことが起つた時、私はどうしても自分で見舞に行く勇氣がなかつたので、も一度公吉を利用して、果物だつたかの見舞品を彼に病院に持たしてやつた。その時、彼が歸つて來ての報告に、誰か外に人が見舞に來てゐたので、何にも話をしないで、見舞の品だけおいて歸つて來たとのことだつた。どんな客だつた？と私が尋ねると、答に、彼女とその見舞の客と二人で寢臺の上に腰かけて、足をぶら／＼させながら、向う向きに窓の外を見て話してゐたので、よく顏が分らなかつたが、若い、ハイカラな男だつた、と公吉は、彼ももう十七歳であつたから、多少その間の消息が感じられるらしい口振で、いふのであつた。然し、私はそれを聞いても、そんな事もあり得るだらう位に思ひ直しただけで、餘り愉快な氣がしなかつたのは當然だが、別に嫉妬といふ程の感じは起らなかつた。おゝ、神よ、そしてそのまゝ私たちが別れてしまつたら……

けれども、やがて彼女が退院して、改めて店に出るまで、病後の養生に十日程休んでゐた間に、私は彼女と二人切りで伊香保に三日間の旅行をしたことがあつた。その時も、私は東京を離れる迄は、彼女と二人であることが何となく厭で、定めの時間に彼女が上野から汽車に乘つて、その同じ汽車に私は日暮里から乘り込んだりした。その時、私は初めて、彼女の唯一の身内である、彼女の母親といふ人に會つた。汽車が日暮里のプラットフオームに着いた時、彼女の乘つてゐた車の中から、一人の老女と彼女とが一緒に下りて來て、その汽車に乘り込まうとする私に挨拶した。老女はそこ迄送つて來て、そこで私たちを見送つて歸つて行くつもりらしかつた。痩せて、その上寄る年と苦勞との爲であらうか隨分皺の多い老人であつたが、脊のすらりとした、面長の、つたとは似もつかない顏立の美人であつた。が、私は彼女を見て忽ち當惑を感じた、何故といつて、もうこんな人にまで會つてしまつたのでは、これから後の彼女との關係が次

第に重くなりはしないかと心配になつたからだつた。

汽車の中でのつたの話に、あれは「母さん」とは呼んでゐるが、實は彼女の母ではなくて、祖母に當る者だといつた。そして附加へて、彼女は當代の老優で、一等俳優の片岡某といふものゝ先妻で、且糟糠の妻だつたといつた、が、何故今でも盛んに雜してゐる片岡某と彼女とが別れたか、又彼女が祖母でつたが孫であるとしたら、彼女と彼女との間にどんな人間が存在したのか、或は存在するのか、それは彼女がいはなかつたし、私も聞かうとはしなかつた。若しかすると、伊香保の溫泉宿の廊下で、椅子に掛けながら、それに關係したことを彼女が少しばかり話したやうな氣がするが私はその時何か別の考へ事をしながら聞いてゐたので、後で氣がついて、彼女が今どんな話をしたのだつたか知ら？と思つたことがあつたやうでもあるが、あの時幾分その消息を話したのかも知れない、そして彼女の方では私がそな事に餘り興味を持たないと察して、それ切り止めたのかも知れない。が、落魄してゐる彼女等にとつて、彼女等の去の生活に一等俳優が交渉してゐるといふことは、決して不愉快な思出ではないだらうから。——そして、それが一昨年の一月のことであつた。私がその旅から歸つて來ると、公吉が私の耳の傍で、「伊香保つていゝとこですか。……だけど、一人ぢやなかつたんでせう」と聞いた。「一人さ」と私が笑つて答へると、「イ、イイ、」と彼はからかつた。だが、私はその時も未だ彼がそれを知つてゐることなどを一向氣にかけてゐなかつたのである。

現に、そのうちに二月になつて、母が例に依つて大阪行の旅をするのに、その時は彼女は私の妻を連れて、——彼女に初めての土地を見物させ、かたぐ〜親類中に顏を出させるために、二人で出かけて行つたのであるが、その留守中のこと、私は或日ふと思ひついて、つたを一度、彼女が來たがつてゐたから、私の家へ呼んでやらうと思ひ立つた。彼女にその事を傳へると、彼女は喜んで、店からの歸りにやつて來た。ところが、その晩、つひ油斷して遲くなつたものだ

から、彼女は私の家に泊ることになつた。公吉は鎌倉行以來、彼の持前の氣輕な性分から、彼女に十分馴染になつてゐたので、遲くまで彼女と無駄口をきいて遊んでゐた。

　それが、到頭次のやうな事が起つたのである。それは又一ケ月ほど後のことであつた。彼女の家は品川の先の方にあつたが、私は先にもいつたやうに、彼女の唯一の家族である母親、實は祖母といふ人にも會つてゐたのであるから、その家を尋ねて行くいに何の躊躇も入らなかつた譯ではあつたが、何故か餘り氣が進まなかつた。けれども、再三勸められて、初めて、三月末の或晩、彼女の家を尋ねて行つた。何かの小賣商人向きに建てた家を、そのまゝ別に住宅向きに手入れをしないで、彼女等は住んでゐた。だから、甚だ風變りな家で、二間間口の表側は一面に硝子張りになつてゐて、そこを這入つたところが馬鹿にだゞつ廣い土間になつてゐた。驚いたことには、そこに鷄が飼つてあると見えて、そこらに鳥の糞がころがつてゐて、その臭が異樣に鼻を打つた。そして鷄共は人に十分馴れ切つてゐるものと見えて、誰が這入つて行つても少しも騷かないで、悠然と歩いてゐた。さて、その土間のつゞきに三疊敷ばかりの板の間があつて、その正面が一ぱいに四枚の障子で仕切られてゐた、即ち階下は、そこを這入つたところの六疊一間切りだつた。そこで先づ私の注意を引いたのは、そこに並べられてある長火鉢といひ、茶箪笥といひ、鐵瓶といひ、ことごとくその祖母の時代のものであるらしく、形からいつても、古びやうからいつても、思ひ切つて現代離れがしてゐることであつた。その光景は私の目を樂ませる反對のものだつた。更に、その部屋の中で目ざわりなのは、同じ毛並の、同じ形をした二疋の狆であつた。狆のことであるから、見たところ形は小さいのであるが、二疋とも可成り老年らしかつた。二疋の相違をいふと、他の一疋はひどく行動が不活潑で、注意して見ると、兩の目の玉が白く霞がかゝつてゐるやうに見えるので、聞くと、明き盲目なのださうである。然し、二疋とも、犬といふよりは、それ等の古風な道具の中を這ひまわ

つてゐる蟲のやうに見える點が共通してゐた。

さて、私の通された二階は、六疊と二疊との二間になつてゐて、その小さい方には長持とか、鏡臺とか、蒲團の積重ねとか、挾ん箱とか、ことごとく矢張り古風なものばかりで、古道具屋のやうに埋まつてゐた。梯子段を上つて、その部屋を通り拔けたところで、六疊の間は、それは又反對にいやにがらんとしてゐて、紫檀の机が一箇ある切りで、赤茶けた疊ばかりが目についた。部屋の一隅に置床があつて、そこの掛物をかける位置に、一面の洋畫の額が掛つてゐた、それは二十五六歳の男子の肖像畫で、髮の毛と、顏色とが違ふだけで、新聞の附錄畫で見たプリンス・オブ・ウエールスにそつくりの顏をしてゐた。一體、これは誰の肖像畫なのであらうか。彼女の父か、兄弟か、それとももつと外の關係のものか、私も聞かないし、彼女も説明しないので、今だに私はその名前を知らない。そして、その額縁も、畫も、その部屋の中になくてはかなはぬほど、變に調和して見えた。

そして、この家へ二度目に行つた時、私はこのエールス太子に似た人の額の下で、彼女から、「あなたはどんな事があつても吃驚なさいません?」と聞かれた。私は少し氣味惡く思つたが、吃驚させられるやうな事はあり得ないと思つたので、「えゝ、何ですか?」と聞くと、或はそんな事ぢやないか、とちらりと考へはしたのだが、まさかそんな事はないだらうと思つてゐたにも拘らず、彼女から身持になつたと宣言されたのである。さういつた彼女も、驚いたことには、カフエーの電燈の下で見るのと違つて、古びた道具や、汚い疊や、年とつた狆と全く同種類の存在のやうな氣がしたことであつた。そして私はそれ等のものに取り憑かれたやうな氣がした。

が、その出來事そのものは、私にそんなに驚きも狼狽も持つて來なかつた。何故といつて、私と私の妻との間に子がなかつたし、私も妻ももう三十歳を少し過ぎてゐるし、いつか妻がその道の醫者に身體を見せたところが、手術しない

とあなたには子は生れぬだらうといはれたが、そのまゝになつてゐるので、今つたに出來た子を引取つてくれといはれても、私はそんなに迷惑ではないと思つたからである。だから、私はそれから後も月に一度か、二月に一度位は彼女を訪問する義務を怠らなかつた。だが、どういふ譯だか、彼女の家の入口の土間が、タタキである代りに畑のやうに土がでこぼこしてゐて、その隅にいつも五六羽の牝鷄がかたまつてゐる光景や、盲目と目明きの、老年の二疋の狆が家の内をはひ廻つてゐる有樣や、さてはどちらを見ても黴の生へたやうな道具に充滿してゐる景色やに、次第に厭氣がさして來るやうに、彼女のふくれたお腹の上にかけてある汚らしい前掛や、白粉氣がなくなるに連れて、思ひの外増えて來るそばかすの顏や、或は物をいふ度に上唇が微かに尖ることやが、何ともいへず氣に入らなくなつて來るのだつた。で、自然と一ヶ月に一度が一ヶ月半に一度となり、終には二ヶ月に一度やつと顏を出すやうになり、そして十月の初旬ともなつてしまつた。その頃私は是非彼女のところへとゞけてやらなければならないものがあつたのだが、それをも一日一日と延ばしてゐた末に、結局自分で行く代りに、公吉を代理にやつたところが、公吉があわたゞしく歸つて來て、私の書齋に來てひそ〳〵聲でいふのは、「おつたさんのとこでは二三日前に赤ン坊が生れたさうです、」と報告した。「兄さんに、直に來て下さいつて……お知らせする譯に行かないので、困つてゐるところだといつてました。」

子は產婆が前もつて鑑定してゐた通り、男の子であつた。が、女の子なら自分の方で育てるが、男の子ならそちらに引取つて育てゝくれといふ、私と彼女の祖母との前もつての約束だつたのだが、生れて見ると、それをも彼女等は放しともながつた。私の方へくれないのなら、私の家へは何も急に知らせる必要がないからと思つて、さうしてゐると、彼女の祖母もそれに同意だつた。彼女の祖母は子が未だつたの腹にある頃から、兎に角、さう大したことではない迄も、この事が知れたら、お家の方でも一悶着起らなければなりませんね、と心配さうにいひいひしてゐたが、今のところは

それなしに一先づ濟んだ譯だつた。思ひ出すと、つたが初めて身持になつたことを私に報告した日だつたか、その次に私が彼女を訪問した日だつたかに、祖母は私に、「まつたく辨慶さんのやうなお話で……」といつた。まつたく、私にとつては一層、それは辨慶に起つたやうな出來事に違ひなかつた。何故といつて、彼女とは伊香保に泊つてゐた三日間の間に、その辨慶的の出來事は一度あつたといへばいへるのであるが、私は常々彼の十分の一もの健康な肉體を恵まれなかつたことを悲んでゐるものである、そして彼女との交渉のその後の場合を勘定すると、次には母と妻とが大阪へ旅し留守中に彼女が私の家に來た時と、併せて唯の二度切りである。私はふとその伊香保行の日から、出産の日までを指折つて勘定して見たところが、七ヶ月と二十日足らずの日數である。その時の女の身體の都合に依つては、それだけの日數でども完全に子が出來るものだらうか、と私は友人の醫者に聞いて見たところが、「それはあるだらうな、」との答だつた。「――あるだらうな、」「さうかな、」と私は思つた。

それに、何よりも彼女たちの善良性が、私に今いつたやうなことを深入りして考へさせる機會を與へなかつた。そして又、私にして見ると、それが私自身の子である程結構なことはないが、他人の子であつたにしても、かまはないといへばかまはないことだつた。唯最も不都合なのは、彼女が私に徐々厭になつて來たことと、私が生れた子に少しも愛を感じないことであつた。それをどうかして感じようとしても、矢張りどうしてもそれが感じられないので、これはどうも自分の子ではないのぢやないか、などと思はれることさへあつた。が、それはそれとして、私は私の義務として、月に一度は彼女のところへ私が行くか、行かない時には郵便かで、僅な金をとゞけることにしてゐたが、私はつい無駄づかひが過ぎて、それを滯らし勝になつた。そして遲れることが重なつて、一ヶ月分がふいになつてしまふやうなことも珍しくなかつたが、彼女はそれに就いて一度も不平をいつたことがないばかりか、金のことなどどうでもいゝから、せ

めて月に一度や二度は缺かさず來てほしいと賴むのである。更に私が感心したことには、昔役者の妻であつたといふ彼女の祖母が、彼女と私とのことに就いてはなるべく口を挾まないやうにしてゐることであつた。唯時々つたから、「母さんもお金のことなど、どうせあなたのやうな商賣は、役者と同じことで、いろんな無駄なことに入るだらうし、又時に依つて金持だつたり、貧乏だつたりするのが普通だから、そんな事はちつとも心配しないで、顏だけ見せて下さることを忘れないように、といつてゐます。」と手紙の端でいふ位のことであつた。

私はそれを讀んで、彼女の祖母も亦その氣弱と善良性のために、昔彼女の夫であつた一等俳優に捨てられたのではないだらうかと考へた。噂に聞くと、片岡某は俳優の中での最も氣むづかし屋だとのことであるから、同じ氣むづかし屋である私には、そんな風に思はれてならぬのである。すると、彼女は彼女自身の代には氣むつかしい俳優のために泣かされ、彼女の孫の時には氣むつかしい小說家のために惱まされなければならないのだらうか。それでゐて、彼女は時々何かの話のついでには、彼女の夫であつた片岡某に就いて話すのを好んだが、曾て一度もその中で、彼女は彼のことを惡くいつたことがないばかりか、例へば小さな三味線の撥を見せては、これは凝り性の彼が、山科別れの場の、由良之助の役をする時には、いつでもわざ／＼この大きさの撥をあつらへさせたものだ、その時のこれが一つだといつて、それをお世辭に感心したやうに手にとつて見てゐる私に「お氣に入つたらどうぞお持ち歸りなされ、」といつたり、京大阪の話が出ると、彼女はそこが彼と長年暮したところなので、いろ／＼と樂しさうにその思出話に耽るのが常であつた。すると、ふと、彼女の孫であるつたも亦、私と別れて、年とつて貧乏しながらも、たとへ私が生きて盛んに暮してゐたとしても、彼女の祖母のやうに、私のよい思出ばかり話して生きるであらうか、と私は考へて悲しくなるのだつた。——

大體、私が先に、公吉と共に、私自身のことに就いて後悔する思出を持つてゐるといつたのは、以上のやうな出來事をいふのである。一年程前から、ふとした氣まぐれから、私は家の外に、本郷の方に或旅館の一室を借りて、そこで仕事をするといふ名目で、去年の地震前までは寢泊りさへそこでしてゐたのであるが、地震後、母が家に男手がなくて心細いからといふので、夜だけは家へ歸つて行つて、毎朝起きると共に、勤人のやうにそこへ出かける習慣になつてゐた。が、私がそんな事をしたのは、別に私の妻や母やと同居してゐるに堪えられなくなつたといふやうな意味からではなく、唯私のやうな仕事をするのには、家族の者の聲や足音が妙に邪魔になることがあつたり、又仕事が丁度都合よく運んでゐる時などに、突然來客に妨げせられるやうなことがある、そんな時彼等と面會することは勿論、斷るにしても、居留守を使ふにしても、甚だ氣分を害するものなので、それやこれやを避けるために、私はその下宿の部屋を借りることにしたのであつた。だから、母が大阪へ行つた留守の間も、私がそこへ出かけて行く習慣は少しも改まらなかつた。

大抵、朝の八時といふ頃には、私は勤勉な腰辨のやうに、規則正しく私の家を出發した。近頃、私に少しばかり心にかゝることがあつた。それは私のいろ〳〵な不行狀が、誰からとなしに母に知られて、そのために彼女がひどく心を痛めてゐるやうに思はれてならぬことである。といつて、無論彼女はそんな事を私に攻めた事は一度もなかつた。もつとも、彼女がさうしようと思つても、朝はそんなに早々出て行き、夜は彼女が寢てからでなければ歸つて來ない私に、彼女はそれをする機會を持たなかつた、殊に私の不行狀についてだとすると、私の妻の前で彼女がいふことを憚つたことも、一層その機會を少なくしたに違ひない。又よしそんな機會が一週間に一度なり、二週間に一度なりあつたにしたと

ところが、最早や一人前の大人であり、唯一の稼ぎ人である私に、子供のやうにつけ〳〵といふことも中々出來なかつたに違ひない。

彼女は不斷下の奥の八疊の間に寢てゐた。私が遲く歸つて行くと、そこに長火鉢があつて、その前で私が歸るまでいつの時でも妻が針仕事か、手習か、雜誌を讀むかしてゐるので、私も一度その部屋に這入つて行くのが習慣であつたが。近頃は二日に上げず、母は私が歸つて來る時分までも、寢床の中で目を開いてゐた。そして、ふと私と目があふと、彼女は靜かに、物思はしさうにその目をつぶるのであつた。又或時は寢床の中で、俯伏せになつて、顏を枕につけてぢつとしてゐることがあつた。そんな時、私が妻に、「母さんはどうかなすつたの？」と聞くと、「えゝ、何だか目が冴えて、お寢みになれないんですつて、滅多にないことなんですがね、」と妻が答へた。

私の妻は私と同じ年で、以前長い間或田舍町で藝者をしてゐたやうな者ではあつたが、さて私と連れ添うてから最早や五年近くの今日になる迄、かつて唯の一度も私や母に反抗したことがなく、昔からよくある姑と夫に仕へる人の妻の、模範のやうな日を送つてゐた。彼女は私の家のために子を生まないことを氣兼し、自身が以前卑しい稼業をしてゐたことに人から後指をさゝれぬようにと心を配り、自分に親の家がないことに引け目を感じ、出來るだけ控へ目に生きてゐるやうに見えた。それに、姑である私の母は決して世間一般より仕へにくい姑ではなかつたが、それに引きかへて夫である私は稀に見る氣むつかし屋で、氣短かで、そして今のやうに、まる一日勤人のやうに家にゐない時分でなかつた頃も、嘗て唯の一度も世間の夫婦のやうに手をとつて散歩したこともなく、そして家にゐる時は、命じるか、叱るかの外には、夫らしい優しさで話をすることなど殆どないといつてよかつた。然し、彼女の慰めには、彼女はそんな年配で、而も相當に苦勞したものにも拘らず、女の甘さから、私がどんなに遊蕩するとしても、眞底では、身持が固いだらうと

信じてゐた。常々、もしあなたに外で子供でも出來るやうなことがありましたら、どうぞ遠慮なく私に仰しやつて下さい、私が引取つて、屹度大事に育てますから、と彼女はいひいひしてゐたが、現に今それに似た事が私に起つてゐることと知つたら、どんなにかその意外に驚くだらう。そればかりではない、この一年程前から、私が或山手の旦那持の藝者と別懇になつて、その女と小遣錢の財布を始終共通にしてゐるなどといふ、愚かな行爲を聞いたなら、彼女は餘りにこの世の他依りなさを痛感して、立ちどころに病氣になるかも知れない。私の母は彼女のさういふ心細い境遇に心から同情してゐた。

實際、私の母ほどの年になると、彼女の周圍のものが、どんなに隱れてしてゐることでも、それは彼女が外に何の考へることを持たないからでもあるだらう、又その考へることに若者がするやうに幻影なしにすることが出來るからでもあるだらう、或は又それを私の場合でいふと、私に似た私の祖父や父やが、どんな風に暮したかを知つてゐるからでもあるだらう、――要するに彼女の「年の經驗」を以て、彼女はそれ等を大抵見通すことが出來るらしかつた。が、如何にそれが見通せたからとて、忠告することや、叱ることやで、それ等を改めさせることが出來ないことをも、彼女は同時に知つてゐるに違ひなかつた。が、そこにはそれぞれ神の救ひがあるもので、彼女は彼女の過去の短くない經驗から割出しても、この世の事がなるやうにしかならないこと、そして又どんな事が起つてもあきらめる外ないことを心得てゐた。けれども、いくらさういふ風に考へるとしても、年とつた彼女の目からして、自分の子が、引いては自分の一家が、過去つたことではなく、近い日か遠い日かに當然陷るやうに思へる運命が見えてゐるとすれば、それも亦仕方がないことと思ひ返しはするものゝ、何とか防げるものなら防ぎたいと考へない譯には行かないであらう。すると、彼女は不斷は年寄の癖に隨分寢坊でありながら、今夜も亦彼女の息子の歸りは遲いのであらうか、おゝもう十一時だ、おゝも

う間もなく十二時だ、と幾度も目を醒ましては、枕元の時計を讀みながら容易に眠に就かぬのである。

二三ケ月前、私が例の別懇にしてゐる藝者と、關西の方へ旅行したことがあつた時、大阪の或ホテルで一夜泊つたところが、それから三週間ほど過ぎて、その事がその町にゐる私の中學時代の或やんちやんな友達に知れた。彼は私が久しぶりで大阪の土地を踏みながら、彼に知らさなかつたことを憤慨して、わざと葉書で私の家の者の目に觸れるやうに、三週間ほど前に來たさうだが、それを未だゐるんだらうと思つて××ホテルを訪問したところが、三週間前に婦人連れで來て一泊したとホテルの者がいつてゐた、——婦人連れなどするから、約束しながら大阪へ來ても知らさなかつたのだな、と彼は書いて來た。それを、母と妻とが發見して、半分本氣で半分冗談で私にからかつたことがあつた。そこで、私が早速の頓智で、腹をかゝへて笑ふ振をしながら、それはあの男のいたづらで、それが若し本當のことだつたら、友達としてどうしてこんな事を家の者に分るやうに葉書でなどいつて來るもんか、と答へたので、忽ち彼女等を氷解させたことがあつた。ところが、その後、私の家の隣に住んでゐる私の友人が、矢張り大阪に出かけた折に、そこで好きな女を發見したとか、その女に好かれたとかいふ噂が起つて、それが彼の若い細君の耳に這込つてごた〳〵してゐた時、何かの折に私の母が聞いて彼女を慰めてゐたことがあつたが、その時の言葉の中に、その私の大阪の友達の葉書の例を引いて、「しかしね、奥さん、うつかり早まつて燒持をやくと、あべこべにそんな失敗をしないとも限りませんから、」といつてゐるのを、その大阪からの葉書の眞相を私から聞いて知つてゐたその友人が、隣室でその問答を聞いたといつて報告した時、二人で腹をかゝへて笑つたことがあつた。ところが、それから三日も經たない日のことに、私の別の友人である醫師の下村が、私の家の女中の病氣を來診してくれたことがあつて、その時丁度私の妻が外出して留守だつたので、彼は私の母と二三十分間世間話をした中に、——といふのは、彼も亦私の中學の同窓だつたものなので、母

とも古馴染であり、例の大阪の友人とも私と共通の友人だつたので、母がふとその話を出して、「それは上手に欺すんですよ。だけど、私は或所から聞いて知つてたものですから、何ですが、よし子なんかすつかり欺されてますの。本當は矢張り誰か連れて行つたらしいんですよ。」と笑ひながらいつたさうである。が、私はそれを聞くと、その場に母がゐるかの如く赤くなつた。そして彼女が嘘と知りながら、友人の細君を慰める時には、その私の嘘をそのまゝ利用したなどは、平凡ではないと思つて恐くなつた。

が、母はさういふ中でも、先にいつたやうに、例年の大阪行の日が來ると、もう彼女は子の身の上を心配する母親ではなく、嫁や一家の上やを案じる老人ではなく、幼い子供だけが持つてゐる嬉しさで一ぱいになつて、「いろ〳〵有難う、では行つて來ますよ。」と子の私に挨拶して、いそ〳〵と立つたのである。ところが、私は彼女が留守になつてから、時時彼女が大阪に行つてゐることを考へて、いつになくふと不安な心に襲はれるのを覺えた。といつて、彼女が今度大阪へ行つたところが、多分公吉には直接會ふ機會を持たないだらうから、と私は考へた。それに彼女自身としても、だんだんひねくれて、性質が益々曲つて行く公吉の母親に會ふことは好まないだらうし、又彼女が尋ねて行く大阪の何軒かの親類の人たちにしても、ことごとく公吉の母親を好いてゐないし、自然往來しないやうにしてゐるから。唯一つ、去年公吉の妹が母親と共に或人の家に世話になつて、そこから行く行く藝者にされるかも知れないといふ心配があつた時、それを止めさせる爲に、私の母がその子を別の或家に養女にやる世話をしたことがある。で、公吉の妹は去年の夏頃からその家に貰はれて行つて、今では女學校などに通つて幸福に暮してゐる筈だつたから、その家に寄つた時、もしかすると母と公吉と會ふやうなことがあるかも知れない。或は又、それ等のことが一切私の取越し苦勞だつたとしても、公吉は、彼だけが知つてゐる私のつたのことを、今は彼も私にいゝ感情を持つてゐないだらうから、彼が出入りする親類

の者に既にお喋りしてはゐないだらうか、もし又彼がそれをしなくても、母子の間柄であるから、當然そのことを彼から聞いてゐるに違ひない彼の母親が、さうだ、あの母親がそれを吹聽しない譯がないだらう、と私は心配した。

すると、今になつて、私は何故もつと早く母にだけあの事を打明けておかなかつたらうと後悔された。さうしたからとて、彼女はそんなに驚きも、悲みも、或は怒りもしないだらう。……何にしても、そんな後暗いことを、彼女は私からでなしに、そんな百五十里もの遠方で、他人の口から聞いたなら、どんなに氣持を悪くし、驚き、悲むだらうと私は思はない譯に行かなかつた。が、いくらそんな事を女のやうにくよ〳〵考へても、何とも仕様のない事だから、私は直にそんな心配を打切つたが、どういふ譯か、彼女の十日餘りの留守中に、二三度もその事が思ひ出されて、心が暗くなつた。若し彼女がそれを耳にするにしても、出來るなら旅の初に聞いて、彼女の旅のすべての日を暗くしないやうに、せめて旅の終に近い日に聞いてくれるやうに、と私は當然その事が今度の旅で彼女に知られることと定つてゐるかのやうに、心を惱ました。

だから、愈々彼女が歸つて來るといふ電報がとゞいた時、私はいつもの例を破つて、私自身で停車場まで彼女を迎へに行かうかとさへ考へた。が、それも思ひ止まつて、いつもの通り、妻と女中を派遣して、私は本郷の下宿に出かける時間を延ばして、留守番をしてゐた。だが、私の安心にまで、母は出發した時と同じ、滿足した、嬉しさうな顔をして、妻と女中と共に、タキシ自動車で到着した。

「いろ〳〵有難う、皆さんから宜しく、」と彼女は私に歸つて來た挨拶をした。そして、鞄の中から土産物などを取出しながら、今度は和歌山から紀三井寺へも行つたとか、京の智恩院の何とか會にも参つたとか、もうこれであの邊は大抵見つくした、行かないところは高野山だけだなどといつた。「高野山へは、ちやあ、今度僕が一緒にお供しませうか、」と

私がいふと、「本當に連れて行つてくれるかい、口ばつかり、」と彼女は笑つていつた。

それでも、私は未だ一二時間の間は、何か變つた話が持出されさうな氣がして、いつものやうに、あつさりと本郷の下宿へ出かけて行く氣になれなかつた。「歸る前の日にね、××の家へ私が行つてゐると、ひよつこり公吉が遊びに來てね、」と突然母がいつた。私はぎくりとした。が、それは別に變つた話ではなくて、公吉は春の休暇のことで、偶然大阪へ遊びに來たものらしく、「伯母さん、僕どうかしてもう一度東京へ行きたい、」といつたから、「あんな嘘をついて歸つてしまつて、今になつて又そんな事をよくいへたもんだね、」と母が叱ると、彼は頭を掻いてゐたといふやうな話だつた。が、その時の話の次手に、公吉の妹の話が出て、彼女は氣散じな性質で、學校もよく出來るし、それで少しお轉婆の方で、テニスなどに夢中になつたりしてゐるが、養家では甚だ氣に入つてゐる、唯いけないのが、母親が始終遊びに來て、來ると半月から一ケ月近くも泊つて行くので困るとか、それにつひ近頃の出來事としては、その母親が或日突然やつて來て、一週間ほど泊つてゐた末に、子供が或朝少しお腹が痛いといつて學校を休んだことがあつた、すると、母親はだまつて養家でこしらへた着物から、足の物から、ラケツトのやうなもの迄、引越しのやうに荷物をこしらへて、急に、ちよつとこの子が歸りたいと申しますから、歸りますと挨拶して、子を連れてさつさと歸つてしまつた、だから、公吉の妹は今はその家にゐないといふのである。それを聞いて、私の母も彼女が仲に這入つたものであるから、それに就い何とか話をつけなければならなかつたのだが、此方は老人のことではあり、相手がさういふ分らず屋のことであるから、從兄弟の某といふ者にその始末を頼んで來たが、相變らず公吉の母親には困り者だといつた。彼女の推察では、最近公吉の母親から、少しばかり私の方へ金の無心をいつて來て、それを調へてやつたところが、又一週間程すると、突然月月二十圓づゝ送つてくれないかと注文して來たことがあつた。それには私の方で未だ返事をやらずにあつたが、母のい

ふには、もしそれを承諾してやつたら、あの妹の子を養家へ歸さずに、そのまゝ置いておくつもりらしいとのことだつた。そして、公吉なり、彼の家のことなりについてはそれだけの話しか出なかつたので、私は稍々安心して、十二時前に、いつもの日課である、本郷の下宿への出勤に出かけた。そして、その日は何事もなかつた。

が、その日の夜だつたか、例に依つて遲く私が歸つて行くと、机の上に三四通來てゐた郵便の中に、見馴れない筆蹟で、差出人の名としては、唯「K」としてあるところの一通の手紙を發見した。私は不審に思つて、もう一度宛名のところを調べてから、確に私宛に違ひないので、開封して讀んで見た。「何といふ運命の惡戯なんでせう。（中略）自分の家の少しばかりの殘つてゐた金を母につかはし、東京に行つたり、東京を逃げ出したり……」と讀んだ時、おや、公吉だな、と私は思つた。讀んで行くと、彼の年頃のものがよくするやうな、習ひ立ての「運命」とか、「消極的」とか、「大自然」とかいふ文字が澤山並んでゐて、文脈は滅茶苦茶だつたが、兎に角、周圍の人たちの彼に對する冷酷な態度を恨んだものであるらしかつた。現に、私が去年の九月の地震以後、即ち彼が大阪へ歸つてから二度も大阪に行つてゐながら知らさなかつたことなども、變に皮肉な言葉をもつて恨んでゐた。「僕の母の書狀の妄語、僕の××樣に對する失策の爲貴兄に御迷惑をかけてお怒りになつたにしろ、そこには人生の一般的情緖といふものがなければなりません、貴兄がこの哀れな性格の所有者をそれ等の失敗にかこつけて、貴兄のお母さんのお言葉を用ひて僕の總てを見限つたのでせう、」といふやうな文句がつゞいてゐた。「こんな事をいふのは失禮ですが、あなたはお母さんの爲に自由を束縛される人ですか、或方面に於いては屹度そんな人ではないでせう、」とこれは即ち例の私のつたのことをいふものに違ひなかつた。そして最後に「運命の惡戯」で、彼がこの間××の家へ偶然行つたら、私の母に會つたことを述べて、心の中で非常に怒つたと書いてあつた。即ち私の母も亦、わざ／＼大阪に行きながら、それを公吉たちに知らさなかつた仕打を、彼が憤

つたといふのである。

無論、これは彼として無理のない感情であると私は思つた。だが、この中に含まれてゐるところの、私が感じてゐた通り、彼が私の秘密を知つてゐるといふことで、私に對して多少脅迫めかしい氣持を抱いてゐる表現は、可成り不快に感じられた。が、それだけに、彼もその事を輕はづみに吹聽するやうなことはないだらうとは思はれた。それで、私は少し安心な氣持にもなつたので、次にこの手紙でも察しられる通り、公吉が相變らず彼の母親が親類中に爪はじきされてゐる爲に、金錢のことで困つてゐるらしいことを可哀さうに思つた。そして、それは私が何とかしてやりたいと思つたが、考へて、然しそれを私の方から彼の母親に申込む譯には行かないし、又そんなことは今迄の行きがゝり上私の一存でする事が出來ないと思つたので、ふと私は彼の妹が貰はれて行つてゐる家と打合せをして、——何故といつて外の親類たちは先にもいつたやうに、そんな相談にはどこも乘つてくれさうにないから、そしてその家から出すといふ名目にして、彼の學費を月々送つてやらうかなどとも思つた。—それも初は匿名で彼に月々送つてやらうかなどと子供のやうなことを思ひついたり、いろ／＼思案したりした末に、やつと纒つた考なのであつた。

その二三日の間、もう一つ私の氣にかゝつたことは、大阪から歸つて以來、母が毎晩私が例に依つて遲く歸るのを、必ずその時分まで目を醒ましてゐて、私の歸つて來るのを知つて初めて眠るらしいことであつた。例の、私の妻が遲私を待ちながら、その前で針仕事をしてゐる長火鉢の彼方に、床の間を枕にして寢てゐる母の顏を、私は毎晩恐ろしいものでも見るやうに、ちらりと注意して見ることを忘れなかつた。すると、その切下げにした髮が横向きに此方に向つてゐた時は、私は胸を撫で下ろした。が、ともすると、それの代りに、ぱつちりと目を開いた顏が枕についたまゝで此方を向いてゐたり、或は枕の上に顏を俯伏せにしてゐる爲に、その切下げ髮が蜻蛉でも止まつてゐるやうな恰好に上向

いてゐる時は、私は甚だ胸を打たれた。そして私は私の放蕩を後悔した。

或晩は又、私はいつもの留守中に來た手紙の積重ねの中から、思ひも寄らない友達の名前のものを見て、おや？と思ひながら、忽ち次の瞬間苦い顏色に變つた、それはつたが私に寄遣す時の用に、私自身で出鱈目に友達の名を使つて、それで私に宛てゝ書いた封筒を與へてあることを思出したからだ。彼女は私が一ケ月以上顏を見せないと、その封筒を使つて、私に手紙を寄遣した。そしてそれにはいつの時でもお金のことは心配しないで、たゞ坊やの顏を見に來てほしいと書いてあつた。そしてよく見ると、坊やよりも、それは彼女自身が私に會ひたいらしい思がこもつてゐるのである。ところが、初にもいつた通り、私はこの坊やも、坊やの母も、どうしても好きになれないのである。好きになれない氣持を、何と奮發させようもない。世にはよく斯ういふ場合を金で片附ける話があるが、私の彼等は恐らくそれで片附かうとはしないに違ひない。そして私の方からいつても、私のか、私のでないか、中に子供といふものがあるだけに、考へると息詰まるやうな思に陷る外はなかつた。

そして、私は毎朝早く家を出て、私の仕事部屋である例の下宿屋で、日の暮れる迄勉强してゐるとしたところが、それから家に歸る十二時までの夜の時間を何してゐたかといふと、例の旦那持の藝者と、昨日も今日も、私が行くか、彼女が來るか、そして阿呆らしや、一日として飽きずに戀を語つてゐるのである。早いもので、彼女とさうした戀を語り出してから、最早や一年が經つのである。初め、私がこの部屋を借りた時、一箇の本箱と、一組の夜具と、それだけが殆ど全部の持物であつた、ところが、或日彼女が來て、「こゝへ當分私たちの家を作りませうか、」といつた。「あゝ、それが宜しい、」と私は答へた。すると、見る見るうちに、金の値を知らない女は、茶簞笥やら、机やら、夫婦用の座蒲團やら、茶碗やら、褞袍やら、と品々買ひ集めて來て、今や小さな夫婦生活ほどの道具の中に、私は埋つてゐるのである。

私はこの有様を家のものたちに見られると不都合だと思つたので、細君には、あそこは僕の仕事部屋なんだから、なるべく邪魔しに來ないようにしてくれといふと、彼女はその通りに聞いて守つてゐるのである。

が、或日私のその部屋に突然母が現れたことがあつた。彼女も私が細君に注意した言葉を聞いてゐたのに違ひなかつた。が、その日は何でも私が朝出しなに、一寸したことでひどく細君を叱つたので、後で彼女がひどく悄げてゐたのを母が憐れに思つて、「私、家に内所で、ちよつとその邊まで散歩して來るといつて出て來たの、よし子にも内所だから、そのつもりでね、」といひながら、彼女は部屋の中に、思ひの外いろんな道具が整頓してゐるのを見廻して驚いてゐる樣子だつた。私は極めてばつの悪い思をしたが、強ひて澄ました顔をしてゐた。「ところで、」と母は言葉をつゞけて、「どうしてお前そんなによし子を叱るのよ。考へて見ると、あの子は可哀さうなんだから、あの子は本當にお前より外に他依るものがないんだから、もうつまらないことで叱らないやうにしておやりよ、」いひながら、彼女はもう一度部屋の中を見廻して、「……このまあお道具はどうしたの、大變、まあ、いゝお道具ばかしぢやアないの？」と聞いた。

私は咄嗟に、同じ下宿にゐて、二三ケ月前に國に歸つた人で、母もその名前を知つてゐる友達を思ひ出して、その人のを預かつてゐるのだと辯解すると、「さうオ……」と彼女はいつたが、腑に落ちなさうな顔附だつた。

さて、半月程前のことであつた、私はこれ迄の部屋の外に、同じ下宿屋の中にもう一つ小さな部屋が空いたので、それを借りることになつた。この家は日本建と西洋建との二棟になつてゐて、それが兩方とも二階なので、併せて六十近くの間數を持つてゐた。そしてこれ迄の部屋といふのは、その日本建の方の、階下の八疊の部屋であつたが、今度別に

借りたのは、西洋建の方の、三階の上に、一ト所、その上に避雷針のついた小さな塔を形造つてゐる二疊敷位の西洋間であつた。その部屋には一箇の寢臺と、一脚の椅子が附いてゐて、その外には何にもなかつた。もつともその外に何か置くとすると、人が這入る餘地がなかつた譯で、四方に大小のそれ〴〵窓を持つてゐる樣子からいつても、元々これは居間ではなくて、謂はゞ展望室といふべきものに違ひなかつた。實は、私は長い間この部屋を手に入れたいと思つて、狙つてゐたものだつたが、そこにゐた學生が四年越しに住んでゐて、引越さなかつたのである。それが今度學校を卒業して、彼が歸國するに就いて愈々空いたのだつた。だから、初は私も唯の醉興のつもりの外、大した期待を持つてゐた譯ではないのだが、それが空いたと女中から知らされて、早速四階の階段を上つて、その部屋に足を踏み入れ、その椅子に腰をかけ、或はその寢臺の上に寢轉がつて見た時、私は驚いた。私はまるで天に置かれたやうな氣がした。それと同時に、この部屋こそ、……さうだ、この部屋こそ、誰からも秘密にしておかう、あの八疊の間に澤山の道具を寄附してくれた女からも、私の母や妻からも、そしてどんな友達からも、——と私は考へたのであつた。

西の窓を眺めると、富士山から丹澤山脈から、さて北に廻つて淺間山、秩父、日光の山々から、東に振つて筑波山に至るまで、順々にパノラマのやうに四方の景色を見渡すことが出來た。そしてそれだけがこの部屋にゐるものゝ友達であるやうな氣さへした。(おゝ、四年越しにこの部屋を占めてゐた學生よ。人間を見ることも、道具の中にゐることも、やがて飽きることがあるだらうが、この窓の眺めは飽きないだらう、——彼が引越さなかつた理由も初めて分る氣がした。)目の下の東京の町々、バラツクや、森や、玩具のやうな阪道やは、この大きな景色の中では、ほんの點景物としてしか見えなかつた。(まして、つたや、坊やや、片岡某の先妻や、さては旦那持の藝者や、公吉や、そして私の母も、私の妻も……)だが、そんな風にはいふものゝ、眺めてゐると、私の家のある傍の公園の森や、つたのゐる方角の町や、等、

等、等と眺めてゐるうちにはその點景物の方に目をひかれて、それ等の四方八面が靄をかけられたやうに悲しさにとざされることがあつた。が、すべては位置の高さに感謝すべきだらうか、場所の簡素に負ふのだらうか、その悲しさは湧いても胸には溜らないで、直に蒸發するやうに思はれた。或は又それは自分のものではなくて、人のものか、自然のものか、藝術の上のものかのやうに思はれた。だから、私は全くこの塔の部屋に救はれたやうな氣がした。

ところが、母が大阪から歸つて五日程後のことだつた。十時頃、私がこの塔の部屋の寢臺の上に寢轉んでゐると、突然枕元にある室內電話のベルが鳴つて、番頭の聲で、

「あの、お宅から御隱居樣がお見えになりましたが……」と聞いた。

「え、母が――一人ですか？」

「え〻、左樣でございます。」

私は受話器を耳に當てたま〻で、胸の中が固くなつて來るのを感じた。何故といつて、彼女が一人で尋ねて來るのはこれで三度目だつた。そしてその前の二度とも、散歩と稱して、彼女は家に內所で、何か內所のことを言ひに來るのが常であつた、今度の彼女の大阪行以來、何となしに胸に溶けぬことのある私が、胸にかたまりを感じた譯である。家に內所で、彼女は何を言ひに來たのだらう、と私は動悸を覺えながら思つた。

「お部屋へお通しし〻ませうか？」と番頭の聲が催促した。

「あ〻、」と私は答へて、何の考もなく、「いや、この部屋へ來てもらはう、」と附け足してから、「しまつた、どうしてこの部屋へ通してくれと命じたのだらう、」と思つて吃驚して思はず立ち上つたが、又思ひ直して、「さうだ、母だけはこの部屋で會ふ方が適當してゐるやうだ、あ〻いふ色んな道具のおいてある部屋でよりも。」と考へた。で、私は迎へに下り

て、二階の階段のところで彼女に會つたので、そこから四階へと案内した。
「まあ、大變なところへ引越したんだね、」と彼女はその狹くるしい部屋に足を踏み入れると、叫んだ。「物好きに……どうして、こんな狹い部屋を借りたの？」と彼女は姿よりはずつと若く聞える、わだかまりのない聲で聞いた。
「えゝ、この方が靜かでいゝものですから、」と私は答へた。
「いゝ景色だね、」と彼女は窓の一つを覗きながら、「だけど、恐いわ、こんな部屋。」
「どうぞそこへお坐りなさい、」と私は寢臺の上から一脚きりの椅子を指さしていつた。
母は椅子に掛けてからも、まだ暫くの間あちこちの窓の外を眺めては、山の名を尋ねたり、町の方角を聞いたりした。が、私は心が落着かないので、なるべくそれには簡單に答へて、彼女に持つて來た話を早く聞かうと思つた。やがて、一寸沈默があつて、到頭彼女が口をきつた。
「外でもないんだがね、」と彼女は窓の外と私の顏とを半分半分見ながら、「お前は私に何にもいはないけど、――今日、私が來たのはね、よし子に內所よ、――私、いろんな事を知つてるの、お前に他所に子があるといふことも……」
私は默つてうなづいた。どうして、誰から聞いたのです、と聞いても仕方がないと思つたので。
「そんなこと、若しよし子が聞いたら隨分心配するだらうと思ふけど、」と母はつゞけた。「お前が斯うして他所で暮してゐることも、夜遲くでなければ歸つて來ないことも、みんなその方に結びつけて考へるものね……」
「いえ、それだけは違ひます、」と私は遮つていつた。
「まあ、それやさうでなくつても、さう思へるからさ。しかし出來たことは仕方がないとして、その子をもらふなり、何なり早く片をつけた方がいゝと思ふが……？」

「僕、しかし、どうしてもその女の人も、その子も好きになれないんです、」と私はいつた。私はいつの間にか彼女の言葉をすつかり肯定した上に、彼女に甘へるやうな氣持にさへなつてゐた。

「相手の人も以前の商賣が商賣だから、その人の生んだ子がお前の何かどうか分らないとも思ふけどね……」

「え、、それや然し、僕はどつちでもい〻と思ふんです。」

「さう、それやどつちでもい〻と私も思ふよ、だけど、くれないんぢやアね、」と母はいつた。

「そんなことどつちでもい〻んですが、困るのは、僕、どうしても嫌ひなんです。」

「嫌ひといつたつて、お前……」と彼女は遮つて、「だけど、お前も毎晩のことだから、もう少し早く歸つてやらないと、よし子に、——私はよし子のことを思ふと、可哀さうでならない……」

「遅く歸るのはその子供の女のせいぢやアないのです。今もいつたやうに、その方へは月に一度か、二ケ月に一度、それもせい〱二時間と坐つてゐないんです。」

「何にしたつて……」と母はその方に觸れないやうにして、「私はお前の兄さんのことなんか、ちつとも心配してゐない。私にはあ〻いふ愚かな子のことだが、あの子より斯うしてちやんとしてゐるお前のことの方が氣にか〻つて、あの子のことまで考が行かない位なんだよ。お前とよし子のことばつかり……」といつて、彼女はそれ以上つゞけると、氣持が苦しくなると見えて、そこで言葉を切つて、又窓の外の方を見た。私も同じやうに窓の外の方を見た。幼い頃、化けの恐怖からかばつてくれ、少年の頃は欲しいものを買つてくれする母が、こんな大人になつた今、斯ういふ大人の事件のためにも、同じ母の心遣ひに依つて救はれることを思つて、私は感激した、まつたく、私は彼女と斯ういふ話をしてゐるうちに、長い間胸の中に凝つてゐたかたまりが、少しづゝほごされに行くのを感じた、この人の前で、つため

脈なことも、旦那持の藝者に心をとられてゐることも、一切のことを打ち明けたい氣持の興奮を覺えた。たが、私は窓の外を見ながら、全く別のことを、

「氣が晴れ晴れとするでせう、——今日は見えませんけど、この窓の丁度まん中の見當に富士山が見えるんですよ、」

といつた。

「さうネ」と彼女は答へた。

そして、それ切りで、私たちの肝腎の話はそれ以上すゝまなかつた。

丁度春の季節のことであるから、さうして私と彼女とが一時間ほど話してゐる間にも、窓の外の空は晴れたり曇つたりして、自然、四方の景色も霞んだり、現れたり、又全く見えなくなつたりするのである。が、私たちは、唯一つの事を、而もこんな風に簡單に話し合つたゞけで、それも何の解決もしなかつたのだが、次第に輕い氣持になつた。

「珈琲でもいひませうか、」と私がいふと、

「あゝ、飲みませう、」と彼女もいつた。

珈琲を飲みながら、もう一度「お前も本當にちつと氣をつけておくれよ。そして今度こそ、よし子が日光を知らないといつて、行きたがつてゐるから、連れて行つておやりよ。私が連れて行つてもいゝけど、私とより、お前が連れて行つてやつたら、十倍も喜ぶのだから、」といつた。

「えゝ。——日光はあの邊ですよ、」と私は北の窓をさしていつた。

◎マツダ瓦斯入電球懸賞藝術寫眞當選發表

一等 「靜物」 靜岡縣藤枝町 繁村哲君
賞品 金百圓(商品切手)副賞C電球一〇〇、六〇、四〇、ワット各貳個宛

二等 「春宵」 京都市烏丸通佛光寺南入 河野一英君
賞品 金五拾圓(商品切手 副賞C電球六〇、四〇、ワット各貳個宛

三等 「無題」 東京市日本橋區濱町三丁目貳 梶川進一君
賞品 金卅圓(商品切手)副賞C電球六〇、四〇、ワット各貳個宛

選外佳作 「灯下」 京都市東山双林寺畔 田畑鐵君
同 「灯下」 福岡縣飯塚町字吉原町 勝森美津彦君
同 「無題」 兵庫縣明石市 湊小星君
同 「無題」 朝鮮龍山滿鐵社宅七十號 吉岡增三君
同 「無題」 兵庫縣尼ヶ崎市阪神電氣鐵道株式會社電氣課 植原彌太郎君
同 「私この球がすきよ」 東京市芝區白金今里町一六五 岡島泰爾君
同 「光と直線」 伊豆國下田町三丁目 白井武君
同 「無題」 東京市赤阪區青山南町六ノ一〇八 足立隆二君

以上佳作賞品金五圓(商品切手)副賞C電球六〇、四〇、ワット各壹個宛

規定は一等一名、二等一名、三等一名及び選外佳作四名なれども之に選外佳作外四名を加へ全十一名とせり。

右選者

高等工藝學校教授 伊藤亮次氏
同 鎌田彌壽治氏
同(帝展審査員) 永地秀太氏

以上

神奈川縣川崎町 東京電氣株式會社

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同 神田區通神保町	上田屋
同 京橋區銀座三丁目	東海堂
同 京橋區元數寄屋町	北隆館
同 日本橋區本石町	至誠堂
同 本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同 北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同 新町通七條南入	大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◎定價 金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾八錢）
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

送金注意

一 誌代郵税 は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一 振替貯金 口座番號は東京三四番　長野三二〇五番なり
一 郵劵代用 は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一 代金引替 小包の取扱は一切謝絕す
一 集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
　一金二圓以上五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
一 中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一 受領證請求 は必ず返信料を要す

大正十三年五月廿三日印刷納本
大正十三年六月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木島三

發行所　東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話 長丸ノ內三〇二（當分不通） 牛込五〇八九
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十二年一月廿九日第三種郵便物認可

中央公論 六月號